
とある双子の第二人生（セカンドライフ）

みん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある双子の第二人生セカンドライフ

【Nコード】

N3569N

【作者名】

みん

【あらすじ】

ある日、突如として「とある」の世界に入り込んでしまった双子の兄妹、工藤明俊と梓あけしほ。彼らを待ち受けるのは、今までの世界では体験できないことばかりだった・・・互いが互いを思いやる男女の双子が織り成す物語。

2011年5月8日。22話に渡る学園都市内乱編も無事終了し、さあここから原作8巻に突入……のはずが、小説内での不自然さを生まないため、そして僕自身がやりやすいからという理由で、急遽

梓オリジナルを8巻の前に繰り上げて書くことにしました。流れとしては、学園都市内乱編（原作時間8月31日〜9月2日） 梓オリジナル（9月3日） 8巻（9月14日） 大覇星祭（ほのぼの回） 12・13巻（9月30日） 15巻（10月9日） 19巻（10月17日） オリジナル（10月30日ころ） あいだに短編オリジナルを入れることもあるかもしれませんが。そしてここまです「旧約」とある双子の第二人生」とし、さらにその先の「新約」もネタと整合性が取れれば書く……かもしれません。

確実に言えるのは、「100話越えはほぼ間違いない」ということです。 まだまだ先は長いですがご容赦下さい。

2011年8月2日。普段より僕の小説を読んでくださっている晁甫さんという読者様が、なんと明俊・梓・奈津美の3人を描いて下さいました！ 小説案内ページ下部にリンクが貼ってありますが（本来は画像を大きく表示させたかったのですが、技量不足により今はこれでご容赦下さい）、左から順に梓・明俊・奈津美となっています。重要なのは、「梓は貧乳、奈津美は巨乳」ですw 僕のつたない小説にはもつたないくらい上手な絵で、なんと感謝していいのか…… この場を借りて感謝の言葉を述べさせて頂きます。本当にありがとうございます！

2011年8月23日。第1話投稿から今日でちょうど1年となりました。すごいだろ？これでまだ原作8巻まで進んでないんだぜ……？ こんなつたない小説ですが、これからも引き続きよろしくお願ひします。

第1話 始まり（前書き）

さて、不安で胸がドキドキですが無理やりスタートさせました（おいつたない文章ですが、少しでも楽しんでいただけると嬉しいです。

内容に関しては、基本的に完全オリジナルストーリーでいこうと思っ
つていますが、原作にも登場してもらおうことがあるかも知れません。
恋愛要素については、とりあえずは入れるつもりですが過度な
期待は禁物ということ（笑）

第1話 始まり

「う……ん……？」

ゆっくりと目を開ける。

でもそれは、俺が普段ベッドで迎えるような心地よい目覚めではなかった。

なんだか身体のおちこちが痛むし、なにより周りがガヤガヤと騒がしかった。

「お……にい……ちゃん……？」

「……あず……さ？梓か!？」

俺は周りを見渡そうと持ち上げた首を、声のした方向へ向ける。

そこには俺の双子の妹である工藤梓が俺と同じように地面に倒れていた。

「梓！大丈夫か？怪我は？」

「うん、大丈夫みたい。ほら、この通り。」

特に異常なさそうな梓を見て俺はほっとする。

俺も梓も、コンクリートの上に倒れていたせいで服が汚れているという点以外はいたって正常のようだ。

「……ねえ、お兄ちゃん。」

「なんだ？」

「どうして私達、地面に倒れてるの？」

そう言われて俺は、今更ながら倒れる前の記憶を掘り起こす。

「……確か、母さんに頼まれて買い物に出かけたんだっただよな？」

「うん。それでコンビニに行く途中で……」

「……」
「……」
「あ—————!!!」

そして俺たち二人は同時に、自分達の身におこったことを思い出した。

「私の靴ひもがほどけたから歩道で結び直してるときに……!」

「軽トラックが俺たちに突っ込んできて……!」

「慌ててお兄ちゃんが私をかばって……!」

「トラックに吹き飛ばされた……!」

事情を把握した俺たちは二人揃って辺りを見渡す。

しかし当然ながら、俺たちを殺しかけた軽トラックの姿は無かった。それどころか……

「……ねえ、お兄ちゃん。」

「ああ、妹よ。」

「「こ」……ど」?」「

俺たちが倒れていたのは、見たこともない街の日光の当たらない裏路地だった。

この裏路地は大通りに面しているらしく、俺たちのことを少し離れたところから窺っている野次馬もいて、ちょっとした騒ぎになっているようだ。

「ど」しよ」、お兄ちゃん……」

「うむ……」

と俺たちがこれからについて考えていると……

「通して下さい！ ジャツジメントですの！」

野次馬の中から一段と大きい声が響く。どうやらその声の持ち主は、野次馬をかき分けながら俺たちの方へ向かっているようだ。

俺は『助けられるのか？』という安堵の気持ちと同時に『どこかで聞いたような声とセリフだなあ・・・』という疑問も抱く。

そして、声の持ち主らしき人物が野次馬の中から姿をあらわした。
・
・

「あなた方ですわね、通報にあつた気絶している男女というのは。」

「・・・え？」

「わたくし、ジャツジメントですの。通報を受けてあなた方を保護しに参りましたの。」

「・・・。」

「・・・？ なにか、わたくしの顔についていますの？」

「・・・えーーーーー！！！！！！」

なんと、俺たちを保護しに来たのは・・・

あの、「とある魔術の禁書目録」ならびにその外伝「とある科学の超電磁砲」に登場する「白井黒子」だったのだ・・・

第2話 風紀委員（前書き）

なかなか話が進みませんが、それでも読んでいただけると嬉しいです。

第2話 風紀委員

俺たち兄妹は、目下ジャツジメントの白井黒子によって彼女の所属する「風紀委員第一七七支部」に連行（？）中である。

「ねえお兄ちゃん、私達これからどうなるの？」

「どう……って言われてもなあ。適当なこと言っても帰らせてもらえなさそうだし。かと言って、『俺たち、あなた達が小説やアニメの中で活躍する世界から来ました』なんて言っても100%信じてもらえないだろうし。兄貴的には、八方ふさがりって感じかな」「私達、元の世界に帰れるのかな……？」

「今の状況ではそれは考えられないな……」

「そうだよな……」

「しかし、俺たちがこの世界で生きていくにも少々問題があっただな……」

「能力……でしょ？」

「流石はわが妹、察しが良い。ぶつちやけ言って、この世界、少なくともこの学園都市では能力の有無、あるいはレベルによって生活が大きく違う。俺たちに多少でも能力の才があれば良いけど……」

「もしその才が無かったら、生活にも苦勞する可能性がある……原作の上条さんみたいに……ってことか」

「まあ、上条さんの場合はあの暴食シスターさんのせいで食費がさんでるのも関係あるとか無いとかだけど」

「さっきから、何をブツブツとお二人でお話なさっておりますの？」

俺たちがこれからのことについてヒソヒソと話し合っていると、それに気付いた白井さんが俺たちをいぶかしむ。

「いやあ、俺たちこの後どうなるのかなあ……と妹と話し合って

おりました」

「あら、そちらの女性は妹さんでしたの。てつきり、彼女かと思っ
ていましたわ」

「・・・一応、双子なんですけどね」

「まあ、双子でしたの。それは気付きませんでしたわ」

「気付かないのも無理ないですよ。俺たち、双子と言ってもいわゆる『二卵性双生児』で、簡単に言ってしまうえば『誕生日の同じだけどただの兄妹』ですから」

「そうそう、性別の違う双子は99%二卵性双生児らしいしね」

「そうでしたの・・・まあ、お二人の詳しいことは支部に到着して
書庫で確認させてもらいますわ」

「・・・」

そう、これが最大の問題なのである。

俺たちはたつたさつきこの世界に降り立ったばかりなのである。

当然、学園都市の学生のデータが登録されている書庫にもデータな
んて存在しないだろう。

それは当然なのだが、この学園都市において「書庫にデータが登
録されていない」というのはかなりマズイ。

簡単に言ってしまうえば、戸籍が無いのにほぼ等しい状態である。

検索に引つかからなければ白井さんは当然、なぜこの都市にいる
のかという疑問をぶつけてくるに違いない。

そうなれば、白井さんに超オカルト的説明をせざるを得ない。

そんな話、到底信じてもらえないだろう。

最悪、不法侵入者と見られてしまうかもしれない。

しかし、妙案なぞ思い浮かぶわけもなく・・・

俺たちは風紀委員第一七七支部に到着してしまつのである。

「お二人はここに掛けて下さいな。」

「あ、はい……」

俺たちが通されたのは、アニメでよく登場したロックの先にある部屋だつた。

とりあえず俺たちが勧められて椅子に腰掛けると……

「お茶です、どうぞ」

と言って俺たちにお茶を出してくれたのは、頭がお花畑の風紀委員「ついはるかさり初春飾利」さんである。

「初春さんが出てきたつてことは……」
「うむ、俺たちが『とある』の世界に来てしまったのは紛れの無い事実のようだ」

この世界に来たことを未だに疑っていた訳ではないが、これで確定事項になつた。

果たして、これからどうなることやら……

「さてお二人さん。早速ですがお名前をどうぞ」

白井さんがノートパソコンを用意すると、初春さんと共に俺たちの向かいに腰掛ける。

どうやら、もう逃げることは不可能のようであり、腹をくくるしかない。

「俺の名前は工藤明俊で・・・」

「私の名前が工藤梓です」

「了解。工藤明俊に、梓ですわね。」

白井さんは手際よく俺たちの名前を入力するとエンターキーを押す。

ああ、数瞬の後に画面には「該当者無し」とか出るんだろうなあ・・・と俺が思っていると・・・

「出ましたわ。・・・あら、お二人とも転校生でしたの？ 書庫に名前だけ登録がなされていますわ」

「・・・え？」

俺たちはキョトンとしてお互いを見る。

俺たちが転校生だって？ ってか転校生だろうとなんだだろうとそれ以前に、どうして俺たちが書庫に登録されてるんだ？

登録されてるってことは、誰か俺たちのことを知ってる人間がいるってことか？

だとしたら、それは一体・・・

「どうぞご覧下さいな。本人のデータならいくらでもお見せいたしますし」

そうやって白井さんはノートパソコンを俺たちの方に向けてる。

俺たちはその画面を食い入るように見つめた。

そこには、明日付けで柵川中学に転校扱いになっている俺たちのデータがばっちり映し出されていた。

「え、柵川中学なんですか！？ なら私と同じです」

と言ってニコニコするのは初春さん。そう、初春さん、そして佐天涙子さんが通うのが柵川中学であり、当然そのことを俺や梓は知っている（超電磁砲で学習済み）。

というか、明日付けで転校って・・・誰がこんな登録や手続きをしたのかは知らんが、いくらなんでも急すぎるだろう・・・

もはやツツコミどころ満載状態で俺たちが言葉を失っていると、

「お二人の素性はおおよそ分かりましたが・・・なぜあのような場所で倒れていたのです？」

またもや白井さんから当然の質問が飛んでくる。

だが、この質問にはあらかじめ答えを決めておいたので俺たちに動揺は無かった。

「ああ、それはちょっと不良にからまれました・・・」

「そうなんです。お兄ちゃんがかばってくれたんですが、そのとき二人仲良く壁に思いっきり突き飛ばされました・・・」

「そうだったんです・・・今更ですが、お二人ともお身体は大丈夫ですか？」

「あ、それは大丈夫みたいです。気を失っていただけで、外傷はないようですし」

「それは良かったですわ。まあ、風紀委員としてはその不良を捕まえられなかったことが悔やまれますが・・・」

「良いじゃないですか白井さん、二人が無事だったことですし」

「そうですね・・・さて、この件に関してはこれ以上聞くことは致しませんわ。お二人とも、明日から新生活の始まりで今日はゆっくりしたいでしょうし」

白井さんの気遣いで、事情聴取はほとんどスルーということにな

った。

俺たちとしても、気持ちの整理や状況把握のために時間が欲しかったのでその気遣いには超感謝である。

「さて、お二人は柵川中学の寮がお住まいのようですね、短い距離ですが念のため付き添い致しますわ」

「あ、じゃあ私も行きます」

どうやら、白井さんと初春さんが俺たちを寮とやらまで送ってくれるらしい。

俺たちは当然寮の場所など知らないのです、この申し出を断るなんてことはせず、極力転校生のふりを押し通すことにする。

「へえ、二人は双子の兄妹なんですね」

柵川中学の寮へ向かう道中、俺たちは初春さんにも双子であることを話した。

「そうなんですよ、と言っても二卵性双生児なので、双子にありがちな顔がそっくりとかは無いんですけどね」

「それでも、双子って何か神秘的ですよ」

そういう初春さんも頭にお花乗っけて、結構神秘的(?)ですよ。

「そういうえば、二人とも学年は？」

「さつき書庫で確認したときに見ましたけど、中学2年でしたわ。

初春や佐天さんの先輩になりますわね。」

「そういうえば私達、御坂さんと同じ学年なんだっけ」

「ちょ、おま・・・」

「・・・御坂？ 御坂って、お姉さまのことですか？」

「え！？ええ・・・ いやあ、彼女レベル5なんですよ？この学園都市に来たばかりの俺たちでも知ってますよ」

妹のネタバレ発言に多少テンパったが、なんとか怪しまれずに済んだようだ。

俺が妹を見ると、「ごめんね」と言わんばかりに舌を出してウインクする。

なんとかバレずに済んだものを・・・と思いつつも、自分も今後不用意な発言をしないようにと気を締めめる。

まあこのことに関しては、寮についてからじっくりと議論することにする。

「あ、寮につきましたね」

「じゃあ白井さん、初春さん、わざわざ見送りありがとうございます」

「お気になさらないで下さいな。風紀委員として、襲われた方々を安全な場所までお送りするのは当然のことですわ。それから、今後わたくしのご事は『白井』で構いませんわ。お二人の方が年上です」

「わたしのことも『初春』でいいですよ」

「そう？それじゃ、白井、初春、改めてありがとう」

「ありがとう、白井さん、初春さん」

どうやら妹は呼び捨てでは呼びづらいのかさん付けのままだ。

妹が手を振って二人を見送ると、二人は一度会釈しても来た道を引き返していった。

「さて、寮に着いたのは良いとして・・・」

「・・・どれが私達の部屋かしら？」

「とりあえず、大家さんというか、寮監に顔を出してみるか。転校生ということなら、俺たちのことも知っているだろうし」

そして俺たちは、寮監兼大家さんに自分達の部屋を聞いた。

なんでも、本来は男女別々の部屋になるのだが、俺たちが転校生ということで急遽部屋を準備したこと、そして双子（兄妹）ということで特にやましいことも起こさないだろうということと同じ部屋に割り当てられた。

はてさて、これからどうなることやら・・・

第3話 御坂美琴と白井黒子（前書き）

今回も今回とてグダグダ展開です（汗

一気に書いてしまいたいのですが、そうすると区切りを付けづらく
なってしまうので、あえて（言い訳）ゆっくり展開にしています。

第3話 御坂美琴と白井黒子

寮監に教えられた部屋には、誰が搬入したのか（それ以前に誰が準備したのか）分からないが、すでに荷物が存在していた。

それこそ、洋服やらパソコンやら何から何まで用意されていてかなり不気味である。

しかし、さすがに冷蔵庫の中身までは用意されておらず、現在コンビニに夕飯を買出しに出ているところである。

「ねえお兄ちゃん、今のうちに情報を整理しとかない？」

「そうだな・・・と言っても正直、不明な点がありすぎて何からまじめれば良いかすらも分からないが。とりあえず、俺たちが何でこの世界に来たのかは深く考えても分からないだろう。となれば・・・」

「誰が転校扱いにしたのか」

二人同時に同じことを言う。さすがは二卵性とはいえ双子。これまでも幾度も俺たちは思考を共にしてきたからな。

「俺たちがこの世界になぜ来たのかにもつながる問題だけど、一体誰なんだ？ 突然この世界に沸いて出た俺たちの転校先や寮、生活用品まで用意したのは」

「真っ先に思い浮かぶのは統括理事会だけど・・・」

「ああ、それは俺も考えた。だけど、何で奴らが？ ってことになる」

「それはほら、私達が別世界から降ってきた人間だからじゃない？
超希少な存在だし」

「だとしたら、奴らは俺たちが別世界から来たってことを知ってる
ことになる。もしそうなら、さつさと俺たちを確保しちまえば良い。
何もご丁寧な生活の場を与えるメリットは無い」

「わざと泳がせてるとか？」

「様子見ってか？ そんなチンタラするような連中でも無いような
気もするけど・・・」

「うーん・・・ 考えてもよく分からないね」

「そういうことは考えないことにしようぜ。誰か知らんが俺たち
に生きる場を与えてくれたんだ。今はそれに甘えるしかない。じゃ
なきゃ死ぬだけだ」

「そうだね」

俺たちはそうこうしているうちにコンビニに到着した。

さすがは学園都市、コンビニのほとんどの利用者が学生だ。

しかし、そうはいつてもやはりコンビニ。俺たちの世界とほぼ同
じで品揃えは大差ない。

俺たちがさつさと弁当や飲み物を選んでレジで会計していると・

「ねえお兄ちゃん。あれ、白井さんじゃない？」

「んんー？ あ、本当だ・・・って梓、白井と一緒にいらってきたの・

・・・」

「え？ あ、御坂さんだ！」

そう、白井と一緒にコンビニに入ってきたお方こそ、学園都市に7人しかいない超能力者（レベル5）の1人で序列は3位、「御坂^{みさか}美琴^{みこと}」その人である。

「あれが超電磁砲^{レベルガン}・・・実際に見ると本当に普通の中学生な」

御坂や白井の通う常盤台中学は学園都市でも5本の指に入る名門校であり、同時にお嬢様校でもある。

さらに言うと、入学条件がレベル3以上という学校で、それを満たさなければたとえ一国のお姫様であろうと不合格になるという恐ろしい学校でもある。

ところが、そんな学校に通っている御坂はお嬢様というよりはサバサバした普通の女子中学生だ。

コンビニなんてところに来ちゃってるあたりで、すでにお嬢様らしくないのだが・・・

「あら、明俊さんに梓さんではありませんの」

俺がそんなことを思いつつ会計を済ませたと同時に、白井がこちらに気付いたようだ。

「白井さん、先ほどはどうもありがとうございました」

「お礼なんて結構ですよ。当然のことをしたまでですし」

「黒子、この人たちの知り合い？」

突然見知らぬ人たち（俺たちだが）に話しかけた白井に、御坂が質問する。

「ええ、つい先ほど知り合いになったばかりですが。こちら双子のご兄妹の・・・」

「工藤明俊です」

「工藤梓です」

「御坂美琴よ、よろしくね」

「お二人が路地裏で不良に襲われ、気絶しているところを保護いたしました。ちなみにお二人とも、明日付けで柵川中学に転入なさりますの」

「へえ〜。じゃあ、初春さんや佐天さんと同じところね」

「あ、あの、御坂さん」

突如、梓がとまどいながらも御坂に話しかける。

「なにかしら？ 梓さん」

「そ、その、出会ったばかりで恐縮ですが、もし良ければアドレス交換とかどうですか？」

「え？ もちろん良いわよ」

「あ、ありがとうございます！」

了解が得られると同時にぱあっと笑顔になる梓。

そしていそいそと携帯を取り出す。ちなみに俺たちの携帯はちゃんと使えた。

まさに不幸中の幸いである。(もし使えなかったら、新たに携帯を契約しなくちゃいけなかったからな。そしたらどんなに料金がかさむことか……)

「送信完了……と。明俊さんも交換する？」

「あ、良いんですか？じゃあぜひ」

「ではわたくしも。今後、ちよくちよくお目にかかるかもしれないし」

そんなこんなで御坂と白井のアドレスをゲットした俺たちであった。

「じゃあ僕達はこれにて失礼します。明日からの学校の準備とかしなきゃいけないんで」

「またどこかでお会いしましょうね」

「ええ、さようなら」

「帰り道にはくれぐれも気をつけて下さいですの」

そう別れの挨拶を告げて、俺たちは寮への帰路についた。

夕食&入浴後。

俺たちは今後の作戦会議を開いた。

「今から、会議を始める」

「はい、明俊議長」

「ではまず1つ目の議題から・・・と言ってもこれしか話すことないんだけど、ずばり、『原作介入』をするべきか否か」

「うーん、難しいところきたね」

「そりゃそうだろ。何しろ、俺たちは今後の展開を知っちゃってる訳だし。これは避けて通れない道だと思うが」

「でもそれって良く考えたら、御坂さんたちとあまり関わらないようにすれば簡単に回避できる問題だと思うんだけど・・・」

「アドレス交換までしたのに関わらないなんて果たしてできるかな・・・？」

「うーん・・・じゃあ派手に原作介入する？」

「それもどうか。俺たちに能力があればいいけど、もし能力が無かったら関わるだけ命の無駄というものだろう。それに、仮に能力があったとしてもだ」

「介入すればそれはすなわち、自分達の知ってるのとは違うストーリーが出来上がって、色々面倒だよ」

「そういうことだ。じゃあ今は『とりあえず原作不介入』というところで」

「了解です、議長」

「ところで梓」

「なに？お兄ちゃん」

「俺たちに能力って・・・あるのかな？」

「それは分からないよ・・・でも、あるといいね」

「そうだな・・・さて、明日も早いしもう寝るか」

「うん、そうだね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

俺たちの新たな生活が、いよいよ始まる・・・

第4話 能力測定

俺たちの学園都市での学校生活初日を迎えた。

今頃になって日付を確認してみると、今日は7月18日だった。

7月18日・・・「超電磁砲」だと確か洋服店「セブンスミスト」で虚空爆破事件が発生、犯人の眼鏡野郎が捕まる日のはずだ。

あれ、でも確か御坂と佐天が会うのって今日が初めてのはずじや・・・

なんで御坂は佐天のことを知ってるんだ？

「早いなお兄ちゃん、おはよう」

と俺が物思いにふけっていると梓も起きたようだ。

「よう、おはよう。いやあ、遠足当日の小学生みたいに早く起きちゃったぞ。」

「私もそんな感じ。待ってて、朝ごはん用意するから」

「サンキュ。そうそう、ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「なに？」

「超電磁砲で御坂と佐天が初めて出会ったのって今日・・・あー、ちなみに今日何が起こる日か知ってるか？」

「7月18日・・・うん、セブンスミストでグラビトン事件が起きる日でしょ？」

俺も梓も禁書目録インデックスならびに超電磁砲は何度も読み返したからな。
このくらいはお茶の子さいさいだ。

「そうだ。で、御坂と佐天が初めて出会うのって今日だよな？」

「うん、『漫画』ではね」

「・・・そうか、そうだった」

先ほどの「お茶の子さいさい」発言は前言撤回だ。アニメではも
っと早く出会っていたのを忘れていた。

「どしたの？もしかして忘れてた？」

「ああ、すっかり失念していたよ。ということは、この世界は少な
くとも『超電磁砲』に関してはアニメ準拠ということか」

「まあ、ぶっちゃけどっち準拠でも大して変わらないけどね。はい、
どござ

そう言っつて梓は食パンとコーヒーをテーブルの上に置く。

「ありがと。さて、早めに家を出て職員室に顔出すか。転校初日か
ら時間ギリギリとかはマズイしな」

柵川中学の場所は迷うことがない。なにしろ風紀委員第一七七支
部が存在するのが柵川中学だからだ。

そこは原作準拠なのかよ・・・と思いつつ、昨日白井・初春に

付き添ってもらった道を逆にたどる。

と、目の前に見知った後ろ姿を発見。

梓も気付いたらしく、声をあげながら駆け出す。

「うーいはるさん！」

「梓さん！明俊さんも、おはようございます」

「おはよう。昨日はありがとな」

「いえ、お礼を言われるほどのことでは・・・よく私だと分かりましたね」

「そりゃあ、頭の上にお花の髪飾りしてればすぐに分かるよ」

「それ、日によって変えたりしてるの？」

「季節に合わせて変えたりはしてますよ」

「へえ〜。かわいいね！」

「そうですね？ありがとうございます」

笑顔で話し合っている梓と初春。

・・・ん？何か忘れてるような・・・
とそこへ・・・

「うーいはるーん」

ま、まさか・・・このセリフは・・・

「おっはよーん!!」

バサッ!!

元気の良い挨拶と共にめくられる初春のスカート。
俺は慌てて顔をそむける・・・ちらつと見えてしまったが。

「・・・ッ!? キャーーーーー!!」

「お、今日は淡いピンクの水玉かー」

「だ、男子もいる往来でこの暴拳ッ!? 何するんですか佐天さん
!」

「クラスメイトに敬語とは他人行儀だねえ。どれ、親睦を深めるた
めにもういっちょ!」

バサッ!!

「わーーーーー!!」

うーん、原作通りのやり取り。男子としては目のやり場に困るの
だが・・・

梓の方を見ると、こちらもどうして良いのか分からないのか苦笑
いをするだけだった。

「ひどいですよ・・・」

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった。ところで初春、こ

「こちらの二人は？」

「ああ、お二人は本日付で転校してきた工藤明俊さんと工藤梓さんです」

「どうも、ご紹介にあずかりました、中学2年工藤明俊です」

「同じく中学2年、工藤梓です。」

「え？名字と学年が同じってことは、もしかして双子ですか？」

「二卵性双生児ですけどね」

「でも双子って何か素敵。あつ、自己紹介遅れました、初春のクラスメートの佐天涙子さてんるいこです」

「「よろしく」

「「よろしくお願いします！」

「「・・・ところで明俊さん」

突然初春に呼びかけられる俺。

「はい？なんでせう」

「・・・見ました？」

顔を赤らめながら上目遣いで質問する初春。
見たって何を・・・ はっ、あれか！

「み、見てない見てない！」

「お兄ちゃん、初春さん、まだ『何を』の部分言ってるよ？」

ニヤニヤしながら指摘する梓。

こ、こいつ・・・やりおる！ じゃなくて！

「ど、ど、どうするんですか佐天さん！ 明俊さんに見られたじゃないですか！」

「まあまあ。おわびにあたしのパンツみせよっか？」

「「いいっ!?!」」

「そういう問題じゃないです!!！」

顔を真っ赤にしてあたふたする初春におちやらせる佐天、そしてニヤつきながら肘で俺を突付いてからかう梓。

どつやら、セカンドライフ 退屈しない第二人生を送れそうだ。

昇降口で初春たちと別れた俺たちは職員室へと向かった。

職員室のコーヒーの香りに出迎えられた俺たちは1番近くにいた先生に声をかける。

「すみません」

「何かな？」

「僕達、今日ここに転校してきた工藤明俊と妹の梓なのですが・・・」

「ああ、話は聞いているよ。ちょっと待ってて、担任の先生を呼んできてあげるから」

「わざわざすみません」

そう言うとその男の先生は職員室の奥へ。
しばらくして、若い女性の先生と共に戻ってきた。

「待たせたね。こちらが君たちの担任になれる桜川みゆき先生だ」

「初めまして、君たちの2年1組担任、桜川です。これからよろしくね」

「「よろしく願います」」

「ええ、よろしく。さて、早速だけど教室に向かいますか。もうすぐ朝のホームルームの時間だし」

そう言っつて職員室を出る桜川先生。

俺たちは、これから1年間クラスメイトと生活を共にする2年1組へと向かった。

「じゃああなた達は私が呼ぶまで教室の外で待っててね」

と言い残し、教室の中へ入っていく桜川先生。

教室の中からは「ねえ先生、今日転校生が来るってホント!?!」とか「双子が同じクラスとか珍しいよな」とか聞こえてくる。

「どうやら俺たちはすでに噂的のようだな」

「そつみたい。まあ、仕方ないと言えば仕方ないんだけどね」

梓も半ばあきらめの表情だ。

ま、転校生の来るときの教室なんてどこもこんなもんだらう。

「はいはいみんな落ち着いて静かに。みんなの言うとおり、本日のクラスに双子の転校生が来ます。入ってきていいわよ」

呼ばれた俺たちは1度互いに顔を見てうなづき、表情を引き締め中に入る。

中に入ると、男女からそれぞれ声があがる。

特に男子の騒ぎが大きい。まあ、自分の妹のことを言うのもなんだが、梓はそれなりに可愛い部類に入ると思う。

俺自身についてはよく分からないが、女子の反応を見る限り悪い印象は与えてないようだ。

「こちらが、今日からみんなと生活を送る工藤兄妹です。二人とも、自己紹介をお願い。」

「初めまして。僕が兄の工藤明俊です」

「私が妹の工藤梓です。よろしくお願ひします」

俺たちが自己紹介を終えると、クラスのみんなから温かい拍手で迎えられた。

「さて、二人の席は窓際の後ろ2つが空いてるから、前が明俊君で後ろが梓さんね。」

言われた席につく俺と梓。

「さて、朝の連絡事項ですが、今日は半日授業で明日が終業式です。あ、明俊君と梓さんは今日は臨時の能力測定だから皆とは別行動ね。じゃあこれでホームルームは終了です。2人は私についてきてね」

ホームルームが終わり、俺と梓は言われたとおり先生について教室を出た。

先生に連れてこられたのは保健室だった。

中に入ると白衣の人たちが数人、ベッドの近くの機械をいじっていた。

「まずはあの機械で、二人にどんな能力が発現するか調べます。では、二人ともベッドに横になって下さい」

言われてベッドに横になる。

白衣の人たちが手際よく俺たちの身体に電極を付けていく。これ

で脳波とかを調べるのだらう。

5分後・・・

「はい、終了です」

そう言われて俺たちが起き上がると、それぞれ紙を渡される。

「お二人とも、能力が発現することを確認致しました」

思わず顔をほころばせて互いを見る。

「ではお二人とも、プールへ移動します」

くプールく

「ではこれからレベルの測定を始めます。それでは工藤梓からどうぞ」

「はい」

若干緊張の面持ちの梓。

梓がプールサイドに立つと、白衣の人がなにやら梓にささやく。会話が終わると梓は、水際にしゃがんで水面に手のひらを乗せる。

「では、始めてください」

合図が出ると梓は目を閉じる。
そして再び目を開けた・・・次の瞬間。

バキバキバキ！！

ものすごい音を立ててプールの水が・・・凍った。
それはもう一瞬の出来事だった。

『測定完了。25mプールの水を氷結させるための所要時間0・1
秒。氷結開始地点の最低温度 - 250 。総合評価5』

・・・は？ 梓がレベル5だと！？
開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

はつきり言って完全に予想外の展開に俺はもちろん、白衣の人たちも、そして当の本人である梓もポカンとしている。
だがここは、兄として祝福の言葉を送らねば！

「よ、良かったじゃないか梓！！ レベル5だって！！」

「う、うん！！ やったよ、お兄ちゃん！！」

何とか言葉をひねり出すが、よく考えたら次は俺の番だ。
目の前でレベル5を、それも妹にたたき出されたためか、かなり
気後れしている自分がいる。

「で、では次、工藤明俊」

「は、はい」

俺がプール際に立つと白衣の人が近づいてきて耳打ちする。

「それでは、この氷の塊に手を置いて、それを消し去る状況をイメージして下さい」

「それだけですか？」

「はい、それだけです」

・・・良く分からん。だが確か、能力を発現するためには「パーソナルリアリティだけの現実」が土台になつてゐるんだっけか。

ならば、俺に出来るのは自分だけの現実を信じることだ。

梓が作り出した氷塊の上に手を乗せる。ひんやりと冷たい。

「それでは、始めてください」

すう、と息を吸う。

梓に出来たのだ、自分にもできる。

梓と同じように目を閉じ、氷塊を消滅させるところをイメージする。

そして、目を開けた瞬間・・・

氷塊が跡形もなく消滅した。

辺りはシーンと静まり返っている。

聞こえるのは風の音だけだ。

しばらくして、その静寂を機械の音声が破る。

『測定完了。氷塊消滅に要した時間0.05秒。対消滅時に発生するエネルギー抑制率99.995%。総合評価5』

その音声を聞いて俺はプールサイドにひざをつく。疲れからくる脱力ではない。喜びからくる脱力だ。視界の端に駆け寄ってくる梓を捉える。そして、

「やったね!!お兄ちゃん!!」

そう大声を出しながら抱きついてきた。

俺も思わず抱き返す。まさか、兄妹そろってレベル5だなんて、1%も想像していなかった。

良くてレベル3くらいかなあ、なんて思っていたくらいだ。

俺たちが喜びのあまり抱き合っていると、白衣の男が紙を持ってこっちに近づいてきた。

「お喜びのところ恐縮ですが、お二人の能力について説明を致します。」

「あ、お願いします」

俺は返事をしつつ梓から離れる。

「ではまず妹さんの方からですが、能力としては『氷結能力』です。その名の通り、物質を凍らせることができます。それだけならば他にもそのような能力者はいるのですが、あなたの場合、その発現温度や速度、適用範囲が桁違いなのです。温度に関しては、液体窒素はもちろん液体ヘリウムも作り出せます」

「え、液体ヘリウム……ですか?」

「はい、ちなみにヘリウムの沸点はセルシウス度で - 268.93
ですから、実質絶対零度に近い温度です。適用範囲については、
『辺り一帯』という日本語がまさに的確かと。その他、空気中の水
分を氷結させて氷の矢を作り出したり、氷の壁を作り出したりと用
途は様々ですね」

「は、はあ・・・」

「では次にお兄さんの方ですが・・・これは説明がちょっと難しい
です。『反物質』という物をご存知ですか？」

「反物質ですか？・・・確か、通常の物質と触れると互いに消滅
してエネルギーが発生する・・・とか何とか」

「それです。あなたの能力はその反物質を生成するものです。」

「え、でも確か、反物質と物質が触れると物凄いエネルギーが発生
するんですよね？さっきの測定では何にも起きませんでしたか・・・」

「そこがあなたの能力の本質です。あなたは『自分だけの現実』パーソナルリアリティで
もって、そのエネルギーを抑制しているのです。ですから、消滅の
みを引き起こすことができるという訳です。」

「でもこんな能力、どうやって使えば良いんでしょうか？間違つて
人に触れでもしたら大変なことになりますし・・・」

「使い道に関してはご自分で、としか言えないのですが・・・一
例としては、『反物質バリア』などどうでしょう？その特性を利用

してほぼ全ての攻撃を無力化できます。と言っても、このような能力に他にお目にかかったことが無いのではっきりしたことは言えないのですが」

「いえ、用途についてはこれから考えてみようと思います」

「そうですね。ではこれにて全測定を終了します。ちなみに序列についてですが、おって発表があると思います」

そう言い終わると、白衣の人たちは機材の片づけを始めた。

「……とりあえず、教室に戻るか」

「……そうだね。でも、二人揃ってレベル5でした、なんて言ったらみんなどんな反応するかな……？」

「さあな。でも、黙っててもいずれば分かることだ。素直に言っちまおうぜ」

「うん」

俺たちは、授業中の校内をゆっくりと2年1組へと向かって歩いていった。

第5話 グラビトン事件（前書き）

第4話で、グラビトン事件のおきる日の授業を半日の設定にしていますが、読み返してみるとしっかりと午後3時まで授業していました。・・・が、そのままいきます（おい

第5話 グラビトン事件

プールから帰ってきた俺たちは2年1組の前まで戻ってきた。中からは、桜川先生の声とチョークの黒板をなぞる音だけが聞こえる。

ちよつと入りづらい雰囲気だ。

だが、こんなところで突っ立っててもどうしようもない。

俺は思い切って教室のドアをノックした。

コンコン

ガラッ

ドアを開けると、教室にいた全員が一斉にこっちをむく。

「も、戻ってきましたー」

「あらお帰り。で、どうだった？」

「レ、レベル5でした」

俺と梓がハモる。

次の瞬間・・・

「良かったな!!!」

「おめでとー!!!」

「双子で揃ってレベル5とかカッコイー!!!」

教室が、授業中にも関わらず大歓声に包まれる。

その歓声はすぐに隣のクラスに伝播し、人を呼ぶ。

いつしか、2年1組の前は人だかりでいっぱいになった。

俺たち二人は最初呆気にとられていたが、すぐに歓喜の輪に加わる。

当初、「転校生のくせに能力者、あまつさえレベル5かよ」などと非難されることも考えていたが、どうやら杞憂だったようだ。

先生たちも、止めても無駄だと思ったのか特に注意せず、あきらめ顔で俺たち生徒を見つめていた。(職務怠慢ですよ)

キーンコーンカーンコーン

「では、明日で終業式ですのでサボらずに来て下さいね」

桜川先生の挨拶(なのかこれは?)で放課となる。

俺と梓が昇降口へと向かう間も、2年生はもちろん噂を聞きつけた1年生や3年生も俺たちを囲んで、まさにカオスという言葉がふさわしい状態だ。

「・・・なんか、すごいことになっちゃったね」

「まあ、仕方ないさ。・・・あれ、初春と佐天じゃないか?」

「あ、来たよ初春! 明俊さん、梓さん!」

佐天に呼びかけられた俺たちは、人ごみから何とか抜け出し彼女らのところへ駆け寄る。

「いやー、参った参った」

「二人とも大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないよー。私もお兄ちゃんもこんなの初めてだから参っちゃって」

「……で、二人ともレベル5ってというのは本当なんですよね？」

興味津々で尋ねてくる佐天。

「うん、まあ……」

「わあ、すごいー!!」

「そんな佐天さん、やめてよ」

「なに言ってるんですか梓さん！ 誇るべきことですよ!!」

「私もそう思います！ もっと自信を持ってください!!」

佐天と初春にまくし立てられる俺と梓。

「そ、そうかな？」

「そうですね!」

「さて! 二人の街案内とレベル5祝福をかねて、パーティーと派手にやりますか!」

「そうですね！・・・あ！！」

突如声をあげる初春。と、彼女の目線の先には御坂美琴が。

「御坂さーん」

「初春さんに佐天さんじゃない。そっちは確か、明俊さんと梓さん・・・だっけ？」

「そうですね。昨日ぶりですね」

「4人でこれからお出かけ？」

「そうなんですよ！二人の街案内とレベル5認定のお祝いをかねて！」

「あ・・・」

「言っちゃった・・・」

俺たちがレベル5と聞いてポカーンとする御坂。だがすぐに顔つきが変わって・・・

「へえー、すごいじゃない！！」

・・・あれ？

思わず顔を見合わせる俺と梓。

てつきり、「二人とも、私と勝負しなさい！！」という展開を予想したのだが・・・

「この世界の御坂は喧嘩っ早くないのか？」

「御坂さんも二人の歓迎会参加しますか？」

「ええ、そうさせてもらおうわ。どこか行く予定ある？」

「佐天さんとセブンスミスト行こうって話してたんですけど・・・」

「でも良く考えたら二人の街案内も兼ねてるのに洋服屋ってどうかな？」

「いや、俺たちは全然気にしないぞ。なあ梓？」

「うん。それに私、ちょうど新しい服欲しいなあ〜って思ってたところだし」

「そうですか？ じゃあけっぺーい」

話もまとまったので歩き出す俺たち。

本当はこのままだと原作介入しそうなので辞退しようかとも考えたのだが、せっかく歓迎会を催してくれるのだし、原作通りなら上条さんが活躍する場面なのだから彼に任せておけば良いだろう。

他人任せは性に合わないのだが、もし俺たちが下手に介入して、しくじって怪我人や死者でも出たらたまったものではない。

原作ではこの爆破事件で怪我人も死者も出てないのだからなおさらだ。

俺たちは外で静観するでしょう。

「あ、そうそう」

セブンスミストへ歩き始めて少したった時、急に御坂が俺と梓を見てこう言った。

「二人とも、後で私と勝負しなさい！」

・・・前言撤回、御坂は御坂だった。

「あー、レベルアップパー幻想御手があつたらなー」

「え？ 何ですかそれ？」

「いや、あくまで噂なんだけどね、あたしたちの能力を簡単に引き上げる道具なんだって。ネットの都市伝説みたいなものなんだけどさ」

「そんなものがあつたら苦労しませんよ」

俺たちの目の前では原作通り、佐天がレベルアップパーの話をはじめた。

それを聞いた御坂は、なにやら考えている。

これも原作通り、レベルアップパーと最近多発している爆破事件を結び付けようとしているのだろう。

俺は佐天たちや御坂に悟られぬように梓に耳打ちする。

「なあ、梓」

「なに？」

「佐天にさ、レベルアップのこと釘を刺しといたほうが良いかな？」

「うーんどうだろ・・・でも今の段階だとまだ、佐天さんは自分がレベル0だったてことを結構気にしてるし、いきなりレベル5になっちゃった私達がとやかく言ってもかえって逆効果のような気がする」

「でもなあ・・・」

「お兄ちゃんの気持ちも分かるよ。でも今は、何も言わずにそっとしておくのが得策・・・かな？ 少なくとも私はそう思うよ」

「・・・そうだな。あの事件も、佐天が成長するひとつのターニングポイントだしな。それを消すわけにもいかないか」

俺たちの秘密会議が結論に達したとき、ちょうどセブンスミストに到着した。

「へー、超電磁砲^{レベルガン}ってゲームセンターのコインを飛ばしてるんですか」

「まあ50メートルも飛んだら溶けちゃっただけだね」

「でも必殺技があるとカッコイイですね」

セブンスミスト店内で初春・佐天・御坂が服を見ているときの佐天と御坂の会話である。

俺と梓もその近くにいます……のだが。

「俺、超居づらいんだけど……」

「そりゃ女性服コーナーだからね」

「……上条さんでも探してこようかな」

「今のうちに犯人の眼鏡男ボコボコにしとけば？」

「それはマズイだろう」

「あはは、そうだね」

男1、女4という偏りまくった比率で、俺が居場所を無くしていた。
た。

仕方なく、どこかぶらつこうかと思っていた矢先、

「お！初春、こんなのどうじゃ？ ヒモパン！！」

「ぶっ！？」

「はい！？無理無理無理です！ そんなの穿けるわけじゃないですか！？」

「これならあたしにスカートめくられても、堂々と周りに見せつけられるじゃない？」

「見せつけないしめくらないで下さいッ!」 第一、明俊さんがいるのにそんな会話やめて下さい!」

「いや、俺は何も聞いてないぞ!」?

「お兄ちゃん、顔がにやけてるよ」?

「ほら、明俊さんも興味あるみたいだしさ。穿いちゃいなよ!」

「穿かないつたら穿きません!」!

初春は顔を真っ赤にして佐天と言い争っている。

俺は先ほど、確信的発言をした梓を無理やり連行して御坂の方へと向かった。

ちょうど御坂は、ピンクのパジャマに見とれているところだ。

俺と梓はお互い、ニヤっとしてうなずくと御坂の後ろからいきなり話しかける。

「御坂さん!なにパジャマ見てぼーっとしてるんですか?」

「え!」?

「あ、ひょっとしてこのピンクのパジャマ欲しいなあ、とか思っちゃってました?」

「ええ!」?私!」? こ、こんな子でもっばいパジャマ着ないわよ!」!

あれ、原作と違って少し恥らってる?それなら...

「でも、俺はこのパジャマ結構似合つと思つけどなあ。梓は？」

「うんうん、私も良く似合つてると思いますよ〜？」

「そ、そうかな？二人がそう言うのなら、似合ってるのかな？」

そう言つて、見ていたピンクのパジャマを持っていそいそとレジに向かう御坂。

ワレ、サクセンニセイコウセリ。

俺が親指をグツと立てると、梓もニツコリしてうなづく。

レジから御坂が戻ってきたちようどその時、初春の携帯がなった。その瞬間、俺は梓を見る。梓も、俺を見てうなづく。おそらくあの電話は白井からの電話だろう。

「はい、もしも・・・」

『初春ッ！！！ 今どこにいるんですのっ！！？』

想定 of 展開通り、白井からの電話だ。

「し、白井さん！？ いえその、今、警邏けいろう中ちゆうでして決してサボつて
るわけでは・・・」

『例のグラビトン事件の続報ですのー！』

「えー!?」

『衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ！』

「か、観測地点は？」

『今、近くの風紀委員達を急行させていますの！あなたも速やかに現場へ向かいなさい！』

「ですから、観測地点……」

『第七学区の洋服店セブンスミストですの！』

うむ、原作通りの展開。

「ラッキーです！私、今ちょうどそこにいます！！」

『何ですって！？初は……』

ピッ

初春が電話を切る。そして……

「何ですって！？この店が標的！？」

御坂が初春から、白井の電話の話を聞く。

「そつみたいです。すみませんが、避難誘導に協力してもらえますか？」

「分かったわ」

「俺たちも手伝うぜ！なあ梓」

「うん！」

「助かります。では3人で避難誘導をお願いします」

3人でやったせいか、避難誘導は手際よく早く終わった。

「御坂さんは、初春さんに避難誘導完了を伝えてきて。私とお兄ちゃんは外で人だかりを出来る限りこの建物から遠ざけるから！」

「分かったわ、二人ともありがとね！」

「良いつて事よ！じゃあ、頼んだぜ！」

そう言っつて俺と梓はセブンスミストを出る。

後は原作通り、上条さんが御坂や初春を爆発から守るだけ・・・

.....

「なあ梓、一つ疑問が浮かんだんだが・・・」

「うん、私も・・・」

「じゃあ、せーので」

「せーの」

「今日、上条さん見た？」

くしくも、俺と梓の嫌な疑問は合致した。

そうだ、よく考えておくべきだった。

この世界は、「御坂と佐天の出会いがアニメ準拠」、「風紀委員第一七七支部の場所は原作の漫画準拠」。

つまり、完全にどちらかに統一されているわけではない。

ならば、第3の可能性「どちらにも準拠していない、オリジナル展開」も十分ありえるのだ。

今回、「上条さんがセブンスミストに来ない」というオリジナル展開を引き当ててしまったのだ。

つまり今、セブンスミストの中には御坂、初春、そして爆弾人形を渡された女の子、の3人しかいないことになる。

もし、原作通り「御坂がレールガンで爆弾を吹き飛ばすことに失敗」したら・・・

そう思った次の瞬間、俺は走り出した。

「お兄ちゃん!？」

「梓!お前は野次馬を遠ざける!そして爆発がおこったら、あの眼鏡野郎をとっ捕まえに裏路地へ行け!」

「お兄ちゃん・・・分かった、でも、無事でね!絶対、帰ってき

てよ!」

「ああ!」

梓は、俺が上条さんの代わりをしに行くことに気付いたのだろう。というより、梓なら絶対に気付く。

俺たちは互いを信頼している。自慢じゃないが、そこらの兄弟以上に信頼しているつもりだ。

だから、俺は梓に爆弾魔を任せられるし、梓も俺に上条さんの代役を任せられるのだろう。

俺は、全速力でセブンスミストへと引き返した・・・

第6話 続・グラビトン事件（前書き）

最初のほうで、「オリジナルストーリーやります」とか言っておきながらめっちゃ原作にそってますね（汗）
ちゃんとオリジナルストーリーやりますので、それまでお付き合いいただけると幸いです。

第6話 続・グラビトン事件

（明俊 side）

俺は人気のまったく無いセブンスミストの中を必死に走る。

くそっ、間に合え！ 間に合ってくれ！

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

この声・・・ 爆弾魔にぬいぐるみを渡された女の子の声だ！

だとすると・・・ 爆発はもうすぐか！

俺は角を声の聞こえた方に曲がる。

曲がると、ちょうど初春がぬいぐるみを放り投げて女の子の上に覆いかぶさるところだった。

「逃げて下さい御坂さん！！あれが爆弾ですっ！！」

叫ぶ初春。放り投げられたぬいぐるみがみるみる変形し、圧縮していく。

とっさにポケットに手をつまみ込む御坂。

コインを落とさなければ迷わず爆弾ごとぬいぐるみをレールガンで吹き飛ばすだろう。

だが・・・

チャリーン・・・!

無常にも、原作通り御坂の手を離れ床に落ちるコイン。

しまった、という表情をして慌てて防御態勢をとろうとする御坂。

「伏せる御坂!!」

「あ、あんたっ!!どうしてここに!？」

「いいから下がってる!!」

俺は御坂とぬいぐるみの間に滑り込み、息も絶え絶えに両手をぬいぐるみの方に突き出す。

ぬいぐるみが極限まで圧縮し、そして・・・

「じおおおおおおおおおお……!!……!!……!!」

（梓 side）

ドカー……ン!!

セブンスミストの建物が爆発した。

「キヤ……!!」

「何だ？」

「例の連続爆破テロだつて！」

「風紀委員の子がまだ中にいるのを見たつて……」

「爆発の直前に中に入っていった男の子もいるつて……!!」

「お兄ちゃん・・・！」

兄は御坂さんたちを爆発から守れただろうか・・・？

しかし、今は兄の身を案じているだけという訳にはいかない。

この爆発事件を引き起こした眼鏡男を捕まえなければ。

「ククク・・・」

セブンスミスト近くの路地裏。

眼鏡をかけた青年が不気味に笑う。

「スゴイツ！スバラシイぞ僕の力！！」

そう、この青年こそ一連の爆弾事件の犯人である。

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば、無能な風紀委員もアイツらもみんなまとめて・・・」

「まとめて・・・なあーに？」

まだ幼さの残る女の声が背後から聞こえて後ろを振り返る青年。

「だ、誰だ！？」

「さあ・・・誰でしょう、ねー！！」

そう言いながら、後ろに立っていた少女は手に持っていた学生力バンで青年を思いっきり殴る。

「ぐあっ！！」

ほとんど不意打ちに近い攻撃をくらった青年は無様にコンクリートの上を転がる。

「おっと、ちよつと強く殴りすぎたかな？でも、今までの爆発で怪我をした人の痛みはそんなもんじゃないわよ？爆弾魔さん？」

「ば、爆弾？なんのことかな？」

しらばっくれようとする青年。だが・・・

「残念ねえ。さっきの爆発で死傷者はおるか、誰一人、かすり傷一つ負ってないわよ？」

「御坂さん！無事だったんですね！」

青年を殴った少女の後ろから別の少女が現れた。

「お、お前は確か花飾りの風紀委員と一緒にいた・・・」

「そ。だから言ったでしょ。誰一人死んじやないし、怪我もしてないって」

「そんなバカなっ！！僕の最大出力だぞ！？」

意味が分からない、という風に驚いたような発言をする青年。

しかし、驚きながらも後ろ手で持っていたバッグの口を開け、中からスプーンを取り出す。

青年の能力は「シンクロトロン量子変速」。簡単に言ってしまうえば、アルミを爆弾に変える能力である。

そして青年は後ろ手につかんだスプーンを前に・・・

ドゴンー!!

しかし青年のスプーンは、炸裂する前に、御坂と呼ばれた少女の手から発せられた光によって吹き飛ぶ。

「と、常盤台の超電磁砲レールガン!?」

青年は慌てて自分の後ろにあるバッグに手を突っ込もうとする・・・が。

「なっ!?」

バッグは完全に氷付けになっていて、スプーンなど取り出せなかった。

「な、なんだこれは!?!」

青年が氷付けになったバッグに気を取られている間に、御坂と呼ばれた少女は青年に近づき・・・

ゴンッ!!

青年を地面に押さえつけた。

「暴れてもいいけど、今の私に手加減できる保証はないわよ」

「ど、どうして僕のバッグが氷付けなんかに!？」

「ああそれ、私の能力なの。あなたが後ろ手にカバンを持つてるのは知ってたし」

そう答えたのは、最初学生カバンで青年を殴った少女だった。

「能力者……! ハッ、二人の能力者に押さえ込まれるなんてな! それも一人は常盤台のエース様か!」

「あ?」

「いつもこうだ! 僕はなにをやっても……いつも地面にねじ伏せられる!」

青年は敗北を認めたように、うらみつらみを叫び始める。

「僕はお前みたいなのが嫌いなんだよ! 風紀委員だつて……力の
あるヤツなんてのはみんな嫌いなんだ! ウゼエんだよ!!」

その言葉を聞いた御坂は、青年を押さえ込んでいた手を離すと、

青年の目の前に電撃を落とした。

スガーーーン!!

「ゲホツゴホツ!! な、なにをする!」

そう言つて青年は御坂の方を見る・・・が、その怒りの表情をみて戦慄する。

「ねえ知ってる? 常盤台のレベル5は、元々は単なるレベル1だった。それでもそいつは、頑張つて頑張つて頑張つて・・・レベル5と呼ばれる力を掴んだのよ」

「そ、それがどうした!! それだって、所詮才能があつたから花開いただけだろう!? 才能が無いやつがいくら努力したつて無駄なんだよ!!」

「アンタ、ふざけんのも・・・」

「ふざけんな!!」

「あ、梓さん?」

御坂の言葉をさえぎつて叫んだのは、梓と呼ばれた青年を学生力バンで殴つた少女だった。

「才能が無いから努力しても無駄? 誰がそんなこと言ったのよ! それに努力つてのはね、どんなに小さくても良いから結果が生じて

初めて努力したって言うのよ！結果が生じる前に努力を止めたら、それはただの自己満足に過ぎないわ！」

そう言い切ると、梓は手に氷の刀を宿し、それを青年に向けてさらにかう言った。

「私はあなたを許さない。私も御坂さんも、たとえレベル1でもあなたの立ち塞がったでしょうね。力に依存し、あまつさえ関係ない人たちを巻き込んだあなたの前にね」

そう言って梓は、手にした氷の刀で青年を峰打ちして気絶させた。

「そうでしたの・・・あなたがお姉さまや初春たちを・・・」

「ええ、まあ・・・」

俺は、現場に到着した白井に起こったことをすべて話した。

現在、爆発現場では風紀委員と警備員アンチスキルによる現場検証の真っ最中だ。

ちなみに警備員つてのは学園都市で警察的な役割を果たしている組織で、学生で構成される風紀委員よりも上位に位置する。

「それにしても、あなた方が兄妹がそろってレベル5とは……さすが、双子のなせる業わざ、といったところでしょうか？」

「いや、そんなんじゃない…… たまたまだよ」

と、そんな話をしていると……

「おにーちゃんー!!」

噂をすればなんとやら、梓が叫びながら抱きついてきた。

「おい、こんなところで抱きつくなよ、恥ずかしいだろ？」

「えー、いいじゃん！ お兄ちゃんが無事だったから嬉しくてさ」

「だからって、ここで抱きつかなくても……」

「本当に、仲の良い兄妹ですわね」

「まったく、微笑ましい限りね」

いつの間にか、御坂もこっちに来ていたようだ。

「お姉さま！お怪我はありませんこと？お姉さまの美しいお肌に傷がついていたら黒子、シヨックでどうにかなってしまいそうですわ
「！」

「そんな大袈裟な。大丈夫よ、明俊さんがちゃんと守ってくれたから」

「そ、そうでしたわね。あなたにはなんとお礼を申せばよいのか・」

「あはは、白井は本当に御坂命なんだな。お礼なんてそんな、当然のことをしたまでだしさ」

「へえー、随分紳士的じゃない。どっかのツンツン頭とは大違いね」

御坂の後半部のセリフを聞いて、顔を見合わせてニヤつとする俺と梓。

「どうやらこの世界でも、上条さんと御坂の追いかっこ（愛の逃避行？）はしっかりと行われているようだ。」

「さて、俺たちはそろそろ帰りますかね」

「そうだね、私もお兄ちゃんもレベル5って分かったり爆弾事件に巻き込まれたりで疲れちゃったもんね」

「特に精神的にな」

「結局、二人の街案内も歓迎会もできませんでしたね・・・」

いつの間にか初春と一緒にこっちに来ていた佐天が残念そうに言う。

「まあ、しょうがないさ」

「そうそう、また今度、時間のたっぷりあるときにやりましょ？
ね、佐天さん？」

「……そうですね！そうしましょう！」

「じゃあみんな、また今度」

「じゃあね〜」

そう別れの挨拶を交わして、セブンスミストを後にする俺と梓。

俺たちの学校初日は、驚愕のレベル5やら、まさかの上条さん現
れない展開で、予想していたよりぶっ飛んだものになってしまった。

第7話 冷たくて美味しいかき氷（前書き）

今回は話があまり進みません。

第7話 冷たくて美味しいかき氷

「では皆さん、明日から夏休みですがくれぐれも問題行動は起こさないようにして下さいね」

桜川先生の、学期末恒例の注意喚起を聞きながら教室を後にする俺と梓。

7月19日。今日で1学期も終了だ。

・・・とは言っても、俺たちは昨日この学校に来たばかりなので何とも言えない気持ちである。

「あゝ、暑い」

俺は制服の胸の部分をパタパタと動かして、自分に風を送り込む。

「私の能力で涼しくしてあげよつか？」

と、こちらは涼しい顔の梓。

こいつの場合、涼しい顔だけではなく実際に能力で涼しくしている可能性もあるが。

「凍りづけだけは勘弁な」

「そんなことするわけないでしょ」

そう言いながら梓は、手のひらに乗るサイズの氷を二つ作り出す

と、それをタオルに包んで俺に一つ手渡す。

「はい、どうぞ」

「サンキュー！　んー気持ち良い。梓の能力、夏には大活躍だな」
もらったタオルを首筋に当てて、ひんやりとした感触を満喫する。

「この後どうしよつか？」

同じく、氷を包んだタオルを顔に当てながら梓が尋ねる。

「そうだな・・・と言っても、今日は確か特に事件もおきないはずだしなあ」

そう言いながら、今日起きるであろう出来事を思い返す。

と・・・

「あ、明俊さんに梓さんじゃないですか！」

後ろからかけられた声に振り返る。

「よお佐天。昨日は大変だったな」

「いえいえ、二人に比べたらそんな・・・」

「はい佐天さん、どうぞ」

いつの間にやらもう一つタオルを用意していた梓は、作り出した氷を包んで佐天に手渡す。

「わあ〜冷たい！　ありがとうございます！」

「ところで佐天さん、この後の予定は？」

知りつつも質問する梓。あくまで俺たちは知らないふりだ。

「ちよつと初春が体調崩しちゃいまして・・・今から薬局に行くところなんです」

「初春さん、大丈夫？」

「熱自体は大したことないです。今朝も37.3で微熱でしたし」

「そっか。・・・よし、俺たちも付き合っか」

「え、良いんですか？」

「良いの良いの、どうせ暇だったし」

することがなくて暇だったのは事実なので、佐天の買い物に付き合うことにした。

「へえ、じゃあ梓さんの能力は物を凍らせるものなんですか？」

「うーん・・・どうかな？ それだけじゃないんだけど、平たく言えばそんな感じ？」

「梓の能力なんか優しいもんさ。俺の能力なんか、一步間違ったら人を消滅させちまうからな」

「明俊さんの能力はどんなものなんですか？」

「説明が若干めんどうさいんだけど・・・佐天は、『反物質』って知ってるかな？」

「反物質・・・ですか？ごめんなさい、知らないです」

「反物質ってのは、うーんと・・・例えば、電子ってのはマイナスの電荷を持つてるよね？その反対、つまりプラスの電荷をもつものが存在するんだけど」

「ふむふむ」

「かなり大雑把に言っちゃえばさういう、『逆の性質』を持つ物質のことなんだ。そして、物質と反物質が衝突すると、『対消滅』ってのが起こって、両者とも消えてエネルギーだけが残るんだ」

「へえ」

「でもね、お兄ちゃんいわく、その発生するエネルギーが尋常じゃないらしいよ」

「そうなんだ。例えば、1個の1円玉を同じ質量の反物質で対消滅させると、熱量換算で約90兆キロジュール。これは広島に投下された原爆の約1・4倍だとか」

「ええ！？　じゃあ、能力使ったら辺り一面吹き飛ばじゃないですか！」

「でもここからがお兄ちゃんのすごいところ！　なんとお兄ちゃんは、その発生するエネルギーをほぼ100%抑制できるのです！」

「人のセリフ奪うなし。まあ梓の言ったとおりだ・・・ってか、じやなきやこんな能力持つだけ無駄だしな」

「でも、二人ともレベル5なんて羨ましいですね・・・」

「佐天さん・・・」

佐天の言葉を聞いて押し黙る俺と梓。

しかし、かける言葉は無い。この学園都市に来ていきなりレベル5の認定を受けた俺たちが、ずっとレベル0で悔やんでいる彼女に何を言っても、それこそ梓が以前言ったとおり火に油だ。

「あ、白井さんに御坂さんじゃないですか」

いつの間にか、原作で佐天と御坂たちが出くわす公園に来ていたらしい。

「あら、佐天さんに仲良し兄妹じゃない。」

「おーっす」

「あ、御坂さんと白井さん、おいしそうなもの食べてますね。私も買ってこようかな」

「お、なら梓、俺にメロン味買ってきて」

「はいはい」

「待って梓さん、あたしも行きます」

そう言っ梓について走っていく佐天。

彼女に何も言っやれない自分を、俺は少し恨んだ。

「初春さんの容態はどう?」

「熱自体は大したことないです。あたしが買っきたのも、風邪薬じゃなくて熱さましでして」

ベンチに腰掛け、それぞれにかき氷をつつきながら進行する会話。

「まあ、確かに1日中ベッドの上では・・・」

などと白井が初春にご同情申し上げていると、例のイベントが発
生。

「御坂さんのイチゴ味美味しそうですね。一口頂いていいですか
?」

「あ、いいわよ。はい、どうぞ」

「わーい。……おいしー。お返しにレモン味どうぞ」

「ありがとう」

パクッ

御坂と佐天のかき氷の食べ比べを見て愕然とする白井。

予想通りの展開にニヤニヤが止まらないのは俺と梓。

「なっ、なにをしてるんですの!?!」

「え?食べ比べですけど?」

「たべくら……はっ、で、ではお姉さま、わたくしとも間接キ……
もとい食べ比べを……」

「……アンタ、私と同じの注文したじゃない」

「あ……。バカバカ、黒子のバカ」

シヨックを受けて地面にガンガン頭を打ち付ける白井。

と、梓が御坂に近づき、白井に聞こえるようにわざとちよつとだけ声を張り上げて、

「じゃあ御坂さん、宇治抹茶味もどうぞ」

こら梓、そんな形で原作介入するんじゃない。本気でニヤニヤが止まらねえだろうが！

「あら、良いの梓さん。じゃあ、いただきまーす」

パクッ

「あ、あ、梓さんまでなにしてるんですの!？」

「だから、食べ比べですけど?」

ダメだ、笑いが止まらねえ。こつなつたら俺も……

「で、では常盤台のレールガン様。もしよろしければわたくしめのメロン味もご賞味……」

「そうはさせませんの!?!」

そう言うと、いきなり俺と御坂の間にテレポートしてくる白井。

「ちょっと待て白井！さすがに冗談に決まってるだろう！？そんな小っ恥ずかしいこと本当にするわけ無いだろ！」

「では、先ほどの発言は何ですか！？」

「白井をからかうための冗談だよ！」

「……本当に冗談ですか？」

「ここで俺が嘘ついてどうする」

見ると、御坂・佐天・梓の3人は手を口元に当てて笑いを必死にこらえている。

この光景を見た俺も笑いがこみ上げてきて、思わず声を出して笑う。

さっきまで俺と梓を包み込んでいた重たい空気が、ちょっと和らいだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？なんだ？」

夕食後のコーヒータイム。梓が俺に声をかけてきた。

ちなみに現在、工藤家の家電製品はすべてコンセントからの電力供給を断っている。

理由は、この後御坂と上条さんの追いかけてこの末に、このあたり一帯が停電に陥るからだ。

知っているなら、対処しない手は無い。

「昨日の爆弾事件のことだけど・・・上条さんが来なかったじゃない？」

「ああ・・・まさか、俺たちの知ってるストーリーから外れた展開がおきるなんてな」

「そこで提案なんだけど・・・私達、もっと物語に介入するべきだと思っの」

「・・・と言っの？」

「話をごちゃごちゃにかき乱すって意味じゃなくて、私達の知ってるストーリーどおりに事が運ぶようにつて意味で」

「・・・そうだな。今回の事件みたいに、俺たちの知ってる展開からそれる可能性も十分にあるしな」

「うん。それに、もしそうなって、本来傷つかないはずの人が傷ついたりしたらやだもん」

「その通りだ・・・おっと」

フツ

突如、部屋の明かりが消える。

俺と梓は揃って携帯を開いて明かりを確保する。

「・・・どうやら、あの二人の追いかけてはちゃんと行われてるようだな」

「そりゃそうでしょ、あの二人だし」

「そうだな」

御坂と上条さんの追いかけてここを想像して、俺と梓は息を潜めてクスクス笑う。

「さあて、携帯の電池がもったいないし、ちょっと早いけど寝るか」

「そうだね。じゃあ、お休みお兄ちゃん」

「ああ、お休み」

俺は、朝方まで続くであろう御坂と上条さんの追いかけてることを想像しながら目を閉じた。

第8話 脱ぎ女先生

「おーっす初春」

「やつほー」

「明俊さん、梓さん、こんにちは」

7月20日。俺と梓、それに初春は佐天からのメールで広場に集まっていた。

「それにしても佐天さん、突然呼び出して一体どうしたんでしょうか？メールには『見せたいものがある』とありますけど・・・」

「・・・さあな？通知表かな？」

「お兄ちゃん、それは無いと思うよ・・・」

「だよな・・・おっ、スタイルだ」

「そういえば、このシーンに載ってたんだっけ・・・じゃなくて！」

「んー、遅いですね、佐天さん・・・」

俺が、「そうだな」と言おうとしたとき、周りを歩いている男性の視線が初春に集中する。

俺もそれにつられて後ろを振り向こうとする、が・・・

「お兄ちゃんは見ちゃダメー!!」

と梓が叫びながら、手を伸ばして俺の顔を前に向けたまま固定する。

「あ、梓さん止めなくても良かったのに。せっかく明俊さんにも見せようとしたのに・・・」

「見せなくていいです!!」

なにやら不意打ち的に現れた佐天が驚愕の発言をしてくれたが、梓と初春がそろって叫んで阻止する。

何がおこったのかは言うまでもないが、佐天が初春の制服のスカートをめくったのだ。

「あれ？夏休み入ったのに何で制服？」

佐天がもつともな質問をする。

「夏休み中も風紀委員の仕事はあるんですっ」

初春はいまだ顔を赤らめながら答える。

「うわ、大変だなー。そういえば、体調は？」

「まだ本調子ではないんですけど、仕事がたまってるんで・・・で、見せたいもの」ってなんですか？」

「フッフッフ、よくぞ聞いてくれたわね」

自慢げにそう言う佐天。

「刮目かつめくしなさいっ！ ついにみつげちゃったのよ！あの噂のアイテムッ！ ジャジャーン！！」

と言って佐天が仰々しく取り出したのは、「i なんとか」という名称で親しまれている音楽プレーヤーである。

「……？音楽プレーヤー……ですよね？」

初春の当然の質問にも佐天は、

「中身が問題なのよ中身が。なんとこの中には……まっ、茶店サチンにでも入ってから教えてあげよう」

「もったいぶるなあ……」

佐天が茶店に行く、というギャグを披露して歩き出す。

もちろん、俺と梓はあのプレーヤーの中身が何なのか知っている。

その中身こそ、今ネット上で出まわっている幻想御手レベルアップだ。

使用者のレベルを一時的に引き上げる代物だが、使用者はその後昏睡状態に陥ってしまうというものだ。

そして、俺たちの知っている通りならこの後佐天はレベルアップレベルアップを使い、昏睡状態に陥ってしまうだろう。

しかし、レベルアップを使ったときの彼女の心境を思うと、俺たちに使用を止めることは出来ない。

これだけは、原作通り初春と佐天の涙ものイベントに任せるほか無い。

俺がそんなことを思っているうちに俺たちはファミレスの前に到着、佐天が窓に張り付くという奇怪な行動に出ていた。

その窓の向こうでは、御坂と白井がこのレベルアップ事件の首謀者、きやまはるみ木山春生と話していた。

「へー、脳の学者さんなんですかー」

俺たちは結局御坂たちと一緒に、お茶会兼木山先生に相談会に参加している。

「でも、なぜそのような方とお茶を？白井さんの脳に何か問題か？」

「ブツ」

「レベルアップの件で相談してましたの。それと明俊さん、なに

を笑っておりますの？」

「いやあ、いくら原作で展開を分かっているとしても初春の毒舌っぷりには吹かざるを得ませんよ。」

「レベルアップですか？それなら私」

「そう言ってポケットにごそごそと手を突っ込む佐天。だが・・・」

「レベルアップ所有者を搜索して保護することになると思われますの」

その白井の言葉に動きを止める佐天。

「なぜですか？」

「まだ調査中なのではっきりした事は言えませんが、使用者に副作用の出る可能性がある事、そして急激に力をつけた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されているからですわ」

「はー・・・？　どうかしました、佐天さん？」

「え？　やつ、別に・・・」

「初春に声をかけられて、慌てて音楽プレイヤーをしまう佐天。だが・・・」

「バシヤ！」

手を引っ込めるとき、勢いあまって木山先生のコーヒーを引っ掛けてしまう。

「わー！！ す、すみません！」

謝る佐天。

・・・ん？この後確か・・・

「いや、気にしなくていい。」

このセリフ・・・

「かかったのはストッキングだけだから、脱いでしまえば・・・」
と言いながら・・・

「お、お兄ちゃん！！」

「は、はいいい！！」

俺は梓の声を聞いて慌てて視線を逸らす。

ちょっと見たかったような気も・・・しないでもない。

「だーかーらー！！人前で脱いじゃダメと言ってますでしょーが！！」

大声を出して注意する白井。

いや、お前が言ってもあんまり説得力無いと思うぞ？

「しかし、起伏に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは・
・・」

木山先生、その身体で「起伏が乏しい」とは、少なくとも結構多くの日本女性を敵にまわしてますよ？

「趣味嗜好は人それぞれですよっ！それに、殿方でなくても歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ！」

そりゃ完全にお前のことだぞ、白井。

「女の人が公の場でパンツ見えるような事しちやダメですよっ！」

これを言ったのは佐天。しかし、君もいつも初春のスカートめくってるぞ？

一通り心の中でツッコミを終えた俺が御坂たちを見ると、彼女たちも同じ事を思っていたのか完全に苦笑だった。

「白井さんたちはこれからどうするの？」

梓がそう尋ねる。

ちなみに木山先生はとつくにお帰りになり、御坂は原作通り上条さん電波を受信して追いかけて開始。

佐天も初春に、

「見せたい物って何ですか？」

と聞かれて慌てて退散。

結局、俺と梓、白井、初春の4人になってしまったわけだ。

「そうですね・・・とりあえず、初春は支部に戻ってレベルアップの情報収集と、お二人の一日の事件に関する事情聴取をお願いします。お二人とも、お時間の方は大丈夫でして？」

「ああ、別に構わないけど」

「ではお願いいたしますの」

「白井さんは？」

「わたくしは・・・緊急事態ですから、少々強引な手段をとらせてもらいますの」

そう言ってどこかにテレポートする白井。

「では二人とも、行きましょう」

初春について歩き出す俺と梓。

「事情聴取ですが、そんなに時間はかからないと思います。やること
いっても形式的にやるだけです」

「そんなに良いの？」

「はい。それに二人には、別件で相談もありますし」

「相談？」

「はい、相談です。まあそれは、支部に着いてからというところで」

「はい、これで事情聴取は以上です」

ここは風紀委員第一七七支部のロックされた部屋の中。

俺と梓は一昨日のグラビトン事件の事情聴取・・・と、初春からの相談とやらでここに来ている。

「お疲れさん。・・・で、相談っていうのは？」

俺がそう尋ねると、初春は姿勢を正してこちらをむく。

どうやら真面目な相談らしいので、俺たちも姿勢を正して初春の方を見る。

「相談というよりお願いなのですが・・・お二人とも、風紀委員に入っていただけませんか？」

「「え？」」

突然の申し出にハモって声を出す俺たち。

「いきなりなのは承知でのお願いです。と言うのも、最近レベルアップの件も関係しているのか事件が多発しています・・・風紀委員も人手不足になっちゃってるんです」

「それで、私たちを？」

「はい。それに、レベル5のお二人が風紀委員になつたと世間に知ればそれだけで抑止力になると思っただんです。あ、二人を犯罪防止の道具にしようとしてる訳じゃありませんよ？」

「初春がそんなこと考えちゃいないってのは良く分かってるさ」

「でも初春さん、確か風紀委員になるのには適正試験と4ヶ月の研

修があるとかないとか、だったよね？それじゃ、私たちが協力できるようになるには今から結構時間がかかるけど・・・」

「そこもちゃんと考慮に入れてお二人には相談しています」

「と言いつと？」

「私と固法先輩このりで上層部に掛け合ってきました。お二人だけ特別に非常員として試験と研修をパス、ということになりました。今この場で承諾いただければ、数枚の書類に必要事項を記入していただくだけでOKです」

「・・・ちよつと、二人で相談させてもらえるかな？」

「はい、どうぞ」

そう言つと初春はいったん奥へと消える。

それを確認した俺たちは小声で会議を始める。

「・・・さて妹よ、どうするか」

「私的には引き受けても良いと思う」

「俺も引き受けて良いと思う。何か行動をおこすにも、ここなら都合が良いだろうし」

「じゃあ決まりね。初春さん」

「お決まりになりましたか？」

「ああ、引き受けようと思う。俺たちとしても、自分の能力が平和に役立つならこれほど嬉しいことはないしな」

「そうですね。ありがとうございます」

そう言って頭を下げる初春。

その後、風紀委員の施設に入るために必要な、指紋・静脈・指先の微振動パターン、の3つを登録した俺たちは風紀委員第一七七支部を後にした。

第9話 初めてのお仕事

七月二十一日。

晴れて（努力した訳ではないが）風紀委員になり、今日がその仕事始めだ。

入室に必要なセキュリティ解除を行い、中へと入る。

「おはようございます」

「おはようございます」

変に間延びした俺の挨拶と、きちんと整った梓の挨拶が八毛る。

「あ、来ましたよ白井さん。噂の渦中の二人が」

「・・・？何だそりゃ」

何やら、俺たちのあずかり知らぬ所で俺たちの噂が広まっているようだ。

何だ？「双子のレベル5が誕生」ってか？

それならとっくに事実として認知されているのだが・・・

「あら、お二人はまだご存知無いですの？ご自身の事ですのに」

「ああ、全然知らない」

「私たち、朝起きて急いでここに来たから、テレビもネットもチェックしてないの」

初日から仕事に遅れる訳にはいけないと思い、来る途中も走ってきたからな。

「お二人の序列が正式に発表されましたの」

「マジ!?!」

「ホント!?!」

俺と梓が声をあげると、初春がノートパソコンをカタカタといじり、「画面を俺たちに見せた。

食いつく俺と梓。

そこには、「先日、レベル5の認定を受けた二名の序列を、工藤明俊については『第二位』、工藤梓については『第七位』とする。」とあった。

「お、お兄ちゃん、第二位だってよ……」

「梓だって第七位じゃないか。十分すごいと思うぞ」

「そ、そうかな?それにしても、さすが私の双子の兄!第二位!」

「や、やめるよ。何か恥ずかしいぞ……」

・・・それにしても、第二位とは我ながら驚いた。

まあ、第一位の一方通行アクセラレータの能力は「ベクトル操作」だから、あれには反物質も敵わないだろうとは思っていたけど、まさかその下とはな。

「お二人とも、改めておめでとうございます、ですの」

「あ、ありがとう」

「世間ではさっそく、二人の通り名が広まってみたいですよ」

パソコンをカタカタしながら、初春が言う。

「どんな通り名？」

梓が興味津々に聞く。

「えーつとですね・・・明俊さんが完全消去で、梓さんがアブソリュートデリート、フリースマスターですね」

「漢字で書いたら梓の方がかっこいいな」

「英語はお兄ちゃんだけどね」

「どっちもかっこいいですよ。・・・あ、白井さん、ダウンロード
終わりましたよ」

そう言って初春が画面を切り替えると、そこには「ダウンロード
完了」の文字が。

「レベルアップか？」

「そうですわ」

「これを聴くだけでレベルアップって、そんなことあるんですかね・・・？」

「使ってみればすぐに答えが出ますわよ」

「えー、でも副作用とかあるんですよ。そんな危ないもの・・・はっ、これで白井さん以上の能力者になったら、今までの仕返しにあんなことやこんなことを・・・」

「・・・思考がただ漏れですわよ」

「冗談ですよ？・・・ちなみに、サイトを封鎖するまでのダウンロード数は5000件を超えていますね」

「げ」

予想以上の数に思わず声をあげる白井。

「ダウンロードできなくなってからは、金銭で売買する人もいますみたいですね」

「その取り引き場所は分かりますの？」

「ちょっと待ってください」

そう言って、印刷されて出てきた紙束を渡す初春。

「って、こんなにありますの!?!?・・・仕方ない、面倒ですが一つずつ回っていきますか」

「あ、じゃあ俺たちも一緒に行つて良いかな?」

「お二人が・・・ですか?」

白井が不思議そうに俺たちを見る。

「うん、仕事初日だから、先輩である白井さんの活躍を拝見しよう、ってお兄ちゃんと相談してて。それに、レベルアップで普段より強くなった人がたくさんいたら、流石の白井さんでも危ないかな?と思つて」

「・・・そう言われたら無下に断れませんか。分かりましたわ、3人で行きましょう。初春は木山先生の見解をお願いしますの」

「あ、ハイ。皆さん、気をつけてくださいね」

「ここですわね、取り引き場所は」

俺たちが到着したのは、取り壊し予定の廃ビルだ。

「まさに闇取り引きって感じの場所ね・・・あっ、白井さん、あれ
！！」

梓が指差す先には、不良に髪の毛を掴まれている佐天の姿があった。

「ひどいことを・・・お二人は、ここで待機していて下さいな。わたくしがあのクズどもを黙らせてきますわ」

「白井・・・相手はレベルアップしていて危険だ。くれぐれも油断するなよ」

「分かっていますわ。それでは」

そう言うと、白井はテレポートする。

俺たちは言われたとおり、ここで様子見に徹する。

風に乗って、声が聞こえてくる。

「何の力もねえ非力なヤツにゴチャゴチャ指図する権利はねーんだ
よ」

「貰い物の力を自分の実力と勘違いしているあなた方に、彼女を笑う資格はありませんわ」

「ああ？誰だお前」

「風紀委員ですの。暴行傷害の現行犯であなた方を拘束します」

「し、白井さん・・・」

しかし不良たちは、子どもが一人増えただけだと思っているのか態度を変えない。

「ハッ、何かと思えばガキが一匹増えただけか」

「・・・大人しく連行されることをおすすめますが」

白井の警告にも不良は恐れず、そのうちの、がたいの大きい一人が白井の肩を掴む。

しかし白井も動じることなく、近づいてきた男に触れ、そして・・・

ドシャ！

能力で男を地面に叩き伏せる。

「まったく・・・あなた方のようなクズは抵抗してくださった方が、思いきりブチのめせてよいですね」

すると別の男が、

「言ってくれるな。どうやら能力者のようだが、ガキのくせにその高慢ちきな態度がムカつくぜ」

と言いながら、能力で自分の後ろにある鉄柱を浮かせると、白井の方に飛ばしてきた。

が、白井は動揺することなく、自分に鉄柱が当たる直前にレポートすると、男の前に姿を現し、

「あなた方のほうがよっぽどムカつきますわ」

と言って、持っていた学生カバンで男の顔を思いきり殴った。

殴られた男は地面を転がり、気を失う。

「さすが白井。強いな」

「うん、なによりすごい落ち着いてる」

俺たちはただただ感嘆するばかりだ。

「・・・おもしれー能力だな。レポートってヤツか、初めて見たぜ」

最後に残された、佐天の髪の毛を掴んでいた男が感想をもらす。

「他人事のようにおっしやいますけど、次はあなたの番ですよ？」

だが、その男は眼前で白井の強さを目の当たりにしながらも慌てる様子はない。

そして、走りながら白井に襲い掛かった。

白井は今まで同様、男の手が触れる寸前にレポートし男の背後を取った……かに見えた。

「まあ結局、返り討ちですけど……!? き、消えた!？」

背後を取ったかに見えたが、そこに男の姿は無かった。

「白井さんっ！後ろー!!！」

佐天の叫びに、とっさにふりかえる白井。

だが

ドガッ!!!

男の蹴りが炸裂し、白井が地面に倒れる。

……倒れる？

次の瞬間、俺と梓は物陰から飛び出し走る。

本来のストーリーなら、ここで白井は倒れたりしない。

だが、今日の前の白井は蹴りが相当強烈だったのと、蹴られた後コンクリートの壁にぶつかったせいで完全にひざを潰してしまっている。

このままでは白井が危ない。

「動くな!!」

「ああ？なんだお前らは」

「白井さんと同じく風紀委員……ですのっ！」

梓が白井のまねをしながら右腕につけた風紀委員の腕章を見せる。

「白井をそんな目にあわせておいて、ただで済むと思っなよ」

「ずいぶん威勢がいい風紀委員どもだ。だがなあ、お前らも見てた
だろ？この風紀委員の女が無様に蹴られるさまを」

「それは、あんたの能力がたまたま白井さんの能力と相性が良かった
ただじゃない」

「そう、テメーの能力は光を曲げて、別の場所に像を結ばせる能力。
だから、白井がテメーの後ろに飛んだと思っても実際は幻影と本体
の間に飛んだってことだ」

「・・・良くあの1回で気付けたな。だがなあ、それでも接近戦では俺の有利に変わりはないと思うぜえ？」

そう言いながら俺たちの方に近づいてくる男。

確かに、幻影を見せられる以上、接近戦では分が悪い。

さらに言えば、俺の能力は風紀委員という立場上、派手に使えない。

一歩間違えば相手を対消滅させてしまうからだ。

だが・・・

「梓、ここは任せた！」

「オッケー！」

次の瞬間、周囲の足元が凍りついた。

「なっ！？足が動かねえ！？」

男の足は、足首まで完全に氷の中だ。靴を脱いで脱出、ということも出来ない。

「いくらあんたが幻影を見せようとも、辺り一面を氷付けにしちゃ

えは意味無いでしょ？」

そう、ヤツの能力は確かに接近戦では威力を発揮するが、広範囲に影響を及ぼす能力の前ではほぼ無力だ。

「くそっ！」

男は苦し紛れに、梓に向かって持っていたナイフを投げつける。

「残念でした」

ナイフは梓に届く前に、俺が梓の正面に展開した反物質バリアに当たって跡形もなく消滅する。

「な、ナイフが消えた・・・それにこの氷・・・ま、まさか、今朝の序列が発表された双子のレベル5ってのは・・・」

「そう、このお二人のことですわ」

そう言って、復活していた白井が相手の頭上にテレポートし、そのまま落下して強烈な一撃を男の頭に与える。

男はなすすべなく気絶した。

「お二人には、迷惑をかけてしまいましたわ」

「気にするなつて。たまたま、白井の相性があの男と悪かったつてだけだろ？」

「そつだよ白井さん。それに、困つたときはお互い様でしょ？」

「そう言つていただけると助かりますわ。本当に、ありがとうございます。」「

深々と頭を下げる白井。

「……そういえば、佐天さんは？」

「……あれ？」

「……いないね」

白井があたりを見渡す。

だが、俺と梓は知っている。

今頃佐天は、能力者と無能力者（レベル0）の違いを再認識し、レベルアップに手を伸ばそうとしているのだろつ。

何とかしたかったが、結局なるようにしかなかった、ということか。

梓は、俺たち二人の間に流れる重苦しい空気を自ら吹き飛ばすように、

「さ、白井さん。支部に戻って怪我の治療しましょう。傷が残ったらそのきれいな肌が台無しですよ?」

と言って、白井の背中を押す。

レベルアップ事件の解決まで、あと3日……

第9話 初めてのお仕事（後書き）

第9話にきて、ようやく二人の通り名が登場しましたが・・・ぶつちやけると、結構苦慮しました。

特に梓は、真つ先に「絶対零度」アフソリユートゼロが思いついたのですが、すでに他者様の小説で何度か見かけていたので、あえて違う名前にするのがなかなか大変でした。

さて、かなりゆっくりなストーリー展開ですが、それでも読んでいただけるとこれ幸いです。

第10話 レベル0

七月二十四日。

俺たちがこの世界に来てからの、最初の山場が今日だ。

レベルアップ事件の首謀者、木山春生が動く。

俺と梓もこの戦いに参加すべく、風紀委員第一七七支部にやって来た……のだが。

俺は部屋の前で待ちぼうけである。

理由は簡単、今中に入ると、もれなく白井の裸とご対面するからだ。

何故白井が服を脱いでいるのかというと、ここ最近のレベルアップ拡散で能力を悪用する連中が後を絶たず、流石の白井も無傷という訳にはいかなかったからだ。

現在、その傷の治療中というわけだ。

男とすれば、すぐにも中に突撃して挿んでみたいところだが、そんなことをした日には生きて帰れない。

と言うわけで、外で待機中である。

と、そこへ・・・

「あ、あんた！！」

御坂がやってきた。

・・・ってか、いつの間にか上条さんと同じように「あんた」って呼ばれてるし。

俺、何かしたっけ？

「よお御坂、おはよう」

「ええ、おはよう・・・じゃなくて、あんた！なに私を差し置いて第二位なんかになってんのよ！！」

・・・そこか。

「なっちまったんだからしょうがねえだろ」

「何かその言い方ムカつくわね・・・後で私と勝負よ！！」

「へいへい」

抵抗しても押し問答だと思った俺は、この話題を適当に流す。

「ところで、何で中に入らないの？」

「入ると殺されるからだ」

俺は事実を言うが、当然ながら御坂には意味不明である。

御坂は頭に疑問符を浮かべながら、セキュリティを解除する装置に手をかざす。

御坂は風紀委員ではないから、本来は中には入れない。

だが、御坂の能力はただ電気を操るだけではなく、電子機器も操作することが出来る。

その応用力の高さが、御坂の第三位たるゆえんだ。

今は俺が上になったから第四位だが。

・・・と、そんなことを考えてる間に、セキュリティを解除しちまったようだ。

「おい御坂、今は中に入らない方が・・・」

しかし、時すでに遅く・・・

「おーっす。何か私に手伝えること……」

ゴンッ

御坂は、突如上から落ちてきた初春と頭をぶつけ、初春共々床に倒れる。

「……ごきげんようお姉さま。能力でセキュリティ解除するの、よして下さいな？」

「あ、お兄ちゃんもう入ってもいいよー」

「……ああ」

「明俊さん、さっき初春に言っていたこと、何なんですか？」

「・・・ああ、ちよつとな」

今初春はここにはいない。

初春は、木山先生に共感性のことを電話で伝えながら、木山先生の研究所に向かっている最中だ。

俺が初春に言ったこととは、「もし佐天から初春に電話がかかってきたら、このパソコンからもその電話に参加出来るように会話を転送してくれ」というものだった。

「お兄ちゃん」

俺の意図に唯一気付いている梓が声をかけてくる。

「私たちの声も、佐天さんに届くかな・・・？」

「・・・届くさ。まだ会って日は浅いけど、必ず届く」

と、その時・・・

ピピピピ

「初春からの、転送されてきた電話ですわ!」

「俺がとる」

そう言っつてパソコンの前に座ると、ヘッドセットをつけて音をスピーカーにする。

ここにいる全員に会話が聞こえるようにするための。

『アケミが急に・・・倒れちゃったの』

『!?!?!』

『レベルアップパーを使っつたら元に戻らないなんてあたし知らなくて・・・なんでこんなことに・・・』

『おっ・・・落ち着いて、ゆっくり最初から・・・』

『レベルアップパーをたまたま手に入れたんだけど・・・所有者を捕まえるつて言っつたからどうしようつて・・・』

「.....」

俺たちは沈黙を保つたままだ。

『それで、アケミが能力の補習があるつて言っつてて・・・うづん違

う、本当は一人で使うのが怖かっただけ。あたしがみんなを……」

『と、とにかく今何処に……』

『あたし、何の力も無い自分がいやで……でも憧れは捨てられなくて……』

二人の会話を聞いている俺たちの間に、沈痛な空気が流れる。

ここにいる4人が全員レベル4以上というのはなんたる皮肉か。

『レベル0って……欠陥品なのかな?』

『何を……』

『それがズルして力を手にしようとしたから罰があたったのかな……
危ないものに手を出して周りを巻き込んで……あたしっ』

「それは違う佐天!!」

「お、お兄ちゃん!?!」

俺は我慢できなくなって叫ぶ。

『明俊……さん?』

「佐天は欠陥品なんかじゃねえ!!」

『でも、あたしはレベル0で……』

「いいか佐天、落ち着いて聞いてくれ。人を測るのはレベルなんかじゃない。そんなもので人の良し悪しを決められてたまるか。現に佐天はその笑顔で、俺たちも笑顔にしてくれてるじゃねえか。それで十分なんだ。」

『明俊さん……』

「それに佐天には、レベルの上がるチャンスがあると思う」

『え？どういう……』

「レベルアップパーを使ったとき、わずかだけど能力を使えただろ？」

『どうして明俊さんがそれを……』

俺は無視して佐天に語りかける。

「確かにその時能力が使えたのはレベルアップパーのせいだ。でもな、もし佐天が真の意味でレベル0なら、たとえレベルアップパーを使つたとしても能力は使えなかつたと思う。そうだろ？」

『……あたしも、能力を使える？』

「希望はある。0に何をかけても0だけど、0・1に2をかければ0・2になる。佐天の力が0・1か0・01かは俺にも分からないけど、0でない以上必ず希望は存在するさ」

「それに、私たちが協力するもん、絶対使えるようになるよ。ね、お兄ちゃん？」

「梓の言うとおりだ。俺たちが全力でバックアップする。もし上手く説明できないことがあれば御坂に相談するさ。御坂は、レベル1からレベル5になった本人だし、何より佐天の友達だ。絶対協力してくれるさ」

「ええ、まかせなさい！」

御坂がグツ、と親指を立てる。

「だから佐天、笑顔で帰って来い。その笑顔をまた俺たちに見せてくれ。そして、俺たちを笑顔にしてくれ。約束だ」

『グスツ・・・はい、約束します！』

「あ、そうそう、帰ってきたらちゃんとし初春のスカートめくるんだぞ」

『あ、明俊さん何を言ってるんですか！？』

「いやー、やっぱ佐天といったらめくらないとな」

『フフ、わかりました。この佐天涙子に任せて下さい』

『佐天さんも、なに悪乗りしてるんですか！？』

「冗談だ。じゃあ初春、出番を奪って悪かったな。佐天を任せた」

俺はそう言っていると電話を切る。そして、御坂たちの方を振り向く。

「御坂と白井は佐天が運ばれるであろう病院に行つて来てくれ。こ

「この留守は俺たちに任せてくれ」

「ですが……」

「黒子、行きましよ」

「お姉さま……」

「ここはこの二人に任せて、佐天さんの顔を見に行きましよう。そして、佐天さんをこんな目に合わせたやつを絶対に叩き潰すって心に誓ってきましよ」

「……分かりましたわ。ではお二人とも、留守を任せますわよ？」

「ああ、俺たちの分もしっかりと心に誓ってきてくれ」

御坂たちが出て行ってしばらくたつ。

俺と梓はこのあと始まる木山先生との戦いに備えて準備をしていた。

「ねえお兄ちゃん、ここ最近なんか棒みたいなのいじってたけど、あれ何？」

「ん？ああ、これが」

そう言っつて、俺はバッグから持ち手が黒く、そこから先が透明な素材で出来ている棒を取り出す。

「これはな、能力が使いづらい俺専用の武器だ」

「武器の使用は始末書だったよね・・・？」

「能力の使い方間違っつて人間消しちゃうくらいなら、始末書の方がマシだね」

「まあ、そうだけど・・・で、どんな武器なの？」

「スタンガンとフラッシュライトが主な装備。他にも積んでみようと思ってるけど、今はこれだけ」

「へえ、結構便利な装備だね」

「バッテリーの関係で、今のところどっちも一回ずつくらいしか使えないんだけどな。ま、無いよりマシさ」

と言って、俺がスタンロッド（と呼ぶことにしよう）を腰のベルトに取り付けた直後、部屋のドアが開いた。

「留守中、何かありました！？」

「白井に御坂か。特に何も無かったけど」

「二人とも、なんか真剣な表情してるけど・・・何か手がかりでもあった？」

「あの木山先生がこのレベルアップ事件の犯人だったのよ！」

「それだけではありませんわ。恐らくですが、木山は初春を人質にとっていますの」

「それで、木山先生は今どこに？」

「今警備員に連絡をとっていますわ・・・どうやら、木山の研究所にはいないようですわ」

それを聞いて、俺と梓はうなづく。と風紀委員の腕章を付け、部屋の入り口に向かう。

「ちょっと二人とも、どこに行くつもりですか!？」

「木山先生を止めて、初春を助けに行く」

「白井さんはここから、私たちに情報をまわして」

「ダメですわ!いくらお二人がレベル5とはいえまだ新人も同然ですのに、そんなことさせられませんわ!」

「相手も高位能力者ならまだしも、ただの一般人だぜ?なんとかしてくるぞ」

まあ実際は、普通に能力を使ってくるんだがな。しかも複数。

「そういう問題では・・・」

それでも止めようと、白井が何か言いかけたその時、

「二人とも、私も行くわ」

「お姉さままで何を・・・!？」

「何千人もの昏睡した能力者の命を握られてるのよ?そうそう上手くないかもしれない。それに・・・」

そこで言葉を切ると、御坂は俺たちの方を見つめる。

「何か嫌な予感がする……でしょ？」

「御坂にはバレてたか」

予感も何も、それは当たっているのだが。

「ならわたくしも!!」

「アンタも来ちゃったら、誰が私たちに情報をまわすのよ？」

「そ、それは……」

白井が言いよどむ。

と、そこへ急にセキュリティドアを解除する音がする。

俺たちが一斉に振り向くとそこには……

「じゃあその仕事、私に任せてくれない？」

「固法先輩!!」

「あれ?でも固法先輩、今日は休むって……」

梓が首をひねりながら聞く。

「何か大変なことになってるのに、私だけゆっくりなんて出来ない

わ。だからあなたは、一緒に行ってきなさい」

「固法先輩・・・ありがとうございます！」

「よし、じゃあ行きますか！！」

そして俺たちは、一斉に駆け出した。

第11話 木山春生

ドオン！！

「な、なんだあ？」

タクシートの運転手がとまどいの声をあげる。

俺たちは今、タクシーで高速道路の下を走っている。

その高速道路で大きな爆発がおこったのだ。

「あそこまで早く行って！」

「む、無茶言わないで下さいよ、早く引き返しましょう！」

「じゃあおっさんは引き返してくれ！ここは危険だからな！」

「あ、お釣りはいらさないから！」

そう言ってタクシーを降り、走り出す俺たち4人。

そこに、固法先輩から電話が入る。

「あ、固法先輩ですの！？ 一体何がおきていますの！？」

『ちよーつと待っててね・・・情報が錯綜してて・・・どうやら木山春生が能力を使って警備員と交戦してるみたい』

「え？じゃあ、彼女は能力者だったんですか？」

『うーん、それが・・・木山春生が能力開発を受けたという記録は無いの』

御坂の質問に固法先輩が答える。

『でも、送られてくる映像を見る限りこれは明らかに能力・・・それも、複数の能力を使って』

「ありえませんが！能力は一人に一つだけ、例外はありませんわ！」

そう、レベルがいくつであろうと能力は一人につき一つ、それはこの世界では周知の事実だし、普遍の事実である。

「・・・たぶん、レベルアップのせいだろうな」

俺が言葉を引き継ぐ。

「木山先生はいまや、何千の脳を統べる人間。それを操ってるとしたら可能かもね」

梓も補足する。

「では、もしそのお話が正しいなら、今の木山は実現不可能と言われる幻の存在・・・」

デュアルスキル
「多重能力者……」

御坂が一つの結論に達したちょうどそのとき、俺たちは高速に備え付けられている非常階段を上りきり、その惨状を目の当たりにする。

「警備員が……全滅？」

その時俺は、原作通り木山の車の中で気絶している初春を見つけ、かけ出す。

「初春！しっかりしろ！」

「安心していい。戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状は無い」

俺たちが声のする方向を一斉に振り向くと……

「御坂美琴に工藤明俊、それに工藤梓……現在学園都市に9人い

るレベル5が3人、か。」

そう、一連の事件の首謀者・・・

「だが、さすがの君たちも私のような相手と戦ったことはあるまい」

木山春生が・・・

「君たちに一万の脳を統べる私を・・・止められるかな？」

立っていた・・・

「驚いたわ、本当に能力を使えるのね。しかも・・・多重能力者！」
デュアルスキル

御坂は木山先生の攻撃をかわしながら言う。

「その呼称は適切ではない。私の能力は、理論上不可能とされるアレとは方式が違う。言うなれば、多才能力者だ」
マルチスキル

木山先生もそう返答しながら、地面に流れ出ていた油に能力で火をつける。

たちまち火柱があがり俺たちに迫るが、梓の作り出した氷の壁に防がれる。

「氷で炎が防がれた・・・？いや、ただの氷じゃないな。まさか、固体窒素か？」

「あら、さすがは科学者さん、ばれちゃったか」

「・・・窒素の融点は-210。空气中に窒素が多量に含まれているとはいえ、そんなものをあつまりと作り出すとは・・・ほぼ絶対零度とは、さすがレベル5」

木山先生が梓の能力に感心していると、隙をつこうとしたのか、御坂が電撃の槍を放つ。

しかし、木山先生の周囲に張られたバリアのようなもので防がれ

てしまう。

と、次の瞬間、

バキバキバキ！！

突如、御坂と梓、それに木山先生の立っていた部分が崩壊を始め、下へと落ちていく。

「白井、梓を！！」

「了解ですの！」

御坂は電気で磁力を生み出し、落下するコンクリートに入ばりつくことができるが、梓にはそんな芸当は不可能である。

「きゃあー！！」

悲鳴をあげて体勢を崩し、落ちていく梓。

間一髪、白井のテレポートが間に合い梓の手を掴む。

ヒュン！

そこから再びテレポートして、俺のところに戻ってきた。

「ハア・・・ハア・・・白井さん、ありがとう」

「構いませんことよ。それより、お姉さまは？」

「大丈夫、下で木山先生と交戦中だ」

「で、これからどうする？」

「白井と梓は御坂に加担してくれ。俺はここで初春をみてる」

「分かりましたですの」

「お兄ちゃん・・・」

梓が心配そうな顔で俺を見る。

「俺なら大丈夫だ。早く終わらせて、みんなでパーっとやるっぜ」

「・・・うん、そうだね！」

「では梓さん、行きますわよ？」

そう言って下にテレポートしていった。

「さて、初春を救出しますか」

そう呟いて初春の乗っている車まで走る。

途中、ズガンだのバリンだの音がしてくるところから察するに、御坂や梓は上手く木山先生と立ち回ってるみたいだ。

そして車まで到着すると、俺は手を当ててドアを消滅させた。

「おい初春？しっかりしろ」

「う、うーん・・・あれ、明俊さん」

「どうやら、外傷は無さそうだな」

「そうみたいです・・・って、木山さんは!？」

思い出したかのように初春が声をあげる。

「ああ、木山先生なら下で御坂や梓たちと交戦中だ」

「皆さん、来てくれたんですか!？」

「当然だろう?俺たちの大切な友人が危険にさらされたんだ、来ない訳が無い」

「・・・すみません、私が力不足だったばかりに、皆さんに迷惑をかけてしまって・・・」

「誰もそんなこと思っちゃいないさ。それより、木山先生から何か預かってるだろう?」

「え?ええ、これですけど・・・確か、レベルアップをアンインストールする治療用プログラムとか言っていましたけど・・・」

「そつだ。それを使って・・・」

ズガーーーーー!!!

突如、俺の声をさえぎるように閃光と音がはしる。

「い、今のは!?!」

「多分、御坂の電撃だろう。初春、様子を見に行くぞ」

「は、はい!?!」

そして俺と初春は、先ほど木山先生が破壊した高速の端から下を覗こう……としたその時。

キヤアアアアアアアアアアアアアア!!

「この世のものとは思えないような悲鳴が聞こえ、思わず耳をふさぐ。」

「この声……アレが出たか！」

「え？え？何ですか？」

「下を見れば分かる」

そおーつと下を覗く初春。

そこには……

「何ですか、あれ……」

「……幻想猛獣（AIMバースト）……」

「え？何か言いましたか？」

「いや何も……アレのことは、下にいる木山先生に直接聞いてみようじゃないか」

「そうですね」

そう言っつて、非常階段を下へと降りる俺と初春。

途中下を覗き見ると、御坂と梓がAIMバーストとやりあっているのが見えた。

「どうやら俺の知ってる通り、攻撃はほとんど意味を成していないようだ。」

「やはりアレを倒すには、初春の持っている治療用プログラムが必
要か。」

階段を下りると木山先生の姿はすぐに発見できた。だが・・・

「・・・あの子達を取り戻すことも、かいふく回復させることもかなわなくなっただか」

「あ、明俊さん、あれ！」

「・・・ああ！」

木山先生がちょうど、拳銃を自らの頭に向けているところだった。

「もう、おしまいだな」

「ここまで騒ぎを大きくしておいて、自分は途中で舞台からおりるのか？木山先生？」

俺の声に、木山先生がハツとして振り返る。

「君たち・・・」

「ここまで大きく打って出たのに、そんなにあっさり諦めちゃったら子ども達に泣かれるぞ？」

「ッ!?なぜ君がそれを!?!」

「……ちよつとな。それより、あのバケモノについてだが……」

「……虚数学区だ」

「虚数学区?あの都市伝説の、ですか?」

「巷の噂と実体はまったく違ったわけだがね。虚数学区とは、AIM拡散力場の集合体だったんだ」

木山先生が説明している間にも、御坂と梓の攻撃に加え、残っていた警備員が実弾射撃を行っていた。

その姿は、攻撃によるダメージを受けるたびに大きくなっていく。

「アレもおそらく、AIM拡散力場でできた……『AIMバースト』とでも呼んでおこうか。レベルアップのネットワークによって束ねられた一万人のAIM拡散力場が触媒になって生まれ、学園都市のAIM拡散力場を取り込んで成長しようとしているのだろう」

それまで、黙って木山先生の話聞きながらAIMバーストを見つめていた初春が、木山先生に質問する。

「どうすれば、あれを止めることができますか?」

「それを私に聞くのかい?今の私が何を言っても、君は信用できない……」

初春が、木山先生の言葉をさえぎるように顔を覗き込む。

そして、まだ中学1年らしいあどけない笑顔で言う。

「いいえ、木山先生は嘘はつきませんから」

その言葉に、木山先生は思わずジッと初春を見つめる。

「・・・本当に、根拠もなく人を信頼する人間が多くて困る。」

しかし、そういう木山先生の顔にも、どこか笑顔が浮かんでいた。

「預けたものは持っているかい？」

「・・・そうか、これを使えば！」

「試してみる価値はあるだろうな」

「よし、じゃあ初春、警備員のところに行ってそいつを学園都市中に流すぞ」

「はい！」

そして俺と初春は、再び非常階段を上へと走り出した。

第12話 くレベルアップ編最終章く

く梓sideく

「ホンっと、キリがないわね！」

敵の攻撃を、能力で作り出した砂鉄のムチでいなしながら御坂さんが叫ぶ。

「攻撃が効かない上に、ヤツの進行方向には原子力発電所・・・これ以上無い最悪の展開ね！」

「お兄ちゃんと初春さんが何とかしてくれるまで、私たちは足止めに徹しましょう！」

「何かアテでもあるの!？」

「さっき二人が木山先生と話してるのをちらっと見ました!多分、コイツの対処法を教えてもらったんでしょ!」

「じゃあそれまでの辛抱ね!」

「ええ!」

ただどその時、偶然私と御坂さんの攻撃が同時にAIMバーストに防がれた。

今まで私と御坂さんは、出来るだけ互いの攻撃が交互に当たるようにしてきた。

それで、極力相手に攻撃のスキを与えないようにしてきたのだ。

でも今、その連携が一瞬崩れた。

ヤツの頭上に光の弾が形成される。

「しまった!!」

私は急いで氷の槍を作り出すと、ヤツに向かって投げる。

しかし、槍がヤツに命中する直前、光の弾は発射された。

弾は私たちではなく、高速道路の方へ飛んでいく。

「……? 私たちじゃない?」

御坂さんは私たちが狙われると思っていたのだろう、そう疑問の声をあげる。

そう、その先には初春さんと、そして・・・

「お兄ちゃん!!」

〈明俊 side〉

俺と初春は、高速道路の非常階段を上へとかけ上がる。

「大丈夫か初春！もうちょっとだぞ！」

「は、はい！だ、大丈夫、です！」

息を切らしてそう答える初春。

そして俺たちがようやく階段の最上部にたどり着くかという、まさにその時。

『お兄ちゃん!!』

近くにいないはずの梓の声が聞こえた・・・ような気がした。

俺が慌ててAIMバーストの方を見やると、丸い光の弾が俺たちの方へ飛んできていた。

「初春、伏せろ!!」

俺はそう叫びながら急いで反物質の壁を生成する。

ドオン……

一瞬の出来事だったため、生成できた壁の面積が小さく、壁の影響を受けなかった弾が階段を破壊して爆音を響かせる。

「くそ油断してた！初春、大丈夫か！？」

「は、はい、何とか・・・」

初春は、大きな怪我こそ負ってないようだが、防ぎきれなかった爆発で飛んできた破片に当たったのか、顔に無数の傷が出来ていた。

「あの野郎、初春の顔に傷なんかつけやがって・・・！行くぞ初春、もうちよいだ！」

「はい！」

俺たちは立ち上がると、梓たちが戦っているであろう方向に向かって手を振ると再び走り出し、なんとか警備員の車までたどり着いた。

「初春はここから、学園都市中に治療用プログラムを流してくれ！俺は外でこの車を守る！」

「分かりました！」

そう言っつてうなずくと、初春は車の中へと消える。

それを見届けると、俺はAIMバーストの方を向いて、

「さあ、どっからでも攻撃してこいよ！全部受け止めきってやるぜ
！」

（梓side）

「お兄ちゃん！！」

私が叫んだ数瞬後、高速の非常階段に光弾が炸裂する。

でも、光弾の大きさのわりに爆発が小さかったような気もする。

お兄ちゃんの防御が間に合ったのだろうか・・・？

私がヤツと戦うことも忘れて攻撃されたところを見つめていると、

立ち込める煙の中から手を振る人影が見えた。

「あれは……」

顔は見えなかった。でもあれは、間違いなくお兄ちゃんだろう。

「梓さん！」

声のする方向を振り返ると、今まで高速道路を支える柱の影に隠れていた白井さんがこちらにやってきた。

ちなみに白井さんが隠れていたのは、白井さんの能力がヤツとの戦いに不向きだと御坂さんが判断して、いざという時のために隠れてもらっていたのだ。

「一体どうしましたの？アレが攻撃したところをジッと見ていらっしやいましたが……」

「うん、ヤツが攻撃したところにお兄ちゃんと初春さんがいたみたい」

「本当ですよ！？」

そう言って、テレポートしてあそこに向かおうとした白井さんを慌てて止める。

「待って！さっき煙にまぎれて顔は見えなかったけど、こっちに向かって手を振る人影が見えたの。だから、多分二人とも大丈夫よ」

「ですが、一応……」

「私のお兄ちゃんなら大丈夫だって。だってレベル5で第二位だよ？そんな簡単にくたばったりしないよ。それに、私の自慢のお兄ちゃんだし」

「お二人は本当に強い絆で結ばれていますのね」

「白井さんと御坂さんも強い絆で結ばれてるじゃないですか。それと同じようなもんです。さ、白井さんは隠れてて。いつまでも、御坂さん一人に任せていられないしね」

「分かりましたの。では、お姉さまと梓さんに何かありましたら、すぐに飛んできますわ」

そう言って、白井さんはテレポートして再び離脱する。

「……さあバケモノ、お兄ちゃんを危険な目にあわせたこと、後悔させてやるわ!!」

私がそう言ったまさにその時、耳にアンインストールプログラムの音が響く。

「この音……初春さん、無事だったのね」

私が安堵したのもつかの間、ヤツから触手のようなものが伸び、御坂さんの足を掴む。

「御坂さん!!」

御坂さんは足を引っ張られ、完全に体勢を崩している。

私は両手に特大の氷の槍を作ると、思いっきり投げつける。

ザシュッ！！

2本ともヤツに命中した。

御坂さんもヤツに攻撃が通ることに気づき、触手を介してヤツに電撃を浴びせる。

ズーーーーーン！

黒焦げになり、地面に崩れ落ちるAIMバースト。

御坂さんは倒したと思ったのか、汗を拭って安堵の表情を浮かべている。

・・・が、

「気を抜くな！まだ終わってないっ！！」

いつの間にか御坂さんの近くにいた木山先生が叫ぶ。

直後、ヤツが暴れ始める。

「何でアレくらってまだ動けるのよ！？」

「アレに通常の生物の常識は通用しない。体表にいくらダメージを与えても本質には影響しないんだ」

「じゃあどうしろって言うのよ!?!」

「力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ。それさえ破壊できれば……」

「御坂さん、レールガンで!?!」

「そうね。梓さんと木山先生は下がってて」

「私は巻き込まれても構わない。アレを産み出した責任がある。私はどうなっても……」

「ここで木山先生が死んじゃったら、子ども達はどうするんですか?」

私は木山先生を諭す。

「君といい明俊君といい、どうして私のことを知っているのか……」

「まあ、ちょっとありまして」

「梓さんの言うとおりよ。仮に子ども達が回復しても、アンタがいなかったらその子たちが本当に救われたことにはならないわ。それとも、もう諦めるつもり?」

御坂さんもそう説得する。

「それに……アイツに巻き込まれるんじゃないわ、私が巻き込まれちゃうって言うてんのよ!?!」

そう言うつや否や、御坂さんの手から、今までのどの攻撃よりも強力な電撃が迸る（ほどばしる）。

「なっ!？」

木山先生が驚きの声をあげる。

「電撃は直撃していない、だが、強引にねじ込んだ電気抵抗の熱で体表が消し飛んでいく・・・！ 私と戦った時のあれは全力ではなかったのか!？」

「そうよ、あれが御坂さんの本気」

A I Mバーストが巨大な氷の塊を何個も作り出して、御坂さんめがけて飛ばすが砂鉄ですべて粉々に粉碎される。

「うわあゝ、こりゃ御坂さんに勝てんわー」

思わず声が出てしまうほど、御坂さんはA I Mバーストを圧倒していた。

そして、右手にコインを構え・・・

ガアアアアアアン！！

御坂さんの右手から放たれたレールガンは、見事核を撃ち抜いた。

これでAIMバーストが消える。

はずなのに・・・

「・・・嘘でしょ？」

AIMバーストは消えなかった。

それどころか、ヤツからは徐々に熱が発せられてきた。

「・・・っ！！御坂さん、下がって！！」

私は御坂さんとヤツの間に割って入ると、空気中の窒素を固体になるまで冷却して壁を生成する。

直後、想像を絶する高温の熱波が私たちを襲う。

固体窒素の壁が瞬く間に気体へと戻る。

私はこれまでにないほど演算に集中し、気体へ戻る窒素を再度固体に生成する。

しかし、気体になっては固体になり、固体になっても少し経つと気体になってしまう。

まさに、ジリ貧という言葉がふさわしい状況だ。

「お姉さま！梓さん！」

気付くと、白井さんが窒素の壁の後ろにテレポートしてきた。

「お姉さま！大丈夫ですよ！？」

「大丈夫・・・と言いたいところだけど、電池切れ」

電池切れ。つまり、今御坂さんは攻撃できない状態だ。

「木山先生、これは一体どういうことですよ！？」

白井さんが木山先生に詰め寄る。

「私にも信じられない状況なんだが・・・おそらく、核は二つあったのだろう。そして、一つが破壊されたことによりAIMバーストが自らの状況を危険と判断し、リミッターを解除した・・・といったところだろうか」

「そんな・・・どうすればいいんですの！？」

「答え自体は単純明快だ。もう一つの核を破壊すればいい。だが果たして、この状況で核を破壊できるかな？」

そう、今問題なのは、この場に核を破壊できる人物がないということだ。

まず御坂さんだが、電池切れでレールガンはおろか電撃すら放てないだろう。

仮に放てるとしても、攻撃するには私が展開している壁の影から出る必要がある。

そんなことをすれば、影から出た瞬間に消し炭になってしまうだ

ろう。

次に白井さんだが、残念ながら身近にテレポートでき、かつヤツに決定的なダメージを与えられそうなのが無い。

私が攻撃できれば良いのだが、今は壁を維持するために演算のほとんども使っていて、攻撃するには壁を解かなければならない。

万事休す。

私がそう諦めかけたとき、白井さんの携帯が鳴った。

（明俊 side）

御坂の放ったレールガンが、まばゆいばかりの閃光を放ちながら AIMバーストを貫いた。

「・・・あれが、御坂の本気か」

「すごいですね・・・」

俺の隣でそれを見ていた初春も、思わず声を漏らす。

これで決着が付く・・・はずだった。

だが、突然梓が御坂とAIMバーストの間に入ると、先ほど木山先生との戦いで見せた固体窒素の壁を作り出す。

「・・・え？」

俺が声を漏らした直後、AIMバーストの姿が揺らぎ、少し離れたここにも熱風が届く。

「な、なんですかこれ！？すごく熱い風が！」

それは俺が聞きたいことだ。

御坂のレールガンは、確かに核を撃ち抜いた。

だが、ヤツは死んでおらずむしろ強力になっているようだ。

俺は慌てて携帯を取り出し、白井に電話をかける。

「もしもし白井か！？」

『明俊さんですよ!?!』

「そつだ、一体どうなってるんだ!?!」

『それが・・・木山によると、どうやら核は二つあるらしいですよ』

「じゃあ・・・御坂が破壊したのはそのうちの一つだけ・・・」

『しかも厄介なことに、核が一つ破壊されたことでこいつのリミッターが外れたようなんですの』

「なんてこつた・・・それで、御坂は?」

『意識はしっかりありますが、電池切れですよ』

電池切れ・・・つまり、御坂が再度レールガンを放つのは不可能だということだ。

梓は・・・あの状況では、おそらく攻撃にまわせる余力など無いだろう。

ならば・・・

「……俺がやる」

『えっ？』

「俺がヤツを倒す」

『どうやって、のですの？』

「俺がここから、高濃度に圧縮した反物質をビームみたいに発射する。ただし、チャンスは1度きりだな」

『たった1度……』

「そうだ。失敗すればヤツは間違いなく暴走する。そうなれば、梓でも抑えきれない。後は、原子力発電所がドカン、だ」

『……わたくしは、明俊さんを信じますわ』

「……ありがとう。時間が惜しい、これで切るぞ」

そう言って俺は電話を切る。

「初春、車に隠れてろ」

「私も……明俊さんを信じてます。だから、ここで見届けます」

「・・・分かった」

そして俺は手をAIMバーストの方へ向け、演算を開始する。

反物質が、徐々に手の前に集まっっていく。

濃度が高くなるにつれ、空気中の物質と反応した時のエネルギー制御が難しくなり、制御しきれなかったエネルギーが青白い電気を発する。

「くっ・・・」

濃度をひとしきり高くすると、生成した反物質の周りをパチパチと電気が帯び、さながら御坂の電撃のようだ。

「原作通りにくたばってりゃ、こんな反物質なんて意味不明なものに消されずに済んだのにな」

そう言いながら俺は照準をAIMバーストに合わせる。

「こんなところで苦しんでないで、とっとと帰んな」

御坂のセリフをパクってみる。

そして、電気を帯びた反物質を放出した・・・

「お兄ちゃん!!」

そう叫びながら、梓がこっちに走ってくる。

「よお梓、よく耐えたな」

「だって、お兄ちゃんが私たちを助けてくれるって信じてたもん！」

「ホントかよ？」

「むー、ホントだってばー！」

「はいはい、じゃあそういうことにしてくよ」

「あーっ、信じてないなー!？」

俺と梓がこんなやり取りをしていると、御坂たちもこちらへとやってきた。

「どんな不測の事態にも臆することなく、冷静に対処でき、そして確実にそれを成し遂げる・・・学園都市の能力者たちの頂点、レベル5の実力か」

木山先生がそう漏らす。

御坂は完全に電池切れらしく、白井の肩に腕を回して介助される形だ。

「当然ですわ。この三人はわたくしのご友人で自慢のレベル5ですよ？　そう簡単に負けるはずがありませんわ」

「いやー、本当は白井の活躍の場面の一つでも作ってやろうと思っただんだが・・・」

「あんなバケモノは結構ですわ」

「俺ももう、あんなのとはやりたくねえよ・・・」

「右に同じ」

一様に安堵の表情を浮かべていると、白井の携帯に電話がかかってきた。

「はい。・・・ええ、そうですね。ありがとうございます」

「誰からだ？」

「病院からですの。レベルアップの被害者が続々と意識を取り戻しているそうです」

「じゃあ、佐天さんも・・・」

初春が目には涙を浮かべる。

「ええ、そのうち意識を取り戻すでしょう。あなたのおかげですよ、初春」

「そんな、私は何も・・・守ってくれた明俊さんのおかげです」

「俺は別に・・・当然のことをしたまでさ」

「なにお兄ちゃん、かつこつけてるつもり？」

梓がからかってくる。

「そんなんじゃないよ。さて初春、佐天のところに行っていよいよ」

「そのつもりです。皆さんはどうしますか？」

「私たちは、白井さんと一緒に後処理をするつもりだけど・・・」

「結構ですよ梓さん。ヤツとの戦いでお疲れの皆さんに後処理までさせるつもりはありませんわ。お二人も、初春と一緒に佐天さんのところに行ってきて下さいな」

「良いのか？」

「この中で体力が余っているのはわたくしだけとお見受けしますわ。ここはわたくしにお任せを」

「分かった。じゃあ梓、初春、行くか」

「ここは白井の厚意に甘えることにして、一路佐天のいる病院に向かった。」

「佐天さんっ！！」

佐天は、夕焼けに映える病院の屋上に一人で立っていた。

初春が駆け寄る。

「やあ初春、それに明俊さんに梓さんも」

「やあ、じゃないですよ！起き上がったりして大丈夫なんですか？」

「ちょっと眠ってたただけだもん。すっかり元通りだよ。能力の使えないところまでね」

「やっぱり……そうですか。それは……分かったことですけど」

きゅっ

佐天が初春を抱きしめる。

「？佐天さん？」

「ゴメンね。つまらない事にこだわって、内緒でズルして初春を危険な目にあわせて・・・」

「いえ、私のはたいしたケガじゃなくて・・・」

「バカだよあたし・・・もう少しで、能力なんかよりずっと大切なものをなくす・・・」

「ふえつくしゅん!!」

シリアスなシーンで突然くしゃみをする初春。

初春と佐天の顔の間に、鼻水の橋が架かる。

俺と梓はこらえられなくなって、声を殺して笑う。

「初春・・・鼻水たらしっぱなしにしない。女を捨てちゃってるわよー!」

そう言ってニカツと笑う佐天。

「は、はひ。・・・それで、何の話でしたっけ？」

「んー・・・初春には、やっぱりあたしがついてないとダメって話、だっけ？」

「あれ、そんな話でしたっけ？」

「まあ、細かいことは気にしない！」

「いつもの佐天が戻ってきたな」

「うん、そうだね」

「そうだ明俊さん、約束を実行するときが今！」

突然佐天が俺に向かって叫ぶと、初春のスカートを思いっきりまくりあげる。

「ちょー!？」

「さ、佐天さん何するんですかー!？」

「何って、電話で明俊さんと約束したし」

「そんな約束実行しないで下さいっ！ 明俊さんも、何ニヤニヤしてるんですかっ!」

「し、してないしてない!」

「あれー？お兄ちゃんからもしっかり見えたよねー？初春さんの縞パ・・・」

「ちやっかり梓さんにも見られてるし！　ってか梓さん、ばらさな
いで下さいよ！」

「なんじゃこのカオスな会話はー！ー！」

こうして、俺と梓がこの世界にやってきて最初の大きな山場は無
事過ぎ去ったわけだが・・・

だが、この世界がこれで大人しくなるなんてことは、もちろんな
かった。

レベルアップ
幻想御手編
e
n
d

第12話 〈レベルアッパー編最終章〉（後書き）

これでレベルアッパー編は終了となります。

次回からはようやくオリジナルストーリーをお送りすることができそうです。

なぜ最初にレベルアッパー事件を取り扱ったのかというと、この一連の事件で工藤兄妹を原作キャラたちに馴染ませるためです。

これからも相変わらずのゆったりとした展開になることが予想されますが、お付き合いいただけると幸いです。

第13話 能力開発(前書き)

この13話より、オリジナルストーリーです。

第13話 能力開発

レベルアップ事件の翌日、俺と梓は家でゆっくりしていた。

「はいお兄ちゃん、コーヒー」

「サンキュー」

「それにしても、昨日は大変だったね」

「まったく。まさか、AIMバーストに核が二つあるなんて仕様になっていたとは」

「お兄ちゃんが私と別行動で、かえって助かったね」

「そうだな。いくら俺の能力でも、熱は無効化できなかったからな。梓の近くにいたら、反物質砲が撃てなかったし」

「でもこれから、どうなるんだろうね」

「少なくとも、俺たちの知っている通りに話が進まない可能性が十分あるってことは分かった」

「つまり、私たちの知ってるストーリーは参考程度にしか役にたかない、と」

「そう考えておくのが妥当なところかな。まったく、不幸だ・・・」

「なに上条さんみたいなこと言ってんの。私たちがまだマシだ

と思うけど?」

「そうかもな」

「……そういえば、上条さんはもうインデックスと出会ってるのか。」

あの人もこれから大変だ。

などと、俺が考えていると……

ピンポーン

家のチャイムが鳴る。

「誰だ?」

「午前中から訪ねてくるなんて、随分と暇な人間もいるもんだ」と思いつつ俺が玄関を開けると、

「ごーんにーちはー!」

「よお佐天」

「あら、佐天さんじゃない！こんな暑い日に午前中から訪ねてくるなんて、どうしたの？」

「まあ、とりあえず中に入れよ」

「おじやましまーす！」

真夏の炎天下で、玄関先で用件を聞くのも酷なので中へ入れる。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

梓が麦茶を持ってくる。

「身体は大丈夫なのか？」

「おかげさまで、身体は何とも無いですよ。もっとも、ただ寝てただけですけどね」

「昏睡状態だったのに寝てただけとか・・・で、どうしたんだ？」

「二人に、能力開発を受けに来ました！」

「・・・あー、そんなことも言ったな」

俺は電話で佐天に言ったことを思い出す。

「お兄ちゃん、啖呵切っちゃったもんね」

「そうだな・・・随分えらそうなこと言ってたな俺」

「・・・まさかお兄ちゃん、かつこつけるためにテキトーなこと言っただんじやないよね？」

「そんな無責任なことするわけ無いだろ」

「じゃあ、何か当てがあるの？」

「もちろんあるさ。ちよつと待ってる」

そう言つと俺は冷蔵庫のところまで行くと、中からあるものを取り出して佐天に渡す。

「・・・？なんですか、これ？パン？」

「パンの品名を読んでみ？」

「えーつと・・・『脳を活性化させる十二の栄養素が入った能力上昇パン』？」

「そうだ、それを食べると脳が活性化して能力値が上昇するんだ」

「お兄ちゃん、何を思ふのかと思えばそんな・・・」

梓があきれたような表情をする。

「まあ梓、ちよつと耳貸せよ」

そう言つて俺は、梓を連れて隣の部屋へ。

「お兄ちゃん、あんな子供だましみたいなパンで能力が発現すると思ってるの?」

「落ち着けよ。梓、『プラシーボ効果』って知ってるか?」

「確か、偽薬でも本物の薬だと思いつまませて服用させると症状が改善するってやつだっけ?・・・まさか」

「そのまさか、だ。それを応用してみようと思つんだ」

「つまり、あんな胡散臭いパンでも、本当にそんな効果があると信じ込ませれば能力を使えるようになるかもってこと?」

「そんなところだ」

「でもねえ・・・仮にプラシーボが有効だとしても、どうやって信じ込ませるの?」

「それもちゃんと考えてある。それは、俺たちもあのパンを食べたってことにするんだ」

「実例がいれば信じるかもって?そんな安直な・・・」

「可能性が0じゃない限り、やってみる価値はあるだろう?」

「そういうセリフって、今言うセリフ? ま、協力するだけ協力してみるけど」

「あの一、二人ともどうしたんですか?」

佐天が声をかけてくる。

「いや、ちよつとこれからの方針を相談してたんた。・・・さて、じゃあ早速始めるか」

「はい師匠！お願いします！」

佐天はやる気満々のようだ。

「じゃあいきなりだが、レベルアップを使ったときのようにこれを浮かせてみてくれ」

そう言つて俺は、紙を細かくちぎつて紙きれを佐天の手のひらにのせる。

「え？それだけですか？」

「ああそうだ。その時、出来るだけその光景をイメージしてな」

「分かりました」

佐天はうなずくと、手のひらに乗つけた紙切れをジッと見つめる。

しかし、残念ながら紙切れはピクリともしない。

「・・・ダメみたいです」

「そうか。ではここで、このパンの定番だ」

「・・・このパン、本当に効くんですか？」

「そう思うだろう？ところが、これが効くんだな。実例は俺たちだ」

「え！？」

「実は俺と梓も能力測定の日はそのパンを食べたんだ。最初は俺たちも半信半疑だったんだが、それを食べて測定したらまさかのレベル5判定が出たってわけ」

「私もビックリしちゃったよ。でも、一度能力を使ってコツさえ身に覚えさせれば、後はいちいちそのパン食べなくても大丈夫よ」

「へえ」

梓、中々の口裏合わせだ。

佐天も、特に疑っていないようだしもう一押しだ。

「つまり、佐天には、もう一度能力を使ったときのあの感触を体感してほしいんだ。そうしてコツさえ掴めば練習あるのみだ」

「分かりました。じゃあ、食べちゃいますね？」

「ああ、全部食べていいぞ」

佐天は袋からパンを取り出すと一口食べる。

「・・・味気ないですね」

「そこが唯一の欠点と言えば欠点だが、効果はあるぞ。良薬は口に苦し、だ」

「昔の人は良いこと言っただよ。でもお兄ちゃん、このパン、苦いんじゃないかって味気ないんだけど・・・」

「梓くん、世の中には気にして良いことと悪いことがあるのだよ」

「じゃあこれは気にして良いことね」

「なんだと!？」

「食べ終わりました」

俺と梓が意味不明なやり取りをしているうちに、佐天が食べ終わっていた。

「よし、では栄養素が身体に吸収されるまで少し待つとしよう」

「じゃあその間に、私アイス買ってこようかな」

突然梓がそう言って立ち上がる。

「あ、じゃあ俺が行くよ。梓にはいつも食事作らせちゃってるからな」

「別にそんなこと気にしなくて良いのに・・・」

「俺が気にすんだよ。梓は佐天と一緒に留守番しててくれ」

俺が立ち上がると、佐天も何故か立ち上がる。

「あたしも一緒に行きます」

「え？でも、客人を買い物に付き合わせるなんて・・・」

「良いんです。それに、あたし自身が行きたいと思ったから付いていくんです」

「そうか？それなら良いけど・・・おい梓、何ニヤニヤしてんだよ、不気味だぞ？」

「べっつにー」

と言いつつも梓はニヤニヤしたままだ。

とりあえず訳の分からん梓はスルーして、俺は玄関に置いてあったスタンロッドをベルトに装着すると、熱気でムンムンするコンクリートジャングルへと出て行った。

「へえー・・・ 昨日はそんなことがあったんですか」

俺はコンビニへの道すがら、昨日起こった出来事を佐天に話した。

「ああ。今思い出しても、御坂のレールガンで倒しきれなかったときはゾクツとしたな・・・」

「で、明俊さんが止めを刺したと・・・見たかったなあ」

「どんなかつこいいシーンを想像してるのか知らないけど、結構やばかったんだぞ？」

「でも最後、キツチリ勝っちゃうあたり、流石ですね」

「おいおい、褒めても何も出ないぞ」

「えー、出ないんですかー？」

「何考えてたんだよ・・・」

そつこつしているうちにコンビニに到着。

だが……

「……様子がおかしいですね」

「ああ……」

コンビニから人が走って出てくる出てくる。

しかも、みな一様に恐怖の表情を浮かべている。

「……これってつまり、そういうことですよね？」

「大方、そんなところだろうな。佐天、風紀委員に連絡入れといってくれ。俺はちよっくら相手してくるから」

「あの……気をつけてくださいね」

「ああ、任せろ」

そう言っつて俺は佐天をコンビニの外で待機させると、中へと入る。

「早く出せつてんだろー!!」

犯人らしき男がそう叫ぶ。

中には顔を隠した男が二人いて、うち一人はナイフらしきものを持って店員を脅している。

もう一人は俺の正面にいて、俺に背を向けながらレジをいじっている店員を見ている。

こんなクソ暑い時にコンビニ強盗とはご苦労なことで、などと思いつつ、俺は風紀委員の腕章をつけると、強盗二人組みに声をかける。

「はい二人とも、そんなちんけなことは止めましょうねー」

「誰だ、テメエは！」

「ジャッジメント風紀委員……ですの！」

「風紀委員だと！？もう来たのか！」

「残念だったねえ。俺が偶然通りかかったばっかりに、おたくらの計画は予想外に早く終了しそうだな。さ、武器を捨てな」

「偶然ってことは、お前一人つてことか……なら、他の風紀委員が駆けつける前にお前を黙らせて逃げるのみっ！」

そう言うや否や、武器を持っていなかった男が手から電撃をほとばしらせて、俺目掛けて放ってくる。

しかし、俺は事前に反物質の壁を正面に展開していたので、電撃は届かない。

「なっ!?!」

「俺の攻撃が・・・」

やつらがひるんだ隙を見逃さない。

俺はベルトからぶら下げたスタンロッドを持つと、フラッシュユライトモードにする。そして、

「攻撃してくるってことは、当然、攻撃されても文句言えないよな?」

俺は目をつぶると、閃光を発した。

「ぐあっ!?!」

「まぶしいっ!?!」

どうやら二人とも目をやられたようだ。

手前にいた男の腹を思いっきり殴ると、立ち止まらずにナイフを持った男に近づき、今度はスタンガンモードに切り替えて男に当てる。

バチッ!?!

「ぐわっ!!!」

ナイフを持っていた男は声をあげて気絶する。

振り返って最初の男を見ると、どうやらこちらもパンチが効いたらしく気を失っていた。

「まったく・・・そんなしょぼい電撃じゃ、御坂に笑われるぞ?」

俺はそんな独り言を言うと、コンビニの外に出て応援の到着を待つ。

その時・・・

「うおおおおおお!!!!」

何気なくコンビニの方を見ていると、後ろの人だから男の大

声が聞こえてきた。

俺が急いで振り返ると、ナイフを持った男が俺に突進してきた。

「しまった!!」

スタンロッドはどちらのモードを使うにもすでにバッテリー切れ。

自分の身体の体表面に反物質を展開すればナイフが身体に刺さることはないが、それでは突っ込んでくる男も一緒に消滅させてしま
う。

左右どちらかに飛び退くにも、男の突っ込んでくるスピードが速
く間に合いそうにない。

「明俊さーん!!」

俺が身動き取れないでいると、横から佐天が男目掛けて腕を伸ば
してダイブしてきた。

男を突き飛ばす格好だ。

ドンッ！！

佐天が男を突き飛ばす音が聞こえた。

俺は思わず閉じていた目を開いた。

目の前には、地面に突っ伏している佐天。

だが、近くに突き飛ばされたはずの男の姿が無い。

俺が顔を動かすと、離れたところに男が倒れていた。

頭でも打ったのか、気を失っているようだ。

と、人だかりの方から誰か歩いて近づいてくる。

「風紀委員です！大丈夫ですよ！？……ってまあ、明俊さんでは
ありませんの」

「よお白井。遅かったな」

「それより、佐天さんは大丈夫ですか？」

「あなた・・・大丈夫ですよ白井さん」

佐天が腰をさすりながら起き上がる。

「白井、コンビニの中にもう二人いるぞ」

「了解ですの」

「・・・そういえば白井、お前今まで何してた？」

「何って、常盤台中学でプールそうじ・・・あーっ！！」

「・・・風紀委員だって言えば大丈夫だろうけど、寮監には気をつけるよ・・・」

「うう・・・」

白井がしょんぼりしながらコンビニへと入っていく。

「ところで佐天、変なこと聞くけど、あの男突き飛ばしたのお前だよな？」

「何言ってるんですか明俊さん。あたし以外に誰がいるって言うんです？」

「・・・だよな」

そう、ありえない。

佐天以外の人間が男を突き飛ばすなんて、ありえないのだが・・・

それ以上にもっとありえないのが・・・

男の飛んだ距離だ。

大人の男性が突き飛ばしても、あんなに飛ばないだろう。

まして、佐天は女性でしかも中学生だ。

では、なぜあの男はあんなに突き飛ばされたのか・・・

まさか佐天・・・お前の能力ちから・・・？

第14話 佐天と謎（前書き）

今回は短めです。

- こんなに短くするんだったら、13話でまとめて書けばよかった・

第14話 佐天と謎

「なあ佐天、ちょっと良いか？」

「はい？なんですか？」

コンビ二強盗事件の帰り道、俺は佐天に先ほどのことを聞いてみる。

「さっき、急に飛び出してきた男を突き飛ばした時のことなんだが・・・」

「あれですか？もう必死でしたよ。明俊さんが危ない、助けなきゃ！って思ってた思いっきり飛んだんですから」

「え？ ああ、それはなんと云うか、ありがとう」

「明俊さんが無事ならそれでいいんです」

そう言って笑顔を浮かべる佐天。

俺はちよつと恥ずかしくなつて、顔をそらしながらある事を考える。

・・・佐天に能力を使った自覚が無い？

これはとてもおかしいことだ。

能力者が能力を使うとき、そこには必ずパーソナルリアリティー

が存在する。

簡単に言ってしまうえば、能力を使う自分をイメージする必要があるのだが……

さっきの佐天の会話から推測するに、能力を使おうと意識した訳ではないようだ。

では、無自覚に能力が発現したというのか……？

……ダメだ、分からん。

「明俊さん、どうしたんですか？急に立ち止まったりして……」

「え？ああ、いや、ちょっと考え事を……」

いつの間にか、立ち止まっていたらしい。

「ほら、梓さんも待ってることですし早く行きましょう」

そう言って、俺の手首を掴むと走り出す佐天。

「ちよ、急に走り出すなって！」

俺は佐天に引っ張られたまま、寮へと走った。

「ただいま」

「おかえり〜。ずいぶん遅かったねえ〜、何してたの？」

梓はいまだにニヤニヤしている。

まったく、暑さで頭が疲れてるのか？

「それがですね梓さん、なんとアイスを買いにいったコンビニに強盗が現れまして」

佐天が説明する。

「え！？あ、ホントだ、お兄ちゃん腕章着けてる。それで、犯人は？」

「全員取り押さえて、後から来た白井に引き渡したよ」

スタンロッドのバッテリーを充電器につなげながら俺が答える。

「ところが梓さん、実は明俊さん、危うくナイフで刺されるところだったんですよ！」

「ええ！！そんなに強い強盗だったの！？」

「強いというわけじゃなくて、後ろからの不意打ちだった。いやー、佐天がいなかったら、犯人を対消滅させてたところだった」

「佐天さんが助けてくれたの？」

「ああ。犯人の横っ腹に飛び込んで、男を突き飛ばしてくれたんだ。……ってそうだ！！」

俺は叫ぶと、テーブルの上に置かれた紙切れを掴まむと、佐天の手に乗せる。

「これを、出かける前に試してみたいにもう一回浮かせてみてくれ」

「え、でもさっきは何も起きませんでしたよね？」

「パン食ったろ？」

「あ、そうでしたね！」

「よし、やってみてくれ」

「はいー！」

佐天は先ほどのように紙切れを手のひらにのせると、じっと見つめる。

すると・・・

「あっ！」 佐天

「えっ!？」 俺

「うそっ!？」 梓

三者三様の声をあげる。

そう、佐天の手のひらにのった紙切れがふわふわと浮かんだのだ。

「よ、よかったじゃないか佐天！」

「お、おめでとう佐天さん！」

突然のことに戸惑いながらも、惜しめない賞賛の拍手を送る俺と梓。

「あ、ありがとうございます！」

一瞬、何が起こったのか自分でも分かっていないような表情を浮かべていた佐天も、現実を認識して声をあげる。

「うわー！自分でも信じられないです！！」

「俺も、まさかこんなに早く習得できるなんて思ってなかったよ！」

「佐天さん、すごいじゃない！」

「そんな、二人のおかげですよ」

「こつちこそ、俺たちなんて何もしてないよな？」

「そうよ、ちょっとアドバイスただけで、実際に頑張ったのは佐天さんだし」

しばらく、賞賛と照れ隠しの言葉が飛び交う。

しかし、俺は喜びと同時に若干の疑問も抱く。

これを解決しないことには、さっき俺が見た光景のなぞが解明されないのだ。

「なあ佐天、盛り上がつてるところ大変恐縮なんだが・・・もう一つ試してほしいことがあるんだ」

「・・・？何ですか？」

「じゃあ、ちょっと外に出よう」

「そう言っつて俺は玄関から外に出る。」

佐天と梓も、不思議そうな顔をしながら後に続く。

俺たちがやってきたのは……といつても遠くに来たわけではなく、寮の隣にある空き地だ。

「あの、明俊さん、ここで何を……?」

「佐天、突然で悪いんだが、これを片手で押してくれないか?」

「そう言っつて俺が指差したのはコンクリートブロックだ。」

「これを押すんですか?しかも片手で?」

「そうだ。梓、ちょっとお前もこれを片手で押してみってくれるか」

「え?別に良いけど……」

梓が片手をブロックに当て、思いっきり体重をかけて押す。

「うーん・・・ビクともしないよお兄ちゃん」

「まあ、そうだろうな。じゃあ佐天、動かすところをイメージしながらやってみてくれ」

「あ、はい」

うなづいて、佐天もブロックに手を当て、体重をかける。

・・・

「・・・動きませんね」

「そうか・・・いや、良いんだ。ありがとう」

「」「？」

梓と佐天の疑問の表情を見やりながら、俺は寮へと引き返す。

何なんだ？

佐天が能力者になったことは疑いようの無い事実だ。

ではなぜ、強盗犯をあんなに突き飛ばせたのにコンクリートブロックはピクリとも動かないんだ？

無自覚に能力が発現している、という可能性も、紙切れを意識して持ち上げられたことにより消滅した。

意識して能力を使える以上、ブロックも動かせるはずなのだが・

やはり、佐天には失礼だがレベルが低いのだろうか？

でもだとすると、男をあんなに突き飛ばせたことの説明がつかなくなる。

単に、能力の使い方をまだ熟知していないから、力の加減がおぼつかないのだろうか。

そう考えて俺は首を横に振る。

それもありえない。

能力者に必要なのは加減ではなく、「その力を使っているときのイメージ」だ。

イメージさえあれば、後はレベルの問題だ。

そして、あんなに大の大人を突き飛ばせた以上、決してレベルは低くない。

なのになぜ・・・

結局、佐天が帰ったあと1日中考えてみたが、何も思い浮かばなかった。

さらに梓にも、「深く考えても分からないものは分からないよ」と言われ、結論を出すのを断念した。

-
- だが、この佐天の力の秘密をめぐって、事件は発生するのだった。

第15話 誘拐事件

数日後、俺と梓は白井に呼ばれて、風紀委員第一七七支部へと向かっていった。

「あー、せっかく夏休みの課題さっさと終わらせようと気合い入れたのに・・・」

「しょうがないよ。しかも、白井さん直々の呼び出しだし」

「何か事件でも起こったのかな？」

「白井さんがわざわざわざわざ非常員の私たち呼ぶくらいだし、デカイ事件か人数不足のどっちかな？」

「どっちも嬉しくないな」

「まあ、そうだね」

そんなことを愚痴っていると、支部に到着した。

セキュリティを解除していると、後ろから突如声をかけられる。

「おはよーいーいーまーす！ー！ー」

「のわっ！ー？」

「きゃっ！ー！？」

「二人とも、朝からオーバーリアクションですねえ」

「おい佐天、朝から俺たちを殺すつもりか！後ろから大声で話しかけられたら、誰だってあんなリアクションするっつもの！」

「そうよ佐天さん！本当にビックリしたんだから！」

「二人とも、そんな細かいこと気にしてたらこの世の中生きていけませんよ？」

そんなことを言いながら、中へと入っていく佐天。

「……誰のせいだと思ってるんだよ」

「しかも、お兄ちゃんがドア解除したのに堂々と先に入ってくし……」

「ま、佐天らしくて良いけど」

俺たちも後に続いて中に入る。

「よお白井、初春」

「お二人とも、暑い中わざわざすみませんですの」

「気にすんなって。……本当は課題やりたかったんだけどな」

「お兄ちゃん、まだ言ってる……それで白井さん、私たちを呼んだのは？」

「臨時の会議ですの」

「会議？」

「ええ。初春、資料を取って下さいな」

「はい」

そう言っつて初春が俺たちにホチキス留めされた紙を配る。

「サンクス。なにに、『連続学生行方不明事件』？」

「お兄ちゃん、そんな事件ニュースとかでやってたっけ？」

「いや、記憶に無いな」

「当然ですわ。まだ公式に発表されていませんし」

「どうしてだ？」

「情報が少なすぎて、まだ公式に発表できる段階ではないからなんです」

「ふーん・・・じゃあこの資料は？」

「行方不明になっている学生の資料ですわ」

「なるへそ。じゃ、早速拝見」

俺と梓は資料を開く。

まずは、行方不明になった人間の共通点を探す。

「うーんと、現在行方不明なのは5人。性別は男が二人に女が三人」
「通ってる学校もバラバラだね」

「ああ。学年もマチマチだ。これといって共通点が無い」

「そうなんです。ですから犯人の狙いも絞れなくて・・・」

「誘拐して身代金とか？」

「それは無いな。第一、身代金目的で5人も誘拐とか聞いたことが無い。ただその辺を遊び歩いて、家に帰ってないだけなんじゃね？」

「そう思って初春に学園都市中の防犯カメラを調べさせましたが、誰もヒットしませんでしたわ」

「うーん・・・そのカメラに、誘拐の瞬間とかは？」

「流石に映っていませんでした」

「ですよー」

俺はそう言って席を立ち、コーヒを淹れようとする。

「あ、あたしが淹れますから明俊さんは座っててください」

今まで俺たちの会話を黙って聞いていた佐天がそう言って立ち上

がる。

「そうか？じゃあ、お願いするよ」

「任せてください。頑張つて淹れますから」

奥へと消える佐天。

と、俺たちのやり取りを見ていた梓が俺を肘で突付けてくる。

「な、なんだよ」

「羨ましいなあ」

「はあ？」

「……まさか、気づいてないの？」

「何を？」

「……こりゃ、佐天さんも大変ね」

「お二人とも、何の話をしてますの？」

「それがね……」

そう言つと梓は白井と初春に何やら耳打ちする。

「……まあそれはそれは、確かに佐天さんも大変ですわね」

「私、佐天さんの幸せの花が咲くように頑張ります」

「あたしがどうかしたんですか？」

女性陣が意味不明な話を繰り広げていると、佐天がコーヒーをお盆にのせてこちらへとやってきた。

「なにやら梓たちが佐天の話をしていたみたいだが、俺にはさっぱりだ。・・・美味しいな」

「そうですか？そう言ってもらえて良かったです」

「いや、本当に美味しいな。ところで白井」

「何ですか？」

「行方不明になった学生の書庫バンクのデータを見せてもらえないか？」

「良いですけど・・・何か気になることでも？」

「いや。ただ、まだ見てないデータといたらそれくらいしかないからな」

まあ、見ても何の収穫も無いだろうが。

「これです」

「サンキュ」

俺は初春からノートパソコンを受け取ると、5人のデータを比較

してみる。

「うーん……」

「どう？お兄ちゃん」

「……いや、こっちにも特に気になることは無いな。扱える能力もバラバラだし、それ以前にレベル0の人もいるし」

「これじゃ防ぎようがないですわ……せめて犯人の目的だけでも分ければよいのですが」

「そうだな。これで犯行が終わったとは考えられんし……」

「……うーん……」「」「」

俺、梓、白井、初春がうなり声をあげていると、一人暇になったのか、佐天が木の葉を両手にのせて浮かせてクルクル回転させていた。

「お、やってるな佐天」

「え？佐天さんなにを……えー！ー！！」

「何を大きな声を出していますの初春……え！？」

佐天が能力を使っているのを見て驚く初春と白井。

「あ、ふたりにはまだ言ってますませんでしたね。あたし、能力が使えるようになったんです」

「そういう大事なことは早く言っておいて下さいよ佐天さん！」

「ごめんごめん、あたしも興奮して忘れてた」

「良かったですわね、佐天さん」

「ありがとう白井さん。まあ、明俊さんと梓さんのおかげなんだけ
どね」

と、そこへ、

「おーっす」

またしても勝手にセキュリティを解除して、御坂登場。

「またですのお姉さま。能力で入ってくるのはよしてくださいな」

「まあ良いじゃない」

「言っても止めませんし、もう諦めてますわ・・・」

「ところで、みんなが集まって何してたの？」

「実はですね御坂さん、なんと佐天さんが・・・」

「ストリップ初春。ネタバレは厳禁よん。御坂さん、これを見てく
ださい」

そう言っておいて佐天は、先ほどのように木の葉を浮かべる。

「お！やったじゃない佐天さん！」

「へへ・・・」

「よしっ！今日のお昼はどっか派手に食べに行きましょう！」

突然、御坂がプチパーティーをぶち立てた。

「え、良いんですか!？」

それに見事についたのは佐天。ま、佐天の能力発現を祝うもんだから良いに決まっているだろう。

「そうだな。せっかくの機会だし、レベルアップ事件の解決も兼ねてパーティとやるか」

「そうですね。この事件についてはちょうど煮詰まっていたところですし、気晴らしにもちょうど良いですわ」

「よし、全会一致ということで、行くわよ!」

「あ、当然御坂や白井のおごりだよな？」

「・・・そうなるのね。まあ良いわ、今日はおごってあげる」

「よし、初春、たくさん食べるよ!」

「え？佐天さん、太りますよ?」

「気にしない気にしない！食べたいときに食べとくのが人生成功する秘訣！」

そうして俺たちは、ワイワイガヤガヤと支部を後にした。（固法先輩、お仕事引き受けてもらって申し訳ありません）

「結局、食事の後にカラオケまでやってきちやったね」

「そつだな。まあ、楽しかったから良かったけどな」

俺、梓、佐天、初春で夜の道を歩く。

御坂と白井は、門限を破ると覚醒する恐怖の寮監がいるため一足先に帰還した。

「あ！」

突然、梓が声をあげる。

「どした？」

「食パンと牛乳きらしてた」

「マジかよ」

「うん、ちょっとコンビニ寄ってっていい？」

「ああ、別に構わないけど」

「じゃ、あたしたちはこの辺で」

「二人とも、明日また支部でお会いしましょう」

「おう」

「じゃあねー」

そう言っただけ俺たちは初春、佐天と別れコンビニへと向かう。

ところが、俺たちが路地を曲がった直後・・・

「さ、佐天さんっ!」

初春のものとおぼしき悲鳴が聞こえてきた。

「梓っ!」

「うんっ!」

俺と梓は初春たちが消えた路地へと向かう。

「初春!」

「あ、明俊さぁん・・・」

初春は涙を流して地面に崩れ落ちていた。

「大丈夫か!?!ケガは!?!」

「わ、私は大丈夫です・・・でも、佐天さんが」

「そっいえば、佐天さんはどこ!?!」

「佐天さんは、黒服の男達に無理やり連れ去られて・・・」

「なんだって!?!」

俺は慌てて男達が逃げたと思われる方へと走る。

だが、そこには佐天も男達もいなかった。

「くそっ!!!」

「どうするお兄ちゃん!」

「遅くなればなるほど見つけるのが難しくなる!今から支部に行くぞ!」

「でももう夜ですよ!?!」

「非常事態だと言って無理やりにもあけてもらっさ!初春は一応、白井にも連絡を入れておいてくれ!」

そう言っつて俺たちは第一七七支部へと夜の道を走り出した。

第16話 追跡

俺たちは、夜で人気の無くなった柵川中学へとたどり着いた。

「すみませーん！」

門のところにある詰所の窓を叩く。

「なんだい君たちは？」

「この生徒で風紀委員の者ですが、緊急事態なので中へ入れさせて下さい！」

「緊急事態？」

「実は、私の友達が誘拐されてしまったんです！それで、捜索のために風紀委員の部屋を使いたいです！」

初春が、目に涙を浮かべながらもキツパリとした口調で状況を説明する。

「何だつて！？しかし・・・よしっ！入りなさい！」

「えっ、いいんですか!？」

「君たちが嘘をついているようには見えないうしな。何かあったら私から説明しておくから気にしなくていい。ただし、一応風紀委員であるという証拠は見せてくれ」

「ありがとう、おじさん！」

梓が、風紀委員の腕章と支部から発行されている身分証明書を守衛に見せる。

「よし確認した。行っていいぞ」

俺たちは夜の校舎を走った。

「どうだ初春、カメラに映ってるか？」

「はい、バッチリと。今、佐天さんを乗せたと思われる車がどこに向かったのか、記録映像で追跡中です」

「よし、そのまま追跡を続行してくれ」

「でもお兄ちゃん、何で犯人は誘拐なんて・・・？」

「いくつか理由はある。まず、かなり言いたくないんだが、犯人が『そういうこと』の目的で半ば衝動的に佐天を誘拐したケースだが・・・それなら初春が一緒にいるときに誘拐するのは危険だ。まだ近くに俺たちもいたんだし、普通、一人になったところを狙うだろう

し・・・」

「じゃあ、最初から佐天さんを狙ってた？」

「その方が可能性はありそうだ」

「でも、それでも普通は一人になったところを狙うよね？」

「何かしらの理由で、近くに他人がいても強引に誘拐せざるを得なかったのか、あるいは、ただ単に佐天の近くから俺たちレベル5がいなくなったから、チャンスと思って犯行におよんだ、か」

「私がコンビニに行くなんて言わなければ、最後まで佐天さんと一緒に帰れて、誘拐されなかった・・・」

「落ち込んでても仕方ありませんわよ梓さん」

「白井の言う通りだぞ梓・・・って白井!？」

俺が声のした方を振り向くと、そこには白井と御坂の姿が。

「なんですの？大声なんか出して・・・」

「いや、来てくれたのは嬉しいんだが・・・よく来れたな」

「寮監には、後で罰でもなんでも受けるからって言って特別に外出許可をもらったわ」

「そうか・・・ありがとな」

「友人が連れ去られたと聞いて、ジツとなんてしてられませんか。それで初春、佐天さんがどこに連れて行かれたかわかりましたの？」

「はい、第五学区にある研究所のようなところに車が入っていくのを確認しました」

「研究所？」

「まさか、佐天さん、何かの実験のモルモットにされるとか・・・」

全員の脳によぎったことを梓が口から漏らす。

「もしそうならここでグズグズしてるわけにはいかないわ！早く助けに行くわよ！」

「待てよ御坂。それは流石に焦りすぎだ」

「でも、こうしているうちにも・・・！」

「だからこそだ。向こうは少なからずこっちの情報を知っているのに、こっちは向こうに関して何も知らないで特攻するのは無謀と言っもんだ。初春、その研究所とやらのパソコンにハッキングできるか？」

「任せてください。でも、少しお時間を頂きますが」

「構わない。夜のうちに襲撃できればいい。それまで、初春以外は身体を休めておこう」

そう言って、俺たちははソファに腰を下ろす。

「・・・それにしても、どうして佐天さんが・・・」

御坂が疑問を口にする。

「佐天が誘拐された理由・・・か。佐天に変わった事という・・・」

「能力が使えるようになったよね」

「確かにそうだが、学園都市にいるならそれは別に不思議なことじゃない」

「レベル0の佐天さんが能力を使えることになったからじゃない？
レベル0の人が能力を使えるようになるのって結構大変なんじゃない？」

「そうですね・・・レベルアップのようなものを使わずに能力を使えるようになったのは、確かにすごいことですが・・・」

「・・・一応、俺と梓の指導のおかげでもあると思うんだが・・・
ん、レベルアップ？」

俺の脳内に、ある一つの仮説が浮かんだ。

「どうかしましたの？」

「まさかな・・・初春、ちょっと良いか？」

「何ですか？」

「誘拐された5人、佐天を含めると6人だが、ひよっとしてレベルアップ使用者じゃないか？」

「え？ちよつと待ってください」

そう言って、初春が手早く照合する。

「・・・ホントだ、全員レベルアップ使用者です」

「お兄ちゃん、どういうこと？」

「詳しくは分からんが、この6人がレベルアップ使用者だと気付いた何者かが誘拐したってところだろう」

「明俊さん、研究所のパソコンに接続できました」

「痕跡が残る前に手早く調べよう。まず、施設内の構造図とセキュリティ、それに、そこに勤めてる人間で、その6人がレベルアップ事件の時に入院していた病院のどれかに関係している人間がいなか調べてくれ」

「病院？」

梓が不思議そうに俺を見る。

「ああそうだ。6人が共通してレベルアップ事件の被害者なら、病院で勤めてる人間が、その時に何かしらの情報かデータを入手した可能性があるってことだ」

「その明俊さんの推測、当たってると思いますよ」

初春がパソコンの画面から俺たちの方に顔を向ける。

「実はその6人、同じ病院に搬送されてました。さらに、その病院の医師でこの研究所の名簿に名前が載っている男性が一人います」

「どんな男ですか？」

「名前は齊藤孝之^{さいとうたかゆき}。病院では精神科の先生みたいですね。研究所でも、人間の精神活動について研究していたみたいですが・・・どんな研究かまでは分かりませんでした」

「いや、それで十分だ。セキュリティについては？」

「警備員は数名のようですが、警備ロボが配置されていて、各部屋へのドアには暗証番号タイプのロックがかかっているようです」

「警備ロボはまだしも、全部の部屋にロックはちと辛いな・・・できれば手分けして搜索したかったんだが、御坂と一緒にじゃないと部屋一つ入れないか・・・効率悪いな」

「ここから、初春さんにいじってもらうってのは？」

「ここからではちょっとキツイですね。現地のセキュリティ装置を直接いじらないと・・・」

「そうか・・・じゃあ初春はここから後方支援してくれ。残りの4人で佐天を救い出す！」

俺と梓、御坂、白井の4人は、夜の学園都市を駆け抜けた。

「ここですわね、佐天さんの連れ込まれた研究所というのは」

「そうだな。あー、聞こえるか初春」

『はい、感度良好です』

「早速だが、出入り口近くに警備員や警備ロボはいないか？流石に入ってすぐに発見だけは避けたいんだが」

『今なら大丈夫です』

「じゃあ、入り口のロックは任せなさい」

そう言って、御坂が入り口の端末に手をかざす。

ピッ

あっさり解除されるセキュリティ。

「さすが御坂。その能力の応用力の高さには負けるな」

「褒めても何も出ないから、早く私と勝負しなさい？」

「へいへい……」

そんな会話をしつつ中へと入る俺たち。

「初春、セキュリティの中央制御室的な部屋はどのあたりだ？」

『地下1階ですね。階段はその正面ホールから見て右手にあります』

「了解。じゃあ御坂と白井でその部屋をおとしてくれ。制圧できたら連絡をくれ」

「了解ですの」

「俺と梓は、御坂と白井がセキュリティをダウンさせるまでここで待機」

「うん。じゃあ御坂さん、白井さん、頑張って」

「任せなさい！」

その勢いで見つかるなよ……と心の中で釘を刺しておく。

俺と梓は、壁に張り付いて御坂からの連絡を待つ。

はたから見たら不審者そのものである。

「……ねえお兄ちゃん」

「……ん？」

梓が小声で話しかけてきた。

「佐天さんのこと、どう思ってる？」

「……？質問の意図が良く分からんが、いいやつだと思うぞ。ムードメーカーで誰にでも優しいし。無くてはならない存在だと思うけど」

「……それ、帰ってきたら本人の前で言ってあげてね」

「？……おっと、御坂からだ。もしもーし」

『セキュリティの解除、終わったわよ。こんなちよろいの余裕よ』

「そうか、流石だな。じゃあ、そこで待機しててくれないか？」

『なんでよ？私たちも行くわ』

「そこで待機しててくれないと、異常を感じた警備員がセキュリティを元に戻しちゃうだろ？だから、そこで待機して、セキュリティをいじりにきた警備員を黙らせてくれると大いに助かるんだが……」

「

『そうですね。では、佐天さんはお二人にお任せしますわ』

『あ、ちょっと黒子・・・』

ブツッ

「・・・さすが白井さん。御坂さんの扱いも手馴れたものだね」

「・・・ああ、そうだな。よし、行くか！」

「うん！初春さん、佐天さんの捕まってそうな部屋、分かる？」

『その廊下をまっすぐ進んで、突き当たりを右に曲がった一番奥の部屋がひととき大きな部屋になってます。・・・かなり大きい部屋ですね。何かの実験でもする部屋でしょうか？』

「なんか、怪しそうな部屋だな」

「初春さん、中に誰かいそう？」

『分かりません。御坂さんがセキュリティを切ってしまったので、こっちからも監視カメラが見えないんです』

「じゃあ、思い切って中に突撃するしかないな。梓、心の準備は？」

「大丈夫。いつでもOK」

「よし、行くぞ」

ドアに手をかける。

ガラスがついてはいるが、中が見えるタイプではないので、状況を確かめようとはやっぱり出来ない。

俺は深呼吸を一つすると、ドアを押し開けた。

「……！誰だ！」

「風紀委員だ！」

「友達を取り返しに来たわ！」

俺は広い部屋をザッと見渡し、相手の数や部屋の配置を確認する。

部屋には、用途は分からないが様々な機械が設置されていて、意

外なことに相手は白衣を着た男が一人だけだ。

「ほう、一人だけか。なら、さっさと倒して佐天を返してもらおうかな！」

「威勢がいいな風紀委員ども！だが、コイツを相手にしてもまだそんなことが言えるかな？」

そう言つと男は、近くにある人が一人横になれる大きさの装置をいじる。

その装置はカプセルのような物で、男が何やら操作し終わると、そのフタがスライドして開いた。

そして、中から人が起き上がる。

その人物の顔を見て、俺たちは愕然とした・・・

「……嘘だろ？」

「そん な つ ……！」

「「佐天（さん）！！」」

そう、中から出てきたのは、頭に何か装置を着け、目は虚ろな佐天だった・・・

第17話 さらば佐天（前書き）

あらかじめ断っておきますが・・・

この17話、最後の方がかなり超展開となっております。

個人的にかなり見苦しい展開なのですが（もっと良い話の持っている方は無かったものか）、それでもよければどうぞです。

第17話 さらば佐天

「・・・嘘だろ？」

「そんなっ・・・!？」

「佐天(さん)!!」

そう、そこには、頭に何か装置を着け、目は虚ろな佐天の姿があった……

「本当はもう少し調整してからと思っていたが……まあ仕方ない。お前から相手にまずは様子見といくか」

「お前が斉藤とかいう医者か？」

「いかにも」

「佐天さんに何をしたの!？」

「君たちに怒鳴られるようなことは何もしてないつもりだ。むしろ賞賛されるべきかな？」

「なんですって!？」

梓が激昂する。

「落ち着け梓。それで斉藤さんとやら、人を誘拐しておいて賞賛されるべきとは、どういうことかな？」

「この君たちのご友人は、レベル0な訳だが・・・」

「ああ、でもつい最近、能力を使えるようになったがな」

「それはこちらでも確認させてもらったよ。レベルアップ事件の時はレベル0だったから、それには驚いたよ」

「やっぱり、佐天が入院してる最中に何か調べやがったな？」

「私が何を研究しているか知っているかな？」

男は突然話題を切り替える。

「・・・?いや、そこまでは・・・」

「私はね、人間の感情について研究している」

「感情？」

「どづいづいとっ。」

梓が分からないという風に尋ねる。

無論、俺にも分からない。

「正確には、感情が能力にどのように影響するか調べていた」

「感情が能力に・・・？」

果たしてそんなことがあるのだろうか？

能力の強弱が感情に左右されるなんて話は聞いたことがない。

「能力の強弱や応用性を左右するのは、その能力の使用者のパーソナルリアリティー、ひいてはレベルじゃないのか？」

「お兄ちゃんの言う通りよ。それに、テンパって演算に集中出来なくて能力が使えなくなることはあるにしても、例えば、怒ってるからって能力が強くなったりしたことは無いわ」

「普通の能力者はそうだ。だが、私の研究で、ごく一部の人間が感情によっても能力が強弱する可能性を発見したのだ」

「なるほど・・・アンタが誘拐したのが、そのごく一部の人間ってことか」

「ああそうだ」

「でも、何で最近になって急に連続誘拐なんてしたのよ？」

「それは多分、レベルアップ事件が起こったからだろう」

「ご明察。私にとってレベルアップ事件は、多くの人間のデータを集めるまたとないチャンスだったからな。ただ、私の勤める病院に6人もいたのは流石に驚いたが・・・」

「じゃあ佐天さんも、その特殊な人間の一人だったってことね」

「その通り。特に佐天くんは、6人の中でも感情による波が大きくてね。大変興味深い人間だよ」

「・・・そうか。コンビニ強盗を佐天が突き飛ばしたとき、大の大人が思い切り突っ込んでも飛ばないくらいに飛んだのは・・・」

「佐天くんの、君を守りたいという強い感情がなし得たわけだろうな。・・・さて、お喋りが過ぎたようだ。そろそろ、君たちには静かにしてもらおうかな」

そう言うと斉藤は佐天に近づく。

「佐天を人質に取るつもりか！」

「卑怯よ！」

「人質？ハハハ、勘違いしてもらっちゃ困る。さっき言っただろう？『お前ら相手に様子見』すると」

斉藤は不気味に笑うと、佐天の頭に装着されている装置をいじる。

「これでいい。さて、君たちに親友を止められるかな？」

「デメエ、何をした！」

「私は、感情の研究に関しては第一人者だという自負があつてね。これは虚勢ではない。例えばそう、今佐天くんの頭に装着されているのは『負の感情』を増大させるものだ。怒り、悲しみ、恐怖・・・それらから生み出されるのは攻撃的な姿勢だ。負の感情から逃れようと、他者に対して攻撃的になるのさ」

斉藤がそう言った直後、佐天の身体から強烈な風が吹き出し、部屋の窓ガラスを粉々に粉碎する。

その強烈な風は容赦なく俺と梓にも吹き付ける。

「きゃあっ！！」

「なんて威力だ！！」

そのあまりの強さに立っていられず、かがんでしまう。

「すばらしい！！負の感情が、ここまで能力を強力にするとは！！
フハハハハハ！！！」

慌てて梓が俺たちの正面に氷の壁を展開して風避けにする。

「くそっ！これじゃあ二人に近づけないぞ！」

「なんとかして佐天さんの暴走を止めないと！」

「・・・そつだ！」

俺は携帯を取り出すと御坂に電話をかける。

『あら、もう終わったの？』

「それどころじゃねえ！とにかく、この施設の電力を落としてくれ！」

『・・・なんかヤバイみたいね。分かったわ、ちよつと待ってて！』

「頼む！」

俺は電話を切ると、腰からぶら下げているスタンロッドを手にする。

「どつするの!?!」

「今、御坂にこの施設の電力を落とすように頼んだ！電気が落ちて、佐天の暴走が止まったら俺がヤツに一気に近づいてこれで気絶させる！梓は佐天を確保してくれ！」

「分かった！」

「なんだあ風紀委員、もう終わりかあ!?!」

「冗談！終わるのはテメエだ!!！」

俺が叫んだのと同時に、部屋の明かりが落ちる。

「よしっ！これで佐天の頭についでる装置もただの飾り・・・」

だが・・・

佐天の暴走は止まらなかった。

「おいおい嘘だろ!?!」

「どうして!?!」

「フハハハハ!なるほど、この施設の電源を落として装置をただのガラクタにしようって魂胆か! でもなあ、残念ながらこの装置だけは別電源なんだよ!」

「ずいぶん都合のいいように作られてるこつたな!」

「お兄ちゃん、どうするの!?!」

「こつちには御坂がいるんだ、どこに電源があるつとも見つけ出して落としてくれるさ!」

俺は再び携帯をとると、御坂に電話をかける。

「御坂か?悪いな、もうちょっと頼まれて・・・」

『ごめん!悪いけどこつちもそれどころじゃなくなったのよ!』

「なに!?!どういことだ!」

『それが、対能力者用装備を施した武装集団が突然襲い掛かってきましたの!今、お姉さまが戦闘中ですわ!』

御坂から電話を代わったのか、白井の声が聞こえてきた。

電話の奥からは、御坂の電撃の音と銃撃の音が入り混じって聞こえてくる。

「くそっ！こっちもそっちもピンチってことか！」

『黒子！アンタも手伝って！』

電話から御坂の大声が聞こえてくる。

『では、切りますわね！そちらもどうかご無事で！』

そう言って電話は切れた。

「どうしよう、お兄ちゃん！」

「どうするもこうするも、佐天をどうにかして止めないとこの氷の壁から一歩も出れないし……」

「どうやら頼みのお友達も、対能力者装備の特殊部隊に捕まったようだなあ…… さて、こちらもそろそろ小手調べは終わりといくか……」

斉藤は、壁に取り付けられたボタンを押す。

直後、

バリン!!

梓の展開している氷の壁の、風を受け止めている面に一筋の大きな傷がつく。

陳腐なたとえだが、まるで獣の爪で引っかかれたようだ。

「なんなの、これ!？」

俺があたりを見渡すと、この部屋の壁にも同様の傷が次々と出来る。

「まさか・・・かまいたちか!？」

「その通り! 佐天くんは今、完全にレベル5と同等の能力を使えるのだよ!」

佐天の能力は空力使い（エアロハンド）で間違いない。

だが、俺たちの知っている空力使いは、レベル4の婚こん合ごう光みつ子こで、物体に風の噴射点を作り出してその物体を飛ばせるというものだ。

この状況は完全に予想外だ。

「どうした風紀委員、もうお手上げか!？」

「くそっ！」

佐天の作り出すかまいたちは、梓の氷の壁でかろうじて防いでいる状況だ。

なにより痛いのは、今回俺の能力がまったく役に立たないことだ。

風やかまいたち（真空）は反物質ではどうすることもできない。

いや、正確には風は無力化することはできる。

風とは空気の流れのことであり、その空気とは窒素や酸素で構成されている。

つまり、空気の組成分子や原子を根こそぎ反物質で対消滅させれば風は無力化できる。

しかしそんなことをすれば、ここにいる全員が窒息してお陀仏だ。

こうなったら・・・

「梓、賭けに出よう」

「賭け？」

「今、唯一佐天を行動不能に出来るのはこのスタンロッドだけだ。」

これで賭けに出るんだ」

「どつするの?」

「俺が合図したらこの壁を解除してくれ。次の瞬間、俺がフラッシュライトで二人の目をくらませる。ひるんでる隙にスタンで佐天を気絶させる。・・・佐天には悪いが、これしか手は無い」

「このままジツとしても事態は良くならなさそうだし、やるしかないね」

「よし、じゃあ梓は下がってくれ」

梓が下がると、俺はスタンロッドをフラッシュライトモードにする。

「よし、今だ!」

俺が声をあげると氷の壁が解かれる。

間髪いれず、俺はスタンロッドを前にかざすと、目をつぶってポタンを押した。

「うあっ! め、目がっ!」

斉藤のつめき声が聞こえてくる。

俺はすかさず走り出すと、スタンモードに切り替えながら佐天に

近づく。

見ると、佐天も顔を伏せている。

「悪いな、佐天！」

俺は、佐天めがけてスタンロッドを振り下ろした・・・

だが・・・

ブワッ！

「うわっ！！」

まさにロッドが触れるか触れないかというその時、佐天が能力を使用して俺を吹き飛ばした。

ドン！

背中から地面に叩きつけられる。

「お兄ちゃん！」

すぐさま梓が俺に駆け寄ると、再び氷の壁を展開する。

「ふ、ふふ……フハハハハハハハ！」

突如、斉藤の笑い声がこだまする。

「どうやらこれで貴様ら風紀委員も万策尽きたようだな！」

斉藤の勝利の叫びともとれるセリフとともに、俺たちを先ほどより強力なかまいたちが襲う。

「今度は、ちょっとマズイかも・・・！」

梓は、さつきからずっと氷を展開し続けているせいか、額にうっすらと汗を浮かべている。

そろそろ体力的にも厳しくなってきたのだろう。

俺の頭の中に、最後の手段が浮かび上がる。

それは、最も採りたくない手段・・・

「梓……佐天を倒そう」

「お兄ちゃん何言ってるの!？」

「このままじゃ、お前ももたないだろう?」

「でも、友達を手にかけるなんてそんな……!」

「じゃあどうしろって言うんだ!？ このまま佐天をほおって逃げ
るとでも言うのか? そんなことをしたら、また佐天がヤツに使われ
て、今度は一般の人も傷つけるかもしれないぞ!？ 梓はそん
な佐天を見たいのか!？」

「でも……!」

「それに、このままほおって逃げたところで、いつかは誰かによっ
て捕まるか、あるいは殺されるかもしれないぞ!？ そんなこ
とになるくらいなら……俺が終止符を打つ!」

「でも……やっぱりダメだよお兄ちゃん！」

「お前の気持ちは良く分かる。俺だって出来ればこんなことしたくない。でもな、それ以上に俺が見たくないのは、佐天が誰かを傷つけて、その結果誰かに嫌われたりうらまれることなんだ。絶対にそんな目にはだけはあわせたくない。お前が俺を恨むってんなら、それは構わない」

そう言って俺は立ち上がると、手を佐天の方へと向けて演算を開始する。

隣にいる梓が嗚咽する。

ふと、今までの佐天とのやりとりが走馬灯のように頭に浮かんでくる。

『……あたしも、能力を使える？』

『明俊さんが危ない、助けなきゃ！って思って思いつきり飛んだん

ですから』

『明俊さんが無事ならそれでいいんです』

思い出して、俺の視界がぼんやりとかすむ。

「ごめんな佐天。俺の力不足なばかりにこんな手段しか取れなくて・・・。俺のエゴかもしれないけど、それでもやっぱり、お前が誰かを傷つけたり、誰かに傷つけられるのは嫌なんだ。だから・・・」

俺のかざした手の指先に、電気を帯びた反物質がたまる。

「・・・安らかに、佐天」

第18話 く佐天の目覚め編最終章く（前書き）

なんと、この短さで佐天さん編は終了です。（あ、やめて、石投げ
ないで）

それでは、どござ。

第18話 〈佐天の目覚め編最終章〉

「・・・安らかにな、佐天」

かざした右手の指先に、電気を帯びた反物質がたまり、そして・・・

バチッ！

一筋の電光が迸った。

「……えっ？」

そう、確かに電光が走った。

でも、『俺はまだ反物質を放射してはいない』。

その電光は、俺たちよりさらに後方、この部屋の入り口あたりから飛んできた。

「・・・っ！」

放たれた電光は、佐天の頭に装着されている装置に正確に当たった。

崩れ落ちる佐天。

「・・・！ 梓！」

「分かってる！」

何が何だかよく分からないが、佐天の能力が止まっている今は絶好のチャンスだ。

俺は床に転がっていたスタンロッドを拾い上げると、そのまま斉藤に向かって走り出す。

そして、完全に不意をつかれて動けないでいる斉藤に、スタンロッドを降りおろした。

バチッ！

「ぐわっ！」

叫び声をあげて斉藤は崩れ落ちる。

「梓、佐天は！？」

白衣をあさって、ポケットから銃を取り出しながら梓に聞く。

「大丈夫、気絶してるだけみたい」

「そうか・・・良かった」

梓の返事に安堵した俺は、部屋の入り口を見る。

そこには誰もいなかった。

「・・・何だっただんだ？」

俺が反物質を放射しようとした直前、確かに部屋の入り口の方から青白い光が一筋飛んできて、佐天の頭についていた装置を破壊した。

あれが何だったのかは分からない。

だが、あれのおかげで俺が佐天を殺さずに済んだのは確かだ。

「お兄ちゃん、佐天さんが!!」

見ると、佐天が薄くだが目を開けていた。

「佐天!!」

「あ、明俊さん……梓さん……」

「佐天さん、大丈夫!？」

「あ、はい……頭がガンガンしますけどね……」

頭がガンガンするというのは、多分装置を破壊されたときの衝撃が原因だろう。

「梓、悪いが御坂と白井のところに行ってきてくれるか？」

「え、うん。それで、どうすればいい？」

「二人の戦いが終わってるんだったら、あいつらと一緒に残りの5人を救助してきてくれ。もしまだやりあってるようなら、派手にブッ飛ばしてきてくれ」

「分かった!」

そう言って梓は、走って部屋から出ていった。

俺は続いて携帯を取り出すと、初春に電話をかける。

「もしもし」

『明俊さん！佐天さんは！？』

「大丈夫、無事だ」

『よ、良かったです』

涙声の初春。

「それで初春、泣いてるところ悪いんだが、救急車をよこしてくれないか」

『な、泣いてないですよ！』

「はいはい。じゃあ、佐天の前でたくさん泣けよ？」

『泣きませんって！』

「どうだか？じゃ、頼んだぞ」

俺は電話を切ると佐天の顔を見る。

「初春、泣いてましたか？」

「ああ。本人は泣いてないって言ってたけど」

「ふふ、初春らしいです」

そう言つて、屈託のない顔つきをする佐天。

「・・・佐天、ごめんな」

「何がですか？」

「俺は、お前を殺そうと・・・」

「ああ、そんなことですか」

「そんなことつてお前・・・！」

「そんなことですよ。・・・だって、今あたしはこうしてここに生きてるんですよ？それで良いじゃないですか」

「佐天・・・」

「むしろ謝るのはあたしのほうです。明俊さんや梓さん、それに初春や御坂さん、白井さんに迷惑をかけたんですから」

「みんな迷惑だなんて思つちやいない。だって、佐天は大事な友達だ。友達を助けるのに迷惑だなんて思つやつがいると思つか？」

「・・・明俊さんは優しいんですね」

「それを言うなら、佐天は強いさ。さっきの『今あたしはこうしてここに生きてるんですよ？それで良いじゃないですか』の発言に、

俺の心がどれだけ救われたことか・・・」

「それはあたしの本心です。・・・あたし、気付いたんです。能力なんてあっても無くてもいい。必要なのは『今を、自分を支えてくれる人たちと一緒に過ごすこと』なんだって」

「そうか・・・」

俺は納得しながら佐天の髪に触れる。

長く伸ばされたその髪は、俺が指を通すと引っかかることなく流れていく。

俺は改めて、この仲間を失わなくて良かったと思った。

「お兄ちゃん、残りの人の救助終わったよ！」

梓が御坂や白井と一緒に帰ってきた。

「そうか、ごくろうさん」

「佐天さん、大丈夫？」

御坂が心配そうに声をかける。

「はい、大丈夫です。それよりごめんなさい、心配かけちゃって・・・」

「良いんですよ。佐天さんが無事ならそれで。・・・救急車が到

着したみたいですね」

「よし、佐天を運ぼう。梓、そっちの肩に腕を回してくれるか？俺がこっちの肩に腕を回すから」

「オツケー」

「あたし、一人で歩けますよ」

「さっきまで、頭がガンガンするとか言ってた人間を一人で歩かせるわけにはいかないな」

「そうよ佐天さん、こういときは素直に甘えときなさい？」

「・・・はい」

こうして俺たちの、長い夜は終わった。

数日後、俺は佐天が退院するということで病院を訪れていた。

ちなみに梓は、「ちょっと寄りところがあるから」と言っ

かに行ってしまった。

俺はとりあえず、事前に佐天に言われたとおり、病院の公園のベンチに腰掛けて待つ。

・・・そういえば、白井も今回の事件の調査とやらで来れないとか言ってたな。

今日みたいな日くらい、仕事サボって来れば良いのに・・・ま、そもいかないんだろうけど。

俺がそんなことを考えていると、俺の視界が突然真っ暗になる。

「だーれだ？」

「・・・佐天」

「ちえ、ばれましたか」

そりゃばれるだろ、などと俺が心の中でツッコミを入れている間に、佐天が俺の隣に座る。

「検査でも特に異常は無かったんだろ？」

「はい、おかげさまで」

「そりゃ良かった。それで・・・能力の方は？」

「まだ使っていないのでなんとも・・・でも、自分の中で何か吹っ切れたような気がします。次の能力測定の際はみんなをビックリさせ

「てやりますよ」

そう言ってニコニコ笑う佐天。

その笑顔につられて、俺の表情もほころんでる……と思う（自分では良く分からない）。

「そっいえば、何か言いたいことがあるとか言ってなかったか？」

昨日、病院の公衆電話（まだこんなものあるのか。ま、病院じゃ電波は危ないからあっても不思議じゃないけど）から佐天が電話をかけてきて、そんなことを言っていたのを思い出した。

「え！？あの、その……」

突如、焦りだす佐天。

「どした？」

「えーっと……」

視線をキョロキョロさせながらテンパっている様子の佐天。

「言いづらいことなのか？」

「ここではちよっと……場所を変えても良いですか？」

「ああ、別に構わないけど」

佐天の提案で場所を変えることになった俺たちは、ひとまず病院

の敷地を後にした。

「風が気持ちいいな」

「そうですね」

病院を後にした俺たちは、河原にやってきた。

夏だというのに風は心地よい。

辺りには家族連れやカップルが涼みに来ていて、小さな子供たちの中には、裸足になって水遊びをしているのもいる。

こっちの世界に来てから、こっという風にゆったりする暇が無かったので余計に心地よく感じる。

佐天を見ると、風でなびく髪を手で押さえながら、日差しにキラキラ光る川面を見つめていた。

「思い返してみると、この学園都市に来てから色んなことがあったな……」

感慨にふけっていた俺の口から、思わず言葉がもれる。

「白井に助けられて、レベル5だって言われて、爆発事件に巻き込まれて、レベルアップ事件に首突っ込んで、佐天が誘拐されて・ホント、命がいくつあってもこの世界じゃ足りないな」

「……あたしと出会ったこと、後悔してますか？」

「？ どうして、佐天と出会ったことを後悔しなくちゃいけないんだ？」

「明俊さんや梓さんが関わったレベルアップ事件や誘拐事件って、どっちもあたしが巻き込まれてるじゃないですか。だから、あたしって疫病神なのかなって思って……」

そう言って、憂い（うれい）を帯びた顔をする佐天。

そんな、普段の佐天らしくない表情に、俺は佐天の頭に手をポンとのせる。

「佐天は疫病神なんかじゃねえよ。むしろ天使だな」

「天使……ですか？」

「転校してきたばかりで、まだ右も左も分からない俺たちに積極的に接してきてくれたろ？ それに優しくしてムードメーカーだし……」

「その・・・ちょっと聞きづらいことなんですけど、じゃあ明俊さんにとってあたしってどんな人間ですか？」

「そうだな・・・色々形容できるけど一言で言えば、なくてはならない存在、かな？」

「え・・・？」

俺の言葉に目を見開く佐天。

いやー、こつこついうのって本人の前で言うの恥ずかしいな。

「さっきも言ったけど、佐天は優しくてムードメーカーで・・・もう日常生活の一部って言うても良いな。佐天のいないつまらない生活なんて考えられないな」

うわー、なに告白みたいなこと言ってるの俺。どうみても告白です。

佐天もなんかリアクション無く俺の顔ジーンと見てるし・・・

これ完全に頭おかしい人だと思われてそうだな。

「あ、あの、明俊さんっ」

しばらくの沈黙ののち、おもむろに口を開く佐天。

「わ、わたしも、明俊さんのことどう思ってるか、言ってもいいですか？」

さっきのキザな発言のせいで、『ナルシスト!』とか言われるんだろうか……

流石にそれは応えるんだけど……

「わ、わたし……」

思わず身構える。

「……す」

「明俊さんのことが……」

「おーっす!!」

佐天が何やら言いかけたその時、誰かが声をかけてきた。

その声のした方を見ると・・・

「こんなところで二人で何してんの？」

「よお御坂、お前こそ何でこんなところに？」

レールガンこと、御坂美琴だ。

「何って、佐天さんが今日退院だから迎えに来たのよ。そしたら二人がこんなところにいたから声をかけたってわけ」

「そういうことか。いや実はな、佐天が話があるって言うから先に
出てきてここで話してたってわけ」

「へえ〜そうだったの。で、何のはな」

「何やってるんですか御坂さん!!」

そんな叫び声とともに、御坂の後ろから氷の槍が飛んできて地面
に突き刺さる。

「あ、梓!?!お前、寄るところが何とかって……」

「そんなことはどうでもいいのよ! それより御坂さん、なんてこ
としてくれるんですか!?!」

「あ、梓さん? 話の中身が見えないんだけど……」

「空気くらい読んでくださいよ!! あーなんかイライラしてきた、
御坂さん!今から私と勝負して下さい!」

「え、ちよつと……!?!」

「問答無用!!」

そう言うなり、梓の周りから冷気が発せられる。

「おい梓、一応一般人もいることだし……」

俺が梓を止めようとしたとき、突然強烈な風が吹き始めた。

「梓さん、あたしも参加します!!」

「さ、佐天まで!? しかも、地味に能力使うなし!」

「いいわ佐天さん!二人で御坂さんをギッタギタにしましょう!」

「さっぱり意味が分かんない! アンタ!この二人どうにかしてよ
「!」

「いや、俺に言われても……」

そうこうしているうちに、御坂VS梓&佐天という何とも奇妙な
構図の戦いが始まった。(しかも河原で)

「……どうしてこうなった」

「そのあなた、風紀委員ですの」

「……ん?白井か」

「って明俊さんではありませんの……それでは、能力者同士の
喧嘩が発生したというのはまさか……これですの?」

「どうやらそうみたいだな……」

「なにやっていますの、お姉さまがたは……」

「俺にもよく分からないんだが……」

「まったく御坂さんたら・・・お兄ちゃんもお兄ちゃんだし」

「俺が何したんだよ？ それに、さっきのやり取りなら女性4人で話し合ったんだろ？」

結局あの後、初春も召集されて、御坂・白井・初春・梓の4人で秘密会議なるものが開かれた。

ちなみに俺と佐天は何故か会議から除外されたので、仕方なく、応援として後からやってきた風紀委員の人たちにひたすら謝るという意味不明なことを続けた。（能力使って暴走してた佐天はまだしも、なんで俺まで・・・）

その会議の結果、御坂も何やら梓の言い分を把握したようで、「そうだったの、ごめんなさい」とひたすら佐天に謝罪していた。

それに対して佐天は、「今度何かいっばいおごってくれれば許します」とか何とか言っていた。

まったく、俺には何のことなのかさっぱり分からないのだが・・・

「それにしても、すっかり遅くなっちまったな・・・」

ドタバタ騒動の後、気を取り直して「佐天退院記念打ち上げ」なるものが盛大に執り行われ、ファミレスで食事会・テーマパークでおおはしゃぎ・カラオケで歌いまくり・・・と中々にハードでカオスな1日を過ごし、気付けば夜になっていた。

「そうだね・・・私も流石に眠くなつてきちゃった」

「じゃあ、先に風呂入って寝て良いぞ」

「うん、そうする」

俺もあくびをおさえながら寮の階段をのぼる。

と・・・

「・・・ん？俺たちの部屋の前に何かあるぞ」

「本当だ、しかもかなり大きい。お兄ちゃん、何か通販でもした？」

「いや、そんなものは・・・」

そう言いながら近づく俺たち。

段々物体の輪郭がはっきりと見えてきて・・・

「おい、ありや人間だぞ!？」

「しかも、常盤台の制服着てるよ!？」

俺と梓が慌てて駆け寄る。

その人物は地面にうつ伏せで倒れているようだ。

しかもこの後ろ姿、どこかで見覚えが・・・

「ねえあれ、もしかして御坂さん!？」

「そんなバカな!御坂がこんな所で倒れてるわけ・・・」

しかし、近寄って見ると、髪の色・長さはどちらも御坂だ。

「とにかく、起こして部屋の中へ入れよう!」

「うん!」

梓が御坂を仰向けにしているあいだに、俺は部屋の鍵を開ける。

「・・・え?」

俺がドアを開けた瞬間、後ろの梓から驚きの声もれた。

「どうした!？」

振り返ると、梓が御坂の顔をジッと見ていた。

「この人・・・御坂さんじゃない」

「何を言ってるんだ?どこからどう見ても御坂そのもの・・・」

その時、倒れていた御坂が口を開いた。

「・・・やっとあなたがたを見つけました、とミサカは思わず安堵
します」

・
・
・
・
・
なん、
だと？

く 佐天の目覚め編 e n d く

第18話 〈佐天の目覚め編最終章〉（後書き）

前書きにも書きましたが、これで佐天さん編は終了です。

それにしても明俊君・・・そこまで鈍感だと命がいくつあっても足りないよ？

後、御坂さん、空気読んでくださあ（書いてるの僕ですがw）

さて、最後に登場したのは例の彼女ですね（汗

なぜ彼女が明俊たちのことを知っているのか！？

そして、彼女の登場で明俊たちに何が起こるのか！？

あまり期待しないでお待ちくださいw

第19話 御坂妹（前書き）

佐天編が短くなってしまったことの反省を踏まえて、これからは多少時間をかけてでもストーリー構成を重視して頑張っていきたいと思います。

よって、この話より先は投稿が遅れ気味になることが予想されますが、なにとぞよろしく願います。

第19話 御坂妹

「・・・やっとあなたの方を見つけました、とミサカは思わず安堵します」

「・・・なん、だと？」

「み、御坂妹・・・？」

「私は誰の妹でもありません、ミサカはミサカです、とミサカはあなたの意味不明な発言に答えます」

「え！？ああ、いや、そうじゃなくて・・・」

「とにかくお兄ちゃん、ミサカさん熱があるみたいなの。部屋の中へ入れないと」

梓が御坂妹(?)の額に手を当てながら俺に促す。

「そ、そうか。立てるか？」

「申し訳ありませんが、足に力が入らないので自力では立てません、とミサカは二人に助力を求めます」

「じゃあ、私の肩に腕をまわして？」

「分かりました」

そう言って御坂妹は、ゆっくりとした動作で梓の肩に腕をまわす。

そのまま家の中へ入り、御坂妹を梓のベッドに横にする。

「少し寝た方が良さそうだな」

「そうね。じゃあミサカさん、普段と違う雰囲気ですぐ寝ようと思うけど、ゆっくり休んでね」

「お気遣い感謝します、とミサカは知り合って間もないお二人の親切に甘えます」

「気にすんなって。ゆっくり休めよ」

そう言って俺たちは梓の部屋を出た。

「俺たちはこの世界に来てから色々な事件に巻き込まれてきたが・
・ついに御坂妹まで登場してきたか」

俺たちは、俺の部屋でコーヒーを飲みながらこの事態について会議中だ。

「お兄ちゃん的には、とあるシリーズの中で御坂妹が一番好きなん
でしょ？実物に出会えて良かったじゃん」

そう、このとあるシリーズの中で俺が一番好きなのは御坂妹である。

どの辺が良いのかって？ 筆舌に尽くしがたいから割愛するくらいだ。

「確かにそうだが・・・それとこれとは話が違っただろ？ 梓も知ってるだろ、御坂妹の作られた理由を」

「うん・・・」

御坂妹。

レールガンこと御坂美琴の体細胞クローン。

元々は、レベル5を生み出す遺伝子パターンを解明して、レベル5を確実に発生させる『妹達』シスターズ計画によって作られたものだ。

ところが、『妹達』の量産体制を構築しようとした直前、計画を崩壊させる事実が発覚した。

それは、『妹達』のスペックが元の素体である御坂美琴の1%にも満たないということだった。

それにより、レールガン量産計画『妹達』は永久凍結されたのだ。
った。

「そこで終われば良かったんだがな・・・」

「今この時も、『アレ』が行われてるかもしれないだよな・・・」

「ああ・・・」

梓の言った『アレ』とは、現在レベル5の第一位、一方通行を、アクセラレータ
まだ誰も到達していないレベル6へと到達させる計画のことだ。

そもそも、通常の時間割り（カリキュラム）を施しても一方通行をレベル6にすることは可能だ。

しかし、それには250年もの歳月を要することが分かった。

そこで予測演算が行われ、レールガンを128回殺害することでレベル6に進化することが判明した。

しかし、もちろんレールガンこと御坂美琴は1人しかいない。

そこで登場するのが『妹達』だ。

武装した『妹達』を大量に投入することでスペック差を埋め、二万体の『妹達』を二万通りの方法で殺害すればレベル6への進化を

達成できるというものだ。

そしてその計画は、原作通りなら今も行われているはずだ。

「残念だが、この計画は俺たちにはどうすることも出来ない。この学園都市の上層部がからんでいるし、第一、俺たちじゃ一方通行には勝てない」

「それは分かっているよ。でも・・・」

「俺たちに出来ることは、今隣の部屋で寝ている御坂妹の検体番号が10032号より大きいことを祈るだけだ」

結局この計画も、第10032次実験で一方通行が上条さんに敗れることで凍結されることになる。

梓の部屋で寝ている御坂妹の検体番号が10032号より大きければ助かる見込みがある。

しかしその逆、もし10032号より小さい場合、残念ながら・

「もう寝よう。今ここであれこれ考えても埒が明かないよ」

「そうだね・・・って言っても私のベッド、ミサカさんが使ってるんだけど」

「じゃあ俺のベッドで寝ろよ。俺は床にでも横になるから」

「え、でも・・・」

「良いんだよ。妹だろうと誰だろうと、女性を床に寝かせるわけにはいかねえよ」

「優しいですね、とミサカはあなたの思いやりの精神に感動します」

「そうだろそうだろ・・・ってえ!？」

「夜に大声を出すのは不謹慎ですよ、とミサカは当たり前のことをあなたに説明します」

「いや、それは知ってるけど・・・じゃなくて、起きてちゃダメだろ!？」

「たまたま目覚めたとき、お二人のベッドに関するやり取りが聞こえたもので」

「ミサカさんは気にしなくてもいいのよ？」

「私は来客の身、そういうわけにはいきません、とミサカは・・・」

「病人に気を使わせるわけにはいかねえよ」

「でも、これでは議論が堂々巡りで解決しません」

「じゃあ、ちょっと狭いけど、私とミサカさんが同じベッドで寝るわ」

「それは推奨できません、ミサカの風邪がうつる可能性があります、とミサカは警告します」

「やっぱり俺が床で寝るよ・・・」

と、俺が無限ループしそうな議論に終止符を打った。・・・のだが、

「では、ミサカとあなたが一緒に寝るといっのはどうでしょう?」

「「ええっ!?!」」

「見たところ、あなたのベッドの方が大きいようですし、そのほうがスペース的に良さそうです、とミサカは論理的に説明します」

「いや、でも、その・・・」

俺が止めようとするが、御坂妹は俺のベッドにさっさと入ってしまった。

「ちよ!?! 梓、お前からも何か言って・・・」

「私、眠くなってきたからこれで失礼するね〜お休み〜」

そう言いつと、ニヤニヤしながら自室へと戻る梓。

・・・どうすんだ、これ?

「入らないのですか? とミサカは催促します」

催促つて、響きがなんかいやらしいな・・・

しかし、いざ床で寝るとなると、いくら夏といってもあまり健康上よろしくないのも事実だし・・・

クソッ、しょうがない・・・

「・・・分かった入る。ただし、俺に背中を向けて寝てくれよ」

「よく意図が分かりませんが、とりあえずミサカはその言葉に従います」

御坂妹が了承してくれたので、俺もしぶしぶベッドに入る。

「・・・暖かいですね」

「そうか？それは良かった。じゃ、早く寝ろよ？」

「・・・もう、かなり眠いです・・・と、ミサカ、は・・・」

しばらくすると、スウスウと小さな寝息が聞こえてきた。

やはり風邪がひびいているのか、眠りにつくまでは早かった。

本来なら、自分の後ろに女の子がこんな寝息をたてて寝ていたらドキドキして眠れないのだろうが、俺もパーティーやらカラオケの疲れが溜まっていたので、そんなことを考える暇もなく眠りについた。

「ん・・・うん？」

翌朝、俺は身体に感じる違和感で目を覚ました。

違和感というのは、風邪をひいたときに感じるようなものではな

く、もつと直接的なものだ。

「な、なんだ・・・？」

俺はとりあえず起き上がろうとする・・・が、腰に何かがまとわりついていてそれを許さない。

俺は御坂妹を起こさないように原因を・・・

ん？御坂妹？

俺がハツと思って首をひねると、俺の腰に両腕をまきつけて俺を抱き枕にしている御坂妹の姿が。

え？ え？ なんでこんな状況になってるの？

いやそりゃ、同じベッドに寝ていた以上こういう状況も想定できなくはないわけだが、まさかこんなことに・・・

俺が人生至上最大にテンパっていると、御坂妹がさらに強く抱き締めてきて、そして、

「人というのは・・・本当に温かいものですね・・・」

その御坂妹の寝言を聞いて、思わず腰に巻き付いている手をどけようとするのを止める。

そうだ、御坂妹もクローンとはいえ人間だ。

10032号が上条さんに好意を抱くのと同じように、いや、それより容易に、寂しさも抱くのだ。

昨日も梓に言ったが、この御坂妹を待ち受ける運命は残酷なものかもしれない。

ならば、今俺に出来るのは、そういう運命に没するまでに、ぬくもりを教えてあげることだ。

「・・・おはようございます、とミサカは起きているか寝ているかこの体制では分からないあなたに朝の挨拶をします」

「ずいぶん長い形容詞句だな。おはよう」

「起きていらっしやいましたか。それより、はからずもこの体制で寝てしまってすみません、とミサカはあなたに謝罪します」

「気にすんなって。寝ている間に自然にその姿勢になったってことは、深層心理の表れだ。ミサカは人のぬくもりが欲しかったんだよ」

「ぬくもり・・・ですか？ とミサカは良く分からないといった感じに聞き返します」

「いつか、分かるようになるさ」

「ではその時を楽しみにしていますね、とミサカは言葉とは裏腹に

あまり期待せずに答えます」

「あ、ひでえ！ まあミサカらしくて良いけどさ。さて、朝飯の準備してくるからちよっと待っていてくれ」

そう言って俺は、すでに起きて朝飯の準備をしているであろう梓のもとへと部屋を出た。

「わざわざ朝食まで用意してもらってすみません、とミサカは重ね重ね感謝します」

「気にしないでミサカさん。それに、食事は一人でも多い方が楽しいしね」

「そうだな・・・と言いたところだが、その雰囲気をぶち壊すようにミサカにいくつか聞きたいことがあるんだ」

「はい、なんででしょうか、とミサカは聞き返します」

「まず・・・何で昨日俺たちの部屋の前で倒れてたんだ？」

「お二人にお会いするためです、とミサカは即答します」

「私たちに？」

「なぜ俺たちのことを知っている？」

「お二人をお見かけしたからです」

「どこで？」

「研究所です」

「研究所？」

果たして俺たちはそんな場所に行っただろうか・・・

と思いついてハタと気付いた。

「まさか・・・佐天が捕まっていたあそこのことか！？」

「佐天・・・ああ、あなた方と対峙していた女性のことですね？
とミサカは確認をとります」

「そうよ。でも、どうして私たちが佐天さんと戦っていたことを知
ってるの？あの場には私たちと佐天さん、それに研究員の斉藤しか

いなかったはずだけど・・・」

「あの時、佐天の装置を破壊したのは青白い光・・・まさかミサカ、お前なのか？」

「はい、そうです、とミサカは真実を明かします」

「そうだったのか！ミサカのおかげで俺は佐天を殺さずにすんだのか・・・」

「お二人がああ状況で手詰まりのように見えたので、手を出さずにはいられなかったのです、とミサカは心境を告白します」

「その気持ちには本当に感謝しても感謝しきれないよ。本当にありがとう」

俺は、自分でもまったく意識せず御坂妹を抱き締めた。

「い、いえ、礼には及びません、とミサカは顔を赤らめながら答えます」

「あ、悪かった。それで、ミサカがああ研究所にいた理由だけ・・・」

俺は御坂妹から離れながら再び質問する。

「その質問には機密事項が含まれていますので、お答えするには符^ス丁の確認が必要です、とミサカは答えます」

もちろんパスなんて知りはないが、俺たちは御坂妹の関係している実験について知っている。

俺と梓は顔をあわせてうなずくと、御坂妹の顔をジッと見る。

「そのパスの必要は無い。なぜなら、俺たちはミサカの間わっている計画を知っている」

「計画の関係者なのですか？ とミサカは問いただします」

「いいえ、関係者じゃないわ。でも私たちが知ってるの、絶対能力進化（レベル6シフト）計画をね」

「・・・これ以上聞いても、なぜ計画について知っているのか教えてもらうことは難しそうですね」

「悪いな、こっちにも深い事情があるんだ」

いくらなんでも、「別の世界から来ました」なんて言ってもな・

「私があこの研究所にいた理由ですが・・・お二人はもう分かっているようですね、とミサカは一応確認します」

「まあな。調整とかそんなところだろ？」

「そんなところです」

「だろうな。それで、ミサカの・・・検体番号を教えてくださいませんか？」

「第10030号です、とミサカは聞かれたことに正直に答えます」

10030号・・・超ギリギリでアウト、か・・・

俺と梓のあいだに沈痛な空気が流れる。

後少し、後ほんの二つ三つ番号が遅ければ・・・

いや、まだ希望はある。

この世界は原作通りに進んでない部分も多々あるし、ひよっとしたらこの御坂妹も助かるかもしれない。

「そうか・・・いや、変なこと聞いて悪かったな」

「それで・・・ミサカさんはこの後どうするの？」

「そうですね・・・とりあえず研究所に行っただん調整しないといけないのです」

「でも、あそこは風紀委員と警備員アンチスキルががさ入れして、あらかたの物は没収したはずだけど」

「ミサカの調整室は最高レベルの機密性を有していますので、おそらく無事のはずです」

「そうだな、ミサカが存在……というより正体はごく限られた人間しか知らないからな。部屋も手付かずのままだろう」

「夜はどうするの？まさか、研究所に泊まるの？」

「さすがにあそこでは寝れませんよ、とミサカはあの研究所の薄暗い雰囲気を思い出しながら言います」

「じゃあここで寝れば良いさ。布団はそうだな……今から買いに行くか」

「え？今から？」

梓が驚きの声をあげる。

「時間的にもちようどいいだろ。布団を調達して昼飯食って、あの研究所に行く。完璧じゃないか」

「それ以前に、ミサカはここでお世話になっても良いのですか？とミサカは遠慮がちに尋ねます」

「気にすんなよ。好きなだけいればいいさ」

本当は好きだけにいることなんて、99%不可能だってことは分かっている。

本当は俺に、この現実を変えられるだけの力があればいいのだけど、今回の相手はさすがに強すぎる。

それでも・・・たとえ勝てもしない相手に立ち向かってはかなく散るのだとしても、それまでの過程を楽しむことはできる。

どうせなら、この御坂妹に楽しいと思えるような思い出を作ってやりたい。

俺は、その心に誓った。

第20話 上条当麻（前書き）

今回は話が進みません。

9月23日、改稿いたしました。

改稿前 上条さんにネタバレ

改稿後 上条さんにネタバレしません

詳しくは「お知らせ」にて。

第20話 上条当麻

「ミサカの名前ですか？とミサカは想定外の提案に戸惑いを隠せません」

「そつだ。どうせなら名前の一つくらいあった方が良いだろ？」

俺たちは現在、御坂妹の布団を買ったりその他の諸用事を済ませるため、夏のうだるような暑さのなか、コンクリートジャングルをシヨッピング街に向けて歩いていた。

そんな折、俺は御坂妹に名前をつけようと提案したというわけだ。

「ミサカにはすでに『ミサカ』という固有名詞があります」

「それはそつだが・・・なんとというか、そのまんまじゃないか？」

「そつねえ。『ミサカ』じゃ御坂さんと区別つかないし」

「しかし、その『ミサカ』というのはミサカの素体であるお姉さまから取ったものですので、変えるのはちょっと・・・とミサカは本音を漏らします」

「じゃあ下の名前をつけよう」

「そつね。どんな名前がいい？」

「そうですね……ミコト、でしょうか？」

「……それじゃお姉さまと全然変わってないぞ」

「呼ぶこつちが混乱しちゃうね」

「自分の名前を自分で考えるのは中々難しいですね、とミサカは考えあぐねます」

「じゃあ『琴美』はどうだ？」

「『コトミ』、ですか？」

「ああ。美琴をひっくり返したただけだけど、これならお姉さまとのつながりもあるしな」

「でもお兄ちゃん、流石にそれはひねりが無さすぎるような……」

「ホント、もう少しマシな発想はできないのかよ、とミサカはため息まじりにつぶやきます」

「ひでえ……」

確かにひねりもへったくれも無いけどさ……

「ですが……」

俺がorz状態になってもいいくらいショックを受けていると、

「『琴美』、ありますね、とミサカはあなたの提案に納得します」

「そ、そうか？そりゃ良かった」

けなされたと思ったら肯定された。

「あ、じゃあこれから、琴美って呼んで良い？」

梓がそう提案する。

もつとも、そう呼ばないと御坂との区別がつかないからな。

「構いませんよ、とミサカはその提案を許諾します」

「ホント！？ じゃあ琴美、私のことは梓、で良いよ」

「承知しました、梓お姉さま」

「・・・まあ、いつか」

「じゃあ俺のことは？」

「そうですね・・・ミサカは今まで男性を固有名詞で呼んだことがないので、どう呼んでよいのか分かりかねます」

「そっか。まあ、呼びやすいように呼んでくれて構わないから。さて、そうこうしているうちに着いたな」

俺たちが御坂妹に『琴美』と名づけているあいだに、店の前に到着していた。

「よっしや、ここで琴美の布団を買ったらそこらのファミレスで昼飯でも・・・」

俺がそう言いかけたとき、

「・・・御坂？」

後ろから男性のそう呼ぶ声が聞こえてきた。

その声を聞いた瞬間、俺と梓が固まる。

なぜなら、その声の持ち主は・・・

「ああ、やっぱり御坂か。そちらの二人は？」

俺と梓が同時に振り返って、そして、

「か、上条さん!？」

そう、声の持ち主は、幻想殺し（イメージブレイカー）こと上条当麻さんだったのだ。

「あれ？お二人は俺のこと知ってるのかな？」

上条さんは、見知らぬ俺たちが自分のことを知ってることに当然の疑問を抱くが、俺たちはそれどころじゃなくテンパっていた。

「何でこんなところに上条さんが」、とか、「インデックスさんはご一緒じゃないんですか」、とか、「あれ、今琴美に引き合わせるのはまずくね?」とか。

そんな俺たちの沈黙を破ったのは琴美だった。

「残念ながら、私はお姉さまではありません、とミサカはあなたの勘違いを訂正します」

「そ、そうなのか。・・・ん?じゃあ、御坂のことを『お姉さま』って呼ぶってことは、アイツの妹か」

「そついう訳ではありません」

「おい梓、俺が上条さんに挨拶しておくから二人で布団見てこいよ」

俺は慌ててこの場から琴美を遠ざけるため、梓に先に行くように指示する。

「わ、分かった。じゃ琴美、行きましょう」

「・・・よく状況が分かりませんが、とりあえず空気を読んで梓お姉さまについていきます」

そうして、半ば強引に俺と上条さんだけという状況を作り出すことに成功した。

「なあ君、状況を説明してくれると上条さんは助かるんだが」

当然のごとく、上条さんが俺に説明を求める。

「え、ああ、そうですね。俺は工藤明俊といいます。さっきの女性二人は、私服の方が俺の双子の妹の梓で、常盤台の制服を着ていたのが・・・御坂琴美さんです」

琴美のことを言おうか言うまいか迷ったが、100%追求されるだろうことは明白なので隠さずに言う。

「御坂琴美って・・・御坂美琴の妹じゃないのか？」

「え、ええ、そうですよ」

「そうか・・・アイツ、妹がいるなんて俺に一言も言ってないな。言ってくれば良いのに」

いや、だって本当の妹じゃないしなあ。

それに美琴自体が、まだ自分のクローンを直接見てないはずだし。

「上条さんは、どうしてこのような場所に？」

話題を変えるべく、俺が上条さんに話しかける。

「ん、ああ、昼飯を買いにな。あいにく、上条さんは貧乏学生なので冷蔵庫の中に蓄えが少なくなてな」

「そうなんですか・・・それは大変ですね」

この学園都市では、その人のレベルに応じて奨学金とかその他もろもろの援助の程度が決まる。

上条さんは、右手に幻想殺し（イマジンプレイカー）という超特殊な力を秘めているが、測定できないため上条さんのレベルは0である。

そのため、結構な生活苦を強いられている。

しかも、同じ部屋にはインデックスという暴食シスターが同居中であるため、必要以上に食費がかさんでいる。

「ところで・・・どうして君たちは俺のことを知ってるんだ？」

・・・はい、当然の質問きましたー

ここは一か八か・・・

「いやそれがですね、実は俺たち御坂美琴とも知り合いでして。まあ妹と知り合いなんだから当然なのですが。それで、美琴が上条さんのことをよく話すんですよ。『私の電撃が効かないツンツン頭』とか、『何で勝負に応じないのよあのバカ!』とか」

「中々の言われようだなおい・・・」

「・・・どうやら、俺のつつさの嘘（あながち嘘とも言えないが）が通じたようだ。」

「それで、お願いなのですが・・・」

俺は一気に畳み掛ける。

「御坂美琴には琴美に会ったことは話さないでいただけますか？」

「どうしてだ？妹のことくらい良いんじゃないか？」

「それは・・・あの二人、実はあんまり仲が良くなってですね。まあ、複雑な家庭事情があるらしいんです」

「そうか・・・分かった」

「それにしても・・・君の妹と御坂妹遅くないか？」

確かに、布団を買ってくるにしては長い・・・といっても、布団を買うのにどれくらい時間がかかるか分からんけど。

「女の買い物なんてこんなもんですよ。・・・あの、上条さん。今日初めて会った人にこんなこと聞くのもなんですが、良いですか？」

「ああ、俺が答えられる範囲であれば答えるよ」

「例えば上条さんが街中を歩いているときに誰かが脅されていたり、一方的にボコボコにされている現場に遭遇したら、どうしますか？」

「誰かが困っていたり、不幸な目にあってるのをほっとけないんだよな。だから、多分助けると思う。いや、絶対だな」

「たとえ相手が能力者で、自分が無能力者みたいな絶対的戦力差があっても・・・ですか？」

「現実には、そんな状況が何回かあったよ。そうだな・・・自分以外の誰かが不幸になるのが嫌なんだよな、俺。だから、そんな状況でも助ける」

「・・・すごいですね」

「身体が先に動いちゃうんだよな。それに、後悔したくねーからな」

「・・・」

やっぱり、主人公たる男は格が違ったようだ。

さすが、数々の困難をそげぶしてきただけのことはあるな。

「買い物は無事終了しました、とミサカは不意に後ろから声をかけます」

「のわっ!? こ、琴美さま、後ろからの不意打ちはダメージデカイので止めていただけますか?」 突然後ろから声をかけてきた琴美に、諭すように注意する。

「ふふ、琴美って結構お茶目だね。あ、上条さん、兄がお世話になりました」

そう言っ て頭を下げる梓。

・・・なんか、できの悪い息子の担任に挨拶してるみたいだ。

「いや別に、お世話って程のことは・・・あ、いけね! 昼飯!」

どうやら、本来の目的をすっかり忘れていたようだ。

「お急ぎのところ、わざわざお付き合ってもらってすみませんでした」

「良いつてことよ。じゃ、上条さんはこれで失礼!」

「あ、待って上条さん! 引き留めついでにもう一つ、携帯の番号とか教えてもらっても良いですか?」

「ん? ああ、良いぞ。・・・これでよしと。じゃ、今度こそじゃあな!」

颯爽と(?) 走って消える上条さん。

「・・・インデックスに噛まれないことを祈ってあげよう」

「そつだね……つてお兄ちゃん、何話してたの？」

「ああ、ちよつとな」

「何の話をしているのですか？ とミサカはお二人に尋ねます」

「いや、昼飯何食べようかな？と思ってさ」

華麗に話題をすりかえる俺。

すりかえておいたのさ！

「それなら、ラーメンというものを食べてみたいです、とミサカは提案します」

「ラーメン？」

「はい」

「そんなもので良いの？」

「そんなものだからこそ食べてみたいのです、とミサカは好奇心を抑えられません」

「よし分かった。じゃあ行くか」

ラーメンとはちよつと意外だったが、せつかくの琴美たっての希望だ。

今のうちに、色んなものを食べさせたり、楽しませてやろう。

そう、期限が来るまでの、今のうちに。

第21話 麦野沈利

「ラーメン、ごちそうさまでした、とミサカはお代をおごっていた
だいたお二人に感謝します」

三人でラーメンを食べて店から出たあと、琴美が満足げな表情で
そう言ってきた。

「ああ、気にしなくていいのよ」

「そうだぞ。それに自慢じゃないが、レベル5が二人ってことで俺
たちの口座には想定外の金が振り込まれててな。おごるくらい、ど
うってことないさ」

「では、これからもドンドンたかりますね、とミサカはしてやった
りの笑みを浮かべます」

「なん・・・だと?」

「お兄ちゃんはめられてるし・・・そういえば琴美」

「なんでしよう、梓お姉さま」

「こんなこと言うと失礼かもしれないけど、琴美って他の個体と比
べると表情が豊かなような気がするの、私だけかな?」

「梓お姉さまが他のミサカと出会ったことがあるかどうかは分かり
ませんが、そうですね、そうかもしれないません」

「理由とかあるのか？」

「ミサカがいた研究所、何の研究をしていたか覚えていますか？」

「ええ、感情が能力に影響するかどうか調べてたのよね」

「実は他にも、感情を植え付けたりコントロールしたりする研究もしていたのです」

「そんなことが可能なのか？そりゃ、この学園都市にかかれれば可能なんてそうそう無さそうだが・・・」

「その可能性を調べるために被験者として選ばれたのがミサカです、とミサカは告白します」

「うそっ!?!?」

梓が驚きの声をあげる。

「どうしてお前が!?!?」

「ミサカの方がその手の手荒な実験にはむいていると判断したのでしよう、とミサカは冷静に分析します。ミサカは単価18万円のクローンですから」

「そんなことって・・・」

絶句する俺たち。

そりゃ確かに、琴美含めた妹達はクローンだから作るうと思えば

作れるし、どのみち一方通行の実験に投入されるからってのも言い分としては成立するだろう。

でも、それでも生きているのに、何の躊躇もなく実験に使うなんて・・・

「しかしご覧の通り、ミサカには特別な変化は生じませんでした、とミサカは自分の良好な健康状態を主張します」

「つまり、その実験は不発だったってことか・・・」

「その時はそうだったようですが、今梓お姉さまのおっしゃったことを考えると、ほんの少しですが成果があったようですね、とミサカは自身でも気付かなかった変化に驚きつつ結論を出します」

「災い転じて福となす・・・じゃないけど、そのせいで琴美の表情が少しでも見られるのか」

「そうだね。でも、もし感情を植えつける実験が目に見えて成功していたら、次は感情を能力と結びつける実験の材料にされてたかもしれないんだね・・・」

「そうだな・・・」

もしそれが完全に実用化されでもしていたら、クローンに負の感情だけを送り続けて戦闘員として使うなんてことにもなっていたかもしれない。

佐天がそうされたように。

「ま、過ぎたことは気にしても仕方ない。さっさと研究所に行つて、調整とやらを済ませてこようぜ」

「そうね。琴美、行きましょ」

若干重苦しい話に思わず足を止めていた俺たちは、一路研究所へと向かつて歩き出した。

「さて、研究所が見えてきたわけだが」

「立ち入り禁止のテープがはられているようですね、とミサカは冷静に分析します」

建物の入り口には、黄色のテープで「keep out!」とバリケードがはられている。

「どうします、無理やり立ち入りますか?とミサカはお二人に尋ねます」

琴美の言葉に俺と梓は顔を見合わせニヤツと笑い、

「そういうときはな・・・」

「こつするの!」

俺たちが同時にポケットから取り出したのは、風紀委員の腕章だ。

「なるほど、職権乱用ということですか、とミサカはお二人の用意周到さに驚きあきれます」

「まあまあ、かたいこと言わない」

「これをつけてれば、万が一誰かに見られたり監視カメラをチエックされても、風紀委員の仕事ってことで誤魔化せるからな。さ、ちやっちやと済ませようぜ」

そう言っただ俺たち3人は、テープをくぐって中へと入る。

中は電力供給が止まっているのか、明かりがつかずまだ昼間だと

いつものに薄暗い。

「ところで琴美、その調整室ってのはどこにあるんだ？」

「お二人がご友人と戦っていた部屋の、ちょうど廊下の反対の突き当たりです」

「じゃあ、このT字路型の廊下を・・・左か？」

俺たちが佐天と戦った部屋はここを右に曲がった突き当たりだったからな。

左に曲がり、しばらく進むと・・・

「・・・あれ？行き止まりだぞ？」

あるのは白い壁だけだ。

ここに来る途中にもいくつか部屋はあったが、どこもすでにがさ入れされた後で特に何もなかった。

「まあ見ていてください、とミサカは種明かしをします」

そう言うと琴美はその白い壁に手をかざすと、バチツと音がして小さな電気がはしる。

すると、壁から何やら機械が出てきて、今度は琴美がその機械に顔を近づける。

しばらく琴美が機械とにらめっこしていると、

『調整室の使用可能権限保有者を確認しました。』

と機械の音声がして、突如壁がスライドして部屋が出現した。

「本来は網膜パターンの照合だけで良いのですが、現在電力供給が停止しているため、ミサカの能力で無理やり起動させました」

「なるほどな」

「その性質上、この部屋に入れるのは我々妹達と、オリジナルであるお姉さまだけです、とミサカは懇切丁寧に説明しました」

懇切丁寧に説明されながら、俺たちは部屋へと入る。

中には培養器と人間が横になれる機械（これが調整機か？）、棚いっぱい飾られた武器の数々。

「琴美、この武器はなんなの？」

「これは、ミサカ仕様の武器です。これでミサカは十二分に戦うことができます」

「結構な数だな・・・」

俺と梓が武器に見とれていると、琴美は調整機のスイッチを入れる。

「ではミサカはこれから調整にはいますので、しばらくお待ちください」

そう言うと、機械のふたが閉まる。

ピコピコと機械音がするわけでもなく、ただ静かな時間だけが流れていく。

だが、その静かな空間に突如足音が響き渡る。

俺と梓が同時に入り口の方を振り向く。

その足音はゆっくりと、しかし着実にこちらへと近づいてくる。

「梓」

「うん」

俺と梓が同時に入り口に近づくと互いに入り口をはさむように立ち、俺は部屋の内側にあるコンソールをいじってドアを閉める。

「これで入ってこれないはず・・・」

その足音は壁となった入り口の前で立ち止まったようだ。

足音の持ち主はコンコンと壁を叩いている。

どうやら空洞があるかどうか調べているようだ。

しかし、この部屋の存在に気付いても、妹達が御坂美琴しか入れない。

俺がそう思ったとき・・・

ジュッ

なにやら音がしたかと思うと、突如壁に赤い光がはしる。

その光は壁に、縦長の楕円を描くように動く。

どうやらその侵入者は、高エネルギーの光線か何かを使って壁に無理やり穴を開けているようだ。

俺はスタンロットを構える。

光線が楕円を一周して、誰かが壁を蹴ったのだろう、切り取られたコンクリートがこっちに転がる。

そして穴から、髪の毛長い人間が身をかがめて乗り込んできた。

俺は音を立てずに、スタンロットを振り下ろした・・・

ガシッ！

「ッ！？」

だが、降りおろした不意打ちは、侵入者が俺の腕を掴むことにより防がれた。

俺はとっさに腕を引こうとするが、侵入者の力は予想以上に強く離れない。

そして、侵入者がゆっくりとこっちを向いた。

「まったく……ただの視察兼人さらいの簡単な仕事だと聞いて来てみたら……何か邪魔者がいるじゃない？」

「な！？お、お前は、麦野！？」

そう。

そこに立って俺の手を掴んでいるのは、現在学園都市のレベル5の第五位（俺が二位になるまでは四位）、学園都市の暗部組織『アイテム』に所属している麦野沈利^{むきのしずし}、またの名は『原子崩し（メルトダウン）』……そいつだった。

「へえ〜？私のこと知ってるんだ。じゃあ、アンタも闇の世界の人間？」

麦野は俺の腕を依然として掴みながら、眼光鋭く聞いてくる。

「答える義理は無い・・・と言いたいところだが、そうだな、闇も知ってる表の人間、とでも言っておこうかな？」

俺の言ってることは間違っていない・・・と思う。

俺たちは裏の人間じゃないが、コイツら『アイテム』が裏の人間だっことは重々承知だ。

「世の中素直になつた方が良いときもあるわよ？ましてアンタ、私が誰だか知ってるんなら、私の能力も当然知ってるんでしょ？」

「ああもちろん。『原子崩し』さん？」

俺は余裕ぶつて答えるが、実際は全然余裕なんて無い。

麦野の能力をもってすれば、俺に簡単に風穴を開けることも出来るからだ。

まあ恐らく、反物質で無効化できるだろうが。

「この私が圧倒的有利な状況でそんなに落ち着いていられるなんて、頭のネジでもぶっ飛んでるのかしら？」

相変わらず麦野は余裕の表情だ。

「そうかもな。『俺一人の状況』ならな」

「え？」

麦野が俺の言葉の意味に気付いた瞬間、麦野の肩に手が触れる。

「あら、暗部の『アイテム』のリーダーにしてはずいぶん迂闊じゃない？麦野さん？」

そう、梓だ。

麦野が俺の方を見ているということはすなわち、梓に背を向けていたということだ。

「さうて、そのお兄ちゃんを掴んでる手をはなしてもらいましょうか？さもないと・・・麦野さんの氷のコメントがこの薄暗い建物の中に出上がることになるわよ？」

ちなみに、今の梓はマジだ。

見るもの全てを凍りつかせるような冷たい眼差しは、俺も今までで数回しか見たことのない強烈なものだ。

まさに、『氷の女王』と言ったところか。

「ホント、もう一人いることに気付かないなんて・・・迂闊だったわ！」

そう言うや否や、麦野は俺に体重をかけて押しのと、俺の方を向いたまま後ろに足を蹴り梓を突き飛ばす。

「ぐっ！」

その威力に梓が後ろによろめく。

「形勢逆転ってね！」

麦野はそう言って梓の方へと向き直ると、電子線を放つ。

その電子線はまっすぐ梓へと向かう……が、梓にとどく直前に消滅する。

「なっ!?!」

「おおつと麦野さん、俺を忘れてもらっちゃ困るなあ」

「ちっ、アンタの能力か！」

麦野は俺の方へと再び向き直ろうとするが、

「っ!?!? 足が動かない!?!」

麦野の足は氷付けになっていて、完全に地面と一体になっていた。

俺はそのすきについて梓の前へと駆け、前面に反物質を展開する。

麦野は再び俺たちの向けて電子線を放つが、反物質の壁に当たって消滅する。

「……アンタのその能力、一体? そっちの女の方の能力は冷氣系

だつて分かるけど……」

「そつだな……アブソリュートデリート完全消去、とでも言えば分かるよな？」

「完全消去……！？まさか、第二位の！？」

「そつさ。そしてこつちが俺の妹の梓、第七位のフリーズマスター零下支配。麦野の能力は、電子を操る能力だったな？ 残念ながら、梓じゃその電子線は防げないけど俺の反物質の敵じゃないな」

「……」

麦野は黙って俺たちを睨みつけていたが、有効な打開手段を思いつかなかったのだろう、

「まったく、ちよろい仕事だと思つてたのに、まさかこの私が丸め込まれるなんてね」

と言つて自分を拘束している氷を能力で溶かし始めた。

「あれ、お前一人か？」

「確かにそつね。『アイテム』つて、基本4人行動でしょ？」

「そこまで把握してるなんて、アンタたち本当に何者なのよ……まあいいわ。今回は別件の仕事も入ってたから、私一人だけで来たのよ。別件は絹旗に任せても十分だったし」

絹旗とは、麦野と同じく『アイテム』に所属しているレベル4の能力者、絹旗最愛のことだ。

「で、その『アイテム』の麦野さんが何のようなわけ？」

梓の言葉にはまだ警戒心が含まれている。

俺も一応、反物質バリアはまだ展開し続けている。

「さっきも言ったけど、視察兼人さらいよ」

氷を溶かした麦野が、あたりを見渡しながらさらっと言ってのける。

「視察は分かるが・・・人さらいとはさすが暗部の組織だな。誰をさらっように言われてるんだ？」

「誰って・・・ここに常盤台の制服を着たやつがいるはずだからソイツを連れて来いって言われたのよ」

「常盤台の制服を着た・・・だと？」

「それって・・・」

ここにいるであろう常盤台の制服を着た人間といえば、一人しかない。

御坂琴美（俺たち命名）。第10030号の御坂美琴クローン。

つまり麦野は、琴美を連れ去りに来たということか。

「それで？アンタたちは何でこんなところにいるわけ？見たところ、

風紀委員みたいだけど」

「私たちもその常盤台の制服を着た人に用があるのよ」

「裏の人間じゃないのに？ 変な人たちねアンタたち」

そう言う麦野の携帯に電話がかかってきた。

麦野は携帯で会話しながら、机の引き出しなどを開けて書類を見ている。

「ええ。え？製薬会社からの依頼？」

その言葉に俺と梓が反応する。

麦野の携帯にかかってきた製薬会社からの依頼。

多分それは、絶対能力進化（レベル6シフト）計画を知った御坂美琴が関連施設を破壊してまわっていて、その残った施設の一つの防衛を依頼されているのだろう。

「分かったわ。今からそっちに行く。絹旗たちにはこっちから連絡いれとくわ」

そう言って電話を切る麦野。

「……というわけで、アンタたちとはここでお別れになりそうね」

「また裏の仕事か？」

俺は知りつつも聞く。

「私たちの仕事なんて裏ばかりよ。さて、これで引き揚げるわ」

「あら、人さらいはしないのかしら？」

「その件は止めにしておくわ。アンタたちもその常盤台のやつに用があるんでしょ？アンタたちにあげるわ」

「あげるって……」

「だってその常盤台のやつ、どうせ死ぬんだろ？第一位様の進化計画とやらの材料にされてさ」

「どうしてそれを!？」

「ここの書類にそう書いてあるわ。その常盤台の人間がどこの誰かは知らないけど、どうせ死ぬやつをわざわざかささらう意味も無いでしょ？だからアンタたちにあげるわ」

どうやらその書類には、琴美が御坂美琴のクローンであることまでは記載されていなかったようだ。

だがそんなことよりも俺の心を揺さぶったのは、麦野の『だってその常盤台のやつ、どうせ死ぬんだろ?』のセリフだ。

確かに今まで俺は、その現実を認識していて琴美に思い出作りをしてきた。

だけど、こうして今改めて言われてみると、俺の心を強く揺さぶ

ってくる。

俺は、琴美が死ぬという現実をまだ容認できていないのか？

いや、人の死なんて誰一人容認なんて出来ないだろう。

だけど、俺たちがこの現実を容認しない場合、最強を敵にまわすことになるのだ。

それでもなお、俺は「抗いたい」と思っている？

「行っちゃったね」

「ああ」

立ち去る麦野の後ろ姿を見ながら、俺は後ろの調整機のふたが開く音を聞いた。

「調整が終了しました、とミサカはお二人に報告します」

「琴美、どう？大丈夫？」

「はい、調整で身体が軽くなったような感じですよ。ところで、彼はどうかしたのですか？とミサカは梓お姉さまに問いかけます」

「え？ああ、お兄ちゃん？何かボーっとしちゃって」

「別に俺はボーっとなんかしてないぜ？さ、帰ろうぜ」

そう言っただけで歩き出しながら俺は再び考える。

助けられるかどうかは別にしても、俺たちは今まで「原作通りに物事が進むために」介入してきた。

だが、俺が仮に琴美を助けるといふ決断をすればそれはすなわち、「原作からそれるように」介入するということになる。

そうすれば、僅かながら俺たちの知っている話とは違うストーリーになるということだ。

でもそのわずかなゆがみが、後々大きなゆがみになる可能性があるのだ。

その危険性をおかしてでも、俺は琴美を助けたい？

自分の中の、「最強に抗う恐怖」と「自分の知らない世界への不安」と「琴美を助きたい」という葛藤にさいなまれつつ、俺は帰路へと就いた。

第20話改稿のお知らせ

9月23日、第20話を中規模改編いたしました。

改編内容ですが、改編前は明俊が上条さんに自分たちの素性を話すというものでしたが、そこを、素性を明かさないということにしました。

理由ですが、頂いた感想の中に、「主人公が素性を話してしまうのはマズイのでは？」という主旨の感想がありました。そこで私も読み返してみたところ、

- 1．素性を明かしてしまうのは読む上でつまらなく、ある意味で二次創作のタブーをおかしてしまっている
- 2．今後、明俊が上条さんに正体を明かすことによって生じるメリツト、及び、そのネタを使った話が非常に作りにくい（つまり、そもそも素性を明かす必要が無かった）

この二点の理由により、第20話を改編するにいたしました。

誠に勝手ながら、ご容赦下さい。

同時に、大変貴重で参考になる感想・ご意見、ありがとうございます。また、

これからも、引き続きご愛読いただけると幸いです。

第22話 デート・・・ですか？

研究所で麦野と出会ってから一週間近くが経過した。

俺は未だにあの葛藤に終止符を打てていなかった。

まったく、情けないことこの上ないのだが、一度深く考え出してしまった者が沈む、自問自答の沼に俺もはまっていた。

「彼、最近何か思い詰めたような顔をしていますね、とミサカも若干深刻な顔つきで梓お姉さまに原因を聞いてみます」

「そうね。でも、今回は私でも原因が分からないの」

そう言う梓の言葉が聞こえてきて、俺は少し安堵する。

もちろん、梓は俺が何を思い詰めているか知っている。

だが、何回琴美がそのことを梓に聞いても、梓はそのことを黙ってくれていた。

梓は俺に、

『これはお兄ちゃんが結論を出すべきことだと私は思うの。私じゃアクセラレータ一方通行に手も足も出ないけど、お兄ちゃんは第二位だから彼に對抗できるかもって。お兄ちゃんには選択できる権利があると思うの。だから・・・任せる』

この梓の言葉は、決して俺に全てを押しつけるために言ったものではないだろう。

げんに、その会話をしたときの梓の表情には、自分にはどうすることも出来ない悔しさが滲んでいた。

だが果たして、梓の言った「力あるものの選択の権利」は俺にもあるのだろうか。

またしても思い悩んでいると、携帯に電話がかかってきた。

ディスプレイの文字を見ると、そこには「佐天涙子」の名前があった。

俺は、何だろうと思いつながら電話に出た。

「よお佐天。どうした？」

『あ、あの、明俊さん、今から予定とか無いですか？』

「今から？別に何も無いけど・・・」

『じゃあ、その・・・』

「……?」

佐天は何やら言いよどんでいる。

「どした?」

『いえ、その……こ、これから、あたしとお茶でもしませんか?』

「え?」

『い、いえ!嫌じゃなければ……』

「ああ、別に構わないけど……」

『ホントですか!?!じゃあ、明俊さんの家まで行きますね!』

「あ、ちょっと待った。そんな女性の手をわずらわせるようなことはさせないさ。公園で待っていてくれ、俺が出向くからさ」

『良いんですか?』

「もちろん。じゃあ今から準備して行くから、公園で」

『はい!』

そう言っただけで電話は切れた。

「……佐天、やけに上機嫌だったな」

「今の電話、佐天さんでしょ？なんだって？」

「ああ、お茶に誘われたよ」

「え？・・・それってもしかして、デート!？」

「そんなまさか。みんなでっってことだろ」

「なに言ってるのお兄ちゃん。これをデートと言わずして何をデートというのかしら?」

そんなことを言いながら梓は腕をウリウリと俺に押し付けてくる。

「はいはい。じゃ、佐天待たせるのも悪いから行って来る。お前も来るか?」

「冗談。誰がデートの邪魔なんてするのよ。行ってらっしゃい、楽しんできてね」

「・・・いつもそうだが、梓は俺と佐天がからむといつもニヤニヤしてるな。」

不気味で仕方ないんだが・・・

それにしても・・・デート、か。

言われるまでは何とも思ってたけど、確かに、女の子とお茶なんてデートそのものだな。

ま、佐天にそのつもりはないだろうけど。

俺は佐天に好かれるようなことは何もしてないつもりだし、第一、俺は一度佐天を殺そうとしてるしな。

アイツは気にしてないなんて言ってたけど、それでも、自分を殺そうとした人間を好きになるやつなんていないだろう。

俺はそんなことを思いながら、佐天の待っている公園へと向かった。

〈梓&琴美 side〉

「彼がいないようですが、どうかしたのですか？」とミサカは問いかけます

明俊が電話に出て出かけるまでの間、琴美はトイレに入っていて明俊のことに気付かなかった。

「え？ああ、お兄ちゃんなら佐天さんとデートよ、デート」

「デート……ですか？」

「そ。あの誘拐事件の一件から、佐天さんお兄ちゃんに気があるの。あゝ、お兄ちゃん良いなあゝ。私もデートしたいなあ」

「梓お姉さまも彼とデートしたいのですか？」

「そうじゃないわよ……」

琴美のボケに切り返しなから梓は琴美の方を何気なく見た。

すると、琴美がブーツと空気とにらめっこしていた。

その顔にはどこか複雑な表情が見え隠れしていた。

少なくとも、梓にはそのように感じられた。

「琴美、どうかした？さっきからブーツとしちゃって」

「……デート」

「えっ？」

「デートと聞いて何故かモヤモヤしました、とミサカは自分にも分からない心境を吐露します」

「琴美……？」

梓は琴美の言った言葉の意味を考える。

デートと聞いて心がモヤモヤした、ということとは……

「まさか琴美、嫉妬してる？」

梓は至った結論を口にする。

「これが嫉妬という言葉に当てはまる現象なのかは分かりませんが、一般的にはそうなるでしょう、とミサカは客観的に分析します」

「じゃあ……琴美もお兄ちゃんのが好きなの？」

「……どつなんでしょう？」

「はあく、ホントにお兄ちゃんはモテて良いなあ」

梓はそんなことを言ってため息をつくが、すぐにあることを思いつく。

「じゃあ琴美、今からお兄ちゃんの後をつけない？」

「後を……ですか？とミサカは犯罪行為ストレスの発言に驚きを隠さずにいられません」

「デートの後をつけるなんてテレビとかではよくあることよ。それに、デートしてるお兄ちゃんを見れば、そのモヤモヤの正体も分かるってもんよ」

「……それもそうですね、とミサカは梓お姉さまの案に賛成しま

す

「そうと決まれば、さっそく後を追っわよ！」

「しかし、彼がどこに向かったのか分かるのですか？とミサカは意気揚々としている梓お姉さまに聞いてみます」

「公園で待ち合わせだって言ってたの。多分、第七学区の中心街の近くにある公園ね。さ、早く行きましょ」

そんなこんなで、梓と琴美の明俊追跡作戦が展開されるのであった。

〈明俊 side〉

「あ、明俊さん！」

俺が待ち合わせ場所の公園に到着すると、すでに佐天がベンチに

腰掛けて俺を待っていた。

「よお、遅くなって悪かったな。せっかく出かけるのにお金が足りないんじゃないから、ATMで下ろしてきて遅くなっちゃった」

「別に、そんなにお金使うつもりなんて無いですから、大丈夫ですよ」

「いやいや。佐天はお金を使う必要はない。ただ、下ろしてこないと俺が佐天におねなくなっちゃうからな」

「え!？」

俺の「おごる」という言葉に驚いたのだろう、佐天が声をあげる。

「そんな、悪いですよ!」

「なーに気にすんなって。それにせっかく誘ってもらったんだ。ここは経費くらいは俺に任せてくれよ」

「でも・・・良いんですか?」

なおも遠慮しようとする佐天。

俺と一つしか変わらないのに(といっても俺も中二だが)、なんて良い子なんだ。

「良いんだよ。ここは男を立てると思ってさ」

「・・・はい、分かりました。じゃあ、思いっきり任せちゃいます」

「けど良いですね？」

「しびしび承知した・・・と思ったら、さすが、切り替えが早いな。」

「おう。ドンと任せてくれ」

「よし、じゃあたくさん食べちゃおうかな！」

「そう言ってエへへと笑う佐天。」

「・・・かわいい笑顔だな、おい。」

「思わず見とれてしまったではないか。」

「?どうしたんですか、あたしの顔ジーツと見つめて。ひよっとして、何かついてますか？」

「ちょっと見つめすぎてしまったようだ、佐天に不思議そうな顔をされてしまった。」

「いや、ちょっとな。これって傍から見れば、世間で言うところの『デート』なんじゃね?って思ってたさ」

「え!?!で、デートですか!?!そ、そんな・・・」

「そう言っつて、顔が真っ赤になってしまった佐天。」

「ひよっとして、デートという単語に過敏に反応してしまったか？」

「いや、別にデートしてるって訳じゃなくて、他人から見たらデー

トに見えるだろうなってだけで……」

「そ、そうですね……明俊さんとデートだなんてそんな……」

……なにこのシニール(?)な展開。

周りから見たら、初々しいカップルそのものじゃね？

まあ良いか、今回はあくまでお茶だしな。

深く意識することもないか。

「それで、どうする？とりあえず、サ店でも行くか？」

「え、さ、『さてん』だけに、ですか？」

「……とりあえず、ファミレスにでも行こうか」

未だ顔を赤らめたままの佐天の、何とも言えないギャグに身体を涼しくした俺は、一路ファミレスへと進路を取った。

「俺はアイスコーヒーにするかな。佐天は？」

「あたしはアイスティーにします」

「アイスコーヒー1つにアイスティーが1つですね、かしこまりました」

注文を確認して店員が去る。

「それにしても明俊さん、最近どうしてたんですか？」

「え？何が？」

「だって、ここ一週間くらい風紀委員に顔出さなかったじゃないですか。梓さんも来ないし、みんな心配してたんですよ？」

「あ、ああ、そういうことか。まあアレだ、最近事件続きで疲れがたまってるな。風紀委員になってまだ間もないのにあんなに事件に遭遇したからさ。さいわい、俺たちは非常員だから毎日顔を出す必要も無かったしな」

実際は、今言ったのは顔を出さなかった理由の半分だけかな。

もう半分は、琴美を一人にしないためだ。

麦野のような人達が、また琴美を『回収』しに来ないとも限らないからな。

しかしどうやら、その様子はないようなので、今日は出かけてみることにしたというわけだ。

まあ何かあっても、梓がいるから大丈夫だろう。

「でも、二人のいない風紀委員はちょっと寂しかったですよ」

「そうか？俺たちの来る前の風紀委員が恐らくそんな感じだったと思われるんだが。ってか、俺たちってそんなに面白い人間なのか？」

「そうじゃなくて・・・何て言えば良いのかな。和むというか何と
いうか・・・とりあえず、いてくださって感じです」

「なんじゃそりゃ。まあ、そこまで言うのなら、これからは極力行
くようにするよ。逆に、佐天は風紀委員じゃないんだから毎日のよ
うに行かなくても・・・」

「えーひどい。明俊さん、あたしのことそんな風に邪険に扱うん
ですか？」

「いや、誰もそんな風に扱っては・・・」

「それに御坂さんだって、風紀委員じゃないのに勝手に通ってるじ
やないですか」

「いや御坂はしょうがない・・・じゃなくて、風紀委員と知り合
ってだけで狙われることもあるんだぞ？スキルアウトの中には、風
紀委員を良く思っていない連中だっているだろうし」

「そしたら、明俊さんが守ってくれるから大丈夫です」

「おいおい、俺がいつも一緒にいられる訳じゃないんだからさ・・・」

「それなら、一つ良い方法があります」

そう言つと佐天は、また顔を赤くして俺に耳打ちしてきた。

「わ、わたしと、つk」

「お待たせいたしました。アイスコーヒーとアイスティーになります」

佐天が何やら俺に言いかけたとき、店員がアイスコーヒーとアイスティーをトレーにのせて俺たちのテーブルにやって来た。

「あ、置いて下さい」

「かしこまりました」

店員はコーヒーとアイスティーを置いて帰っていった。

「さて飲むか。・・・おい佐天、どうした？」

見ると、佐天が帰っていく店員を、顔を赤くしてプルプルしながら睨み付けていた。

・・・怖いけど、なんかかわいくも見えるな。

「佐天、何があったのか知らんが、そんな顔してるとかわいい顔が台無しだぞ？」

俺がそう言つと、今度はこっちを向いて顔を真っ赤にする。

なんだ、ここまで表情が安定しない人も中々いないと思うんだが。

俺は、赤くなったり深呼吸して落ち着いたかと思つたらまた赤くなる佐天を見ながら、アイスコーヒーを一口飲んだ。

第23話 相談(前書き)

今回は短めです。

第23話 相談

（梓&琴美 side）

「何を話しているのでしょうか？」とミサカは盗み見ながら疑問を口にします」

「何かしら・・・でも佐天さんの顔色を見る限り、聞いたらニヤニヤしそうな会話であることは間違いなさそうね」

明俊の後を尾行してきた梓と琴美は、明俊たちの姿が見える席に陣取り二人の様子を見守って（？）いた。

「で、どう琴美？二人の様子を見た感想は？」

梓がニヤつきながら琴美の顔を見る。

「良く分かりません・・・ですが、ミサカもあのようにお茶したいとは思いません」

「そう・・・やっぱり、それは恋心よ」

「なるほど、とミサカは頷きつつ更なる解説を求めます」

「例えばそうねえ・・・今、佐天さんと自分が入れ替われますって言われたらどう思っ？」

「それは、入れ替わりたいですね、とミサカは正直な気持ちを述べます」

「佐天さんが羨ましい？」

「はい」

「あゝ、完全に恋ね」

「これが・・・恋、なのですね」

「ホント、お兄ちゃんってフラグばっかり立てるくせに気付かないのよね。上条さんのことフラグ一級建築士だなんて、お兄ちゃんだけは言えた義理じゃないわね」

「上条・・・ああ、あの髪がツンツンしていた方ですね」

「そ。あの人も一級フラグ建築士なのよね。ホント、主人公格の人間ってのはそんなもんなのかしらね？」

そう言っつて梓はため息をはく。

琴美は、梓が何の話をしているのかイマイチよく分からないので、明俊の方をジッと見ている。

その目には、やはり複雑な感情が渦巻いていた。

と・・・

「いらっしやいませ。二名様でよろしいですか？」

「ええ」

「それにしても珍しいですね、白井さんが相談事だなんて・・・」

「あら、わたくしにも悩み事くらいありますわよ？」

「でもそれなら、まず御坂さんに聞くのがセオリーなんじゃないですか？それに、佐天さんや明俊さんたちも呼んだほうが・・・」

「実は・・・そのお姉さまに関する相談ですの。佐天さんには一応連絡をいれたのですけれど、今日は用事があるからと言ってしまったわ。明俊さんたちは、まだこの学園都市に来て日も浅いのになんかくしのわがままを聞いていただくのははばかられますし。最近お二人ともお顔を見せないところを見ると、お疲れのようですよ・・・」

琴美の目に、二人の女子中学生の姿が映った。

一人は常盤台中学の制服で、いかにもお嬢様といった感じだ。

もう一人は、頭に花の飾りをのせたなんとも風変わり（？）な感じだ。

「・・・ん？あれ、白井さんと初春さんじゃない」

「梓お姉さま、あのお二人をご存知なのですか？」

「ええ、二人とも私たちの通う風紀委員ジャッジメントのメンバーよ。どうやら二人だけのようね・・・って、お兄ちゃんたちの席の方に向かってるし！」

店員に案内される白井たちは、徐々に明俊たちの座っている席に近づき、そして・・・

（明俊 side）

「あら？明俊さんではありませんの？」

「よお白井。まさかこんなところで会うとはな」

俺が佐天の顔色の変化を観察していると、白井と初春がやって来た。

「あ、佐天さんも一緒じゃないですか！じゃあもしかして、佐天さ

んが白井さんに電話で言った用事って・・・」

「あゝ！！初春その先は言っちゃだめゝ！！！」

「何も隠す必要はありませんわ佐天さん。誰がどう見たって、デートにしか見えませんわよ？」

「うう・・・」

そう言っつて顔を真っ赤にする佐天。

ちよつとフォローを入れておくか。

「デートで盛り上がってるどころ悪いが、これは一応お茶会・・・」

俺がそう言おうとすると、途中で白井と初春に睨まれた。

まるで、「その続きを言ったら、どうなるか分かっていますわね？」とでも言わんばかりのすごみの効いた睨みで、俺は続きの言葉を飲み込む。

「さて、お二人の邪魔をしては悪いですし・・・どこか別の席に座りましょうか」

「そうですね。白井さんの恋愛相談を二人に聞かせるわけにもいきませんし」

その初春の言葉を聞いた瞬間、俺は飲んでいたコーヒーをふきそっとなつてむせる。

「ゴホツ、ゴホツ！な、つ、ついに白井にも男が！？」

「うそー！？白井さんは御坂さん一筋だと思ってたのに！」

佐天も同じことを思ったのか、驚きの表情を隠せない。

「な！？ち、違いますわよ！ってか、どうしてそうなりますの！？」

「いや、だって今初春が恋愛相談って・・・」

「あ、私が言った恋愛の対象は御坂さんのことで・・・」

「紛らわしいよ初春！白井さんが御坂さんのことI o v eなのは当然のことでしょ！？」

「そうだぞ初春。それに、白井と御坂の関係はもはや恋愛などという浅いものではないんだぞ？」

「3人で何勝手に話を進めてますの！？特に明俊さん、わたくしはまだお姉さまと共に一夜を過ごしたことはありませんわ！」

「マジかよ！？」

「ちょっと！白井さんも明俊さんも何言ってるんですか！？」

「そうですよ！こんな公共の場所でそんなこと大声で言っつて！それに、白井さんは結構深刻そうなんですよ！」

「おいおい、元はと言えば初春、お前が恋愛相談とか言い出したのが原因だろ？」

「もうその話は止めませんか？というか、わたくしの話はお姉さまとのイチャイチャとかそういうことではありませんわ」

「どつやらマジ話のようだな。良かったら、相談にのるぞ？」

「でも、お二人の邪魔をするわけには……」

俺と佐天に気を使っているのか、なおも遠慮する白井。

「ああ、気にしなくていいよ白井さん。（本当はもうちょっと二人きりが良かったけど）」

佐天が最後のほうに何やらボソツと呟いた……ような？

白井は少しのあいだ考えていたがやがて、

「分かりましたわ。それでは初春、お言葉に甘えて同席させていただきますましよ」

そう言っつて白井は俺の隣に腰を下ろし、初春も正面に座っている佐天の隣に座る。

「わたくしはアイスコーヒーにしますわ。初春は？」

「あ、じゃあ私はフルーツパフェお願いします」

二人は水を運んできた店員に注文する。

……初春がパフェとか注文すると、必ずと言っていいほど食べ

る前に『仕事』が入るのだが、今回は大丈夫だろうか。

俺がそんなことを考えていると、初春が白井に早速尋ねる。

「それで白井さん、相談というのは？」

「それが・・・お姉さまが最近変なんですの

「変・・・とは具体的にどういうことだ？」

俺が先を促すと、初春や佐天も身を乗り出してくる。

「お姉さまはどうやら、わたくしたちに秘密で何か問題を抱えておられるようなんですの」

「ふむ・・・なるほどな」

俺はそう言って考える素振りをする・・・が、おおよその察しはついた。

「でも、御坂さんにだって秘密の一つくらいはありそうですよね？
そこまで神経質にならなくても・・・」

佐天の意見ももつともだが、恐らく今回はそんな、単に秘密といった感じではないだろう。

「でも、夜な夜な野暮用と言ってどこかに外出しますのよ？しかも見たところ、ほとんど寝ていないようです・・・」

そう言って思い詰めたような顔をする白井。

その様子に佐天も、

「……なんか、男の人とデートとか、そんな甘い事態じゃないみたいですね」

と言つて思案顔をする。

他の三人が黙つたなか、俺も考える。

十中八九、御坂の言う野暮用とは『絶対能力進化』計画の関連施設の破壊工作のことだろう。

問題は、このことを白井たちに言うのははばかれるということだ。

この件には、学園都市の裏が絡んでいる。

自分のクローンが実験に使われている御坂はともかく、全然関係のない白井たちに話してしまつても良いのだろうか？

俺が考えあぐねていると、白井が重い一言を口にした。

「……やはり、わたくしにはお姉さまのパートナーはつとまらないのでしょうか？」

「「え？」」

白井の突然の発言に、目を丸くする初春と佐天。

「お姉さまは以前わたくしにおっしゃって下さいましたわ。『同じ学校の、同じ部屋で暮らす、離れようにも離れられないパートナー』と。あれは、あの時ナイーブになっていたわたくしにかけた、その場しのぎの偽りの言葉だったのでしょうか？」

思わぬ発言に言葉を失う俺たち。

いつもなら、こんな風に白井が御坂のことを疑うなんて絶対にありえないことだ。

しかし、ボロボロになりながらも白井に何も話そうとしない御坂を見て、白井の中に初めて「自分は御坂にとつて頼れない存在なのではないか？」という不安から生じる疑心暗鬼が渦巻いているのだらう。

当然ながら御坂は、白井が頼りがいが無いから黙っているわけではない。

「それはちょっと考えすぎじゃないか？ただ単に、白井に迷惑をかけたくないだけかもしれないし・・・」

「だとしたら、これほど水臭いことはありませんわ・・・」

そう言ってまた訪れる沈黙。

だ
が
・
・
・

「オラオラ!!店の中の人間は全員おとなしくしな!!」

沈黙を破る怒号が店の中に響き渡った。

第24話 発覚

「オラオラ！！店の中の人間は全員おとなしくしな！！」

俺たち四人を包んでいた沈黙に割って入ってきたのは、入り口から入ってきた顔を隠した二人組の男だった。

「何事ですよ！？」

沈痛な表情から一転、険しい風紀委員の顔になる白井。

「どうやら立てこもりのようだな！しかも厄介なことに・・・」

俺が言い切る前に、

「これで全員かぁ！？こつちにはガキの人質がいるんだ！コソコソ隠れようなんてことは考えんなよ！！」

「し、白井さん！女の子が！」

「くッ、これでは迂闊に近づけませんわ！」

犯人のうちの一人が小さな女の子を従え、しかもその手にはナイフが握りしめられていた。

しかも犯人たちは、互いが背中合わせをして店内を全方位見渡せ

るように立っていて、背後から忍び寄ることも不可能な状況だ。

「ちっ、奴らうまく立ちやがって……白井、どうする？」

俺がそつと白井にささやく。

「これは少々厄介ですわね。わたくしがレポートして奴らを確実に倒せば良いのですけれど……人質さえいなければ何とでも出れますのに……」

そつ、問題は人質の存在だ。

両者とも一撃で倒せば何の問題もない。

例えば、白井が奴らの上にレポートして同時に奴らを無力化出来ればそれにこしたことはない。

しかし、女の子を人質に取っている男の手にはナイフが握られている。

もし攻撃の弾みにナイフが女の子を傷つけたりしたら、不意打ちの意味が無くなってしまふ。

この状況を打破する方法は二つ。

一つは、人質のことは多少目をつむり、白井の不意打ちにかける。

もう一つは、危険な行動は避け、なんとかして女の子を奴らから遠ざけるか。

だがこの場合、当然ながら前者を選択するメリットは薄い・・・
というより、リスクの方が大きい。

リスクの大きい作戦をとるのは、万策尽きてなおかつ、状況が何かしらの要因で緊迫の度合いを増した時だけだ。

「・・・問題は、どうやって奴らから女の子を引き離すかだ。白井、初春、何か妙案は？」

「情けないことながら、何もありませんわ・・・」

「私もです。ホント、人質さえいなければ・・・」

「佐天は？」

「ごめんなさい、何も・・・」

「そうか・・・仕方ない。動きがあるまではこのまま様子見しかないな」

俺がそう言って、視線を犯人たちに向けたその時。

バチッ！

まるでスタンガンを使ったかのような音がして、店内の照明が一斉に消えた。

店の窓には、夏の日差しを遮るためにカーテンがおりていて、照明が消えた店内は昏間だというのに薄暗くなる。

「こ、今度は何なんですの!？」

「俺に聞くなよ!」

俺がそう言って犯人たちがいる方へ目を凝らした瞬間、

ガン！　　ガン！

乾いた銃声のような音が二回に響く。

「な、なんだ!？」

「くそつ、銃撃だ!!」

見ると、犯人たちは手を押さえている。

誰かの銃撃が、奴らのナイフを弾いたのだろう。

「……ッ、今だ!」

「分かっていますの!」

好機とみて俺が叫ぶやいなや、白井が奴らの近くにテレポートし、

あっという間に一人をくみ伏せる。

もう片方の男は、相方が突然現れた常盤台の制服の少女を見て、

「ちっ、テレポーターか!？」

そう言って店の入り口へと走る、が・・・

「なっ!?! ドアが開かねえ!」

ドアの回転軸の部分が凍りついていて、男が押してもびくともしないようだ。

・・・凍りついて?

俺がまさかと思って店内を見渡すと・・・

「まったく、自分たちで立てこもっておいて、自分たちが真っ先に逃げ出そうなんて。だったら最初から立てこもんなって話よ」

「あ、梓!？」

やはり、ドアを動かせなくしたのは梓だった。

しかも、見ると隣には琴美の姿も。

「あ、お兄ちゃん!」

梓は俺の方を振り向くと、笑顔で俺たちに近づいてきた。

どうせ俺たちのこと尾行してたんだろ、と薄々思いながら琴美の方を見ると、梓の指示だろうか、俺たちを尻目にそそくさと店から出ようとしていた。

そして、電撃で氷を溶かし、ドアの取っ手に手をかけたその時・

「その常盤台の制服のあなた、お待ちなさいな？」

犯人に手錠をかけて拘束していた白井が立ち上がりながらそう言い、取っ手に手をかけたままの琴美に後ろから近づく。

「あなたですわね？先ほど銃撃で奴らのナイフを弾き飛ばしたのはあなたの行動が状況を打破するきっかけだったことは確かですが、銃刀法違反でああなたにもお話を伺わなければなりませんわ」

しばし動かなかった琴美だったが、ドアを押し店から出ようとする。

しかし、風紀委員として白井が見過ごすはずがなく、瞬時に琴美の後ろにテレポートするとその肩を掴む。

「残念ながら、逃がすわけには・・・」

白井がそこまで言って言葉を止め、琴美の後ろ姿をまじまじと見る。

その表情に、みるみる驚きが広がっていく。

そして一言・・・

「お、お姉さま・・・？」

その言葉に琴美がゆっくりと振り返り、そして、

「・・・いえ、あなたはお姉さまではありませんわ。では、まさか・・・」

白井は、琴美が世間で噂の『アレ』だと気付いたのだろう、肩に置いた手が震えている。

「あなたが・・・噂の『お姉さまのクローン』ですか？」

「はい、ミサカは確かにお姉さまのクローンです、とミサカは正直に答えます」

その言葉を聞いたとたん、白井が崩れ落ちる。

「白井さん!？」

近くで成り行きを黙って見守っていた梓が慌てて白井を支える。

今まで俺も黙って成り行きを見守っていたが、ハツとして琴美に近寄り、

「琴美がどうしてここにいるかは知らないが、これはちょっとマズイ。悪いが、しばらくの間外で梓と待ってて・・・」

俺が「待っててくれないか？」と耳打ちしようとしたとき、俺の足に何かが触れた。

見ると、床に崩れ落ちた白井が俺の足を掴んでいた。

そして、

「・・・明俊さん、あなたはこちらの『お姉さまのクローン』について何かご存知なのですかね？」

「いや、えと、その・・・」

これは完全に想定外の展開で、俺はテンパった。

「何か知っているのであれば、ぜひお聞かせ願いたいのですが・・・」

「明俊さん、私にも教えてください」

「あたしもお願いします。でもまさか、本当に噂どおりクローンがいるなんて・・・」

白井だけでなく、いつの間にか初春と佐天にも琴美を見られ（店の中にいるのだから当然なのだが）、3人の視線に俺は困惑する。

これは学園都市の裏まで関わっている言わば『ヤバイ』案件だ、いくら白井たちとはいえ話すわけには・・・

そう思った俺は目つきを鋭くすると、3人の方を見て、

「こいつ、俺と梓は琴美と呼んでるが、琴美は確かに御坂美琴のクローンだ。しかし、これ以上のことを俺の口から言うわけにはいかない」

「どうしてですか？」

「あたしたち、もう出会っちゃったんですよ？それなのに秘密にするなんて……」

白井と佐天に当然のごとく反論される。

「だから、これ以上教える訳には……」

と、俺がそこまで言ったとき、それまで黙っていた初春がおもむろに口を開いた。

「……ひよつとして、明俊さんが言いたくない理由って、御坂さんのクローンがヤバイ存在だからじゃないですか？」

「えっ？」

初春の的を得た発言に思わず声が出てしまう。

流石、情報処理に関して一級品の頭脳の持ち主なだけのことではあった。

「だってそうですよね？クローンなんて、よく考えたらそもそも存在すること自体がグレーなことなんですから。それを、学園都市第二位の能力者の明俊さんが知っていて、かつ秘密にしようとするってことは、それなりの危険性をはらんでるってことは簡単に想像が つきます」

「なんとなく推察力なのだろう、いや、よく考えたら至極当たり前のことか。」

「・・・明俊さん、もしかして、最近御坂さんの様子がおかしかったのも、これが原因なんじゃないですか？」

「さらに初春は、俺が想像していなかったところまで突っ込んできた。」

「初春、それはどういことですか？」

御坂の話題になると、白井の食い付きも早いな。

「ここからは推測の域が多くなりますが、あの第四位の御坂さんが私たちに秘密で、睡眠時間を削ってまで行動するなんて、これもやバイことに関わってる証拠じゃないですか？」

「明俊さん、どうなんですの！？」

白井が俺の腕を掴んで詰め寄ってくる。

「これも推測の域を出ませんが・・・いくら御坂さんが負けず嫌いだとはいえ、そんなに危険な案件に関わるなら、少なくとも明俊さんには相談の一つでもあったんじゃないですか？自分の知り合いでレベル5、しかも自分より上位となれば頼るのが普通の発想ですし」

そこまで言うと初春は、今まで見たことのない鋭い視線を俺に向ける。

「どうなんですか！？」

白井は掴んでいる手に力を込めてさらに詰め寄ってくる。

「・・・御坂本人に聞いたらどうだ？」

「な、せ、責任をお姉さまに押し付けるつもりですか！？」

「それは違う！・・・確かに、御坂が最近不審な行動を取っているのはクローンが関係している。しかし、俺や梓は御坂に相談を持ちかけられたことは無い」

「では、どうして二人はこちらの御坂さんのクローンと知り合いなのですか？御坂さんが相談してこなかったのなら、なおさらこの疑問は深くなります」

初春が痛いところを突いてくる。

「……」

「……お姉さまのクローンについて、何か存じていますのね！？
教えて下さいな！！」

白井は俺の身体をガクガクと揺さぶってくる。

「……ダメだ」

「どうしてですの！？」

「この事を知れば、少なからず学園都市の『裏』を知ることになるからだ。そうなれば最悪、今まで通りの普通の生活を送れなくかもしれない。御坂もそれを考えて、白井たちには何も言わないんだと思う。だから……」

「だからなんだって言うんですの！！」

「し、白井？」

突如、白井が涙を浮かべながら叫んだ。

「お姉さまが今もフラフラになっているかもしれないのに、裏とか表とか関係ありませんわ！わたくしにとって、お姉さまはかけがないのない大切な存在ですの！そのお姉さまのことを何も知らされない

なんて、黒子、耐えられませんかわ!..」

「白井……」

「白井さん……」

返す言葉の無い俺と梓。

「……ごめんなさい、取り乱してしまいましたわ。でも、それだけわたくしはお姉さまを心配していますの。ですから、ぜひお二人の知っていることをお話くださいな」

そう言っつて白井は俺の顔をじつと見る。

その瞳には、一種の覚悟のようなものが宿っていた。

「明俊さん、私からもお願いします」

「初春……」

初春も頭を下げてる。

「明俊さん。その……あたしたちじゃ大したことは出来ないかもしれません。でも、友達が一人で困難に立ち向かっているときに何もしてあげられないなんて、これ以上悔しいことは無いと思うんです。だから、あたしからもお願いします」

「佐天……」

「どうやら、俺も覚悟を決めないといけないようだな。」

「最後にもう一度だけ確認するが、この話は信じられないようなことだらけだ。それでも・・・いいか？」

「もちろんですわ。あなた方やお姉さまだけが知っていて、わたくしたちは置いてけぼりだなんて、この白井黒子が許しませんわ」

「・・・分かった。それじゃ梓、悪いが、琴美と一緒にこの立てこもり犯を警備員アンチスキルのところに入れて行って、白井や初春の代わりに事情聴取に同席してきてくれないか？」

「分かったわ。琴美、悪いけどそっちの男を連れてきてくれる？この場合は・・・お兄ちゃんに任せましょ」

「分かりました、とミサカは了承して梓お姉さまについていきます」

俺は二人が立てこもり犯二人を店外へと連れ出したのを見届けて、白井たちの方へと向き直る。

「さて、じゃあ話を始めようか」

「クローンご本人は同席しないんですの？」

「・・・アイツには、琴美には聞かせたくないことも含まれてるんだ。誰だって、たとえクローンでも、自分の生死については聞いた

くないだろうしな」

「生死って・・・」

「そう。生死さ。さて、じゃあそもそも、何でクローンが作られるに至ったか、そこから話を始めようか。そもそも、御坂美琴のクローンは作られたのは

「

続く

第25話 仲間と決意（前書き）

今回も短めとなっております。

第25話 仲間と決意

「これが、御坂美琴のクローンが作られた理由、そして、そのクローンが今何に使われているかの大まかな説明だ」

「「「「「「」」」」」」」

俺の説明を聞いた三人は、一様に信じられないといった表情で沈黙する。

「・・・わたくしたちの知らないところで、そんな残忍な計画が進んでいたなんて・・・」

最初に口を開いた白井は、手のひらにじっとりかいた汗をおしぼりで拭う。

「超電磁砲量産計画ってだけでも十分恐ろしいですが・・・それを2万本も使ってレベル6を作り出そうなんて・・・」

「もはや、あたしたちの想像のはるか上を行っちゃってるね・・・」
初春や佐天も口を開くが、ショックは抜けきれていないようだ。

まあ、無理もないが。

「この計画は公になっちゃいない。知っているのは計画関係者以外じゃ、御坂と俺たちだけだ。だから、と言うより当然だが、他言無用だ。いいか？」

「それは分かりましたが・・・では、明俊さんや梓さんはどうやって琴美さんと知り合っただんですの？」

「佐天が誘拐された研究所あるだろ？琴美、正確にはミサカ第10030号だが、あそこで実験当日まで調整なり外部適応実習を行う予定だったんだろう。しかし、佐天を助け出す為に俺たちが侵入、結果、あそこは立ち入り禁止になっちまった。琴美はその前に脱出して俺たちのところによって来たのさ」

「・・・あたしの捕まってた研究所、その計画にも参加していたんですね」

「そうそう、佐天を助けてくれたのは実は琴美なんだ」

「えっ、どういうことですか？」

「あの時、佐天を操っていた装置を破壊したのは琴美だったってことさ。ま、琴美がいなかったら俺は佐天を殺していただろうから、救われたのは俺もだけだ」

「そうだったんですか・・・後で、たくさんお礼をしないとイケませんね」

「そうだな・・・出来なくなっちまうかもしれないからな」

「え、明俊さん、この実験を止めるつもりなんじゃないんですか？」

佐天が驚きの表情を浮かべる。

「・・・俺だつてこんな実験を容認しているわけじゃないし、琴美にだつて死んでほしくないさ。でもな・・・」

俺はそこまで言うと、フウとため息をつく。

ここ最近俺の胸につつかえていた気持ちを、今真実を知つたばかりの3人にいきなりぶちまけるのもどうかと思うが、ここまで真実をつらつらと話してきた口は止まらなかつた。

「正直、怖いんだ。なにしろ相手はこの学園都市の頂点に君臨する能力者・・・運動量、熱量、光、電気量、その他諸々のあらゆるベクトルを変換する超チート級の能力だ。御坂のレールガンでもかすり傷一つつかないし、反物質なんて使おうものなら、逆にこっちが消されかねない」

実際、反物質使いの俺が反物質の影響を受けるかどうかは分からない（試す気にもならない）が。

「そんなやつに戦いを挑んでも、何も出来ずに一方的になぶり殺されるかもしれない。でも、琴美を見す見す殺される訳にもいかない・・・そんな堂々巡りをずっと繰り返してきたってわけさ」

そう言うと、飲みかけのコーヒーを一気に飲み干す。

別に胸のつつかえが完全に無くなつたわけではない。

何の問題の解決にもなっていないのは分かっているのだが、この気持ちを誰かに聞いてもらえるだけでも気分がいくらか楽になる。

ふと白井の方を見ると、しばらくジッと俺のこを見つめていたが、突然フツと笑う。

「な、なんだよ、突然笑うなんて。不気味だぞ？」

「いえ、この展開で笑うのは不謹慎だとは思いましたが、結局あなたもお姉さまと同じですね」

「俺が・・・御坂と？」

「そうですね。強者の弱み・・・とでも申しましようか？もっとわたくしたちを頼って欲しいものですね。確かにわたくしたちは、あなたやお姉さまよりレベルは下です。でも・・・先ほど申しましたが、親友はもっと頼って下さいな」

そう言った白井の口調に、怒りや悲しみといった感情は見られなかった。

むしろ、母親が我が子を諭すような口調で、一層俺の心に響いた。

「・・・そうだな。俺は今まで、無意識のうちにみんなに迷惑をかけるないようにって思ってたのかもしれない。けど一つだけ、俺は白井たちのことを、レベルが俺より低いからって要らない存在だと思っただけは無い。この学園都市に来て最初にできた、かけがえのない親友だから」

俺はそう言って白井、初春、佐天の顔を順番に見渡す。

「持つべきは友である……とはよく言ったもんだな。みんな、これからもよろしく頼む」

俺はそう言っつて頭を下げる。

「ええ。これからもよろしくお願いしますですの」

「よし！それじゃ今から、『どうやって第一位を攻略するか』を議題に話し合いを始めます！」

佐天の司会で、急遽「アクセラレータ一方通行攻略作戦会議」が始まった。

「つつてもなあ……ベクトルは全部無効だし、この世の中、ベクトル量じゃないものと言つと……」

「確か、スカラー……でしたわね？」

ベクトル、例えば「速度」がそうだが、大きさと向きをもつ量ではなく、「温度」のように大きさだけをもつ量をスカラーという。

「俺の反物質も一応粒子だからベクトルをもってるしなあ……」

「……そういえば、初春の能力は『温度を操作する』ものでしたわね」

「でも、私のレベルじゃ『触れている物の温度を一定に保つ』しか出来ませんし……」

「一方通行の体温でも一定に保とうってか？ 八八八、想像したら笑っちゃったじゃねえか。ってかそれ以前に、奴に触れたら最後、血流を逆転されて死ぬから、触れる攻撃は効かねえしな」

上条さんの右手は唯一の例外だが、無い物ねだりはしても仕方ない。

「そうですね．．．今から初春をレベル5にして、気温を一瞬にして上昇させるとか？」

「無茶言うな白井。そんなことしたら、奴を倒せたとしても周りに甚大な被害が出るぞ」

「それ以前に、私の能力ってレベル上げるの難しいんですよ？」

確か、初春の能力はなかなか複雑な演算を要する．．．んだっかな？

個人的には、反物質なんて物騒なものより初春の能力の方が、コーヒーが冷めないとか実用性がありそうで羨ましいくらいだが。

「じゃあ、相手が動けなくなるまで持久戦とかはどうですか？」

「じ、持久戦ですか？」

佐天の奇想天外な発想に白井が思わずおつむ返しに答える。

「そうです。相手が疲れて能力を使えなくなるまでこつちが粘るんですよ」

「あー、確か奴はベクトル操作で、体力をほとんど使わずに高速移動できたな。つまり、こつちが先にばてる可能性が100%だ」

「そ、そんなこともできるんですか、一方通行って人は・・・」

まあ、佐天がたじろぐのも無理はない。

「それに佐天さん、そんないつ果てるとも知れない戦い、戦争でもないかぎりしませんよ。相手を餓死でもさせるつもりですか？」

「冗談だつてば！圧倒的に強い相手に持久戦だなんて・・・」

・・・ん？待てよ？

「初春、今何て言った？」

「え？餓死でもさせるつもりかって・・・」

「・・・なるほどな、そういうことか」

某小学生名探偵のごとく閃いた、と言うより、何でこれを思い付かなかったのか。

この戦法ならずで、原作やアニメでも『ある程度有効』だって分かってるじゃないか。

後は、この戦法を俺が上手く、派手に使っただけだ。

「何か思いついたんですの？」

「まさか、本当に餓死させるつもりじゃ……」

「まさか。思いついたんだよ、奴も人間だってことをな」

「え、どういふ……」

さらに聞き出そうとする佐天に対し、俺は口に人差し指を当てる。

「シツ。これはまだ口にする訳にはいかないな。さいわい、今店は事件の後で数人の警備員アシスキルしかいないみたいだが、念のためな。ま、上手くいって俺が生きて帰って来れたら教えてやるよ」

俺はそう言っただけで席をたつ。

もう迷わない。

いったい、俺は何を恐れていたというのか。

中途半端に原作やアニメの知識なんて持ち合わせているから、試

してもいないのに一方通行の強さに恐れおののいていた。

けど、もしかしたら対等に渡り合えるかもしれないじゃないか。

戦う前からビビってるなんて、第二位の肩書きが泣くってもんだ。

それに、俺には頼りになる友がいる。

今回は流石に、一緒に戦うなんてことはさせられないけど、知恵を出し合い、困ってるときは互いに助け合っ友が俺にはいる。

困ってるときはお互い様、と言いながら、俺が頼ることを忘れるなんてな。

俺はもう迷わない。

絶対に、琴美を殺させはしない。

原作通りに話が進むかどうかなんて知ったこっちゃない。

これは・・・俺の歩む、俺の物語だ。

誰一人、邪魔なんてさせない。

第26話 実験当日

それは、白井たちに琴美のことを話してから数日後の午後のこと。

「お二人にお話があります、とミサカは若干緊張のこもった雰囲気
で話しかけます」

「自分で『緊張のこもった』って言っちゃったら、緊張も半減だな・
・・・というツツコミは置いていて、どうした？」

「実は・・・今日がミサカの実験当日なのです、とミサカは衝撃事
実を告白します」

・・・

「ちょ、今更ですか琴美さん!？」

「何でもっと早く言ってくれなかったのよ!」

琴美の唐突な事実公表に俺と梓は当然のツツコミ。

すると琴美は・・・

「今まで聞かれませんでしたので」

・・・しれっとそう答えた。

「いや、そういう問題じゃねえから!」

「そうよ!そういう大事なことはちゃんと教えてくれないと!」

梓にはすでに、琴美の命を救うために一方通行とやり合う覚悟を伝えている。

とはいえ、当日になっていきなり言われても、心の余裕的な意味でつらい。

ちなみに、琴美本人にはこのことはまだ伝えていない。

「聞かれなかったということもありますが、もう二度とここに帰れないのかもしれない、と思うとお二人に切り出すのはつらいものがありました、とミサカはこれまでの心境を告白します」

「琴美・・・」

琴美は俺たちのところへ来る前は、感情の研究にも使われていた。

恐らくそのせいだろうが、他の『シスターズ妹達』よりは感情的に発達しているのだろう。

切り出すのがつらいものがあつたとは、琴美の中で今も大きくなりつつある「感情」がそうさせたのだろう。

琴美はもはや「御坂美琴のクローン」などではなく、「御坂琴美」という一人の少女なのだ。

そう思うと、なおさら琴美を死なせるわけにはいかない。

「よし！じゃあこれから3人で出かけようぜ！」

俺はそう言つて立ち上がる。

「これから・・・ですか？ とミサカは突然のあなたの提案に戸惑いを隠せません」

琴美は心底不思議そうな顔をしている。

まあ無理も無い。

あまりに唐突だったし、今日の夜にはいなくなるというのに暢気に出かけるなどと言われても、「ハア？」という感じだろう。

けど、こっちから言わせれば「だからこそ」だ。

正直、まだ一方通行と戦う恐怖が100%ぬぐえた訳ではない。
アクセラレータ

それに、ヤツに勝利できるとも限らない・・・というか、負ける

可能性の方が高い。

だから、そのことを出来るだけ意識しないようにしたいのだ。

他にも、これは琴美のことを考えての提案でもある。

琴美は少なからず他の『妹達』よりも感情の波が大きいはずだ。

ということは当然、今まで10029体ものクローンを殺してきた一方通行との実験に恐怖を感じているだろう。

しかし、その恐怖にどうやって対処して良いのかまでは、よく分かっていないだろう。

リラックスさせて、その恐怖を和らげようというのが俺の狙いだ。

「そうね。琴美、行きましょ?」

梓も俺の意図を酌んだのか、そう琴美を促す。

「・・・」

琴美はしばし逡巡しゆんしゆんしていたが、

「・・・では提案通り、三人で出掛けましょう、とミサカは考えた末に同行の意思表示をします」

「よし、そうと決まれば早速行こうぜ!」

「そうね！今は午後の3時だから・・・街をまわってついでに夕飯も食べてきちゃいましょ！琴美、何か食べたいものある？」

工藤家の家計を管理している梓が、財布の中身を確認しながら尋ねる。

もっとも、自慢じゃないが二人ともレベル5ということで、まだ1ヶ月分の入金しかないにも関わらず金にはそんなに困っていない。

「そうですね・・・高級料亭で舌鼓したつづみなどはどうでしょう？とミサカは提案します」

・・・琴美には俺の心の声が聞こえてるのか？

確かに困ってはいないが、こっちの世界に来て色々入り用もあって、そんな潤沢って訳でもない。

まあ、もう数ヶ月分入金されればそれも可能かもしれないがな。

「琴美、そうしたいのは山々だが流石にそれはちょっと・・・」

「そ、そうね、それはちょっと勘弁願いたいところね」

「冗談です、とミサカは困り顔のお二人を見て泣く泣く計画を断念します」

「冗談と言いながらも泣く泣く断念とは、果たして真相は前者か後者か・・・」

「では改めて、ファミレスなどはどうでしょう、とミサカは提案します」

・・・いきなりランクががた落ちした。

「高級料亭からファミレスとはこりゃまた・・・」

「ファミレスなんかで良いの？」

財布の中身を数えていた梓も、拍子抜けというか、予想外といった感じだ。

「今日はああいった、多少ガヤガヤした場所の方がいい気分なので、とミサカは告白します」

「ああ、なるほどな」

その気持ちは分からないでもない。

それに今日の琴美のことを考えれば、そういった場所の方が俺たちと楽しく食事できて気分も紛れるのだろう。

本当は助ける計画を教えてあげたいのだが、どこでどんな人間が聞いているか分からない。

まして、御坂美琴が妨害活動を行っているということは、彼女の友人である俺たちも見張られている可能性もあるからだ。

一応、白井たちに話したときは周りに知らない人間はいなかったし、盗聴機の類いは仕掛けてないことを確認したが。

「お待たせ。じゃ、行きますか！」

戸締まりを確認した梓がそう言って、一足先に玄関に出ていた俺たちに合流する。

「おーし、とりあえず街中に向かうとするか」

かくして俺たちは、まだまだ暑さのこもる8月後半のコンクリートジャングルを歩き始めた。

「ふう。やっぱり夏はアイスに限るな」

現在俺たち三人は、一足先に日用品などの買い物済ませて、公園の木陰のベンチにて冷たいアイスクリームを賞味中である。

俺の隣では、さつきから琴美が梓に対して、「梓お姉さま、このアイスクリームは濃厚なクリームでありながら・・・」などと力説している。

梓も梓で、琴美の発言に対して「私もそう思うわ。特に使ってる材料が良いのか、味に深みが・・・」といった調子で返答しているのだから、完全に俺は蚊帳の外である。

まあ、美味しいことは認めるけどさ。

疎外感にいたたまれなくなってきた俺だが、別段することもないのでチラリと二人の方を見る。

梓と琴美が楽しそうに話している光景は、仲の良い友達同士にか見えない。

いや、別に二人が友達関係ではないということじゃない。

本来琴美に、こんな風に誰かと楽しくしゃべったり出掛けたりする機会なんて無かったんだな、と思うと、色んな思いが駆け巡る。

そして俺は、琴美の笑顔を見続けるため、本来なら今日で消えてしまっはずの琴美の日常を見続けるために、学園都市最強と対峙することを決めた。

・・・なんか、インデックスを助ける上条さんの気持ち、少し分かるような気がする。

まあ彼の場合、手当たり次第に助けてフラグをたてまくるから、その点においては敵わないけど。

「……どうしたのお兄ちゃん、琴美の顔ガン見しちゃって」

「どうやら、物思いにふけっている間に琴美の方を見続けていたよ
うだ。」

「いや、別に深い意味は無い。ちょっと考え事をしてただけだ」

「今のは実は照れ隠しで、実はミサカの美しい容姿に見とれていた
んですね、とミサカは勝手に都合よく解釈して一人顔を赤らめてド
キドキします」

「え、そうなの!？」

「こらその二人、勝手に盛り上がるんじゃない」

「チツ、違ったか、とミサカは美貌とその他もろもろに気づかない
鈍感男に舌打ちをします」

「……鈍感で悪かったな」

「さっすがお兄ちゃん、鈍感」

「……」

「なんか馬鹿にされているが、下手に反論しても決着はつかない
ので止めておく。」

それに、美貌は分かるが「その他もろもろ」ってなんの事だ？という疑問も沸いたが、まあ良いか。

年頃の女の子だし、色々あるんだろう。

そう思い俺はベンチから腰をあげる。

「あれ、もう行くの？」

「ああ、アイスを食べた直後で悪いがそろそろ夕飯にしないとな。飯食った後に寄りたいたいところもあるし」

「寄りたいたいところ？」

「ああ、買いたいものがあってな。まあそれはともかく、まずは夕飯だ」

「では、あそこはどうでしょう？とミサカは勧めます」

そう言っつて琴美が指差した先には、ああ、この世界にもあったんだな、サイゼ（ry）があった。

「あそこは比較的値段も安く、味も悪くは無いと聞きます、とミサカは盗み聞いた知識をここぞとばかり披露します」

そう語る琴美の目は、心成しか少しキラキラしているようにも見える。

・・・早く入店したいんだろうな。

「そうだな、よし、行くか」

琴美の提案で店を決定した俺たちは、これから書き入れ時の時間帯を迎える店内へと入っていった。

「ごちそうさまでした、とミサカは食後の挨拶をします」

「.....」

丁寧に食事の終了を告げる挨拶をした琴美の前には、とてもその細い身体に入りきるのか怪しい量の皿が並べられている（しかも、全部きれいになっていて何一つ残っていない）。

この光景はさながら、上条さんを困らせているインデックスのようだ。

飯にもこれから身体をフルに動かす実験があるというのに（俺が割って入るつもりだから別にいいのだが）、よくもこんなに食べたもんだ。

・・・もしかして、この世で食べる最後の食事だという思いがあつて、こんなに食べたのだろうか。

思い返してみると、店に入るまではキラキラしていた目も、いざ食べ始めるとまるで一心不乱といった感じだった気もする。

・・・そろそろ、琴美を安心させてあげても大丈夫だろう。

この時間にまでなれば、例え関係者がこの計画に気づいたとしてもどうすることもできまい。

「さて、食事も済んだことだし、俺の用事を済ませに行こうかな？」

「あ、じゃあ二人は先に外に出て。私が会計すませてくるから」

「悪いな」

俺と琴美は一足先にファミレスの外に出る。

夜なのに昼間のような熱気が立ち込めている。

風はほとんど吹いておらず、余計に蒸し暑い。

ま、今日に限って言えば風のないほうが俺としては嬉しいのだが。

「この後はどうするのですか、とミサカは質問します」

「ん、ちよつと買いたいものがあってな。まあ、店に着いてからの
お楽しみってことで。ところで琴美、実験の開始時間は何時だ？」

「21時00分00秒です、とミサカは秒単位で正確に答えます」

「午後9時か・・・」

腕時計を見ると19時45分。

今まで開始時間のことを言わなかったということは、実験場はこ
こからさして遠くない場所なのだろう。

「お待たせー」

会計を済ませた梓が店から出てきた。

「おし、じゃあ行くか」

そうして俺たち三人は歩き出す。

「ねえお兄ちゃん、そろそろ何買うのか教えてよ」

「いやいや、店に着くまでの秘密ってことで」

「・・・まさか、口に出して言えないものなのでは？とミサカは疑
いのまなざしを向けます」

「・・・」

「なんでそうなるんだ！？秘密とは言ったけどやましいものとは言
って無いぞー！」

「でもねえ・・・男の人が秘密って言うときは大概怪しいし・・・」

「・・・それ、全国の良識ある男性に失礼だから。ほら、そうこう
しているうちに着いたぞ」

俺たち3人がたどり着いた店、それは・・・

「・・・アクセサリーショップ？」

「そう」

「ここにあなたの買いたいものがあるのですか？とミサカは意外な
展開に驚きつつたずねます」

「うーん・・・正確には俺が欲しいんじゃない、俺が買ってあげ
るんだよな」

「誰に？」

「この前デートしていた、佐天さんという女性にではないですか？
とミサカは推測します」

「残念、はずれ。正解は琴美、お前だ」

「……ミサカに、ですか？」

「おうよ。このままじゃ、いくら名前をつけたとしても外見じゃ全然見分けがつかないしな。それじゃこれから先、困ることもあるだろうと思っただろ？」

俺がそう言うと、しばしの間沈黙が流れ、

「お気持ちは嬉しいのですが、今日でいなくなってしまうミサカの為にこのようなものを買う必要は無いのでは？」とミサカは……」

「……誰がいなくなっちゃった？」

「え？ とミサカは聞き返し……」

「だから、誰が今日でいなくなっちゃったんだよ？」

「……あなたの言っていることが理解できません、とミサカは更なる説明を求めます」

「俺がそうそう簡単にお前を殺させると思うか？俺が、目の前の女の子が死に行くのを、黙って見ているとでも？冗談じゃない」

俺はそう言うと、琴美の手をギュッと握る。

「琴美。お前は、俺たちの大切な親友であり仲間なんだ。ただの御坂美琴のクローンなんて存在じゃない。お前はお前、琴美っていう一人の人間なんだ。実験の道具なんかじゃない。なあ、梓」

「ええ、もちろん。琴美にはこれからも、ずっと私たちと一緒に過ごす権利があるの。そして、私たちはそれを望んでいる」

「俺は決めたんだ。こんな実験から琴美を守るってな。レベル6だかなんだかほざいてる連中がいるみたいだが知ったことか」

「・・・ミサカは、これからも生き続けても良いのですか？」

「なに当たり前のことを言ってるんだ。良いに決まってるだろう？むしろ、今まで散っていった10029体のやつらの分まで、しっかり生きなきゃな」

「・・・本気なのですね？とミサカはあなたの決意のほどを確認します」

そう言って琴美は俺の顔を見つめてくる。

その瞳には、一見無機質で何も込もっていないように感じるが、期待と困惑が混在しているようにも思える。（俺の拡大解釈かもしれんが）

期待というのは俺が助けると言ったことに対するものだろう。

困惑するのはよく分からんが、俺たちをここまで巻き込んでしまったことに罪悪感でも感じているのだろうか。

ま、これは俺が助けたいと思ったから、琴美にもっと楽しい人生を送って欲しいと思ったからやるのであって、こいつが罪悪感を感じ

じる必要なんてないんだ。

「さ、時間がもったいないぜ。琴美、この店にあるものなら何でもいい、好きなものを選んでくれ」

「では、店にあるもの全部・・・」

「おい」

「冗談です、とミサカは若干本気にしていたお願いを断られショックを受けながら品定めに入ります」

・・・何やら恐ろしい言葉が聞こえたような気がするぞ。

15分から20分かけてゆっくり店内を見てまわった琴美が選んだのはイヤリングだった。

「お、イヤリングか。2500円・・・もうちょっと高いものでも良いんだぞ?」

「いえ、これが気に入ったのでこれにします、とミサカは主張します。それに、買ってもらえること自体がとても嬉しいことなので値段にはこだわりません、とミサカはさらに主張します」

「そっか。じゃ、レジに持っていくぞ」

俺は琴美の手からイヤリングを預かると、レジへと持っていく。

「2500円になります。包装いたしますか？」

「琴美、すぐつけるか？」

「はい、そうします」

「じゃあ、包装は結構です」

「かしこまりました。・・・彼女へのプレゼントですか？」

「え？ いやいや！琴美は別に彼女じゃないですよ」

店員の女の人が、会計作業をしながら意味ありげに俺を見てからかう。

「・・・」

「・・・ん？琴美、どうした？」

見ると、琴美が俺をガン見していた。

今度は、その瞳には何の感情も読み取れず、かえって不気味だ。

「フフ、あなたも大変ね」

店員が今度は琴美に向かって言う。

「覚悟していることです、とミサカはあきれ口調で同意します。・・
では、そろそろ行きましようか、とミサカは促します」

「ん、おう、そうだな」

「ありがとうございましたー」

外に出ると、待っていた梓がこっちにやってきた。

「待たせたな」

「ううん、大丈夫。わあ、琴美、似合ってるよ」

「そうですか？ 自分では見えないのでよく分からないのですが・・
」

「俺も似合ってると思うぞ。なかなか良いじゃないか」

琴美が選んだのは、水色の星型の飾りのついたイヤリングで、そのきつくない色合いが琴美によく似合っていた。

「何か照れますね、とミサカはお一人から顔を逸らしつつ感想を述べます」

「ホント、よく似合ってる・・っってもっと褒めたいところなんだが、そろそろ実験場に移動したほうが良さそうだ」

時計を見ると20時20分、実験場がそう遠くなさそうとはいえ、そろそろ向かったほうが良いだろう。

「もうそんな時間・・・本当は私も一緒について行きたいところだけど、ついに行っても何も出来ないし、先に家に帰ってるわね。琴美、『一旦』お別れよ」

「梓お姉さま・・・」

「お兄ちゃん。絶対、ぜーったい、二人で生きて帰って来てね、約束よ！」

「ああ、もちろん！第二位の底力、たっぷり見せ付けてくるぜ！よし琴美、案内してくれ」

俺たちは歩き出す。

梓は、最後にチラッと俺たちの方を心配そうに見たが、それ以上何も言わずに寮の方へと帰っていった。

「それで琴美、実験場はどこなんだ？」

「第一七学区にある操車場です、とミサカは懇切丁寧に説明しまし

た
」

それって・・・原作やアニメで御坂妹（第10032号）が一方アクセ通行と戦って上条さんが割り込んできた場所じゃねえか。

よりによってあそことはね・・・

何かの因縁か？

目の前に鉄橋が見えてきた。

ここは確か・・・上条さんが御坂美琴と対峙して、右手を使わずに電撃を受けて御坂を説得したあの場所か。

俺たちは人っ子一人いない橋の真ん中を歩く。

と、琴美が突如立ち止まった。

「どどどした？」

「・・・お姉さま」

「え？」

琴美は確かに、「お姉さま」と言った。

しかし、前には誰もいない。

俺は後ろを振り返る。

闇の中を、一人の人間がこちらに向かって歩いてくる。

その影は徐々に大きくなり・・・

「・・・どうして、アンタが私のクローンと一緒に歩いてるのかし
ら」

た
御坂美琴が、その右手にコインを構えながらこちらへとやって来

第27話 立ちばかりしは御坂美琴

「……どうして、アンタが私のクローンと一緒に歩いてるのかしら？」

「御坂……」

闇に浮かび上がる御坂の顔には、何とも形容しがたい表情が見てとれる。

驚き、困惑、怒り……

少なくとも、良い感情は感じられない。

「質問に答えなさい。どうしてアンタがここにいて、しかも私のクローンと一緒にいるの？」

「その二つの質問には同時に答えよう。それは、ここにいるミサカ第10030号と一緒に実験場に向かうためだ」

俺は正面に反物質を展開し、後ろ手に琴美に「俺の影に入れ」と合図する。

琴美もジェスチャーを理解したのか、後ろに動いたのを気配で感じる。

今の御坂が普段の彼女ではないことは、彼女から発せられるオーラで十分に分かる。

御坂は今、殺気だっている。

「今度はこっちが質問する番だ。お前こそ、どうしてここにいる？」

「アンタには関係ないことよ」

「この状況でそんなこと言って、俺が納得するとしても？」

「……」

御坂は何も言わず、相変わらずレールガンの照準を俺に向けている。

何も言わないのは、自分がここにいる理由を言いたくないということか。

いや、だったらそもそも琴美に存在を気づかせる必要が無い。

自分のAIM拡散力場が探知されない遠距離から琴美をつけばいいだけの話だ。

それをわざわざ気づかせたということは、用があるのは俺ということの証拠か……？

「……お前の様子が最近おかしかったこと、俺たちが気づいていないとでも？」

このままではどちらも動けず、時間を浪費するだけだ。

ならば、こっちから変化を与えるに限る。

「……質問を変えるわ。どうしてアンタが、私のクローンのことを知っているの？」

会話不成立だが、沈黙を長引かせるよりかは幾分マシか。

「元々コイツのいた研究所は、例の佐天が誘拐された研究所でな。俺たちが乗り込んでメチャクチャにしちまった混乱に乗じて逃げ出したってこと。その後数日間さまよって、何とか俺たちの家を見つけたのは良いけど、風邪をひいて家の前で気絶、保護したってだけのことだ」

「なるほど……でも、腑に落ちない点があるわね」

「……？」

「アンタの今の話を信じたとして、どうして私に話さないわけ？」

「……どういうことだ？」

「知り合いと瓜二つの人間が倒れてたら、連絡の一つでも入れるのが普通の行動よね？」お前、双子だったのか！？」とか、まさに取るべき反応のはずよ。でもアンタはそんなこと一言も言わなかった」

「……」

「どうやら、ただただ殺気だっているという訳ではなく、冷静に分析されていたようだ。」

「ここから導き出される結論は一つ……」

「言っちゃ否や、御坂の身体の周りが帯電したかと思うと、まばゆい閃光が一閃、俺の方へと飛んできた。」

「それが電撃だと理解したのは、閃光が反物質に当たって跡形もなく消え去った後のことだ。」

「御坂、お前何を……!？」

「アンタがこのことを私に言わなかった理由はただ一つ、アンタがこの実験の関係者だからよ!！」

「お兄ちゃん……」

明俊が御坂美琴と対峙しているその時、梓は人気のない夜道を自宅である寮に向かってゆっくりと歩いていた。

その足取りに、彼女の普段の明るさは微塵も感じられない。

「……」

若者らしく携帯をいじりながら歩いている訳でもなく、ただただ歩いていた。

梓の心には、レベル5でありながら琴美を救うために力を役立てられないことへの不甲斐なさと、兄と琴美を失うかもしれないという恐怖が渦巻いていた。

「私に、もっと力があれば……お兄ちゃんと一緒に一方通行と戦えるのに……」

実際のところ、いくら『力』があつたところで一方通行に勝てる可能性はわずかしか上がらない。

彼が干渉できるのが、この世の物理の根源を成すベクトルである時点で、大半の能力者は彼には勝てないのだ。

それに頭脳もずば抜けて良く、万が一何らかの方法で彼にダメーシを与えたとしても、すぐに対策を施されて無効化されてしまう。

それは梓も十分理解してる。

それでも、いや、だからこそと言つべきか、悔しさを感じずには
いられない。

「（二人を失つたら、私……）」

そう思う梓だが、その先の言葉が続かない。

シヨックで二人の後追いをするのもかもしれないし、御坂美琴と同様、単身一方通行に挑んでいくのかもしれない。

「（何だ……死しか道が無いじゃない……）」

そんなことを思いながら曲がり角を曲がったその時、

「キャッ！」

「うわっ！？」

逆に梓の方に曲がってきた誰かとぶつかった。

回避行動は取ったものの間に合わず、しりもちをついた時の衝撃の軽減にとどまった。

「いったー……」

「いつつ……すみません、急いでいたもので。大丈夫ですか？」

「あ、はい、大丈夫……えっ？」

ぶつかった男性の声に聞き覚えのある梓は、ハッと顔を上げる。

「良かった、怪我は無いみたいですね……ってあれ、あなたどこ

かで・・・」

「上条さん!!」

そう、走って角を曲がってきたその人物は上条当麻だった。

「えーっと・・・失礼だけど、どちら様だっけ？」

「あー、えーっと、工藤明俊覚えてますか？私の兄なんですけど・・・」

「もちろん！じゃあ君は、双子の妹さんの梓さん・・・だよな？」

「そうです。それで、どうかしたんですか？急いでいたみたいですけど・・・」

「っとそうだ！こうしちゃいらねえ！早くしねえと御坂が!!」

上条の口から「御坂」の単語が出た瞬間、梓には事態のおおよその見当がついた。

「そっか、御坂さん、この世界でもやっぱり自ら犠牲になるうと・・・ってちよつと待って、じゃあお兄ちゃんと鉢合わせに・・・」

そう呟いた次の瞬間、梓の脳内に閃光が走った。

「（よく考えなさい梓。もしお兄ちゃんと一方通行が戦ってる最中に御坂さんが実験場に着いたら・・・お兄ちゃんでも勝てないと考えて乱入する可能性大。自分が死ねばお兄ちゃんと妹達シスターズを救えると思って。逆に、もしその手前で遭遇したら・・・）」

そこまで考えて、梓はハツとする。

「（その場合、御坂さんの目にはお兄ちゃんは『琴美を護送している』ように見えるかもしれない。少なくとも、どうして琴美と一緒にいるのか問い詰めるのは必然・・・!）」

どちらにしても状況はあまりよろしくない。

前者の場合、明俊の立場で言えば乱入してくる御坂を押さえ込みつつ一方通行と戦うことになる。

1対1ですら勝算は薄いというのに、そんな状況では瞬殺の可能性もある。

後者の場合、明俊は御坂に足止めをくらうことになる。

そうなれば、計画の完遂なんて夢のまた夢だ。

「・・・私、行かないと!」

そう言って梓は立ち上がる。

どのような状況にしろ成すべきことは一つ、御坂美琴を止めることだ。

「行ってくつて、どこへ？」

上条はいきなり立ち上がった梓にたずねる。

「上条さんと同じところですよ」

「俺と同じ・・・御坂のところか!？」

「ええ!御坂さんを止めないと!」

梓は来た道を走って引き返す。

「そういえば、君たちとこの前初めて会ったとき御坂妹も一緒だったよな?二人は、御坂妹が何に使われてるのか知ってるんだよな?」

上条は梓の横を並走しながら質問する。

「知ってます。実は今、お兄ちゃんが琴美・・・上条さんに会ったとき一緒にいた御坂妹のことですが、琴美を助けるために実験場に向かっているんです」

「何だつて!?!相手は学園都市最強だろ?並の能力者じゃ手も足も出ないぞ!」

「そういえば上条さんには言ってなかったですが、私たちどころもレベル5なんです」

「・・・上条さんの周りには、魔術士やらレベル5がうじゃうじゃしてるのか。不幸とは言わないが、怖いな・・・」

「あはは・・・ え、魔術士って何ですか？（知らないふり）」

「え！？いや、こつちの話だ！それより急ごう！..」

「はい！..」

偶然出会った梓と上条は、夜の学園都市を第一七学区へむけて走った。

〈明俊 side〉

「待て御坂、俺は計画の関係者なんかじゃない！！..」

いきなり電撃を飛ばしてきた御坂に対して俺は慌てる。

こんなところで御坂に出会ったことも予想外だったが、敵と認識

されてしまったことはさらに想定外だ。

しかし、御坂の言い分というか理論も十分納得に値するものだ。

確かに、知り合いのそっくりさんに出会って何ら特別なアクションをしなかったら、そう思われるのも無理はない。

実験の関係者なら、御坂本人に話ちまうなんてことはしないからな。

さて、どうしたのか・・・

俺が御坂とにらめっこしていると、服の後ろに引っ張られる感触を感じる。

「どうした、琴美？」

俺は御坂から視線をはずすことなく、後ろの琴美に声をかける。

「そろそろ移動しないと、実験開始時刻に間に合わなくなります、とミサカは現状を報告します」

「もうそんな時間かよ!？」

御坂のことに気をとられて、時間をまったく意識していなかった。

俺が思わず腕時計を見ると、御坂はすかさず電撃を放ってくる。

もちろん壁を展開し続けているので、電撃は当たらない。

「……流石、二位だけのことはあるわね」

御坂は相変わらずレールガンの構えは解いていない。

撃ってこないのは恐らく、レールガンも防がれることが分かっているのだろう。

だが、レールガンは当てることさえ出来れば一撃必殺の強力な攻撃、こちらが致命的な隙を見せた時のために構えているのだろう。

今御坂の目には、俺は敵にしか映っていないのだ。

「……仕方ない。琴美、先に実験場へ行ってくれ」

「あなたはどうするのですか、とミサカは問いかけます」

「俺はここで御坂を止めないと。放置しても良いけど、100%追いかけてくるに決まってる。それに、一方通行と出会った御坂がどんな行動に出るかは目に見えてる。特攻を仕掛ける御坂を抑えながら一方通行と戦うなんてのは死んでも避けないと……」

「……ミサカのことは、見捨てても良いのですよ？」

「誰がそんなことするか。俺は琴美と新しい、楽しい日常を築くつて決めたんだ。必ず助ける。それで琴美、ここから操車場までどのくらいかかる？」

「走って5分程度でしょうか、とミサカはおおよその時間を述べます」

俺が改めて腕時計を見ると、『20:53』と表示されていた。

「じゃあそろそろ行かないとな・・・いいか琴美、よく聞いてくれるだけ早く追いつくつもりだが、恐らく実験開始には間に合わない。だから、無茶を承知で言うが出来る限り粘ってくれ」

「どうすれば良いのでしょうか、とミサカはたずねます」

「まず、銃とか持ってるだろうがそれは絶対に使つな。撃った瞬間自分の身体を弾が撃ち抜いてることになる。琴美の最大射程で電撃を撃つて、オゾンが発生させるんだ。ヤツも人間、酸素を薄くするこの攻撃は有効のはずだ。だが気をつける、ヤツは能力を使って一瞬で距離を詰めてくる。絶えず四方八方に動き続けるんだ」

「何の話し合いをしてるのか知らないけど・・・私のこと忘れてもらっちゃ困るわね!!」

琴美への時間稼ぎのアドバイスが終わったその時、今まで遠距離で様子見程度の攻撃しかしてこなかった御坂が走り出した。

御坂も実験開始の時間が迫っているのをみて、接近戦・短期戦に出たのだろう。

「行け琴美!!俺も御坂を止めたらすぐに行く!!」

俺は琴美の肩を押して、早く行くように促す。

琴美は一瞬、何かを考えたような顔をしたが、

「・・・では、ミサカはあなたのことを信じます」

そう言っていきなり顔を近づけてきて・・・

「・・・えっ?」

頬に、柔らかいものが触れた。

琴美は顔を離すと、走り出した。

その顔は、若干赤みを帯びていたような・・・気もする。

・・・って今は余韻に浸ってる場合じゃない。

俺は御坂の方を振り向くと、スタンロットに手をかける。

もちろん、御坂にスタンガンモードは通じない。

俺はフラッシュモードに切り替えると顔の前にかざし、それと同時にボタンを押した。

「キャッー!!」

こちらへと突進していた御坂が顔を伏せる。

俺は急いでかけだすと、スタンロッドを構える。

電撃で気絶させることは出来ないが、これで後頭部を叩く。

御坂には悪いが、琴美を助けるためにはイレギュラー因子は排除しなければならぬ。

俺はスタンロッドを降りおろし・・・

「なーんてね」

「ッ!？」

御坂まで後もう一步というところで聞こえてきたその言葉。

俺は慌てて地面を思いつき蹴り、後方へとジャンプする。

その際、地面を蹴った瞬間に靴の裏に反物質を展開、コンクリー

トと干渉した瞬間に、普段は抑制している発生したエネルギーを部分的に解放、後方跳躍の原動力とすることで、御坂との距離をとる。

・・・はつきり言って、一度も試したことのない能力の使い方で緊急回避なんて一種の賭けだった訳だが、どうやら上手くいったようだ。

「あつぶねっ・・・まさか、あのアクションがフェイクだったなんてな」

「・・・ずいぶん飛んだわね。それもアンタの能力の使い道って訳ね」

一歩間違ったら、足がもげてたかもしれないけどな。

「さあどうする？確かにさっきのフェイクには焦ったけど、お前の攻撃が俺に届くことは無いと思うぜ？」

「そんなことは・・・やってみないと分からないわ！！」

そう叫ぶと、御坂は俺に電撃を放ってくる。

先ほどの攻撃と回避行動の過程で反物質の壁は消えてしまったので、俺は体表面に反物質をコーティングするように展開する。

「もう諦める御坂！俺はお前と戦うつつもりなんてこれっぽっちもねえんだよ！」

俺は電撃を飛ばし続けてくる御坂に叫ぶ。

「実験のことを知っててひた隠しにし、あまつさえ裏で何かコソコソやってるような人間の言葉なんて、信じられないわね！」

「だから俺は実験の関係者なんかじゃ・・・！」

その時、俺はにんにく臭のようなものを感じた。

今までそんなにおいしでなかったし、今日は風もほとんど無い。

家庭の台所から流れてきたって訳でも・・・

・・・まさか！

そう思った次の瞬間、俺は再び能力で後ろに目一杯跳躍した。

御坂の電撃は、まるで磁石のように俺にまとわりついたままだ。

「けほっ、こほっ……！お、オゾンを作るために俺の周りに電撃を……」

オゾンを使った攻撃は、ただ酸素を奪うだけではない。

オゾン自体が人体にとって有害なのだ。

低濃度でも目や呼吸器を守るためのマスク着用が望ましい、と言われている程の毒性だ。

「気づかれたか……でもね、私はオゾンのためだけに攻撃してる訳じゃないのよねえ」

「……どんなこと企んでるか知らねえけど、そろそろ決着をつけないとな」

一ヶ所にとどまっているとオゾンの餌食になってしまうので、動き回りながら現状打破の手段を考える。

しかし、御坂から放たれている電撃は絶えず俺の身体にまとわりつくようになっていて、反物質の皮膜を解除できない。

「（俺に常に反物質を展開させ続けることで、俺の攻撃を封じようって作戦か？）」

御坂にしてはズいぶん時間のかかる攻め方・・・というより、攻めではない。

どちらかというところ、防御に徹しているとも言える。

「（くそ、時間がどんどん過ぎてゆく・・・）」

御坂と一定の距離を保ちながら俺が腕時計を見ると、ちょうど『21:00』と表示されていた。

「（チツ、始まっちゃった!!!）」

俺がそう思って集中力が一瞬途切れた次の瞬間・・・

ガッ!!

「うわっ!」

不覚にもつまづき、なんとか橋の手すりにつかまって事なきを得る。

「くそっ・・・」

御坂の反撃を警戒して俺は皮膜を構成しようとする・・・が、

よろっ

「力が・・・入らない・・・」

「やっぱりね。アンタのその能力は確かに強力無比だけど、反物質なんてこの世にほとんど実在しないものを作り出してるところから察するに、演算に相当の体力を使うのは簡単に想像がついたわ」

「・・・だから、わざと俺の周りに電気を滞留させ続けたのか。俺がずっと反物質を展開し続け、体力を減らすために・・・」

「そ。オゾンと体力消費、二重の罠ってやつね」

御坂は俺に近づいてくる。

「・・・アンタとは、もっとちゃんとした勝負をしたかったわ」

「くそっ・・・誰がこんなところでくたばるか・・・琴美を助けるまでは！」

俺は手すりをつかんでいる手に力を入れると立ち上がる。

そんな俺を見て、御坂の周りに電気がたまる。

そして手を俺の方へと向け、その手から電撃を・・・

「待ってー!!」

「Jの瓶・・・」

「そこまでだ御坂!!」

それにこの声……

「梓さん！？それに……アンタまで！？」

「梓……上条さん……」

「お兄ちゃん！ここは私と上条さんに任せて、早く琴美のところへ
！」

「妹さんから話は聞かせてもらったよ明俊！ 御坂の足止めと説得
は俺たちに任せて早く行くんだ！」

「二人とも・・・分かりました！上条さん、梓、無責任ですが後は
任せます！！！」

俺は、上手く力の入らない足にムチ打って駆け出した。

後方では上条さんと御坂のやり取りが聞こえてくるが、気にはして
いられない。

「くそっ！間に合え、間に合ってくれ！！」

俺はその一心で実験場へと走り続けた……

第27話 立ちばかりしは御坂美琴（後書き）

さて、次はいよいよ第一位vs第二位です。

最初で最後の本格的なバトルシーンになります！（おい

第28話 第一位vs第二位

夜道を走り続け、俺はようやく操車場にたどり着いた。

「はぁ・・・はぁ・・・、ま、間に合ったか!？」

膝に手をついて呼吸を整えながら、フェンス越しに中の様子を見ががう。

すると、迷路のように並べられたコンテナのあいだから、青白い光が時折見える。

その光が見える度に、バチバチと音が聞こえてくる。

この光の発生源が電気である証だ。

「とりあえずは間に合ったか・・・!」

思わず安堵のため息が出る。

だが、まだ勝負は始まってすらいない。

「ここからが本番だ。待ってる琴美!待ってる一方通行!」
アクセラレータ

フェンスに手をかけ一部を消し去ると、俺は光を頼りに再び走り出した。

操車場内部にはコンテナが大量に置かれていて、中心部にむかう道には、両側にコンテナの壁がそびえ立っているところも多々あり逃げ道は少ない。

「（こりや思ったより戦いにくいな・・・）」

俺は走りながらそんなことを考える。

なにしろ一方通行に身体を触れられたら最後、バラバラ死体の完成だからだ。

反物質の壁も体表面コーティングも、ベクトル操作の前では意味を成さない。

人差し指一本で突き破られて終了だ。

つまり、基本的には逃げに徹することになる。

「第一位のすぐ下の第二位だったのに基本が逃げとは・・・ま、それでもやるだけだ」

曲がり角を左に曲がる。

正面に、レールの敷かれた広い道が見えた。

電光が一層明るく見えてきたことから合合わせると、近くに二人がいるのは確実なようだ。

「(そろそろ・・・か?)」

俺はいったん足を止め、コンテナの陰から道の様子をつかがおうと・・・

ズサアッ!!

「!?!」

俺が覗き見ようとした方向から、何かが飛んできた。

飛んできた『ソレ』は、最初は動かなかったが、やがてゆっくり

と起き上がろうとする。

「（人間、常盤台の制服・・・琴美!!）」

俺はそう気づいて駆け寄ろうとするが、次の瞬間に聞こえてきた声でその足を止める。

「ケツ、つまんねエなア・・・まったくもってつまんねエ。まア、これまでのお前よりは、ちったア頭はたらかせたみてエだがなア」

この声は・・・やっぱり一方通行か！

「健闘の印に何番目だったか覚えてやるうと思っただが・・・忘れちゃったなア。まアいいか、これで終わりにしてヤンよ」

まずい、今出ていかないと琴美が・・・

意を決した俺は、一方通行の後ろに歩み出た。

「待ちな」

俺の声に、琴美に手を伸ばしていた一方通行の動きが止まる。

声は、自分でも不思議なこと震えていなかった。

恐怖を通り越してしまったということなのだろうか、自分のことすら分からないほど目の前の『最強』に意識を集中させていた。

「ああ？どちらさんですかア？ここは一般人立ち入り禁止なんですけどオ？」

「ああ、そうみたいだな」

俺がそう言ったとき、

「この声・・・本当に来たのですね、とミサカは力なくつぶやきます・・・」

琴美がうつすらと目を開けて俺の方を見る。

「ああ、当然だろ？だから、今は大人しくしてろ。必ず助けるから」
俺は琴美に近づき、髪を撫でながら身体の様子を見る。

常盤台の制服はあちこちが傷つき、外見では分からないがどこか骨折しているかもしれない。

「この俺を差し置いて、一体なんなんですかア!？」

「俺？こいつの親友だけど？」

俺は、琴美が気を失ったのを確認すると一方通行の方へと振り返る。

「は？親友？こいつア最高だ！どのみち死んじまうクローンと親友とはなア！」

「・・・」

ケラケラ笑う一方通行を、俺は目線をそらすことなく睨み続ける。

「・・・あア？待てよ？コイツのことを知ってるってこたア、お前、俺が誰だか当然知ってんだよなア？」

ひとしきり笑い終わった後、一方通行が俺の方を相変わらずニヤ

ニヤした表情で見ながら聞いてくる。

「ああ、もちろん。この学園都市で9人しかいないレベル5の頂点に君臨する男……だろ？一方通行さん？」

「俺のこと知ってて姿をあらわすなんて良い度胸じゃねエか。それとも何か？自殺志願者ですか？」

「冗談。俺は、お前がさっきまでいたぶってた俺の親友を取り戻しに来ただけだ」

「へエ、それはそれは、ご苦労様なこと。でもなァ、目撃者の口は封じましようってのがこういう場合の常套手段なんだよなァ」

「……1ミリも期待しちやいなかったが、やっぱりただで帰してくれるって訳にはいかないみたいだな」

「当然だろオ？……ってわけで、せつかくここまで遠路はるばる足を運んでくれたところ悪リインだが、そろそろくたばれや」

そう言うや否や、一方通行が地面に敷かれたレールをダンツ！と踏みつける。

踏みつけられたレールが、まるで生きているかのようにうねり、俺の方へと迫ってきた。

もちろん、このまま何もしなければレールに吹っ飛ばされることになるのだが……

「残念、効かないんだなこれが」

俺にむかってきたレールは、事前に張っておいた反物質の膜に当たって消え去る。

「・・・あア？」

防がれるとは思ってもいなかったのだろう、一方通行が声をあげる。

「いやー、さすが第一位なことはあるな。あんなふうにレールを操れるなんて。一步間違ってたらどんな目にあっていたか・・・」

俺は不敵にニヤツと笑いながら一方通行をほめたたえる。

ああ、ちなみにこれは皮肉ではない。

ヤツの攻撃を一つ防いだけで皮肉れるほど強くない・・・っていうか、そんな人間はこの学園都市にはいない。

「ほお、ちったア楽しませてくれそうじゃねエか。せいぜい楽しませてくれよなア！！」

そう言うと、一方通行は足元のベクトルを操作し、尋常ではあり得ないスピードで突っ込んできた。

この攻撃も想定内の範囲内だった俺は、一方通行の手が触れる前に横っ飛びをする。

一方通行はそのままの勢いで、積んであったコンテナに突っ込む。

一方通行に殴られたコンテナは大きくへこみ、上に乗っていたコンテナがものすごい音をたてて崩れる。

地面に叩きつけられたコンテナは周りのコンテナに当たって、さらなる崩壊を生み出す。

崩壊の音が静まったときには、辺り一面に白い粉塵が立ち込めていた。

「この粉塵・・・やっぱりアレだよな・・・？」

俺が、持ち合わせている原作やアニメのシーンに照らし合わせてこの粉塵の正体を予想する。

「あーあー、派手にやらかしまったなア。ま、いつもみてエにアイツラが何とかすっからいいんだけどよ」

立ち込める粉塵の中に一方通行の姿が浮かび上がる。

あれだけ派手に突っ込んでおいて、服は少しも白くなっていないし破れてもいない。

ヤツは常に、重力や酸素といった生きるのに必要なもの以外のべ

クトルを反射に設定していて、そのおかげだろう。

だから、銃弾はもちろんレールガンも、白井の体内転移ですら反射するという、物理的にダメージを与えることはほぼ100%不可能だ。

「ああ？こいつはア・・・小麦粉みてエだな・・・ちつとばっかし良いこと思いついちまったぜエ？」

一方通行は粉の正体に気がつくと、まるで悪事を考えついた子供のようにニヤツと笑う。

「なあお前、『粉塵爆発』って知ってるか？実は今、それをおこせる状態になっちゃってたりすんだけどよオ」

粉塵爆発。

空気中にある一定の濃度の粉塵が漂っているとき、火花などが散るとおこる爆発だ。

その破壊力は侮れず、屋内で発生しようものなら建物を損壊させ得る。

一方通行は、それをおこそうとしている。

ヤツの手にかかれば、火花をおこすなど造作もないことだ。

そして、この近距離で爆発に巻き込まれれば、命はない。

普通なら、この時点で勝負はついてしまっているだろう。

俺が『ただの通りすがり』の『普通の能力者』ならな。

「ああ？なんですかア？」

一方通行がこれ見よがしに指を弾こうと右手を上にあげたとき、俺も右手をあげた。

「何って、手をあげただけだが」

「今更白旗振って降参しましたってかア？ぎーンねん、認められませんってなア！！」

そう叫ぶと、一方通行はより一層ニヤツと笑って指を動かす。

それに対して、俺もニヤリと笑い返すと、右手の人差し指を空に円を描くように動かした。

パチン！

「・・・なんだア？」

その時初めて、一方通行の顔から不敵な笑みが消えた。

確かに一方通行は指をならし、そのときのベクトル操作によって火花をおこした。

しかし、その火花が粉塵に伝播することはなかった。

なぜなら、『一方通行が指をならしたその瞬間に、粉塵が存在しなかった』のだから。

「結構いい音が出たな。いやー、実は俺その指パッチン出来なくてさあ。うらやましいぜ」

「てめエ、何をした？」

「なに、とは愚問だな第一位様。『能力を使いました』としか答えようがないんだが？」

そう。

ヤツが火花を放つ一瞬前、俺は空气中に反物質の粒子を拡散させ、小麦粉の粉塵を消滅させたのだ。

「・・・」

一方通行は少しのあいだ黙って俺のことを見つめていたが、おもむろに口を開いた。

「てめエ、ただモンじゃねエな」

「ほお、学園都市最強にほめられるとは、俺も出世したもんだな」

「でもなァ、もうおおよその見当がついちまってるンだよ」

「・・・ッ!」

その言葉に俺は身構える。

「推理ショーのスタートってかア？」

そう言つと、一方通行は崩れたコンテナの1つを軽く蹴った。

人間の何十倍もの大きさのコンテナが飛んでくる。

そのコンテナは、俺の数十センチ前にはられた反物質の壁に当たって消える。

「レールが今のコンテナみてエに消えちまったとき、まず俺はてめエの能力を転移系の能力と予測したわけだア。でもなア・・・」

そう言つと今度は走って突っ込んできた。

俺は壁の展開を解くとさっきのように横に飛んでこれをかわした。

「てめエの今の避け方を見て疑問が生じちまったって訳だア。だってそオだろ？もしてめエが転移系の能力者なら、レポートしてかわせばいいだけなんだからなア。物体は転移出来るけど自分は飛ばせませんっていう程度の能力者とも思ったが・・・」

そう言つて一方通行は、地面にわずかに積もっていた小麦粉を手を取った。

「これを消されたのを見てそれも違っつて思ったんだ。空气中に霧散した小麦粉を一気に消し去ったカラクリがテレポートなら、てめエは確実にレベル5級のテレポーターだからなア」

「・・・」

汗が顔をつたう。

少ない判断材料でここまで考えると、さすがに第一位なだけのことはある。

これは・・・マズイ。

「でもレベル5にテレポーターがいるって話は聞いたことがねエ・・・」

「そしてレベル5って言葉を思いついたときに思い出しちゃったんだなア。つい最近レベル5になったとかいうヤツのことをなア」

「……ッ！」

「お前、アブソリュートデューテ第二位だろ？」

……
へっ……

第28話 第一位vs第二位（後書き）

当初の予定では、バトルシーンは1話にまとめて投稿するつもりでしたが、諸所の事情により分割して投稿することにしました。

さて、予想以上に早く能力を見抜かれてしまった明俊の運命は！？

第29話 攻防、そして覚醒（前書き）

この29話は、バトルシーンの書きやすさのため、地の文が明俊視点ではなく第三者視点となっております。

第29話 攻防、そして覚醒

「お前、アブソリュートデリート第二位だろ？」

「……」

アクセラレータ
一方通行の発言に、ほんのわずかに余裕の表情が見えてきていた明俊の顔が一気に強ばった。

明俊にとって、相手に正体がかかっていないというのは、わずかばかりだがメリットであった。

レベル5の、まして第二位だということは、知らなければそれだけでアドバンテージだったからである。

しかし、正体とそれに伴い能力も見抜かれてしまったこの現状は、アドバンテージを失ったどころかイーブンですらなくなってしまうのだ。

「確か、てめエの能力は反物質を操るとかだったよなア？ベクトル操ってる俺から見ても珍しい能力だったから、記憶に残ってたぜエ？」

「・・・いつかはバレる時が来るのは予想してたけど、まさかこんなに早くきちまうとはな」

明俊は一方通行から少しも目をそらさずに言葉を返す。

なにしろ、一方通行が「反物質」粒子「ベクトル操作できる」「明俊に触れれば勝てる」という確信を得てしまったのである。

明俊の戦い方自体に変わりはない。

しかし、明俊の能力が判明して一方通行が勝利の自信を深めた今、明俊の心中は穏やかではない。

「おやア？さっきまでの威勢のいい表情はどこいったんですかア？」

「ッ・・・」

「自分の身元が割れた途端に意気消沈たア、第二位の名が泣くぜエ？」

一方通行は余裕の表情で心理戦で明俊を畳み掛ける。

「ま、てめエが誰だろうがいずれは俺が勝ってたんだがな」

「くそ……」

自らの正体が不明、という精神的支えを失った明俊には、ひしひしと死への恐怖が迫っていた。

「おいおい、表情が硬いんじゃないですかア？まア、しょうがねエよなア……なにせこの後死んじゃうだからなア！！」

そう言つと、一方通行は三度ベクトル操作で一気に加速し、明俊の身体を捕らえようと腕を伸ばす。

「ッ！？速ええ！！」

それまでの2回とは比べ物にならないほどのスピードで突っ込んできた一方通行に思わず声をあげながら、明俊は横っ飛びにこれかわす。

並みのスピードでは回避できないほどの攻撃に、明俊は足の裏に反物質を展開し、そのときの干渉のエネルギーをロケットの推進力のように利用し強引にこれかわしたのだった。

「ふう……ってうわっ！！」

回避が精一杯で、飛んだ後の場所のことまで考慮に入れていなかった明俊にコンテナが迫る。

「くそっ！！」

明俊は体表面に反物質を展開して、自らにせまるコンテナとの衝突を回避する。

しかし、あまりにも強引な回避だったためスピードがつきすぎてしまっていることに明俊は気付く。

「（やばい！このままじゃ地面に叩きつけられるかコンテナにぶつかるしか止まる方法が無い！）」

反物質を展開し続けている以上は止まることができない。

それこそ極端だが、地面に穴を開け続けることになるのだ。

しかし、このスピードではコンテナだろうが地面だろうが、衝撃時のダメージは計り知れない。

「（ことうなりや賭けだ！）」

そう思った明俊は、両手を広げて手の先に反物質を展開、空気中の粒子と反応させる。

「く、うおおおおおおおおおおおおおお！！」

叫んだ明俊の両手から電撃がほとばしる。

電撃はコンテナにぶつかる。

次第にスピードの落ちてきた明俊の両足が地面に触れる。

ズザザザザッ！！

「はぁ・・・はぁ・・・な、なんとか止まれた・・・」

「ほお、やるじゃねエか第二位。まア、そうでもなきや第二位な
ンて肩書きが廃れちまうつてもンだ」

「へっ・・・後で御坂に殺されないことを祈るか・・・」

明俊が電撃を放つことができた理由・・・それこそが、明俊が反
物質「使い」である大きな要因であった。

明俊は、ただ単に反物質を使えるだけではない。

反物質と普通の物質とが反応したときに発生するエネルギーを制
御することができる。

これまでも、足の裏に反物質を展開して推進力を得る、といった
使い方はしてきた。

それを今回、明俊はさらにそのエネルギーを、電気エネルギーに『変換』する形で活用したのである。

後は、御坂美琴が電気を使って壁に張り付く要領で、金属製のコンテナと電撃を干渉させて勢いを殺して着地、という具合である。

しかし、当然デメリットもある。

「はっ・・・はっ・・・うっ・・・」

体勢を立て直そうとした明俊の身体がフラツと揺らぐ。

そう、高度な演算による体力の消費である。

明俊は本来、発生するエネルギーを無意識下では抑制している。

ちょうど、一方通行が普段はベクトル設定を「反射」にしているのと同じである。

つまり、反物質を「物を消す」、「攻撃の無力化」といった目的に使っている限りは、体力の消費は少ない。

しかし、そこから一步踏み込んでエネルギーとして活用しようとするれば話は別である。

さらに、御坂美琴のようにその道のスペシャリストではないので、適用範囲・威力の制御までは完璧ではなく、その精度を高めるため

に一層の体力を必要とするため、用途は様々であるが乱用は出来ない。

「だが、その能力の使い方は体力をかなり使うみてエだなア。果たして、もう1回でも使えんのかねエ・・・？」

「・・・つくづく頭のまわるヤツだな」

明俊も、このような使い方をもう1度やってのける体力が残っていないことは自覚している。

「(でも、ヤツを止めるためには出し惜しみなんてしてられない・・・!)」

明俊は自らに気合いを入れると一方通行をキツと見つめる。

「この期に及んでその目付き・・・いいねエ!! まだまだこの俺を楽しませてくれるってことだろオ!!!?」

「ああ、見せてやるよ・・・第二位なりの意地ってやつをな!!」

明俊はそう声を張り上げると、右手を突き上げた。

・・・しかし、二人を取り巻く状況に特に変化は無い。

辺りをつつむのは静寂のみである。

・・・一般人ならそう思い、そして次の瞬間『死ぬ』ことになる。

しかし、一方通行は感じた。

「(なんだ？上手くは言えねエが・・・空気が変わった？)」

だが、周囲の様子に変わった様子は見られない。

「(・・・気のせエかア？いや、第二位に限ってそんなことア・・・)」

そう思いながらも、特に異常が無いので一方通行は明俊に近づく。

そして一步踏み出した瞬間、一方通行は思い知ることになる。

「・・・ッ!？」

慌てたように鼻と口を押さえる一方通行。

その視線が、自分の周りをサッと見渡すように動き、そして明俊を捕らえた。

「どうした一方通行?なにやらつらそうだな?」

明俊は依然、右手を空に突き上げたままである。

ドンッ!...

一方通行は足元のベクトルを操作して、明俊から遠ざかるように飛んだ。

すると明俊も、それにくらいつくように前方へ駆け出す。

一步一步が地面に着くたびに反物質を利用し、飛距離を稼いで一方通行に追いつく。

「・・・」

一方通行は、今までとは一転して何もしゃべらない。

ただ、明俊を怒りの形相で睨みつけている。

「お前から離れるわけにはいかねえんだよなあ。なにせ、離れられたらお前を反物質のドームの中に閉じ込めておけなくなるからな」

「・・・」

そう、明俊は能力を使用していた。

一方通行をつつみこむように半球状に反物質のドームを形成し、その中に閉じ込めたのである。

「いくら最強といえども人間は人間・・・酸素無しじゃ、生きていけねえよな?」

明俊がとった作戦、それは、一方通行を反物質ドームに閉じ込め、ドーム内の酸素を消滅させることで酸欠に持ち込もうというものであった。

酸欠に持ち込む作戦は、琴美が酸素をオゾンにすることも実践していたが、その場合は、一方通行の周りの風のベクトルを操作することで容易に酸素を供給することができた。

ところが、明俊のドーム作戦にはその方法は通用しない。

なぜなら、仮にドーム外の空気をドーム内に取り込むように空気をベクトル操作しても、外から中へ入る空気は1度反物質に触れることになり、その時酸素だけ消滅させられるからだ。

「（格下の分際でいい気になりやがってよオ!!!・・・でもなア、所詮格下は格下、この俺には勝てねェンだよ!!!）」

ちなみに、一方通行がいまだ窒息で倒れないのは、はき出すために肺に戻ってきた空気をベクトル操作して、二酸化炭素以外を再び体内に循環させているためである。

人間のはき出す息には、20%前後の酸素が含まれている。

それを循環させて、なんとか持ちこたえている状態なのである。

「（恐らくやつア、このドームを作り出すために高度な演算を強いられているはず・・・なら、どっちが先にくたばるかの勝負！！）」

そう判断した一方通行は、自分の近くにあつたコンテナを一つ蹴り飛ばし、時間差で2つ目を蹴り飛ばした。

シュン！！ シュン！！

しかし、明俊はドーム形成だけでなく、自らの表面にも反物質膜を展開していて、どちらのコンテナも明俊を吹き飛ばすには至らなかった。

「（格下のやるオ、自分の体力なソてお構いなソてことかア？・・・くそッ、流石にそろそろ酸素がきつくなッてきやがッた）」

体内循環の酸素には当然限界がある。

時間的猶予の少ない一方通行は、コンテナを一つ蹴ると、そのコンテナの後を追うように高速移動する。

明俊が先ほどのように、身動きせずコンテナを防いだ場合、消えたコンテナの後から二重攻撃を仕掛けようとしたのである。

は・・・なッ!？」

明俊の視線の先には、かわしたコンテナが他のコンテナの山にぶち当たり、崩れていく光景が映っていた。

そしてそこには・・・

「じ、琴美!？」

あるうことか、不幸なことに明俊の避けたコンテナが当たったのは、琴美のすぐ近くのコンテナの山だったのだ。

「くそっ!なんたる不幸!！」

明俊は右足一本で跳躍すると琴美のそばに着地し、そのまま琴美に覆い被さる。

ズーン！！

コンテナが地面に落ちる。

「ハア・・・ハア・・・、ま、間に合った・・・」

コンテナが明俊に当たる直前、背中に反物質膜を展開して直撃を避けたのである。

しかし、本来の明俊なら、わざわざ琴美に近づかなくとも彼女の上にはバリアを張ることもできたであろう。

それをしなかった・・・否、出来なかったのは・・・

「どオでもいいけどよオ・・・俺のこと忘れてんじゃないですかア？」

「・・・ッ!?しま・・・」

「おっせエなア!!」

背後から突如現れた一方通行は、起き上がろうとした明俊の肩口を横から蹴り飛ばす。

「グアッ!!」

なすすべなく蹴り飛ばされた明俊は背中からコンテナに激突した。

明俊がわざわざ琴美に近寄った理由、それは、もはや遠距離地点に反物質を展開するほどの体力が残っていなかったからであった。

今も、琴美をかばうのに必死だったとはいえ、あの一方通行の存在を失念してしまっていたほど注意力が落ちていた。

明俊はすでに、限界に達していた。

「……」

明俊はピクリとも動かない。

「氣イ失ったみてエだな。最後は惚れた女のために自分をかえりみずってかア？ケツ、馬鹿らしい……」

一方通行はそんな独り言を言いながら琴美に近づく。

一方通行が近づくと、琴美がうつすらと目を開いた。

「……うつ」

「やっとお目覚めかア？でも残念だったなア、一足先にショーは終わっちまったぜ？」

「……か、彼は……？」

琴美は声を出すのもやっとの様子だが、それでも絞り出すように声を出す。

「ヤツなら、コンテナにクリーンヒットしてのびてるぜエ？」

そう言つと、一方通行は身体をどけて琴美に明俊が見えるようにする。

「……ッ」

その光景を見て琴美は息を飲んだ。

服はボロボロになっており、あちこちに血が滲んでいる。

とても学園都市第二位の姿とは思えない状態である。

そしてこの光景は同時に、第二位をもつてしても一方通行には勝てないという現実をはつきりと指し示していた。

「これでハッキリしたなア。学園都市準最強の立場のヤツが俺に勝てねエってことは、誰が何人俺に挑んできたところで勝てねエってことがなア」

「……どうして?」

「あア?」

「どうして、学園都市最強であるあなたが、さらなる高みなど目指すのですか?とミサカは問いかけます。あなたは現実に、あなたに最も対抗しうる存在である彼を倒せるほどの実力を持っているのに、なぜまだ上を目指すのですか?」

「・・・そこがダメなんだよ」

「・・・？あなたの言っていることの意味が分かりかねます、とミサカは説明を求めます」

「つまり、その『対抗しうる』ってのがダメだっつってんだよ。俺が目指してるのは、対抗する気も失せちまうような、そういった最強なんだよ」

「・・・」

言葉を失う琴美。

「・・・お前、アイツのことが好きなのか？」

「何を言い出すのですか？とミサカはあなたの意外な発言に驚きを隠せません」

「インや、別に。クローンのくせにそんな感情持ちやがって、くっだらねエ・・・ まあいい。さーてと、まずは本来の仕事を片付けるとしますかア？」

「・・・ッ」

一方通行の発言に、琴美の身体がこわばる。

「安心しろオ。この慈悲深い一方通行様が、アイツもすぐにあの世に送ってやんよ。そしたら、せいぜいあの世で仲良くやるんだなア」

そう言って、一方通行が琴美の首に手をかけようとした、その時、

ガタッ

一方通行の後ろで、何かの音がした。

「はいはい、今度はなんですかア？」

琴美の首に手をかけるのを止め、一方通行は振り返る。

そこには、立ち上がる明俊の姿が。

「もう目覚めちまったか・・・まアいい、ンじゃ、テメエから先に片付け・・・」

「アクセラレータ一方通行アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

突如、明俊が大声で叫んだ。

「なんなんだア？頭でも打っておかしくなっちまいやがったんですかア？」

一方通行の言葉に明俊は何も答えず、黙って右足を一步前に踏み出したかと思うと、両手を広げた。

次の瞬間、明俊の周りに散乱していたコンテナが、明俊を中心にしてどんどん消え始めた。

「チツ、まだ能力を使えるとはやるじゃねエか。でも、何回やっても結果は同じ……」

そう言いながら一方通行は反射を適応しようと、演算を開始する。
……が。

「……ッ!? オイオイ冗談だろオ!?!」

なんと、あの一方通行の顔に驚きと困惑の表情が浮かんだ。

それもそのはず、なぜなら『能力が使えなくなっている』のだから。
ら。

焦る一方通行を尻目に、反物質は徐々に近づいてくる。

「チツ！」

このままではマズイと判断した一方通行は、明俊から離れるように走り出す。

しかし・・・

バツ！！

明俊が驚異の跳躍を見せると、一方通行の頭を越して前にジャンプしてきた。

「ツ！？」

一方通行は急いで引き返そうとするが、一足先に明俊の蹴りが炸裂する。

ドシャー！！

反射を使えない一方通行は、そのまま地面を転がった。

「・・・チクシヨウ、一体何がどうなってやがんだ？能力が使えなくなるなんてよオ」

そんなことを呟きながら立ち上がるうとする一方通行に、明俊が近づいてくる。

そして・・・

「?」

下

再び攻撃されると思って身構えていた一方通行が見たのは、突然地面に倒れた明俊の姿だった。

倒れたままピクリとも動かない。

「……さっぱり意味がわかんねェ」

一方通行が再度演算を試みると、今度はちゃんと能力が使えた。

「……コイツ、なにもンなんだ？」

内心、一方通行は恐怖していた。

目の前の男が大声で叫んだかと思えば、突如能力を封じられたのだ。

前代未聞の出来事に、思わず手が震える。

「しかしまア、今こうして立っているのは俺ってわけだア。コイツがなんなんだか知らねェが、ここで殺しちまったら関係ねェよなア
「！！」

「そうはさせねえよ!!」

一方通行が明俊に手を伸ばそうとしたまさにそのとき、誰かの拳が一方通行に迫る。

キューーン!!

グシャッ!!

またしても地面に叩き伏せられる一方通行。

「なんだなんだア！？今はちゃんと反射が発動していたはず・・・」

そう言って一方通行は顔を上げる。

その視線の先には・・・

「反射だか最強だか知らねえが、テメエが明俊を殺そうってんなら・
・まずはそのふざけた幻想をぶち殺す!!」

u'u

第29話 攻防、そして覚醒（後書き）

バトルシーンってホント難しいですね・・・

さて、明俊にはチート級の何かがあるようですね（他人事風に）

あの一方通行の能力を封じちゃうなんて・・・コイツ、出来る！

まあそれはまた後日ということまで。

次話で琴美編は終了の予定です。

第30話 〱御坂琴美編最終章〱

「ん……んんっ……」

俺が目を覚ますと、真っ先に視界に飛び込んできたのは白い天井だった。

どうやら俺は横になっているらしい。

身体には布団がかけられているし、部屋は消毒液のにおいがした。

「ここは……病院？」

そう呟いて辺りを見渡してみると、来たことのない病院のはずなのに、どこか見覚えがあった。

俺はどこで見たのか記憶をたどる。

「この部屋の感じ……ああ、カエル顔の医者がいる病院か」

カエル顔の医者。

その凄腕ぶりから「冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）」という異名を持つ、マジで超凄腕の医者である。

どんな患者でも見捨てず、あらゆる手段を用いて最後まで治療し

てしまう。

上条さんが右腕を切り落とされたときも、何事も無かったかのよう
に接合してしまった。

確か、寿命すら克服した・・・んだっけか？

カエル顔ってのはそのまんまの意味で、カエルのような顔をして
いる。

御坂美琴には「リアルゲコ太」などと呼ばれていたな。

原作未完のうちにこっちの世界に来ちまったから確証は無いが、
恐らくこの「とある」の物語に大きく関わっている人物で間違いな
いだらうな。

あのアレイスターを救ったのもカエル顔の医者だしな。

「う、うーん・・・あれ、お兄ちゃん？」

声がしたのもう一度よく部屋を見渡すと、俺の腰のあたりで梓
がベッドに寄りかかって寝ていた。

多分、ずっと俺に付き添ってくれていたのだらう。

「よお梓。久しぶり・・・で良いのか？」

「良かった・・・良かったよぉ〜!!」

目に涙をためながら、梓が俺に抱きついてきた。

「うわっ！梓、ちょっとタンマ！まだあちこち痛いんだって！そ、それに、む、胸が当たってるって！」

俺の顔の前には、ちょうど梓の胸が。

しかも、ギューツと抱きしめてきているので、顔が埋まっちゃまった。

いくら妹とはいえ、流石にこれは健全な男子中学生にはちとマズイ。

「え？私の胸じゃ気持ちよくなかった？」

「そっいうことじゃねえ！！ってか、さりげに危険なこと言っな！」

どこかで育て方を間違えちまったか？

まあ、オタやってりゃ少なからずこういう知識も入ってきちまうってもんか。

「へへ、ごめんごめん。でも、このままお兄ちゃんが目を覚まさなかつたらって思ってたからさ・・・」

「そんな大袈裟な。単なる気絶みたいなもんだろ？・・・それより、あれからどれくらい経った？」

「大体半日くらい。良かった、半日で目を覚ましてくれて」

「半日か・・・そ、そうだ！」

俺は梓の両肩に手をのせて身体から引き離すと、梓の顔をジッと見つめる。

「実験は！？一方通行は、アクセラレータ琴美はどうなったんだ！？」

「う、うん。お兄ちゃんが一方通行に殺されかけてるところに私たちがなんとか間に合って、上条さんが右手で一方通行を殴ったの」

「そ、それで？」

「そこから先はお兄ちゃんも知ってる通り、上条さんと一方通行の一騎打ちが始まったの。でもお兄ちゃんとの戦いで少し疲れてたのかな、一方通行の動きが少し鈍ってたような感じもした。それで最後は、上条さんが一方通行をそげぶして終了・・・って感じ」

「そうか・・・」

「最後の一撃で一方通行は気絶しちゃって、上条さんも、御坂さんを説得するために事前に体力を使っちゃって、最後の一撃をかました後に倒れちゃったの」

「じゃあ、その二人もこの病院にいるのか？」

「うん。上条さんは隣の部屋にいるわ。一方通行は、カエル顔の医者に事情を説明して、離れた病室にしてもらったわ」

「ふーん……」

俺はそこまで聞くと、ふと窓の外を見る。

……俺一人じゃ一方通行は止められなかった。

なんだかんだで、結局原作通り上条さんが一方通行を止めたことになる。

よく考えたら、レベル0である上条さんが一方通行を止めることに意味があっただっけか。

レベル5の第二位なら順位的には一応倒せる位置にいるわけだけど、仮にあそこで俺が一方通行を倒していたとしても実験の中止には至らなかったかもしれない。

でもなあ、確かにこれで琴美や他の妹達シスターズが実験の犠牲にならなくなったのはとても嬉しいことだけど、どうせなら俺が止めたかった。

結局、俺の力じゃどうすることも出来なかったってのは、ちょっと悔しいな……

「お兄ちゃん」

俺が窓の外を見ながらそんなことを考えていると、梓が動いて俺の顔を見つめてくる。

「ん？どうした？」

「お兄ちゃん、今変なこと考えてたでしょ」

「へ、変なことって？」

「あ、下ネタとかそういうことじゃなくて、『結局、俺の努力って何だったんだろう・・・』とかそんなこと考えてなかった？」

「ハハ、さすが双子ってところか。そうだな、当たらずとも遠からずってところだな。俺の力で一方通行を止められなかったのがちょっとな・・・」

「やっぱり。でね、私の言いたいことは、全然そんなことないよってこと」

「・・・？」

梓は俺の顔を見つめながら続ける。

「だってそうでしょ？お兄ちゃんが昨日の夜、琴美を助けるために

行動してなかったら、琴美も、御坂さんも死んじゃってたんだよ？
それに、お兄ちゃんは頑張ったよ」

「・・・頑張った？」

「うん。私たちが操車場に到着するまでお兄ちゃんが一方通行と互角に戦ってくれたから、上条さんが一方通行を止めるのに間に合ったんだよ？頑張ったなんてレベルじゃないよ。あの一方通行と戦って生きて帰ってこれるなんて、ほとんど勝ったに等しいことだと思う」

「うん・・・そう、そうだよな」

俺がそう言っつてうなづくとき、梓の顔にも笑顔が浮かんだ。

結構心配させちまったみたいだな。

まだ心の中の未練は少し残っているけど、この梓の笑顔を見ると、今はそんなことは忘れようと思う。

琴美も無事生きていることだし、みんなに心配かけっぱなしだろ
うから謝らないとな。

夕方。

俺が、沈む夕日を窓から眺めていると・・・

コンコン

誰かが病室のドアをノックする音がした。

「はい、どうぞー」

「失礼しますの」

「お邪魔します、明俊さん」

「おっじゃっましまーす！」

ここ最近は何も聞くことが少なかった3人の声が聞こえてきた。

「よお白井、初春、佐天」

3人は手に手に花やらお菓子やらを持っている。

「よお、ではありませんの。お姉さまから『明俊とアイツが病院に

運ばれた』と今朝言われましたの。本来ならばすぐにもお見舞いを、と思ったのですが、本日は風紀委員ジャッジメントと警備員アンチスキルの一斉合同警邏があつて、終わったのがついさっきでしたの」

見ると、白井と初春の腕には風紀委員の腕章がついている。

警邏の帰りからそのまま見舞いに来てくれたのだろう。

「今の会話のアイツって……上条さんのことか」

「そうですね。明俊さんは、あの類人猿のことをご存知ですか？」

「ん？ああ、俺や琴美を一方通行から守ってくれたのは上条さんだしな。それに、前からちよつと面識があつてな」

「そうでしたの。それにしてもお姉さまったら、先ほどから類人猿の病室に入り浸つて……わたくしというものがありませんながらまったく……」

などと言つて、病室の椅子に座つてさらにブツブツ言い始めた。

……白井、顔が怖いぞ。

「それにしても、明俊さんが無事で本当に良かったですよ」

初春が持ってきた花を花瓶にいけながら安堵の表情を浮かべる。

「みんなには、心配かけちまつたみたいだな。ごめん」

「あ、別に謝らなくても大丈夫ですよ？明俊さんなら、きっと無事

に琴美さんを助け出して帰ってきてくれるって信じて・・・ひゃあ！?」

シリアスな展開の中、突如初春が悲鳴をあげる。

何かと顔をむけると、そこにはめくられた初春のスカートとその奥に覗く白い・・・

「・・・ッ!? あ、明俊さん!? み、み、見ましたか!?!」

「えっ!?! い、いやいや、見てない見てない!?!」

顔を真っ赤にして俺の方を潤んだ目で見てくる(であろう)初春から顔をそむけながら、俺は必死に誤魔化す。

いや、実際にはチラッと見えていたんだ、シンプルな白いパ・・・止めておこつ。

「いやー、今日の初春は白いパンツかぁ。シンプルなイズベストって感じ?」

まあ、やはりと言うか、犯人は佐天だ。

しかも佐天、俺がせっかく心の声ですら言うのをはばかった単語をあっさり言いやがった。

「ちょっと佐天さん!? ばらさないで下さいよ!?!」

「だってねえ、さっきの明俊さんなら見えてたと思っけどなあ？」

そう言っつて俺の方をニヤニヤと見てくる佐天。

・・・お、恐ろしい子、佐天。

「だから見えてねえっつて!!」

初春に申し訳ないので必死に見てないことにしておく。

「うーん、必死になっつているところがますます怪しい・・・」

「誰だっつて必死になるわ普通・・・」

「あ、ひよっとして初春のパンツじゃ満足出来なかつたとか!?!?・
・しょうがないですね、私が見せてあげますよ」

「だから、見てないのに満足もへチマも・・・っつて今なんつた!？」

「え?だから私が見せてあげますよ」

そう言いながら佐天はゆっくりスカートの上そを上げる。

「ストップ!!どんな教育受けてきたのか知らんが、男にそんなものホイホイ見せようとすんじゃねえ!!」

佐天の顔はほんのりと赤くなっている。

顔といい行動といい、白井のパソコン部品（媚薬とも言う）でも使ったのか！？

「確かに普通の男の人にならマズイかもしれないですけど、明俊さんになら、み、見せちゃいます・・・」

そう言っって顔を真っ赤にする佐天。

・・・ついに佐天がぶっ壊れた！！

しかも、「俺になら」って俺はひょっとして男として見られてないのか？
超鈍感

「とりあえず佐天を止めないと・・・そうだ！ここには風紀委員が二人もいるじゃねえか！あ、俺もか・・・ってそうじゃなくて、白井！初春！佐天を止めてくれ！！」

「ブツブツ・・・はい？何ですの明俊さ・・・って佐天さん！？何してますの！？」

「あわわ、明俊さんに見られちゃい・・・え！？佐天さん何を！？」

俺の声に反応した二人が大声をあげる。

「二人とも、病院で大声出しちゃダメですよ？」

・・・佐天、正論だがそれを今のお前が言うか。

まさに「今日のお前が言うなスレはここですか？」状態だ。

「確かにそうですね・・・ってそうじゃありませんわ！いくら明俊さんが知り合いとはいえ、殿方に下着を見せるなど・・・」

「いつも御坂さんに迫ってる白井さんには言われたくないです」

「それとこれとは話が・・・ハッ、そうですね！私もお姉さまに自ら下着を見せつけければ良いんですわ！」

「ちょ！？」

意味不明な言葉を残して、白井はテレポートして消えた。

・・・御坂のいる、隣の上条さんの病室に飛んだのだろう。

無事に帰ってくることはないだろう。

アーメン。

「とにかく佐天さん止めてください！そこから先は私たちにはまだ早いです！もつと大人になってからじゃないと！」

・・・うん？

初春の理論はちょっと飛躍しすぎだよな？

ってか、今日は3人ともぶっ壊れてるじゃねえか！！

「日常に帰ってきたけど・・・はあ、不幸(?)だ・・・」

その後、初春が何とか佐天の暴走を止めて、案の定無事では済ま
ず黒焦げになって帰ってきた白井を引き連れ帰っていった。

・・・御坂、病室で電撃使ったのか。

しわ寄せが上条さんにいかないように祈るしかない。

「・・・何か疲れたな。飲み物でも買ってくるか」

別段、足などが折れている訳ではないので歩くことは出来る。

まだ痛みはあるが、歩くのに支障がある程ではない。

ガラッ

俺は病室のドアを開けると、階段ある右へ・・・

ドンッ！

「ひゃあ!?!」

「うわっ!?!」

廊下をトテトテと走ってきた誰かとぶつかった。

「痛てて・・・す、すみません、大丈夫ですか?」

「う、うん、こっちこそごめんなさいなんだよ」

・・・ん？

「このしゃべり方、まさか・・・」

「あ、ねえねえ、とうまの病室ってこの辺かな？」

「・・・い、インデックス、さん」

そう、この「とある」の物語の最重要人物の一人、インデックスだ。

まさか、こんなところで初お目見えとはちょっと意外だ。

「え？あなた、私のこと知ってるの？」

「ん、ま、まあな。上条さんとも面識あるし」

「とうまと面識・・・?」

インデックスが首をひねる。

「ああ、上条さんが一人で買い物してる時に知り合ったもんで。それより、上条の病室ならこの隣だ」

「教えてくれてありがとうなんだよ！　そうそう、一つ聞いても良いかな?」

「ん?」

「とうま・・・どうして病院にいるのか知ってる?」

そう聞いてくるインデックスの目から、心底上条さんを心配しているのが伝わってきた。

「ああ。知ってるも何も、上条さんが今病院にいるのは俺のせいみたいなものだ」

「あなたが、とうまに何かしたの?」

「いや、むしろ逆だ。俺は上条さんに助けられたんだ」

「・・・?」

「俺の親友がある男に殺されそうになってたんだ。で、俺はその親

友を助けるために男に喧嘩を売りに行ったんだけど返り討ちにあつて、逆に俺が気絶させられたところに上条さんが通りかかった……
つてのが、おおよその事情だ」

「そう……とうま、また困ってる人を助けたんだね」

「ああ、命の恩人だ」

俺がそう言つと、インデックスはちよつと考えてから、

「……でも、ちよつと意外かも」

と言つた。

「……意外？」

何が意外なのだろうか。

上条さんが人を助けるのは日常茶飯事だろうに。

「うん。とうまが助けるのつて、いつも決まって女の子だったからね」

「……ハハハ」

インデックスの発言に思わず納得してしまった。

「でも、今とうまが病院にいるのはあなたのせいじゃないよ」

「え？」

「あなたは正しいことをした。それなのにとうまの入院をあなたのせいにするなんて、そんなこと出来ないんだよ」

そう言ったインデックスの顔は、まさにシスターと言う顔つきだった。

「そう言ってくれと、こっちの気も楽になるよ。ありがとな、インデックス。自己紹介が遅れたな、俺は工藤明俊って言うんだ」

「じゃあ、あきとって呼ぶね！じゃあねあきとし、お大事に！！」

「ああ、上条さんによろしくな」

そうしてインデックスは上条さんの病室に向かう・・・が、

「ねえ、あきとし、もう一個だけ良いかな？」

インデックスが上条さんの病室のドアの取っ手に手をかけたまま俺に言葉をかけてくる。

「ん？どうした？」

俺も足を止めるとインデックスの方を見る。

「これは私の勘違いかもしれない・・・でも、感じるんだよ」

「感じる・・・？何を？」

「上手くは言えないんだけど、あきとしから何か不思議なものを感じるの」

「俺から・・・不思議なもの？」

インデックスは一体何を言っているのだろうか？

インデックスが感じる、ということとは、魔術的な何かということだろうか。

そう考えてみるが、すぐにその考えは否定できる。

もしインデックスの感じているものが魔術的な何かなら、10万3000冊もの魔道書を完全記憶しているインデックスに分からな
いはずがない。

・・・ということとは、科学的な何か、ということなのか？

でも、そうするともつと分からない。

こちらの科学側にとって、「不思議なもの」と言っただけのオカルト・迷信に過ぎないからだ。

インデックスの言う不思議なものが俺に宿っているのなら、とくに研究所かあるいは最悪、アレイスターに捕まっているだろうか
らな。

つまり、科学的なものでもないということになる。

最後の可能性は、俺が別世界の人間であるとインデックスが何かしらの方法で探知した可能性だ。

さしもの魔道書にも、人間を別世界から降臨せしめる方法などは書かれていない・・・だろうから、はっきりとは分からないのかもしれない。

はっきりとしないから、「不思議な何か」という形容をしたのかもしれない。

「さあな。ただの勘違いじゃないのか？」

考えても結論は出そうにないので、インデックスの勘違いということにこの場はしておこう。

「・・・うん、そうだよな。ゴメンね、変なこと言って引き止めた
りして」

「いや、良いんだ。インデックスが言うんだ、あながち勘違いでもないかもしれないしな。・・・それじゃ、そろそろお別れだな。また今度、どこかで会う機会があったら会おうぜ。『10万3000冊の魔道書を秘めた』魔術師さん？」

そう言つと俺は角を曲がり、階段を最上階の開放フロアへと上がる。

「・・・ッ!？どうしてあきとしがそれを!？」

「ほらほら、大声を出すと愛しの上条さんの傷に響くぞ?」

「おーいインデックス?病院で大きな声出しちゃいけませんよー」

後ろから上条さんの声も聞こえてきた。

俺たちのやり取りが聞こえてきてインデックスの存在に気付いたの
だろう。

俺はインデックスを上条さんに任せて、階段を上り続けた。

「さーて、何を飲もうかな？・・・ん、誰かいる」

俺が最上階の開放フロアにたどり着いたとき、自動販売機の前に立っている一人の男がいた。

その男は髪が白く、顔にはカーゼのようなものはっていた。

俺が近づいて隣に立ったとき、その男は初めて俺の存在に気付いて舌打ちをした。

「チツ、なんだテメエかア」

「半日ぶりに会って最初の一言が舌打ちなんて、いくらなんでもひどいんじゃないか？」アクセラレーター「一方通行」さん？」

そう、昨日死闘を繰り広げた相手、一方通行だった。

「おめエ、よく何の抵抗も無く俺に近づいてこれんなア。ついさっきまで敵同士だったってのによオ」

「そうだな・・・確かに敵同士だったよ。少なくとも、昨日の夜までは、な」

「ンじゃ、今はどうなんだ」

一方通行は自販機のブラックコーヒーのボタンを一つ押す。

「今は違うな。もうアンタは妹達を殺したりはしない、だろ？」

「まあな。あの三下野郎に負けちまったんで、計画は中止だよ」

「なら良いんだ。もうアンタは俺の敵じゃあない」

「ハア？俺は妹達を一万体以上殺した殺人鬼、それなのに敵じゃねエってのは、テメエの頭どっかおかしくなっちまってるんじゃないですかア？」

「じゃあ逆に聞くけど、アンタにとって俺は敵か？ 違うよな。」

もしそうなら、俺はこの場でとくに殺されてる。非道な殺人鬼なら、病院であろうと躊躇なく殺してる。だろ？」

そう、一方通行は悪魔なんかじゃない。

確かに、妹達を一万人以上殺した事実は消えないし、その罪が消えることもない。

だけど俺は知っている。

この後、打ち止め（ラストオーダー）と出会って変化する一方通行を。

彼なりに、自分の罪をキチンと背負って打ち止めと妹達を文字通

り身体を張って守るのだ。

俺はそんな一方通行に結構憧れていたりもする。

「……」

俺の言葉にしばらく黙っていた一方通行だったが、やがて片手で器用に缶コーヒーを開けると階段の方へと歩き出した。

「なんだ、もう行っちゃうのか？」

「テメエと話すことなンざハナからねエンだよ。……それに、テメエの近くにいたらコツチが危険だからな」

「大丈夫だって。もう酸素奪ったりしないから」

「（コイツ、あの力の自覚がネエのか？チツ、余計めんどくせエ……）あアそうかい。ンじゃ」

そう言うと、一方通行は階段を降りていった。

……何か咳いたような気もしたが、気のせいかな。

「……あ、一方通行のヤツ、コーヒー買っというて自販機に忘れてる」

すでに一個手にしていたから、これは二個目か。

「ただけコーヒー（ブラック）好きなんだよ。」

「……それとも、俺のか？」

「いや、まさかな。」

「まったく、しょうがねえな。俺は缶のブラックはどうもダメなんだよな。」

俺は缶を取り上げると、病室へと向かった。

ガラッ

俺が自分の病室のドアを開けると、開けっ放しにしていた窓から、ほとんど沈みかけている夕日を眺めている二人組がいた。

二人とも常盤台の制服に身をつつみ、背丈は同じくらいで髪の色

も長さも同じだ。

違うのは、片方の人物が耳にイヤリングをしているところだ。

「琴美と・・・ そっちは美琴か？」

俺が声をかけると、二人が同時に振り向く。

「お帰りなさい、とミサカはどこかへ行っていたあなたに挨拶します」

「わりいわりい。飲み物買いに行ってたんだ」

俺は持ってきた缶コーヒーをちらつかせる。

「おや？普段はミルク入りのあなたが珍しいですね、とミサカは疑問を呈します」

「ん、ああ、まあ、ブラックの気分だったんだよ」

まさか、一方通行に会って置き土産をかつさらってきたとは言えない。

「つてか琴美、よく俺がいつもコーヒーにミルク入れてるの知ってたな。」

驚くべき観察眼。

「それで、二人は何しに来たんだ？」

俺はベッドに腰かけ、缶コーヒーを開けながら尋ねる。

「・・・私は、アンタに謝りにきたの」

そう言ったのは美琴だ。

「謝りに来た？何を？」

「昨日、アンタを実験の関係者と勘違いして攻撃したことよ」

「ああ、何だそんなことが・・・」

「そんなことってアンタ・・・」

「良いんだよ。あの状況で、しかもお前は実験のことで精神的にもかなり疲れていたはずだ。勘違いしたっておかしくない」

「でも、私はレールガンまで使ってアンタを止めようとしたのよ？
一歩間違っただらアンタは死んでたのよ？」

「だから気にすんなって。結果として俺は生きてんだから。・・・
それに、御坂じゃ俺には勝てねえよ」

俺はそう言ってニヤツと笑う。

「な、何ですって！そういう割には、アンタ結構くたばってたじゃない！」

・・・計画通り。

ホント、美琴って扱いやすいな。

イジイジしているなんて美琴らしくないからな。

わざとちよつと突付いてやったら案の定だ。

「そうそう。そうやって御坂はいつも通りで良いんだよ。罪悪感を感じるのはいけど、いつまでもそれを引っ張ってるのはお前らしくないぞ?」

「・・・」

美琴は黙って俺の顔を見つめる。

「ただそうだなあ・・・強いて言うなら、もっと俺たちを頼っても良いんじゃないか?」

「え?」

「白井が言ってたぞ? 『自分に、お姉さまのパートナーはつとまらないのか』 ってな。白井は、お前の疲弊した姿を見ながら、それでも相談一つしてこないお前に初めて疑念を抱いてたんだぞ?」

「黒子・・・」

「俺も琴美のことをお前に黙っていたからこんなこと言えた義理じゃないけど、もうちよつと俺たちを頼ってくれよ。俺たち、親友だろ?」

そこまで言うと俺は言葉を切って美琴の反応を待つ。

美琴はしばらく黙っていたが、やがてため息をついて、

「まったく・・・罵倒されてもおかしくないはずのアンタに、まさか諭されるとはね」

そう言ってドアの方へと歩き出した。

「ん？もう帰るのか？」

「ええ。あんまり長居してもアンタに悪いし。それに、今の話聞いたら黒子にも謝つとかないといけないし。琴美？ アンタも出来るだけ早めに休みなさいよ？」

バタン

美琴が出て行って、病室には俺と琴美だけになった。

「これで御坂も、少しは自分を取り戻したかな・・・？ そっぴや琴美、御坂に名前と呼ばれて・・・」

ギュッ

「あなたが外に出ていたあいだにお姉さまとお話する機会がありましたので、その時に親しくして頂きました、とミサカは報告します」

「ああ、それは分かった。・・・それで、何で抱きついてんだ？」

「いや、嬉しいことこの上ないのだが、いきなりすぎて心臓がヤバい。」

「フフ、心臓が早鐘を打っていますね、とミサカはあなたの鼓動を感じて幸せに浸ります」

「そ、そうか、琴美は今幸せなんだな？それは良かった」

人の緊張を感じて幸せとは、ちょっとよく分からないが。

・・・

「それで、琴美さん？いつまで抱きついていらっしやるのですか？
そ、その・・・背中に当たってるんですが・・・」

「あててんよ」

「ちょ！？」

どこで覚えたんだその言葉！？

「当ててるのは冗談です、とミサカはお茶目な一面を披露します。
ちなみに、『あててんよ』はミサカネットワークで・・・」

「分かった、もういい」

やっぱりミサカネットワークだったか。

そんなところだろうと思ったが。

それにしても、一体ミサカネットワークでは普段どんなやり取り
がなされてんだよ・・・

「話を戻しますが・・・あなたは、ミサカが抱きついているこの状況は嫌ですか？ とミサカは若干緊張気味にたずねます」

「い、いやいや、全然嫌じゃないさ。むしろ嬉しいよ」

「・・・遠慮して、わざとそう言っていないよね？ とミサカは確認をとります」

「わざとなんかじゃねえよ。ホント、嬉しい」

「良かったです、とミサカは史上最高に安堵します」

「そんな大袈裟な」

「本当ですよ？・・・その証拠に、こちらを向いて下さい、とミサカははやる気持ちを抑えて催促します」

今度は一体何が始まるってんだ？

俺は若干緊張しながら、琴美の方を振り向いた・・・

「んんっ!？」

「ん・・・」

振り向いた途端、いきなり琴美の顔が近づいてきて、そのまま口付けをしてきた。

「ん・・・んんっ・・・」

ただ唇が触れ合うだけのキスだというのに、心臓は爆発寸前というくらいに脈打っている。

琴美の吐息がもれる度に、ほのかに甘い香りがしてくるような気がして、余計に緊張の度合いを高める。

でも、人間こういう時ほど色んなことを考えてしまうもので、今も『琴美も女の子なんだな』などと至極当たり前のことをつい考えってしまった。

「ぶはっ……」

「ん、ふう、どうでしたか、ミサカのファーストキスの味は？
とミサカは胸を高鳴らせながらたずねます」

「っ!?!? え、えーと……」

いきなりだった。

恐らく今後、誰かに「ファーストキスはどんな味でしたか？」と
質問されたら「ハッキリ覚えてません」と答えるしかないくらいい
きなりで、衝撃的だった。

でも、それ以上に衝撃的だったのは、目の前にいる琴美の表情
だった。

顔を赤らめ、目は潤み、まつ毛は震えている。

その表情はまさに「可愛い女の子」といった感じで、琴美がこん
な顔をするようになったことが、俺にはとても嬉しかった。

「……やはり、嫌でしたか？ とミサカは……んっ!?!?」

今度はこちらからキスをする。

琴美は少しのあいだ驚いた様子で目を見開いていたが、やがて目を閉じた。

「んっ!？」

仕返しとばかりにこちらからキスをしたのに、今度はむこうから舌を入れてきた。

・・・何か、主導権が琴美にあるようで若干くやしいが、こまけえこたあいいんだよ、である。

完全に夕陽が沈んだなか、時間はゆっくりと過ぎていった。

翌日。

検査でどこにも異常が見つけれなかった俺は退院となった。

「あ、お兄ちゃん!!」

俺と琴美が病院の外に出ると、梓が迎えに来てくれていた。

「わざわざ迎えに来てくれなくても、ちゃんと二人で帰れたのに」

「せっかくこんなに可愛い妹が迎えに来てあげたっていうのに、その言いぐさは無いんじゃない？」

「・・・自分で言うか、それ」

「まさに、俺の妹がこんなに可愛いわけが・・・」

「琴美、どこで知ったかしらんがそこまでだ」

ミサカネットワークってのはその方面にも力を発揮してるのかよ。

「せっかく仕入れた知識を披露するチャンスでしたのに・・・とミサカはしょんぼりします」

「アハハ・・・それにしても暑いよね。私、あそこの自販機で何か飲み物買って来るね」

そういうと、梓は公園の近くの自販機まで歩いていった。

「じゃ、俺たちは公園のベンチで待ってるか」

俺と琴美は公園の敷地に入ると、噴水近くのベンチに腰かけた。

「そついえば琴美、ちよつといいか？」

「はい、なんででしょう？」

「その・・・ファーストキスがうんぬんとか言ってたけど、俺なんかで良かったのか？ いや、俺はもちろん嬉しかったんだけどさ・・・」

「あなた以外に誰もいません、とミサカは鈍感なあなたに少しガツカリしながら告白します」

「・・・鈍感で悪かったな」

「ミサカに名前と、生きる意味を与えてくれたあなた以外にあんなことしません、とミサカは昨日の光景を思い出して顔を赤らめながら告白します」

「そつか・・・こつやって改めて言われると、ちよつと恥ずかしい

な

「何が恥ずかしいの？」

「のわっ!？」

梓の接近に気づかなかった俺は、自分でも変だと思っ声を出してしまった。

「何よ変な声だしてー・・・
そんなに聞かれない話でもしてたの？」

「い、いや？別に何も」

「うーん、怪しい・・・」

「梓お姉さま、実は・・・」

「ストップ!!--」

「おや、ミサカはまだ何も言ってますんよ？」

「ちょ!?!?ひでえ!!--」

・・・とまあこんな感じだが、とにかく新たな一員が加わって、俺たちの日常はさらに楽しくなりそうだ。

それに俺はもう迷わない。

琴美だろうと誰であろうと、俺は守るって決めたんだ。

俺が、主人公であるために・・・

第30話 〽御坂琴美編最終章〽（後書き）

これにて琴美編は終了となります。

上条さんvs一方通行も個人的には書きたかったのですが、そこは原作の熱い展開に一任ということで・・・

その代わりといっては何ですが、インデックスによる明俊の力への思わせぶりの言葉や、明俊&琴美の若干甘い展開を入れましたw

さて、次回からはオリジナルストーリー・・・ですが、その前にいくつか番外編を入れたいと思います。

本編の話の筋には直結しないので、読まなくても問題はありません。

最後に、ご意見・ご感想はどしどしお送り下さい。

番外編 とあるレベル5のとある1日（前書き）

書きたかっただけの番外編となっております。

中身もへったくれもありませんが、まあその辺は番外編なので（汗

番外編 とあるレベル5のとある1日

「あつちい」

夏休みも残り少なくなってきた8月後半のとある日。

俺はうだる暑さのなか、ジャケット風紀委員の巡回警備に駆り出されたのだ。
った。

実を言うと、本来俺の風紀委員としての出勤は、1ヶ月の最低出勤回数をこなせば後は任意なのだ。

特別、待遇が良いという訳ではなく、ただ単に俺が非正規・非常員の風紀委員だからだ。

ところが、今の期間は「風紀委員と警備員アシキスギルの共同警備強化」なるものが行われているらしく、非常員の俺と梓ももれなく参加を余儀なくされたのだった。

・・・一応、昨日退院したばかりなんだがな。

学年は下だが風紀委員としては俺たちより先輩である白井がその辺を考慮して、風紀委員の上層部に「せめて明俊さんだけでも」と掛け合ってくれたそうだが、上層部は「レベル5である彼らにはぜひ参加してもらいたい」の一点張りだったそうだ。

まあ、仕方が無いといえば仕方が無い。

せつかくの強化期間なのに、現在風紀委員で1番の実力者であるレベル5が二人とも参加しないのは、ある意味では本末転倒であるう。

俺や梓が犯罪抑止の道具のような存在になっているのは確かに好ましいことではないが、それはこの風紀委員に入ると決めたときに覚悟していたことなので特にどうこうするつもりはない。

「・・・それにしても、暇だ」

現在俺は一人で巡回中である。

梓も俺と同じ第七学区を巡回中なのだが、俺とは警備地域が違うため別行動である。

加えて、一番見慣れた第七学区ということで、刺激ゼロの見回りである。

もちろん、警備中に刺激的なことなんておきないに越したことはないのだが。

ちなみにどうでもよいことであるが、何故俺の警備対象地域が第七学区なのかと言うと、ここが一番犯罪行為の多発している地域だからである。

ま、人口の八割が学生で、かつ学生寮が集中している学区となれば、その数だけ不逞^{ふてい}の輩も多くなるのは至極当然のことではある。

そして、これまた犯罪抑止のため、レベル5の俺と梓が第七学区担当なのである。

・・・しかし、二百万人以上の人間の八割が学生で、かつそのほとんどが第七学区にいれば、どんなに見回りを強化しても必ずどこかにそういう輩は現れるもので・・・

「おい姉ちゃん、ちょっと位良いだろお？」

「はぁ・・・やっぱりこうなるのか」

俺が何気なく通り過ぎようとした路地裏から、複数の男の何ともいやらしい声が聞こえてきた。

「ったく、夏も終わりに近づいてきたからって白昼堂々女の子を路地裏に連れ込むなよなぁ・・・」

俺は、片耳につけるタイプの風紀委員専用電話（この場合は無線か？）のボタンを押し、回線を開きながら腕章をつける。

「あ、初春か？こちら明俊、第七学区の建物の路地裏で女性が複数の男性に絡まれている模様、どうぞ」

『こちら初春、現状把握しました。明俊さんの電波から現在位置を割り出しました。白井さん、座標を転送しますね』

『了解ですの。すぐにそちらに向かいますわ』

「おいおい、こんな連中俺一人で大丈夫だつて」

『お兄ちゃんはボコボコにして気絶させた連中を、この真夏の中一人で連行したくはないでしょ？』

この無線は、一七七支部所属の風紀委員全員に伝わっている。

「あー、確かにそうだな。ホント、白井の能力はつくづく便利で良いな」

『そんなことより、さっさとその連中を拘束して下さいな？』

「りょーかい。さて、レベル5の実力、見せてやるとするか・・・」

俺はスタンロッドが正常に動作するのを確認して、路地裏へと入っていった。

「おい姉ちゃん、ちょっと位良いだろお？」

「えっ、あの……」

その少女は三人の男に囲まれ、壁際に追い込まれていた。

助けを呼ぼうにも完全に怯えてしまっていて、うまく声を出すことが出来なくなっていた。

「（男の人って、やっぱり怖い……）」

男たちの目付きはお世辞にも良いとは言えず、不純な目的で少女に近づいてきたことは明白だった。

「（この前もこんな人達に絡まれたけど、あの時は……）」

少女は以前にも、似たような輩に絡まれたことがあった。

しかし、その時はたまたま通りかかった高位能力者が助けてくれたのだった。

だが、今回はその偶然はどうも起きそうにない。

そもそも、学園都市広しと言えどもその大半は低能力者であり、高位能力者などそうそう出会えるものではない。

ましてこのような路地裏、近道としてわざわざ通ろうとしなければ見向きもされない。

加えて、仮に誰かが通ろうとしても、この光景を目の当たりにしたら引き返してしまう可能性もある。

つまり、絶望的。

「そんなに怖がることあねえよ。ちょっと俺たちと楽しいことしようぜ、ってだけの話だ」

「(い、いや……)」

男の手が伸びてきて、少女の身体に触れる……

「待ちな」

まさに男の手が触れようとしたその時、陽の光の射し込まない裏路地に男の声が響き渡った。

「ああ？何だテメエは？」

男の手が止まる。

「俺？ジャツジメントだけど」

ジャツジメント、という言葉に少女はキュツと閉じていた目を開き、顔を上げた。

見ると、その男は少女と歳の近そうな少年だった。

だが少年とはいっても、確かに腕にはジャツジメントの腕章がついていた。

「おいおいジャツジメントさんよお。俺たちはこの姉ちゃんと話してただけじゃねえか。それなのに、何でジャツジメントに声かけられなきゃいけねえんだ？」

「話してただけ、ねえ・・・目に涙を溜めさせるようなこわーい話でもしてたのかな？」

そう言っつて少年はチラツと少女の方を見る。

少女は慌てて首を横に振って否定の意を示す。

「どうやら違っみてえだな？ まったく、どうして夏の終わりってのはこんな連中が増殖すんのかねえ・・・」

そう言つと少年はわざとらしく、盛大にため息をついた。

「ほお、ずいぶん余裕だなジャツジメントのガキが。でもな、意気がるはその辺にしといた方が身のためだぜ？」

「……と言つと？」

「俺たちが声をかけた姉ちゃん、どこの人間だと思つ？」

「制服見れば一目瞭然だ、常盤台中学だろ？」

そう、この少女は常盤台中学の生徒だったのだ。

「その通り。で、俺たちが常盤台の生徒に声かけるのに、何の考慮もなしに近づくと思つか？」

男の言葉に少年はしばし黙るが、すぐにニヤツと笑つ。

「……なるほど？多少は能力に自信があるってことか」

常盤台中学への入学条件の中に、身分や階級に関係なく「レベル3以上である」という項目がある。

その常盤台の生徒にわざわざ声をかけている、ということとは、少なくともレベル3前後の能力者である（かもしれない）ということの意味する。

「で、何が言いたいんですかねえ？」

しかし、男たちの脅しにも似た言葉にも少年は動じない。

むしろ、退屈そうな表情さえしている。

「（あれ？この人どっかで・・・）」

少女は少年に見覚えがあった。

見覚えがあるだけで直接顔を会わした訳ではないが、確かに覚えがあった。

「何が言いたいかって？　簡単なことよ。何も見なかったことにしてさっさと消えるか、お前も俺たちと一緒に遊ぶか、どっちか？　択ってことだ」

その言葉を聞いた少年はチツ、と舌打ちをした。

「どっちもお断りだな。俺は震えてる女性を見捨てるなんてことは出来ねえし、お前らと仲良く遊ぶつもりもない」

「そうか・・・なら、こっするしかねえなあ！！」

そう叫ぶと、一人の男が両手の手の平に炎の球を作り出し、少年に向かって投げた。

「危ないッ！！」

やっと声の出た少女が、悲鳴にも似た叫びをあげる。

炎の球は二つともまっすぐに少年へと飛んでいくが、少年は身動き一つしない。

そして、炎が少年を包み込んだ。

「おいおい、カツコつけといてこの程度か・・・よ!？」

勝利を確信した男たち・・・であったが、目の前の現実言葉に失った。

確かに炎は少年の全身を包み込んだ。

しかしそれはほんの一瞬のこと。

あり得ない速さで炎は消滅してしまったのだ。

「ふーん・・・パイロキネシスト発火能力者の強さの目安なんて知らないけど、まあそこそこかな？」

「な、何だコイツは!？火傷はおるか服すら焦げてねえぞ!？」

炎を投げた男の顔に焦りの色が浮かぶ。

「さてと、無駄な抵抗は止めて大人しく降伏しようか？」

そう言つと、少年は足を一步踏み出す。

「ちっ！なら、これならどうだ！！」

今度は別の男がナイフを投げる。

しかし、ナイフも少年に刺さることなく消滅した。

「だーかーらー、何やっても無駄だつて」

「な、何だコイツは！？ナイフが跡形もなく消えやがったぞ！？」

「落ち着けお前ら！こうなりや接近戦だ！」

三人のうち今まで動かなかった残りの一人が、拳を握りしめると少年へと突進する。

「お、良いねえ。俺の唯一の弱点を突いてきた。でもなあ、それでも飛んで火に入る夏の虫なんだなあ」

少年は腰から下げていた警棒のようなものを手に取ると、男の右ストレートをヒラリとかわし、避け際に棒を男の腹に当てた。

バチッ！！

「ぐわっ!!」

青白い閃光が走ると同時に、男がその場に崩れ落ちた。

「なっ!?!」

その光景に残りの二人が思わず声をあげる。

「ったく、もう良いだろ? いい加減大人しくしろよ」

少年は棒をベルトにつけ直すと再び男たちに近づく。

「じ、冗談じゃねえ!! あんなのとやりあってられっか!!」

少年の強さに恐れをなした男たちが、反対側へと走り出す。

しかし、

「逃がしはしませんの!?!」

「こ、今度はなん・・・ぐへっ!!」

突如男の上からツインテールの少女が落ちてきて、そのまま男の一人を下敷きに着地した。

その流れるような動きで、啞然としている残りの一人もあつという間に地面に組み伏せてしまった。

「よお白井、わざわざ来てもらってすまねえな」

白井が3人の手に手錠をかけるのを眺めながらお礼を言う。

「良いんですよ。それより、被害者の方は？」

「ああ、この人だ。常盤台中学の人みたいだから、白井も見覚えとかあんじゃねえか？」

俺はそう言って、地面にペタンと座り込み顔を伏せている女子のところへ向かうと声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「あ、あの・・・はい、ありがとございました」

「・・・あら？あなたは湾内さんではありませんの？」

「え？ あら、白井さんではありませんの」

「・・・え？湾内・・・？」

聞き覚えのある名字に思わず声が出る。

薄暗くて今までよく見えなかった顔がこちらを向く。

そのクセのある髪とおっとりした顔、確かに湾内絹保わんないきぬほだった。

常盤台中学1年で白井のクラスメイト、水泳部所属、レベル3の
ハイドロハンド
水流操作系能力者だ。

「・・・？わたくしのごことをご存知ですか？」

湾内さんは不思議そうな顔を俺にむける。

「え！？ あ、いやいやそうじゃなくて、珍しい名字だなあって思
いまして・・・」

何度もこんな状況に遭遇してきたが、知ってる知識はやっぱり思
い口をつけて出てしまうな。

「まあ確かに、あまり見ない名字ですわよね。それはともかく、明
俊さんにお願いがありますの」

「ん？何だ？」

「わたくしはこれから、この男たちのアンチスキルへの引き渡しに立ち会いますの。それで、湾内さんを第一七七支部へと案内し、事情聴取をお願いしたいんですの」

「事情聴取……ですの？」

「ああ、安心してくれ。どういった状況でやつらに絡まれたか、とか、形式的なことしか聞かないから」

「では、お願いしますの」

そう言うと白井は大通りへとレポートして行った。

この路地は狭くて分かりづらいから、大通りに出てアンチスキルに場所を知らせるためだろう。

「さてと……湾内さん、立てる？」

俺は湾内さんを気遣って手を差し伸べる。

それを見た湾内さんは、一瞬手を伸ばし俺の手を掴もうとしたが、ピクリと震えて引っ込めてしまった。

「え？」

俺の手に何かついているのかと思って手を見てみるが、特別傷な

どもついでいない。

不思議に思つて視線を湾内さんへと戻すと、俺の差し出された手を見て小刻みに震えていた。

おかしいと思つてもう一度手を見てみるが、やはり何も無い。

「あの・・・湾内さん？どうかした？」

「何か、身体が震えて・・・」

「え、大丈夫？ 体調が悪いとか？熱でもあるのかな？」

俺はしゃがんで湾内さんのおでこに手を伸ばす。

すると・・・

「あつ・・・あつ・・・」

湾内さんは途切れ途切れに声を絞り出すように発しながら、またしても俺の手を見て震え始めた。

「わ、湾内・・・さん？」

な、何だこれは？

俺の手を怖がっているのか？

でも手を怖がるだなんてそんな、上条さんの右手じゃあるまいし・

・

ん？怖がる・・・？

まさか・・・

「湾内さん、ひよつとして・・・男性恐怖症？」

「え？い、いえ、自覚はありませんが・・・」

「そっか・・・でも多分、軽度の男性恐怖症だと思う」

男性恐怖症に重いか軽いか存在するのかわからないけど、無自覚のようだからまだ軽い部類だと思う。

「うーん・・・とりあえず、支部に案内するね。自分で立てる？」
どうしたものかと思案するものの何も思い付かないので、とりあえず支部に連れていくという当初の目的を果たすことにする。

「あ、はい、何とか」

俺は湾内さんが立ち上がり、身だしなみを整えているあいだに、初春に連絡を入れる。

「初春か？絡まれていた被害者を保護、今からそっちに行くからよろしく」

『了解しました。お茶とかも用意しておきますね』

「おう、そうしてくれ」

「あの、お待たせしました」

俺が初春との通信を切ると、後ろから湾内さんの声がかかる。

「お、それじゃ行きますか」

俺たちは、真夏の太陽が照りつける大通りへと出て、一路一七七支部へと向かった。

「はい、事情聴取は以上です。お疲れ様でした」

少しして。

初春が事情聴取の内容をパソコンに打ち込み終わり、ノートパソコンを閉じながら湾内さんにそう言った。

「ちよいまち。俺がまだ終わってねえ」

「明俊さん、書くの遅いですよ」

「パソコンの方が速いに決まってるのにその言いぐさはねえだろ。第一、何で科学の時代に筆記でも残すんだよ。パソコンに打ち込んでんだからそれで十分だろうに」

俺は聴取の内容を紙に書き残す作業に追われながら愚痴をこぼす。

「電子データはいつ何が原因で消えるか分からないじゃないですか。それに、紙に残しておけばデータが改ざんされても、紙のデータと照合して見抜けますし」

「・・・少なくとも、初春が立ちはだからこのデータは安全だと思うがな。・・・よし終わった」

俺は調書をファイルに閉じると、コーヒーを一口飲んで気分を切り替え、湾内さんの方をむく。

「それで湾内さん、いくつか聞きたいことがあるんだけど、良いかな？」

「は、はい。えっと、聴取の続きでしょうか？」

「いや、個人的な質問だ。湾内さんの男性恐怖症について、ちょっとね」

「え、その方男性恐怖症なんですか？」

初春が興味を持ったのか、パソコンを打つ手を止めてこちらの会話に参加してきた。

「断定は出来ないんだけど、そうみたいなんだ。それで湾内さん、今日以外にこんな被害にあったことは？あ、仮にあったとして、言いたくないなら言わなくて良いよ。あくまで個人的な質問だから」

「あ、実は・・・あるんです」

「それはいつ頃かな？」

「今年、常盤台に入学したすぐの頃です」

「ふむふむ。それで、その時はどうやって危機を脱したのか教えてもらえるかな？」

「はい。その時は偶然、御坂さまが通りかかって助けて下さったのです」

「御坂・・・御坂美琴だよな？」

「はい。御坂さまのかつこよさと言ったらそれは・・・」

俺の知ってる通り、湾内さんは以前にも男達に絡まれ、御坂が助けていた。

「へえ〜。さすが御坂さんですね。私はジャッジメントですけど、もっぱら情報収集などが専門なので現場は苦手で・・・」

「気にすんな初春。人には向き不向きがあるんだから、自分が力を発揮できるところで頑張れば良いんだよ。それに、パソコンに向き合ってるときの真剣な初春の顔、かっこいいぜ（イケメンAA略）」

俺がそう言うと、何故か部屋に沈黙が訪れる。

「ん？ 二人とも、どうかしたのか？」

見ると、湾内さんはポーツと俺のことを見つめているし、初春はわずかに顔を赤くしていた。

「い、いえ・・・（佐天さんが明俊さんのこと好きになった気持ち、少しだけ分かったような気がします・・・）」

初春は語尾の方でなにやらゴニョゴニョ呟いていたが、上手く聞き取れなかった。

「わ、わたくしはその、あなたは他の殿方とは違うというか、そんなことを思っております」

・・・それが。

「なんとなくだけど、恐怖症解消の糸口が見えた気がした」

「と申しますと？」

「湾内さんは常盤台に入学した直後、不快な男たちに絡まれた。その場は御坂に助けられて事なきを得たけど、湾内さんの心には『男性に『怖い』という方程式が無意識に出来てしまった。それだけならまだしも、常盤台は女子校でしかも寮住まいだから、男性と顔をあわせる機会が限りなく少ない。つまり、その方程式をぶち壊す機会に恵まれなかったんだ」

「・・・」

湾内さんは俺の方を真剣なまなざしで見つめる。

「そこにきて今回の事件が起こった。これで完全に『男性』怖い』という方程式の土台が固まってしまったんだろっな。だから、俺の手を掴もうとしただけで震えちゃった・・・ってところかな？」

「・・・」

湾内さんは、まだ少し要領を得ない顔つきだ。

まあ無理もない、ほとんど男性と付き合う機会が無かったであろう彼女にとって、その方程式を自覚することもままならないまま時間が過ぎたことは至極当たり前のことだ。

でも、このままでは彼女にとって不利益だろう。

そう思った俺は、彼女に躊躇するひまを与えぬよう素早く手を伸ばし、手を握った。

「・・・ッ!？」

ほとんど条件反射なのだろう、湾内さんは手を引っ込めようとす
るが、俺はそれを許さない。

離すまいと、しっかり彼女の手を掴んだ。

「逃げちゃダメだ、湾内さん」

「でも・・・！」

手の震えがハッキリと伝わってきた。

「確かに世の中には、ああいった類いの男がいる。それは事実だ。でも、そうじゃない男の人もなくさんいる。湾内さんにはそれを分かって欲しいんだ」

「・・・」

まだ震えは続いているが、いくぶん落ち着いたみたいだ。

「その手伝いを、俺にさせてもらえないかな？」

「え？」

「って言っても、その一環としてもう手を握っているわけなんだけどさ。つまり、このまま男の人に恐怖心を持ち続けても良いことなんて無いと思うんだ。今は女子しかいない環境だとしても、いつかは男の人と行動を共にする時が必ず来る。その時に恐怖心が残っていたら、湾内さんの人間関係とかにも影響が出てきちゃうと思うんだ。だから・・・」

「あ、あのー！」

俺がしめに入ろうとしたとき、それまで黙って聞いていた湾内さんが声をあげた。

「その・・・一つ良いですか？」

「何かな？」

俺は、何かマズイことでも口走ったか？ などと自分の言葉を思い返してみるが、別段変なことは言っていないと思う。

「こんなこと言うと失礼かもしれませんが、どうしてもそこまですて下さるんですの？ 今日初めて会ったわたくしにどうして……？」

「……ああ、そんなことか。うーんそうだな。上手く言えない部分もあるんだけど、自分のためと湾内さんのためかな」

「……？ どういうことでしょうか？」

「自分のためって言うのは、男として、湾内さんにそんな風に恐怖の対象として見られるのが嫌だったんだ。気分の良いことじゃないしね」

「わたくしの為というのは？」

「湾内さんに、悔いの無い楽しい人生を送って欲しいって思ったんだ。自分が関わった人が、つまらない人生や恐怖に怯えた生活を送るのは想像するのも嫌だから」

「……」

「ごめん、迷惑だったかな？」

再び黙ってしまった湾内さんを見て、でしゃばり過ぎたか、と思っ

「い、いえ、とても嬉しいお言葉ですの」

「そ、そう？ てっきり迷惑だったかと・・・」

「でも明俊さん、どうやって恐怖心を克服させるつもりなんですか？」

初春が当然の質問をぶつけてくる。

「ん？そうだな、どうしよっか？」

「えー！？ 考えてなかったんですか!？」

「うーん、考えてなかったというか・・・考える必要がなくなったというか？」

「・・・？ どういうことですか？」

「湾内さんの手を見てみるよ。震えが止まってるだろ？」

「え？ あ！本当です！」

俺もついさつき気付いたばかりなんだがな。

どうやら、案外苦労しなさそうだ。

ってか、もう大丈夫じゃね？

「ま、あれだ初春。完全消去の手にかかればこれくらい余裕だつて

アブソリュートデリール

ことだ」

「え？アブソリュートデリートって……ではあなたが第二位の工藤明俊さんですよ！？」

湾内さんが今さらなことを言う。

「気づいてなかった？俺はてっきり気付いているもんだとばかり思ってたけど……」

「では、炎が効かなかつたりナイフが刺さらなかったのも、そのレベル5の能力ですか？」

「ん、まあな」

「すごいですよね。私たちジャッジメントの誇りなんですよ！」

「こら初春、俺を勝手にダストにするんじゃない」

「そっちの『埃』じゃありません！！」

「そうか……でも、誇りだなんて、誉めても何も出ないぞ？」

「え！？出ないんですか！？」

「期待してたのかよ！！」

俺たちがこんな漫才にもならないやり取りを繰り返していると、クスクスと笑い声が聞こえてきた。

見ると、湾内さんが口元に手を当てて笑っていた。

その笑顔はさすが常盤台のお嬢様、とても綺麗で可愛らしかった。

「どうやら、もう大丈夫みたいですね」

初春がほっとした顔で湾内さんを見る。

「ああ。でも、いくらきれいな事を言っても、世の中まだまだあいつ類の男がいるのは事実だ。だから、俺たちジャツジメントがもっと頑張らないとな」

「そうですね……って言ってるそばから通報が！」

初春が耳に電話を当て応答する。

俺は携帯を取り出す。

「湾内さん、携帯持ってる？」

「え？ はい、持ってますけど」

「アドレス交換しようか。一応恐怖症の方は大丈夫みたいだけど、ああいった輩がこの世から消えたわけじゃないからね。何か相談があったり、今日みたいにトラブルに巻き込まれたりしたら連絡してよ」

湾内さんは少し考えていたが、

「はい！よろしく願いしますわ」

ピピッ

「これでよし、と」

赤外線でお互いのアドレスなどを交換し終わった・・・その時。

「明俊さん！通報の内容はまたしても女性が男性に絡まれているというものです！」

「チツ、こりねえなあ・・・」

「いえ、それがそれだけではなくて・・・」

「どうかしたのか？」

初春の顔が若干引きつっている・・・ように見える。

「女性が複数の男性に絡まれているところに、別の女性が割って入ってきたらしいんです。で、その女性というのが『口調がお嬢様らしくない常盤台中学の生徒』だそうで・・・」

・・・

「おいまさか、その割って入ってきた常盤台の女子って・・・」

嫌な予感しかない。

そして、嫌な予感が的中しているなら、危ないのは絡んできた男たちの方だ。

「多分・・・想像の通りの人だと・・・」

「・・・俺、行ってくる。初春、ナビを頼む。それじゃ湾内さん、今日はこの辺で。また今度！」

そう言い残し、俺は駆け出す。

「あの、頑張ってください！」

去り際、湾内さんがそう声をかけてきた。

俺は後ろ手に手を振りながら部屋を出た。

「まったく、ちったあ自重しろよビリビリ!」

俺は、恐らく叶わないであろうお願いをしながら再び真夏のコンクリートジャングルへと走っていった。

番外編 とあるレベル5のとある1日（後書き）

見て分かるとおり、湾内さんを出したかった・明俊のフラグ体質を書きたかった、の二点だけの話です。

次回も番外編（完全な番外編ではないかも？）の予定です。

番外編 とある双子のOVA ～二人の御坂の苦悩～（前書き）

番外編第2弾、「とある科学の超電磁砲 OVA」ネタを含みます。

まだOVAを見ていない方にとってはネタバレとなりますので、ブラウザの戻るを押してください。

OVAのストーリーと、その裏側で進行するもうひとつのストーリーという構成になります。

番外編 とある双子のOVA ～二人の御坂の苦悩～

『初春、状況は!?!』

耳にはめた無線機から、白井の緊迫した声が聞こえてくる。

科学の発達した学園都市製の無線にザザッとノイズが混じるのは、白井がレポートで移動してその瞬間に電波が途切れるからだろう。

一方の俺はというと、このくそ暑いなか白井と同じ目的地にむけて全力疾走中である。

『新たな通報によると、暴漢の数は六名。現場は変わってません、急いで下さい!! じゃないと・・・!』

「その六人の方が危ないってな!! こちら明俊、目標の公園に到着、対象を視認! ……ああ、手遅れ感が否めないなこりゃ」

半ば諦めムードに浸りながら、とりあえず俺は対象に接近する。

ちょうど白井も現場に到着、高らかに宣言する。

「ジャツジメントでs・・・」

しかし残念ながら・・・

バチバチバチッ！！

白井の「ですの！！」は発声されることなく、無情にも辺りに電撃がほとばしる。

「おおぅ……」 白井

「ハア……ハア……散々走ってこれかよ……」 俺

『六人とも、全員被害者に……』

「遅かったですの……」

そこには、無様に倒れている六人の男たちと、地面にペタンと座り込んでしまっている女子と、仁王立ちという言葉がふさわしい常盤台中学の『エース様』が立っていた。

「フンッ」

そのエース様は不機嫌そうに電気をバチバチさせている。

その後、

「「おお〜!!」

「すっげえ〜!!」

この一部始終を見ていた野次馬が次々に歓声をあげた。

「・・・へ?」

「あの、ありがとうございます!!」

歓声にエース様が戸惑っていると、地面に座り込んでいた女子が助け人に駆け寄り感謝の言葉を述べる。

「さて白井、空気な俺たちはどうする?」

お役目御免と相成った俺は、白井にこの状況を丸投げする。

「決まってますわ。一刻も早くこの場から脱し、今日という今日こそお姉さまにたっぷりご忠告申し上げますわ」

「賛成だ」

満場一致で可決した俺と白井は、ある意味でこの騒ぎの元凶である人物に近づく。

そして、白井はいきなり手錠をかけた。

「えっ!？」

「再三にわたる忠告無視、不特定多数への興味煽動の現行犯で、
個人的に』お姉さまを拘束します」

「はあ!？何言つて・・・」

「御坂はこれだけの野次馬にもみくちやにされた拳句、服とかビリ
ビリにされてもいいのか？」

俺はお姉さま・・・もとい、御坂美琴に若干セクハラまがいの言
葉を織り混ぜつつ諭す。

「アンタは何言つてんのよ!？」

「お姉さまの服が破れ、肌が露出した格好もなかなかそりますわ
ね・・・ではなく、アンチスキルも来たようですし、面倒なことに
ならないうちに」

「う、うん・・・」

白井が御坂にかけられている手錠を引つ張る。

「まったく、面倒ばかり持ち込むぜ御坂は」

「アンタたちがもっと速く来れば良いのよ!!」

「あ、初春? 対象を確保、現場はアンチスキルに任せて俺たち
は帰るから、よろしく」

「無視すん……ッ!？」

突然御坂が立ち止まり、野次馬の方を振り向く。

その顔は上手く形容出来ない。

後ろから突然肩を叩かれたときのような驚きとも言えるし、まるで幽霊でも見たかのような顔とも言える。(ま、科学の象徴とも言える学園都市で幽霊なんて信じられないが)

「おい、御坂？」

「お姉さま？どうかなさいましたの？」

「……とりあえず、ここから離れましょう。そしたら話すわ」

「よく分からんが、ここにいても野次馬がうるさいだけだ。とりあえず御坂の言つとおり、落ち着けるところに行こう」

「……そうですね。ではお二人とも、飛びますわよ」

そう言って白井は俺の手を掴むと、テレポートした。

「3人ともお待ちせ！」

別行動で警備をしていた梓が俺たちと合流した。

「ごめんなさいね梓さん、わざわざ呼び出したりして」

「ううん、良いのよ。それに、御坂さんの困り事だなんてよっぽど
のことなんでしょ？力になるわ」

「うん・・・そのことなんだけど、実は・・・誰かの視線を感じた
の」

「ほう・・・ん？視線？」

「視線・・・御坂さん、それだけ？」

「そう、それだけ」

御坂美琴直々の相談だから何事かと思えば、アイドルのストーリーカ
ー被害みたいな話だな。

「そりゃあ、あれだけ注目を浴びたんですもの」

「いや、そういうんじゃないかって・・・なんて言うか・・・」

御坂は何やら真剣に悩んでいるようだが、正直な話、御坂がこんな
なことで悩むこと自体が俺には意外だった。

何しろ、御坂はレベル5の中でも最も名の知れた人物なのだ。

今まで色んな視線にさらされてきたはずだ。

その御坂が、今頃他人の視線にビクビクするなんておかしな話なのだ。

「お姉さま」

白井の口調にも、俺と同じような心境が見てとれる。

「お姉さまは常盤台のエースですよ？　それに最近、琴美さんを含めたお姉さまのクローン目撃で、お姉さまは噂的になっています。ただでさえお姉さまが話題になりやすいこの状況であのような振る舞いをすれば、注目を集めるのも当然ですわ。ですから努めて目立たぬようにと、わたくし口を酸っぱくして……」

「そんな視線なら気にしないわよ」

御坂は不機嫌そうに白井の言葉を切った。

「でもあれは……まるで、全身を電気が逆流するような、あの視線だけは……」

そう言うと、御坂は黙ってしまった。

まるで、思い出すのも嫌といった感じだ。

「どつやら、俺たちをからかったりしている訳ではなさそうだな」

「当たり前でしょ？ それより、アンタや梓さんは感じたりしない？　そういう嫌な目線」

「さあな。梓は？」

「私も特には・・・」

「ああもう、嫌になっちゃうわね。同じレベル5なのに、何で私だけなのよ」

「んなこと言われてもなあ・・・」

「単純に知名度の違いじゃないかしら？　私やお兄ちゃんと違って、御坂さんはレベル1から努力でレベル5になったんだし。それに、常盤台っていうお嬢様学校に通ってるんだから尚更よね」

「流石はわたくしのお姉さまですわ」

「今はその『流石』ってのが全然嬉しくないんだけどね・・・」

そう言っただけで御坂はため息をついた。

「そうだな・・・じゃあ、明日初春や佐天も呼んでみんなで話し合おうか。みんなで意見を出しあえば何か解決策やアイデアが見つかるかもしれないしな」

御坂の様子が普通でないと思った俺は、いったんこの場での話し合いを先送りすることを提案する。

「そうですわね。ただでさえお姉さまは、つい最近までせわしなく

動き回っていたんですもの。疲れとかもあると思いますわ」

「そうね。でも、こうして御坂さんが私たちに相談してくれたっていうのは、御坂さんが変わったところだと思っわ」

「あー、確かにな。今までの御坂なら『これくらい一人でどうにかするわ!』って感じで一人で突っ走ってたかもな」

「なによそれ・・・」

「でもお姉さま。わたくしたちとしては、そうやってお姉さまが素直に打ち明けて下さるといっのは嬉しいことですよ?」

そう白井が言うと、御坂は少し照れたような顔をする。

「みんなには・・・特に、明俊や黒子には妹達シスターズのことで迷惑をかけたかったからね。その罪滅ぼしって訳じゃないんだけどさ・・・相談してみようって思っただけ」

「お姉さま・・・お姉さま!」

御坂の微デレ発言に、白井の変態モードが発動した。

「ちょ!?!黒子、いきなり抱き付かないでよ!」

「お姉さまが可愛すぎて、黒子、止まりませんわ!!
お姉さまの貴重なデレシーンを見逃すはずありませんの!!」

「誰もデレてなんか・・・ってちよつと!?
アンタどこに手入れているのよ!?
やめっ、くすぐった・・・!!」

「・・・お兄ちゃん、帰ろうか」

「ああ。どうやら、男の俺の存在を忘れて二人の世界に入っちゃったみたいだしな・・・　　琴美を待たせるのも悪いしな」

突如目の前で繰り広げられた百合全開の展開についていけない俺たちは、二人の放置を決行することにした。

男の俺としては見ていたい気もしなくもないが、世間の視線にさらされるのは勘弁願いたいからな。

「お二人も帰るようですし、これでお姉さまと二人っきりで楽しめますわね？」

「ちよつと二人とも!?　　帰っちゃうの!？」

後ろから御坂の悲鳴にも似た叫びが聞こえてくる。

「ん、ああ。二人の時間を邪魔するわけにもいかないしな。風紀委員として一つだけ、節度は守ってな？」

「アハハ・・・　　じ、じゃあ御坂さん、白井さん、また明日」

俺たちは逃げるように二人から離れる。

「ウへへへへ・・・」

「黒子!　　いい加減に離れなさい!!　　あ、そこ、あん・・・って、くろこおおおおおおおおおおお!!!!」

ドッカーン!!

「・・・大丈夫だろうか、あいつら」

「いつもあんな感じだし、大丈夫でしょ？」

白井の不気味な声と、御坂の若干危ない（18禁的な意味で）声を華麗にスルーし、俺たちは琴美の待つ寮へと足早に立ち去った。

翌日。

「そそそそそそ、それって、『誰かが見てる』っじゃないですか！？」

バンツッ!! テーブルを佐天が叩く音

昨日の約束どおり、俺たちは御坂や白井といった昨日のメンバーに加え、初春、佐天、琴美という新規メンバーと共に話し合うため、ファミレスに集まっていた。

そこで、昨日御坂が感じた視線について説明していると、いきなり佐天が思い出したように叫んだのだった。

「だ、誰かが・・・見てる？」

佐天が身を乗り出してきたので、御坂はのけぞるようにながら聞き返す。

「何だそりゃ？」

佐天の意味不明な言葉に俺が思わずつぶやく。

「え！？ 明俊さん知らないんですか！？ 今一番ホットな都市伝説ですよ！」

「都市伝説？ おい梓、知ってるか？」

なにやら会話がいきなり怪しい方向に進みそうな気配を感じながら、俺はとりあえず梓に聞いてみる。

「う、ううん。初めて聞いた」

「琴美は？」

「ミサカも初めて聞きました、とミサカは都市伝説なるものに若干興味を覚えつつ告白します」

「んっふっふっ・・・よくぞ聞いてくれました琴美さん!!」

「いや佐天、誰も聞いてないから・・・」

・・・そういえば、佐天は都市伝説が大好きだったな。

レベルアップしかり、この世界ではまだ耳にしていないがポルターガイストしかり、そして今回の『誰かが見てる』しかり。

さらに嫌なことに、佐天の話す都市伝説って十中八九事件に発展するんだよなあ・・・

「良いですか皆さん。オホン。・・・突然背を射る謎の視線、振り向いても誰もいない・・・」

勝手に語り始めた。

みんなの反応は様々で、御坂は佐天の顔を驚いたままの表情で見つめ、白井は「はぁ・・・」とため息をついてコーヒーをすすり、初春は「始まった」といった感じで首を横に振った。

俺と梓も初春と同じような感じだが、ただ一人、琴美だけは興味津々といった感じで佐天の話しに耳を傾けている。

「それでも視線は確実に、少しずつ近づいてくる・・・やがて、視線に取り憑かれた人は部屋から一步も出られなくなる・・・」

「・・・おい梓、これ、どうする?」

「……語らせておこつよ」

「了解……」

「ドアのむこうから、視線を感じるからです…… それでも、あの時一人の女の子が思い切ってドアスコープを覗いたそうです。もししたら……」

そしたら……？

「うわあああああああああああああ！！！！つて！！……あれ？ 怖くないですか？」

「……まったく」 白井

「ハア……ハア……ハア……」 突然の奇声に驚いた初春

「そ、そんなことが…… とミサカは瞳を輝かせながら……え？」 琴美

「……」 啞然とする御坂

「……」 同じく梓

「……あのー、佐天さん？ どうして俺に抱きついていらっしやるのですか？」

訳が分からないというか、なすがまま佐天に抱きつかれた俺。

自分で叫んでおいて自ら抱きついてくるとは……佐天は不思議ツ子なのか？

しかも、抱きつかれた角度が悪かった（良かった？）ために、俺の横顔に佐天の胸が……ああ、温かい……

じゃなくて!!

「え？明俊さんが怖そうにしてたから、私が抱きついて安心させてあげようとしたんですけど……」

「全然怖がってねえから!! とにかく離れてくれ!!」

「えー、もうちょっとくらい良いじゃないですか……」

「気持ちは嬉しいけどな、そういうことは将来好きなやつが出来たときにやれよ」

渋々といった感じで俺から離れる佐天に俺がそう言つと、周りの空気が静かになった。

「……?」 俺

「・・・」 佐天。何故か涙目。

「・・・」 梓。呆れた目つき・・・なぜ？

「・・・」 白井。こちらも呆れた目つき。

「・・・」 御坂。こちらもry

「・・・」 琴美。佐天に何やら複雑な感情のこもった視線を送っている。

「おまたせいたしましたー、チョコレートパフェになります」 店員さん

「あ、私ですー」 初春

・・・何、これ？ 俺なんかした？

よく分からないまま、初春の美味しそうにパフェを食べる音だけが静かにサウンドを奏でた。

「ん、おいしーですー。あ、それですね御坂さん、私の考えですけど、それってストレスのせいじゃないですか？　御坂さんは注目の的ですから」

初春を除く全員が沈黙し続けるなか、その初春が沈黙を破った。

流石は天然っ子（時に腹黒）、初春である。

「え？　そんなこと無いわよ・・・　あれ？　初春さん、端末動いてるわよ」

「えっ？」

そう言われて、初春はスプーンを置くとバッグの中から何かの端末を取り出した。

「あ、ホントだ、つけっぱなしだ」

「へえー。どうして分かったんですか？」

初春の隣でその様子を見ていた梓が質問する。

確か、初春はこのファミレスに来てから一度もあの端末に触れていないはずだ。

「電磁波の強弱とかだね。私たち発電系の能力者は、電磁波とかに對してかなり敏感なの」

「なるほどな。あ、じゃあ琴美も気付いてたのか？」

発電系能力者、と言われて俺はふと思い立ち聞いてみる。

「はい、近くで何かしらの電子機器が微弱な電波を発していることには気付いていました、とミサカは説明します。ですが、その電波が正確にどの辺りから発していたかまでは知覚出来ませんでした、とミサカは補足を入れます」

「そっか、アンタたちはレベルが2〜3くらいなんだっけ」

御坂が思い出すかのように言う。

琴美や御坂妹などといったいわゆる『妹達』のレベルは素体である御坂に劣り、高くてもレベル3くらいらしい。

「それに、その初春さんの端末から出てたのはかなり微弱ものだったし、バッグの中に入っていたからなおさらよ」

「・・・でもそうすると、御坂さんはとても弱い電波とかでも感じちゃうんですね？ 生活に影響しませんか？」

「確かに佐天さんの言う通りね。御坂さん、ツラくないの？」

「心配してくれてありがと梓さん。でもね、余計なものは無意識のうち知覚から弾かれるから大丈夫なの」

勝手に取捨選択されている、ということか。

「御坂さんのおかげで電池が無駄にならなくて良かったです。さっき使ったGPSが起動しっぱなしになってました」

「GPS・・・なんだ初春、迷子にでもなったのか？」

なにしろ初春は天然キャラ（俺的）だからな。

「なってませんよ！ そんな佐天さんじゃあるまいし・・・」

「うーいはーるー？ それってどういうことかな？ 素直に言わないとこうだぞ！」

バサ！バサ！

「ちょ！？ 座りながらスカートバサバサめくるのやめて下さい！」

「えー。こういうめくり方もなかなかそそると思うんだけどなあ・・・ね、明俊さん？」

「だから何で俺に聞く！？」

俺は佐天に「パンツ大好き人間」という烙印でも押されたのだからか・・・

嬉しいような悲しいような・・・

「それにしても・・・世知辛い世の中ですわねえ」

「え？」

世知辛い世の中・・・白井のボイスで聞くと、まるでおばあちゃんか世の中を悟ったかのような発言だな。

「そのGPSにしてもそうですけれど・・・お姉さまに限らず、私たちは常々視線にさらされてるんですよ」

「確かに・・・」

この学園都市は、あちこちにロボットが配備されていて、そこそタバコのポイ捨てだろうとなんだろうとたちまち見つかってしま

う。
監視カメラも異常なほどに設置されているしな。(ま、そのおかげで俺たちジャツジメントは犯人を追跡できたりしているわけだが)

「ま、それが学園都市が学園都市たる所以ゆえんでもあるのは、否定できない事実ではあるんだけどな。科学が発達するってのはこういうことでもあるんだろうし」

「明俊さんの言うとおりですわ。視線や監視など気にしても始まりませんの。お姉さまもどうかお気楽になさって？ こんなことで常盤台のエースの看板に傷がついたらもったいないですわよ？」

「気にしすぎ、気にしすぎ！」

白井に諭され、佐天に気にしすぎだと言われて、御坂の顔が緩む。

「そう・・・そうよね。みんな、ありがと」

御坂のはにかんだ表情を見て、心配していた俺たちも一様に安心した顔になった。

「『妹達』の一件で御坂の表情が晴れないことも多かったけど、今日俺たちと会話できて御坂も少しは気持ちに余裕ができたかな」

「そうね。誰かが見てるっていうのも、御坂さんが神経質になつたのが原因か、仮に本当に誰かが見てたとしても御坂さんのおっかけみたいなものだろうしね」

ファミレスからの帰り道。

俺と梓、そして琴美は夕飯の材料を購入して、現在寮へとむかっているところである。

「それにしても・・・なかなか刺激的な夏休みだったよな？」

「刺激的を通り越して命の危機にすら遭遇したけどね」

「ミサカにとっては、本来なら持ち得なかった命をお二人のおかげで持つことができた夏ですね」

「ああ。これからもよろしくな」

「そうよ。琴美がいなくなっちゃったら、私たちとーっても困るんだからね」

「ミサカも、そうやすやすとお二人の前から消えたりしませんよ？」

「つまり、これからも3人はずっと一緒だってことだ」

「当然じゃない！ さ、今日はちょっと贅沢に夕飯作るから、二人とも楽しみにしてね！」

梓は袖まくりをして、気合十分といった感じだ。

「では楽しみにしていますね、とミサカは……っ!？」

突然、琴美が後ろを振り返った。

「……？ どうした、琴美」

「……いえ。ただ、今『誰かが見ていた』ような気がしました、とミサカはお二人に報告します」

「誰かが見ていた・・・？」

俺と梓が来た方向を見てみるが、誰もいない。

「誰もいないみたいだけど・・・お兄ちゃん、どう思う？」

「判断材料が少なすぎてなんとも・・・一つ言えるのは、もし誰かが見ていたなら、それは御坂の言っていたことが単なる勘違いではない、ということだ」

俺はもう一度辺りを見渡してみるが、やはり不審な人間はいない。

いるのは学生と、その学生に早く帰宅するよう促しているアンチスキルだけだ。

「・・・恐らくミサカの勘違いでしょう、とミサカは結論付けます」

「そう・・・なのかしら？」

二人の人間が同じ感覚を訴えたことに、梓も怪しんでいる。

「この状況ではどうしようもない。ただ、警戒するに越したことはない。御坂だけならまだしも琴美にまで絡んできたってことは、もしかしたら裏のことを知っている人間かもしれない」

「お兄ちゃんの言うとおりかもしれないわね・・・ とにかく、今日のところは帰りましょう」

俺たちは時折後ろを振り返りながら歩いたが、結局それ以上琴美が視線を感じることはなかった。

しかし、翌日から『二人の御坂』を苦難が襲うことになるとは、まだ知るよしも無かった・・・

番外編 とある双子のOVA (2) 一人の御坂の苦悩 (前書き)

OVAネタ・・・結構かかりますね(汗)

番外編 とある双子のOVA (2) ～二人の御坂の苦悩～

御坂の『誰かが見てる』事件についてファミレスで話し合い、その帰り道琴美も同じような感覚に襲われた翌日。

俺と梓は、御坂と白井に呼ばれてカフェに集まっていた。

何でもあの後、御坂が幾度となく『誰かが見てる』ような気がしてならないというのである。

他のメンバーについてだが、初春と佐天は何やら用事があるとかで欠席。

琴美は病院で検査を行うため別行動である。

「ああゝあ……」

御坂はテーブルに突っ伏してため息をついた。

「私……自意識過剰なのかな」

どうやら御坂は、『誰かが見てる』の正体は自分の過剰な自意識感から来ている思い込みだと思っているようだ。

「お姉さま…… 『お・と・こ』 ですよ!？」

ボカツ!!
白井の殴られる音

「と、取り越し苦労で安心しましたの……」

「ったく……人が本気で参ってるっていうのに……」

「フッフ……心配ご無用!!
!」
「今ので黒子は確信しましたの！」

「確信って？」

「まさか白井……!!」

「犯人が分かったの!?!」

「ええ。ある意味」

「……ある意味？」

「それって!？」

「ズバリ、それはお姉さま自身!！」

「・・・は？」

御坂がポカーンという顔をするなか、白井は腕を組んで自慢げに推理ショーを始めた。

「つまり、お姉さまの考えは当たらずとも遠からず、ということですよ」

「白井さん、それどういうこと？」

「簡単なことですわ梓さん。例えばそのスカートの中の短パン!そしてその下の通販で購入された数量限定のゲコ太パンツ!！」

「ブツ!！」

思わず飲んでいたコーヒーを吹き出しちまった。

それにしても、ゲコ太パンツとは不意打ちだった。

「な、なぜそれを!？」

御坂がスカートを押さえる。

いや御坂、スカート押さえてもパンツの柄は変わらんから。

「さらに、ベッドの下の『着るグマ』に『ゲコ太パジャマ』、その他、ペンギンさんやワニさんや何やらパチもんくさいキャラクタまで、あまりと言えばあまりに子供っぽい下着の数々！」

「ククク・・・！」

手で口を押さえるが、白井の晒しプレイに笑いが止まらない俺。

中学二年にもなってペンギンやワニの下着・・・ある意味御坂だからこそ出来る芸当だ。

「普段は何とも思っていないなくても、心の奥底では『やっぱり恥ずかしいかな』』と思っているその潜在意識がここに来て顕在化！」

白井はここぞとばかりに更に追い打ちをかけようとするが、御坂は羞恥と怒りが混じった顔で立ち上がる。

「黒子、アンタいい加減に・・・ ツ！？」

御坂は反撃に出ようとするが、突然言葉を切った。

そして、顔には驚きの表情が浮かぶ。

「・・・？ お姉さま？」

「御坂さん？」

「いる・・・私の後ろ・・・」

御坂の顔を冷や汗がつつたう。

御坂の正面に座っていた俺と梓が、御坂の後ろをそっとのぞき見る。

しかし、通行人こそいるがこちらをジッと見ている人間はいない。

「いや、御坂、こっちを見てる奴は誰もいないが……」

「誰も……いない？」

「ええ……私も確認したけど、怪しい人は誰も……」

梓がそう言うと、御坂は後ろを振り向くと大声で叫んだ。

「出てきなさいよ卑怯者！！ どういうつもりか知らないけど、いつでも相手になってやる！！ 陰険な真似しないで、姿を表しなさい！！」

「お姉さま……」

御坂は叫び終わると、振り向いた方向をキッと睨みながら見回す。

しかし、犯人が現れることは無かった。

「くッ……」

「御坂さん……」

「……帰るわ。ごめんなさい二人とも、わざわざ呼び出したりして」

そう言つと御坂は一人歩き出した。

「あ、お姉さま!?!」

「白井、ちょっと待ってくれないか?」

慌てて御坂の後を追いかけてよつとする白井を俺は呼び止めた。

「何ですか?」

「実は、御坂の感じてる『誰かが見てる』に関して、一つ言っておくことがあるんだ」

「それは……?」

「実は昨日、その『誰かが見てる』を、琴美も感じたらしいの」

「それは本当ですか!?!」

「ああ。……流石に気になるだろ?」

俺がそう言つと、白井は真剣な顔をしてうなづく。

「ええ。犯人が琴美さんをお姉さまと間違えて見ていたのならまだしも、もし琴美さんの正体に気付いていてやっているとする、話はややこしくなりそうですわね・・・」

俺たちは、別段妹達のことを隠そうとはしていない。

琴美や御坂妹たちには、出来るだけ普通の生活を送ってもらいたいからだ。

しかし、まだ妹達が自由になってから日が浅く、その存在は依然として噂程度のものだ。

ある程度日数が経ち、妹達のことを公になってきてからなら、琴美が視線を感じても大して気にはしなかっただろう。

しかし、まだ妹達のことを認知している人間は少ない。

そんな時に琴美が視線を感じたとすると、自然と警戒心は高まる。

「でもこれでハッキリしてきたわね。『誰かが見てる』が、単なる都市伝説じゃないってことが」

「梓の言うとおりだな。こうなりゃ、何としても犯人を捕まえないと。・・・しかし、どうすんだ？一般には都市伝説として認知されている話だ、まともな情報はそう簡単に手に入りそうにないが・・・」

「そうですわね・・・ とりあえず、佐天さんに連絡を入れてみ

ますわ。ひよっとしたら、何か有益な情報を持っているかもしれませんし」

そう言っつて白井は携帯を取り出すと、佐天に電話をかける。

「あ、もしもし佐天さんですか？ 実は『誰かが見てる』の件で少々お話をうかがいたくて……今どちらに？ ……ええ、構いませんわ。では、後ほど」

ピッ

「どうだった？」

「今佐天さんは初春と一緒に自室にいらしたとのことでしたわ。失礼ながら、今からお伺いしますわ」

「オッケー……言っつても、私たち佐天さんの家知らないけど」

「わたくしが存じておりますのでご安心を。では二人とも、お手を失礼いたしますわ」

そう言っつて白井は俺たちの手を取ると、テレポートを開始した。

ピッ

「どうしたんですか？」

「うん。白井さんが今からここに来るって」

佐天が電話を切りながら初春の質問に答える。

「何の用でしょう？」

「何か・・・」

ヒュン！

「聞きたいことがありますの」

「おーっす」

「こんにちは、二人とも」

佐天が言いかけたとき、突如白井がテレポートして登場。

その両隣には明俊と梓が。

「早ッ！！　っていうか、明俊さんと梓さんも一緒だったんですか！？」

「ああ、お邪魔だったかな？」

「ごめんなさいね。白井さんだけならまだしも私たちまで押しかけちゃって」

「い、いえ！全然！　さいわい部屋も綺麗ですし（もうちょっと早めに教えてくれれば、カワイイ服とか選べただけど・・・）」

「それで、佐天さんに聞きたいことって何ですか？」

「ええ、それが、『誰かが見てる』に関してですの」

白井が初春に来た目的を教えると、初春は首をひねる。

「え？　でもそれって、ただの都市伝説なんじゃ・・・」

「それが、そうでもないようなんだ」

「明俊さん、それどういうことなんですか？」

「実は、琴美も『誰かが見てる』を感じたらしいんだ」

「それで、流石に都市伝説で片付けるのはってことになったのよ」

「そうなんですか・・・でも、私の知ってるサイトじゃ、昨日話した以上のことはのってないですね・・・」

明俊たちのやり取りを聞きながら携帯でサイトを見ていた佐天が言う。

「そうですね・・・」

それを聞いた白井が残念そうにもらさず。

「佐天さん、パソコン借りても良いですか？」

「良いけど、どうすんの初春？」

「情報収集なら私に任せて下さいってことです」

初春がパソコンを立ち上げながら自慢げに言う。

「そうですね。ここは初春に任せましょう」

「そついや、何で佐天の部屋に初春がいるんだ？遊んでたとか？」

明俊が佐天の部屋を見渡しながら尋ねる。

「ええ、まあそんなところです。正確には、今日初春と一緒にここで泊まるんです」

「へえー、お泊まり会ってやつ？」

「そうですね。今度梓さんもどうですか？」

「良いの？　じゃ、今度機会があったらお呼ばれしちゃうかな？」

「なるほどな。でも佐天、一つ良いか？」

一通り部屋を見渡した明俊が佐天の方をむく。

「？　何ですか？」

「ベッドがこれ一つしかないようだが・・・」

「ああ、そんなことですか。一緒に寝るだけですけど？」

佐天はさも当たり前のように答える。

「同じベッドでってことだよな？」

「はい。女の子同士のお泊まりなら普通だと思いますけど・・・」

「ふ、ふーん・・・　梓、そんなもんか？」

明俊は意外だというような顔をして梓に尋ねる。

「え？　うーん・・・　私、あんまりそういうのしたことないし・・・」

「確かに、梓がそういうことしてるの記憶に無いな。白井は・・・
って女子寮だから聞くだけヤボだな」

「でも、お姉さまは一緒のベッドで寝てくださりませんの・・・」

白井が心底残念そうに言うと、一同「（そりゃ、白井さんと一緒に寝たらどうなるか分からないし・・・）」と心の中でつぶやく。

ところで、梓がこの空間に核ミサイルを発射する。

「でもお兄ちゃんだって、毎日お泊まり会してるじゃない」

「は？」

明俊は意味が分からないといった感じで梓を見つめる。

「だって、朝お兄ちゃんのベッドにはいつも琴美がいるじゃない」

・・・

部屋が凍りついた。

「あああ、梓！？ お前何を！？」

「梓さん！！ それ本当なんですか！？」

動揺する明俊を尻目に、佐天は梓に近寄る。

「本当よぉ。この前二人とも起きて来るのが遅かった日があつて、私が起こしに行ったら琴美がお兄ちゃんの布団の中でギューって・・・」

「いや、確かにそんなこともあつたけど、あれはそんなやましいことじゃ・・・」

「私から見れば十分やましいんです!!」

「はぁ・・・(どうして佐天のやつ、こんなにムキになってるんだ?) あれはな佐天、琴美の実験がまだ始まる前で精神的に不安が溜まっていたころの話だ。だから俺がその不安を取り除こうと・・・」

「今日、私と一緒に寝てください!!」

「はいはい、今日佐天と一緒に寝れば・・・何だって!？」

「だから、今日私と一緒に寝てください!!」

「何でそうなる!？ ってか、今日は初春とお泊まり会なんだから？ 俺要らねえじゃねえか!!」

「初春、悪いけど今日は延期ね」

「ええ!？ 明俊さんのせいで延期になっちゃったじゃないですか!!」

「初春も俺のせいにするのかよ!?　　つてか梓!!　　お前がまいた種だ何とかしろ!!」

「ええー。自業自得でしょ」

「意味が分からん!!　　白井、白井はキチンと分かってくれてるよな?」

「自分の胸に手を当てて考えてみるんですの」

「分かった・・・いや分かんねえから!!　　それ以前に、それって俺が悪いつてことじゃねえか!!」

「そうですねよ?」

「どうしてこうなった・・・」

訳が分からない(分かってないのは明俊だけ)　　まま全員を敵にまわした明俊、と・・・

ピッピッピッ!

「お、電話だ」

窮地に追い込まれていた明俊に差しのべられた救いの電話。

だがしかし。

「あら、その電話琴美からじゃない？」

梓があっさり暴露。

すると佐天が、すかさず明俊から携帯を奪うと電話に出てしまった。

「あ、おい佐天!？」

「あ、もしもし琴美さん？ 佐天ですけど、今日の夜明俊さん借りますね」

「開口一番何言ってるんですか佐天さん!？」

明俊の横やりをスルーして琴美からの返事を待つ佐天。

しかし・・・

「・・・？ 琴美さん？ もしもーし」

「どうしたの？」

「それが、電話はつながってるんですけど返事が無いんです」

「え？」

「しかも、様子が変わってというか・・・荒い息づかいが時々聞こえて」
その佐天の言葉を聞いた明俊は、表情を険しくして佐天から携帯を奪い返す。

「琴美？おい、琴美？」

明俊が何度か呼びかけると、息づかいの中に時折声が混じる。

『あ・・・さ・・・』

「・・・？ 琴美!？」

「スピーカーにして下さいですの!！」

「あ、ああ」

白井に言われるがまま、明俊はスピーカーにすると携帯をテーブルに置いた。

「琴美さん!？ どうしたんですの!？」

『・・・と、突然・・・見知らぬ女に襲われて・・・とミサカは状況を・・・報告します』

「今どこにいる!？」

『寮のすぐ近く・・・です』

「さいわいね！！」「ここから近いわ！！」

「ああ！ 待ってる、すぐ助けに行く！！」

ピッ

「何で琴美が・・・とにかく、梓！行くぞ！！」

「うん！！」

「わたくしも行きますの！ お二人の寮なら存じていますし、レポートで少しでも早く到着した方が！！」

「助かる白井！ 初春と佐天はここに居てくれ！！」

「お二人には、引き続き情報収集をお願いしますの！！」

「は、はい！！」

三人はテレポートして消えた。

「ヒューンー!!」

「ここは・・・寮の正面か」

「お兄ちゃん! あれ!」

梓が指差す方向を見ると、寮の隣の空き地に倒れている人の姿があった。

「琴美!」

俺が駆け寄ってみると、琴美は気を失っていた。

「見たところ出血はしていないようだし、目立った外傷もない」

「よかったあ〜」

梓が地面にへたりこむ。

「明俊さん、これを」

白井が地面を指差している。

見ると、拳銃が落ちていた。

「まさか、犯人はこれで琴美さんを・・・?」

「いや、琴美には目立った外傷は無かった。それにこの銃・・・」

俺が銃を拾ってグリップの部分を見ると、『MSK 10030』
という刻印があった。

「『MSK 10030』・・・銃の型番じゃないな。多分『ミ
サカ10030号』という意味だろうな」

「では、これは琴美さんの拳銃・・・」

「ああ、間違いないだろうな」

俺は弾倉マガジンを取り出す。

見てみると、なんと弾倉は空だった。

「空・・・?」

地面を改めて見ると、葉莢せいかいがそこかしこに落ちていた。

「おい白井、これはちょっとおかしなことになりそうだな」

「どげいじじいなんですの?」

「これを見ってみろよ」

俺はそう言って、空の弾倉を見せる。

「空・・・なんですの?」

「ああ。そして、あちこちに落ちている薬莢・・・奇妙だと思わないか？」

「・・・どの辺がですか？」

「これだけ薬莢が落ちているということは、少なからず犯人に当たっているはずだ。まして琴美は銃が扱えるんだ、こんなに撃つて外す訳がない。だとすると、撃たれた奴の血液が落ちていてしかるべきじゃないか？」

「確かに・・・でもここは学園都市、銃弾が効かない能力者が犯人ということも・・・」

「ううん、お兄ちゃんの言うとおり、ちょっと変かも・・・」

シヨックから立ち直った梓が、地面から何か拾い上げながら言う。

「どづいつことですか？」

「琴美の能力、よもや忘れた訳じゃないだろ？」

「琴美さんの能力・・・あ・・・」

「気付いたか？ そう、襲ってきた奴を止めるのに、わざわざ拳銃なんて使わなくても琴美なら電撃で十分はずだ」

「ではなぜ、琴美さんは拳銃を・・・」

「理由は二つ考えられる。体調が万全でなく電撃が使えなかったか、

もしくは電撃が効かなかったか……」

「……ちよつと待って下さいな。もし後者の推測が当たっている場合、琴美さんを襲った人間は電撃と銃弾、どちらも防げる能力の持ち主ということになりますわ」

「うん。で、その後者の推測は恐らく当たってると思うよ。これ見て」

そう言つて梓が俺たちに見せたのは弾丸だった。

「これが地面に落ちていたの。しかも普通に。地面に埋まることなく、ね」

「なるほど……もしこの弾丸が、琴美さんが威嚇のために下に向けて撃つたものなら、この土の地面に埋まっているはずですわね」

「そうだ。つまりこの弾丸は、襲撃者に当たった後地面に落下したことになる。相当皮膚の硬いやつなんだな」

「でもここまで分かればもう正体を掴んだも同然ですの。書庫と照らし合わせればすぐに特定出来ますわ。そうなれば、『誰かが見ている』の一件も同時に解決ですわね」

「……いや、それはどうかな」

俺の言葉に、白井と梓が驚きの表情でこちらを見る。

「二人は今回の襲撃者と『誰かが見てる』が同一犯だと思っているようだが、俺にはそうは思えない」

「どうして?」

「どういう手段で行っているかはさておくとして、『誰かが見てる』はこれまであくまで『見てるだけ』に過ぎなかった。それが今回、いきなり琴美の前に姿を現した。今まで影でコソコソしていた人間が打って変わって、外見上レベル5と同じ人間を襲うなんてこと俺には考えにくい」

「・・・つまり、明俊さんは今回の襲撃犯と『誰かが見てる』は、性格の相異なる別の人間の犯行だと?」

「俺はそう思ってる。けど疑念が無いわけでもない。琴美も『誰かが見てる』を感じているのは事実だ。ま、琴美が意識を取り戻して証言してくれば、御坂の感じたものと琴美が感じたものが同じものかどうかはすぐに分かる。とにかく今は、襲撃者の能力から犯人の絞り込みをするしかないさ」

俺はそこまで言うと、地面に倒れて気を失っている琴美を担ぐ。

「さ、とりあえず琴美を俺たちの部屋に運ぼう。梓、悪いけどそっちから肩に手を回してくれないか?」

「うん」

「それにしても明俊さん、今回はかなり気合いが入っていますわね」

「・・・まあな。本当はこんなことが起きないように守るのが俺の、
琴美との約束なんだけどな。けどこれで俺のやるべきことが1つに
定まった。犯人を捕まえて、ついでにちよつと痛い目にもあつても
らうかな。とにかく、琴美を傷つけるやつは、それがそこのスキ
ルアウトのクズどもだろうが一国の大統領だろうが、俺は許さねえ」

「琴美は、俺が命を賭けて守るって決めてるからな。」

番外編 とある双子のOVA (2) 二人の御坂の苦悩 (後書き)

後何話でOVA編終わるんだ・・・

想定外の長さにテンパっている主です。

しかし、この間にもオリストを着々と構成中です。

感想にも頂きましたが、暗部組織や暗部の人間も登場すると思いますので、まだ先の話ですがお楽しみに (過度な期待は禁物ですがw)

番外編 とある双子のOVA(3) ～二人の御坂の苦悩～(前書き)

まったくもって話は進みませんが、投稿リズムを崩したくないとい
う個人的な理由により無理やりぶち込みます(汗

明俊に「リア充(ry」と言いたい方どうぞw

番外編 とある双子のOVA(3) ～二人の御坂の苦悩～

琴美が何者かに襲撃された日の夜のこと。

「う……ん……」

琴美が目を覚ました。

「琴美!?!」

「大丈夫!?!」

「ここは……?」

「安心しろ、寮の部屋の中だ」

「それより琴美、身体は大丈夫?外傷は無いみたいだけど、どっか痛んだりしない?」

梓は今にも泣き出しそうな表情で尋ねる。

「そうですね…… 気絶する直前に腹部を殴られたので、そこが若干痛みます、とミサカは自らの肉体の状態を報告します」

「大丈夫か? 女性だからって訳じゃないが、内臓とかにダメージがあったりしたらヤバいからな。とりあえず明日、病院に行かないと」

「ああ、ミサカは傷物にされてしまいました、とミサカは・・・」

「こんなこと言えるくらいだから大丈夫だろうな。まあそれはさておき、琴美、襲ってきた人物について詳しく教えてくれないか？」

「性別は女、身長はミサカと同じくらいで、能力者でした、とミサカは報告します」

「はい琴美、水よ。それで、どんな能力だった？」

梓が尋ねると、琴美は受け取った水を一杯飲んでから再び口を開く。

「あちらから仕掛けてきたので、ミサカはその一撃をかわし、気絶させるのに十分な威力の電撃を放射しました、とミサカは当時を振り返ります」

「でも、電撃は効かなかった？」

「はい、とミサカは肯定します。そこで電撃による攻撃を中止し、銃撃による戦力喪失に目標を切り替えました」

「それでこのサイレンサー付きの銃を使った、と。でも、全弾撃つても効かなかった、そういうことか」

「他に攻撃手段を持ち合わせていなかったミサカは近接戦闘で対抗しようとしたが、結果はご覧のとおりです、とミサカは苦々しい敗北の結果を伝えます」

「いや、いくら琴美や他の妹達が戦闘用にチューニングされているとはいえ、電撃も銃弾も防ぐ特異な能力者と戦うことは想定・・・」

・・・待てよ、電撃も銃弾でも傷付かない能力者って・・・

「なあ琴美、その相手本当に女だったか？」

「はい。胸に膨らみがありましたし、髪も女性っぽかったですので」

「そうか・・・」

「お兄ちゃん、心当たりでもあったの？」

「いや、まさかとは思ってたんだけど、一方通行かなってさ・・・」

電撃も銃弾も効きませんって言われたら、真っ先にベクトル操作を思い出してしまった。

「確かに能力的には十分可能だけどさ、もう実験は終了してるんでしょ？ それにもし彼なら、琴美が気付かないはずないし」

そう、梓の言うとおりだ。

あの実験は中止になったと、俺は一方通行本人から聞いた。

それに一方通行は無益な通り魔的行動は取ったりしない。

「じゃあ、琴美を襲った奴の能力は一体・・・」

それさえ分かれば、もう捕まえたも同然なんだがな・・・

と、そこへ、

ピリリリリッ

「電話だ。・・・白井？ はい、もしもし？」

『わたくしですの。琴美さんの様子はどうですの？』

「ああ、目を覚ましたよ。大きな痛みも無いようだけど、一応明日病院で精密検査を受けるつもりだ」

『ひとまず安心、ということですね』

「まあな。それで、他に何か用があるんじゃないのか？」

『ええ。あの後初春がいわゆる学校裏サイトの掲示板を見ていたら、常盤台の裏サイトに婚后・・・いえ、わたくしの知り合いの書き込みがありましたの』

今婚后とか聞こえたな・・・婚后光子のことだろう。

「よく知り合いの書き込みだって分かったな」

『・・・ええ、まあ。掲示板書き込み初心者といった感じでしたので、推測が余裕でしたわ・・・』

・・・お嬢様だから、掲示板に書き込んだことがほとんどなかったのだろうか。

おおかた、イニシャルのMKとでも名乗っていたのだろう。

・・・興味があるから、後でのぞいておこう。

「そ、そうか。それで、何か分かったのか？」

『今日のところは何も・・・明日、その知り合いを呼んで話をうかがうつもりですわ』

「りょーかい。んじゃ、俺も同席するかな」

『琴美さんに付き添ってあげた方がよろしいのではなくて？』

「行き帰りはきちんと付き添うつもりさ。でも精密検査ってやつはなにぶん時間がかかってな・・・その待ち時間を潰すのにちょうど良いかなって。いつ頃やる予定だ？」

『夕方ごろを予定していますの』

「じゃあピッタリだ。琴美の検査も午後からの予定だから、待ち時

間をちよつと潰せる」

本当は予約なんて入れてないんだけど、妹達は一般とは別の設備があるから何とかなる。

『では明日、今日と同じカフェでお願いしますわ』

「今日のカフェだな、分かった」

『では、梓さんが変わっていただけます？』

「梓に？ ちよつと待ってる」

俺は携帯を耳から離すと後ろを振り向いた。

「梓、白井がお前に変わって・・・」

そこで俺の思考は停止を余儀なくされた。

何故なら、そこには上半身の服を脱いで半裸になっている琴美の背中と、その背中に濡れタオルを当てている梓の姿があったからだ。

「・・・あの一」

「それでね、お兄ちゃんつたら・・・え？お兄ちゃん呼んだ？」

「・・・ああ。で、この状況は一体？」

「何って、琴美の背中を拭いて・・・あっ」

あっ、じゃねーよ！！

「何勝手に背中拭きとか始めちゃってるんですかコイツは！？俺がいるのにずいぶんと大胆なんですなあお二人は！！」

「いえ、ミサカとしてはむしろ是非見てもらいたいと・・・」

「ゴメン、長電話だと思つてつい・・・」

何やら琴美が危ない発言をしたような気がしたが、梓の謝罪と被つてよく聞こえなかった。

「仮にそう思つても、男のいる部屋でやるか普通・・・ まあそれはともかく、白井がお前にも話があるって」

「白井さんが？ 分かった。じゃ、代わりに琴美の背中拭いといってくる？」

「はあ！？」

何を言い出すんだ俺の妹は！？

エロゲのやり過ぎか！？

「冗談だって」

そう言っただけの手から携帯を奪う梓。

「……いや、男のいる部屋で背中拭き始める奴が『冗談だって』とか言っってもちっとも冗談に聞こえないからな？」

まったく、どうすりゃ良いんだこれは。

とりあえず、このままにさせるのは色々とマズいな。

「琴美、とりあえず服着てくれ。」

「え、背中を拭いてくれるのではないのですか？ とミサカははやる気持ちを抑えながらあなたに尋ねます」

「……から琴美、お前まで俺をからかうんじゃない」

「結構マジなのですが、とミサカは鈍いあなたに一步步寄ります」

「……え？」

琴美の思わぬ発言に、俺は思わず振り返ってしまう。

そこには、未ださらけ出されたままの琴美の背中が。

「……マズイ、背中だけとはいえ、これは結構目の毒だ。」

しかし、琴美も引き下がる様子がない。

こうなったら、覚悟を決めて背中を拭いてやるしかない。

「・・・分かった。今日は琴美も苦勞したことだしな。特別に拭こう」

「ありがとうございます、とミサカは若干恥じらいながら感謝します」

「ただし、一応胸にタオル当てといてくれよ。肩口から見えたらその・・・困るからな」

「ミサカは見られてもなんら問題は無いのですが、とミサカは・・・」

「俺が問題あるんだって！」

見られても問題ないって・・・女の子としてどうかと思っぞ。

とにかく、琴美が胸をタオルで隠したのを確認した俺は濡れタオルを手にとると、そつと背中に当てた。

「ん・・・あ・・・」

「おい、変な声出すなよ」

「すみません、冷たいタオルが急に皮膚に触れたのとくすぐったいのでつい声が出てしまいました、とミサカは釈明します」

・・・まあ分からないでもないが、便乗して大げさに声出してないか？

一体いつからこんな子になってしまったのか・・・

これからの琴美の成長ベクトルを若干危惧しつつ、俺は背中を拭き終えた。

「よし、終わったぞ。俺は一旦退散するから、前とか拭いて服着ろよ」

「え、前も拭いてくれるのではないのですか？」

「拭きません。まったく、誰だこんな風に育てたのは・・・」

俺は自分の部屋へと避難する。

少しして、梓が入ってきた。

「はいお兄ちゃん、携帯返すね」

「ん。それで、白井はなんだって？」

「私たちが琴美をここまで連れ帰った後、佐天さんや初春さんと話をしたらいいんだけど、御坂さんには内緒で私たちが犯人を捕まえようってことになったらしいの」

「ほう。ん？ でも、俺たちは『困ったときはお互い様』とか言っておきながら、いざとなったらこっさり行動つてのはちよつとまづくないか？」

「私もそう思つて白井さんに言つてみたんだけど、『お姉さまは妹^{シス}達の件で肉体的・精神的共に疲れが溜まつていてと思いますの。そこにきてこのストーリーカーマがいの事件、お姉さまはきつといつか暴発してしまいますわ。そうならないように、わたくしたちで先に犯人を捕まえて、お姉さまの不安を取り除きたい所存ですの』だつて」

「なるほどな。そう言われると納得だ」

俺も一方通行を止めるために身体を張つたわけだが、御坂は何ヶ所も研究施設を破壊してまわつていたし、何より自分のクローンが実験で殺されているということに精神的苦痛を感じていた。

その蓄積された疲労は俺なんかの比ではないだろう。

白井はその辺を敏感に感じ取つて、御坂に負担がかからないようにしたいのだろう。

「そこでなんだけど、明日は私とお兄ちゃんは別行動だから」

「俺は白井の知り合いとやらに話を聞きに行くんだが、梓はどうするんだ？」

「私はこれからしばらく、佐天さんと一緒にできるだけ御坂さんの近くにおいて、彼女を安心させることになったの。お兄ちゃんは、初春さんや白井さんと一緒に犯人の情報や手がかりを集めて」

「分かった。御坂のことだ、そのうち我慢できなくなって一人で犯人を捕まえようとするとするに違いないからな。その前に何とかして犯人を捕まえないと」

「そうね。私たちも、できるだけ悟られないようにするつもりだけど、早めに情報掴んでね」

「おう。 んじゃ、今日のところは寝るとしますか。 琴美のこともあつて、今日は疲れた・・・」

「琴美と一緒に寝てあげれば？ そうすれば琴美も安心してゆっくり寝られるかもよ？」

「冗談。俺が寝れなくなっちゃうよ。 琴美も、一人のほうが疲れがとれるってもんだろ」

「そうかな？ 一緒に寝てあげたほうが喜ぶと思っけど」

「あのなあ・・・ どの世界に一緒に寝る中学2年の男女がいるんだよ？」

「どこ？ エロゲの中つてもありかも・・・」

「ダメだコイツ、早く何とかしないと・・・ っておい！俺と琴美はエロゲの中のキャラかよ！」

「そういつつもりじゃないんだけど・・・ 良いじゃない、好きな者同士で寝れば」

「・・・それとこれはあまり関係ないような気がする。とにかく、今日は寝るぞ」

「はいはい。じゃ、また明日。おやすみ」

手をヒラヒラと振りながら部屋を出ていく様。

・・・最近、アイツのからかいの的にされているような気がする。

元から兄としての威厳なんてあんまり無かったけど、流石にそろそろしつかりしないと。

俺はそんなことを考えながら、もぞもぞと布団に入った。

明俊が布団に入って少し経ったころ、彼の部屋のドアを開ける人物がいた。

その人物は一直線に彼のベッドへと向かい、彼の耳元でささやいた。

「あの、まだ起きていますか？」とミサカは勝手に部屋に入ったことを謝りもせず耳元でささやきます」

「ん・・・？ 琴美か、まだ起きてるぞ。どうした？」

「いえ、寝付けないので勝手ながら遊びに来てしまいました、とミサカは釈明します」

「いや、別に構いやしないさ。とりあえず、入るか？」

そう言って明俊はベッドの半分を空ける。

「では失礼します」

琴美は明俊のベッドに入ると、いきなり明俊に抱きついた。

「ちょ・・・ まあいいか、今日みたいな日くらいは」

襲われた琴美のことを考えた明俊は、それ以上何も言わないことにする。

「それにしても・・・ 琴美を守るなんて言っておきながら、このざまじゃな・・・」

「ミサカは気にしていないので大丈夫ですよ？」

「俺が気にするんだよ……」

「そうですか……では、一つだけ良いですか？」

「ん？」

「あなたがそこまでミサカを守れなかったことを悔やんでいるのなら、次のときに守ってくれればそれで良いのですよ？」

琴美はそう言って微笑む。

表情の変化に乏しい妹達だが、琴美の明俊に見せるそれはとても明るく、明俊は気遣いの言葉も相まって思わず琴美の頭をなでる。

「ありがとう。そう言ってもらえるとすごく助かる。琴美の言ったとおり、こんなふざけた犯人は絶対に捕まえる。いや、一緒に捕まえよう」

「はい、とミサカはふっきれた様子のあなたを見て安堵しながらうなづきます」

そうしているうちに、どちらともなく始まるキス。

最初はくちびるを合わせるだけの軽いキスから始まり、次第に激しさを増していく。

そのうち互いの舌がからまるようになると、その場を支配するの

は熱い感情だけとなる。

互いの互いを想う気持ちだけが、今の二人を動かしている。

キスの応酬はいつ果てるともなく続くのであった。

「・・・琴美の背中を押したのは私だけど、何かむかつくのよね・・・」

明俊の部屋のすぐ外。

二人の口から漏れる吐息をドアの外からかすかに聞きながら梓はため息をついた。

琴美に、明俊のところへ行くように催促したのは梓だったのだ。

「そりゃ、一緒に寝てくれば？ とは言ったけどイチャイチャしろとは言っていないわよ・・・」

しかし、同じベッドにいればこうなることは至極当然のことであって、その点に関しては梓は甘かったと言える。

「もう私、別のところに住もうかな・・・でもそうになったらこの二人のことだから、きっとここには書けないような危ないことしちゃいそうだし・・・」

メタな発言をしながら考える梓だが、もちろん出て行く気などない。

「しょうがない、明日思いっきりからかってやるんだから!」

そう小さく叫んで、梓は自分の部屋へと戻っていった。

翌日、梓がわざわざ明俊の部屋に行って二人をからかったのはまた別の話。

番外編 とある双子のOVA (4) ～二人の御坂の苦悩～ (前書き)

前話と同様の理由により今回もぶつ切り投稿です。

しかも、前回以上に中身がありませんので、はっきりいって読まなくても結構な内容となっております。

一応、続きはある程度できているので次話投稿は比較的すぐだと思えます。

ですので、つなぎ程度に軽く読み流して下さると助かります。

番外編 とある双子のOVA (4) ～二人の御坂の苦悩～

琴美が襲われた翌日の夕方。

琴美の精密検査の合間をぬって俺は、常盤台中学の学校裏サイトに『誰かが見てる』について書き込みをしていた婚こんごう后ご光子みつこに話を聞くという白井と初春に同席することになった。

梓は佐天と一緒に別行動で、御坂に俺たちの捜査を悟られないようにしてもらっている。

固法先輩には「見回りをしてそのまま直帰」と伝えてあるのでその点もぬかりは無い。

ちなみに、今佐天と電話をしている初春のセリフから、梓たちは固法先輩の提案で銭湯に行っているらしい。

なんでも、陽が高いうちにお風呂に入って夕涼みしながら帰るのが最高のストレス解消法なんだとか。

・・・俺もそっちに行っておけば良かっただろうか。

でもまあ、仮に俺がそっちに行っていたとしても俺は一人寂しく男湯になることは確定的に明らかなので、ぶっちゃけどっちでもいい。

さて、話を元に戻すとしよう。

初春の会話に聞き耳を立てていた俺はそこを離れ、白井や婚后たちの座っているテーブルへと向かった。

そこでは、婚后が手にしているカップをカタカタを震わせていた。

「どどどどどど、どうしてわたくしがあの掲示板に書き込みしてる
ことが、わ、分かったんですの？」

どうやら、書き込みが自分だと知れて動揺しているようだ。

・・・そりゃ、堂々とお嬢様言葉を使い、「MK」なんてネーミングまで使ったら、知ってる人間はピーンとくるに決まってる。

ってか、俺の予想通りのネーミングセンスだったな。

この際だから、掲示板への書き込みの基礎でも教えてあげたほうが彼女の今後の身のためだろうか。

だが今はそんなことしてる暇は無いので、とりあえず俺も話に参加すべく空いている席に腰かける。

「まあまあ、それはともかく、話を進めましょう」

一応初対面なので丁寧に話しかける。

「・・・？ 白井さん、そちらの殿方はどなたですか？」

「ああ、まだ紹介していませんでしたわね。彼は同じジャッジメン
ト一七七支部所属の……」

「あら、明俊さんではありませんの」

「ん？ ああ湾内さんじゃん、お久しぶり。あれ以来大丈夫？」

「ええ、おかげさまで」

婚後の隣に座っていた湾内さんに挨拶をすると、婚後が驚いた顔
をする。

「明俊……あなた、あの工藤明俊ですよ!？」

「え？ ええ、そうですけど」

もうこの反応にも慣れてきたな。

「お噂はかねがね……何でも、双子の兄妹でそろってレベル5
でいらっしやるんですって？」

「あ、はい」

高飛車というか、強烈なお嬢様イメージがアニメとかで染み付い
てるからなかなか会話をつなげにくいな……

俺が白井の方をチラッと見ると、白井は苦笑いしながら婚後に声
をかける。

「彼の話はまた後日ということで・・・教えていただきたいんですの。あなたが感じた視線がどのような物だったか」

白井が俺の救援信号に反応して話題を元に戻すと、婚后は扇子を広げると口元に当てた。

「残念ですが、当然わたくしは被害になどあっていませんわ」

「え？」

なになに、ここまで来てまさかの収穫ゼロですか？

そりゃないだろ婚后さん・・・

「実は・・・」

俺が婚后の言葉に言葉を失っていると、湾内さんが口を開いた。

「その・・・『誰かが見てる』の被害者というのは・・・」

「わたくしたちの水泳部の先輩なんです」

湾内さんの言葉を引き継いだのは泡浮万彬あわつきほしあやだ。

彼女も湾内さんと同じく常盤台中学1年で水泳部所属。

・・・と、説明はこの辺にして、これは一体どういうことだ？

「わたくしはただ、その方の励みになればと、恐らく掲示板を覗いているであろう犯人に警告を發したまで。お分かりかしら？ 見知らぬ他人をも思いやるわたくしの心優しさ慈悲深さ！ それと一つのもわたくし、幼少のころからお父様と共にユネスコが主催する各種シンポジウムに・・・」

・・・婚後がなにやら語り始めた。

とりあえず、まともにつき合おうと延々と関係の無い話に巻き込まれそうなので彼女は放置することにして、俺たちは湾内さんの方へと向き直る。

「・・・では、あなたがたもあの掲示板に書き込みを？」

「そういえば、励ましやお見舞いの言葉も多かったですね・・・」

そう言われれば確かに、初春の言つとおりそういった類の書き込みもチラホラ見受けられたな。

流石は常盤台の掲示板、インターネットという一見思いやりのかけらもないような無法地帯においても、どこか気品あふれるといった感じか。

「・・・ちよつとあなたがた、人の話聞いてますの？」

ようやくスルーされていることに気付いたのか。

「その方に会わせていただけませんかしら？」

せつかくスルーされていることに気付いたというのに、それすら白井はスルーである。

・・・扱いに慣れているな。

白井の言葉に湾内さんと泡浮さんは顔を見合わせる。

「多分無理ですわ。視線が・・・その・・・全身を電気が逆流するような視線が怖いとおっしゃって・・・部屋に閉じこもったままずっと・・・」

「ですからわたくしたちも、あの掲示板を通じてしか・・・あの、どうか一刻も早く犯人を。皆さん、自分が都市伝説に翻弄されていると思い込んでカミングアウトすることも出来ず、わたくし、もうかわいそうで・・・」

「せ、精一杯頑張りますから！」

初春がそう言うのを横で聞きながら、俺は今の湾内さんの「全身を電気が逆流するような」というフレーズを頭の中で繰り返していた。

このフレーズ、前にもどこかで・・・

確か・・・

思い出して白井の方を見ると、彼女も同じことを考えていたようだ。

「白井、これはひょっとして・・・」

「ええ、恐らくは。・・・後一っだけお聞きしたいことがありますの」

白井の言葉に、この場にいる全員の顔が白井の方をむいた。

「・・・その方の能力は何ですか？」

「とりあえず、これで一歩前進だな」

話を聞いた帰り道、俺たちは琴美の病院へと向かって歩いていた。

「ええ。これでお姉さまや琴美さんが感じた視線というのも『誰かが見てる』で決まりですわね。後は、誰が犯人かを特定できれば一

拳に全て解決ですわ」

「問題は琴美を襲った能力者のことだ。電撃と銃弾を防げる能力か・
・無さそうだとくさんいそうだよな」

「そうですね・・・ 闇雲にバンクを探しても、容疑者が数十人と
出てきそうです」

「困ったな・・・ どうするか・・・」

俺が妙案を考えていると、白井が口を開く。

「そうですね・・・ 方法が無いわけではありませんけど・・・」

「え！？ 何か案があるのか、白井！」

「ええ、まあ。ですが、あなたがお認めになるかどうかは別ですけ
れど」

「どんな方法だ？」

「琴美さんを・・・もう1度襲わせるんですの」

「え？」

「つまり、琴美さんを泳がせてもう1度犯人が琴美さんを襲うのを
待つんですの。それで襲ってこなければ別の手立てを考えなければ
なりません。ま、とてもあなたがお認めになるとは思えま
せん」

「……いや、それでいいっつ」

「……え？」

俺の発言に今度は白井が驚きの表情をした。

「手がかりが少ない以上、こっちから動くのも一つの手だろう」

「……てつきり、断固阻止かと思いましたが…… よろしいんですの？ 下手したら、再び琴美さんを危険にさらすことになるんですのよ？」

「今度は俺がちゃんと琴美についてるから大丈夫だつて。琴美を襲った奴を野放しにしておく方がよっぽど精神的に辛いよ俺は」

「ですが、あの一度きりでもう襲ってこないということも考えられます」

「元々いつ襲ってくるかも分かりやしないんだから大差ねーよ。忘れたところにまたやってくるってんなら、その時に受けてたつまでさ」

「まあそうですね…… では一つだけ忠告ですけど、間違ってもその能力で犯人を消し去ったりしないで下さいな」

「おいおい、確かに俺の能力は一步間違ったら人消しちまうけどさ、そこまで使い方下手じゃねえよ」

「分かりませんわよ？ 琴美さんが襲われたことの怒りで手元が狂ってしまふということも……」

「明俊さん、琴美さんのことになったら見境無くなりそうですね」
初春にも言われたぞおい。

いや、確かに怒りは覚えてるけどさ・・・

「御坂が関わったときの白井に比べればまだまだ」

「確かに。白井さん、御坂さんが男の人と一緒に歩いてたらものすごい形相になりそうですね」

「特に上条さんとかな」

「あの類人猿は別ですよ！！ あの男ときたら、気付けばいつもお姉さまと一緒に・・・！！ 狙って遭遇していると思えませんの！！」

そう言っただけでギリギリと歯ぎしりをする白井。

「し、白井さんから嫉妬の負のオーラが・・・」

「お、女の嫉妬は怖いって本当だったんだな・・・」

「明俊さん、その使い方は・・・あってますね」

「あってるだろ？」

いや、二人そろって間違ってる可能性もあるが・・・

そうこうしていると、すでに見慣れた病院に到着した。

見ると、出入口のゲートのところに常盤台の制服姿の人物がいて、その人物は俺たちの存在に気付くところへとやって来た。

「皆さんそろってのお迎えとは恐れ入ります、とミサカは感謝の意を表します」

「お気になさらないで下さいな。それより、一つ確認したいことがあります」

「何でしょう？ とミサカは先を促します」

「この前あなたが感じた視線のことですが、上手くは言えませんが『全身を電気が逆流するような』感じではありませんでした？」

琴美は少し間を置いて答えた。

「……全身を電気が逆流…… はい、その表現は的確だと思いません、とミサカはあの嫌な感触を思い出しながら同意します」

琴美のその言葉を聞いた俺たち3人は顔を見合わせるとうなずいた。

「これで犯人が、どういった人間を襲ってるか大体予想が立ったな」
「ええ。後は、それがどのような能力者の仕業か突き止めるだけで
すわ。では初春、わたくしたちはこのへんで失礼して支部に戻りま
すわよ」

「そうですね。では明俊さん、計画実行のときは頑張りましょうね
」！

「おう！！」

白井と初春は、今来た道を引き返していった。

「さて、俺たちも帰るか。梓もそろそろ帰ってるだろうしな」

俺たちは病院を離れ大通りを歩き出した。

「質問があるのですが、とミサカは問いかけます」

「ん？ 何かな？」

「初春お姉さまが先ほど『計画』とおっしゃっていましたが、何の
ことですか？ とミサカは裏で暗躍しているあなたに迫ります」

「別に暗躍ってほど大げさなことでは無いんだがな。それにその計
画には琴美も参加してもらおう・・・っていうか、琴美が参加しない

と始まらないというか」

「なに勝手に人を計画に参加させているんですか、とミサカは正規の手続きをすつとばしていると思われるあなたを非難します」

「だから、その話を今からするんだつて。実はな、恥ずかしながら琴美を襲った犯人の手がかりがなかなか手に入らなくてな・・・」

「防犯カメラにそれらしか人物は映っていなかったのですか？」

「それがどこにも・・・寮の近くはプライバシーの関係からカメラが設置されてなくてな。まったく、学園都市に何千もカメラつけていてプライバシーもへつたくれも無いと思うんだがな」

「流石に女性の着替えなども映ってしまう可能性を考慮しているのですよ、とミサカはあなたの愚痴に親切に答えます」

「まあ分からなくはないけどさ。それはともかく、とにかく犯人の手がかりが少ないわけよ。そこで琴美に手伝って欲しいんだが、実は・・・」

「ミサカが餌になれば良いのですね？」

「あ、ああ。よく分かったな」

「手がかりが少ない時に採用する手段と言ったらそれくらいですから、とミサカは推理力の高さを自慢します」

「・・・で、琴美はそれで良いのか？勝手に計画立てていて今更聞くのもなんだけど」

「ミサカとしましても、あの女には仕返しをと考えていましたのでちょうど良いタイミングです、とミサカはお姉さま譲りの血気盛んな一面を覗かせます」

「ハハハ・・・流石は御坂美琴のクローン、根本的な部分は変わってないみたいだな」

「ほめられているのかイマイチ良く分かりませんね、とミサカはあなたの発言にとりあえず突っ込んでおきます」

「・・・御坂と同じだなんて思ったただけだって」

「まあ気にしてませんが、とミサカはフォローを入れておきます」

「そりゃどうも。それより良いのか？ またソイツにやられでもしたら・・・」

「その時は、あなたが守ってくれるので問題ありません、とミサカは胸を張って答えます」

「・・・ま、そうだな。相手がどんな能力者だろうが、このレベル5第二位に勝てるもんなら勝ってみろって話だ」

実際は、俺の能力は対人戦ではちと使いにくいのは相変わらずなんだがな。

琴美がそんな俺や梓のために、現在相手を制圧することを目的とした武器を作ってくれているんだとか。

まあ、レベル5としてはそれに頼らずとも一人くらいなら余裕で捕らえられるくらいでないといけないだろうから、今回の犯人はちよつと良い練習台だな。

「その計画はいつ頃実行の予定なのですか？」

「未定だ。恐らく白井や初春たちが何かしらの形で協力してくれるだろうから、もうちよい待ってみるつもりだ」

「なるほど、とミサカは早くあの女をボコボコにしたいというのはやる気持ちをおさえながら相づちをうちます」

「・・・琴美はやっぱり、根本ではあの御坂美琴のクローンなんだな。」

ガクガクブルブル・・・

番外編 とある双子のOVA (4) ～二人の御坂の苦悩～ (後書き)

あまりにもひどいぶつ切り投稿に自分自身なさけなくなってきましたね(汗)

謝罪というわけではありませんが、今後のオリストの軽いネタバレでも……

一応、『アイテム』『垣根帝督』が裏の組織・人間として明俊たちに絡んでくる予定です。

もちろん、一方通行にいつもくっついている我らがヒロイン『打ち止め』も健在です。

そして、明俊や梓は自分達の「特殊な力」のために、徐々に学園都市の裏(闇)に飲まれていく……と思われます(これは若干未定ですが)

番外編 とある双子のOVA(5) 〱二人の御坂の苦悩〱(前書き)

比較的早く投稿できる・・・つもりだったのですが、腹痛で2日間1文字も書けないという悲劇に出会い、結局遅くなってしまいました。

しかも、出来も中途半端感が否めない・・・

とりあえずOVA編完結です。

番外編 とある双子のOVA(5) ～二人の御坂の苦悩～

数日後、その計画は突如実行の時を迎えた。

朝、俺たちが朝食を食べ終え優雅な(?)コーヒータ임을庶民なりに満喫していると、ジャツジメント専用の広域無線機が鳴った。

「はいはい、今出ますよ」

「まったく、この都市も治安が安定しないわね」

俺と梓はそれぞれに言葉を漏らしながら無線機を片耳にはめると、回線を開いた。

「もしもし、感度良好ですよー」

『明俊さん、梓さん、突然で恐縮ですが今から計画実行ですの』

「ずいぶんいきなりね。どうしたの?」

『説明は移動しながらということ。佐天さん、お姉さまは今どこに?』

佐天まで協力してるのか。

ってか、どうして御坂の名前が？

『現在、大通りを移動中。明俊さんたちの寮のすぐ近くです』

『ここまでは予定通りです。では明俊さん、梓さん、琴美さんを連れて大通りまで出て下さいですの』

「よく分からんがとりあえずそうする。琴美、やっと犯人をボコれるぞ」

「もう準備は出来ています、とミサカは我先にと玄関へ向かいます」

「『殺る』気マンマンね・・・」

「教育方針間違えたかな・・・」

琴美の教育方針の変更の必要性を感じながら家を出た。

「で、大通りまで出てどうするんだ？」

『お姉さまとお会いして下さいな』

「御坂さんと？　そういえば、どうして御坂さんがこの計画に？」

俺が疑問に思っていたことを梓が口にする。

『いえ、正確に言えば御坂さんは計画の協力者ではありません』

「何だと？ 初春それは一体どういうことだ？」

「実は・・・誰かが見てるの犯人と琴美さんを襲った犯人はつながっていたんです」

「「え！？」」

「今朝お姉さまが遂に耐えきれなくなってしまったんですの」

「なるほどな。一挙に捕まえるために、御坂が行動を取る日を計画実行の日にしたって訳か」

「でも、どうして御坂さんに会う必要があるの？」

「先ほども言いましたが、誰かが見てるの犯人と琴美さんを襲った犯人はつながっていると思われます。そして、誰かが見てるの犯人は執拗に御坂さんをつけていることも間違ありません。つまり・・・」

「琴美と御坂が出会えば、御坂をつけている犯人がもう一人の犯人に連絡を入れる・・・それを見越しての行動ってことか？」

「そうですね。先日琴美さんも誰かが見てるを感じたとおっしゃっていました。それは多分お姉さまをつけていた犯人が、ファミレスから出てきた琴美さんをお姉さまと勘違いしたんだと思います。あの時琴美さんとお姉さまが店から出るのに若干ラグがありましたし」

「でも、だとしたら琴美を襲ったやつは誰で、どうして琴美を襲ったんだ・・・？」

『そこが分かりませんの。動機はどうせお姉さまへの復讐か僻みでしようけど・・・』

それで御坂を襲ったつもりだったが、普通だと見分けがつかない琴美を間違つて襲撃、そんなところか。

「大通りに出ましたよ、とミサカはお姉さまを探しながらお二人に伝えます」

話し込んでいたらいつの間にか大通りに出ていた。

まだ日曜日の朝ということもあって、人通りは少ない。

『あ！ 三人の姿が見えました！ 三人とも、左です！』

「了解。琴美、左だそうだ」

佐天に言われた通り左を見ると、常盤台の制服が見えた。

俺たちは御坂に接触すべく近付く。

「おはようございますお姉さま、とミサカは朝早くからお出かけのお姉さまに挨拶します」

「その二人が一緒ってことは琴美ね。アンタこそどうしたのよ？」

「夏休みも終わりが近いからな。三人で出かけようってだけのことさ」

「御坂さんはどこへ？良かったら一緒にどうぞ？」

「誘ってくれてありがと梓さん。でも、今日はちょっと用事があるの」

「そっか。じゃあ邪魔しちゃ悪いし、私たちも行きましょ？」

「そっだな。じゃあな御坂、また今度」

目的を果たした俺たち三人は御坂と別れ、そのまま大通りを歩きながら通信を再開する。

「御坂との接触、無事終了したぞ」

「了解ですの。佐天さん、ターゲットの様子に変化は？」

「変化ありまくりですよ！ ターゲットは携帯で誰かに電話しています！ 多分、琴美さんを襲った犯人に連絡していると思います！」

「初春、調べ物の進展は？」

「もう少しです」

「分かりましたわ。では明俊さん、梓さん、一旦琴美さんと別れてその後琴美さんを尾行するんですの。いくらお姉さまにケンカを売る輩とはいえ、三人でいる所には現れないでしょうから」

「了解。・・・という訳で、俺たちは一旦離れるから」

「目をはなしたら公開処刑ですよ、とミサカは釘を刺しておきます」

「安心しろって。じゃ、俺たちはこの辺で」

公開処刑なるものに興味はあるが、琴美のことだ、どんな目にあわされるか分からないので遠慮することにする。

俺と梓は琴美と分かれて一旦コンビニへと入り、琴美との距離がひらくまで待つ。

そして、琴美との距離が十分に離れたことを確認すると、尾行を開始した。

『どうですか二人とも、琴美さんをつけているような怪しい人間はいますか?』

「いや・・・人通りの比較的少ない日曜の朝とはいえ、まったくいないわけじゃないなあ・・・」

「そうね・・・初春さんの監視カメラの映像からは何か分からない?」

『いえ・・・すみません、こちらは御坂さんの事件についても平行して調べ物をしているもので・・・』

「ならそっちに専念してくれ。こっちは俺たちで何とかするから」

『すみません、お役に立てなくて』

「気にしないで。あ！ 琴美が裏路地へと入っていく！」

見ると、琴美は自分の周囲を確認すると、人気の無い路地へと曲がっていった。

あそこへ犯人を誘い込むつもりだろう。

「よし、あの路地は反対側にも通じていたはず。梓、お前は路地の反対側へ行つて琴美の先回りをするんだ」

「オツケー！！」

梓はうなづくと、別の路地へと向かって走っていった。

俺は引き続き影から琴美の入っていった路地を見張る。

・・・としばらくすると、琴美の入っていった路地の入り口から、一人の人間が琴美の後に続くような形で中へと入っていった。

「アイツが犯人か・・・？ 梓、琴美をつけて誰か入っていった。俺たちも両側から路地に入って、琴美もろとも犯人を挟み撃ちにするぞ」

「オツケー！！」

『二人とも、頑張つて下さいですの』

「任せろ！！」

俺は、犯人と思われる人間の後に続いて路地へと入る。

路地は一本道でわき道は無い。

琴美にも犯人にも逃げ場は無いという状況だ。

前門の梓、後門の明俊……って何言ってるんだ俺は。

『お兄ちゃん、琴美が立ち止まったよ』

「確認した。こっちも立ち止まったぞ。こりゃ琴美との一騎討ちな」

見ると、琴美と犯人が互いに向き合ってお互いを睨んでいた。

「あなたに逃げ場はありませんよ、とミサカは性懲りも無く付き纏うあなたに言い放ちます」

「アンタこそ、私がつけてるの知っててこんなところに誘導するなんてやる気満々じゃない。でも、帰るなら今のうちよ？ 逃げ場が無いのはアンタも同じなんだから」

「この3対1の状況でそのような大口が叩けるとは、ミサカもなめられたものですね」

「別にアンタをなめている訳じゃないわ。むしろ、前回私に負けた

のに、私とこうしてまた戦おうなんていうアンタの意気込みに感服してるところよ」

女はそういうと、道端に落ちていた鉄パイプを拾い上げた。

「ミサカは負けず嫌いなんですよ。お二人は手を出さないで下さい、とミサカは1対1の決闘の場を作り上げます」

琴美もそう言って、両手に拳銃を持つ。

その目は、闘争心に火のついた御坂にそっくりだった。

「……一緒に捕まえるって約束だったんだが、多分忘れてるだろうな。」

「俺と梓は手を出さない。それで良いな？」

『でもお兄ちゃん、もしまた琴美が負けるようなことになったら……』

「その時はその時だ。それに第一、琴美が二回も同じ相手にそうそう簡単に負けるかよ」

「そうです。ミサカが何の対抗策も無く特攻するわけがありません、とミサカは言い放ち、先手必勝とばかりに攻めかかります!!」

まさに先手必勝とばかり、琴美は両手に持った拳銃を構えると躊躇

踏無く引き金を引いた。

街中ということでは拳銃には消音器がついていて、銃撃戦にありがちな音は一切しない。

銃から放たれた弾丸はまっすぐ女の方向に飛んでいき、そして・

カンッ　カンッ！

無機質な音を立てて地面に落ちた。

もちろん、弾丸は確実に彼女の身体に命中していた。

しかしその弾丸は彼女の身体の表面に当たって、勢いが完全に殺されてしまったのだ。

『本当に拳銃が効かなかった・・・』

梓の思わず漏れた呟きが聞こえてくる。

「何度やっても無駄よ！！」

女はそう叫ぶと、手にしている鉄パイプを振りかざして琴美へと襲いかかった。

琴美はその一撃をかわすと、振り向きざまに女の背中にむけて銃弾を放つ。

カンッ！

しかし、見えない背後からの銃撃をも女は防いだ。

「やはり銃弾は効きませんか・・・」

琴美はそう呟くと、銃を仕舞って電撃を放つ。

それを見た女は、鉄パイプを手からはなすとポケットに手を突っ込んだ。

バチバチッ！！

電気が女の身体を包む。

普通ならあつという間に気絶する威力の電撃・・・なのだが。

「ほお・・・ 本当に電撃も効かないのか」

そう、女はまるで電撃なんて最初から無かったかのように平然と立っていた。

「だから無駄だって言ってるのよ。いい加減負けを認めなさいって」

女は勝ち誇ったような顔をして再び鉄パイプを握る。

その行動を見た琴美は、片手に拳銃を持つともう片手を自分の前に突き出した。

「あら、まだ諦めてないって顔ね。何度試してもアンタの攻撃は私には通らない・・・」

「いいえ、ミサカはあなたの能力をすでに見抜いています、とミサカは思い上がっているあなたに言い放ちます」

「何を強がり。第一、アンタの攻撃は一つも通ってないじゃない」

「・・・では、試してみましようか？」

今度は琴美が勝ち誇ったような顔を見ると、銃弾を一発放った。

当然ながら、弾丸は女に当たって地面へと落ちる。

「確かに銃弾はあなたには効きません。ですが、『同時に二種類の攻撃』をされたら、どうですか？」

そう言つと琴美は、引き金を引いたすぐ後に電撃を放った。

すると・・・

「きゃあ!?!」

女の悲鳴が聞こえてきたかと思うと、女は地面に崩れ落ちた。

「どうやら、銃弾は防がれたようだが電撃はくらってしまったようだ。」

「くっ……」

「まだ身体が痺れているのか、女は立ち上がることも鉄パイプを構えることも出来ず、ただただ琴美を睨み付けていた。」

「やはり、あなたの能力は『自由塗装』フリーコーティングのようですね」

「フリーコーティング？」

「聞いたことのない能力だ。」

「琴美、そりゃ一体どんな能力だ？」

「簡単に言えば、触れているものの性質を自分の身体の表面に写すことが出来る能力です、とミサカはお二人に説明します」

「性質を身体の表面に……なるほどな。」

「それで鉄パイプか」

「鉄パイプを握ってる間は身体の表面が金属化して、それで銃弾が効かなかったのね。でも、電撃はどうやって防いだのかしら？」

「……確かアイツ、琴美が最初電撃を放ったとき鉄パイプを手放してポケットに手をつっ込んでたな。多分そのポケットの中に……」

「

「あなたの想像通りだと思いますよ、とミサカはポケットをあさりながら答えます」

そう言つて琴美が女のポケットから取り出したのは、どこにもある輪ゴムだった。

『そうか、輪ゴムを触ってる間はゴムの性質を使って電気を防いでいたのね!』

「それなら、銃弾も電撃も防がれた理由も納得だな。でも琴美、よくその能力だつて分かったな。電撃も銃弾も防げるって、聞こえはすごいけどこの学園都市ならけっこう候補者がいそうな感じだが・
」

「ミサカネットワークをなめないで下さい、ということですよ。おおよそどのような能力か見当はついていたので、後は他のミサカたちに少しばかり情報収集に走ってもらいました」

・・・つくづく便利だなミサカネットワーク。

俺もそんな超巨大な脳内ネットワークが欲しくなるな。

「・・・チツ。せっかくバンクの私のデータにプロテクトをかけて検索にひっかからないようにしてたつてのにね」

今まで黙っていた（正確には舌が痺れて話せないでいた）女がおもむろに口を開いた。

「バンクのデータにプロテクト・・・？ おい初春、今の聞いたか

「？」

『はい、バッチリ。今調べています』

「あなた学生ね。どこの生徒？」

近づいてきた梓が質問するが、女は黙って何も言わない。

「いずれバレるんだがら、自己申告したほうが好印象だぞ？」

「・・・長点上機学園よ」

「長点上機学園・・・だと？」

長点上機学園といえば、確か能力開発において学園都市ナンバーワンを誇る高校じゃなかったか？

常盤台中学と並んで、学園都市の五本指の一つに数えられている超エリートどころのはずだ。

それに、能力以外でも突出した一芸があればやっていけるとか何とか・・・

とにかく、端的に言ってしまうえば「良いところ」だ。

「そんなエリートが何でこんなことを・・・」

「・・・実はあかし、本名を言つと『みさかみ』と『』って言つたのよ」

「何だつて!?!」

俺と梓が同時に大声を出す。

「おい初春、今の聞いたか!?!」

『は、はい!! あ、ありました! 長点上機学園1年三坂美琴・
・名前の漢字は同じですが、名字のみさかが、漢数字の三に坂です
ね。能力は自由塗装・・間違いありませんね』

「そ、そうか・・・ で三坂さん、どうしてこんなことを?」

俺がそう尋ねると、三坂は不機嫌そうに俺の方を見た。

「あら? あたしの本名を知ってもまだ気付かないのかしら?」

「いや、そんなこと言われても・・・」

名前と琴美を襲ったことに何の因果関係があるというのか・・・

俺が分からずに黙っていると、梓が口を開いた。

「・・・まさか、御坂美琴に対する嫉妬からこんなことを?」

「ピンポン! ・・・なんてね、恥ずかしながら正解よ。そう、
アタシは御坂美琴に嫉妬してたの。いいえ、その表現も正しくない
わね。正確には、あのレベルと同じ名前でありながら遠く及ばな
い自分が嫌だった」

そう言って三坂は立ち上がると、ズボンの汚れをパンパンとはた

いた。

「いつしか、御坂美琴と戦って負かしたいと思うようになったのよ。でも、レベル5に勝てるわけがないってことも重々分かってた。その狭間でストレスばかりが溜まっていった」

「・・・それで、どうして琴美を襲ったの？」

梓がそう尋ねると、三坂は自虐的にフツと笑って答えた。

「ついこの間、長点上機学園に勤めていた先生から聞いたのよ。『御坂美琴には双子と言わんばかりにそっくりな妹がいるみたい』ってね」

「・・・琴美のことだな？」

「へえ、この子琴美って言うの。知らなかったわ。何でも、その先生が街中で御坂美琴やその他大勢と一緒にその妹が歩いているのを見たって言うのよ。で、御坂美琴の代わりにその妹を襲おうって決めたわけ」

三坂がそう心境を打ち明けたとき、無線の奥の初春が「やっぱり・・・」
と声をあげた。

「? どうした初春？」

『その長点上機学園にいた教師って、じょうなんあさこ、って人じゃありませんか?』

「ちょっと待ってくれ。おい、その先生の名前って何だ？」

「城南朝来じょうなんあさきよ。元長点上機学園の能力開発担当者」

『間違いありません。その城南朝来は、誰かが見てるの犯人として今白井さんや佐天さんが追跡中なんです』

「・・・そつか!! だから琴美も『誰かが見てる』を感じたのよ!! きつと、その城南つて人が街中で琴美を見かけたときに何かしたんだわ!!」

「・・・そうか。今朝俺たちが御坂に会ったとき、その城南とやらがアンタに連絡を入れたんだな? だから、琴美の後をつけることが出来た」

「ええ。・・・さて、話はもう良いでしょ? さつさとアタシに手錠をかけて・・・」

「待って下さい、とミサカは会話に割り込みます」

割って入ってきたのは、三坂に襲われた琴美だった。

「この人の拘束は無しにして下さい、とミサカはあなたにお願いをします」

「え? いきなり何を言い出すんだ琴美?」

「そうよ、この人は琴美を襲った・・・」

「それは、先ほどミサカがこの人に電撃をくらわせたことでチャラ

にして下さい。いわゆる1対1で引き分けです」

「だから琴美、一体どうしてそんなことを言い出したんだ？」

「・・・ミサカには、何となくですがこの人の気持ち分かるような気がするのです、とミサカは打ち明けます。ミサカもお姉さまと似ているので、何かとお姉さまとの実力差を考えてしまうことがあるのです」

「琴美・・・」

意外だった。

まさか琴美が、御坂との差を気にしていたなんて。

しかし次の瞬間、あり得ないことでも無いと思った。

琴美は他の妹達たちと違って、感情に関する研究の材料にも利用されていた。

幸か不幸か、それが琴美に『他の個体より感情が豊か』という差を生むことになった。

だがよく考えてみれば、感情が豊かというのは喜びや楽しみだけではなく、怒りや悲しみにも当てはまることなのだ。

そうなれば、自分と見た目の年齢は変わらないが自らの産みの親とも言える御坂に少なからず抵抗や反骨心を芽生えさせたってなんら不思議なことではないのだ。

もちろん、御坂を敬愛していないということではないだろうが。

「もちろん、ミサカを襲ったことは良くないことですし、ミサカ自身も怒りを感じていないわけではありません、とミサカは付け加えます。ですが、あなたにはまだ向上心が残っていると思います、とミサカは勝手ながらあなたの人間性を推測します」

「勝手な推測ね」

琴美の言葉に、三坂は視線を合わせずに言葉を返す。

「嫉妬に我を忘れて、一般人を襲ったりするなどの犯罪に走ってないのでから、あなたはまだまだ見込みがあると思いますよ？ それに嫉妬心自体は何ら悪いことではないとミサカ個人は思います。嫉妬や反骨精神は向上心を生むことができるのですから」

「・・・アタシを捕まえなかったら、またアンタに不意打ちを仕掛けるかもしれないわよ？」

「その時はその時です、とミサカはむしろ受けて立つ心構えで答えます」

そして琴美は、大通りの方へ少し歩いてからこちらを振り返り、

「・・・それに、ミサカに勝てないようではお姉さまなど夢のまた夢ですよ、とミサカは若干挑発気味に付け加えます」

その言葉を聞いた三坂は一瞬ポカンとしていたが、すぐに鼻で笑った。

「あら、アタシはまだレベル3だから1種類の性質しか扱えないだけで、レベル4になったら複数の性質を扱えるようになるわ。そして、アンタなんかイチコロよ」

「そんな簡単にレベル4になれるとも思っているのですか？ とミサカは自信満々のあなたを挑発します。それに、ミサカもこれから成長期を迎えるのですからそうやすやすと負けたりしません」

「あら、言ってくれるじゃない。じゃあいつか、今度は正式にアタシと勝負しなさい。それでアタシが勝ったら、御坂美琴への挑戦権を手に入れたってことで」

「ええ、良いですよ、とミサカは売り言葉に買い言葉で答えます」

いつの間にか二人はフツフツと笑いながら、かたーく（はたから見ていると痛そうだが）握手を交わしていた。

「・・・これで良かった、のか？」

「・・・良いんじゃない？お互いそれで納得しているし」

「まあ、拘束したら色々と面倒な仕事も待っていたし、良かったことにはしておくか」

こうして、琴美に新たな友情（ライバル？）が生まれた。

追記

白井たちに合流しようと街中を歩いて、とある橋に差し掛かろうとしたとき。

ドゴーン！！

突如爆音のような音が聞こえてきたかと思うと、辺り一面に水しぶきが降り注ぐ。

見ると、橋の上で御坂美琴が下の水面に腕を突き出していた。

その数瞬の後、なんと橋の上に一隻のボートが落ちてきた。

「・・・何なの、これ？」

梓が冷や汗を流しながらそう呟いた。

「・・・どう見ても、御坂が自慢のレールガンであのボートを狙ったとしか思えないだろう」

そんな俺たちのやり取りを聞いた三坂がブルツと震えた。

「おや、先ほどの勇んだ態度はどこへ行ったのですか？ とミサカは意地悪く質問します」

「・・・だ、大丈夫よ！ いつか強くなって、御坂美琴に一泡ふかせて・・・」

そう見栄を張る三坂に俺と梓がハモって、

「「いや、無理しない方が・・・」」

「・・・」

そんな夏休みの、とある事件簿。

番外編 とある双子のOVA(5) ～二人の御坂の苦悩～(後書き)

何か、OVA編だけで佐天編くらいの長さになってしまい、もはや番外編とは言えないような感じになってしまいました(汗)

これではあまりに佐天さんが浮かばれないから、どこかで佐天編part2でもやろうかな・・・

とりあえず、次回からは再び本筋に戻ります。

明俊や梓が徐々に学園都市の裏の介入を受けていくことになります。

その足がかりとして、新キャラ(オリジナル)も登場します！

では次話、8月31日前後の話になりますが、これからも引き続きよろしくお願いいたします。

最後になりますが、ご意見・ご感想等ありましたら遠慮なくお寄せ下さい。

第31話 打ち止めともう一人(前書き)

ここから再び本編へと戻ります。

第31話 打ち止めともう一人

夏休みも残り1日になろうかという8月30日の深夜。

風呂も済ませ、宿題なんて野暮なものはとづくに終わらせている俺と梓、そして宿題なんて野暮なものは最初から存在しない琴美は3人で代わる代わる身体のマッサージをしていた。

「夏休みも明日で終わりが。いやー、今年の夏休みはとても長く感じたな」

「そうね。あまりにも色んなことがおこったからね」

レベルアップ
幻想御手事件に佐天誘拐事件、そして琴美を助けた対一方通行戦。

こんなに濃厚な夏休みなんてもうこれから無いんじゃないか？

「お二人の行くところ事件ありですね、とミサカは某小学生名探偵並みに事件体質のあるお二人に若干恐怖を覚えます」

「ハハハ・・・ま、夏休みも終わっちゃえば学校学校で、そんなに頻繁に事件に巻き込まれることも無い・・・と信じたい」

「そうね、流石にこれ以上は勘弁願いたいところね」

「・・・それは無理なような気がします、とミサカはこれからの未来に不安を覚えながら呟きます」

「止めてよ琴美・・・あっ!!!」

俺の肩を揉んでいた梓が突然大声を出した。

その時、肩を揉んでいた手に力が入り肩に痛みが走った。

「いでででででで！ そんなに力入れんなって！！ ってかそれ以前にそんな大声出すなよ！！」

「ご、ゴメン！！ 明日の朝に食べるための食パン買っておくの忘れてたこと思い出したの！！」

「何だそんなことか。何か食うもんくらいあんだろ？」

「それが・・・ ご飯も、カップラーメンすら無いの・・・」

「なん・・・だと・・・」

「それは大変ですね、とミサカは明日の朝の惨事を想像しながら解決策を思案します」

「まあまあ落ち着け二人とも。明日の朝になったらコンビニに行つて何か買ってくれば万事解決じゃねえか」

「それが・・・ 近所のコンビニで明日改修工事で休業なの」

「・・・」

予想外の言葉に流石に沈黙せざるを得ない俺と琴美。

「じ、じゃあ今のうちに行くしかねえな」

「ですが、こんな時間にうるついでには大人に見つかつたときに説明に苦慮します、とミサカはこの学園都市のこういったところの不便さに不満を漏らします」

「しまった、そうだった。この学園都市じゃ夜間の出歩きはマズかつたな」

「いや、何とかなるかも・・・」

「梓お姉さま、何か策があるのですか？」

「琴美はまだいなかったから知らないと思うけど、近所のコンビニの店長とはちよつと顔見知りつて言うか、ひいきにしてもらつてるの。だから、事情をちよつと説明しちやえば何とかなるかなつて」

そのコンビニつていうのは、以前佐天の能力のことに気付いた時の、あの強盗に入られたコンビニである。

あれ以降、あそこの店長さん並びに店員さんにはいつも頭を下げられている。

「そういえば・・・明日はジャツジメントの夏季公募で選ばれた人の任命式じゃなかつたか？」

ジャツジメントは多発している学生トラブルに対応するため、この夏休みの期間に志願者を募集、新学期から早速体制を強化しようとしている。

その新たなジャッジメントの任命式が明日行われる。

「確か午前中から私たちも参加するんだよね。じゃあなおさら今のうちに買っておいた方が良くないかな？」

「その方が良いだろうな。運の悪いことに近所にあそこ以外の店は無いし、任命式が行われる柵川中学までの道にもコンビニ無かったし」

「では急いだ方が良さそうですね、とミサカは時計を確認しながらお二人を急かします」

「やべっ、もう11時50分じゃねえか！！ 早くしないと日付変わって店しまっちまうぞ！！」

俺たちは慌てて靴を履くと、人通りなんて皆無の夜道を全力疾走した。

俺と梓は忘れていた。

もうすぐ『8月31日』をむかえるということを……

「ごめんなさい店長さん、一時閉店の準備の真っ最中っていうこんな時間に押しかけて、しかも出歩いたことも黙っていてくれるなんて」

時はちょうど0時ジャスト。

俺たちは何とかコンビニにたどり着くと、ちょうど店じまいでシャッターを閉めようとしていた店長さんに事情を話して食パンを購入することが出来た。

「そんな滅相も無い！！ 工藤さんのお願いとあらば喜んでお引き受けしますよ！！ 逆に、食パンだけで良いのかこちらがお聞きしたいくらいです。もっとも、日持ちしないおにぎりなんかは全て処分済みでもう無いんですけどね」

「いえいえ、これだけでも僕たちには十分ですよ。では、あんまり長居しても迷惑でしょうしこれにて失礼します」

「店長さん、本当にどうもありがとうございます」

「いえ、こちらこそこれからもご贖員に」

最後に俺たちはお辞儀をして店を出た。

俺たちが出ると、入り口のシャッターがガチャン、と音を立てて閉まった。

「ふう、本当にギリギリだったな」

「うん、店長さんが本当に良い人で良かった。・・・あれ？ 琴美は？」

「え？・・・ああ、いたいた」

辺りを見渡すと、車が一台も駐車していない駐車場の真ん中に琴美はポツンと立っていた。

夜空を見上げてポーツとしている。

まるで何か考え事にふけっているかのようだ。

「琴美、買い物無事終わったから帰るぞ」

その声をかけながら近付くが、琴美は相変わらず虚空を見つめたままだ。

「・・・(では、もうすぐこの近辺ですね)」

「・・・？ 琴美？」

梓も不審に思ったのか声をかけた。

するとややあって、今初めて呼ばれたかのようにこっちを振り向いた。

「ああ、すみません、少しミサカネットワークに接続していました、とミサカは釈明します」

「ミサカネットワーク？何だ、またネタの情報のダウンロードでもしてたのか？」

「そんな装備で大丈夫か？」

「……」

「……では行きましょうか、とミサカは棒立ちのお二人を置いて先に歩き出します」

何の脈絡もなく唐突にネタを発した琴美に言葉を失った俺たちを置き去りにして、琴美は歩き出した。

しかしその歩みは、俺たちの脳が起動を再開する前に止まった。

その視線は自らのさらに先、ただ一点に向けられていた。

「琴美、どうし……」

何事かと思つて琴美の前を覗いた俺も言葉を失った。

そして思い出した。

今が『8月31日』だということ。

そう・・・俺たちの前に現れたのは白い髪、赤い目、手には大量の缶コーヒーが入ったビニール袋を持ち、この学園都市で恐らく彼だけが有している圧倒的な存在感を余すことなく発揮している、レベル5の第一位・・・

「一方通行・・・」

彼もこちらに気付いたらしく、一瞬だがポカンとしたような顔をした。

「よお一方通行、久しぶりだな」

俺はとっさに琴美の前に出て、身体の後ろに隠れるように立った。

琴美が一方通行のことを恐れている可能性があるからだ。

琴美は他の妹達（打ち止めは別にして）より感情が豊かになっていて、俺が思っている以上に恐怖心が大きくなっていることも考え

られる。

事実、琴美は俺の腕を掴んでわずかに力を込めた。

「誰かと思えば・・・第二位とその第二位に惚れたクローンじゃねエか。そつちの女は・・・確か、上条とかいう三下と超電磁砲レールガンと一緒にいたな。第二位のことを『お兄ちゃん』って呼んでたってこたア、妹の第七位か」

「ええ。始めまして一方通行」

「・・・ンで、そろいも揃ってこんな時間に何やってんだ？」

「そうだな・・・一方通行と同じような用件かな」

俺は一方通行の手にある缶コーヒーのたくさん入ったビニール袋を見やる。

・・・っていつか、本当にコーヒー好きだな。

こんなに缶コーヒー買うやつなんてまずいねえよ。

「ああ？食パンなんてわざわざこんな時間に買うもんじゃねえだろ
うが」

そんなこと言ったら、缶コーヒーだってわざわざこんな時間に買うもんじゃねえよ、というツツコミはあえて伏せておく。

「いや、このコンビニ明日改修工事があるらしくて、見ての通りもう閉まっちゃうてるわけよ。だからこんな時間に買いに来たって訳」

「ああそおかい。ンじゃ」

はなから俺たちに興味など無かったようで、一方通行はそれだけ言つと俺たちの脇を通りすぎて行く。

「……待ってください、とミサカは一方通行を呼び止めます」

すると、今まで黙って俺の後ろに隠れるように立っていた琴美が一方通行に声をかけた。

琴美がこんな風に一方通行に自ら声をかけたことも意外だったが、それ以上に驚いたのは、その声を聞いて一方通行が立ち止まったことだ。

彼の性格を考えれば、琴美の呼び止めなどスルーするというのが普通だと思っていたからだ。

逆に言えば、一方通行も、自分が殺しかけたクローンが話しかけてきたことに驚いたのかもしれない。

「……ああ？」

「……あと10秒、とミサカは宣告します」

「「？」」

「……何のつもりですか？ 用が無いなら帰らせて……」

とその時、一方通行の背後にうごめく影を発見した。

それを見た瞬間、琴美の言った言葉の意味が分かって俺と梓は思わずニヤツとした。

一方通行は俺と梓の視線に気付いたのか、後ろを振り返って・・・

「こんばんは！！　ってミサカはミサカは初対面のあなたに律儀に挨拶してみたり！」

「・・・あア？　何だこの妖怪チビ毛布は？」

そこには、裸足で素っ裸で、上に一枚毛布だかタオルだかを身に纏っただけのアホ毛の少女が立っていた。

そう、今後の一方通行の生き方を決定付ける最大の要因にして彼の運命の人（？）、そして俺たち「とあるシリーズ読者」のみんなのヒロイン、「打ち止め（ラストオーダー）」である。

「ミサカは妖怪なんかじゃないよ！　ってミサカはミサカは自らの人間性をアピールしてみたり！」

「・・・おい第二位、お前の知り合いか？」

「んな訳ねえだろ。お嬢ちゃんはこっちの髪の毛の白い人に用があった

「んだよねー?」

「そうだよ!! 　ってミサカはミサカは物分りの良いあなたに元気いっぱいになつてみたり!!」

「・・・あア? 　おいクソガキ、今何つた? 『ミサカ』だと?」

「・・・ようやく気付いたか、ってミサカはミサカは・・・やべっ、打ち止めのしゃべり方うつちまった。」

「おい。その毛布取ってよく顔見せてみるオ」

「ぶっ!?!?」

一方通行のやつ、俺たちがいることなどお構いなしにそんなこと言うとは。

「ええっ!?!? 　ってミサカはミサカはかなり動揺してみたり! 　っていうか、他人の視線があるのにそんなこと言えるってどういふことなの、ってミサカはミサカは・・・」

バサアッ!!

「・・・」 俺

「・・・」 梓

「……」 琴美

「……あ、あ……」 打ち止め

「……あア？」 一方通行

……あア？ じゃねえーよ！！

「おい一方通行、何やってんだ！！ 女の子の着ぐるみ剥ぎ取るなんてジャツジメントとして見過ごせないな！！」

「そういうあなたもしつかり上位個体の裸を見ていたではありませんか、とミサカはかつこつけているあなたに詰め寄ります」

「……まあまあ琴美、あれは事故だ、うん。 とにかく！！早く打ち止めに毛布かぶせないと！！」

俺は一方通行の手から毛布を奪い取ると、すばやく打ち止めの身体に纏わせた。

「あ、ありがとう、ってミサカはミサカはまだ現実を上手く認識できていない脳であなたに感謝してみたり」

「……ンで、一体このクソガキは何なんだ？」

「俺に聞くなよ。 本人や琴美に聞けって」

「うーんとね……どこから説明する？ ってミサカはミサカは1

0030号に尋ねてみたり」

「とりあえず、ラストオーダー最終信号がどのような个体か、という所から説明すべきでは？ とミサカは上位个体にアドバイスします」

「おお！それはナイスアイデア！ ってミサカはミサカは10030号の案に賛同してみたり！ じゃあ早速説明するけど、ミサカは20001号で・・・」

そして、打ち止めと琴美による『ラストオーダー』に関する説明が始まった。

今気付いたが、最初は一方通行に恐怖心を覗かせていた琴美も普通に話している。

自分より小さな打ち止めが一方通行としっかり話しているのを見て安心したということだろうか。

「それにしても、今日のことすっかり忘れたね」

梓が、いつの間にか自販機で買ってきていたコーヒーを俺に渡しながら言う。

「ああ、ちよつと迂闊だったな。きちんと覚えていれば、琴美を連れてこないという選択肢も思い付いたんだが・・・ま、あの様子だと大丈夫みたいだな」

「・・・」

「そうね・・・それにしてもお兄ちゃん、さっきの打ち止めの裸

のガン見っぷりはどういふことかなあ？」

「……」

「いや、だからあれは事故だってさっきも言ったじゃねえか」

「……」

「ホントー？ そのわりにはしっかりじっくり見てたみたいだけどおー？」

「誤解だ。第一、あんな年端も行かない子供の裸見て誰が喜ぶんだよ。俺はロリコンじゃねえ」

「……」

「……」

「黙んじゃねえ！ それって俺がロリコンって言うてんのと同じじやねえか！」

「冗談冗談！ お兄ちゃんが琴美一筋だっことはちゃんと分かっているって！」

「ミサカもあなた一筋ですよ、とミサカは熱愛ぶりを盛大に主張します」

「琴美さーん？ そのようなこつ恥ずかしい主張は今控えて、一方通行にちゃんと説明してあげて下さいねー？」

今まで一方通行の方をむいていた琴美がいきなりこっちの会話に入ってくるとは・・・地獄耳よのお。

「あらお兄ちゃん、見ててこっちが恥ずかしくなるような熱愛ぶり
どうも」

「・・・お前に好きな男が出来たら超からかってやるからな」

「・・・」

「どっどっ自由に」

「・・・それにしても、さっきから何か変じゃないか？」

「・・・」

「私もそう思ったところなの。何か・・・変よね？」

「・・・」 俺

「・・・」 梓

「・・・」 ?

・・・

「誰ー！？」

俺と梓の叫びに打ち止めと琴美の説明が止まってこちらを見た。

一方通行もめんどくさそうにこちらを見る。

なんと、俺たちのすぐ隣に打ち止めと同じくらいかそれより年下の女の子がポツンと立っていた。

しかも、打ち止めよりはマシなものの服装が変で、靴下に白衣だけという（しかも白衣はサイズがまったく合っていない）、アンチスキルに見つからずとも誰かに見つかったら即確保間違いなしの格好である。

「あ、あなたのこと紹介するの忘れてた！ ってミサカはミサカは今頃重大なことに気付いてみたり！」

「え？ じゃあこの子は打ち止めの知り合いなの？」

梓が尋ねると打ち止めは首を横に振った。

「ううん、この人はミサカと同じ研究所にいたんだよ、ってミサカはミサカは説明してみる。ミサカが出てくる時に一緒についてきたの、ってミサカはミサカは補足を入れてみたり」

「ほおー」

俺は改めてこの女の子の顔をよく見てみる。

・・・と、思い当たることがあって梓に耳打ちする。

「なあ梓、この子の顔どこかで見覚えないか？」

すると梓も不思議そうな顔をして、

「うん、実は私も今そう思ってたところ。でも、こんな子と知り合ったことないし・・・」

俺と梓が揃って見覚えがあるのだから、勘違いなどではなく必ずどこかでお目にかかっているはずだが思い出せない。

俺たちがそんな違和感を感じていると、打ち止めから意外な言葉が飛び出てきた。

「そうそう、その子は『あなたたち二人』に用があるみたいだよ、ってミサカはミサカは黙っているその子に代わって伝えてみたり」

「・・・え？」

「そういうことだから、ミサカ達はちょっと離れたところで続きのお話をしよう、ってミサカはミサカは気を利かせてみたり」

「ああ？ 別に話くらい俺たちがいたって出来るじゃねエか」

「きつと、積もる話とかがあるんだよ、ってミサカはミサカは気の利かないあなたの背中を押してみたり。ほら10030号も、って

ミサカはミサカは促してみたり」

「どうやら打ち止めは俺たちがこの子と正面きって話せる環境を作ってくれるらしい。」

一方通行や打ち止め、それに琴美との距離が離れた頃、その女の子はようやく口を開いた。

「ふう、これでようやく話せるわね」

その第一声は驚くほど大人びていて、見た目とは全然違った印象だった。

だがそれだけでは無かった。

俺はこの子の声にもどこか聞き覚えがあったのだ。

チラッと梓の方を見ると、どうやら梓も俺と同じことを思っているような顔つきだった。

「・・・で、君のような女の子が俺たちに用っているのは何かな？」

俺は一旦疑問を脇に置いて、とりあえず用件を聞くことにした。

「その前に少し聞きたいことがあるの」

少女は相変わらず大人の雰囲気をもったまま俺に質問で返して

きた。

「あそこの彼女・・・あなた達が琴美って呼んでる常盤台の制服を着た彼女のことだけど、打ち止めに『10030号』って呼ばれてたわね？ つまり、彼女の検体番号は10030号・・・ってことで良いのよね？」

少女の発言に俺と梓は驚き、顔を見合わせた。

「ちょっと待ってくれ、どうして君のような子供が妹達シスターズのことを知っている？」

俺たちとは逆に少女は落ち着き払った様子で、俺の言葉を聞くと意味深な笑みを浮かべた。

「何故、と言われても知っているから、としか言いようが無いわね・・・それにしても驚いたわ。まさか、あの噂が本当だったなんてね」

「あの噂？」

梓がそう聞き返すと、少女は手を白衣のポケットに突っ込んで俺たちに背をむけた。

「私のいた研究所ではこの噂で持ちきりだったわ。『一方通行が10030次実験でレベル0に敗れた』ってね」

「・・・」

俺たちは黙ったまま、少女の次なる言葉を待った。

「学者たちは『一方通行がレベル0に敗れた』ことに驚いていたけど、私は違ったわ。私が驚いたのは『10030次実験』の部分だった」

少女が言葉を切るたびに、辺りを沈黙が支配する。

そして少女の口から、衝撃の言葉が紡ぎ出される。

「何故なら、『私が知っていたあの実験』は『10032次まで続く』はずだったんですもの」

その言葉を聞いた次の瞬間、俺は少女の肩を掴んでいた。

「……お前、どうしてその事を知っている？ 実験が本来なら10032次まで続くことをどうして知っている!？」

少女は俺の言葉を聞くと、僅かにこちらをむいて何とも形容し難い笑みの横顔を見せた。

「簡単よ。私があなたたちのことを知っているから。それもよく知っている。『別の世界からやってきた』工藤明俊に工藤梓……そ

「..」

第31話 打ち止めともう一人（後書き）

さて、本編再開直後ですがいきなりオリジナルキャラ登場です。

はてさて、この後どうなってゆくのでしょうか？

と、もったいぶっておきつつ、今後ともよろしくお願いします！
ってミサカはミサカは挨拶してみる！

第32話 懐かしの顔

「簡単よ。私があなたたちのことを知っているから。それもよく知っている。『別の世界からやって来た』工藤明俊に工藤梓・・・そうよね？」

辺りを痛いくらいの沈黙が支配する。

少女の肩を掴んでいる俺の手は自分でも抑えが効かないくらいに震えていた。

梓も驚きを隠せず、力なくフェンスに寄りかかって少女のことを凝視している。

打ち止めや一方通行のいる所までは聞こえていないだろうが、それでもこちらの不穏な空気を感じ取ったのか、こちらを注視している視線をヒシヒシと感じる。

よく見ると、琴美の肩に一方通行の手が乗っかっている。

恐らく、この空気を察知して俺たちに近付こうとした琴美を制したのだろう。

だが今は、一方通行の機転に感謝している場合などではない。

目の前で俺たちの正体を言い放ち、俺たちの驚いた顔を見てクスリと笑ったこの少女をどうにかしなければ。

俺はこんな子供に、と思いつつもスタンロッドを手に取り少女を詰問する。

「……俺たちのことを、どこまで知っている？」

「ふう……その前に、あなたたちまだ気付いてないのかしら？」

「……何を？」

「私のこと」

そう言うと少女（？）はこちらに向き直った。

「「……？」」

確かにどこかで見覚えはあるが、このような不思議な少女とは知り合っただけではない。

「……本当に私のこと『覚えてない』？」

「……『覚えてない』？、だと？」

俺と梓は互いに顔を見合わせる・・・が、この少女(?)が何を言いたいのかは分からない。

「ま、覚えてないのも仕方ないと言えば仕方ないか。なにせ『この頃の私の姿の記憶』なんて無いでしょうし。でもちよつと傷ついちやつたかなあ・・・ほんの1ヶ月ちよつと会わなかったただけなのに、長年付き合ってきた『幼なじみ』のことすら忘れちゃうなんて」

・・・

「今、幼なじみ、とか言ったな？」

「ええ、言ったわ」

「・・・」

「・・・」

「「ええーっ!?!」」

俺と梓の叫びが夜の学園都市に木霊・・・しそうになるところで慌てて口を押さえる俺と梓。

打ち止めや琴美、それに一方通行が不審そうにこちらを見ているが（何故か打ち止めは琴美の背中に乗っかっている）そんなことは気にならない。

今日の前の少女は自分と俺たちとの関係を「幼なじみ」だと言った。

無論、この世界で生まれてない俺たちに幼なじみなんてものは存在しない。

しかし、もっと視野を広げれば幼なじみと呼べる関係にある人物に行き着くことが出来る。

そう、「俺たちが元々いた世界」には、幼なじみと呼べる人間がいる。

確かにその人物は、普段から大人びた雰囲気醸し出していて、さらに頭脳明晰・容姿端麗ときている。

特に頭脳は桁外れて良く、中学2年生ながら大学入試並みの問題は解けてしまうという並外れたチート級の頭脳の持ち主だった。

その人物の名は……

「まさか……宮野奈津美!?」
みやのなつみ

「やっと気付いてくれたようね。お久しぶり、明俊、梓」

「お久しぶり、じゃないわよ!! どうして奈津美がこんなところにいるのよ!! それに、そんな小さな子供の頃の姿になっちゃって……」

「可愛いでしょ?」

「ああ、可愛い……じゃねーよ!! どういうことが詳しく説明を……」

俺と梓が説明を求めようとすると、奈津美は「待って!」と言ってそれを制した。

「こんな時間にこんな場所で、小さな子供が二人も出歩いている様子をもし誰かに見られたら面倒なことになるでしょ? それに、打ち止めはもうすっかり眠そうだし」

そう言われて振り返ってみると、打ち止めは既にこっくりこっくりして、琴美の背中におんぶされているのはどうやら疲れて眠ってしまったからのようだ。

「そ、そうだな。とりあえず、一旦引き上げるとするか」

色々と聞きたい話は山ほどあるのだが、奈津美の言うとおりこんな時間に夜道を出歩いているのは何かとまずいし、一方通行や打ち止めをひき止めておくわけにもいかないしな。

俺は立ち上がると一方通行たちの方へと走る。

「ゴメンゴメン、待たせたな」

「なげエンだよ」

「だから悪かったって。琴美、帰るぞ」

「了解です、とミサカは上位個体を起こしながらうなずきます。ほら、起きて下さい」

「・・・う、うん？ ひよっと寝てた？ ってミサカはミサカは10030号の暖かい背中揺すられながら聞いてみたり・・・」

「ひよっとしなくても寝ていましたよ、とミサカは・・・ あ、またそうやって寝ようとししないで下さい、とミサカは呆れながらも一度起こしにかかります」

「こりゃ無限ループの予感がしてきたぞ・・・ 仕方ない。琴美、そのまま一方通行の背中に打ち止めをお引越した」

「了解です、とミサカはさっさとこの重労働から解放されるべく打ち止めを一方通行に押し付けます」

「ちょっと待てエ！！ なんでもこのクソガキの面倒をこの俺が見なきゃなんねエンだ！！」

「上位個体はあなたに用があったのでしょう?」

「確かにそんなことも喚いてたけどよオ! 俺は連れてくつて一言も言っていないんですけどオ!!!」

「ほおー、じゃあ一方通行はこんないたいけな少女をこんな毛布被っただけの格好のまま放置するって言うんだ!。そんなことしたら第一位の名が泣くぞー?」

「それを言ったらためエもおんなじだろうがア!!! 第二位の名が泣くぞオ! それにためエはジャツジメントでもあるんだからなおさら引き取れやア!!!」

「俺には既に打ち止めが連れてきた先客がいるんだよ。それに部屋の容量的には打ち止めを置いとけないんだって」

「……(なんも言い返せねエ)」

「じゃあ決定な。ちゃんと打ち止めを連れて帰るんだぞ。その辺に置いていっても良いけど、ミサカネットワークですぐにバレるからな?」

「チツ…… 分かった分かった! キチンと連れて帰りますウ!」

「分かればよろしい。じゃ、サツサと帰るか。じゃあな」

計画通り(原作通りともいう)打ち止めと一方通行をくっ付けることに成功した俺たちはそそくさとその場を立ち去る。

「……文句たれながらも、何だかんだ言って上位個体を背負って帰るんですね、とミサカは一方通行の意外性に驚きを隠せません」

「……(だってロリコンだし)」

「ねえねえ、常盤台の制服を着たおねーちゃん」

一方通行・打ち止めと別れた後の寮への帰り道。

奈津美が子供のふりをして琴美に話しかけた。

……普段の冷静沈着な物腰、話し方からは想像も出来ない子供真似に俺は背筋を寒くする。

まあ、ある意味新鮮なジャンルではあるが、流石に奈津美がやるとちよつと不気味だ。

「はい、なんでしょうか」

「おねーちゃんは、このおにーちゃんのが好きなの？」

「ぶっ!?!?」

奈津美の口から飛び出た予想外の言葉に、俺は先ほど梓に買って

もらったコーヒーを嘔き出しそうになる。

どういつもりかと奈津美の方を見ると、恐らく奈津美にしか出来ないであろう不気味な笑みを浮かべながら横目でチラッと俺の方を見返してきた。

・・・コイツ、ここぞとばかりに俺のことからかいてきたな。

「ええ、好きですよ、とミサカは恥ずかしげもなく答えます」

・・・嬉しいことではあるんだが、琴美も琴美で少しは恥じらいというものを持って欲しい。

面と向かってはつきり言われると、聞いているこっちが恥ずかしくなる。

「ふーん、そうなんだー。へー」

その琴美の言葉を聞いて、より一層意地悪な目つきで俺の方を見てくる奈津美。

何とか言い返してやりたいところだが、子供の無邪気な（ように見える）質問にムキになって言葉を返す・・・という構図も大人げ無く見え、さらに言うと、俺は今まで奈津美に口答えで勝ったことがないので言い返すのを止める。

梓は基本的に奈津美に同調するのでハナから当てにはしていない。

・・・とまあ、何とも居づらい空気になってしまったのだが、唯一の救いは寮が近くに迫ってきたことだった。

俺はすかさず話題を切り替えることにする。

「そういえば・・・奈津美の寝る場所どうする？ 全然考えてなかったけど」

「そう言われると確かに考えてなかったわね。そうね・・・私と一緒にベッドで良いかな？」

「うん！おねーちゃんと一緒に寝る！」

「・・・」

普段ではまったく想像できない奈津美の言動に俺はさっきから閉口しっぱなしである。

「では、ミサカはもう一度お風呂を頂いてもよろしいですか？ とミサカは部屋の所有者であるお二人に確認を取ります」

「ん？ 風呂なら出かける前に入ったんじゃないか？」

「はい、確かに入ったのですが上位個体を背負っているときに汗をかいてしまいました、とミサカは説明を加えます」

「ああ、なるほどな。じゃあ早めに済ましちまえよ？ こんな時間に風呂なんか使ったら管理人に不審がられちゃうからな」

女性に風呂を早めに済ませちまえって言うのは中々難しい注文だ

と思いつつ、俺は部屋の鍵を開ける。

「では、あなたも一緒に入って身体を洗うのを手伝ってくれと早く済むのでその方針で……」

「大変嬉しい申し出だが断る」

「しゅん…… とミサカは結構本気にしていただけに残念がります」

琴美は肩を落としながら風呂場へと向かう。

……っていうか、相当残念がってるな。

まあしかし、あのような申し出にいちいちどぎまぎしているようでは、俺の身体がいくつあっても足りない。

流石にもう慣れてきたので、あの程度あしらうのは分けない。

……別に、悔しいなんて思っていないぞ？

これが紳士たる男の正しい行動だ。

「クスクス……」

「……おい奈津美、なーに笑ってんだよ」

見ると、先ほどまで子供のふりして無邪気な笑顔を浮かべていた

奈津美が、普段通りの幼なじみの顔になって笑っていた。

「別に。ただ、明俊もいつの間にかやるようになったんだってことよ」

「でしょー？ しかも、たまーに一緒にベッドで寝てるのよ」

「梓、テメエ……」

「あらあら、それはそれはまたずいぶんと濃密な時間をお過ごしのおうね？」

「……奈津美、俺をからかいに来たのか？」

俺がジトツと睨むと、奈津美は再びクスツと笑って、

「そこまで怒らなくても良いでしょう？ まあ良いわ。琴美さんが戻ってくるまえに話を済ませましょ」

「……（話のペースを握られている気がする）。どうやってこっちの世界に？」

「どうやって……ねえ。残念ながら分からないわ。だって、ある日朝起きたらいきなり研究所にいたんですもの。ちよつど1ヶ月半くらい前、こつちの世界だと幻想御手事件レベルアップの頃だったかしら」

「偶然かしら……私やお兄ちゃんがこつちに来ちゃったのもちよつどその頃だったわ」

「そうだったの……その後私は、今日までずっと研究所で過」

してきたわ」

「ちょっと待ってくれ。この世界に来たときからその姿だったのか？」

「いいえ。もしそうなら、こんな全然サイズの合っていない大人用の白衣なんか着てないわ。身体が退行したのは今日よ」

「退行・・・ねえ。どこかの某小学生名探偵みたいに薬とかで身体が小さくなったの？」

「ええ。・・・実は、ある研究員に逃がしてもらったのよ」

「逃がした？研究員でありながら？」

奇妙な研究員もいるもんだな。

「その話をすると長くなるんだけど・・・実は私も能力を使えるのよ。しかもかなり珍しい能力なの。それで研究所に目をつけられたのね、目覚めたら既に装置の中だったわ」

「どんな能力なの？」

梓がそう聞くと、奈津美は顔をしかめた。

「見せてあげたいところだけど・・・ちょっと厄介な能力だから今は無理なの。それに、私自身この能力を使いたくないのよ」

「どっしってっ」

「呪われた能力・・・とても言おうかしら？ 恐らく、私が逃げた
した研究所は大騒ぎでしょうね。私を逃がしてくれた彼を除いて」

「そうそう、その逃がしてくれた人なんだけど、どうして奈津美を
逃がしたのかしらね？」

「彼は研究所の中で唯一私に優しく接してくれたわ。他の研究員が
私のことを道具みたいに扱ってたなかでね。どうやら彼は、私の能
力研究の方針に反対だったみたい。でも、その他大勢は彼の意見に
耳を貸さなかった。だから私を逃がしてくれたのよ、わざわざ身体
を小さくする薬までくれて、ね」

「それでそんな姿になってたのか・・・」

「身体を小さくする薬・・・ 流石は学園都市、不可能を可能にす
るわね」

梓が感心していると、奈津美は「あら」と言って俺たちを軽く睨
む。

「羨ましそうに言うけど、アレ飲んだ後はしばらく激痛につぐ激痛
で死ぬかと思っただのよ？ それに突然のことで子供用の服を用意出
来なかったから、仕方なく白衣を羽織って脱出したけど・・・」

そう言うと、奈津美はいきなり白衣の前の部分をバサッと開いた。

「ちよ！？」

俺は慌てて顔を背ける。

何故なら、そこには下着も何も着けていない幼なじみの裸が惜しげもなく(?) 披露されていたからだ。

「この通り、白衣の下はノーガードだから風で白衣がなびく度に大変だったのよ?」

「わ、分かったから早く白衣戻せって!!」

「あら、子供のころはよく三人で一緒にお風呂とか入ったでしょう? 何を今さらうつろたえているのかしら?」

「確かにそうだが……って納得出来るか!! 今は昔じゃねえ!!」

「私の身体は昔の姿よ? それにこんな幼児体型見たって面白くとも何ともないでしょうに」

「こつちの精神が昔とは違っわ!! それにな、その幼児体型を見て興奮する種族の人間だっているだろうが!!」

「……グスツ、明俊も私の知らないうちにそんなに心が穢れてしまったのね……」

「……」

言い返すのも疲れてきたので、作戦変更で睨み付ける攻撃。

「そこまで怒らなくても良いじゃない……冗談よ」

そう言いながらようやく白衣を戻す奈津美。

「でも……この世界であなたたちに会えるとは思わなかったわ。やっぱり、この3人じゃないとね」

「そうだな。いつも一緒だったからな」

「私も奈津美に出会えて嬉しいわ。でもお兄ちゃん、奈津美の能力がかなり珍しいものなら、研究所の連中が血眼になって奈津美を捜してるんじゃないかしら？ 出会いを喜んでばかりもいられないんじゃないかしら？」

「そうだな。どうするか……その能力が珍しいものなら、暗部の人間が絡んでくることも考えられる。何か対策を考えないといけない」

「そうね……個人的には、私を逃がしてくれた研究員にもう一度接触してみたいんだけど」

「確かに、せつかくの研究対象である奈津美を逃がしてくれた研究員だから、もしかしたら有益な話を聞けるかもしれないし」

とその時、風呂場の方からゴソゴソと音がした。

恐らく、琴美が風呂を済ませて着替えているのだろう。

「琴美が戻ってくるからこの話は一旦ここまでな。とりあえず、具体的な解決策を思いつくまでは奈津美は俺たちと一緒に行動するよ」

うにしよう。それで良いな？」

「もちろん。何かあったら全力で守るから安心して、奈津美」

「あら、レベル5が二人も護衛についてくれるなんて嬉しいわね。頼りにしてるわよ？」

ガラッ

「……？何の話をしていたのですか？」

「ん？ いやあ、せつかくの夏休み最終日なのにゆっくり出来なくて残念だなあ、って」

「そういえば、ジャツジメントの集まりがあるとか言っていましたね、とミサカは思い出します。そして突然ですが、ミサカは病院で検査なので同行できません、とミサカはあらかじめ断りを入れます」

「そうか……ま、同席しても楽しそうなことなんて一つも無さそうだから別に良いけど」

「そうね。さ！もうこんな時間だし寝ましょ！奈津美ちゃんは梓お姉ちゃんと一緒に寝ましょうねー！」

「うん！じゃあ明俊お兄ちゃん、琴美お姉ちゃんと仲良く、ね！」

「おい、奈津美！からかうのもいい加減に……」

「じゃーねー！」

ボタン！

「……」

「一緒に寝ますか？ とミサカはそわそわしながらたずねます」

「……いや、一人で寝る」

「そうですか…… とミサカは残念がりながら自らの布団を敷きます」

なんとというか……幼なじみに久しぶりに、しかもこの世界で会えたことはかなり嬉しいことなんだが、言い方を変えれば厄介なのが増えたな……

しかし、迎えた8月31日。

大きな事件の幕開けを、しかもこの日に迎えることになるとはこの時、微塵も思っぢやいなかった・・・

第32話 懐かしの顔（後書き）

オリジナル展開は考えれば考えるほど色々なストーリーが思いついて楽しいですね（話がまとまらなくなりそうで怖いですがw）

さて、少女の正体を「二人のお母さん」と予想されていた読者様もいらっしやいましたが・・・その発想はありませんでしたw

でも二人のお母さん、良いですね・・・どこかで出しちゃうかもしれませんね（汗

さて、アニメ風に次回予告を

「迎えた8月31日、懐かしの幼なじみに出会ったばかりの二人に新たな事件が降りかかる！そして・・・佐天がついに『一肌脱いだ姿』を披露する！？ 次回、『やっぱり何か起きる8月31日』。科学と魔術（まだ登場してない）が交差するとき、物語は始まる！」

第33話 サプライズ・オブ・佐天（前書き）

タイトルが英文法的に正しいかどうかは完全にスルーとします（汗

さて、この話が2011年最初の投稿ということになりました。

この小説が一体何話まで続くか私自身見当もつきませんが、どうぞこれからもよろしく願います。

第33話 サプライズ・オブ・佐天

8月31日。

上条さんが御坂美琴に「無視すんなやゴルアアアアアアアア！」
されたり、インデックスが誘拐されたり、一方通行が打ち止めや妹
達のために奮闘する日。

俺たちは俺たちで、ジャッジメントの夏季公募合格者の就任式な
るものが行われるため、夏休み最終日だというのに午前中から出勤
である。

「せっかくの夏休み最終日だというのにお仕事ご苦労様です、とミ
サカは朝からやや元気の無いお二人に労いの言葉をかけます」

そう言い、琴美が下着姿でイヤリングをつけながら洗面所から出
てきた。

・・・下着姿？

「おいおい琴美さん！？　なんて派手な格好でご登場なんですかあ
！？」

「元気が無いようなので元気が出るように、と思いましたが・・・」

おや？ まだ元気にはならないようですね、とミサカはブラジャーのホックに手を伸ばして……」

「ストープ！！ 朝から何やってんですかあ琴美さんはあ！？
っていうか、それじゃ『元気になる』の意味が18禁に聞こえるじやねえか！！」

「半分くらいはそういう意味だったのですが……」

「……。ま、まあ落ち着け琴美。とりあえず、服着ろ、な？」

俺は何とか視線を逸らしながら琴美に服を着るよう促す。

琴美は結構残念がりながら渋々常盤台の制服に身をつつむ。

……段々行動が過激になっていっているのは、もはや気のせいではないだろう。

もちろん嬉しいことには嬉しいのだが、あそこまでされてしまうと俺の中の色々なものがいつか音を立てて崩れてしまいそうで怖い。

俺が琴美に背を向けるように立つと、その様子を見ていた奈津美がクスツと笑う。

その目から、奈津美の意地悪そうな言葉が容易に脳内再生される。

「（あなたも大変ね）」

「（うっせえ）」

俺たちは物心ついたころから一緒に過ごしてきたので、アイコンタクトくらいは出来る（相手の考えてることは大体目を見て分かってしまう）。

もはや、第二の妹的な存在である。

「まったく・・・ 琴美は今度はお兄ちゃんの前でストリップ？
本当に出て行くことも考えようかしら？」

洗面所で歯を磨いていた梓がため息をつきながら、それでもわずかにニヤニヤしながら現れた。

「・・・梓、お前も洗面所にいたなら琴美をどうにかしてくれよ」

「私はちゃんと、『やってもお兄ちゃんはウブで鈍感だからやっても無駄よ』って言ったわよ」

「・・・」

梓、それは「止めた」になってないぞ。 それに、鈍感で悪かったな。

「ま、そんなことはともかく行きましょ。遅れたら、これからジャッジメントになるって人たちに示しがつかなくなるし」

俺にとって重要なことを「そんなこと」でバツサリと切って捨てた梓は、さっさと玄関へとむかう。

「・・・本当にあなたも大変ね」

梓に続いて俺が靴を履いていると、隣に立っている奈津美が琴美に聞こえない程度の大きさの声で話しかけてきた。

「まあな。っていつか、そう思ってんなら奈津美もどうにかしてくれよ」

「私としては、むしろいじられてるあなたを見ているほうが面白いのだけれど」

「・・・結局、お前も俺の敵って訳ね。はあ、不幸だ」

「あら、こんな美女、しかも3人に囲まれてるのに不幸だなんて言ったら世間から袋叩きにあつわよ？」

「子供の姿してるお前もその中に入ってんのな」

「・・・文句ある？」

「いいえ、なーんにも」

「なら良いのよ」

まあ確かに、子供の姿してる今でこそ「可愛い」という形容が正しい奈津美だが、実際のところは中々美人の部類に入ると思っし、何より中学二年のくせに胸がでかい。

ところがもったいないことに、結構多くの男子に告白されていたと思っが全部断っている。

一部の男子の噂では、既に好きになった男子がいるとかいないとか、そんなことが言われていた。

奈津美ほどの人間が好きになった男子・・・ 一体どんなヤツなのだろうか、俺には想像もつかないが。

「よし、と。じゃあ奈津美、おぶってやるよ」

靴を履き終わった俺は、奈津美に背中にしがみつかれるよう腰を下ろす。

「・・・は？」

奈津美はポカンとしている。

「だから、おぶってやるって」

「バカにしないでくれる？ ここから柵川中学までどのくらいあるか知らないけど、はるか遠方の地って訳じゃあるまいし、歩いていけるわ。それに第一、昨日この寮まで歩いてきたじゃない」

「そう言うんなら俺は別に良いけど、お前靴無いから裸足だぞ？ それに昨日は夜だったからあまり感じなかったのかもしれないけど、夏のコンクリートの上を裸足で歩くのはオススメしないぞ？」

「あ・・・」

俺にそう言われて、奈津美は「そうだった」という顔をした。

「あ・・・じゃねえよ、そんなことも分からなくなっちゃったのか

？・・・まあいい、ほれ、行くぞ」

「う、うん・・・」

ようやく納得したのか、奈津美はおずおずと俺の背中につかまった。

玄関を出ると、俺につかまっている奈津美を見た梓がニマア、と笑って奈津美にささやく。

「あらあ、お兄ちゃんにくつついちゃって可愛いわねえ」

「・・・梓、あなたって人は・・・」

どうやら梓は単に奈津美に同調して俺をいじっているのではなく、いじれる人を誰これ構わずいじり倒す方針らしい。

双子の俺でも気付かないところでそんな性癖に目覚めていたらしい。恐ろしい子、梓。

「ま、今日一日の辛抱さ。ジャツジメントの就任式が終わったら靴やらその他諸々を買いに行こうぜ」

「・・・いつまでこの姿で過ごすことになるのかしら？ はあ・・・不幸だわ」

奈津美が上条さんのごとく背後から弦くのを聞きながら道路へと出ると、ここで道が分かれる。琴美が立ち止まって俺たちを待っていた。

「どうした琴美？ 俺たちには構わず病院に行ってこいよ」

「その前にお二人にお渡ししたいものがあります、とミサカはバッグから二つの黒い塊を取り出します」

そう言っで琴美が取り出したのは、黒い塊なんて暗黒物質ではなくオートマチックの拳銃だった。

「・・・黒い塊っていうか、どう見ても拳銃にしか見えないんだが」

「細かいことを気にしてはいけません、とミサカは案外細かいところに目が行くあなたをスウツと睨みます」

「案外って何だよ案外って」

「あ！ これってもしかして、この前琴美が私に手伝って欲しいって言っでた武器？」

梓が、琴美から受け取った拳銃をあちこち見ているときいきなりそんなことを言い出した。

「手伝った？ 梓、ジャツジメントじゃ飽き足らず兵器開発部門にでも就職したのか？」

「そんなわけ無いでしょ？ 琴美が、犯人確保には不向きな能力の私たちのために他の妹達シスターズと協力して作ってくれたのよ。私はその最終段階でちよつと手を貸したの」

「・・・まあ確かに、あなた達二人の能力じゃ、犯人をこの世から消し去るか氷の人間像を作るしかって感じだものね」

俺の背中で奈津美がそう呟いた。

「まあな・・・それで、どんな武器なんだ？まさか、ただ単に普通の拳銃じゃないだろうな？」

「半分はその通りです、とミサカは弾倉マガジンをお二人に渡ししながら説明します」

「半分？ どういうことだ？」

「今琴美がお兄ちゃんに渡した二つのマガジン、赤い印と青い印が付いてるでしょ？」

言われてマガジンの底の部分を見ると、確かに片方には赤いラインが、もう片方には青いラインが一筋入っていた。

「ああ、付いてるようだが・・・何か違いでもあるのか？」

「赤い印が入ってるのは実弾、それも対能力者用の特殊弾よ」

「能力者用の実弾・・・？」

よくアンチスキルが持っているような特殊武装に使われている物だろうか？

確か、衝槍弾頭ショックランサー・・・だったか？ 対暴走能力者用の弾があるという風に記憶しているが・・・

「その特殊弾は学園都市製のある極秘技術・材料で作られていて、

表面にAIM拡散力場干渉技術が用いられています、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「何だそりゃ？」

俺が首をひねると、背中に背負われている奈津美がモゾツと動いて顔を僅かに俺の耳に近付ける。

「聞いたことがあるわ。どんな仕組みかは知らないけど、相手のAIM拡散力場に干渉して、相手の能力の影響を受けずに飛ぶことが出来る弾丸があるって。レベル5ならともかく、大抵の能力者になら有効だって話よ」

「そりゃまた物騒な話だな。これ一つでほとんどの能力者に効果的なダメージを与えられるんだからな。・・・でもそんな弾、よく手に入ったな」

「ミサカ達にかかれば不可能など無い、ということですよ」

「・・・あんまり危険なことに手染めるなよ？　それで、青い印の方は？　何かこっちの方が断然軽いんだが」

「そっちは実弾じゃないわ。そっちには超小型の針が大量に入っているの」

「・・・針？」

なるほど、針なら確かに弾丸より軽いのは納得だが・・・何故に針？

「そちらもただの針ではありません、とミサカは説明を始めます。その針には対象を気絶させるのに十分な電気を帯電させてあります」

「つまり・・・このスタンロッドの遠距離攻撃バージョンってことか？」

「そうですね、とミサカはうなづきます。お二人の能力では、犯人を確保するには能力を相当セーブしなければならないことを考慮して作りました」

「そうか、ありがとな。・・・あれ？　そういえば、梓の協力があったと言ってたけど、どの辺で協力したんだ？」

俺がふと浮かんだ疑問を口にする、梓がドヤ顔でこっちを見ている。

「お兄ちゃん、『超伝導』って知ってる？」

「超伝導・・・？　そりゃ確か、温度をかなり下げると電気抵抗がゼロになる・・・とか何とかだったけ？」

俺がそう言うと、背中に背負われている奈津美が再びモゾツと動いて俺の耳にささやく。

「超伝導、英語では Super conductivity。特定の金属や化合物を超低温に冷却すると、それぞれ決まった転移温度以下で電気抵抗がゼロになる現象のことよ。1911年にオランダの物理学者ヘイケ・カメルリング・ネオスが発見したの。ちなみに、初めてヘリウムの液化に成功したのも彼よ」

「・・・毎度のことながら、お前は詳しいな。奈津美が幼なじみの親友で俺は頼もしい限りだよ」

「褒めても何も出ないわよ。それより、これで梓がどのように協力したか分かったでしょ？」

「ああ。つまり、このマガジンの針に電気を帯電させるときに、梓の能力で超低温状態を作り出したってところだろ？ 梓の能力なら液体ヘリウムも作り出せるらしいしな」

「そういうこと。液体ヘリウムを手に入れるのは値段的にもめんどくささ的にも大変だしね」

「梓お姉さまの協力により針に電気を帯電させ続けることができ、この銃の小型化・携帯が可能になったのです、とミサカは懇切丁寧に補足を加えます」

「なるほどな。それにしても、わざわざこんな便利なものを作ってくれていたなんて知らなかったよ。琴美、ありがとな」

「いえ、礼には及びませんよ。・・・さて、ミサカはそろそろ病院へと向かいますね」

「ああ、大丈夫だろうけど一応気をつけてな」

琴美が十字路で俺たちと分かれ、姿が見えなくなるまで見送ると俺たちも柵川中学へと向かって歩き出した。

「よいしょっと・・・おい奈津美、大丈夫か？」

「え、ええ。ごめんなさい、こんなことまでしてもらって」

「気にすんな。何とか奈津美を逃がしてくれた研究員と接触して、『この通り、奈津美は無事逃げおおせたので姿を元に戻してやって下さい』ってお願いするまでの辛抱だからよ」

「そうよ、私たちに任せて！・・・あ、でもでも、奈津美的にはこのままの姿でも別に良いんじゃない？」

「？ どうしてよ？」

「だって、そうすれば毎日お兄ちゃんにおぶってもらえるのよ？」

「ば、ちょー！？ 梓、アンタなに言ってる・・・！」

「・・・？ 何だ奈津美、おんぶが好きなのか？」

「・・・」

俺が確信を持ってそう言つと、俺たち三人のあいだに何とも言いがたい空気が流れる。

え？ なになに？ 俺なんか間違つたこと言つた？

「・・・ね？ 分かつたでしょ奈津美、お兄ちゃんの壁の厚さが」

「ええ、良く分かつたわ・・・」

「？」

二人が意味不明なやり取りをし、深いいため息が聞こえてきた。

・・・まったく、俺の周りの女は訳の分からん連中ばかりだぜ。

「あ、明俊さん！ 梓さん！」

柵川中学の校門の前で初春が俺たちを見つけて手を振っていた。

「よお初春。で、来て早々だけど、帰って良い？」

「ダメですッ！！」

「えー、良いじゃん。別に俺たちがいなくたって式は余裕で進行するだろ？」

「ちゃんと出席しないと固法先輩に後でこっぴど怒られちゃいますよ？ それに、今日は一七七支部を代表して明俊さんの挨拶もあるんですから！」

「・・・え？」

何か今、聞こえてはいけない言葉が聞こえてきたような・・・

「すまん初春、よく聞こえなかった、もう一度言ってくれ」

「ですから、支部を代表して明俊さんが挨拶するんですよ！」

「・・・」 俺

「ざわ・・・ざわ・・・」 梓

「・・・とんだ不幸ね」 奈津美

挨拶・・・だと？ それも支部を代表して・・・だと？

「ち、ちよつと待て！そんな話聞いてねーぞ！？」

「ええ、だって今初めて言いましたし」

「そういうことは事前に言っとけよ！！ それに第一、何で俺なんだ！？ ここはどう考えても先輩である固法先輩だろう！」

「事前にと言われても、今日決まったことですし。それに、これはその固法先輩直々のご指名です」

「なん・・・だと？ 不幸だ・・・」

「まあまあそう言わずに、明俊さんなら大丈夫ですって！ それはそうと、明俊さんが背負っている女の子はどちら様ですか？」

「えー！？ ああ、私たちの親戚の子なの。とつても勉強熱心な子で

ね、私たちのジャツジメントの仕事風景を1度見てみたいって言うから連れてきちゃったのよ」

俺がショックで反応できないでいると、梓がナイスフォローで初春の疑問を解消する。

・・・頼むから梓よ、そのフォロースキルをぜひ窮地に陥っている俺のために使ってくれ。

「へー、良い子ですね！ あ、私、初春飾利って言います！よろしくね！あなたのお名前は？」

「わたし、宮野奈津美！よろしくね！」

「かわいいですね！しっかり自己紹介も出来て、エライエライ！」

そう言っつて奈津美の頭を撫でる初春。

まあ、元はと言えば中学二年生だし、俺たちよりずっと頭も良いから当たり前だと言えば当たり前なのだが。

・・・と、通りの反対側に見慣れた少女を発見。

「お、初春、佐天が通りのむこうにいるぞ」

「あ、本当ですね！ 佐天さん！！」

初春が声を張り上げて手を振ると、佐天も手を振り返してこちらへと横断してきた。

「おーっす初春！ いやー、夏休みのあいだほとんど着なかった制服をタンスの奥から引っ張り出してくるのに手間取っちゃってさ。ちよっと遅れちゃった」

「まだ大丈夫ですよ。それより、メールに書いた物、ちゃんと持ってきましたか？」

「もっちろん！！ 今日これ持ってこないと始まらないからねー！」

そう言っつて佐天がスカートのポケットから取り出したのは、ジャツジメントの腕章だった。

「腕章？ 初春のか？」

初春が佐天に貸したのだろうか？

「チツチツチツ、明俊さんもまだまだ甘いですねー！ その腕章をよーっく見てくださいー！！」

「？」

何だか良く分からないが、とりあえず言われたとおり腕章をもつ一度よく見てみる。

すると、腕章の内側、なにも印字されていない白い部分にペンで何か書いてある。

「なにになに・・・ 『佐天涙子』？ じゃあこれは佐天の腕章って
ことか？」

「そうなんですよー！！」

「おおおう、そうかそうか・・・」

「・・・」

「・・・」

「ってちょっとまてえええええええ！！ 佐天の腕章だとお！？
ってことはつまり・・・」

俺が佐天の顔を凝視すると、佐天はちよつと照れたような表情を
した。

「はい！！私、佐天涙子は晴れてジャッジメントになりました！！」

・・・マジかよ・・・

第34話 嵐の前の・・・嵐

「はい！！私、佐天涙子は晴れてジャツジメントになりました！！」

・・・マジかよ・・・

「おま、いつの間に講習なんて受けてたんだ・・・？」

「この夏休み後半ずっと受けてました」

「・・・気付かなかった。 ってちょっと待て、確かジャツジメントになるには長期間の講習と訓練が必要だったはずじゃあ・・・」

俺はジャツジメントになるための規則を思い出す。

俺と梓も短期で（というよりほとんどその場で）ジャツジメントになったわけだが、それは初春と固法先輩に手を回してもらって非常員という扱いになっているからだ。

通常の方法では長きに渡る訓練などを行う必要がある、それらはとても夏休み後半だけで終わるものではない。

「まったく、佐天さんの不断の努力には脱帽しっぱなしでしたわよ？」

「白井……」

「校門のところまで立ち止まって何をしているのかと思いましたが、不謹慎とは思いながらお話を盗み聞きさせてもらいましたの」

「白井さん、佐天さんの不断の努力ってどういうこと？」

梓がそう尋ねると、白井は手に持っている学生カバンから一枚の紙を取り出して俺たちに見せてくれた。

「なになに……『夏季期間における風紀委員の仮採用と特例措置について』？」

「この夏季期間の募集はなにぶん短期間の募集ということで、合格者は1名を除いて仮採用扱いなんですの」

「そして、2学期の期間に該当する9月から12月のあいだの仕事の評価で、ジャッジメントに本採用になるかどうか決めるんです」

初春が奈津美の頭を再び撫でながら白井の説明を引き継ぐ。

「そこまでは分かった。だが今の白井の話を聞くと、例外が一人いるみたいだが……」

「ええ。実は、それが佐天さんですの」

「「え!？」」

俺と梓が驚きの声をあげると、佐天は照れたように頭に手を当てながら「エへへ……」と照れ笑いをする。

「私も結果を受け取ったときは本当に驚きましたの。そもそも佐天さんがジャッジメントの公募に参加してきたことも驚きだったんですのに……」

「佐天さんはなんと!! 筆記試験と実技試験の両方をパーフェクトで合格した唯一の応募者なんですよ!!」

「ほおー、そりゃすごいじゃないか!!」

「佐天さん!! 尊敬するわ!!」

「や、止めてくださいよ二人とも! 照れるじゃないですか……」

「照れる必要ないだろ!! もっと胸張れって!!」

俺は畏敬の念をこめて佐天の頭をなでる。

よく見ると、佐天の目の下にはくまが出来ていた。

それだけ、ジャッジメントになるために勉強や訓練を積んできたのだらう、それも並大抵の量ではなかったはずだ。

そう思うと、頭をなでる手は余計止まらなくなる。

「や、止めてくださいよ明俊さん、その……恥ずかしいですよ」

「いや、目の下にくま溜め込むほどジャッジメントになることに一生懸命になった佐天のことを思うと止まらねえよ。でも、どうしてそこまでして……?」

ジャッジメントなんて、雑務ばかりだと思えばいきなり能力者同士の喧嘩に狩り出されたり、暇かと思えば突然スキルアウトどもの制圧に長時間の時間を割かれたりで、良いところなんてほとんど無いと思うんだが・・・

俺がそんなことを考えながら佐天の返事を待っていると、佐天は少しのあいだうつむいて言葉を選んでいたようだが、やがて顔を赤らめながら上目遣いで俺の方を見てきた。

・・・何かすごく可愛いんですけど!?

っていうか、ジャッジメントになった動機を聞いたただけなのに何で佐天は顔を赤くしてるんだ!?

佐天の理解不能な表情の変化に言葉を失っていると、佐天が相変わらず上目遣いのままボソッと呟いた。

「・・・（そんな、明俊さんと少しでも一緒にいたいからなんて、言えるわけじゃないじゃないですか・・・）」

「え？ 俺と少しでも・・・何だって？」

後半部分が上手く聞き取れなかったので佐天にもう一度言うように促すと、佐天は顔を真っ赤にして手をバタバタと振った。

「え!?! いや、その・・・あ、明俊さんと・・・そ、そう! 明俊

さんに少しでも近付けるようにってことです!」

「俺に・・・近付く?」

「そ、そうです! あ、明俊さんにはレベルアップの時や誘拐されたとき、2回も助けてもらって・・・これじゃいけないって思ったんです!だから、私もジャッジメントになって、少しでも明俊さんみたいに働けたらなって・・・」

「佐天・・・」

俺は目の前の佐天に大きな成長を感じて、これが公衆の面前でなければ思わず抱き締めていただろう。

人の成長・・・しかもヒューマンドラマにありがちなありふれた展開だと、世間の人間は言うようなそんな展開かもしれない。

しかしそれは佐天の過去を知らない人間が言うことであって、俺には言葉にできないくらい嬉しいことだった。

これが一時期、無能力者であることに自己嫌悪を抱き、レベルアップという麻薬的なものに手を出してしまった人間とは想像し難いだろう。

それだけではなく、自らの能力が発現したことに満足してそこで立ち止まってしまうのではなく、自分の力を他人のために行きしようという考えまで持ったことは、批評家気取りになってしまうがすごいことだと思う。

「・・・はあ、あなたは変わらないのね（フラグ建築士的な意味で）」
「（）は心の声」

俺が感慨にひたっていると、背中 of 奈津美がため息混じりにそう呟くのが聞こえた。

「おい奈津美、そりやどついう意味だ？」

つていつか、俺の心の中を読んだような発言だな。

「いーえ、別にい〜」

そう言つと、奈津美はプイツとそつぽをむいてしまった。

・・・何だ、コイツ。 拗ねてるように見えるけど・・・何に拗ねてんだ？

「あれ？ そついえば明俊さん、今更ですけど、その背中に背負われている女の子は？」

佐天が奈津美の顔をのぞきこみながら首をかしげる。

「ん、ああ、親戚の子だな。 ちょっとご両親の関係で預かってるんだ。 ジャツジメントの仕事の見学も兼ねて連れてきたんだ」

俺が先ほどの梓のフォローに合わせて適当な嘘をつくつと、そつぽをむいていた奈津美が佐天の方を向き直つた。

「宮野奈津美っていうの。 よろしくね、佐天お姉ちゃん!」

「はい！よろしくね！　自分で挨拶も出来て、良い子ですね！」

「あ、ああ。ご両親の育て方がよろしいんだな」

「……俺や梓と同じ中学二年だと知ったらどうするのだろうか。
まあ、言いつもりは無いけど。」

「みんな、こんなところにいたのね。もうすぐ就任式始まるわよ」

校庭の方から固法先輩が俺たちを呼びにやって来た。

「了解ですの」

「あ、そう言えば固法先輩！　なに人を勝手に代表挨拶に抜擢しちゃうてくれてるんですか！！　俺何て挨拶すれば全然考えてないですよ！？」

「ああ、ごめんなさい。確かに相談無しにあなたに決めたことは悪かったわね。でもやっぱり、一七七支部を代表するのはレベル5のあなただと思ったのよ。お願いできないかしら？」

「……まあ、別に良いですけど」

「ホント？　そう言ってもらえて助かるわ。さ、行きましょ」

「……結局、俺が一七七支部代表挨拶を本当にやることになった」

まった。

『えー、我々ジャッジメントが新任の諸君に期待することは、言うまでもないことではあるが・・・』

「・・・なげえ」

就任式が始まってかれこれ30分以上。

そのほとんど全ての時間が、このジャッジメントのお偉いさんの話で費やされている。

今日は幸いにして雲が多く、夏の日差しが体力を奪っていくことはないものの、日本特有の湿った暑さは変わらず、ストレスだけがどンドン溜まっていくのであった。

「外で演説聞いているこっちの身にもなれよな・・・」

お偉いさんは俺たちの目の前で演説を繰り返しているわけではない。

そりゃそつだ、学園都市中のジャッジメントの支部で同じように

式が開かれているのだ、こんな一七七支部なんて半端なところで演説なんてするわけがない。

今聞こえてくるお偉いさんの声はスピーカーから流れてきていて、恐らくエアコンの効いた涼しい部屋から電波飛ばしているんだろう。

「あら、あなたにしてみれば、挨拶で何を話すか考えるいいチャンスじゃない？」

「あん？」

隣に座っている奈津美が、白井や初春たちに聞こえない程度で俺に話しかけてくる。

「考えるもなにも、テキストに定型句を述べてさっさと終わらせるつもりだけど？」

「・・・レベル5の第二位が聞いて呆れるわね」

「仕方ねえだろ？面倒くせえんだから・・・それにジャッジメントの仕事なんて論より証拠の世界だぜ？模擬戦でもやったほうが10倍は効果がありそうだぜ・・・」

「あなたの言うことも分かるけど、決まっちゃってることなんだからそれ以上文句言わないの。それよりほら、もうすぐあなたの出番みたいよ？」

「あん？」

意識を奈津美からスピーカーに移すと、長々とした挨拶のしめに

入ったようだった。

「ケツ、散々待たせやがって。でもま、ようやく俺の出番って訳だ」
「頑張つてらっしゃい。ここでちゃんと聞いといてあげるから」

「そりゃどうも」

『・・・以上！長くなってしまったが、これからの諸君の活躍に期待している。12月のときに、一人でも多くの諸君が本採用となることを心から願っている。では、後は各支部ごとに進めてくれたまえ』

ようやくお偉いさんの演説が終わって、固法先輩がマイクを持った。

「えー、続いては一七七支部を代表して、レベル5の工藤明俊君に挨拶をお願いしたいと思います。では明俊君、お願いします」

呼ばれた俺は立ち上がると、固法先輩からマイクを受け取ると、よく校庭なんかに着かれています校長なんかは挨拶をするときにのぼる台の階段を上がる。

そして台の中央で立ち止まると、目の前に座っている新任のジャッジメントの顔を一通り見渡す。

ジャッジメントの大半は中学生から高校生で構成され、見ていると今回の採用者もその例にたがわなかったようだ。

最年少は・・・断定は出来ないがどうやら佐天（＝中学一年）の

ようだ。

そんなことを考えながらチラツと佐天の方を見ると、佐天も俺の方を見ていて、小さく俺に手を振ってきた。

・・・と、今俺がするのは観察じゃなかった。

俺はマイクのスイッチを入れると、先ほどまで考えていた言葉（常套句ばかりだが）を思い出す。

「えー、どうも、先ほど紹介にあずかりました、ジャッジメント第一七七支部所属、工藤明俊です。既に皆さんご存知とは思いますが、レベル5の第二位をさせてもらってます。と言っておいてなんですが、ジャッジメントの仕事にレベルなんて関係ありません。必要なのは、自分達がこの学園都市の平和を守っているんだっていうその気持ちだと思います。現実にレベルの低い人や、能力が戦闘向きではない人もジャッジメントの第一線で活躍していますし、その人たちのおかげで僕たちも身体を張って仕事が出来ている、と僕は思ってます。つまり、何が言いたいかって言うと・・・」

・・・ヤベツ、自分でも何を言って良いのか分からなくなってきたぞ。

さいわい、前に座っている新任さんたちには気付かれてないみたいだけど、後ろで聞いている梓や奈津美にはバレバレだろうな・・・

後で何てからかわれるか・・・想像したくもない。

少々強引ではあるが、このまま締めに入ろうかと考えて言葉を紡ごうとした・・・その時。

「・・・何だ、あれは？」

何の脈絡もない突然の俺の言葉に、その場の全員の視線が一度俺に集まり、そして俺の視線の先へと移る。

俺、否、全員の目線の先には、真っ赤に燃える火の手とめくれ上がったコンクリート、そして複数の男たちが何やら叫んでいるのが聞こえてきた。

そして、その内の一人が手に火の玉を宿すと、めくれあがったコンクリートの陰に隠れている男にむかって投げつけた。

火の玉はコンクリートの壁をグルッと迂回して、隠れている男に背後からぶつかろうとする。

しかしその玉は、地面から突如現れた別のコンクリートの壁に防がれた。

・・・紛れもなく、それは能力者同士のバトルだった。

しかもどうやら、1対複数という攻撃を防いでいる男に圧倒的に不利な展開に見えた。

「・・・これはいい機会だ。ジャツジメントの仕事を、挨拶代わりに見せるとするか！！」

かったるい挨拶を、実際に仕事ぶりを見せることで回避する千載一遇のチャンスだ。

俺は我先にと、靴裏に反物質を展開・干渉させて一気に跳躍、フ
エンスを飛び越えて……

「遅いのです!!」

「あ、白井テメエ!!」

白井は既にレポートで男たちの背後をとっていた。

このままでは白井に美味しいところを全て持っていかれてしまう
ので、俺も急いでフエンスを飛び越え、白井と反対側、男たちを挟
むように着地する。(衝撃も反物質で緩衝した)

「おっと、全員そこまでだ!!」

「ああ!? 部外者がしゃしゃり出てくんじゃねえよ!!」

「(うげえ……) おいおいお前ら、俺たちをジャツジメントと知
つての狼藉じゃねえだろうな?」

「ジ、ジャツジメントだと!?!」

ようやく気付いたのか、一人の男が慌てた顔をする。

「今頃怖じ気づいても遅いのです!! 全員拘束ですの!!」

「チツ、邪魔が入りやがった…… こうなりやテメエらもまとめ
て灰にしてやるぜえ!!」

「抜かせ雑魚どもが！！ 良いだろう、お前ら全員、3分とかわからずに降参させてやるぜ！！ 行くぞ白井！！」

突然の舞台挨拶指名でちょっとストレスが溜まっていたので、ジャツジメントらしからぬ言葉を使っちゃまってるのが気にしない。

「3分だあ！？ ジャツジメント風情が粹がりやがって！！ これでも食らえや！！」

見事に挑発に乗ってくれた（半分は俺もキレて言ってしまった訳だが）一人が、両手に火の玉を宿すと俺にむかって投げつけてきた。

「『ジャツジメント風情』？ その言葉、ここの管轄が一七七支部って知って言ってるんだろっな？」

二つの火の玉はまっすぐ俺にむかって飛んできたが、俺の手前数十センチでフツと消え去る。

「な！？ き、消えただと！？」

「そんなちやちな攻撃じゃ俺には届かねえなあ？」

「な、なんだコイツ！？ 防御系の能力者か？」

「当たらずとも遠からずってところだな。それより・・・俺に気を取られ過ぎなんじゃないのか？」

「え・・・ゴフツ！？」

ドサッ！！

「明俊さんの言うとおりですわ。こちらが二人がかりで来たの忘れ
ましたの？ それにしても明俊さん、上手く相手を挑発しましたわ
ね、流石ですわ」

「あ、ああ、まあな。（半分ガチで言ってたなんて言えない・・・）
ま、白井一人でも十分だっただろうけど」

「白井・・・？ そうか、思い出したぞ！！ ジャツジメント一七
七支部。確か、最悪最強のテレポーターがいて、そのテレポーター
をとりこにした学園都市最強の発電系能力者^{レールガン}が出入りし、そしてそ
のレールガンを一蹴するレベル5の第二位、更にはその双子の妹の
第七位が所属するという、問題を起こしたら無事では済まないって
・・・」

「・・・最悪最強のテレポーターとは、誰のことですか？」

「そりやお前だけだろ、白井」

今日は見られなかったが、犯人（特にスキルアウト）を拘束する
ときによく心も身体もスタボロにするって話しだしな・・・確かに
最悪最強かもしれん。

「・・・まあ良いですわ。それより、コンクリートを盾にしていた
方は？」

「ん？ ああ、俺のすぐ後ろで腰抜かしてる。おい、大丈夫かー
？」

俺が肩に手をかけながら声をかけると、今までボーっとしていたがハツとして慌てて俺の顔を見、そして白井の顔を続けて見た。

「は、はい、大丈夫です。　そ、その・・・助けていただいで、ありがとうございます！」

「いえいえ。こちらとしても、あなたが攻撃に転じず防御に徹してもらって感謝してますよ。あなたが応戦していたら、こちらとしてはあなたも長時間拘束してお話を聞かなければならなかったのですし」

「実は、ここで今日ジャツジメントの就任式が行われるのは知ってたんです。だからこの人たちからまれたとき、ほんの数分耐えれば何とかなるなって思ってたんです。でもまさか、この支部の方たちがこんなに強いとは思わなくて・・・腰抜けちゃいました」

「懸命な判断でしたわ。あなたが被害者であることは近くの防犯カメラを確認すればすぐに明らかになることですし、アンチスキルのあなたへの取調べも大した時間はかからないと思いますわ」

「・・・と、噂をすれば、だ」

アンチスキルの車のサイレンの音が聞こえてきた。

校庭の方を見ると、初春が携帯で誰かと話しながらこちらに手を振っていた。

恐らくアンチスキルを呼んでくれたのは初春だろう。

アンチスキルさえ到着してしまえば、後の処理は全て彼らがやってくれるので、その辺を初春が気を利かせてくれたのだろう。

キツ！

車が止まり、中から数人のアンチスキルが手錠やらなんやらを持って降りてきた。

「通報ご苦労。後は我々に任せてくれ」

「了解しましたー（ですの）」

「ん。ああそうだ、君たちはこれから新任のジャッジメントの皆とどこか打ち上げとかで出かけるのかな？」

「いえ、支部の部屋でプチパーティーならやるつもりですけど・・・」

「ああ、それなら良いんだ。いや、ただこの近辺の防犯カメラの映像提供を後ほどしてもらうつもりだったからな。一応、君たちが支部にいる間にも思ってたな」

「それなら、しばらくは支部にいるつもりですから無問題ですわ」

「助かる。では後ほどメールをそちらのパソコンに送るから、返信に添付しておいてくれ」

「了解ですの。お勤め、ご苦労様ですの」

アンチスキルの方々は手際よく男達を車の中に押し込めると、最後に一礼して車を発進させた。

「いやー、それにしても二人ともかつこよかったですね!!」

ここは柵川中学内、ジャッジメント一七七支部の部屋。

想定外の事件を片付けた俺たちは、新任のジャッジメントたちとプチパーティー中である。

しかし嬉しいやら悲しいやら、話題は先ほどの騒動のことで持ちきりである。

「ホント、俺白井さんの流れるような攻撃にただただ見とれてましたよ!」

「褒めても何も出ませんわよ? それに、あなた方もすぐには言いませんが、いずれは外の警備に当たってもらおう予定ですし、今のうちに覚悟を決めておいたほうが良いですわよ?」

「ヤベツ、俺大丈夫かな・・・」

「おーい白井ー、あんまり新人いじめんなよー」

「明俊さん、これは別にいじめている訳ではありませんわよ？ 大丈夫ですわ、少なくとも、初春よりは皆さん実戦向きですわよ」

「ちよつと白井さん、地味に気にしてるんですからそういうことは言わないで下さいよー！」

・・・でもまあ確かに、白井の言うとおり初春は今回の新人たちより実戦ダメツぽそうだ。

「明俊さんもかつこよかったですよー！！」

その声に振り向くと、佐天が両手にジュースの入ったコップを持っていて片方を俺の方に差し出してきていた。

「お、サンキュー・・・でも、俺よく考えたら何もしてなかったよな？」

汚い言葉使つて相手挑発して、拳句美味しいところは全て白井に持っていかれたよなもんだったしな。

「そんなことないですよ！ 微動だにせず炎を防御したときのしてやっつたりの顔とかサイコーでしたよー！」

「そ、そうか？」

・・・これ、ほめられてるんだよな？

「それに、相手を挑発してるときの小馬鹿にしたようなニヤツとした顔！ 思わずドキツとしちゃいましたよ？」

顔を少し赤らめながら俺にだけ聞こえるかどうかという声でそう言ってきた佐天。

・・・何か今日の佐天、いつもと違くないか？

佐天ってこんなに女の子っぽくて可愛いキャラだったっけ？

ま、まさか・・・魔術師のしわざ！？・・・なんてな、上条さんじゃあるまいしそんなことはないだろう。

恐らく、今まで努力に努力を重ねてきて、晴れてジャッジメントになれたことでテンションが上がっているんだろう。

明日からまた学校が始まるし、今日はこのままのテンションでいさせてあげよう。

・・・ところが、俺のそんな思いやりは無情にも打ち崩されるのであった。

ビーツ！！ ビーツ！！

「な、なんだ？」

プチパーティーもこれから佳境に入ろうかというとき、支部の部屋に突如ブザーが鳴り響いた。

「これは・・・アンチスキルの広域非常無線ですよ！」

「広域非常無線？」

非常、と言うものだからそれなりに大きな事件でも起きたのだろう。

初春がいつも座っているパソコンの近くのスピーカーのボタンを押すと、ブザーが鳴り止んで代わりに無線が流れ始めた。

『アンチスキル司令部から各員へ。微生物応用研究所にて爆発が発生、現在炎上中である。現場付近、および現場近くの支部に所属するアンチスキル各員は活動中の消防隊と連携して直ちに現場周囲の道路を封鎖せよ。繰り返し、現在微生物応用研究所にて・・・』

「初春、その研究所の今の様子を見ませんか？」

「あ、はい。ちょっと待って下さい」

初春がキーボードをカタカタと打つと、パソコンの画面に燃え盛る建物の様子が映し出された。

「うっわー、これは中々すごい光景ですね・・・」

「ええ・・・死傷者が出なければ良いんですけど・・・」

その場で生で見ているのではないが、その火災の酷さは映像だけでも十分伝わってくる。

時折起きる爆発の衝撃が、モニター越しにこちらの身体を震わさんばかりである。

ビーツ！！ ビーツ！！

『アンチスキル司令部から各員へ続報。現在爆発・炎上中の微細物研究所には、詳細は不明であるが人体に影響を及ぼすウイルスが保存されていることが判明した。これより学園都市特別法により、アンチスキルの権限でコードイエローを発令する。現場の周囲は完全に封鎖し、各員はマスクを装着、完全防備で対処せよ。続いてジャッジメント諸君に告ぐ。コードイエロー発令に伴い、諸君らはその全ての活動を一時休止、各支部にて待機せよ』

「ウイルス・・・だと？」

「これはやっかいなことになりましたわね・・・」

「まだウィルスが爆発により周囲に拡散したかどうかは分かっていないので、情報待ちってところですね」

「せっかくのパーティーが興奮めになっちゃいましたね・・・」

俺たちの後ろからモニターを覗いていた佐天が残念そうに呟く。

「そうだな・・・ これ以上何も起きなければ良いけど・・・」

・・・まあ、薄々分かっていたことではあるが、この学園都市で「何も起きない」なんてことは無い訳で・・・

この爆発が、学園都市全体を巻き込んで展開する大事件の序章なのであった・・・

第34話 嵐の前の・・・嵐（後書き）

さて、ようやく序章です（汗

現在は、書いているときよりもオリジナルストーリーを考えている
ときの方が楽しかったりしますw

アイテムや垣根は出すと既に公言していますが、近頃は魔術サイド
にも少し手を伸ばしてみようか・・・なんて考えてたりもしてますw

まあまだ構想の段階なので実際に書くかどうかは分かりませんが、
まだまだ続くことは確かです。

第35話 交渉

微生物応用研究所の爆発の一報が入ってから約二時間が経過した。

待機命令が下っているために身動きの取れない明俊たちジャツジメントは、支部のパソコンから現地の映像を見る他ないという状況である。

「かれこれ二時間・・・火の勢いはほとんど収まってきたとはいえ、まだまだ予断を許さない状況のようですね」

「そうですね・・・でも、何で爆発なんて起こったんでしょね？」

初春が、アンチスキルの通信記録をチェックしながらそう疑問を呈した。

「俺もそれを考えていたところだ。人体に影響を与えるかもしれないウイルスを扱っている研究所なら、何かしらの対策が施されていてしかるべきのはず。少なくとも、火災が起こってガスに引火しましたなんて、そんなヤワなことは起きないはずだ。構造上、あるいはガス管自体に対策がされているはずだ。まして学園都市だ、技術的にも十分対策可能なはず」

明俊がイスに座ってコーヒーを飲みながら、真剣な顔付きで新人ジャツジメントを見てそう言った。

「そうね。だとすれば、この爆発は何なのかしら？」

梓が奈津美を膝の上に乗せてイスに座りながら、こちらも真剣な顔で疑問を口にする。（奈津美は「降ろして！」と言いなながら梓の上でジタバタしている）

「単なるガス爆発などではないとすると・・・考えられるのは、爆発性のある薬品が何か引火した、といったところですね」

「あるいは、人為的に爆弾が何かで攻撃されたか・・・」

その言葉に、その場の全員の顔が一斉に明俊の方を向く。

「テロ・・・ということですか？」

「そうかもしれないってだけの話だ。他にもいくらでも可能性はある。ま、アンチスキルの現場検証が行われれば分かることさ」

明俊はそう言ってもう一口コーヒを飲むと、「ちょっとトイレ行ってくる」と支部の部屋から出ようとする。

とその時、

「・・・？ 何でしょう今は・・・？」

モニターで爆発現場の周辺の様子を見ていた初春が、一つの定点カメラの映像を突如巻き戻し始めた。

「どうかしたんですの？」

「ええ、何か一瞬だけ人影がよぎったような気がして……」

「一瞬？」

トイレに行くはずだった明俊も、いつの間にかモニターの前に戻ってきた。

「はい。確かに人間だったと思うんですけど……あまりにも一瞬で消えてしまったので」

初春はそう言いながら、手馴れた手つきでそのカメラの部分の映像を巻き戻し、再生する。

少しすると、確かに初春の言うとおり、一瞬だけ人影……のよなものがアンチスキルのバリケードの上を飛んでいくのが映っていた。

「……確かにいたな。テレポーターか？」

明俊がそう言うと、テレポーターの専門である白井が即座に否定する。

「それはありませんわ。テレポーターなら、そもそも映像にすら映らないはず。恐らく、高速でバリケードの上を跳躍していったんですわ。あまりの速さにアンチスキルも気付かなかったんですわね……」

「スロー再生してみますね」

初春がカタカタをキーボードを叩くと、先ほどまでリピート再生されていた映像がスローで再生される。

「・・・このカメラの位置では顔は見えませんか。おまけにスピードが速くてスローだとブレちゃいますね。男の人っぽい・・・ということは分かりますが」

「他の定点カメラは無いんですの？」

「あの辺一带はカメラの台数が少ない地域で、これしか映ってないみたいなんです」

「そうですね・・・でもずいぶん特徴的な殿方ですわね。こんなに動けるのだから若いはずなのに髪の毛が真っ白ですわ。・・・？明俊さん、どうかしたんですの？」

白井がふと横を見ると、モニターの停止しているその映像を食い入る様に見つめていた。

「この男・・・まさか？」

明俊は白井の質問を半ば無視した形でそう呟くと、突然部屋の入り口へと急ぐ。

「お兄ちゃん、あの人ってまさか・・・？」

「ああ、今日は8月31日だ。十中八九、アイツだろう」

入り口のドアに手をかけた明俊に、梓が悟ったように声をかけた。

「待つて。私たちの知っている話では、この後彼は彼女を単身救いに行くのよね？」

いつの間にか明俊と梓に近付いていた奈津美も小声で会話に加わる。

「ああ、多分な」

「なら、あなたが行ってはいけないんじゃない？」

「あのイベントの邪魔をするつもりはねえよ。が・・・、その後はちよつと危険かもしれない」

「どういこと？」

梓が分からないという風に言うと、明俊は奈津美にも聞こえるようにしゃがんで説明を始める。

「アイツがアンチスキルのバリケードを飛び越えていつて、しかも他の場所から出た気配が無いということは、だ・・・あのイベントは今封鎖されている区画で起きる可能性があるってことだ」

「うん。それで？」

「頭に損傷を受けたら当然、反射は適用されなくなる。今現場近くで有害なウイルスが拡散しているかはまだ分からないが、もし仮にウイルスが拡散していると仮定すると・・・」

「そのウイルスが人体にどんな影響を与えるかは分からないけど、

とにかく感染は間違いないわね。それ以前に、打ち止めの方が危険かもしれない」

「ああ。それを防ぐためにも、俺は行かないと」

「待つて、お兄ちゃんも感染しちゃうかもしれないわ」

梓のその言葉に、明俊はフツと笑う。

「おいおい、俺の能力を忘れてもらっちゃ困るぜ梓」

そう言って、明俊が支部の部屋を出ようとしたその時、

「待つて、私も行くわ」

奈津美が、椅子に乗って事務机の上からハサミを掴みながらそう言った。

「……え？」

「奈津美、一体何を言って……」

「聞こえなかったの？ 私も行くって言ったのよ」

「いや、聞こえてるけど……ってそうじゃなくてだな。さっきも言ったけどウイルスがばらまかれてる可能性があるんだぞ？ そんな所に子供の姿の奈津美を連れていく訳には……」

「あら、あなたの能力ならどうとでもなるんでしょ？」

「・・・確かにそうは言ったけどよ。でもなあ、また奈津美を背負って行くのは骨が折れるし、移動速度も遅くなるし・・・」

「心配ご無用よ。そこまで迷惑をかけたたりしないわ」

奈津美はそう言ってニコツと笑うと、初春の座っているところまで行ってモニターを見、「爆発で封鎖されているのはあそこで、今私たちがいるのは・・・」などとブツブツ独り言を言い始める。

その様子に明俊や梓のみならず、白井や初春も思わずポカンとした表情をする。

モニターからひとしきり情報を得た奈津美は初春のそばを離れると、今度は白井に駆け寄り、

「ねえ白井さん、ちょっとしゃがんでくれる？」

「え？ ええ、良いですけど・・・」

今までの様子から一転した奈津美の言動に戸惑いながら、白井は言われた通り奈津美のそばでしゃがむ。

奈津美はしゃがんだ白井のツイントールの髪の毛を掴むと、その外側の一本を選んでさみを入れた。

チヨキッ

「ごめんなさい白井さん、せつかくの綺麗な髪の水にはさみを入れてしまつて」

「いえ、それは良いのですが・・・ 一体何のために切つたんですの？」

「後で説明するわ」

奈津美はそう言つてはさみを机の上に戻すと、今度は厚紙に切つた白井の髪の水を置くとセロハンテープで留め、裏に「白井黒子、レベル4、テレポーター」とメモをした。

「奈津美？」

明俊の疑問の声に何も答えず、奈津美はポケットからプラスチックのケースを取り出すと、中から風邪薬などの錠剤より一回り小さな白い粒を一つ取り出し口に入れた。

奈津美はそれを目を閉じながら口の中で転がしてから飲み込むと、スツと目を開く。

その目には、閉じる前と違って不思議な光が宿つたように明俊には見えた。

「さ、行きましようか」

奈津美は先ほどの白井の髪の水を貼り付けた厚紙を右手に持ち、左手で明俊の手を掴んだ。

「お、おい、行かつて・・・」

ヒュン！

刹那、明俊と奈津美は支部の部屋から姿を消した。

「……あれ！？ 二人は！？」

梓が驚いて辺りを見渡すが、支部に二人の姿は無い。

「消え……ちゃいましたね」

「……レポート、それも、他人と共に自身も転移した……梓さん、あの奈津美という子はわたくしと同じテレポーターでしたの？」

その質問に梓は一瞬迷った。

確かに奈津美は自らのことを能力者だと言ったが、何の能力かは教えてもらえなかった。

「そつだ」とも嘘はつけるが、テレポーターは元々数が少ない貴重な存在、そんな嘘をついてもすぐにバレる。

「（とりあえずここは、知らないということにしておこう……）
実は、私も奈津美が何の能力者なのか今の今まで知らなかったの」

「そうですよ……でも、今は間違いなくテレポート、しかもレベル4以上ですわね。あの子、かなりの素質の持ち主と見て間違いないですわよ?」

「……」

白井はそう言ったが、梓には奈津美がテレポーターだとは思えなかった。

もし彼女が本当にテレポーターなら、何故見せることを断ったのだろうか?

それに彼女は言った、「呪われた能力」だと。

「(でも、現実にお兄ちゃんを連れて私たちの目の前から消えたのは事実。奈津美の能力って一体……)」

梓は、幼なじみの不思議な力について思いを巡らすのであった。

爆発騒ぎでひっそりとした路地に、二人組みの男女が突如姿を現した。

男女・・・といっても、女の方は小さな子供でありカップルなどではない。

どちらかと言うと兄妹か。

そう、工藤明俊と宮野奈津美（子供ver）である。

「・・・？ あれ？ ついさっきまで支部にいたよな？ テレポート？」

「ええ、私が飛ばしたの」

「奈津美が？ じゃあ奈津美の能力は転移系・・・」

「今はその話は後よ。それより、ここは封鎖区画のすぐ近くよ。あそこにアンチスキルのバリケードが見えるでしょ？」

明俊が塀の影からそっと覗くと、確かにアンチスキルが車をバリケードにして道を封鎖していた。

「ああ・・・ 一方通行と打ち止めが心配だ。早くテレポートしてあの奥に行こう」

「待って。ここはアンチスキルの人たちに協力してもらった方が良いかもしれないわ」

「どづいつことだ？」

「一方通行や打ち止めを助けるには救急車を呼ぶ必要があるわ。でも、今救急車が入ってくるべき区画は封鎖されてしまっている。中で消防隊がまだ活動中なら、その消防隊と協力体制をとっているアンチスキルに言っておいた方が何かと楽でしょ？」

「それもそうだな。だけど、今ジャツジメントは待機命令を受けて待機中ってことになってる。どうやって中に救急車を入れてもらう口実を作るんだ？ ジャツジメントっていう立場は使えないし・・・」

「確かに、私じゃなくて白井さんだったらここまででは速く来れてもこの先ドタドタしてたでしょうね。でも、子供の姿をした私が一緒ならどうとでもなるわ」

「・・・オツケー。じゃあ、子供の奈津美を存分に利用させてもらうぞ？」

「ええ。最初からそのつもりだったし。じゃあ明俊、行きましょう」

そう言うや否や、奈津美はアンチスキルの元へとダッシュを開始した。

「お、おい、ちょっと待ってっ！」

明俊は慌てて奈津美の後を追う。

奈津美を呼び止める明俊の声に、アンチスキルの二人組が振り向いた。

「（あれ？ あのアンチスキル、どこかで見たことあるような・・・）」

明俊がそんなことを考えながら奈津美の元へたどり着くと、奈津美は既に交渉を開始していた。

「だから！ この先に私の友達がいるから入れてよ！！」

「そうは言われても・・・この先は危険だから入れる訳にはいかな
いじゃん」

「ゴメンね。そのお友達は私たちが必ず助けるから、そこのお兄ちゃんと一緒に・・・あら？」

奈津美を説得していたアンチスキルの片方が顔を上げて明俊のこ
とを見て、驚きの声をあげた。

「えっ！？ さ、桜川先生！？」

「あら、明俊君じゃない」

「桜川先生、知り合いじゃん？」

「え、ええ。なにしろ、私のクラス担任の生徒ですから」

そう、明俊たちが話しかけたアンチスキルの片方は、明俊と梓の
クラス担任である桜川みゆきであった。

「（何てこった・・・よりによって俺の知っている人が交渉相手に

なるとは。しかも、もう片方が黄泉川さんとは……」

桜川と一緒にいたもう一人のアンチスキル、それは黄泉川愛穂よみかわあいほであつた。

上条当麻の通う高校の体育教師で巨乳。

レベル3程度なら暴走能力者相手でも武器を使わずに捕縛する、という「シリアスをコミカルに始末する女」。

「それで明俊君。この子は……妹さん？ でも確か、兄弟は双子の妹の梓さんしかいなかったように記憶してるんだけど……」

「あ、はい。この子は僕の親戚の子供で、友達と一緒に遊んでいたんですが……その友達の家がこの区画の中にあるんですよ。それで、この子が心配して……」

「お願い！！ 入れて！！」

奈津美の「友達」という言葉から即興で嘘話を作つて、何とかこの中に入れてもらえないか頼み込んでみる。

しかし、相手は子供の安全を守る立場のアンチスキル、そう簡単に聞き入れてはもらえない。

「くそ……やはり手強いな。特に黄泉川さんはほとんど説得不可能に近いな。ここは桜川先生に集中して何とかするしかない」

そう考えた明俊は、桜川の耳元でささやいた。

「（桜川先生、ちょっと良いですか？）」「

「（何かしら？）」「

「（どうしても、中に入れてもらえないでしょうか？）」「

「（そうは言われてもね・・・）」「

「（お願いします。ジャツジメントだから、とか、レベル5だから、っていう立場をひけらかす訳じゃないですけど・・・このレベル5の僕からのお願いです）」「

明俊は心底苦々しい顔をして頭を下げた。

明俊は確かにレベル5の第二位であるが、その身分や立場をダシに相手と交渉するのは本意ではなく、むしろ嫌悪感すら抱いている。

その明俊が、わざわざ自らの立場を使ってまで交渉している、という事実が桜川の理解を得る一つの方法だと明俊は考えたのである。

そんな明俊を黙って見つめていた桜川は、ため息を一つ吐いて明俊に話しかけた。

「（あなたたちがどうしても中に入りたいということは分かったわ。じゃあ、一つだけ良いかしら？）」「

「（何ですか？）」「

「（あなたたちがさっき言っていた『友達がこの奥に住んでいる』」

つていう話、あれ嘘でしょ？」

「(なっ!?) いや、それは……)」

明俊が桜川の思わぬ発言に動揺を隠せないでいると、桜川はクスクス笑って、

「(大人を騙そうだななんて10年早いわよ? だって、この奥の区画は研究所がほとんどで、一般住宅はほとんど無いんですもの)」

「(……流石は先生、誤魔化せませんか)」

「(当たり前よ。でも……力のあるあなたがそんな嘘をついてまですりたいて言うことは、何かこの先にあるのね? それも、とても重要なものが)」

「(そこまでお見通しでしたか……)」

「(まあね。出来れば通してあげたいけど……残念ながら、ここを私たちの許可で通すことだけは出来ないのよ。『他のことなら』どんなことでもしてあげられるんだけど)」

そう言つと、桜川が意味ありげな笑みを浮かべる。

明俊は、桜川が強調した部分の言葉の意味を考えるとニヤツとした。

「(何だかんだで、先生もワルじゃないですか)」

「あら、そんなこと言っていると協力しないわよ？　じゃあ、入るアテはあるのね？」

「ええ。それでお願いなんですけど、救急車を二台、この中に通して頂きたいんです」

「救急車？　．．．まったく、どんな厄介事に首突っ込もうとしてるわけ？」

「ごめんなさい、不真面目な生徒で」

「．．．まあ良いわ、私の自慢の生徒だしね。分かったわ、救急車を二台、消防隊からの要請って形で呼んでおくわ」

「ありがとうございます、先生．．．では、時間が惜しいのでそろそろ行きますね」

「待って。何が起きているのかは知らないけど、事件が起きるのなら多分ここよ」

そう言うと桜川は、ポケットから携帯を取り出して電子地図を起動させる。

「今私たちがいるのはここ。この一帯をぐるっと取り囲んでいる緑のラインがアンチスキルの定めた立ち入り禁止の境目よ。そして、囲まれた地域の中で赤く着色されている部分が消防隊のいるところよ」

「．．．ここだけ、赤くなっていないところがありますね」

「（気付いた？ そう、ここだけ消防隊がほとんど立ち入っていないところなの。もし何か起こるのなら、十中八九この辺りよ）」

「（分かりました。教えて下さってありがとうございます）」

「（じゃあ、救急車もここに行くよう言っておいてあげるわ）」

「（何てお礼を言って良いのか・・・ 大覇星祭で活躍して返すっていうのじゃダメですかね？）」

「（ふふ、期待してるわ。一つだけ、命を危険にさらすようなことだけはしないでね）」

「（大丈夫です、人助けですから）・・・おい奈津美、仕方ない、行くぞ」

「え、でも・・・」

明俊と桜川の話をもったく聞いていなかった奈津美は、明俊が諦めたのかと勘違いをして戸惑いの声をあげる。

「『大丈夫だから』。行くぞ」

明俊の妙に強調した『大丈夫だから』という言葉聞いて、奈津美は明俊が言わんとしていることを理解した。

「・・・うん、分かった」

「良い子だ。じゃあ桜川先生、行きますね。お仕事頑張ってください」

「ええ。じゃあ明日、学校でね」

桜川・黄泉川と別れた明俊と奈津美は、路地を曲がって二人から姿が見えなくなるとお互いにニヤツと笑った。

「やるじゃない明俊。私なんていらない交渉だったようね」

「いや、奈津美が黄泉川さんを引き付けてくれたから、桜川先生に集中して話をつけることが出来たよ。もっとも、友達の話は嘘ってばれてたけどな」

「まあ、あんな見え透いた嘘なんて恐らく黄泉川さんにもばれてただろうけどね。それはともかく、早く行きましょ」

「ああ、一方通行と打ち止めを助けるぞ」

奈津美が明俊の腕をつかむと、再びテレポートして消えた。

第35話 交渉（後書き）

次回、奈津美の能力について明らかになります。

第36話 呪われた能力

ヒュン！

封鎖されて誰もいない区域の道路に、明俊と奈津美はテレポートで降り立った。

「ここが桜川先生の言っていた、消防隊の出入りしていない地域か・・・どこかに天井の車があるはずだ。探すぞ奈津美・・・って奈津美！？ どうした!？」

テレポートしたときに奈津美に掴まれていた腕に、下に引つ張られる感触を覚えた明俊が横を見ると、奈津美が汗を大量に流しながらひざまずいていた。

「はぁ・・・はぁ・・・」、「ごめんなさい。最近能力をほとんど使っていないかったから、久々でちよつと・・・」

「テレポートって複雑な演算なんだろう？ 無理させちまったか？」

「だ、大丈夫よ・・・ それより、早く一方通行たちを探しましよ
う」

「あ、ああ。それじゃあ、俺が背負ってやるよ」

「大丈夫・・・って言いたいところだけど、ちよつとキツイわね・・・」

奈津美は弱々しく笑って汗を拭う。

「遠慮すんなよ。ここまで連れてきてくれたのは奈津美だ。これくらいお安いもんだ」

そう言って笑いながら、明俊は奈津美を背負った。

「でも、どの辺にいるのかしら・・・？」

「分からんが、早く探し出すしか・・・」

明俊がそう言って、手当たり次第に探そうと歩き出したその時、

ドサッ！！

何かが地面に落ちる・・・いや、倒れる音が辺り一面に響き渡った。

「明俊、まさか今の・・・」

「ああ、行ってみよう」

明俊は奈津美を背負ったまま、音のした方へと走る。

そして、裏路地を通り抜けた二人の視界に飛び込んで来たのは、一台の車と地面に倒れ伏す3人の人間だった。

3人の周囲には、それぞれ血だまりが広がっていた。

一人は白衣を着た男で、もう一人は同じく白衣だが女性で、残りの一人は髪の毛が真っ白な男であった。

「一方通行ッ！！」

明俊は奈津美を地面に降ろすと、白髪の男・・・一方通行に駆け寄った。

「うわっ、こりゃ・・・すごいな」

あまりの状態の酷さに、明俊は一瞬顔をしかめた。

それも当然で、一方通行は額に銃弾を受けているからだ。

後コンマ1秒でも反射の適用が遅かったら、完全に頭を撃ち抜かれていただろう。

「奈津美、天井と芳川さんはどうだ？」

「こっちもお互い腹部を撃たれてるけど、すぐに病院に運べば大丈夫よ」

「そうか・・・っと、桜川先生から電話だ。もしもし？」

『私よ。今、救急車を二台通したわ。役に立ちそうかしら？』

「あ、はい。残念ながら」

『・・・まあ、教師として不謹慎かもしれないけど、あなたたちが無事で良かったわ。もしあなたたちも怪我しちゃったりしたら、私どうしようかと思ったわ』

「僕がいてそうそう簡単にやられたりはしませんよ。それに、どちらかと言うと事後処理と言うか経過観察ってやつで、僕たちはほとんど何もしてない・・・」

「明俊！ちよつとこれ見て！！」

突然、奈津美が大声で明俊を呼ぶ声が飛んできた。

「・・・という訳で、切りますね？」

ピッ！

明俊は携帯をしまうと、車の反対側、ちょうど打ち止めがいる助手席の所にいた奈津美の元へ駆け寄る。

「どうした、奈津美？」

「かなりマズイことになってるわよ・・・ これを見て」

奈津美が指差した先には、打ち止めと接続されている天井のノートパソコンがあった。

そこには、天井が仕掛けたウイルスの残存数が映し出されていて、一方通行が能力を使って除去した今、その数字は0となって・・・

「お、おい！ウイルスの数が、0でないだけじゃなくてドンドン増えてるじゃねえか!？」

「ええ・・・ まさか、こんなところで原作から外れた展開になるなんて・・・」

「一方通行の除去が間に合わなかったのか!？」

「それはないわ！ 私が最初に見たときは、ちゃんと0って表示されていたもの!」

「じゃあどうして・・・ まさか、天井が用意周到に予備のウイルスを設定していたんじゃ・・・?」

「そうかもしれないわね」

「くそっ!! どうすりゃ良いんだ！ ウイルスを消去出来る一方通行は、今はもう能力は使えないし・・・ 消去？ そうか、俺の能力を使って・・・!」

「ダメよ!! その方法を使うには、ミサカネットワークの構造を演算式に組み込む必要があるわ。でも、それが記されていた端末は一方通行が既に壊してしまっている。それを無視してミサカネットワークに干渉すれば、打ち止めや他の個体に影響が出るかもしれないわ!!」

「じゃあどうするんだ！？ このままじゃ、どのみちウイルスによって打ち止めや妹達は破壊されちまうぞー!!」

「・・・私がやるわ」

「えっ？」

「私が能力を使って、一方通行のかわりにウイルスを消去するわ」

「何を・・・ 第一、奈津美の能力はテレポート・・・」

「詳しい話は後でするわ!! 明俊は、これを一方通行の出来るだけ頭に近いところにつなげて!!」

そう言って奈津美が取り出したのは、心電図を撮るときに使うような、吸盤のついたコードであった。

明俊はコードの片方を掴むと、奈津美に言われたとおり一方通行の頬に吸盤を押し当てた。

本当は額につなげたかったのだが、一方通行の額は撃たれたことで血まみれになっていたので避けたのである。

「つなげた!？」

「ああ、額が無理だったから頬だけど大丈夫か!？」

「問題無いわ!! 今から演算に入るけど、超が付くほどの精密作業だから話しかけないで!!」

「分かった！！ 任せたぜ奈津美！！」

明俊の言葉に奈津美は真剣な顔付きでうなずくと、ポケットから白い粒の入ったケースを取り出すと一粒口の中に入れ、コードのもう片方を握った。

そして、コードを握っていない方の手を打ち止めの額に当てると目を閉じた。

「・・・演算開始。一方通行の脳波とDNAパターンを記憶。対象の記憶からミサカネットワークの構造式をコピー、続いて能力の演算式をコピー・・・完了。これより構造式と演算式を用い、ウイルスの除去を開始」

そう言うと、奈津美は黙って打ち止めの額に手を当てるだけの状態となった。

明俊は、先ほどから周囲に展開し続けているドーム状の反物質フィルター（通常の空気に含まれている物質以外　つまり拡散しているかもしれないウイルス　を選択的に消去するよう設定している）を維持し続けながら、奈津美のことをジッと見守っていた。

カンッ！！

「ッ!？」

自分達以外誰もいないはずの路地で、缶を蹴り飛ばす音が聞こえてきて明俊の顔が険しくなった。

「(救急車はまだ来ていない。消防隊も、爆発から遠いこの辺にはほとんど来ないはず・・・消防隊の可能性も0ではないが・・・)」

明俊は琴美からもらった拳銃を取り出すと、青の印のついた弾倉^{マガジン}を装填する。

「(一般人だろうか・・・? だとすると避難を促さない)」

明俊は音のした方向をジッと見つめる。

すると、細い路地から一人の男が姿を現した。

「(消防隊やアンチスキルではない・・・ 研究員だろうか?)」

容姿では誰なのか判断がつかかねるので、明俊は声をかけることにした。

「すみませーん、ジャツジメントの者ですが、ここは立ち入り禁止区域に指定されているので避難をお願いします」

明俊の声に男が振り向いた・・・が、反応が返ってこない。

それどころか、立ち止まる様子も見せず明俊たちの方へとユラユラと歩いてくる。

「（何だ、この人・・・ 普通の様子じゃない）」

普通の人間が、こんなふうユラユラと足取り危うく歩いてくるなんてことは、酔っぱらい以外はありえない。

しかも見る限りでは、お酒に酔っているというわけでもない。

明俊は、使わないことを願いつつ拳銃を握るともう一度声をかける。

「ここは立ち入り禁止ですので、避難をお願いします」

すると、今度は男が立ち止まった。

やっと通じたか、と安心する明俊だったが、その幻想は無残にもすぐに打ち碎かれることになる。

「・・・、・・・、・・・す」

「え？」

男が何か声を発したようだが、聞こえなかった明俊は思わず聞き返す。

「・・・、・・・ろ、す」

相変わらず何を言っているのか分からないが、明俊は嫌な予感がした。

すると男は、ゆっくりとした動作で右手を広げると、手のひらに火の玉を宿した。

「……ご、ろ、……す」

「ッ!？」

明俊がようやく男の言ったことを聞き取ることができた直後、男は狂ったような歪んだ笑顔を見せると明俊にむかって炎を投げつけた。

炎自体は明俊が展開していた反物質フィルターに当たって消滅したが、歩いてきた男がいきなり殺そうとしてきたこと、その事実だけで十分明俊を恐怖させることができた。

「(言っちゃ悪いが……この男、狂ってる……!)」

明俊は銃を構えると、一応最終確認をとる。

「動くな!！」

しかし、明俊の制止を男は無視し、その歩みも止めようとしない。

このままでは反物質のフィルターに触れてしまう。

もちろんドームを小さくすれば良いのであるが、それでは明俊から少し離れたところで倒れている天井や芳川が範囲外へと出てしま

う。

「（それなら・・・この人には悪いが黙らせる！）」

明俊は照準を、心臓や頭から遠い足に合わせると引き金を引いた。

パスッ！

弾ではなく針を発射した銃からはほとんど発射音はしなかったが、直後、バチッ！と音がして男は地面に倒れた。

明俊は、銃を使うために一瞬解除したフィルターをすぐに展開し直すと奈津美の方を見る。

今の騒ぎに気付いていない、ということはないだろうが、それは目もくれず演算を続けていた。

「（普通なら完全に気を取られる今の騒ぎでも微動だにしない驚異の集中力・・・何より『一方通行の代わり』、奈津美の能力は一体？ それに・・・）」

明俊は奈津美から視線を外すと、先ほど襲ってきた男を見る。

「（この男のさっきの顔は何だ？ 薬物中毒者か？だとすると末期的状態だな。明らかに『殺す』と言っていたし精神錯乱状態だったのか）」

・・・とそこへ、明俊の思考を中断させるように救急車のサイレンが聞こえてきた。

それと同時に、今まで一心不乱に演算を続けていた奈津美の口から大きなため息が漏れた。

「奈津美！ ウイルスはどうなった!?」

「だ、大丈夫・・・ちゃんと消去したわ・・・」

奈津美は弱々しく微笑むと、震える手で打ち止めとパソコンをつないでいるケーブルを打ち止めから外した。

「お、おい、大丈夫か？顔真っ青だぞ？」

明俊の言葉に奈津美は返事をしようと口を開いた・・・が、言葉を紡ぎ出す前にその口は閉ざされ、奈津美は気を失ってしまった。

「お、おい!? 奈津美!?」

明俊が身体を揺さぶるが、奈津美の意識は戻らない。

明俊は仕方なく奈津美を地面に横たえると、展開している反物質を解除して向かってくる救急車の方へと視線を向けた。

救急車は縦列駐車すると、救急隊員が降りてくる。

「アンチスキルから通報を受けてきました！！ 要救護者は何名ですか？」

「ご苦勞様です。要救護者は最初は4人・・・だったんですが、諸事情で6人に増えてしまいました」

「了解しました。大丈夫です、爆発現場近くからの通報という事で大型搬送用の救急車で来ましたので。それで、救護者の容態は？」

「一人は頭部に銃撃を受けて重傷、二人は腹部に銃弾を受けて重傷です。残りの3人は外傷はありませんが全員気絶しています」

「分かりました。おい、重傷者を二手に分けるぞ。頭部負傷者と女の子二人を1台の車に、腹部負傷者二名と男性をもう1台だ」

「了解！！」

リーダー格の救急隊員の言葉を受けて、他の隊員が手際よく活動を開始する。

「あなたはどうぞされますか？ 同伴も可能ですが・・・」

「では、奈津美・・・いえ、女の子のいるほうで行きます。・・・

あと、一ついいですか？」

「はい、何でしょう？」

「あの・・・外傷の無い男性なんですけど、もしかしたら薬物中毒者かもしれないので一応報告しておこうかと」

「薬物……ですか？」

「ええ。実は僕、その男の人に襲われまして……僕はジャッジメントの訓練を受けていたのでどうにかやり過ごしたんですけど……」

「では、彼が気絶しているのはあなたの……？」

「あ、はい。身の危険を感じたので…… とりあえず、報告しておきますね」

「分かりました。搬送先の病院にはそのようにあらかじめ伝えておきます。では、行きましようか？」

「はい、お願いします」

明俊は奈津美と打ち止め、そして一方通行の担ぎこまれた救急車に乗り込んだ。

二台の救急車は、けたたましいサイレンを鳴らしながら学園都市を走った。

目的地は、カエル顔の医者がいる病院である。

「お兄ちゃん!!」

奈津美や打ち止めたちが搬送されてきた病院の、とある一室の前で立っていた明俊の耳に、梓の小走りに走る音が聞こえてきた。

「奈津美の様子は!?!」

「多分能力の使いすぎだろうが・・・ 気絶して、今はカエル顔の医者が診てる」

「そう・・・」

「それで、爆発の件はどうなった?」

「あ、うん。結局進展らしき進展は無かったの。それで、ウイルスの拡散も今のところ確認できないし感染の症状を出してるって報告も無いから、アンチスキルが24時間体制で封鎖・監視するってことでとりあえずは解散ってことになったの」

「そうか・・・」

しかし、明俊には不安要素があった。

あの、炎の能力で突如襲ってきた男のことである。

「あの狂ったような顔・・・薬物でラリったような感じだったが、もしあれが薬物なんかじゃなくて別の何か・・・例えば研究所に保管されていたかもしれないウイルスが原因だとしたら？」

もしそうなら、ウイルスの感染は既に始まっていることになる。

ならば、最悪の場合この学生の集まる学園都市で恐怖のバイオハザードが発生したことになる。

そうだったら被害は尋常ではない。

ガラッ

「あ、奈津美の診察終わったみたいね」

そんな明俊のシミュレーションは、病室から出てきたカエル顔の医者の手招きによって中断させられた。

「ちょっと、来て欲しいんだね？」

明俊と梓は、カエル顔の医者に続いて奈津美の病室へと入る。

ドアを閉めると、そこには明俊・梓・カエル顔の医者、そして腕に点滴をしている奈津美の4人だけとなる。

「先生、奈津美は大丈夫でしょうか？」

明俊が尋ねると、カエル顔の医者は「その事なんだけどね・・・」
と言って、真剣な顔付きで明俊と梓の方を見る。

「この子、いや、彼女と呼んだ方が良い年頃だろうけど、彼女の能力について、本人から何か聞いているのかな？」

「いえ、直接は何も・・・」

「そうか・・・」

そう言っただけカエル顔の医者　顔付きは既に冥土帰し（へヴンキヤンセラー）になっている　は、白衣のポケットから小さなプラスチックのケースを取り出した。

「これは何だと思う？」

「・・・確か、支部からレポートする前に口にしてたよね？錠剤を一回り小さくした白い粒だったみたいけど」

「ああ。そして、打ち止めのウイルスを消去する前にも一粒飲んでいた」

「これはコンビニなんか売っている、噛めばスーッとするようなお菓子なんかじゃない。・・・君たちは『体晶』って知ってるかな？」

「『体晶だ』（ですって）！？」

冥土帰しの思わぬ発言に、明俊と梓はそこが病院だということを

忘れて大声を出してしまった。

『たいしょう体晶』、能力体結晶ともいうが、意図的に拒絶状態を起こして能力を暴走状態にする薬品である。

暴走能力者の脳内では、通常とは異なる神経伝達物質や様々なホルモンが異常分泌されていて、それらを採用・凝縮・精製したものが体晶である。

服用すると暴走状態となり、普段とは異なって圧倒的な火力を手に入れることができるが、大抵の能力者には適性が無くすぐに拒絶反応が出てしまうというものである・・・が。

ごく稀に暴走状態の方が良い結果となることがある。

その一例が、以前明俊や梓が会ったたきつぼりこう麦野沈利がリーダーを務める暗部組織「アイテム」の一人、たきつぼりこう滝壺理后である。

彼女はレベル4の能力者であるが、能力の使用には体晶が欠かせない。

だが欠かせないとはいえ使用者への負担はかなり大きく、使い続けると使用者は『崩壊』してしまう・・・という、学園都市暗部にあっても『禁忌』とされる物である。

「ふむ、どうやら知っているみたいだね？　これは体晶を高度に凝縮したものだ」

「待って下さい。僕たちの知っている体晶というのは、色こそ白で

すが粉末状なんですが・・・」

「彼女の能力では、残念ながら粉末程度の凝縮率では1度の能力の使用でこのケース1個分を必要とする。だから、元々凝縮されている粉末をさらに凝縮して粒状にしている・・・と僕は推測している。彼女が起きれば何もかも分かることなんだけどね」

「待つてください先生。そこまで大量に体晶を必要とする奈津美の能力って・・・一体どんなものなんですか？」

梓が冥土帰しに一步詰め寄ると、冥土帰しはポケットにケースをしまつて窓際へと歩く。

二人からは直接彼の顔は見えなかったが、窓ガラスに反射して映った顔からは何とも言えない表情が読み取れた。

「・・・その前に、君たちと彼女は昔からの深い関係なのかな？ ああ、彼女の今の姿がかりそめの姿だということは分かってるよ」

「・・・はい、幼なじみつてやつです」

「そうか・・・それは難儀だな。よりによって、幼なじみつて人にこんな能力を授けるなんて、神様つてのがいるならその神様はかなりの意地悪な存在だ」

「・・・そういえば、奈津美が言っていました、『呪われた能力』だと」

「呪われた能力・・・そうだね、確かに呪われてるかもしれないね。何しろ彼女の能力は、いまや一方通行並みに研究価値があるって裏

の世界では有名だからね」

「それって一体……」

「もちろん知っているだろうけど、『デュアルスキル多重能力者』って何かはオケーかな？」

「ええ。二つ以上の能力を持つ能力者のことですよね……まさか……!？」

「いや、彼女は多重能力者ではない。似て非なるまったく別の能力だ。ただ、ある意味では多重能力者に最も近い存在であることは間違いない。彼女の能力……今のところ固有名称は付いていないが、それは触れた人間のDNAや脳波パターンを読み取り、その触れた対象のAIM拡散力場など能力を発現するのに必要なものをコピーする能力だ。DNA情報を含んでいるものに触れさえすれば良いから、毛髪一本でも十分だ」

「……」

冥土帰しの説明に絶句する二人。

「そのあまりに応用範囲の広い能力から、それこそ学園都市の裏という裏がごまんと彼女を探しているだろう。彼女の能力を完全に解析することが出来れば、完璧な多重能力者とはいえなくともかなりそれに近い能力者を生み出すことが可能になるかもしれないからな」

「……奈津美の能力が、まさかそんな超チート級の能力だったなんて」

明俊のたった一言だが、この一言がまさにそっくりそのまま当てはまるのが宮野奈津美の能力なのだ。

髪の毛1本あれば、複数のレベル5の能力をも操作することができる……

陽はとっくに暮れ、人工の光以外はすべて闇が支配する時間になっ
っていた。

第36話 呪われた能力（後書き）

というわけで、奈津美の能力が明らかになりました。

いやー、またしてもチート能力ですが（汗

それにしても、オリストだったりオリ能力だったり、考え始めると止まらないですねw

まだまだ頑張れそうです。

臨時 キャラ紹介第一弾（前書き）

他者様の小説を読み漁っていたときにふと、「あれ、どの小説にもあるキャラ説明がねえ！！」と思ったので急遽、そして今更ですが書きました。

まあ、奈津美も登場してオリキャラは一段落といった感じなのでちよつど良かったのですが。

復習といった感じになるのでスルーされても大丈夫です。

また、改めて「ここはどうなんだろう？」といった疑問などが浮かび上がった方は遠慮なくおっしゃって頂ければその都度答えていく所存です。

臨時 キャラ紹介第一弾

工藤明俊

・双子の妹、工藤梓と共に突如『とある』の世界に降り立った中学二年生。初春や佐天の通う柵川中学所属。

・能力はレベル5の第二位で完全消去。アブソリュートデューター理論的には存在するが、その対消滅という性質上空空中、地中、宇宙空間を問わず存在しない『反物質』を操る。また、反物質と通常の物質とが反応した時に残る莫大なエネルギーを操作することができ、エネルギーを電気などに変換して操ることも出来る。（ただし、あまりにも演算が複雑なため、その道のプロである御坂美琴などより正確性はかなり劣る。また、体力の消費も著しい）

・対一方通行戦では、一方通行の能力発動を封じるといふ謎の力を無自覚で発現した。（現在のところ、明俊にこの力の自覚はない）

・今のところ正攻法で明俊の能力を破り、かつ勝った人間はいない。御坂美琴は、反物質を展開し続けるのに膨大なスタミナを消費するという点突いて長期戦に持ち込み明俊をダウンさせた。一方通行はベクトル操作で反物質を無効化したが、上記の謎の力により押さえ込まれ、上条当麻の介入により明俊との直接的な決着はついていない。

・上条当麻ほどではないがフラグ建築士であり、今のところ佐天、御坂美琴には完全なフラグを立てている。その他、初春、湾内（番外編）にも若干フラグを立て気味である。

・明俊自身も琴美のことを好いているので、佐天にとっては明俊を落とすことが目下の最大の目標となっている。

工藤梓

・明俊の双子の妹。柵川中学所属で明俊と同じクラス。

・能力はレベル5第七位のアイスマスター零下支配。冷氣系能力者の最高峰であり、一瞬にして液体ヘリウムをも作り出す点、そして広域に影響を及ぼす高度な演算能力を持つ。

・だが本人は、他のレベル5と比べると見劣りしていると考えておりコンプレックスを若干抱いている。ネタバレになるが、これが後に梓にある決断をさせることになる。（これが梓メインの話のネタになりそうです）

御坂琴美

・シスターズ妹達の一人で検体番号は10030号。

・とある研究所で一方通行の実験のための調整を受けつつ、その研究所で行われていた研究の実験台にもされていた。明俊たちがその研究所に乗り込んで来たときの騒ぎに乗じて脱出、以後明俊たちの部屋に住んでいる。

・自らを死の運命から救った明俊を好いていて、明俊とは両思い

である。

・研究所で行われていた実験の影響で他の妹達より感情的に豊かであるが、恥じらいは少なく明俊に裸を見られても大丈夫だと思っ
ている。(むしろ見て欲しいとすら思っていて、明俊を困惑させて
いる)ちなみに、その実験の影響が打ち止めによつて阻害されてい
ないのは、ミサカネットワークを介した操作ではなく琴美単体に対
して行われた脳内操作だからである。

宮野奈津美

・元の世界では明俊と梓の幼なじみである。この世界に降り立つ
たときには既に研究所に拘束されていて、逃げ出すために学園都市
製の薬を服用して子供の姿となった。

・能力はレベル不明、名称未決定で、能力者が能力者のDNA情
報を含んだもの(皮膚片や毛髪など)に触れることにより、触れて
いるあいだその能力者の能力をコピーすることが出来る。ただし、
基本的に発動には滝壺理后と同じく体晶、それも滝壺の物よりさら
に高度に凝縮されたものを使う必要がある。

・中学二年生にして大学入試程度の問題は解ける頭脳の持ち主で
中々の巨乳。話し方も知性あふれる女性といった感じで、容姿端麗・
頭脳明晰ということで、元の世界にいたときは複数の男子にお付き
合いを求められたが、「既に好きな人がいる」という理由で全て断
っている。・・・これも明俊のしわざ(r y

佐天涙子

・原作、アニメでは無能力者であるが、本作では明俊たちの行動をきっかけとして能力の発現に成功している。

・能力はレベルアップ使用時に見せたのと同じエアロハンド。(ところが、エアロハンドという能力が物体に噴射点を作ること『しかし』出来ないのかが作中の描写では分からないので、佐天編では風全体も扱えるとしています)

・他の能力者と決定的に違う点があり、それは感情によって能力値が大きく変化することである。装置によって負の感情を増幅させられた時はレベル5級の力を見せた。

・自らを二度も救ってくれた明俊に恋心を抱いているが、琴美が立ちはだかっている。その為、明俊に少しでも近付こうと彼と同じ風紀委員になった。ちなみにどのくらい明俊のことが好きかという点、『一緒に寝ても良い』と考えている程度。

臨時 キャラ紹介第一弾（後書き）

明俊と梓に関してはこれからもドンドン・・・は言い過ぎかもしれませんが（新たな事実が追加されていくことになるので、そのあたりもお楽しみに。

第37話 能力測定と佐天とのお付き合いと梓の嫉妬と（前書き）

タイトル見ていただければ分かりますと思いますが、ギャグ回です。

そして、学園都市内乱編の最初で最後のギャグ回でもあります。

第37話 能力測定と佐天とのお付き合いと梓の嫉妬と

9月1日。学生にとっては夏休みが終焉をむかえたことを告げる日であるとともに、再び学友たちと再開できる日でもある。

ほとんどの学生たちが楽しそうに語らい、久しぶりに出会う友と再会を喜んでいる学校への通学路。

工藤明俊と梓もその喧騒けんそうの中を同じように歩いていた。

だが、周りの人間と違うのはその顔にどこか暗い影が落ちていることであつた……

前日、8月31日。

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）から奈津美のまったく予想だに
しなかつた能力を聞かされた後のこと。

「だが彼女の能力とて万能ではない。まず第一に、他の能力者がいなければ無能力者同然だということだ。その性質上、彼女単独では何の力も無く、他の能力者が能力者のDNA情報を含んだものが手元になればどうしようもないからね。第二に、扱えると言っても

一度に一つだけでストックもそこまで多く出来ない。仮に複数の能力者の毛髪を所持したとしても、物理的に限度はそう多くない。10人分の毛髪を所持したところで、器用に使い分けるのはかなり難しいだろうからね」

「……………」

明俊達に言葉は無い。

黙って冥土帰しの説明を聞いている。

「第三に、そしてこれが彼女の最大の欠点でもあるんだけど、能力の使用に体晶が必要だということだ。……と言っても、必ず体晶を必要とするわけではないんだけどね」

「え？ どういうことですか？」

「これはあくまでも僕の予想なんだけどね、レベル3程度の能力者の能力ならほぼ体晶無しで扱うことができるはずだ。でも、例えばテレポートといったレベルにほとんど関係なく高度な演算を必要とする能力や、レベル5の能力を扱う場合には体晶が必須となるだろう。だから、彼女が日常で使えるのは実質レベル3までの能力だと思っただけ」

「…………でも、それでも、特異な能力であることに変わりはありませんよね」

梓が眠っている奈津美の顔を見ながら憂いを帯びたように言うと、冥土帰しは「うむ……」と言って、窓から夜の学園都市を見やる。

「研究者たちにとって重要なのは、彼女が多重能力者実現にむけての重要な参考人だということだ。これまでどのような研究がなされてきたのかは知らないが、一度逃げ出した彼女が再び捕まることがあつたら最後、多少強引にでも研究を進めるだろう。それこそ、彼女が破壊されてしまうほどに、ね」

「くそつ、なんとしても奈津美を守らないと・・・」

「僕は医者だから、君たちの決断にとやかく踏み込むつもりは一切無い。ただ、もう数日は入院してもらうからね？」

「いえ、体晶なんてものを使って運ばれてきた奈津美を診ていただだけでも十分ですよ。・・・まあこつちも、ここ以外じゃ診てもらえないと分かかってあなたにお願いしたんですけど」

「なに、これくらいお安い御用さ。後は、彼女がここに入院していることを悟られて、ここが襲われないことを祈るだけだ」

再び9月1日。

「今も、奈津美を狙って動いてる連中とかがいるのかな・・・？」

梓がそう漏らすと、明俊もため息をついて答える。

「冥土帰しも言ってたけど、奈津美の能力を欲してる連中にとって奈津美の安全なんて二の次だろう。データを採取するためなら暗部の人間を派遣してくることもあるかもしれない」

「・・・こういう時、あんまり深く考えない方が良いのかもしれないね」

「そうだな。奈津美を守る、そのことに意識を集中してるのが一番まどろっこしくなくて楽かもな」

そう言った明俊は、ふとバッグの中にしまつてある琴美からもらった拳銃のことを思い出す。

学校に行くだけなのにこんな物騒なものを持ち歩く必要があるのかと家を出る時に考えたのだが、青の弾倉ならば殺傷能力は無いに等しいし、奈津美のこともある。

用事するに越したことはない、と判断したのである。

「（使うような事態に陥らなければ良いだけの話なんだがな・・・）」

そう祈りつつも銃を携帯してしまうのは、悲しいかな、ここが学園都市、つまりそういうことが起きかねない場所だということを二人が十分認識してしまっている証拠でもあった。

「明俊さん、梓さん、おはようございます……ってどうしたんですか？ 二人とも元氣無さそうですけど……」

「ああ、初春さん……」

明俊たちの後ろから声をかけてきたのは天然癒し系キャラ（時に腹黒）、初春飾利である。

「悩みがあるのなら相談にのりますよ？」

「いや、夏休みが終わっちまって二人揃って若干憂鬱な気分になってただけだ。初春もそうならないか？」

真実を述べて初春まで巻き込んでしまうのは避けたい明俊は、氣取られないようにしながら嘘をついた。

「そうですね？ 私は友達にまた会えたり、特に2学期は大覇星祭があつたりで新学期を迎えるのは楽しみですよ？」

「大覇星祭……そういえばそんなイベントもあつたわね」

「ああ、そんなイベントもあつたな」

大覇星祭。

学園都市にある全学校が合同で行うという超巨大な体育祭である。

期間も1週間とかなり長く、しかも一部の種目を除いて能力使用可というまさに学園都市ならではの大会である。

「『そんな』じゃありませんよ！！ 今年のダークホースは我らが柵川中学で決まりです！！ なんとって、明俊さんと梓さんがいるんですから！！」

能力が使用可能という条件である以上、基礎体力以上に学校全体としての能力の高さが物を言うのが大覇星祭である。

毎年、上位に名を連ねる学校といえば長点上機学園や常盤台中学といったエリート校である。

「そうなりたいところだがな・・・流石に常盤台とかには勝てねえだろ。むこうは全員レベル3以上でこっちは平均値が違う」

「何言ってるんですか！！ こっちにはレベル5が二人ですよ二人！！ いくらレベル3や4がよってたかって襲い掛かってきたところで返り討ちですよ！！」

「・・・初春さん、忘れがちだから言っておくけど常盤台もレベル5二人いるからね？」

常盤台のレベル5といえば、巷の99%以上の人が御坂美琴の名前を挙げるだろう。

しかし、忘れられがちだが常盤台にはもう一人、レベル5の第六位（明俊が第二位になるまでは第五位）がいる。

「あつ！？ そ、そうでしたね・・・で、でもでも！！ 一泡ふかせることくらいはできますよ！！」

「（ま、そのもう片方は精神系能力者だから大覇星祭ではあんまり

活躍できなさそうだけど・・・）ハハハ、まあとりあえず一泡ふかせる位には頑張ってみるよ」

「何を頑張るんですか？」

再び後ろから声がかかって明俊たちが振り返ると、3人を見つけて少し走ってきたのだろう、佐天涼子がわずかに息を切らしながら初春のスカートにその魔手を伸ばしているところであった。

「あ、佐天さん。今年の大覇星祭について明俊さんたちと・・・つてさりげなくスカートめくるの止めて下さい！！」

「ええ。良いじゃん、二学期の出だしなんだから、景気付けてこつで」

「よくありません！！ まったく、男性の目もあるんですから止めて下さいっていつも言ってるじゃないですか」

「・・・男の人は見れたら見れたで結構嬉しいと思うけど？ ねえ、明俊さん？」

「・・・もう慣れたけど、やっぱり俺に聞くのね」

「そりゃ、お兄ちゃんはパンツ大好き人間だからね」

「あーずさくうーん？ 根も葉もないデマを流すのは止めてくれるかな？」

「えー！？ それってデマだったんですか！？」

「おい佐天、今かなり心外な発言したよな！？ それって俺がそういう風に見られてたってことで良いんだな！？」

「え？ 違うんですか？」

佐天がキョトンとした顔で聞き返すと、明俊はシヨックで打ちひしがれ、梓は笑いを抑えきれずに口元に手を当て、初春は「アハハ・」といった感じで困惑気味だ。

「さ、佐天さん、そういうえば今日は能力測定でしたよね？」

このままだと明俊が灰となって風に乗ってサーッと消えてしまいそうなので初春が話題を切り替える。

「フッフ、よくぞ言ってくれた初春！！ いやー、今日ほど能力測定が楽しみな日は無いよ！！」

「そっか、佐天さんの能力が発現してからこれが最初の能力測定だもんね」

「本当は夏休み中にこっそり測ってみたかったんですけど、学校以外だと有料なんですよね。だから今日まで我慢しました」

「佐天の能力値は感情に依存するだよな？ 今の様子なら良い数値が期待出来るんじゃないか？」

今の佐天のテンションは、初のレベル0以外の判定なるか、という訳でかなり上昇中である。

「実は私自身も結構期待しちゃってたりしてるんですよ！ あー、

早く能力測定したいなあー」

「・・・まるでプレゼントを待ちわびる子供みたいだな」

「仕方ないよ。今までずっとレベル0で嫌な思いをしてきたんだし」

「そうですね・・・私もそろそろレベル1から脱出してみたいかなあゝなんて」

「初春さんの能力つて、レベル上がったらどんなこと出来るようになるのかしら？」

「そりゃあれだ、頭の花が大きくなるんだろ？」

「何言ってるんですか明俊さん！？ そんなわけないじゃないですか！！」

「えっ？ 違うの？」

佐天涙子の「えっ？ 違うの？」、再び発動。

「違いますよ！！ そもそもそんな能力じゃありませんし！」

「（花が大きくなるってどんな能力だろ・・・？）」「」

思わず想像にふけってしまう明俊と梓であった。

「皆さんちゃんと登校しているようですね。良かった良かった」

2学期始めの桜川の挨拶。

出欠を確認した桜川はそう言ってニツコリと笑った。

しかし、その笑顔を演出している両目の下にくまが出来ているのを明俊は見逃さなかった。

「（・・・昨日の爆発のことで後始末に追われたんだろうな）」

爆発の件に関して、テレビなどでその報道自体はなされているが肝心のウイルスのことはまだ調査中とのことだ。

明俊の脳裏に、あの薬物中毒のような症状を見せた男のことが思い出される。

明俊は救急隊員を通じて病院側に「薬物中毒者の可能性がある」と言っておいたが、明俊はどうしてもそんな単純なこととは思えなかった。

「（奈津美のこともあるし、気になることばかりだ・・・どうしようもないんだけどな）」

明俊がそう思って黒板に視線を向けると、桜川が今日の日程を書

き出しているところであった。

・・・と言っても、半日授業でしかも柵川中学は能力測定が行われるので書かれていることは非常に少ない。

「・・・と言うわけで、今日は能力測定です。このホームルームが終わったら全員すぐに体操服に着替えて各自の検査場所に移動してくださいね。あ、そうそう、明俊君と梓さんは1学期の最後にやっただばかりなので今日の測定は無しです。自習するもよし、出歩くもよしです。では、各自移動を開始してください」

桜川のその言葉を合図に、クラスの全員が一斉に動き出す。

男子はその場を動かないものが多いが、女子は着替えを持つと更衣室へと移動する。

「能力測定かー、ダルいなあ・・・　なあ工藤、数値が上がる秘訣か何か伝授してくれよ」

そう明俊に言ってきたのはレベル0、いわゆる無能力者と呼ばれる階層に属する男子生徒であった。

ここ柵川中学は、いわゆる普通の学校であり、総じて生徒の能力値も決して高くない。

レベル0や1なんてのは普通の領域であり、レベル3もあれば十分といった感じである。

そこへ来て明俊や梓はレベル5であり、このような相談を受けるのは至極当たり前のことである。

「んー・・・ そうだなあ・・・」

出来るだけ上手いアドバイスを出したい明俊であるが、この世界に来て何もせずいきなりレベル5認定を受けた彼に出来るアドバイスなど無きに等しかった。

「あんまり結果を出すことを意識しない方が良いつてのは言えると思うなあ。俺が測定したときは梓が先に結果を出しちゃってたから、『俺も頑張らないと』って余計な力入ってたし」

「それでレベル5なんだぜ・・・」

「もはや次元が違うよな・・・」

クラスメイトたちの落胆の声を聞いた明俊は慌てて言葉をつなげる。

「別にレベル5つてのは関係ないと思うが・・・ あるいはいつそ、好きな女子のこと考えながら臨むつてのはどうだ？ その女子にカツコイイところ見せるつて感じのシチュエーションを想像しながらやったら数値上がるかも・・・」

「明俊さん!!」

明俊が、男子の会話にありがちな「女子のこと考えながらやればおk」という流れに持ち込もうとした矢先、まさにグッドタイミングで佐天が明俊の教室の前に登場。

ちなみに明俊は佐天の体操服姿は地味に初めてである。

「（半そでにハーフパンツは普通の格好だがそれがいい・・・佐天
って結構着痩せするんだなっていうか地味に胸デカくね？・・・
じゃねーよ！！）」

明俊はそんな邪の意識を追い払うかのように首を横に振ると佐天
に近付く。

「よ、よお佐天。どうかしたのか？」

「そ、その・・・明俊さん、この後時間あります？」

「時間？ ああ、ならたつぷりあるぞ。なにせ、俺と梓は1学期の
最後に測定したから今日は無しだからな。どうやって時間を潰そう
か思案していたところだ」

「そうなんですか、良かった。じ、実は、お願いがあつて来た
んです」

「ん？ 何だ？」

『能力測定の直前にわざわざ来るくらいなのだから、何か重要なお
願いなのだろう』、そう考えながら明俊はやや真剣な顔で佐天をの
ぞきこんだ。

一方佐天は、いきなり真剣な顔つきになった明俊が自分の顔をの
ぞきこんできたということで顔を赤くしてしまうのであった。

「（えっ！？ 何で明俊さん、いきなり超真剣な顔つきになっちゃ
ってるの！？ でもやっぱりカッコイイ・・・じゃなくて！！）」

「・・・顔赤いぞ？ 熱でもあるのか？ だったら保健室に・・・」

「い、いえー！！ 熱なんて無いですよ！？ えーっと、そうじゃないかと・・・」

「・・・？」

「（えーい、面倒くさい！！ こうなりや身体を投げ打ってダイレクタアタックするのみ！！）・・・その、これから（能力測定に）私と付き合ってくれませんか！？」

ビキッ！！

その佐天の一言で、まるで梓が能力を使ったかのごとく教室が凍りついた。

ちなみに、佐天は「能力測定に付き合ってくれ」というニュアンスで今の発言をした訳だが、彼女が肝心なところを抜かしてしまっただために明俊以下、教室にいた全員が壮絶な勘違いを引き起こしている、というのが現状である。

「・・・えっ？」

さしもの明俊も、今の発言の意味を取り違える（正確には、明俊以下男子全員が取り違えている訳だが）ほど鈍感ではなかったよう

で・・・

「・・・佐天、それって・・・？」

「・・・え？・・・ハッ!？」

・
・ 佐天もようやく、自分が言ったことの情報不足に気付いたようで

「（ヤバイヤバイヤバイ!! 今のってどこからどう見ても告白にしか見えないよ!!）」

佐天は一人で勝手に自爆して顔を真つ赤に炎上させてしまった。

一方、明俊は・・・

「く〜ど〜う〜?」

「・・・な、何だ、この殺気は・・・」

自らの後ろから、今にも襲い掛からんばかりの邪悪な気配を感じた明俊が振り返ると・・・

「クツクツクツ・・・」

「・・・これは、ヤバイな・・・」

クラスメートたちは不気味な笑顔を浮かべ、中には小さな水玉や静電気程度ではあるが手に能力を発動しているものもいた。

「そ、そうそう、その意気で行けば良い数値が出るんじゃないの・・・？　じゃあ俺はこの辺で・・・逃げるぞ佐天！！！」

明俊は佐天の手を掴むと脱兎の如く教室を飛び出した。

「え！？　ちょ！？」

いきなり腕を引っ張られる格好になった佐天は半ば引きずられるようにしながらも何とか足を動かす。

「待てや工藤ー！！！」

廊下に木霊する叫び声に佐天が思わず振り返ると、そこには鬼の形相をした明俊のクラスメイトたちが猛スピードで追いかけてくる光景が。

「あ、明俊さん・・・　何かすごいことになってますけど・・・」

「（俺のせい！？　ねえこれって俺のせいなの！？　意味分からん

！！！！）　不幸だぁー！！！！」

少しして。

明俊は校庭の端の方で、日陰に座って涼んでいた。

「俺今日は何もしないで汗もかかないはずだったんだが……どうしてこうなった……」

その後、明俊はクラスメートに追い回されること数分、何とか逃げ切ることに成功した。

追い回していたクラスメートも、各々の測定場所に移動している。

とは言うものの、今も数人の明俊討伐隊のメンバーは校庭の、しかも明俊のすぐ近くにいる。

別に彼らは明俊を追いかけているわけではなく、彼らの測定場所がたまたま校庭だっただけである。

校庭は『風力系能力者』、『地面に関係する能力者』、『転移系能力者』、『肉体（とりわけ運動）に関する能力者』の測定場所である。

『風力系能力者』、ということで佐天も校庭の中ほどにいて順番待ち中である。

「（どうしてこうなったも何も、佐天が『私の測定見て下さい！』って言ったからなんだが……教室でのアレじゃ勘違い乙だよなあ）」

明俊が走って逃げている間に佐天からの釈明で明俊の誤解は解消

したのだが、それを追跡者たちに説明する暇など無かった訳で・・・

「（クラスの連中から、『俺と佐天はそういう関係になった』って
いうからかいを受けそうだ・・・）」

そう思うと、明俊の口からため息が漏れる。

別に明俊は佐天のことが嫌いという訳ではなく、むしろ明るくて
活発で好きな部類である。

ただ恋愛対象として見ていない、というだけである。（第一、琴
美という存在がいるのでそういう感情を抱ききっかけすら無いのだ
が）

それに加えて明俊には、以前佐天を殺そうとしてしまったことに
対する罪悪感が未だに拭いきれず残っていた。

佐天は気にしていないと言うが、明俊は自分に笑顔が向けられる
度にそのことを少なからず考えてしまう。

俺は一瞬でも、この笑顔を消し去ってしまいそうになったんだな、
と。

そして、自分にはそれを可能にしてしまうだけの強大な力が宿っ
ているのだ、と。

「（反物質。触れた物を有無を言わずこの世から消し去ってしま
う力・・・ こんな力、無くても・・・）」

そう考えて明俊は、その考えを否定するかのように首を横に振った。

確かに、こんな力が無ければ佐天に刃を向けることは無かっただろう。

だがそもそも、この力が無ければA I Mバーストは倒せず、佐天は目覚めることが無かったかもしれない、いやそれ以前に、自分達も今存在していないかもしれないのだ。

「（そうだ。この能力があるから今の俺がいるし、佐天がいて、琴美がいるんだ。大切なのはこの力を、皆を守るために使うことだ）」

確かにこの力を、守るためだけという風に手段を限定して使うのは難しいかもしれない。

が、それが出来なくて何が第二位だというのか。

「（完全消去・・・いいぜ、俺たちの平穏を乱す連中がこの先現れるってんなら、そんな野望は俺がその名にかけてまとめて消し去ってやる！ー！）」

この決意が、後に明俊に大きな決断をさせることになる。

「よーし次、佐天涙子」

「は、はい！」

そんな声が聞こえてきて、明俊は再び校庭の方へと視線を戻す。

校庭にはハンマー投げと同じように小さな円があつて、そこから一定の距離ごとに線が引かれていた。

佐天はその小さな円のすぐそばで担当の先生から何か説明を受けているところであつた。

明俊がよく見ると、佐天の右手のひらの上で葉っぱが数枚クルクルと回転運動をしながら浮かんでいた。

「（どうやら、能力自体は使えてるみたいだな。後はどのくらいのを吹き飛ばせるか・・・緊張で数値が下がらなければ大丈夫だろうけど）」

測定方法はいたってシンプルで、台の上に置かれた砂袋に触れて噴射点を作り、どのくらい遠くまで飛ばせるか？ というものだ。

「（重たい砂袋を飛ばすんだ、ちょっとでも飛んだらレベル3はほぼ確定だろう。後は飛距離次第でレベル4もあり得る。飛ばせなくてもレベル1か2だろうから、佐天にとって悪い結果なんて出ないな）」

明俊がそのようなことを推測しているあいだに、佐天は小さな円

シュン!!

ドスン!!

「は・・・えっ!?!」

その光景に明俊のみならず、その場にいた生徒全員、そして教師たちもが呆然とする。

それもそのはず、持ち上げるのも精一杯のはずの砂袋がものすごい勢いで真っ直ぐに飛んでいったのだから。

台から放たれた砂袋は、佐天のいたところから数十メートル、もしかしたら百メートルに達するかというところまで飛んでいた。

ピピッ!

砂袋の中に封入されている発信機からの電波を受信した測定器から発せられた音だけが響き渡る。

そして少しして、測定器から1枚の紙が吐き出された。

担当の教師が見る前に佐天が取り上げて、その紙をジーツと見つめる。

そして・・・

「あつきとっしきーん!!」

「のおおおおおおお!!?」

佐天がいた校庭の真ん中から明俊のいた校庭の端までわずか3歩、まさに佐天が『飛んできた』。(無論、能力のせい)

ドサアッ!!

当然そんな佐天を受け止められるはずもなく、明俊と佐天は地面に倒れこんだ。

「いつつ・・・さ、佐天さま!? ものすつごく痛いんですけど!」

「これこれこれ!! これ見てくださいよ!!」

「分かった分かった！！ だからちよつと離れるって！！ えーな
になに・・・ッ！？ れ、『レベル4』だとお！！？」

「そうなんですよ！！ わたし、ついにやっちゃいましたよ！！！」

「すすす、すごいじゃないか！！ こりや柵川中学の歴史に『佐天
涙子』の名前が残るぞ！！！」

「ええ！？ どどど、どうしましょう！？ 今のうちに格言とか名
言とか考えといた方が良いでしょうね！？」

「そ、そうだな！！ 佐天涙子ここにあり！！、つてのを考えとけ
よ！！！」

・・・などと明俊と佐天が意味不明なことを言い合っていると、

「あーらお兄ちゃん？ ずいぶんと見せ付けてくれるわねー？」

後ろからゾクツとするような声が聞こえてきた明俊が振り返ると、
そこには不気味な笑顔をたたえた梓と、先ほどまで明俊と追いかけ
つこをしていた討伐隊の面々がいた。

「あ、梓？ その後ろに控えておられる方々は一体・・・？」

「何かー、『お兄ちゃんと黒髪の1年生の女の子が付き合う』とか
何とかって聞いたからー、みんなと一緒に見に来たってわけ」

「そ、そうか・・・ じゃあ俺はこのへんだ」

「あら佐天さん、レベル4おめでとー！！ 努力が実った結果ね！」

「あ、ありがとうございますー！」

「でもこれからが大変よー？ 能力者なんて良いことばかりじゃないし・・・って、ジャツジメントになった佐天さんにとって『良いことばかりじゃない』ってアドバイスは愚問かしら？」

「いえいえそんなこと！！ とてもためになりますよー！！」

「とにかく、今度お祝いにどこか美味しいものでも食べに行きましょー！！・・・さーて、お・に・い・ちゃん？」

「な、なんでせう梓さま？」

「佐天さんと付き合っちゃうってのは本当なのかしら？」

「い、いや！？ あれは言葉足らずから生じた誤解ってやつですね・・・？ っていうか、何で梓が怒ってんだよ？ 嫉妬か？」

ブチッ！！

「し、し、嫉妬なんかじゃないわよ！！ 良いわみんな、妹の私が許可するから、このダメろくでなし鈍感兄貴をギッタギタにして良いわよー！！」

「おー!」「」

「ちょ、ちよつと!?! 何で梓が怒ってんだよってかお前らこつち来んな!! あーもう、不幸だぁー!」

かくして、梓を加えた明俊討伐隊と明俊の壮絶な追いかっこ第二弾が開始された。

ちなみに9月1日といえば、風斬氷華とインデックスの感動的なイベントや、シェリー・クロムウェルvs白井黒子などなどのイベントがあるわけであるが、明俊達はそんなことお構いなく追いかっこを続けたため関与することはなかった。

さて、一見平穏無事(?)に始まったかに見える2学期であるが、悪魔の影はすぐそこまで忍び寄っていたのである。

翌日、恐怖の幕開けが起ころうとは、当然だが誰も予想してはいなかった。

第37話 能力測定と佐天とのお付き合いと梓の嫉妬と（後書き）

小説トップにも書きましたが、現在のところ禁書19巻くらいまで（ただし、学園都市サイドに限るため17や18は無いです）予定しています。

まだまだ長い道のりですが、どうぞよろしくお願いします。

また、長い執筆には皆様のご意見等が欠かせないと思っておりますので、その辺も合わせてお願いいたします。

第38話 異常事態発生（前書き）

ようやく、この学園都市内乱編が本格的にスタートします。

第38話 異常事態発生

学園都市。

東京都の西部を開発して作られたその都市には230万人もの人間が住んでいて、その8割は学生である。

日々学生を相手に超能力研究を行っているその目的は「人間を超えた身体を手にする事で神様の答えにたどり着く」ことだと言われているが、上層部、つまりアレイスターに言わせればそれすらも途中過程に過ぎないらしい。

そして、そんな学園都市には人の数だけ思いというものが存在する。

学生の大半は能力向上を目指して日々向上心を露わにし、その学生を支える教師は子供たちの平和を願って毎日を送る。

だが、この街に渦巻く思いはそのような綺麗なものばかりではない。

量産型能力者計画、絶対能力者進化計画（どちらも失敗したが、それすらアレイスターの狙い通りであることはここでは深入りしないことにする）など……

表沙汰になるならないを問わなければ、この街には無数の裏が存在している。

そしてまた一つ、この街の裏が動き出すのであった。

9月1日深夜。

新薬開発の研究所・・・という表向きの顔をもつ建物のとある一室に、二人の白衣の男がいた。

二人は部屋の明かりも点けずに、1台のパソコンの画面を食い入るように見つめていた。

その画面には学園都市の全体図が映し出されていて、各学区ごとに100%や95%といったようにパーセンテージが表示されていた。

「現在このような状況となっております。最重要ポイントである第七学区を始めとして、ほぼ全ての学区で『準備』が完了しました」

「うむ。第二十三学区など一部はまだ低い数値だが、あそこはその性質から元々我々が標的としている『革命児』たちの数が少ない。さほど問題は無いだろう。昨日の実験体はジャッジメントに取り押さえられたようだが、本番では規模が違うからそう簡単に押さえ込まれたりはいしまい」

「そうですね。では当初の計画通り、決行は明日でよろしいですか？」

「ああ、明日決行する」

「分かりました。では、最終準備を急がせます。 . . . ところで、一つよろしいですか？」

「なんだね？」

「我々を裏切つて『多重能力者への可能性を今一度呼び戻す鍵』を逃がした男のことですが . . . 現在も軟禁状態とのことですが」

「それがどうかしたのか？」

「どうしてすぐに処分なさらないのですか？」

「あの男が我々の計画だけの関係者ならとつくに処分している。だがあの男は生憎と我々の計画より色の黒い研究にも籍を置いている。今あの男を処分すれば、あちらさんが黙ってはしまい」

「はあ . . . では、鍵の方はいかがなさいますか？」

「我々の計画に彼女の能力を応用しているのは事実だが、もう必要ない。そのまま放っておけ。どの道彼女は多くの闇から狙われているんだ、逃がされたところで光を浴びていられるのは一瞬のこと。すぐに闇に引きずり込まれる。それに、我々は計画実行を明日に控えているんだ、彼女を捕らえている暇は無い」

「そうですね。では、各員に最終調整に入るよう伝達してきます」

「ん。計画実行は9月2日、午前10時とする」

その言葉を聞いた男が部屋を出る。

「（ついにこの時が来た。我々が学園都市に革命をもたらすときが。この街にはびこる上下関係を一新し、新たな秩序を構築するのだ。ククク・・・能力者どもよ、お前達の栄華もここまでだ!）」

一人部屋に残った男の不気味な笑い声が、夜の暗いなかに木霊した・・・

9月2日、午前10時。

授業の開始を知らせるチャイムが柵川中学に響き渡る。

それまで席を立って友達と話したりトイレに立っていた生徒達が次々に席へつく。

窓側の後ろ2つの席に座っていた明俊と梓はすでに教科書を用意して座っていた。

「よし全員いるかー？ 数学の授業を始めるぞー」

チャイムが鳴り終わるとほぼ同時に、数学担当の教師が入ってきた。

「えーっと、1学期はどこまでやってたかな・・・ ああ、40ページまでか。じゃあ2学期はその続きから・・・おい？ どうした？」

数学の教師のその一言に、教室の全員が教師の視線を追って顔を後ろへとむける。

規則並んだ机の列の最後列、黒板から1番遠い列に座っていた一人の男子生徒が授業が始まったにも関わらず突如立ち上がった。

そして、フラーツとした足取りで教室の真ん中へと向かって歩き出した。

「お、おい？ どうしたんだ一体？」

周りの友人が問いかけても反応が無い。

そして、教室の真ん中まで来ると黙ったまま立ち止まり、ゲルツと周りを見渡し・・・

「・・・、・・・、ス」

「ッ！？」

小さなうめき声のような男子生徒の声を聞いた明俊が、ガタツ！と音をたてて立ち上がった。

「ッ、今度は工藤か？ い、一体何を・・・」

「俺は正常です！！ それより、これは・・・まさか・・・」

そう言って明俊が、机の脇に下がっている学生カバンの中から拳銃を取り出そうとしたとき、

ガタツ！！

今度は別の女子生徒が椅子を倒しながら立ち上がった。

「・・・シャ、ハ、・・・ス」

こちらの女子生徒も、先ほどの男子生徒のように虚ろな目つきでユラユラと、まるで・・・

「これは・・・ やっぱりあの薬物中毒者にそっくりじゃねえか・・・！？」

明俊の脳裏に一昨日の出来事が蘇る。

フラフラとした足取り、はつきりと言った訳ではないが確かに「クロス」と言って炎で襲い掛かってきた男のことを・・・

「（待てよ・・・ もしこれがあの男とまったく同じ症状だったんなら、こいつはかなりヤバイ状況なんじゃねえか!?!）」

狭い教室の中で2人の人間に能力を使われたらどうなるか、それは火を見るより明らかであった。

「（クラスメートに銃をむけるなんて最低な行為だけど・・・ ここで止めないともっと酷いことになるのは確実!!! 悪いがここで

「気絶させる!!」

明俊は鞆から銃を引き抜くと、最初に立ち上がった男子生徒に銃口をむける。

「く、工藤!? お前何を!?!」

「大丈夫ですよ先生、ジャツジメントの非殺傷銃です!!」

明俊は適当に嘘をかますと、男子生徒の足に針を撃ち込んだ。

「バチッ!!」と音がして、男子生徒がその場に崩れ落ちる。

明俊は倒れた男子生徒のことはいったん忘れて、もう一人の女子生徒へと銃口を向け直し……

「ッ!?!」

自らへとむかって飛んでくる机を見た。

狭い教室、見えたのは一瞬のこと、机は明俊が状況を把握する前に眼前へと迫り、そして……

ガッンッ!!

机はものすごい音をたてて衝突した。・・・明俊の前に忽然と現れた氷の壁に。

直後、再びバチッ！！と音がして女子生徒も崩れ落ちた。

「危ない危ない・・・いくらクラスメイトで親友でも、お兄ちゃんをキズモノにするのを黙って見てる訳にはいかないわね」

「梓・・・助かったよ」

「それより、一体どうなってるの？ 声も届いてないみたいだし、何よりいきなり机を浮かせて飛ばしてくるなんて・・・」

「おい皆、大丈夫か!？」

明俊は教室をグルッと見渡す。

すると、何人かの生徒が同じような症状を見せていきなり立ち上がった。

「ちょっとちょっと!?!? 二人じゃ終わらないってこと!?!?」

「どうやらそうみたいだ。だが、全員おかしくなっちまったって訳でもなさそうだ」

明俊の言葉に梓が注意深く見てみると、どうやらおかしくなってしまったのはクラスの半分くらいで、残りの半分は何ともない様子であった。

「よく分からないけど、こんな狭い場所じゃどうしようもないわ!

「！」

「そうだな！！ よし、無事な皆は急いで校庭に逃げろ！！ 梓が前、俺が後から能力で守りながら行く！！」

その明俊の言葉を合図に、正常な生徒たちが一斉に教室のドアへと群がろうとする・・・が、廊下の近くにいた一人の生徒が叫ぶ。

「待ってみんな！！ 他の教室からもたくさん避難してて、廊下はすし詰めよ！！」

他の教室でも同じようなことが起きているらしく、廊下はパニック状態に陥っていた。

しかも明俊たちの教室は廊下の一番端で、逃げ場は他には無い。

「こうなりゃベランダから逃げるしかねえ！！」

明俊はそう叫びながら、反物質で窓枠を壁ごと消し去る。

「ベランダって・・・正気が工藤！？ ここ3階だぜ！？」

「このままクラスメートにやられるより一億倍マシだ！！ ってかそれ以前に俺たちはレベル5だぜ？ 梓、頼む！！」

「任せて！！」

梓はベランダに出ると、ベランダのふちから校庭に向かって氷の滑り台を作り出した。

「おお」

「流石レベル5、規模が違うぜ・・・」

「出来るだけ角度は緩やかにしてあるけど、氷だから摩擦が少ないのがちょっと難点ね。みんな、着地の時はきちんと体勢を整えて！」

「二人は最後まで残るのか？」

「梓は先に行ってみんなを一ヶ所に集めといてくれ！俺は最後までここを守る！」

明俊は、飛ばされてくる机や椅子、炎や水などをことごとく反物質で防ぎ退路を確保する。

梓の作り出した氷の滑り台は幅がかなり大きく、あっという間に明俊を除く全員を脱出させることに成功した。

「（よし、後は俺だけだな）」

明俊は教室を見渡して正常な生徒が残っていないことを確認すると、後退りしてベランダに近付き脱出しよう・・・

ブーツ！　ブーツ！

「（誰だこんな時に・・・電話？　しかも梓から？）」

明俊はベルトに下がっているスタンロッドを手に取り、フラッシュモードにしてスイッチを押しながら携帯を取り出す。

暴走中のクラスメートが閃光で視界を奪われているのを確認しながら電話に出た。

「梓か、どうした?」

『どうやら、異常が起こってるのはここだけじゃないみたいよ。校門の方を見て!』

「校門だと?」

明俊は振り返って校門の方を見、そして・・・言葉を失った。

「・・・なんだよ、これは・・・」

そこには、一般道路上で繰り広げられる能力者による攻撃と、それに怯えて逃げ惑う人や逆に立ち向かう人々がいた。

それはさながらクーデターのもようであった。

『一体、この街で何が起きているっていうの・・・?』

「とにかく今は、この事態をどう切り抜けるかが優先だ。梓は校門まで行って、路上からの侵入を防いでくれ! 俺はこの状況を切り抜ける案を集まった皆と協議してみる!」

『分かった!』

明俊は電話を切ると、振り返りもう一度教室を見る。

倒された机や椅子が散乱する教室のなか、異常行動を起こしているクラスメートたちが明俊のことをジッと見つめていた。

彼らからは口々に「コ・・・ロ・・・ス」という言葉が聞こえてきて、そのあまりの不気味さに思わず震える明俊。

「（みんなを何とかして助けたいが・・・今は一刻も早くここから立ち去らないと何もできねえ。悪い、みんな。少しの辛抱だろうから待っててくれ！！）」

明俊は下を確認、誰も人がいないことを確認すると垂直に飛び降りた。

タン！！

落下距離の割に着地音が小さいのは、明俊が足裏に反物質を展開し衝撃を和らげているからである。

そのまま一気に校庭の真ん中まで走ると、無事だったクラスメイトだけでなく、明俊のことを知る学校中の生徒が駆け寄ってきた。

「工藤、大丈夫だったか！？」

「ああ、まあな。それより、どのクラスもほとんど同じような状況か？」

「どうやらそうみたいだぜ。1クラス残さず、どのクラスでも必ず一人は狂っちまったヤツがいるらしい」

「そうか・・・」

「で、これからどうするんだ？」

そう声をかけてきたのは、明俊の見知らぬ上級生だった。

このような状況では、年齢の上下など関係なくレベルの高い人間が頼りになるということの表れであった。

「そうですね・・・とにかく、情報が不足していてこれ以上は動きようがありません。今妹の梓に校門のところまで行ってもらってますが、どうやら学校の外でもこんなことが起こっているらしく、外に出るのはあまり得策とは言えません」

「外も・・・こんな感じなのか？」

「ええ。僕もさつきチラツと見ましたが、さながらクーデターでもやってるのかって感じです。レベルがそこそこある人ならまだしもレベル0や1の人をゾロゾロ連れて歩けるような雰囲気では無かったですね」

「明俊さん！！」

呼ぶ声がした方向を見ると、初春と佐天が走ってやってくることに

るだった。

「二人とも無事だったか!!」

「はい、何とか・・・」

「明俊さん、実は一つ気がかりなことがあるんです」

そう切り出した初春が明俊に見せたのはノートパソコンの画面だった。

「さっすが初春。こんなときでもパソコンは手放さないね」

「これがあれば一通りのことは出来ますから。それで明俊さん、これを見て欲しいんですけど」

「んー？ これは・・・二人のクラスの名簿か？」

「はい。人数確認のために、いる人・いない人ごとに印をつけたんですけど・・・この欄を見てください」

初春が指差したのは、各生徒のレベルを示す欄だった。

「いなくなった人は全て赤色でチェックしてあります。・・・気付きましたよね？ この事態の異常さに」

「・・・ああ」

「え？ 何が異常なんですか？」

佐天がそう聞くと、辺りがシーンと静まりかえった。

その場にいる全員が、固唾を吞んで明俊と初春を見つめる。

そして、明俊の口が震えながらゆっくりと開いた。

「今おかしくなっちまってる連中は全員、レベル0なんだ……」

第39話 いざ常盤台へ

「今おかしくなっちまってる連中は全員、レベル0なんだ・・・」

その明俊の言葉に、それまで静まり返っていた校庭がにわかに騒がしくなる。

「明俊さん、それ・・・本当なんですか？」

佐天が恐る恐る明俊の顔を見ながら聞き返す。

「ああ、間違いない・・・俺も信じられないんだがな」

「ち、ちよつと待てよ工藤！ お前も見ただろ、おかしくなっちまっただやつらが能力を使って机を飛ばしてきたのを！」

「ああ。あの攻撃の標的になったのは俺自身だからな」

「だっただらおかしくないか！？ 何でレベル0の人間が能力を使えるんだ！？ しかもありゃ、確実にレベル1程度じゃ済まないぜ！」

「俺だって今起こっていることがおかしいことくらいは分かってる。でもこれが現実なんだ。何より俺たち全員が、現場を目撃した証人じゃねえか」

「そ、そうだけだよ・・・」

直接見たとはいえ、これは流石に上手く受け入れられない事態であつた。

「（俺だつてまだこの状況を理解出来ているわけじゃねえ・・・でも今は、とにかくここからどうするかでことだ）」

しかし、打開策は容易には思い浮かばない。

なにより明俊の思考を阻害しているのは、暴走しているのがレベル0の人間であるということであつた。

「（この学園都市にいる人間は約230万人。その8割が学生だから、学生だけでも約184万人はいることになる。さらに、その6割程度がレベル0つてことらしいから・・・もしレベル0の人間が全員おかしくなつちまつてるって仮定すると、その数は110万4000人にもなる。しかも何でかは知らないが、おかしくなつたみんなの能力はレベル換算で2以上の強度がありそうだ）」

そこまで考えて、明俊は校庭に集まつた生徒達を見渡す。

「（それに比べて、レベル1以上の人間の総数は73万6000人。まず数だけでもこちらの方が不利であることは間違いない。さらに、むこうの強度がレベル2以上に相当するのならこっちはさらに不利になる。何より嫌なのは、むこうには殺意にも似たものがあつて容赦なくこちらを攻撃してくるって点だ。こっちに敵意は無いから攻撃の仕方も制限される。ますます動きにくくなるってもんだ・・・」

そこで明俊はふと、一つの可能性を思いつく。

「（魔術・・・こんなに大規模な混乱を引き起こす現象で、この世界で真つ先に思い浮かぶのは魔術だ。『御使墮し（エンゼルフォー）』や『天罰術式』のことを考えればこれくらいまだ易しい魔術なのかも・・・）」

天罰術式はまだこの先に登場する魔術だが、術者に対し悪意や敵意をむけた人間を問答無用で昏倒させる大規模制圧魔術。

御使墮しは既に発動した魔術で、その規模は全世界に及んでいた。

「（もしこれが魔術のしわざなら、上条さんたちがすぐに原因究明にむかうのかな・・・って！！ 上条さんもレベル0じゃねえか！！）」

明俊は慌てて携帯を取り出すと電話帳を開き、『上条当麻』をコールする。

「（上条さんに基本魔術は効かないけど・・・あの人の通ってる高校も比較的レベル0の人が多かったはず。まさかやられたりはしてないだろうけど・・・）」

数回のコールの後、ブツツ！と音がして電話がつながる。

『誰だよこんなクソ忙しいときに・・・！ ハイハイ、上条さんですよー』

「あ、上条さんですか！？ 工藤明俊です！！」

『ああ、妹達の時のレベル5さんか。どうかし・・・って危ねえ！』

『！』

電話の向こうで上条が叫ぶと同時に、あの幻想殺しの音が聞こえてきた。

「（幻想殺し……！？ やっぱり上条さんのところでも起きてるのか！）上条さん！！ そっちも大混乱ですか！？」

『ああ……って、そっちもってことは、明俊のところもこんな状態か？』

「ええ、まあ。それより上条さん、一つ聞きたいことが……」

上条にこれが魔術師のしわざかどうか聞こうとして、明俊はハッと気付く。

「（待て待て！ 今ここで魔術師のことを聞いたら、俺が魔術のことを知ってるって上条さんに教えることになる！ くそっ、迂闊だった！）」

『……？ おーい明俊ー、聞きたいことってのは？』

「（マズったな、土御門さん呼び出してもらっても同じことだし…… せめてインデックスが近くにいる状況なら代わってもらうんだが、まだ学校だろうし）」

『特に何も用が無いなら切るぞ。電話しながらするのはキツイ…… 姫神危ない！！』

キューン！！

『何とか間に合ったか・・・ 姫神！ 大丈夫か！？』

『うん。うん。ありがとう。上条君』

「あ、えと、無事なら良いんです！！ じゃあ切ります！」

何とかタイミングが出来て電話を切ることに成功した明俊は再び思考する。

「（上条さんが無事ならひとまず安心だ。それより気になるのは、今のやり取りを聞く限り姫神さんも無事ってことだ。彼女は原石で能力『吸血殺し』の持ち主、つまり能力者だ。でも今は確か、歩く教会の効果の一部を持ったケルト十字架を身につけて能力を封印しているはず。つまり、姫神さんは今は実質レベル0のはず。何で正常なんだ？）」

ひめがみあいさ

姫神秋沙の持つ『吸血殺し（デーパーブラッド）』は、吸血鬼という怪物に対する能力であるが、彼女自身には制御できないため現在はインデックスから譲り受けたケルト十字架というものでその能力を封印されている。

「（単純に、元々能力者だから効かないのか？ それとも、あのケルト十字架が何かを防いでいる・・・？ いや、あれは吸血殺しを抑制するためのもの。他に干渉するほどの力は無いはず・・・あー、全然分かんねえ！！）」

考えれば考えるほど泥沼にはまっていく明俊はそこで思考を中断すると初春に話しかける。

「初春。この近辺の防犯カメラの画像を出せるか？ 現状が知りた

い

「あ、はい。ちょっと待ってくださいね」

初春はもはや慣れた手つきでキーボードをたたくと、4つの映像を画面に映し出した。

「この4つの映像は、柵川中学を四方から囲むように設置されているカメラのものです」

「うーん・・・どこもかしこもダメだな。アンチスキルが対処にわかれているようだが、押し負けているようだし」

「そうですね・・・正門は、今は梓さんが氷の壁で完全に塞いでいるみたいですね」

「ああ。だけど、梓の体力のこともあるし、何よりどこかのフェンスを破って侵入されたらどうしようもない。どうやら暴走能力者たちは、俺たち普通の能力者を見かけると攻撃を仕掛けてくるみたいだ。ここにとどまっても埒が明かない」

「でも、どこに逃げるんですか？ この様子じゃ、学園都市内に安全そうな場所なんてありそうにないですけど・・・」

「かといって、学園都市の外には逃げられない。こんな状況で外に出るってのは、連中を外におびき出してに等しい行為だ」

「外はダメ・・・学園都市の中で安全な場所・・・」

「（あるにしても、遠距離じゃ意味がない。できるだけそば、理想

的なのは今いる第七学区内だが・・・『窓のないビル』くらいしかねーな)」

窓のないビル。

学園都市総括理事長であるアレイスター・クロウリーが住んでいる建物で、噂では核兵器の攻撃を受けても耐えられるとのことらしい。

「（確かにあそこなら天と地がひっくり返っても大丈夫そうだが・・・入るにはテレポーターが必要だし、第一アレイスターが「はいそうですか」って入れてくれるはずがねえ）」

明俊は焦っていた。

時間は無いが闇雲に移動することは避けたい、しかし目的地が定まらない。

周りでは絶望にも似た言葉が少しずつ漏れ始める。

・・・とその時、ある男子生徒グループの言葉が明俊の耳に届いた。

「はぁー、俺、女に生まれてきたかったな」

「・・・お前、こんなときになに言ってるの？」

「いや、だってよ？　もし女に生まれてレベル3以上だったら、常

盤台中学に入れるんだぜ？」

「うん、だから？」

「あそこは入学生が全員レベル3以上なんだろ？ 何か安全そうじゃない？ それに超電磁砲レベルガンもいることだし」

「おいおい、それを言ったらこっちだってレベル5が二人もいるだろうが、贅沢言つなよ」

「それ以前に、お前男でレベル1だからどの道行けない（笑）」

「うっせーな。願望くらい言わせるよ」

その会話を聞いた明俊が、「そうか！！」と叫んでその男子グループに駆け寄った。

「それだ！！ 常盤台中学だよ！！」

「・・・？な、何だ工藤、常盤台に入りたいのか？」

「確かにちよつと羨ましい・・・ってそうじゃなくて！！ 避難場所のことだ！ 常盤台中学一帯は『学舎の園』まなびやのそのって言われているのは知ってるよな？ あそここの敷地面積は普通の学校の15倍以上で、しかも常盤台中学は全員がレベル3以上で防御面でもここより100倍は安心できるしな！」

「確かに・・・ あそこは高い柵で囲まれていますから、逃げ込めることが出来ればだいぶ助かりますし」

「……でも初春、『逃げ込めることが出来れば』っていうけど、あそこってそう簡単に入れてくれたっけ？」

佐天の疑問に明俊がフツと笑って、

「確かに、あそこは部外者の立ち入りは厳しく制限されるし、俺たちみたいなのが大挙して押しかけたら混乱を招くのは必至、立ち入りなんてまず許可されないだろうな」

「で、でもよ工藤、緊急事態ですって言えば……」

「暴走した無能力者たちは、どういうわけかは知らないが明らかに俺たち能力者を狙って攻撃してきてる。つまり、俺たちは彼らをおびき寄せてるってことにもなるんだ。騒乱の元を招き入れるような人間を助けると思っか？」

「そ、そうか……」

「……でもそれは、あくまで普通に頭を下げた時の話だ。こっちは奥の手が存在するんだよ」

明俊はそこで言葉を切ると、ポケットから再び携帯を取り出し電話帳を開く。

「『御坂美琴』。アイツなら、上に相談して何とかしてくれるかもしれない」

「御坂って……あの超電磁砲だよな？ 工藤、知り合いだったのか!？」

「ん、ああ、レベル5同士の縁ってやつだ。ま、論より証拠、アイツに電話してみますか」

明俊は電話帳の欄から御坂美琴を選ぶと、音声をスピーカーにして電話をかけた。

常盤台中学は今は休み時間である。

超電磁砲こと御坂美琴は、クラスメートと共に授業と授業の間をつかの間の休息の時間を過ごしていた。

と言っても、お嬢様お嬢様した空気にイマイチ順応できない御坂は、会話は基本的に受身の姿勢をとっているのだが。

そして今は、高級ブランド物の香水の話になっていた。

「（香水・・・かあ。普段はほとんどつけてないけど、たまにはいい・・・かな？ どうせつけてもつけなくてもあのバカは気付きはしないでしょうけど・・・って、どうしてあのバカが出てくるのよ！...!）」

御坂はすでにカミヤん病の超重症患者である。

「……？ 御坂さま、どうかなさいましたか？」

「え！？ いやいや、ちょーっと香水のことをね。アハハ……」

「そうですね…… わたくしのオススメは……ってあら？ 御坂さま、携帯が鳴っておられるようですよ？」

「？ あ、ホントだ。でも誰からだろう、こんな学校の真っ最中に」

御坂がそう疑問を口にしながら机の脇にかけているカバンから携帯を取り出していると、クラスメートの一人が、

「まあまあ御坂さま、まさかそのお相手というのは殿方では？」

「まさかー。それ以前に私、男の連絡先ほとんど知らないし……
って、え？」

御坂の口から飛び出したその「え？」に、クラスが静まり返った。

「……ま、まさか御坂さま、本当に殿方からの……？」

「う、うん、どうやらそうみたい」

「お、お、お、お姉さまー！ー！？」

聞きなれた声に御坂が教室の入り口の方を見ると、ツインテールの後輩が教室のドアのところ立っていて、次の瞬間には御坂の隣に『飛んで』いた。

「く、黒子！？ ビックリさせないでよ！！」

「それはこちらのセリフですよ！！ 移動教室でたまたま偶然お姉さまの教室の前を通りかかろうとしたらなんと！！ お姉さまがどこぞの馬の骨とも知れぬ殿方と携帯でやり取りをしているというお話が！！ まったく、あんの類人猿がアアアアアアア！！」

「・・・黒子ー、勘違いしてるところ申し訳ないんだけど、相手は明俊よ」

「アアアアアアア・・・って、何だ明俊さんでしたの。それなら問題ありませんわ」

「何で明俊だったら問題なくて、アイツだったら大問題なの・・・でも珍しいわね、明俊の方から電話してくるなんて」

「確かにそうですね。とにかくお姉さま、急ぎの用でしたらご迷惑ですし、お出になつては？」

「そうですね。もしもし？」

『お、御坂出た』

電話から聞こえてきた明俊の言葉の後、にわかに電話のむこうが騒がしくなった。

『おおー！！』

『ついにあの超電磁砲の声を聞くことが出来たぜ！！ ヒヤッホー

「!!」

その騒ぎっぷりに、御坂は思わず携帯を耳から遠ざけた。

「な、何なの？」

『ああ、悪い悪い。ほらお前ら、むこうのお嬢様方が驚いていらっしやるから騒ぐのやめろ。……さて御坂、早速だが緊急事態だ』

「どうかしたの？」

先ほどまでの喧騒から一転、明俊の声が低く険しいものになったのを聞いた御坂の顔つきも鋭いものになる。

『まず確認しとくが……本当に気付いてないのか？』

「？ 何の話？」

『まあ、そっちはレベル3以上の人間しかいないから気付かないのも無理はないか……』

「だから、何の話よ？」

『……実は、俺たちは今暴走能力者に襲われてるんだ』

「なんですって？」

「それは本当ですか？」

『お、白井もそこにいるのか。ならちよつどいい。それでだな、御

坂にちよつとお願いがあつて電話したんだ』

「お願い？ 暴走能力者程度なら、アンタでも余裕でしょ？ アンチスキルもいるんだし、私が出る幕じゃない……」

『ああ、御坂にお願いしたいのは一緒に戦ってくれってことじゃない。それ以前に、俺や御坂が出張っても問題の根本的な解決にはならないような気もするけど……』

「それはどういうことですか？ 明俊さんとお姉さまでも解決にならない問題とは……？」

『今俺たちを襲ってきてる暴走能力者なんだが……揃いもそろつて元々レベル0の人なんだよ』

「レベル……0ですって？」

「レベルが上がった……という訳ではありませんの？」

『それはない。柵川中学は昨日能力測定だったんだが、そこでレベル0の判定を受けた人間も能力を使って暴走してるからだ』

「……どづいこと？」

『それが分かるなら苦労してない。とにかく、こっちは全生徒の半分近くを敵に回してる状態で、しかも路上も暴走能力者で溢れかえつて、迂闊に学校外に出られない状況なんだよ』

「とりあえずそっちの状況は分かったわ。それで、私に頼みたいことって？」

『常盤台の上層部にかけあって欲しいんだ。学舎の園を臨時の避難場所として開放してほしいってな』

その明俊の言葉に、御坂の電話に聞き耳を立てていたクラスのお嬢様たちはざわめく。

「……それ、本気で言ってるの?」

『本気だ。レベル0の人間が軒並み俺たちの敵になっちまったんだ、普通の場合に避難なんて出来ない。その点、学舎の園ならほとんどの方が能力者で安全だし、そこ自体の警備も元々厳重だしな。スペースも十分だし、俺たちや他の数校の学生をかくまってもお釣りがくるだろうし』

「確かにそうかもしれないけど……」

『頼む御坂、やってくれないか?』

「もちろんやるわよ。シスター……いえ、琴美の時にはアンタにも世話になってるし、その恩返しってことで。でも問題は、どうやって上の連中に掛け合うかってことよ」

『……確か、御坂は海原光貴つなばらみつぎと知り合いじゃなかったか? 常盤台中学の理事長の孫の』

「ええ、それが……って、アンタに私が彼の知り合いだって話したことあった?」

『えー!? い、いやあ、そんな噂を耳にしたことがあったような気』

がしたんだよ。そ、それより、理事長のところに行つて、あなたのお孫様とは親しくさせていただいておりますとか何とか切り返して交渉してきてくれよ。何なら俺と梓の名前を出してもいい。レベル5の第二位と第七位の名前を聞けば少しは説得の余地もあるだろ」

「・・・簡単に言ってくれるわね」

『御坂だからこそ信頼してこんな大それたこと頼んでんだろ？ こもいつまでもつか分かな・・・』

ドーン！！

御坂の電話のむこうから突然爆音が響き渡り、電話から漏れたその音を聞いた御坂のクラスメートたちの中からは「キャッ！！」という悲鳴が出る。

「何今の音!？」

『分からん!! ちょっと待って・・・ こりやまずいな、フェンスが破壊されて道路にいた暴走能力者たちが入ってきやがった!!』

「・・・つまり、グズグズしてる時間は無いってことね。分かったわ、やりましょう。アンタたちはこっちに向かって!!」

『ここから学舎の園までそんなにかからないぞ? 許可が出る前に

そつちに着いちまったたら門の前で待ちぼうけ・・・』

「私を誰だと思ってんの？ いいからアンタは、その他大勢を移動させる準備を始めなさい」

『・・・悪いな御坂、恩にきる』

「困った時はお互い様、でしょ？ ま、アンタや梓さんなら大丈夫だと思っけど。じゃねー！」

御坂との電話が終わった明俊は、フェンスが破壊されたことでパニックになりかけている生徒たちに向かって声を張り上げた。

「よーしみんな、聞いてくれ！！ 今、常盤台中学のエース様が直々に理事長に学舎の園の開放を進言しに行ってくれている！！ 俺たちはこれから、暴走能力者たちの攻撃を避けながら常盤台へと向かう。俺と梓が前と後ろをカバーするから、全員全速力で走ってくれ！！」

「「おおー！！」」

「これで助かるぜ！」

明俊の声に、その場の全員が思い思いの言葉を叫ぶ。

明俊は携帯で梓に電話をかける。

「梓、そっちはどうだ？」

『少し疲れてきたけど大丈夫よ。今お兄ちゃんの声が聞こえたからこれからどうするのかは分かった。私が前をカバーするからお兄ちゃんは後ろをお願い！』

「分かった。準備はいいか？」

『ええ、もちろん！！』

「よし、それじゃ向かうとしますか・・・ いざ、常盤台中学へ！」

第39話 いぞ常盤台へ（後書き）

「常盤台に避難なんてご都合主義だろ」とか「他に場所なんていくらでもありそうなんだが・・・」といったツッコミもあるかと思いますが、その辺はストーリーの為ということでご容赦下さい（汗

第40話 行間 動き出す人々（前書き）

明俊たちが柵川中学から常盤台へむかう話・・・の予定でしたが、その前に行間として1話はさみました。

第40話 行間 動き出す人々

9月2日。

御坂琴美は明俊・梓の寮を出ると、カエル顔の医者がいる病院へとむかって歩き出した。

といっても今日はホルモンバランスなどをいじるためのいわゆる「調整」のためではない。

妹達は調整のため全国各地に散らばったが、琴美や10032号、いわゆる御坂妹などの10人近くの妹達はカエル顔の医者の病院に世話になっている。

彼女たちはこの病院で調整を受けながら、病院の雑用業務を手伝っている。

さすがに10人も同じ顔をした人間が表立って作業するのは病院にいる一般の人の注目をひいてしまうため、大抵の仕事は裏方ではあるが。

下にはスカートをはいているのだが、明俊や梓が注意しているにもかかわらず、相変わらずスカートが風でなびくことには無頓着なようで、通行人の視線を集めている。

もつとも、彼女が今スカートを気にしていないのは、彼女が現在ミサカネットワークに接続していてスカートに対する注意が薄らいでいるからでもあるわけだが。

「(ミサカネットワークに接続、現在時刻を確認。現在の時刻、午前9時58分。後2分で10時ですか)」

『(あ、10030号、おはようございます、とミサカ10032号は挨拶をします)』

「(こちらこそおはようございます、とミサカ10030号は挨拶を返します)」

『(10030号久しぶりー!! っ、ミサカはミサカは出来る上司みたいにキチンと言葉をかけてみたり!)』

「(おや上位個体、体の方はもう大丈夫なのですか? とミサカ10030号は一応上位個体の身を心配します)」

『(ムー、一応ってなに一応って!? ミサカなら大丈夫だよ! っ、ミサカはミサカは元気よく返事してみたり!)』

「(なら良いのですが、とミサカ10030号は内心本当かよと怪しみながらとりあえずこの話題を打ち止めにします)」

『(ミサカと打ち止めをかけて笑いを誘おうとしてもダメなんだから!! っ、ミサカはミサカは・・・あれ!? ミサカは打ち止めで打ち止めはミサカ・・・)』

『(10030号、それ以上上位個体をからかうとこのネットワークにも負荷がかかる恐れがあるのでその辺にしておきましょう、とミサカ19090号はこの場を丸くおさめるべく尽力します)』

「(そうですね。流石に可哀そうなのでこの辺にしておきますか、

とミサカ10030号は矛をおさめます」

『(ミサカは打ち止めで打ち止めはミサカ・・・)』

『(・・・これはしばらく放っておくしかありませんね、とミサカ10032号はため息をつきます。ところで10030号、後どのくらいでこちらに到着しそうですか？ とミサカ10032号は確認を取ります)』

「(そうですね・・・ここからだその後10分程度でしょうか、とミサカ10030号は答えます)」

『(了解しました。今日は機材の運搬などが多いので働きがいのある1日になりそうですよ？ とミサカ10032号は10030号に有益な情報を伝えます)』

「(・・・どこも有益ではありません、とミサカ10030号はため息を・・・おや?)」

琴美は周囲の違和感を感じて歩みを止める。

『(どうかしましたか10032号?)』

「(・・・何か、いつもと違うような感じがします)」

琴美がその違和感の原因を突き止めようと辺りを見渡すと、道路の反対側にある中学校が目にとまった。

フェンスの向こう側では体育の授業が行われているらしく、体操を着ている人間がグラウンドにいた・・・そこまでは良かった。

しかし、果たして発火能力者や念動力系能力者が本気で人に向かって能力を使うのが「体育」なのだろうか？

「（・・・一体何が？）」

琴美はミサカネットワークに今見ている光景をそのまま映像データとして流し感覚共有する。

「（これをどう思いますか？ とミサカ10030号は他の個体はこの光景について意見を求めます）」

『（・・・学生同士でじゃれあっているようなシーンには見えませんね、とミサカ10032号は考えます）」』

『（ミサカもそう思います、とミサカ19090号も10032号の意見に同意します）」』

「（やはりそう思いますか、とミサカ10030号はどつしたものと提案しながら答えます）」

『（近くにアンチスキルはいないのでですか？ とミサカ10032号は質問します。このような騒ぎならアンチスキルが出動しているはずです）」』

「（いえ、まだ到着していないのかもしれませんが・・・とそれより、アンチスキルどころではありません、とミサカ10030号は目の前の光景に警戒レベルを高めます）」

琴美の目の前には、一人の男が鉄パイプを持って立ちふさがって

いた。

その表情は琴美に対して殺意も持っているように見え、琴美は持っていた学生カバンの口に手をかけながら男の様子をうかがう。

すると男は、鉄パイプを振りかざし琴美の方へむかって突進してきた。

「（単純な攻撃・・・武器を使うまでもありません！！）」

琴美は身体の表面に電気を溜めると、額から男に向かって放電する。

「（仕留めました！！）」

しかし、琴美の放った電撃は男に当たらず素通りした。

「（！？ 幻影！？ 光学系能力者ですか！！）」

妹達には戦闘用プログラムがあらかじめインプットされているため、状況判断のスピードはプロ級である・・・が。

それでも気付いた時には既に遅く、放った電撃のコースから少し横にそれた場所にいた男が鉄パイプを振り下ろす。

琴美はとっさに、持っていた学生カバンでその攻撃を防ぐ。

カバンに当たっただけだというのにガキン！！ と鈍い音がしたのは、琴美の学生カバンの中にサブマシンガンと拳銃が入っているからである。

「（今です！！）」

鉄パイプをカバンで受け止めた体勢のまま右足を男の横っ腹に繰り出す。

そして、蹴りをくらってよろめいた男に電撃を浴びせ気絶させる。

「（危なかつたですね。それにしても、この男性は何のためにミサカを襲ったのでしょうか？ とミサカは疑問を呈します）」

「（分かりません。ですが、顔の表情が尋常ではありませんでしたね、とミサカ19090号は観察結果を口にします）」

「（・・・とりあえず、救急車を呼んでおきますか。もしかしたら何かの精神病か薬物中毒かもしれません、とミサカ10030号は判断します）」

「（こちらでも手配することは出来ませんが、一応正規の手段で呼んでおいた方が良いでしょう、とミサカ19090号は後の説明の手間を省くための案を提示します）」

「（そうですね、とミサカ10030号はその意見に賛成します）」

琴美はスカートポケットに手を突っ込むと携帯を取り出し、救急車を呼ぶための3桁の番号を・・・押せなかった。

琴美がボタンを押そうとした瞬間、叫び声とともに先ほどの中学校から大勢の人間が外に飛び出してきたのに目を奪われたのだ。

制服を着ている人間も多数いるところを見ると、校内からも逃げ出してきたようであった。

「……体育の授業だけではなく、学校全体で何かがおきているのでしょうか？」

救急車を呼ぶことも忘れてその光景に見入っていると……

「あらあら、常盤台のお嬢様が学校にも行かずにこんなところで油売ってて良いのかしらーん？」

後ろから声が聞こえて琴美が振り返るとそこには、栗色でウェーブのかかった髪を腰の辺りまでのばした女性が一人立っていた。

一言で言ってしまうえばかなりの美人であり、同性である琴美が見ても思わずドキッとしてしまうほどだ。

それだけに、片手に持っているコンビニのレジ袋（中に入っているのは……コンビニ弁当であろうか？）がかなり異質なものに見える。

「……あまり詳しいことは言えないのですが、諸事情によりミサカはこの制服に身をつつんでいます。常盤台中学の生徒ではないのです、とミサカは出会ったばかりのあなたに懇切丁寧に説明します」

「なにそれ……って『ミサカ』？……ああ、なるほどなるほ

ど。そういって」と

「初めてあった人にいきなり誤解されると問題なので断っておきませんが、ミサカは『御坂美琴』お姉さまでは……」

「ああいいのいいの。そんなことは分かってるから」

「……あなたは一体？」

「こつちも詳しいことは言えないんだけど、アンタと同じ、この学園都市の闇に属してる人間……ってとこね。これ以上はお互いのためにならないから言わないわ。それより、周りのこの騒ぎについて何か知らない？ さっきからウザくてたまんないんだけど」

「ミサカもそのことについて何か知りたいと思っていました、とミサカは返答します」

「つまり、何も知らないってことね。ホント、さっきからこの私に能力使って喧嘩売ってくるクソみたいな連中が後を絶たないのよ。いっぺん痛い目にもあわせとこうかしら？」

そう女が言った瞬間、ピーッ、ピーッ、という電子音が鳴り響く。

琴美が携帯を取り出すが無も着信していなかった。

「ああ、私の端末の音よ。それにしても何だったのよ、これから憂さ晴らしでもしようって時に……」

女は不機嫌そうにポケットから端末を取り出すと髪の毛を指でクルクルといじりながら電話に出る。

「なによ。こつちは今からストレス発散作業に景気良く突入しよう
って考えてたのに」

『やっぱり電話しといて良かったわ。アンタのことだから、どうせ
一般人に攻撃されて憂さ晴らしにビームぶっ放そうとしてたんでし
よこいつときたらーっ!』

端末から聞こえてきた大声に琴美はビクツと震え、女も思わず端
末を耳から遠ざける。

「当然じゃない。あつちから勝手に攻撃してきたんだし、正当防衛
でしょ」

『アンタじゃ過剰防衛すらぬるいってのが分かんないのかなこいつ
ときたらーっ! そんなことしたら二分割された人の死体がそこら
じゅうに出来ちゃうでしょーが!』

「えーいいじゃん」

『良くないわよこいつときたらーっ! じゃなくて、私がわざわざ
アンタに電話をよこしたのは、アンタに一つ命令があるからよ』

「命令い? こんなときにかつたるい仕事まわしてきたら承知しな
いわよ?」

『仕事じゃないわ。今街中で能力者が暴れてるでしょ?』

「だから、私が今からそのクソどもをぶっ飛ばして・・・」

『その能力者どもに対してアンタは攻撃しちゃダメってのが命令よ』

「はあ！？ むこうから攻撃かましてくるのにこっちは攻撃すんなってどういう見なのよ!？」

『良いから人の話は最後まで聞きなさいよこいつときたらーっ！
こっちもまだ詳しいことは分かってないんだけど、どうやらソイツらは元はレベル0の無能力者だって話なのよ』

「・・・アンタ、仕事のしすぎでついに頭おかしくなっちゃった？
無能力者が能力を使って暴れてるなんて、オカルトにも程があるわよ」

『私だって信じられないけど、間違いないわ。下部組織の連中の中からも、レベル0の人間だけおかしくなっただって報告が上がってるし』

「・・・で、私に命令するのはそれだけ？ どんな仕組みが知らないけど、そんな大それたことしかした犯人つてのがいるんでしょ？
まさか、これが自然発生的に起こって訳じゃないでしょうに」

『それが、まだ情報が何も掴めてないのよ。流石に自然発生じゃないでしょうけど、犯人側が完璧な情報封鎖を行ってるみたいなのよ。だから、それが掴めるまでは待機ってとこね』

「チツ、めんどくせえ。それで、他の連中には知らせたのかよ？」

『んーまだよ。アンタが知らせてくれると助かるなあー。こっちは情報収集で手一杯・・・』

「ハイハイ。じゃーねー」

ピッ

「・・・ずいぶん元気なお相手でしたね、とミサカは電話が切れた今でもビクつきながら感想を述べます」

「ああ、いつもあんな感じだからもう慣れたわ」

「それで、この事態についてですが・・・」

「むこうによると、どうやらレベル0の人間が能力を使って暴れてるってことみたいよ。アンタにレベル0の知り合いがいるなら、今頃大変なことになってるかもね」

女にそう言われた琴美は、頭の中にレベル5の第二位の少年のことを思い浮かべる。

「（確か彼の通っている学校も、レベル0の人が多数いるという話でしたね・・・様子をみてみましょう、とミサカは今後のプランを立てます）」

レベル5の第二位なのだから本来は心配ないのだが、それでも琴美は彼のことを気遣わずにはいられなかった。

今まで様々な事件に巻き込まれ、自らの命を助けてくれた想い人だから当然だ。

琴美はミサカネットワークに女から聞いた情報を流し他の個体にも情報収集を依頼しながら、学生力バンの中からサブマシンガンと拳銃を取り出し状態を確認する。

「へえー、『ミサカ』ってそんなものも持ってるんだ」

その光景を見た女が、別段怖がる様子もなく言った。

「これを見て、特に驚く様子を見せないあなたの方がすごいと思いますよ？」 とミサカは個人的な感想を述べます」

「んー。まあ、見慣れているし？」

「やはり、闇に属している人間ということですか・・・ あなたのことは気になります、ミサカはそろそろ行きます」

本当はその闇についてももう少し追求してみたい琴美であったが、今は想い人とその双子の妹の安否が心配だったので先を急ぐことにする。

その女性に一礼すると、琴美は裏路地を通って二人の通う中学校へと駆け出した。

「ふーん、あれが『あの超電磁砲』の量産型クローン……ね」

琴美の後ろ姿を見つめながら、先ほどの女がそう呟いた。

「（あのくそ忌々しい第四位のクローン。研究所でやりあったときは放って置いた方が苦しむって考えて殺しはしなかったけど、結局第一位様もどこぞのレベル0に無様に負けたってことで実験も中止。第四位も苦しむことが無くなっちゃったってことか。今のクローンを代わりにぶち殺してやっても良かったんだけど、私は代理を立てて満足しちまうほど小さくはないんでね）」

女はこんどは道路の反対側の中学校を見る。

「（それにしても……私ら『アイテム』や他の暗部の連中の情報網をすり抜けて今回の騒ぎを起こしてる連中、中々やるじゃない？ よほど成功させたい実験か何かってところ、か）」

女は先ほどの端末を取り出すと、電話帳に登録してある番号の一つを選んでコールする。

数回のコールの後、電話がつながった。

「もしもし。3人でよろしくやってた？」

『おや、麦野がわざわざ超電話してくるなんて珍しいですね。超特別な仕事ですか？』

「そうじゃないんだけど。3人とも集まってる？」

『はい。いつものサロンにいます。滝壺さんもフレンドさんも既に超集合済みです』

「そ。私もこれからそっちに行くから。そうそう絹旗、今はあんまし外に出ない方が良くわよ。くそうるさい虫がたかって来るから」

『・・・？ よく分かりませんが、麦野が超そう言うのならそうします。二人にも超そう言うっておきます』

「ん。そっちに着いたら説明するわ。といっても、私も良くは知らないんだけどね」

麦野、と呼ばれた女は絹旗にそう言うのと電話を切って歩き始める。

「（レベル0の人間が能力を使い出してしかも暴走・・・中々面白いことになりそうじゃない？ 早くこの騒動を起こしてる連中の手がかりを掴んでその顔を拝んでボコボコにしてみたいわね）」

麦野はそう考えてニヤツ、と笑うと第三学区にあるサロンに向かった。

第40話 行間 動き出す人々（後書き）

さて、ついにあの組織も登場と相成りました。

次回こそ、柵川中学脱出、常盤台中学へ、となります。

第41話 明俊襲撃さる

「道路上の能力者はあらかた片付いたわね・・・ みんな、行くわよ!！」

その梓の言葉と共に、柵川中学から人の群れが一斉に飛び出す。

集団は、梓を先頭に全力で常盤台中学へとむかって走る。

当然のように暴走能力者からの攻撃を受けるが、梓はその全てを氷の壁で防ぐ。

中には発火能力者、それもそこそ高いレベルの攻撃をくらうこともあったが、固体になるまで冷却された窒素の前には無力であった。

一方、最後尾を守る明俊は拳銃の動作を確認しながら初春のパソコンで常盤台中学への道のりの防犯カメラの映像を見ていた。

「ここから常盤台まではさほど遠くはないけど、この数だ、前と後ろだけじゃ横が危ないな・・・ 佐天、能力は使えそうか？」

明俊が声をかけると、佐天はやや緊張した顔つきでうなづく。

「な、何とか大丈夫だと思います。けど、人にむかって能力を使っただことなんてほとんど無いし、やっぱりちょっと不安かも・・・」

「人にむかって使わなくていい。飛んでくる攻撃を風で逸らすだけ

で十分だ。出来るか？」

「・・・はい。大丈夫です、やれます」

「よし。じゃあ佐天は、列の真ん中らへんから側面をカバーしてくれ。梓には出来るだけ壁際に行くように指示してあるから、反対側を頼む」

「わ、分かりました！」

佐天はなおも緊張した面持ちではあったが、明俊の言葉を受けて列の中心付近へ走っていった。

「初春、ここから常盤台までは決して長くはないけど険しいと思う。ちよつとキツイ運動になるかもしれないけど、出来るだけ俺がついてるから安心して走れ」

運動が極端に苦手な初春を気にかけて明俊がそう言うと、初春は若干苦笑いにも似た笑顔を浮かべる。

「気遣ってくださってありがとうございます。私もここでやられるわけにはいきません。頑張ります！」

「その意気だ。さあ、後ろから迫ってきてる、行くぞー!!」

初春を先に門から外に出すと、一度後ろを振り返り確認する。

「（他には・・・誰もいないな。おかしくなったみんなを置いていくのは忍びないが・・・こつちも命がかかってるからな）」

こうして、柵川中学のおよそ4〜5割の生徒が一斉に常盤台中学へ向かって移動を開始した。

琴美は路地裏という路地裏を走りぬけ、ミサカネットワークを駆使した限りの最短ルートで柵川中学を目指していた。

途中、襲い掛かる暴走能力者を電撃で払いのけながら、ミサカネットワークから入手した情報を頭の中で整理する。

「（どうやら、あの女性から聞いた『レベル0の人間が能力を使って暴走している』というのは本当のようですね・・・あちこちで暴走した無能力者が正常な能力者を追い掛け回しています、とミサカは得た情報と見た光景を総合します）」

琴美自身も自らのその分析に納得はいつていないが、目の前の光景はそれが現実であると如実に伝えている。

路地を塞ぐように立っていた暴走無能力者を電撃で蹴散らすと、視界が開けた。

そこで琴美が見たのは・・・

「(！?) あれは・・・佐天お姉さま!?)」

琴美が見たのは、隊列をなして走る学生の集団と、そこを周りを警戒するようにしながら走る佐天の姿であった。

「(見間違い・・・いえ、確かにあの制服は彼と梓お姉さまの学校と同じ制服でした、とミサカは結論付けます。それにしても、佐天お姉さまたちが一体どうして・・・)」

しばらくその場に留まってその集団を見送っていると、全員が通り過ぎ辺りには静けさが訪れる。しかし・・・

「(彼と梓お姉さまの姿がありませんでした、とミサカは若干不安を覚えます。あの二人に限ってそんなことはないとは思いますが・・・)」

実際は梓は既に通り過ぎているのだが、そんなことは露知らずの琴美は最悪のシナリオを脳内に思い描く。

「(万が一にもそんなことは無いはず。ですが、それでも何が起るのか分からないのが学園都市。確認せずにはいられません!!)」

琴美は路地から表通りに出ようとするが、前を暴走無能力者が塞ぐ。

電撃で片付けようとするが、後ろからも足音が聞こえてくる。

「(前門の虎、後門の狼・・・ですか。少々マズイ展開ですが、ここでやられるわけにはいきません!)」

琴美は今まで使わずにいたサブマシンガンを構える。

流石に中身は実弾ではなく、アンチスキルなどが制圧用に使っ
△弾である。

「(さあ、覚悟しなさい!!)」

頭に着けていた軍用ゴーグルを下げて装着すると、銃の引き金に
手をかけた。

明俊と初春は、隊列から少し離れたところで立ち止まって休んで
いた。

明俊は体力に余裕があるのだが、予想通り初春が遅れ始めたため
彼女につき合う形で隊列から離れたのである。

「大丈夫か初春？」

「は、はい。これくらい平気ですよ……ここで死んじゃうくらい
ならこっちの方がマシです」

初春はわずかに笑顔を浮かべるが、疲労の表情の方が上回っているのを明俊は見逃さなかった。

「もう少しで常盤台だ、頑張れ！」

「はい！・・・そろそろ行きましょう、わがままで遅れるなんて迷惑かけるだけですし」

「もう良いのか？ よし、じゃあ行くか」

そう言つと、明俊は右手を初春の前にスツと差し出す。

「え？」

「掴めよ。初春がきつくなならない程度にひっぱって行くからさ」

「でも・・・」

「良いから。あんまり遅れるとみんなに迷惑だろ？ 行こうぜ」

明俊は手を掴まない初春を見かねると、自分から手をつないで走り出した。

その走るスピードはちゃんと初春のスピードを考慮されていて、初春に負荷はさほどかからなかった。

「（ちゃんと私のことを考えたスピードの走り・・・ホント、この人は無抵抗にそういうことが出来るんですね。佐天さんが好きになつちゃう気持ちも分かります。でも、この人は琴美さんのことが好きなんですよね・・・明俊さんって、罪な人です）」

「ん？ 何か言ったか初春？」

「い、いえ、何も。それにしても、ホントにこの学園都市はどうしちゃったんですかね？」

「さあな。でも、レベル6を作り出すために2万人もの人間を殺すことを計画する街だ、これくらいのことでも驚いてちゃいけないのかもしれないぜ？」

「・・・何か、ちょっと怖いですね」

「（学園世界に限らず、この世界の怖さなんてはつきり言ってこんなもんじゃないんだけどな・・・）そうだな。お、学舎の園を囲ってる柵が見えてきたぜ」

「よ、良かった・・・もう少しですね」

「ああ。さつきから角材飛ばしてくる能力者とかいるけど、中に入っちゃえば仲間も大勢いるし大丈夫だろ。ま、それ以前に俺一人でもそうそうやられたりはしないから安心して・・・」

ドスッ！！

「・・・あ？」

自らの耳の近くでそんな音を聞いた明俊は、首を左にむける。

今、明俊の左手は初春の右手を握っている。

明俊は視線を手から肩へと移動させる。

そして明俊は見た。自分の左肩に釘が深々と刺さっているのを。

「う、ぐ、ぐあああああああああああああああ！！！」

自らの身体に何がおこったのか把握した途端、左肩から全身に激痛が走り地面にひざまずく。

「あ、明俊さん！？」

「あああああああああああ！！！」

明俊が左肩を押さえているのを見た初春がその部分を見ると、釘が深々と刺さっていた。

釘の大部分は身体の中に食い込んでおり、頭の平らな部分がわずかに身体の外に見えるだけであった。

「明俊さん！！ 大丈夫ですか！？」

「あああああああ！！ こ、これが大丈夫なわけないだろうがああああああああ！！！」

自分でも若干ぶつ壊れ気味になってるな、などと思いつつ、明俊は状況を振り返る。

「（お、おかしい。俺は飛んでくる角材なんかを考慮して反物質を周囲に展開していた。こんな釘、とつくに消え去っているはず。なのになぜ俺の身体に到達出来た？ 反物質をすり抜けて飛んでくる釘・・・まてよ、まさか・・・！！）」

ある一つの仮説にたどり着いた明俊はすぐに後ろを振り向いた。

そこには、どこの生徒かは分からないが女子生徒が一人立っていた。

サツと周りを見渡すが、他には誰もいない。

「（一つだけ、反物質をすり抜けて俺を攻撃する能力がある。『レポート』。これなら、あらゆる3次元的制約を無視して釘を打ち込むことができる。クソツ！ こりゃとんでもなく厄介な能力者が出てきた！！）」

明俊が自分の周囲360度全てに反物質の壁を展開していても、テレポートは直接明俊の体内に釘を文字通り「割り込ませる」。

回避は不可能である。

「（だが、テレポーターなら心臓か脳内に一発ぶち込めばそれで相手を即死させることが可能なはず。何故肩なんだ？ 単純に精度が甘いからか？）」

明俊がそんなことを考えているあいだにも、その女子生徒は明俊

や初春との距離を徐々に詰めてくる。

そこで、明俊は一つの考えを思いつく。

「（こいつ、見たところ他に釘や飛ばせる物を持ってないな。しかも、歩いて近付いてくるってことはレベルに換算して2〜3程度か）」

あくまで目安ではあるが、テレポーターはレベルが4になると自身をテレポートできるとされている。

「（レベルがそこまで高くないってのが唯一の救いか。今のうちに初春を……）」

そう考えた明俊は、動かせる右手で初春の背中を押した。

「先に行け初春。こいつは俺が何とかする」

「何言ってるんですか明俊さん！！ 明俊さんだけ置いていける訳ないですよ！！」

「いいから行くんだ初春。彼女は十中八九テレポーターだ。俺の能力でもどうしようもない。それに、暴走したテレポーターなんて放置したらこれからここを通る一般人に危害が及ぶのは必須だ。それだけは絶対に防がなきゃいけない」

「ですが……」

「……それでも、初春が何かしたいって思うなら、常盤台に行つて誰でも良いから呼んできてくれ。出来れば白井あたりがオススメ

だ。痛みであんまり動けなくなっちゃったからな」

「明俊さん……（私に出来ることはそれだけなんでしょうか……いいえ、違います！ これは、今私にしか出来ないことを任されているんです！ あの明俊さんが、私を頼ってくれているんです！）分かりました！ 必ず帰ってきますから、ここで待っていてくださいね！！」

「……ああ！ 頼んだぜ！」

初春飾利とは、一見能力のレベルも低いか弱い少女のように見える女の子である。

しかしその内側には、自らの置かれた立場を冷静に分析し、かつ自らの信念を曲げない強さが秘められている。

今自らに出来ること、そして自らがなすべきことは、強力な相手に無謀に立ち向かうことではなく1秒でも早く仲間を呼ぶことだと瞬時に理解したのである。

「必ず戻ってきます！ ……ですから、死んじゃダメですからね！！」

明俊とつながっていた手を離すと、初春は单身常盤台の方へ走り出した。

「死んじゃダメですからね……か。死亡フラグすぎるセリフだろそれ」

明俊は何とか足に力を入れて立ち上がると、右手で銃を構えた。

「……痛みで銃口がぶれるけど、学園都市の銃がほとんど無反動だから右手だけで撃てるのが幸いしたな」

相手が自らを転移出来ないテレポーターであるならば、何も物を所持していない今の相手はただの的である。

「悪いな、少しのあいだ眠ってて……」

バキッ！！

明俊がトリガーを引こうとしたまさにその時、横から飛んできた角材に明俊の身体が吹き飛ばされた。

「ぐああああっ……！」

そのままコンクリートの壁にたたきつけられる。

「（くっそお……！ 銃を撃つために反物質の壁を解除したその瞬間に攻撃を仕掛けてくるとは……）」

何とか意識を失わずに済んだ明俊がすぐに状況を確認すると、先ほどのテレポーターとは別に新たな男子生徒が明俊に近付いてきていた。

「（遠距離からの念動系能力による攻撃・・・か。第二位としたことが、こんなことでやられるなんてな）」

一方、明俊はかなりマズイ状況に追い込まれていた。

「（今の攻撃で銃はどこかにぶっ飛んじまったし、この肉をえぐる痛みで能力を正確に使える自信もない）」

しかし、事態は悠長に明俊を待つてはくれなかった。

明俊を吹き飛ばした角材が、運悪くテレポーターの女子生徒のすぐ近くに転がっていたのだ。

「（ちよー！！これは本当にマズイ！！あんなもの体内に転移されたら脳や心臓ならもちろん即死、他の部分でも出血多量で数分と持たねえぞ！？）」

その間にも、テレポーターは足元の角材に視線を向けると腰をかがめてそれに触れようとしていた。

「（くそっ！！こうなったら能力を使うしかねえ！！）」

明俊は動かせる右手のひらに反物質を生成すると、自らとテレポーターのちょうど中間地点にむかって投げつけた。

少しでも狙いが狂えばテレポーターに当たってしまうくらい両者の距離は接近していて、明俊の行動は一種の賭けであった。

反物質は明俊の狙い通り、彼とテレポーターのあいだの地面に落ち辺り一面に爆風が吹き荒れる。

地面に座り込んでしまっている明俊に、爆発で飛んできた小さなコンクリート片が容赦なく当たるが、肩から走る激痛でそれを反物質で防ぐことすら出来なかった。

しばらくして爆風が治まり明俊がそつと目を開けると、先ほどまで明俊に襲い掛からんとしていた二人が地面に倒れていた。

出血などの外傷が見られないところからすると、殺してしまったはいないようだと思い安堵する明俊。

しかし、彼が危険な状態に置かれていることに変わりはない。

今までジャッジメントとして様々な能力者や多数のスキルアウトと戦い、そしてあの第一位である一方通行とも決着こそつかなかったが殺されることはなかった明俊ではあったが、今回のようにくつきりと肉体にダメージを負ったのは初めてのことであった。

釘が一本刺さっているだけ（学園都市という場所を考えれば、『だけ』という表現も正しくなる）だが、明俊にとっては精神的ダメージがかなり大きかった。

まして、左肩ということは一歩間違っていれば（相手が後少しでも強力なテレポーターだったならば）釘は心臓に直撃していたので

ある。

その事実を認識した明俊の精神的ダメージは計り知れない。

初めての本格的損傷、そして冷静さを欠いた明俊の意識は徐々に薄らいでいった。

「（おいおい・・・ 初春のフラグ見事に回収しちまうんじゃねえか俺・・・？ こんなことで回収するなんて、レベル5の名前が泣くよなあ・・・）」

この程度の怪我で死に至るとは明俊も考えていないが、この状況で意識を失うことが死を意味することは容易に想像がつく。

「（こういう時って、案外踏ん張れるもんだって思ってたけど・・・ やべ、目がかすんで・・・）」

最後の足掻きを見せる明俊ではあったが、釘が一本丸々身体に食い込んでいるダメージとコンクリートに打ち付けられたダメージは大きく、ついに明俊は気を失ってしまった・・・

初春飾利は今まで走ったことのないというほどの全速力で走り、

学舎の園へたどり着いた。

「（来るまでのあいだに白井さんに電話入れておいたんだけど・・・）」

初春が辺りを見るが、白井の姿はなかった。

学舎の園の門の奥には、避難に成功した学生の座り込んだり怪我を治療している姿があった。

「君！ 君も避難してきた学生か！？」

ひざに手を置いて呼吸を整えていた初春が顔をあげると、銃を持ったアンチスキルが近付いてきていた。

「は、はい！」

「そうか。では中に入ってくれ」

「初春！！」

アンチスキルに続いて中に入ろうとした初春の前に白井がテレポ―トして現れた。

「白井さん！ 遅かったじゃないですか！」

「中が避難してきた学生でごった返して置いて処置に追われていたの。それで、明俊さんがテレポーターに襲われたのはどの辺りですのー！？」

「ここを少し真っ直ぐ行つたところ、ちょうど今工事をやっている付近でした！」

「あそこですわね・・・分かりましたの！！　中に佐天さんたちもいますの。そこで待機して置いて下さいな！」

そう初春に言い残すと、白井はテレポートして消えた。

「これで最後ですか、とミサカは汗をぬぐいながら周囲を確認します」

狭い路地での戦闘を何とか切り抜けた琴美は、倒し損ねた暴走能力者がいないか確認しながら銃のマガジンを抜いた。

「（マガジン一つ分すべて使ってしまったか・・・　これからあまり派手には使えませんね、とミサカは新たなマガジンを装填しながらこれからの戦闘に不安を覚えます）」

装填を終えた琴美は表通りへと出る。

「（彼と梓お姉さまが通り過ぎるのは確認できませんでした。携帯に連絡を入れてみましょう）」

琴美は携帯を取り出すと電話帳を開き、「二つある」工藤「の名字のうち、上に名前がある明俊に電話をする・・・が、いつまで経っても出ない。」

「・・・騒ぎで電話に気付いていないのでしょうか?」

琴美は一度通話を切ると、今度は梓に電話をかける。

すると、今度はつながりむこうから騒音が聞こえてきた。

「もしもし? 梓お姉さま?」

『琴美!? ゴメン、連絡入れるの忘れてたわ! 大丈夫だった!』
『?』

「はい、大丈夫です、とミサカは自らの強さをアピールします」

『良かった・・・ 私は今学舎の園の中、常盤台中学にいるの。琴美もこっちに来れる?』

「辛い学舎の園へと通じる表通りにいます。ところで・・・彼はそこにありますか? とミサカは確認します」

『お兄ちゃん? うーん、いると思うけど・・・ここに来るまで別行動だったし、着いてからも会ってないから・・・どうして?』

「・・・いえ、何でもありません。では今からそちらに向かいます」

電話を切った琴美の心中には、言いようのない不安が渦巻いてい

た。

「梓お姉さまはああおっしやっていましたけど……彼が仮に梓お姉さまに今すぐ会えない状況にあるとしても、連絡の一つもしないというのは不自然です、とミサカは不安を抑えながら思案します」

あれだけ妹思いの明俊が梓に電話やメールの一つもしていない、という現実が、琴美の脳裏に一抹の不安を生じさせる。

「……自らの目で確認するのが一番でしょう、とミサカは行動を起こします」

琴美は表通りを、学舎の園の方角とは反対の方向にむかって走り出した。

少し走ると、角材がやたらに散乱している光景が見えてきた。

「あそこだけやけに荒れていますね、とミサカは不審に感じながらも近付いてみます」

近付いてみると、地面のコンクリートが円形にひび割れていて、近くには男子学生を女子学生が一人ずつ倒れていた。

「(円形のひび割れ……爆発でもあったのでしょうか?)」

大方、その爆発が何かに巻き込まれてこの二人は気を失っているのだろう、と琴美は推測しながら周囲を見渡し……見つけた。

「そ、そんな・・・ 明俊さんっ!？」

コンクリートの壁にもたれかかってうなだれている明俊を見つけた琴美は一目散に駆け寄り声をかける。

「しっかり、しっかりして下さい!！」

大声をかけながら揺さぶってみると、うつすらと明俊の瞳が開いた。

「う・・・ っ、こと・・・ み？」

「そうです!! しっかりして下さい明俊さん!!」

「は、はは・・・ 初めて名前で・・・ 呼んでくれたな・・・」

「何をこれから死んでしまう人のようなセリフを言っているんですか!！」

「い、いや・・・ 流石に死にゃしないとは思うけど・・・ 左肩に釘が目一杯食い込んでさ・・・」

その言葉を聞いて琴美が明俊の左肩を見ると、釘が後ろから頭を残してほぼ完全に突き刺さっていた。それも二本も。

「(ど、どうすれば・・・)」

琴美は応急処置の方法を考えるが、それを行える道具なんて持っていない。

かといって、釘に手を触れてしまうのはやってはいけない行為である。

抜いた途端に血が傷口から出てきてしまうからだ。

「（危険ですが、彼を背負って常盤台中学まで行くしかないですね）」

琴美が覚悟を決めて明俊の右肩に腕をまわそうとしたその時、

「明俊さん！！ 大丈夫ですよ!？」

まさに救世主、白井黒子がテレポートして二人の前に現れた。

「た、助かりました、とミサカは安堵の表情を隠せません」

「もう大丈夫ですよの琴美さん。この白井黒子が来た以上、二人を安全に常盤台までお送りしますわ」

白井はテレポートする前に、明俊の状態を確認する。

「左肩に釘が二本・・・完全にテレポーターの仕業ですわね。

心臓に直撃しなかったのが不幸中の幸いというか、ほぼ奇跡ですわね・・・」

「・・・」

「大丈夫ですよの琴美さん。これならどうとでもなりますわ。さ、長居は無用ですよ、テレポートいたしますわ」

白井は明俊と琴美に触れるとテレポートを発動。

これにて、明俊の常盤台中学への避難も無事に成功した。

第42話 暗部組織『アイテム』（前書き）

今までで初めて（だと思えます）、本編に明俊の文字も梓の文字もない回となっております。

タイトル通り、あの組織も動き出します。

第42話 暗部組織『アイテム』

白衣を着た一人の男が、窓が無いせいで昼間というには明るさの足りない部屋で小形端末を凝視しながら手を動かしていた。

決して引き籠もりではなく、いじっている端末も携帯型ゲーム機などではない。

では彼は一体何をしているのか？

先ほど「引き籠もりではない」と記したが、正確には「引き籠もりを強制させられている」状態であり、的確な日本語としては「軟禁」状態である。

彼は先日、学園都市の裏の研究者たちが現在最も関心を集めている一人の少女を、自らも研究者でありながら逃がしたとして軟禁されているのである。

何故もつと重い処罰が科されていないのか、というと、彼が複数の研究所に籍を置いているからである。

彼は、彼を軟禁処分に行っているこの研究所よりも重要度（表の間から見ると危険度とも言える）の高い研究所にも籍を置いていて、相手方の研究所のお偉いさんからの「処罰許可」が降りていないため、仕方なく軟禁という扱いになっているのである。

……………話を元に戻そう。

彼が今一心不乱に端末をいじっているのは、メールを作成しているからである。

パソコンや携帯電話は軟禁されるときに取り上げられてしまったのだが、この小形端末だけは何とか隠して持ち込むことに成功した、という訳である。

彼はしばらく文章を打ち続けていたが、白衣のポケットからこれまた小さいチップ（記憶媒体）を取り出すと端末の差込口に挿入し、メールに中のデータを添付する。

ニヤツと笑うと、送信ボタンを押そうとする。

……とその時、タイミングの悪いことに食事のトレーを持った一人の男が部屋のドアを開けた。

「桜川研究員、昼食をお持ちし……… 何をしている!？」

食事を運んできた男は、「桜川」と呼ばれた研究員が端末を持っているのを発見するや駆け寄り、彼から端末を奪い取る。

男が端末の画面を見ると、「送信完了」の4文字が映し出されていた。

「送信完了……!?!? おい、何を送信した!？」

男が桜川の胸倉を掴んで壁に押し付けると、桜川は再びニヤツと笑うと、

「残念ながら、送信と同時にデータは削除するように設定してある。

まあ、どうせすぐ復元されてしまっただろうかな」

「くそっ!!!」

男は桜川を押さえ付けていた手を離すと、端末を持って部屋を飛び出した。

後に残された桜川は、出て行った男と入れ違いになる形で部屋に入ってきた別の男の、睨みつけるような監視の視線を浴びながら勝利を確信した笑みを浮かべる。

「（ふっ、無能力者を使って学園都市を新たに構築し直す………か。研究者として興味が無いわけではないが、僕が関わっている『彼ら』の観察の邪魔になりかねない。悪いが、この計画は止めさせてもらうよ）」

端末の解析はすぐに行われ、復元されたデータを元に臨時の会議が行われた。

「軟禁されていた桜川研究員が我々の情報封鎖をすり抜けて外部に送ったメールの内容ですが、現在学園都市で我々が行っている計画の詳細と、ここの研究所の場所を記した電子マップでした」

「……………それで、送り先は？」

「はい。2箇所を送信されています。一つは学園都市第七学区にある病院で勤務している一人の医師です。冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）という名称も存在している、その道では知らない者はいない有名な医師ですね」

「2箇所あってそのうちの一つがすでに厄介な相手だな。それで、もう1箇所は？」

「こちらの方がどちらかと言えば厄介なような気もしますが……残念ながら、送り先の個人名までは分かりませんでした………といふより、情報が秘匿扱いされていて調べようがありませんでした。ですが、驚くべきことが分かりました」

「それは？」

「その相手ですが…… 学園都市の暗部組織『アイテム』の上層部に関係している人間でした」

「何だとツ!?!？」

その報告に、会議室にいた一同に動揺が広がる。

「で、では、我々の実行中の計画が暗部組織に知れてしまったということがあるか!?!？」

「は、はい。そう認識する他ないかと……」

「マズイことになったぞ。アイテムといえば、学園都市内の不穏分

子を消してまわる組織だ。そこに我々のことが漏れたとなると……」

「確か、そのメールにはこの場所も添付されていたんだな!? ここを襲撃してくるのも時間の問題だぞ!？」

「第一、なんであの男がそんな暗部組織の上の人間と連絡を取れるんだ!？」

「ええい、落ち着けえええ!！」

今まで黙って報告を聞いていたリーダー格の男が一声叫ぶと、ざわついていた研究者たちが静まった。

「過ぎたことを今更どうこう言ったところで始まらないのだからグダグダぬかすんじゃない!! それに、どんなに情報封鎖を施してもいつかはバレてしまうのは覚悟していたことだろう」

「し、しかし、気付かれるにしても予想よりかなり早いのでは?」

「確かに、予期していたよりかは大分早いな。しかし、もう『アレ』の準備は出来ているのだろうか?」

「は、現在90%程度まで完了しております」

「それなら大丈夫だ。後15〜20分もあれば『アレ』が発動可能になる。それまでここを落とさなければ良いだけの話。いかな暗部組織と言えども、15分かそこからここを完全に落とすことは不可能に近い。それより問題なのは、冥土帰しの方だ」

「どうしてですか？」

「あの医者は表・裏の世界を問わずかなり評価が高い医者だということを知っているか？ 何故だと思う？」

「……純粹に腕が良いからでは？」

「そうだ。あの医者には『寿命すら克服した』というとんでもない噂まであるが、まあそれは今はいい。私が気にしているのは、あの医者のもットーだ」

「は？ もットー………ですか？」

「そうだ。冥土帰しはな、どんな患者でもあらゆる手段を用いて治療するというもットーと、それを実現し得るだけの實力がある」

「……それが、何か？」

「冥土帰しにメールが送られた、ということとは、今学園都市で暴走している無能力者たちは彼から見れば『患者』ということになる」

「しかし、ただか医者ではないですか。医者に我々の計画をどうこう出来るようには思えません………」

「彼を侮ってはいけない。彼は患者のためなら文字通り『なんでもする』。我々が苦心して作りあげたウイルスに対する、いわゆる『抗ウイルス』を作り上げてしまうことも、彼ならやっつてのけるだろう」

「では、いかが致しますか？」

「うむ………」

リーダー格の男は少しのあいだ復元されたメールをジッと見ていたが、おもむろに紙とペンを取り出すと何かを書いて部下の男に渡す。

「ここに連絡を入れろ。依頼内容は冥土帰しの拘束とメール、およびデータの消去だ」

「了解しました」

紙を渡された男は携帯を取り出しながら部屋を出た。

「主任、一体何を？」

「うむ。ここがアイテムに襲撃されるのは時間の問題だし、それ以前に襲撃自体が想定済みだ。だが冥土帰しはそうはいかない。対策を講じられたら我々の計画はすべて破綻してしまう。だから、こちらも裏の組織に冥土帰しの拘束を依頼することにした」

「裏の組織……ですか？」

「そうだ。名前は『スクール』、リーダーはあの『未元物質』……レベル5の第三位、垣根帝督だ」

そう言うと、リーダー格の男は不気味に顔を歪めて笑うのだった。

アイテム、という名称の組織がある。

組織と言っても学校の部活やサークルといった類のものではなく、学園都市の裏側、光の当たらない闇に存在する。

良く言えば縁の下の力持ちであるが、悪く言えば殺し屋集団である。

主な仕事は学園都市の不穏分子の削除・抹消、あるいは統括理事会などの上層部や他の裏組織の暴走を阻止し、表の世界の平穏を支えることである。

そんな話を聞いたら誰しも、「どんな連中がそんな組織に属しているのだろう」と想像する。

ほとんどの人は、怖い顔つきの男や頭のネジが何本も飛んでしまったような狂った男を想像しがちだが、アイテムに限ってはその想像は当てはまらない……というか、そもそも主要メンバーは全員男ですらない。

そんな特異な組織『アイテム』のリーダー、レベル5の第5位である麦野沈利は、暴走した無能力者のうごめく街中を傷一つ負うことなくやり過ごすと、隠れ家の一つである第三学区のサロンへとたどり着いた。

「あー、肩こった。いつもの私だったらとっくに全員ぶち殺してるんだけどなあ……」

彼女の性格、および能力なら、本来群れて襲い掛かってくる連中など自慢の『原子崩し（メルトダウン）』で瞬殺なのであるが、上司の女から「殺してはいけない」という命令を受けているので、ここまで来る間の攻撃を全て電子を盾のように展開することで防ぐことに終始した。

「元はただのレベル0でもだからね……殺しても面白みのかけらもないし、プチプチレベル0殺したらレベル5の名が泣くってものだし」

誰に聞かせるわけでもなく独り言を言いながらエレベーターに乗ると、最上階のボタンを押す。

元々高級サロンということを利用して利用者はさほど多くないのだが、今日は表の騒ぎのせいで余計に利用者が少なく、エレベーターは途中で止まることなく最上階へと到着した。

そのまま通路を歩き、年間契約しているいつもの部屋に入る。

「3人ともー、集まってるかにゃーん？」

麦野が部屋のドアを閉め鍵をかけながら声をかけると、部屋の中央にある大きなソファアールに座っていた3人の少女が顔を上げて麦野の方を振り向いた。

「麦野、超お疲れさまです」

やたら言葉に「超」を付ける、まだ幼さが多く残る12歳くらいの大人しそうな少女の名前は絹旗最愛。（自称中学生だが、果たして……？）

当然アイテムの中では最年少であり、この4人の中では結構まともな人間……だが、誰も見ないような怪しいタイトルのC級映画を目を輝かせて見たりするなど、普通ではない。

能力はレベル4の窒素装甲オフエンスアーマーで、空気中の窒素を操り、圧縮した窒素の塊を利用することで、成人男性を軽く凌駕する程のパワーを得たり銃弾を無効化してしまうほどの頑丈さを発揮するというもの。

攻守に応用の利くその能力を使って、アイテムの中では前線に立って活躍している。

「何だか外が騒がしいみたいだけど、結局、麦野には無関係だったって訳よ！ むっぎのー！！」

「抱きつくな」

ソファアールから立ち上がるやいなや、麦野に抱きつこうとして押さえ込まれている金髪碧眼の少女の名前はフレンド。（高校生なのだ

が、絹旗よりも控えめなスタイルは本人も気にしている。…… 12
歳より控えめだと、もはやぺったんk(ry)

好物はサバの缶詰で、本人いわく「カレーが最高」とのこと。

能力はレベル3の手中掌握^{オフジェクトコネクト}。空間転移系能力の一種で、自らの手元に物体を引き寄せ文字通り「掌握」することができる。

聞こえは大層なものであるが、フレンドはこの能力をもっぱら、爆弾を手元に出現させることにしか利用していない。

なぜなら、まず第一に引き寄せることしか出来ないからである。

転移系能力の一種、とは書いたが自らや触れたものを他の場所に飛ばすということが出来ない。

第二に、引き寄せる物体の元の位置を把握していないと役に立たないからである。

その気になれば人を自らのすぐ隣に引き寄せることも出来るが、人というものは絶えず動き回っていて転移前の位置など完全に把握することが不可能なのである。

遠くに立ちすくんでいる人間なら引き寄せることも可能ではあるが、それをするくらいなら拳銃やライフルを使って狙撃した方が自らを危険に晒すことがない分マシであり、結局あまり意味がない。

よって、他に出来ることと言ったら、あらかじめ武器や爆弾などを自らの分かる所に置いておき必要になったら引き寄せる、ということくらいなのである。

転移前の位置さえ把握できれば距離は学園都市の端から端に及ぶまで、という超遠距離でも使用可能なので使い勝手は良いのだが、暗部に所属している彼女にとっては「道具を持ち運ばなくても良くて楽だね」程度の感覚である。

「……………あちこちから信号がきてる」

ソファーからゆっくりと、最後に立ち上がりながら電波な言葉を口にした少女の名前は滝壺理后。

彼女もフレンダと同じく高校生であるが、普段からおしゃれなことに結構気を使うフレンダとは異なり、おしゃれとは縁の遠いピンクのジャージ姿というのは女子高生らしくない。

しかし彼女もフレンダとは異なるものを持っていて、それはスタイルである。

そのジャージの上からではよく分からないが、ジャージを脱ぐと中々ナイスな胸がお見えするとかでフレンダは羨ましがっているのであるが、当の本人はあまり興味がないらしい。

能力はレベル4の能力追跡（AIMストーカー）で、一度記憶したAIM拡散力場の持ち主を検索・補足することが出来るという基本探査に用いる能力であるが、応用的な使い方として相手のAIM拡散力場に干渉してパーソナルリティを乱し、相手をかく乱することも出来る。

全力で使えば相手の能力を乗っ取ることも可能ではあるが、能力の使用には体晶を使わなければならず身体に負担がかかるため過度の使用は御法度である。

「……それで麦野、今もフレンドが言っていましたけど、外で何かおきてるんですか？」

絹旗がC級映画のパンフレットをテーブルの上に置きながら窓の外を見る。

「おきてるも何も、今までレベル0だった人間がいきなり能力を使って能力者を攻撃し始めたってことらしいわよ。私にも詳しいことは分かんないんだけど」

「……レベル0の人間が能力、ですか？ 超信じられません」

「ホントは襲ってくる連中全員処刑してやるつもりだったんだけど、上が『元々レベル0の一般人だから殺すな』って言ってきたのよ。ま、こっちも雑魚狩りなんてやって体力を無駄に使いたくなかったからスルーして来たわ」

「……？ 滝壺、大丈夫？ いつもより余計にボーっとしてない？」

フレンドがそう言って滝壺の目の前で手を振ると、滝壺は普段の話し方よりやや間を開けて、

「……大丈夫、って言いたいところだけど……私にもよく分からない」

「おいおいフレнда、その質問は野暮ってもんじゃないかにゃーん？ 滝壺にも、『女の子の口』ってやつがあるでしょーが」

「……それなら、1週間前に終わってるよ？」

「「「……」」」

ふざけて言った言葉にマジレスされた麦野はもちろん、そう返事が返ってくるとは思ってもみなかった絹旗やフレндаも思わずフリーズしてしまった。

「……滝壺さん、今は麦野の超ジョークですよ？ そうじゃなくて、周囲のAIM拡散力場に何か異常があるのかってことを超聞きたいです」

一番先に落ち着きを取り戻した絹旗がフレндаの質問をより専門的にして返すと、滝壺はまた少し間を開ける。

「……うん、いつもと違うみたい。上手く言えないけど……」

「外で起こってることと何か関係があるんでしょうか？」

「……ちよつと抽象的な言い方をすると、異質なAIM拡散力場で満ち溢れてる……？」

「最後が疑問形で終わってるってことは、結局、本人にも何がなんだがよく分かんないって訳よ」

「チツ、上の連中がもっとテキパキ情報集めに勤しめばさっさと諸悪の根源をぶったおしてくるっていつのにさ……と、噂をすれば、」

と」

テーブルの上においてあったノートパソコンのインターネット電話が起動し、パソコンのスピーカーから音が聞こえてきた。

『やつほー。4人ともちゃんと集まってるかなー？』

「ああ。それで、外の騒ぎについて何か分かったの？」

『分かってるもなにも、大進展よ。この騒ぎを起こしてる研究所に勤めてるっていう男から、アイテム宛にメールが来たんだから！』

「超メール……ですか？」

「畏のにおいがプンプンする訳よ……」

『こつちだつてそう思つてちゃんと確認したわよ。送信者のアドレスから個人情報をおちよいと調べさせてもらったの。そしたらその男、裏の研究者の中でも結構深い研究に参加してることが分かったのよ』

「超待つてください。この外の騒ぎも、どつかの研究者たちが企てた計画の結果なのではないのですか？ それを同じ身分の研究者が情報を流す……超内部告発つてことですか？」

『どつやらそんな感じみたいね。恐らく、この密告者にとってこの騒ぎは目障りだつたつてとこじゃないかしら。ま、私たちが依頼人の素性や事情を日々把握しても仕方ないでしょ？ それより仕事よ仕事。すでに金も入金されてるしね』

「それで、その肝心の仕事ってのは？ そのメールの送信者が依頼人なんだろう？」

麦野が一本数千円もするミネラルウォーターを開けながら、ようやくやる気が少し出てきたという感じの声で尋ねる。

『依頼内容は二つよ。一つは、この騒ぎを起こしてる連中がいる研究所を襲撃して機能停止すること。メールにその研究所の場所を示したマップも添付されてたし余裕ね』

「もう一つは？」

『もう一つは、これと同じメールが送信された医者を保護することよ。メールによると、その医者は第七学区にある第七学区立総合医療センターに勤めてる、冥土帰してて異名を持つ医者よ』

「その名前は超聞いたことがありますね。医療技術で彼の右に出るものはいないとか……でも、何で送信した相手が冥土帰しなんですかね？」

『文面を見る限り、このメールの送信者と冥土帰しは知り合いみたいね。多分、自分はその研究所に拘束されているか何かで身動きが取れないから、代わりにデータを送るからどうにかしてくれってとこかしら？』

「事情はどうあれ、この依頼をこなせばこのくそつたれな状況がどうにかなりそうね。分かったわ、さっさと終わらせましょ」

『じゃ、頑張つてねー』

プツツ、と通話が切れると、麦野が水を一口飲んで立ち上がる。

「さあーって、シヤケ弁食べてから行こうと思ってたけど、計画変更。先にぶっ潰してから美味しく頂くとするわ」

「麦野、上から超メールが来ました。上に届いたメールの転送みたいです」

「見せてちょうだい。……この地図が研究所の場所を示したものね」

「麦野、班分けは超どうしますか？ 私と麦野で研究所を超さっさと潰しますか？」

「それだと冥土帰しの警備をフレンダと滝壺に任せるってことになってちよつと戦力的に不安ね。私とフレンダで研究所を襲撃する。絹旗と滝壺は冥土帰しの警護よ」

「超承知しました」

「きぬはた、頑張ろうね」

「じゃ、さくつと片付けに行きますか」

4人の少女が、学園都市の表舞台を守るために動き出した。

一人の少女が、暴走した無能力者のうごめく街中を歩いていった。

その少女に向けて、炎やら氷やら様々な能力による攻撃が飛んでくるのだが、少女には一切通用しない。

しかし、そのような圧倒的な力を有している少女は一切反撃することなく、ただただ街を歩き続ける。

顔には大きな眼鏡をつけ、頭の横で髪を一房分けて束ねており、少し低俗な話になるが制服の上からでもそれと分かるほどの豊満な胸。

抜群の容姿を誇る彼女が、今の戦場とも呼べる学園都市を自由に闊歩出来ること自体がすでにイレギュラーなことであるが、さらに普通ではないのが、『ノイズ』である。

彼女を見ていると、時折輪郭が歪むのだ。

普通に見えていることもあるが、ザザッと映りの悪いテレビのように時々ノイズが混じる。

彼女にとってはこれが普通なことなのであるが、今日の彼女は少

し戸惑っていた。

「(……………?) いつもと何かが違う?」

それは、彼女にしか分からず、彼女にしか理解し得ないことではあるのだが、確かに彼女は異常を感知していた。

周りの様子がおかしいという見れば分かるものではなく、もっと根本的で核心的な、彼女の存在に関わる事象であるため、彼女が困惑しているのだ。

「(……………)」

しかし、彼女は別段どうこうするわけでもなく歩き続ける。

異常の原因も、解決の手段も分からないから、というのもあるが、今すぐ自らの存在を脅かすほどの異常ではなさそうだし、なにより興味が無いから、というのが最大の理由である。

興味を持ったところでどうしようもない。しよせん、彼女は幻想でしかないのだから。

第42話 暗部組織『アイテム』（後書き）

原作では能力者だったのか、それとも無能力者だったのか結局分からずじまい（能力者を嵌めた瞬間が快感、という言葉から無能力者なのでは、という説あり）のフレンダでしたが、この小説ではレベル3の能力者ということにしました。

さて、アイテム・スクール（正確にはまだ垣根の名前だけですわ）、そして最後に登場した、ノイズの走るあの少女……………

様々なキャラがこの学園都市内乱編では現れます。

どういった活躍をするか……………僕が書ききれないかもしれませんが（汗

特に、最後に登場したキャラを扱っている小説にほとんど出会ったことがないので上手く書けるかどうか不安ですが、お楽しみに。

第43話 行動開始(前書き)

今回も、明俊や梓は直接は登場しません。

第43話 行動開始

宮野奈津美は病室の窓から外の光景を眺めていた。

先ほどまでは、暴走した無能力者たちから逃げる一般人や学生の姿も多く見られたのだが、今は暴走した無能力者たちが道路上を動き回っているのが見えるのみである。

奈津美はすぐに、これが数ある闇組織のなかの一つの計画だと分かった。

なぜなら、自らが最後にいた研究所で計画されていたことと、目の前で現実におきていることの中身が酷似しているからである。

「（私の能力を分析・応用し、無能力者のAIM拡散力場に変調をもたらすウイルス……無能力者を強制的に能力者に仕立て上げ、既存の能力者に壊滅的ダメージを与えて学園都市の構造を根底から覆す計画……ついに始動したのね）」

奈津美は窓の外を見るために乗っていた椅子から降りると、病室を出て廊下を歩き出した。

廊下のいたるところに、ソファや倉庫にしまっていた予備のベッドが置かれていて怪我人の救護が行われていた。

これらの怪我人はすべて、外の騒ぎで暴走能力者に襲われてここに運び込まれてきた人である。

この病院自体も危ないのであるが、今はアンチスキルが完全装備

で周囲360度を守っている。

いつまでも耐えられるとは思わないが、今しばらくのあいだは持ちこたえられる、と奈津美はさして焦りも感じてはいなかった。

それよりも重要なのは、実際にアンチスキルが持ちこたえられなくなる前にどうにかして事態の打開をはかることである。

その計画を練るため、奈津美はある医者部屋の部屋にむかって廊下を歩いている。

……と、前から常盤台中学の制服を身に纏った一人の少女が機材を持ちながら奈津美の方へ向かってきたのが見えた。

「(琴美さんと同じクローン……うちの誰か、ね。そういえば、琴美さんや梓たちは無事かしら?)」

幼なじみの二人と、つい最近知り合ったばかりの琴美のことをふと心配する奈津美。

「(……まあ大丈夫でしょ。二人はレベル5だし、琴美さんもレベル3相当の発電系能力者、おまけに一方通行との実験のために戦闘用プログラムをインプットされているはずだし)」

そう楽観視する奈津美であったが、この時、その3人の中でも一番強いはずの明俊が常盤台中学で治療中とは露知らずであった。

「おや、あなたは10030号の知り合いの見た目は子供、頭脳は大人の方ではありませんか、とミサカ19090号は打ち解けた間

柄のように話しかけます」

特に話すこともなかったなのでそのまま通り過ぎようとしていた奈津美であったが、相手から声をかけられて立ち止まる。

「（19090号……確か、スカートと腰のあいだに指2本入るほどダイエットしてる個体……だったかしら）ええ。いつも私の病室に世話に来てくれるのは10032号だから、あなたと直接話すのは初めてね」

奈津美は特殊な患者であり、また琴美と面識があるということと比較的冥土帰しの近くにいることが多くなおかつ妹達である御坂妹が、奈津美の容態をチェックしたり暇つぶしの相手をするが多かった。

「はい。ミサカネットワークを使ってあなたと10032号とのやり取りを見ることが出来るので、ミサカ個人としては初対面という感覚はほとんど無いのですが、とミサカは荷物を持ち直しながら答えます」

「そうだったわね。ところで、冥土帰しは今どこにいるかしら？」

「外がこの騒ぎなので、病院の外にはいないと思います、とミサカはネットワークに冥土帰しに関する情報が無いかどうか検索をかけながら答えます。……どうやら、他のミサカも彼を見てはいないようです。いつも通り、彼の担当する診療室にいるのでは？ とミサカは推測を口にします」

「そう…… 分かったわ、ありがとう」

軽く手を振って奈津美が冥土帰しの診療室へむかつて歩き出した………すぐ後、奈津美は19090号に呼び止められた。

「待ってください、とミサカはやや真剣な顔つきであなたを呼び止めます」

「……？　どうかしたの？」

「今、10030号からミサカネットワークを通じてある情報が入りました」

「どんな情報？」

「10030号の敬愛する工藤明俊が、テレポーターに襲われて常盤台中学に運ばれたそうです、とミサカは報告します」

「えー！？　それ本当!?!」

奈津美は驚きを隠せない。

それもそのはず、今さら書くことでもないが明俊はレベル5の第二位なのだ、純粋に数字だけ見れば彼に勝てるのは一方通行だけである。

「（でも、テレポーターはある意味規格外の能力。明俊がやられても不思議はない……）ねえ19090号、梓や他のみんなは大丈夫なの？」

「10030号によると、工藤梓他、その他10030号の知り合いに該当する人間に異常はないようです、とミサカは追加報告しま

す」

「そう、良かった……」

表向き安堵の表情を見せる奈津美であったが、内心は少し動揺していた。

「（今の報告を聞く限り、明俊の命に別状は無いみたいだけど……レベル0の人間の数の多さを考えれば、テレポーターは大雑把に見て60〜100人くらいはいることになる。テレポーターだけじゃない、他にも今まで見たことのない能力や、レベル4や5に相当する強度の暴走能力者がいる可能性だって十分にある。早くこの騒動を鎮めないといつか死者が出てしまうわね）」

事態は奈津美が考えていた以上に深刻の度合いを増していた。

「どうします、工藤明俊や10030号の元へ向かいますか？何なら護衛しますが、とミサカは提案します」

「……いいえ、大丈夫よ。私が明俊たちのところへ行ったところで事態は何ら好転しない。私は、私が出来ることをしてこの事態をどうにかしないと。わざわざ教えてくれてありがとう、19090号」

奈津美はもう一度手を軽く振って会釈すると、小走りに冥土帰しの診療室へとむかった。

本当は19090号の提案を受け入れて一刻も早く明俊のところへ行きたい心境だったのだが、先ほど奈津美自身が言ったように、自らが行ったところで何ができ、何が変わるというのか。

何も変わりはないし、入院している自分が明俊のところへむかえば、かえって相手に心配をかけさせてしまうのだ。

幼なじみとして、彼のが気になっている一人の女の子として、そんな選択肢は選べない。

「（私の能力がもとになって今回の騒ぎはおこってる。なら、今私
がなすべきことは解決策を見出すこと！！）」

奈津美は冥土帰しの診療室にたどり着くと、ノックもそこそこに部屋へと入る。

奈津美が病室に入るとすぐに、外で怪我を負った人たちのうめき声
が多数聞こえてきて思わず病室を見渡した。

ベッドはすべて怪我人で埋まっていて、その多くは打撲や火傷など
ではあったが、中には骨折していると思われる人もいて外の惨劇
の様子をまざまざと知らされる奈津美であった。

奈津美はバタバタと動き回る医療関係者のあいだを縫う様に進む
と、奥の別室で椅子に座っている冥土帰しのところへむかった。

部屋に入って鍵をしめ、冥土帰しの方を見ると彼はパソコンの画
面をジッと見つめていた。

奈津美が近付くと冥土帰しはパソコンの画面から目をはなし、戸
棚からカップを取り出しながら話しかける。

「やあ。君が自主的にここに来るなんて、珍しいこともあるもんだね？」

「ええ。外の騒ぎが気になって、ちょっとね」

冥土帰しは「そうだろうと思ったよ」と言いつつコーヒーメーカーのボトルをメーカーから取りだし、カップにコーヒーを注ぐ。

奈津美はコーヒーの注がれたカップを受け取ると、先ほどまで冥土帰しが見つめていたパソコンの画面を見る。

「メール？……って先生！！このメールの差出人！？」

「ん？桜川君を知っているのかな？」

「知ってるものにも、この人は私を研究所から逃がしてくれた人よ！！！」

驚く奈津美とは対称的に、冥土帰しはそのことをある程度予想していたのか落ち着いていた。

「ふむ、世界とは意外と狭いものだね？」

「茶化さないで下さい！……先生は、彼と知り合いなの？メールに名前が書かれていないのに、名字がしっかり登録されているみたいだけど……」

奈津美の疑問に、冥土帰しはコーヒーを一口飲むと椅子に座って再び画面を見つめながら答える。

「彼とは以前、学会の発表会で知り合ってからよく連絡を取り合っていてね。彼は研究者の中でも何というか……異端児だね。学園都市の研究者にありがちな『成果を重んじるばかりに学生を使い捨ての道具にする』風潮を極端に嫌う。彼はつねづね言っているよ、『研究を否定するつもりはない。第一、自分も研究者ですから。でもですね、研究者にとって今必要な理念とは、相手に協力してもらって初めて研究は成功する、ということだと僕は信じています』と」「逃がしてもらっておいてこんなこと言うのもなんだけど、研究者にむいてないわね」

奈津美はそう言って苦笑いをしコーヒーを口に含む。

「しかし、彼の研究者としての腕は表・裏の世界を問わず随一であることは僕から見ても間違いない。それゆえだろう、彼は疎んじられながらもあの世界から追放されたりすることがない」

「私を逃がしてもなお命があるところを見ると、どうやらそのようね。でもこの文面を見る限り、彼は今軟禁状態にあるみたいだけど」

「ああ。今外の騒ぎを起こしてる連中からすれば彼は邪魔者以外の何者でもない。だから、僕にこのメールをよこしてきたんだろう。自分の代わりにこの事態を收拾することを期待してね」

「……このメールには、何かが付付されていたみたいだけど？」

奈津美が画面を見つめながら質問すると、冥土帰しはポケットからUSBメモリーを取り出し机の上に置いた。

「添付されていたデータはすべてここにコピーして、本体にあった

データは残らず削除したよ。このパソコンは相手方に覗かれている可能性があつたからね？」

「なるほど。もし仮にこのパソコンが乗っ取られたりウイルスでも仕掛けられたりしたら、せつかくのデータが消されてしまうものね。で、そのデータってのは一体なんだったの？ま、大方の予想はつくけど……」

「中身は、今回の騒ぎの原因であるウイルスの詳細な情報だ。これのおかげで色々なことが分かったんだね？ どうやらこのウイルスには決定的な……」

「待つてー!!」

冥土帰しがウイルスの詳細を語ろうとしたとき、奈津美は右手を口元に当ててそれを制した。

「（扉の外に誰がいる!!!）」

奈津美はそう小声で呟くと、足音を立てないようにしながら扉の取っ手を握る。

「（敵？ 外の怪我人たちが騒ぎ立てていないところを見ると怪我人や病院の関係者に成りすましている……？ 敵か味方が、どちらにしてもすぐそこにいるのは間違いない。こうなったら、こっちからご対面するしかないわね……!）」

奈津美は意を決すると、思い切って扉を開けた。

「誰!？」

扉から一步はなれて顔を上にむけると、そこには想像していた怪我人や白衣の人間（に成りすました敵）……ではなく、少女が二人ポカンとした顔つきで奈津美を見下ろしていた。

「（……敵じゃない？ いや、油断できない。こちらの警戒心を緩めるために女の人間をよこしてきたのかもしれぬ。……それにしても、この二人どこかで見たことがあるような？」

奈津美はジツとその二人の少女の顔を見つめる。

すると、片方の少女が口を開いた。

「えーっと……もしかして私たち、超敵だと思われてますか？」

「うん、きぬはた。どうやらそうみたいだね」

「おかしいですね。受付の人には内線で先に伝えておいてくれて超言っておいたんですがね」

「しょうがないよ。受付ロビーにも怪我してる人があふれてたみたいだったし、手がまわらなかつたのかも」

とそこまで聞いて、奈津美の脳がようやく事態に追いついた。

「（この二人の顔に『超』がつくしゃべり方……そしてピンクのジヤージ姿。まさか！？）絹旗最愛と滝壺理后！？」

このセリフに、今度は絹旗と滝壺が驚く番であった。

「この子、私たちのこと知ってるみたいだね」

「え、ええ。もしかして、こんな子供でも超暗部の人間なのでしょ
うか？」

「それは聞いてみないと分からない。でも絹旗、手荒いのはダメだ
よ？」

「滝壺さん、それは甘いですって。でもまあ……確かに子供相手に
いきなり手荒い真似は気が引けますし」

そう言うつと絹旗はしゃがみこんで、未だに驚いた顔をしている奈
津美の視線に顔の位置を合わせる。

「さて、出会ったばかりでちょっと恐縮ですが超質問です。どうし
て、あなたのような子供が私たちの名前を知っているんですか？
まさか、本当に超暗部の人間じゃないでしょうね？」

奈津美はまだ完全に事態を飲み込めたわけではないが、なんとか
いつも通りの表情を口調を取り戻すと絹旗の質問に答える。

「まさか。そんなわけないでしょう？ あなた達こそ、どうしてこ
こに来たのかしら？」

「超答える義理はありません。第一、暗部の人間でないという話も
超信用できませんし」

絹旗と奈津美の視線が交錯し、静かな火花が散る。

一見ただにらみ合っているようにしか見えないが、絹旗はこの状

況を有利に、奈津美はこの状況を不利に考えていた。

「（どうする……？ 相手はレベル4の窒素装甲にあの滝壺理后、逃げ切れない）」

「（この子供が誰かは知りませんが……この状況ではこちらが有利ですね。ドアはこの一つしかありませんし、仮にこの子供がテレポーターでも滝壺さんの能力の前では超無力です。滝壺さんに能力使ってもらうのは出来れば避けたいですが、この子供の怪しさを考えるとやむを得ません）」

しかし、火花を散らす二人をよそに滝壺は冥土帰しに話しかける。

「あなたが、ヘヴンキャンセラー？」

「ああ。君たちは一体誰なんだい？」

「やっぱり、私たちのことは伝わってなかったみたい。私は暗部組織『アイテム』の一人、滝壺理后」

「それで、暗部の人間がこの僕に何の用かな？」

「その前に聞かせて。この子供は誰？」

「ああ、この子は暗部の人間ではない。そうだな……とりあえず、僕の味方だと思ってくれればそれでいい。じゃあ、改めて僕に何の用かな？」

「私ときぬはたは、あなたを守りに来た」

その滝壺の言葉に奈津美が食いついた。

「ちょっと待ちなさい。暗部の人間が来て『守りにきた』って信じられると思ってるの？ 『殺しに来た』とか『拘束しに来た』の方が1万倍信憑性があるわね」

奈津美が今度は滝壺の方をむいて睨みつける……が、その肩に冥土帰しの手が置かれた。

「待つんだ奈津美くん。彼女は嘘はついていないと思うよ？」

「どうしてそう言い切れるの？」

「僕のところへ届いたメールなんだが、もう一人別のところにも送信されていてね。で、メールの中に僕を護衛すること、そしてこの騒ぎを引き起こした研究所を潰すことが依頼として書かれていた。そのメールのもう片方の送信先というのが……」

「アイテムだった……そういうことね。だったらもつと早くそう言いなさいよ。てつきりこの二人が先生をどうにかしに来た人たちが思ったじゃない」

奈津美が絹旗をチラツと見ながらそう言つと、絹旗はムツとした顔をして反論する。

「それはあなたの超思い違いというやつです。第一、さっきから言ってますがどうしてあなたのような子供が、私たちアイテムのことを超知ってるんですか？」

「二人とも、それ以上けんか腰になるのはよすんだ。患者の皆さん

に迷惑だろう？ 滝壺さん、だったかな？ 悪いけど、ドアを閉めてくれるかな？」

滝壺がドアを閉めたのを確認すると、冥土帰しは椅子に腰掛けてアイテムの二人を見る。

「さて、どこから話を進めようかな？ ああ、この子についてだが、いくら二人が暗部の人間でも、いや暗部の人間だからこそ、詳しく話すわけにはいかないんだね？ この言葉の意味、君たちなら分かるね？」

「……そういうことですか。超分かりました」

「この子も苦労してるんだね」

「分かってくれれば良いんだ。さて……君達は僕を守ると言っていたね？ 具体的な警備プランでもあるのかな？」

「プランというプランは特にありません。あなたがこの状況をどうにかできる医者以上の医者であることはこちらでも調べました。そのあなたを、連中は絶対に放ってはおかないでしょう。超数にものを言わせてくるかもしれないし、少数精鋭で来るかもしれないんですが、相手がどんな手段で来ようとこちらとしてはあなたを守つてこのクソみたいな状況を超どうにかして欲しいだけです」

「まあ、そうなんだけどね？ まさかこの狭い一室でドンパチ始めるのかい？」

「まさか。外に車を待たせてあります。あなたが希望するところまで護衛しますから、超秘策とやらを開発できるところを至急選定し

て下さい」

「……つまり、僕にこの病院から離れると言いたいんだね？ 悪いが、それは出来ない」

「どうしてですか？」

そう聞かれて、冥土帰しは絹旗から視線を外すとパソコンの隣に置いてあるモニターの電源を入れた。

モニターには、天井のすみに取り付けられているカメラから撮影されている、隣の病室の様子が映し出されていた。

「僕は医者だ。医者が、彼らを放って病院から離れるわけにはいかない」

「しかし、あなたの力が無ければ外をさまよっている無能力者たちはどうするんですか？」

「僕は、彼らを見捨てるとは言っていないんだね？ 症状の原因を知ってしまった以上、彼らも僕から見れば立派な患者だ。何としても治療するよ」

「言っていることが超矛盾のような気がしますけど……」

「確かに、このまま僕が何もしなければ矛盾になってしまう。だから、これから僕の言うことをよく聞いて欲しい」

そこで冥土帰しは言葉を切ると、その場にいる全員の顔を見渡す。

「……分かりました。超お聞きしましょう」

「助かる。メールに添付されていたデータから分かったことなんだが、この騒ぎのすべての元凶はあるウイルスだ。……といっても、生物学的にはウイルスではない。あれは『ナノデバイス』と呼ぶほうがふさわしい物体だ」

「つまり、機械ってことですか？」

「そうだ。だが、大きさはウイルスとほぼ同じで、体内での動きもウイルスを模している部分があるからウイルスという言葉もあながち間違いない。……ついこのあいだの、研究所の爆発事故を覚えているかな？」

「はい。……まさか!？」

「ああ。その時に学園都市中にウイルスがばら撒かれたのはほぼ間違いない。恐らく、実物のウイルスの動きを再現させるために微生物研究所で開発・研究されていたんだろう。そして、爆発事故に偽装してデバイスを撒き散らした……大方、そんなところだろうね」

「ウイルスのことは超分かりました。それで、私たちは何をすれば？」

「僕の見たところ、このデバイスにはいくつか弱点があるみたいだ。その中でも、手早く学園都市中に散らばったデバイスを停止させる方法が一つある」

「学園都市で作った割には、案外ずさんなデバイスね」

奈津美の突っ込みに、冥土帰しは「ま、仕方ないさ」と答える。

「こんなに大規模な騒ぎを起こすような機械だ、精巧であればあるほどどこかにボロが出るってもんだ」

「それで、その方法ってのは何なのかしら？」

「このデバイスはある周波数の電磁波を浴びると機能停止するようなんだね？」

「あら、ずさんを通り越してお笑い者ね。この学園都市は電磁波であふれてるのよ？……あら？ でも、もしそうならとくにその周波数の電磁波とやらを浴びて機能停止してもおかしくないわね？ どういうことかしら……」

「市販の家電製品とかからは出ない域の周波数なんだね？ だから、その周波数を出せる装置を作らなければいけない」

「なるほど……それで、超具体的にはどう行動するんですか？」

「僕はここに残る。君たち二人は奈津美くんを引き連れて常盤台中学へとむかってくれ。あそこの付属研究機関なら装置を作り出せるはずだ。君たちが車で移動中に、僕から奈津美くんの携帯端末に装置の大まかな設計情報を送る。奈津美くんは、このUSBに入っているデバイスのデータとその設計情報を組み合わせて、機関の人たちと連携して装置を完成させて欲しい」

「私は研究者でなければ技術者でもないんだけど…… まあ良いわ。その案で行きましょう。でも、相手は先生を狙ってここに来るかもしれないのよ？ この二人を私と帯同させて大丈夫なの？」

「それなら心配いらない。パソコンのデータはすでに消去してあるし、君に情報を送ったらその送ったデータも完全に削除する。それで完全に誤魔化せるとは思っていないが、出来る限りこちらで足止めさせておく。常盤台に君たちがたどり着いてしまえば安心だ」

「確かにあそこなら能力者ばかりだから安全かもしれないけど……」

「そうですね。仮に相手が超暗部の部隊を差し向けてきたとしても、常盤台の敷地内に入ってしまったえば数でこちらが有利になります。それに、情報によると常盤台中学を含む一帯は生徒の避難場所になっているそうです。超電磁砲や高位能力者たちを利用して暗部の部隊でも蹴散らせるかもしれませんが」

「（利用できるものはたとえレベル5でも利用する。さすが暗部の人間ね。…そういうえば、あそこには梓たちもいるって話だし、連絡の一つでも入れておいた方が良さそうね）先生がそこまで言うのなら……」

「じゃあ、時間も惜しいから早速行動開始といこう。アイテムのお二人さん、この子の警備、頼んだよ？」

「超了解しました。滝壺さんもそれでOKですか？」

「うん」

「じゃあ冥土帰し、ええつと……奈津美、でしたっけ？ お預かりします」

「頼んだよ？」

かくして、奈津美は冥土帰しの命を受け、絹旗最愛・滝壺理后とともに明俊達のいる常盤台中学へとむかう。

しかし、一つだけ誤算があった。

それは、彼らの行動を阻止するために動き出したのが、彼らの想像を遥かに超える存在であったことである。

『常識の通用しない』男が彼女たちの事態解決という幻想を打ち砕くために立ちはだかることを、彼女たちはまだ知らない

第43話 行動開始（後書き）

最近、明俊・梓・奈津美に声を当てるとしたら誰が声優を務めるのが良いかなあー、なんてくだらないこと考えてます。

明俊は……誰でしょうね？（汗 梓は……竹達彩奈さんでしょうか？あ、決して、あの某軽音楽部を舞台にした梓と同名のキャラを意識してるわけじゃありませんよ？

奈津美は林原めぐみさん一択ですね。僕自身、奈津美を書いているときは林原さんの声で脳内再生してますし、話し方も灰原（コナン）の中で林原さんが声を担当していらっしやるキャラ）を結構意識していますし。（初対面や目上の人にもタメ語で話すところとかですね）

読んで下さっている皆様がどのような声で脳内再生しているかも気になっちゃいますが、スルーして執筆頑張ります。

第44話 迫り来る純白の翼

宮野奈津美が絹旗最愛・滝壺理后と共に、アイテムの用意したキヤンピングカーに乗って常盤台中学へ移動を開始した直後、一人の青年が第七学区立総合医療センターへ入っていった。

青年は怪我人でござった返す受付ロビーを見てピュウ、と口笛を吹くと受付で忙しそうにしている女性職員に声をかけた。

「ちょっと。忙しいところ悪いんだが、この病院には冥土帰って異名を持つ医者がいるって聞いたんだが……どこにいる？」

「あ、はい。彼ならその廊下を真っ直ぐ進んで1番奥の診療室にいるはずですよ」

「サンキュー」

青年は職員に教えられた廊下を歩いて進む。

ロビー同様廊下も怪我人で溢れかえっていて、青年は座り込んでいる人の足を踏まないように慎重に歩きながらわずかに笑みを浮かべる。

「（外を縦横無尽に歩き回る無能力者どもと、今まで無能力者どもの上に立って生活してきた能力者たちの形勢逆転……なるほど、依頼してきた連中の『学園都市の秩序をぶっ壊す』ってのはあながち間違いじゃねえってことか。そんな連中にこの俺が雇われるなんて少し癪に障るが……まあいい。こんなデカくて面白そうなショーなんて滅多に見れねーからな）」

青年は廊下を通り抜けると、受付で教えられた1番奥の部屋のドアを開ける。

中也怪我人でごった返しているが、見たところこの部屋の人の方が怪我の程度が重いようであった。

「（廊下は軽傷者、病室は重傷者って具合に分けてんのか…… 奥にまた部屋があんな。あそこに冥土帰しがいるってことで間違いなさそうだ）」

ネクタイをゆるめにしめ、スーツをくずして着ている青年が突如病室に入ってきたのを見た職員達は一瞬不思議そうな視線を彼にむけるが、すぐに患者たちの治療に意識を戻す。

青年もそんな周りの様子に少しの興味も見せず、病室の真ん中を通り抜けると奥のドアをノックした。

冥土帰しは奈津美に、ウイルスを機能停止させるための装置を作るときに必要な大まかなデータを送信すると、そのデータをすべて削除し復元も不可能なようにした。

「（これで大丈夫だろう。相手が暗部ならいずれは奈津美くんたちに解決を委ねたこともバレてしまうだろうが、ここで時間稼ぎをさせればいい。とにかく、彼女たちとここにいる患者たちに何らかの被害が及ぶことだけは絶対に避けなければ……）」

コンコン、とドアをノックする音がし、冥土帰しは「早速お出ましのようだ」と小さく呟くと椅子にドツサリを腰掛けた。

「空いている。入りたまえ」

ガチャリ、とドアが開かれ入ってきたのは、防弾チョッキに銃を構えた完全武装の人間……ではなく、スーツを着くずしネクタイも適当に身に着けた、暗部の人間というよりホストに近い男だった。

しかし冥土帰しはすぐに悟る。

この青年が、先ほど自分を訪ねてきたアイテムの二人と同じ暗部の人間、それも、二人とは比較にならないような強大な力を持っていることを。

「（この少年……一方通行に似ている。相当な能力の使い手か？）」

「よお。アンタが冥土帰しっていう医者か？」

「世間では、そう呼ばれてるみたいだね？」

「ほおー。想像してたのとずいぶん違うな」

「君は、どんな僕を想像していたのかな？」

「腕の立つ医者だって話だからよ、てっきりドラマに出てくるような腕は良いけど性格の腐ってるような、そういうツラを想像してたんだわ」

「ふむ。ま、同じ医者として恥ずかしながら、そういう医者もいるからね。そう思われるのも無理ないことなんだね？ ……さて、君はどんな用件で来たのかな？」

「俺か？俺も実は外でちょっと怪我しちゃって……」

「下手な嘘はつかないことだ。僕の見る目をなめてもらっては困る」

青年から目を逸らすことなく言い放った冥土帰しに、青年はニヤツと笑って彼の隣にあった椅子に腰掛けた。

「ハハ、流石にこんな見え透いた嘘じゃ騙されねえよな。じゃあ早速本題だ。アンタのところにもメールが届いたはずだ」

「メール？ そりゃ届くさ、メールなんて毎日届いてる」

「説明不足だったな。細かく言うと、桜川とかいう研究員からあるウイルス、正確に言えばナノデバイスだろうが、そのデータが添付されたメールだ。届いてんだろ？」

「……届いていたとして、それがどうしたというのかな？」

冥土帰しがしらを切ると、青年はフツと鼻で笑った。

「とぼける気か。悪いが、このパソコンにそのメールが送信された

のはこつちで既に確認済みなんだよ」

「じゃあこのパソコンを調べてみるといい。そんなメールもデータも、影も形も無いことが分かるはずだ」

冥土帰しがそう言ってパソコンを明け渡すと、青年はまずメールボックスを開く。

「……ねえな」

「仮に届いていたとして、そしてそれが危険なメールだとして、そんなものをメールボックスに残すと思うのかい？」

「灯台もと暗し、ってことわざ知ってるよな？　どんなにないだろうと思ってる場所でも100%じゃあねえ。そこまで調べるのが俺の仕事だ」

青年はメールボックスを閉じると、今度はポケットからUSBメモリーを取り出しパソコンに差し込んだ。

「こいつの中には、パソコン全体を検索して目当てのものがどこに埋もれてるか調べるソフトが入ってる。それだけじゃねえ。データを削除しても残っちゃういわゆる『データの紙切れ』みたいなものまで検索してくれる。アンタがデータを削除してたとしても、コイツなら一発だ」

青年は起動したソフトの画面に、検索に必要なものを打ち込んでエンターキーを押した。

ソフトが解析を開始し、画面に解析結果が各フォルダ・ファイル

ごとに映し出される。

学園都市製のソフトの威力か、ものの3分とかからないうちにパソコン内の全域にわたる解析が終了した。

「はええはええ。さて、検索結果は、と……該当データ0、ね」

「それはそうだろう。届いてもないメールやデータなんて出てきっこない」

「言ってる。どうせ先手を打って、データのカスまで完全に消しちまいやがったんだろうが……」

「それを証明できない以上、メールがそもそも来ていないのと同じだ。無駄な詮索は止めて、さっさと帰ってくれるかな？」

「じゃあこっちも言わせてもらうが、アンタがデータを完全に削除してないっていう証拠もねーだろうが。ホントだったら、テメエをとくに拷問にかけて調べてるとこなんだが、依頼人が『冥土帰しを殺したり傷つけてはいけない。彼がいなくなれば君も困るときがくるかもしれない。これは厳守事項である』なんてぬかしやがるから、こっちも手が出せねえ」

「じゃあどうするといふのかな？ このままでは君も僕も埒が明かないんだね？」

「悪いな、こっちもプロだ。この状況でアンタが考えそうなことなんてある程度は読んでんだよ」

青年はそう言って無線機を取り出すと交信を始めた。

「……俺だ。病院周囲を見張っていたA班、B班、C班、D班各自、俺が病院に入る前後で入れ替わるように病院を出た人間や車両が無かったかどうか報告しろ。この緊急時だ、入ってくるやつは山ほどいるだろうが出てくやつは医療関係者以外ではそう多くないはずだ」

「こちらA班、不審人物、不審車両共に発見できず」

「こちらB班、A班と同じく発見できず」

「こちらC班、病院に入る救急車両は確認しましたが出て行くものは発見できず」

「こちらD班、1台のキャンピングカーが病院から出て行くのを確認しています」

「……ビンゴ、だな。D班、もちろん追跡してるよな？」

「ハッ、現在ナンバー識別装置を使って追跡中。対象車両は病院を離れ、真っ直ぐ常盤台中学方面へむかっています」

「よし。C班は念の為、入ってきた救急車両を確認しろ。D班は追跡を続行、逐一俺にそのキャンピングカーの位置を連絡しろ。A・B班はそのまま監視を続行しろ。あ、それとC班から一人こっちによこせ。冥土帰しの監視役に充てる」

青年は無線を切ると部屋の窓を開けた。

まだ9月上旬、熱気こもる学園都市の空気が空調の効いた部屋へ入り込む。

「ホント、アンタはついてるぜ。本来の俺なら拷問すら生ぬるい、とつくに殺してる。でも俺はな、依頼されたことは何があっても、どんな手段を使っても完遂する。だからアンタは殺さねえ。その代わり、アンタが希望を託した連中は容赦なくぶっ飛ばす」

「……………」

冥土帰しは冷房と熱気の入り混じった生ぬるい空気の中、その青年をジッと見つめる。

「そうだなあ……万が一にもねえだろうけど、もし俺の仕事が終わってソイツらが生きてたらアンタのところへ送ってやるよ。せいぜいそれを楽しみに待ってる」

青年がそう言い終わると同時に、白衣を着た一人の男がドアを開けて入ってきた。

白衣を着ている点では医療関係者のように見えるが、違うところは部屋に入りドアを閉めるやいなやポケットから拳銃を取り出したところであった。

「ん。俺はちよつと出かけてくつから冥土帰しを見張ってる」

「ハッ！」

青年は白衣を着て変装している部下にそう言い残すと窓から飛び降りた。

そのまま重力に従って地面に落下………することはなく、飛び降り

た次の瞬間、青年の背中から純白の6枚の翼が展開され羽ばたいた。

青年はそのまま、文字通り鳥のように翼を動かしながら常盤台中学の方向へ飛んでいった。

「（これは想定外だったね。暗部の連中が来ることは想像していたが、よりによって一方通行と同等の力を持った人間が現れるとは考えていなかった。これは完全に僕の思慮不足だ）」

冥土帰しは作戦が成功するかどうかを再思案する。

「（一方通行はまだ動かせない。ミサカネットワークとチョーカーの調整もまだ最終段階まで行っていないし、彼の脳自体がまだ悲惨な状態だ。アイテムの二人はそこそこ暗部歴も長いように見えたがあのレベル5を抑えられるとは思えない。常盤台中学までたどり着いてしまえば超電磁砲もいるが……数分の時間稼ぎが関の山だろう）」

「明るい道筋が見えない冥土帰しは思わず右手を握り締め、ダンッ！！と机を叩いた。

「（医者として情けないが……後は上手くいくことを祈るしかない）」

彼にしては珍しく感情を露わにした冥土帰しは、開けっ放しにされている窓を閉めると椅子に腰掛け、冷たくなっているコーヒを一気に飲み干した。

奈津美は常盤台中学へむかうキャンピングカーの中で、冥土帰しから送信された装置のたまかな情報（どの程度の周波数の電磁波を流すか）やその設計の概略が記されたメールを見ていた。

「（大体何が言いたいのかは分かるけど、私も元はだたの中学二年生だし……後は専門家にこのメールとUSBの中身を見せるしかないわね）」

奈津美はスライド式の端末を閉じて、窓の外の景色を眺めた。

もはやそこに一般人の姿はなく、ウイルスに身体を乗っ取られ見境なく能力をはき出すだけの存在と化してしまった元無能力者たちの姿しかなかった。

先ほどからキャンピングカーが変に蛇行運転しているのも、暴走した彼らを避けるためだろう。

「あの、奈津美、でしたっけ？ ちょっと良いですか？」

声がして奈津美が視線を窓から車内に戻すと、絹旗が若干戸惑い気味な表情で奈津美のことを見ていた。

「あら、何かしら？」

「その……あなたは一体何者なんですか？」

「ああ、まだ名乗ってなかったかしら？ 私は宮野奈津美、よろしく」

「あ、はい。よろしくおねがいます……って超そついでじやないです！」

「じゃあどついでのことかしら？」

「さつき病院で冥土帰しが言っていましたよね？ 『詳しく話すわけにはいかない』って。それってつまり……」

「気になる？」

「え、ええ、まあ。私には超分かるんです。あなたの境遇と云うか何と云うか……」

「なるほど、同じ被験者という立場だものね。あなたは確か『暗闇の五月計画』っていう計画の被験者だったかしら？」

「っー？ ぶつしてそのことまで……」

「色々…ね。私もこの特異な能力のせいで色々な研究所をたらい回しにされたわ。今でこそ逃げ出してこうしていられるけど」

「そついえば滝壺さん、さっき言っていましたよね？ 『この子からは他の能力者とは違う感じがする』って」

絹旗に話をふられた滝壺は少し間をおいて「うん」と答えた。

「なんて言うのかな…今まで色々な能力者のAIM拡散力場に触れてきたけど、この子のAIM拡散力場はかなり特殊。私に近いものを感じる」

「滝壺さんに近いもの…ですか？」

その滝壺の言葉を聞いた奈津美は「なるほどね」と頷いた。

「本質的には正解ではないけど、近いかもしれない。滝壺さんの能力は能力者のAIM拡散力場に干渉することができるものだし、私の能力はAIM拡散力場を模倣するもの。どこかに似通ってる部分があるのかもしれないわね」

「ち、ちよつと待つてください。今、AIM拡散力場を模倣する、とか言いましたよね？ それを額面通りに受け取ると……」

「ええ。私自身は炎を出せたりレポートしたり、窒素を体表に集めて操ることはできないわ。でも、能力をコピーして扱うことができる」

「わ、私の能力も……？」

「もちろん。あなたに触れているあいだか、あなたのDNA情報が含まれているものを私にくれればね。あ、でも今は無理だったわ」

「どうしてですか？」

絹旗が不思議そうな顔を見ると、奈津美は滝壺の方を見た。

「私の能力発動には条件があるの。滝壺さんと同じく、体晶が必要だっていう条件が」

「……わたしと、同じ」

「もしかしたら、体晶を使って意図的に暴走状態にならないと私と滝壺さんに共通する部分が上手く機能しないのかも、ね」

「それじゃあ、能力を超コピーしまくるっていうことは出来ないんですね」

「レベル3までの能力者の能力ならある程度は体晶無しでも使えるんだけど、それじゃあ威力や使いやすさの面でたかが知れているから、基本的には体晶が必須ね。今は副作用の影響が出てて体晶が使えないから完全に無能力者と同じね。外みたいに暴走はしないけど」

「……超そういうことだったんですか。そんなインチキみたいな能力なら、暗部をたらい回しにされたっていうのも頷けます。すみません、超変なことを聞いてしまって」

絹旗がそう言って頭を下げると、奈津美は「良いのよ」と首を横にふった。

「この学園都市じゃ珍しくないことよ。能力がすべての世界、私や滝壺さんみたいにレアな能力ならまず間違いないく暗部からお呼びがかかるんだし、覚悟は出来てるわ。でも……」

そこで奈津美は言葉を切ると、悲しさと言うべきか悔しさと言うべきか、苦々しい顔をした。

「私のせいで周りのみんなに迷惑がかかってしまうのが避けられないっていうのが、ね。私に表の世界はむかないわ。いっそのこと、私もアイテムにでも入ろうかしら？」

「……………」

せつかく表の、光の当たる世界に降り立つことが出来たというのにそのことを素直に喜べない目の前の少女に、暗部に属する絹旗と滝壺はかける言葉が見つからなかった。

「さ、この話はそろそろ終わりにしましょ。どうやらこの車も学舎の園にもう入ってるみたいだし」

キャンピングカーは、絹旗たちが奈津美と話しているあいだにアンチスキルの検問を通過し、学舎の園の内部を奥へと進んでいた。

絹旗は重い空気を振り払うかのように頭を左右に振ると、雑念を捨て去り仕事人の顔になる。

「奈津美、今後は超どうしますか？ 私たちはあなたと、その装置とやらを開発する施設の警備に超あたりますが」

「そうね……まずは常盤台中学にむかって。付属の施設を借りるとなれば、上に話をつけないとどうしようもないし。別に勝手に使っても良いけど、後であななたちが後処理する手間が省けるし、面倒自体おこしたくないし」

「後処理なんて慣れたもんなんですけど……私たちが面倒をおこして、表の警備にあたっていているアンチスキルを呼ばれたらその分警備が超薄になってしまいます。ここは奈津美の言うとおり、面倒は避けましょう」

「では、常盤台中学へむかいますね」

会話を聞いていた運転手はそう言って、路上で治療したり身体を休めている学生達を轢かないようスピードを落としながら進路を常盤台中学へとつた。

そのころ、上空では……

「目標発見、と。あれが例のキャンピングカーだな」

冥土帰しの病院から飛び立った青年が、学舎の園の上空からアイテムのキャンピングカーを目で追っていた。

「報告によると、乗ってるのは運転手の他に女が三人、それも全員ガキみてえだな。大方、女の子ならこっちが手荒な真似しねえと踏んだんだろぅが……悪りいな。そんな幻想はこの俺には通用しねえんだよ」

青年は、追跡していたキャンピングカーが常盤台中学の前で停まり、中から3人の少女が降りて常盤台中学内へ入っていくのを確認すると自らも敷地内へむかって降下を始めた。

奈津美・絹旗・滝壺の3人はキャンピングカーを降り、常盤台中学のグラウンドを突っ切って校舎を目指して歩いていた。

「はぁー…… それにしても、常盤台は学校にしとくには超もったいないところですね」

場違いな発言だとは承知の上でも、それでも絹旗の口からついっ
いそんな言葉が漏れてしまっ、それくらい常盤台は特殊である。

建物は大理石で出来ており、校庭は石畳でしかも使われている石
も学園都市製の特殊素材。

あげく、よく学校などで使うラインを引くための石灰など影も形
もない。

ではラインはどうしているのかというと、そこは学園都市、校庭
には垂直に何千万本もの光ファイバーが埋め込まれていて、それら
が変幻自在にラインを描くのである。

そんなただでさえ普通ではない常盤台だが、今は普段以上に普通
ではない。

校舎はもちろん、校庭全体が臨時の避難場所と化しており、普段
の華やかさはどこ吹く風である。

「まったく、絹旗さんの言う通りね。こんな学校作っちゃったお偉
いさんの顔をぜひ見てみたいものね。もっとも、今からそのお偉い
さんに会いに行くんだけど」

「はやく、済ませよう」

「滝壺さんの超言う通りですね。今頃、件の研究施設は麦野やフレ
ンダが超強襲していると思いますし、こっちもさっさと終わらせて
……」

「おっと、そうは問屋が何とやらってな。そこのお嬢様方3名様、

少々お待ち下さると助かるのだが」

突如後ろから呼び止められた奈津美たちが振り返ると、そこには背の高い一人の青年がポケットに手をつ込んだまま立っていた。

「（この男……どこかで見たことが……）」

奈津美が目の中の青年について記憶を掘り返していると、絹旗が真剣な顔つきで一步青年の方へと踏み出した。

「誰ですか？ 見たところ怪我人ではないようですが……まさか、超追っ手ですか？」

「お、理解が速いつてのは助かるぜ。じゃあ早速交渉と行こうか。お前らが冥土帰しから預かってるものを全部よこしな」

その青年の一言で、場の緊張の度合いが一気に高まる。

「やはり雇われの超追っ手でしたか……よこせと言われて、よこす奴がいるとでも？」

「おいおい、さっきの理解の速さはどこ行っちゃったんだ？ そりゃ俺だって、よこせって言われて素直によこす奴なんてそうそういるとは思っちゃいねえよ。じゃあここで質問だ、そんな言う必要性の皆無な発言をわざわざ言っただってことにはどんな意味があるでしょうか？」

「そんなちよろい問題、超小学生でも瞬殺ですね。答えは一つ、『警告』ですね」

「正解だ。じゃあ特別に補足を付けといてやる。死にたくなきゃ渡しな」

その青年の言葉に、絹旗は思わずため息を漏らした。

「『死にたくなきゃ渡しな』？ そんな中二全開のセリフでどうかしようなんて超頭おかしいんじゃないですか？ 良いでしょう、微力ですがこの絹旗最愛がそのおかしい頭を超矯正してあげましようー！！」

まさに先手必勝とばかりに、絹旗が猛スピードで青年との間合いを詰めると右手に窒素を宿して殴りかかる。

握られた右手の拳は青年の頭めがけて放たれ、クリーンヒットして青年の意識を一撃で刈り取る……ことは叶わなかった。

拳がヒットする直前、青年と拳とのあいだに白い壁のようなものが広がり、窒素で威力を何倍にも増した右ストレートを完全に受け止めたのだ。

「なっ!?!」

「テメエごときがこの俺を矯正する？ ハッ、笑わせんじゃねえよ。そしてそのえらそうな態度にムカついた。全員血祭り決定だ」

次の瞬間、青年と絹旗のあいだに一瞬ゆがみが生じたかと思うと絹旗もろとも3人は吹き飛ばされた。

絹旗は、自分の方が謎の攻撃の近くにいてスピードがついていることを利用し、空中で奈津美と滝壺を何とか掴むと無理やり身体を

回転させて自分だけが壁に激突するよう体勢を入れ替えた。

ゴバン！と大理石の壁に衝突し、絹旗の身体はズルズルと壁をこすりながら地面へと落ちた。

窒素装甲のおかげで外傷は無いが、衝撃は身体に十分伝わって呼吸することすらままならない。

それでも何とか目を開けて顔を上げると、青年がその背中に白い6枚の翼を展開して絹旗たちを見下ろしていた。

「どうやら窒素を攻撃や防御に使ってるみたいだが、そんなちやちなもんじゃ俺の領域にはつま先すら到達してねえな。っていうか、次元が違ええ」

「くっ……」

「だから言っただろ？ テメエごときが俺を矯正するなんて笑わせんな」ってよ。まあいい、この辺で大人しくぶち殺されとけ」

冷酷に言い放つと、青年はその白い翼を大きく広げて絹旗を突き刺そうと……

「待てよ、第三位」

その言葉に、絹旗を殺そうとしていた白の翼がピタッと動きを止

めた。

青年が絹旗を見下ろしていた顔を上げて声のした方を見ると、そこには頭に包帯を巻いて制服はあちこちが擦り切れている一人の少年が立っていた。

「なに勝手に俺の親友殺そうとしてるわけ？」

「あ？ 誰だテメエ」

「さあな。それより、自分より圧倒的に弱い女の子を一方的になぶったりして楽しい？ ま、楽しいか楽しくないかに関わらずお前はここで俺が止めるけど」

そう言うと、突然バサァッ！！、と音がして少年の背中から白銀の何かが現れた。

「なっ……」

その光景に思わず青年から声が漏れる。

「うわあ、俺初めてこれやってみたけど、まさか俺もこんなものが現出できるなんてな」

少年の背中に現れた白銀の物、それは青年の白いものと同じ『翼』であった。

「さてと……どっちの翼がよりメルヘンか勝負してみようぜ？
垣
根帝督さん？」

そう言って少年 第二位の工藤明俊は不敵な笑みを浮かべる
のであった。

第44話 迫り来る純白の翼（後書き）

さて、ついに常識の通用しない男と常識をかき消す男の対決となります。

対決の行方は……

現実世界では、原作が「新約」の名の下新たな展開を見せ始めました。

さて、「新約」とある双子の第二人生「まで行くのかそれとも行かないのか……

っていうか、このペースだと新約まで手を伸ばしたら何話まで行くんだって話ですけど。

でも、すでに頭の中では今まで考えていた要素と新約を織り交ぜ始めた主であった……

第45話 目覚めし白銀の翼（前書き）

まずは、2011年3月11日に発生した『東北地方太平洋沖地震』（東北関東大震災）において被害にあわれた皆様・読者様に心よりお見舞い申し上げます。

自分の住んでいるところ（関東地方なのですが）も多少なりとも地震の影響を受けましたが、幸いにして甚大な被害を受けることはありませんでした。

恐らくではありますが、大きな被害を受けた場所に住んでいらっしゃる方々の中にも自分の小説を読んで下さっていた方がいるかと思えます。

そのような場所にいらっしゃる皆様の、1日でも早くの復興を願ってやみません。

さて、今回は久々に短めの話となっております。

前話から時間的進展はありませんが、久しぶりの明俊・琴美の絡みです。

また、小説トップにも書きましたが、時系列で言うと15巻の後（もしくは前）に梓主人公オリジナルを書くことを決めました。

今までは書こうかなあ〜でしたが、正式に書くことにします。

そこまでは長いですが、特に梓ファンの皆さんはお楽しみに。

第45話 目覚めし白銀の翼

時間は、明俊と垣根帝督が対峙する少し前にさかのぼる。

常盤台中学の保健室のベッドの上で工藤明俊は目を覚ました。

「……ここは？ 痛つつ!？」

見慣れない周囲の景色に身体をおこそうとするが、左肩に走った痛みに思わず声が出て身体をベッドに戻す。

「あ！ 明俊さん！！大丈夫ですか!？」

「初春……無事だったか。じゃあここは常盤台で良いのか？」

「はい。私は明俊さんに逃がされた後何事もなく常盤台まで逃げ延びることが出来ました」

「良かった。それで、俺のことは白井が運んでくれたのか？ 俺、初春を逃がした後別の攻撃をくらって気絶しちまって記憶が曖昧で……」

「そうです。白井さんがレポートで……あ、そうそう、ちょっと待ってて下さいね」

初春は何かを思い出して言葉を切ると、立ち上がって保健室から

出て行った。

誰かを呼びに行ったのだろうか、明俊はそう推測しながら、動かせる右手で左肩以外の場所に大きなダメージがないか確認する。

頭には包帯が巻かれているようだが、例えば脚を骨折しているなど、行動に支障が出るような傷は負っていないようだ。

「（とは言っても、これじゃあ左手は満足に動かせそうにない。まったく、レベル5が聞いて呆れるな……）」

そんなことを思い、明俊は自虐的な笑みを浮かべる。

ガラッ！と音がして明俊が顔を上げると、保健室の入り口のところに先ほど出て行った初春の他に、梓・琴美・白井の姿があった。

「お、お兄ちゃ……」

「明俊さん！！」

明俊に声をかけようとした梓を押し分け、我先にと保健室に入ってきたのは琴美であった。

「っ！？ うお！？ なん……」

いきなり近付いてきて明俊の顔を両手ではさむようにさわった琴美に明俊が狼狽していると、琴美はそのまま明俊の顔に自らの顔を近づけると瞳を閉じ口付けをした。

「ん……………」

「（うおお！？何だこのいきなりの展開は！？目を覚まして少ししたらいきなりキスされているこの展開は！？まあ気持ち良いから良いけど……………って違いえ！！梓たちに生温かい目で見られてるって！）」

「……………（#^ ^）（ビキビキ）」 梓

「あらあら、お熱いですこと……………」 白井

「……………（うわぁー、あれが大人のキスってやつなんですね……………そしてこの後は大人の世界へ……………」 妄想全開の初春

本当はもう少しこのままで……………なんて思っていた明俊であったが、3人の視線に気持ち悪い汗が流れたのを感じて、右手で何とか琴美を引き離す。

「琴美、みんなが見てるから今は止めて……………」

ギョッ

引き離したはずの琴美が、今度は明俊の左肩に触れないように両手を首筋に回して抱きついた。

「……………あなたが無事で良かったです、とミサカは恥も外聞も捨てて安堵の気持ちを露わにします」

「っ……………」

その言葉に、明俊は思わず右手で琴美の身体を抱き寄せた。

「（そうか……レベル5とかそんなこと以前に、俺は琴美を不安にさせちまったんだな。琴美を守るって言っておきながら、その守る側の間人が不安を抱かせるなんて、俺がいて初めて琴美は幸せな顔をするってのに、俺は一体何をやってたんだろうな）」

明俊は表情を引き締めると、琴美を抱き寄せたまま梓たちの方へ顔をむける。

「白井が俺を運んでくれたんだよな。まあ、俺が初春に白井を呼んでくれてって頼んだんだけど……ありがとな」

「良いんですよ。いくらあなたがレベル5の第二位とはいえ、テレポーターにやられたとなれば致し方ありませんし。同じテレポーターであるわたくしが言うのもなんですが、テレポートは厄介な能力であることは間違いないですし」

「いや、俺にも落ち度はあったよ。暴走した無能力者の数を考えればテレポーターがいても何ら不思議じゃなかったし、自分の能力でも対処出来ない相手としてテレポーターの存在を考えておくべきだった。知り合いにテレポーターがいればなおさらだったよ」

「私もテレポートまでは考えなかったな……お兄ちゃん、怪我は大丈夫？」

「常盤台の先生がやってくれたのか？丁寧に応急処置がされてるからとりあえずは大丈夫みたいだ。でも左手はしばらくは満足に動かせそうにないな。そういや、佐天や御坂は？」

「お姉さまは外のアンチスキルと一緒に警備に当たっていますわ。佐天さんは……初春、佐天さんはどちらに？」

「佐天さんは柵川中学のみんなと一緒にいますよ。怯えてる友達を慰めたり安心させたりしてます」

「そうか……じゃあ俺も出来ることをしないとな」

そう言っつてベッドから出ようとする明俊を、琴美は押し留めようとする。

「待ってください。そんな怪我で何をしようと言つのですか？ とミサカは厳しい視線であなたを見つめます」

「俺も御坂と同じようにアンチスキルのところに行ってくる。みんなには迷惑かけちゃったからな。俺も出来ることをしないと……」

「そんな怪我でお姉さまと同じことをしても足手まといになるだけです、とミサカはキツイ言葉を投げかけます」

「っ……」

「琴美、それは流石に言い過ぎじゃ……」

梓のなだめる言葉を聞いた琴美は「言いすぎ……そんなことは分かっています。それでも……」と小さく呟くと再び明俊を抱きしめ、耳元でほとんど独り言のような小さな声で呟いた。

「……ミサカを一人にしないで下さい」

「琴美……」

その一言に、明俊は返す言葉がなかった。

琴美を心配させたくないという気持ちと、レベル5としての使命感にも似た「みんなの力になりたい」「力にならなければならぬ」という気持ちが混じりあい言葉を失ってしまった。

と、そこへ……

ゴバン……！

「な、何事ですか！？」

外から破壊音と衝撃が走り、その場にいた全員が窓の外を見る。

「爆発か？」

「いえ、爆発とは少し違うような感じですよ」

「見てください白井さん、あそこの校舎の壁から煙が出てますよ」

初春の指差す方向を明俊たちが見ると、大理石で出来た校舎の壁から土煙のようなものが周囲にたちこめ、パラパラと大理石の破片が散乱していた。

そして、立ち込める煙の中から見えた白いものが何であるか把握したとき、明俊と梓は事態の深刻さを認識することになる。

「何でしょう白井さん、何か白く輝くものが見えますが……」

「……あれは、翼、でしょうか？」

「「ッ!?!」」

「でも、何で翼……?」

その正体に気付いた明俊は琴美を押しよけるとベッドから飛び降り、険しい顔つきで右手で窓を開ける。

「白井、頼みがある」

「??? 何ですのいきなり?」

「御坂を連れて来てくれ」

「お姉さまを……ですの?」

「そつだ。詳しいことは後で話す。『戦力』は多い方が良い、急いでくれ」

「……どうやら緊急事態のようですね。了解ですの!」

明俊の表情から事態の深刻さを悟った白井は、それ以上訳を聞くことなくレポートして消えた。

「梓、相手が相手なだけに穏便には済ませられそうに無い。初春と協力してこの近くにいるみんなをこの場から遠ざけてきてくれ」

「うん。一通り終わったら加勢する！ 行くわよ、初春さん！」

「え？ ええ！？」

梓は訳の分かっていない初春の腕をつかむと、そのまま引きずるように保健室を後にした。

「さて……と。琴美、お前はここにいるんだ」

「……何がおきているのかは知りませんが、『戦力』が必要なのですよね？ とミサカは確認を取ります。ならば、ミサカも同行します」

「ダメだ。琴美を連れて行くわけにはいかない。アレは格が違う。一方通行並みの強さを誇る相手だ」

「一方通行……つまり、レベル5というのですか？」

「ああ。だから……」

「だったら、なおさらミサカを連れて行って下さい、とミサカは同行を再度申し出ます。ミサカを、一人にしないで……」

「一人にしないで下さい」とでも言つつもりだったのだろうか、しかし明俊はその言葉を途中で遮るように琴美を抱き寄せた。

「違うんだ、琴美。確かに琴美の申し出は嬉しいし、できれば一緒

に行きたい。でもな、今回はそこらのスキルアウトを相手にするのは話が違うんだ。油断すれば命を失っちゃうような強大なヤツなんだ。そんなヤツがなんでここにいるのかは分からないけど、放っておけばここに避難しにきたみんなが、そして琴美が危険なんだ。そんな事態だけは避けなきゃいけない。……分かってくれるか？」

その明俊の言葉を、離れたくないという気持ちの表れか、明俊のYシャツの胸元の部分をキュッと掴みながら聞いていた琴美だったが、やがて手をはなすとベッド横の机の上に置いてあった明俊の拳銃を取ると、マガジンを取り替えて手渡した。

「……分かりました。では一つだけ、必ず生きて帰ってきて下さい、とミサカは念を押します」

「当然だ」

明俊は自らを引き締めるように短く答えると、窓枠に手をかけ外へと飛び出した。

「だから言っただろう？」
「テメエごときが俺を矯正するなんて笑わせんな」
『っつてよ。まあいい、この辺で大人しくぶち殺されとけ』

明俊が煙の立ち込めた場所に近付くと、背中に白い翼を生やした男
垣根帝督 が地面に横たわる人間を冷徹な目で見下ろしていた。

明俊がその状況をよく見ると、地面に倒れているのは3人、それもどれも明俊の知っている人物であった。

「（絹旗最愛に滝壺理后じゃねえか！？何でこの二人が垣根と！？……おいおい、もう一人いるかと思っただら奈津美様じゃないですかあ！？）」

目の前の訳の分からない光景に動揺を隠せない明俊であったが、垣根が背に宿した白い翼を大きく広げていること、地面に奈津美たちが倒れていることから事態を予想し割って入った。

「待てよ、第三位」

明俊は垣根が顔を上げるのを見ながら、頭の中で展開をシミュレートする。

「（どうする？垣根の『^{ダークマター}未元物質』に俺の反物質は通用するのか？しない場合は……考えたくなえな。もしそうなら御坂や梓待ちつてことになる。3人でも勝てるかどうか微妙なのに、一人で時間稼ぎなんて……いや、やるしかねんだ！！ここで俺がやられたら琴美を悲しませることになる。それだけは絶対に避ける！！）」

自らのほうが序列が上だからといって、絶対的に有利であるとは言えない、いやむしろ、上位3人は誰が番狂わせを起こしてもおかしくない拮抗した力を持っている（と明俊は思っている）。

そんな「自分が垣根に負けてもおかしくない」というネガティブを頭から追いやり、明俊はキツと垣根をにらみつけた。

「なに勝手に俺の親友を殺そうとしてるわけ？」

「あ？ 誰だテメエ」

「さあな。それより、自分より圧倒的に弱い女の子を一方的になぶったりして楽しい？ ま、楽しいか楽しくないかに関わらずお前はここで俺が止めるけど」

明俊は垣根に言葉をかけながら、震えそうになる手を握り締めながら自らを奮い立たせる。

「（何で垣根がここにいいのかは知らねえ。だけど……こっちの方が序列は上なんだ、ここで俺が止めるしかねえよなあ……）」

バサアッ！！

明俊の頭の中で何かはじけ、次の瞬間白銀の翼が明俊の背中に勢いよく現れた。

「なっ……」

その突然の光景に垣根の口から声がもれた。

「（おいおいマジかよ……試しに垣根や一方通行みたいに『俺も翼出して戦ってみるかな』なんて思ってたら出せちまったぞ！？ ……ひよっとして、俺も一方通行や垣根に違わず、レベル5の中でも格の違うってことじゃねえよな？）」

自らの中に眠っているかもしれない、自分でも把握しきれない未知なる力の存在に驚き、恐れを隠せない明俊。

だが、

「（今はこの力を使って垣根帝督を止めないといけねえ！！ 怖いけど、今は自分の力に従うだけだ！！）……うわぁ、俺初めてこれやってみただけど、まさか俺もこんなものが現出できるなんてな。さてと……どっちの翼がよりメルヘンか勝負してみようぜ？ 垣根帝督さん？」

垣根帝督が抱えるものが未元物質、無機・神が住む天界の片鱗の力ならば、明俊が抱えるのは無・神をも消し去る可能性を秘めた力である。

今、世界を揺るがしかねない力を持つ二人が衝突する

第45話 目覚めし白銀の翼（後書き）

次回こそ、明俊vs垣根となります。

カップリングですが、やはり妹達への僕の愛（？）なのか、明俊と琴美の絡みは書いて楽しいと同時に明俊が羨ましい……………

どうか琴美が超幸せになりますように……………（って書いてるの俺じゃん！）

第46話 無VS無機（前書き）

さて、明俊と垣根の対決な訳ですが……正直、難しかったです。

今の原作知識（執筆時、新約1巻まで出版）では垣根の未元物質やキャラに関する情報が少なくて少なくて……

文才でどうにかカバーしたかったのですが、バトルシーンは苦手（これでよく』とある』の小説を書こうと思いましたがね僕）・素粒子や反物質について細かく書こうとしても意味不明な文章になるだけ……散々でした。

それでも何とか書くことが出来ましたので、見苦しい展開ですがお楽しみ下さい。

第46話 無VS無機

「へえ、少しは楽しませてくれそうなヤツが出てきたじゃねえか。しかも、俺を第三位と知ってわざわざ出てきたってことはそれなりの能力の持ち主ってことで良いのかあ？」

未元物質の使い手、垣根帝督は絹旗へむけていた純白の殺人翼を一旦引き戻すと、自分と同じく背に翼を宿した少年 工藤明俊に興味津々といった感じの視線を向ける。

「そうだな……少なくとも、アンタに一方的に虐殺されちまうほど弱くはないつもりだ」

一方、明俊もまるで垣根と戦うことを楽しみにしているかのような不敵な笑みを浮かべている。

「ハッ、そうかよ。でもな、分かっているとは思うが一つだけ忠告しといてやる。俺の未元物質に常識は通用しねえ。今まで^{カテゴリー}テメエがどんなもんに遭遇してきたかは知らねえが、そのどの範疇にも当てはまらねえ。それでもやるってのか？」

「もったいぶんなよメルヘン野郎。さっさとそのとっておきやつを見せてくれよ」

忠告に動じることなく、逆に挑発で返してきた明俊に垣根の顔が殺意で歪んだ。

「中学生程度のカキにはやし立てられてムカついてる俺もまだまだ甘ちゃんなんだろうけどよ、流石にムカついた。もう生きて帰らせ

ねえから、ここで絶望しろコラ」

垣根はそう言い放つと、六枚の翼をバァッ！と大きく展開して明俊の方へと振るった。

明俊はタンツ！と一歩後ろに下がりながら翼を前に出すことで垣根の翼をかき消そうとした。

しかし、明俊の白銀の翼に触れた垣根の翼は消えることなく、そのまま明俊の翼とのあいだでつばぜり合いが始まった。

「ッ！？ 反物質で消えないだと！？ やっぱり、常識が通用しないってのは伊達じゃないみたいだな！」

明俊の公算では、未元物質で出来た垣根の翼は反物質で一瞬にして消え失せるはずだった。

一方、垣根もこの状態は少し想定外だったようでやや驚いた顔をする。

「……へえ、ずいぶん面白いモンを操ってるじゃねえか。なるほどなるほど、じゃあテメエが第二位ってことで良いんだな？」

「流石は元第二位。こんなにも早く解析されるとはな、恐れ入ったぜ」

「反物質とは興味深いモンだな。まさか、俺の未元物質とまともに干渉できるとはな」

垣根は垣根で、明俊と同様に相手を一瞬で地面に這いつくばらせ

ることが出来ると確信していた。

白銀の翼が何によって発現しているのかはパツと見では分からなかったが、未元物質の前にはその程度の情報不足は無問題だと思っていた。

ところが、垣根の予想に反して白銀の翼は未元物質に干渉してきたため、徐々に身体の内側から湧き上がるものを感じていた。

明俊はつばぜり合いの状態から翼を押し返すと、翼を羽ばたかせて上空へと飛び立った。

下を見ると、常盤台のグラウンドに避難していた学生が垣根から離れるように走り、グラウンドのすみの方でグループを作ってこの状況を見つめていた。

「（派手にやりあうことで周りにこの状況を気付かせ逃がすことに成功したみたいだが……）」

垣根を見ると、明俊を見上げてニヤツと笑い翼を動かして追いかけてきた。

「（問題はこっちだよ……何とかして未元物質を攻略しないと勝ち目はない）」

明俊は両手に白銀の翼と同じもので出来た刀のようなものを作り出すと、地上から迫ってくる垣根に自ら接近して両刀で切りかかった。

それに対して垣根は翼を羽ばたかせるのを一旦止めると、そのまま情性で明俊に近付きながら翼を前に動かし両刀を受け止めた。

「（よしっ！）」

明俊は垣根が翼で刀を受け止めた瞬間、刀を翼に押し当てながら前回りの要領で回転、垣根の背後を取ることに成功した。

「（もらった！！）」

体勢を立て直し、両刀を垣根の背に突き刺そうと腕を伸ばした。

しかし……

ガキッ！！

「ッ！？」

白銀の刀は垣根の背中に刺さることは無かった。

「（おかしい……ちゃんと背中、翼の生えてない無防備なところなのに何で刺さらない！？）」

さらにおかしなことがあった。

それは、明俊の目の前にいる背を見せている垣根が少しも動きを見せないことであった。

「(…………まさか!?)」

明俊が刀で翼を受け止めてからある仮説にたどり着くまで2 3秒、しかし、これだけ短い時間であつてももう1秒明俊が仮説にたどり着くのが遅ければ今頃彼の命は無かつた。

慌てて翼が生えている以外の身体の表面に反物質を展開した。

ガキッ!!

先ほど明俊が両刀を突き立てようとした時と同じような音がして、明俊の背中に背骨が折れるのではないかと思うくらいの衝撃が走つた。

「がはあっ!!」

衝撃で吹き飛ばされた明俊は何か翼を使って姿勢を立て直す、先ほどまで自分が居た場所に垣根が佇んでいるのを確認した……二人も。

目の前の信じられない現実に、明俊は動揺を禁じえなかつた。

「お前…………まさか…………!?!」

「どうだ、元第二位の実力つてやつを思い知つたか?」

明俊とは反対に、垣根はしてやったりの表情を見せた。

「……ああ、十分思い知らされたよ。まさか、未元物質でもう一人の垣根帝督を作り出すなんてな」

つまり、垣根のとった作戦とはこうであった。

明俊がグラウンド上空に飛び立ってから下に居た垣根を視認するまでのわずかな間に、垣根は未元物質で自らの模型のようなものを作り出し、自らはその影に隠れた。

そして、明俊が垣根の模造品を見たのを確認した垣根はその模造品を明俊の方向にむけて飛ばしたのだった。

明俊が地上にいた本物の垣根に気付けなかったのは、迫り来る模造品に意識を集中していたのと、その模造品が実際に翼を動かしたり攻撃を受け止めたりとリアルな動きを見せたからであった。

「（それにしても……能力の使い方が尋常じゃない。こっちの世界に来て能力を使い始めてから1ヶ月かそこらしか経っていない俺とは経験が違う）」

なにより明俊が違いを見せつけられたのは、自らに備わっている高度な演算力を最大限に引き出すための『経験の差』というやつであった。

明俊が知りえている垣根の能力の大きさは小さい。

知っているのはせいぜい『未元物質』というこの世界には存在しな

いものを扱っ』ということと、『翼を使ってくる』という二つのことだけだ。

しかしそれは垣根にとっても同等の条件……というより、垣根は明俊の能力に関しては大抵一つ『反物質を扱っ』ということしか知らないのだ。

両者同じような条件で始まったこの戦いだが、今その戦況に優劣をつけているのは紛れも無く『経験』だ。

その一点において、明俊はすでに垣根に負けている。

「くそっ、打開策が見つからねえ。これは、御坂や梓が来るまでの時間稼ぎに徹するしかない。3対1なら勝機も見出せるはず……！」

明俊が目標を「タイムマン勝負」から「時間稼ぎ」にスイッチして策を練り直そうとしたその時、垣根が動いた。

といつても別段特殊な動きを見せたわけではなく、翼の羽を数枚、翼から切り離して空中に散らすと明俊の方へと飛ばしてきただけだ。

明俊はそれを横に飛んで難なくかわした。

……だが、奇妙なことはその時起こった。

垣根の飛ばしてきた羽のうちの1枚が明俊の白銀の翼に触れ、そして『貫通』した。

「……ハッ!? 何で今までは干渉するだけだったのに今は!？」

「そこで明俊は思い出した。垣根と最初にぶつかり合ったときのことを。」

「……へえ、ずいぶん面白いモンを操ってるじゃねえか。なるほどなるほど、じゃあテムエが第二位ってことで良いんだな？」

「流石は元第二位。こんなにも早く解析されるとはな、恐れ入ったぜ」

「まさか、完全に解析されたってのか!？」

「おせえんだよ第二位。テムエの反物質なんざとつくに解析済みだ。さっき俺のダミーがテムエに衝突したときに、俺の末元物質とテムエの反物質がどういう反応をおこしてるのか観測させてもらった。データさえ集まれば対策なんて余裕なんだよ」

「くそっ!」

「だから言っただろ？俺の末元物質に常識は通用しねえってな。確かに反物質なんてのはこの世界にまず存在しないもんだし、その反応も正直理論だてて説明するのが難しいだろうな。でもな、それでも『存在しない』って訳じゃねえ。つまりレア度が違うんだよ。テムエのは『理論上存在するけど実在はしない』だが俺のは『元々存在すらしない』んだよ。分かったらさっさとその第二位の座を返上しやがれクソが」

「振るわれる純白の翼を、明俊は上下左右あらゆる方向に動いて回避する。」

もちろん、明俊が未元物質を解析していなかったわけではない。

しかし、反物質と未元物質が衝突するたびに脳内に流れ込んでくるデータに困惑していたのだ。

垣根も言っていたが、未元物質は元々存在すらしない代物、この世の物理法則とはかけ離れた独自の法則にのっとり動く代物だ。

その構成は、もはや口頭や式で表現できるものではない。

今の明俊は、やっとそのおおよその全貌が見えてきただけでまだまだ対策には程遠い状態であった。

「（解析が終了するまでにはまだ時間がかかりそうだ……くそつ、白井が御坂を連れてくるのはまだなのか!? 1対1じゃジリ貧だぞ!）」

今明俊に残された道は二つ、一つは自滅覚悟で攻撃に転じる、もう一つはとにかく回避に徹する。

だが、今の明俊にとってはどちらも危険な道である。

「（二つに一つ……だが、攻撃は絶対にダメだ。突っ込んだ瞬間未元物質に串刺しにされるのがオチ。回避に従事するしかないけど、長くは持たねえ）」

明俊に攻撃手段が無いわけではない。

以前一方通行戦で見せたような、反物質と通常の物質が反応した

ときに出来る膨大なエネルギーを変換して利用する、というものである。

「（確かにエネルギー変換で生み出した電撃や炎は、その発生過程が本来のものとは違うから構造式にも多少違いが出る。解析される前に1、2回くらいなら垣根に当てられるかもしれない。けど……）」

しかしこれは体力の消費が著しく激しく、正確性も乏しい。

さらに言えば、変換の演算は複雑さを極めるため、垣根の未元物質の解析に割ける演算容量をすべて使ってしまう。

「（八方ふさがりかよ……！）」

垣根の翼が明俊の左肩に突き刺さるべく振るわれる。

明俊はとっさに身体をひねってこれを回避する……が、その時、

「うぐっ！？」

突如、左肩に激痛が走って明俊は集中力を削がれた。

明俊はとっさに、その痛みが傷口が広がったことによるものだと察した。

しかし、その時にはすでに演算は集中力を欠いて寸断しており、背に宿していた翼は消え去り明俊は地上にむけて落下を開始していた。

ところが、明俊は翼を再び宿そうとすることなく、身体の表面に反物質をまとわせることで衝撃を打ち消しそのまま地面に落下した。

何故明俊が飛ぼうとしなかったのか、それは彼が未元物質の解析に残された演算容量のほとんどをまわしたからである。

明俊の能力発動には、テレポーターほどではないにしろ精神的安定が求められる。

一方通行戦のときも吹き飛ばされながら能力を使用したか、あの時は翼を宿すことを彼はまだ体得していなかった。

しかし、翼を宿し、そしてそれを鳥類のように扱うことはかなりの演算容量を使う。

もし翼を宿そうとすればそれはすなわち、今まで続けてきた未元物質の解析を止めることになる。

どちらを選択すれば今後の戦いに有利になるか、それは自明のことであった。

しかし、垣根帝督は暗部の人間でレベル5、今までちよこまかと逃げ回っていた相手が不意に地面に落ち一瞬でも動きを止めるといふ、千載一遇の機会を見逃すはうがなかった。

「チャックメイトだ、クソガキ」

「ぐっ……」

垣根は地面に仰向けに落ちた明俊の首根っこを掴むと、グツと力をこめて地面に押し付けながら締め始めた。

「結局、俺の方がテメエより格段に上だったってことだ。なのに、何で学園都市の連中はコイツを俺より上に据え置いた？ まあいい、ここでテメエをぶっ殺せばそんなことは関係ねえ。テメエより下の連中全員が一つ上に順位を上げるんだからな、これほど感謝されることはねえだろうよ」

「く……そ……」

「悪あがきもここまでだ。雑魚は雑魚らしく、地面にひれ伏して死ぬ」

右手で明俊の首を押さえつけたまま、垣根は背中に純白の翼を宿すと躊躇無く明俊の腹部にむけて……

ガゴオン！！

オレンジ色の閃光が辺り一面を照らし、垣根の体がバランスを崩し少しぶれた。

明俊の腹部に突き立てられようとしていた純白の翼は、明俊の横数十センチのところの地面に深々と突き刺さった。

そして、呆れたような、それでいて快活な声が響き渡った。

「まったく……私より格上のアンタがそんな簡単にやられんじゃないわよ」

その声の主は垣根の方に突き出していた右手をポケットの中につ込むと、ゲームセンターでよく見かけるコインを取りだし指で弾いてキャッチする。

そして、身体の周りにバチバチと青白い閃光をまわりつかせながら垣根、明俊に1歩近付く。

「でもま、アンタがやられるってことはそこそこ骨のあるヤツってことで良いんでしょう？ そんな美味しそうなもの、アンター一人で抱えてんじゃないわよ。私　　御坂美琴にも分けなさい」

常盤台のエースが、まさに救世主として降り立った。

第46話 無VS無機（後書き）

というわけで、久々のレールガン登場です。

この小説で御坂がレールガンを発射したのは、番外編を除くとレールアッパー編までさかのぼります。

かなり撃ちたい欲求も溜まっていたことでしょうか（？）、かなり好戦的な御坂お嬢様です。

さて、ここから先は苦手なバトルシーンが多めの展開が続きます。

展開や文章がかなり苦しいものになることが予想されますが、お付き合ひ頂けると助かります……

第47話 4人のレベル5

「それにしてもアンタ何者なわけ？ そのやたら目立つデツカイ翼に向けて撃つたからアンタに直接のダメージは無いとふんでたけど、レールガンくらって羽一つもげないなんて私をバカにしてるのかしら」

「誰だテメエは？ 邪魔するヤツはたとえ女でも容赦しねえ……待て、レールガンだと？」

その単語で垣根は目の前の少女が誰であるか認識した。

「は、はははははは！！ こいつあおもしれえ！！ 第二位の次は第四位か！この仕事引き受けた甲斐があつたつてもんだぜ！」

垣根は笑いながら明俊から手を放すと御坂に向き直った。

「質問に答えてないわね。アンタは誰かってこっちは聞いてんのよ」

対して御坂は、垣根から視線を逸らすことなくコインを握った右手を構えたままで垣根に話しかける。

「おおっと、自己紹介がまだだったな。俺は垣根帝督、レベル5の第三位だ。よろしくな、常盤台のエース様」

その言葉の端々に相手を蔑むような、見下しているような印象を受けた御坂は明らかに不機嫌そうな表情をする。

「明らかにバカにされてるみたいでムカつくんだけど……それで？」

その第三位がこの常盤台に何の用？ どうせろくな事じゃないでしょうけど」

「いや、常盤台に用があつたわけじゃねえ。俺の目的は、そこで寝転がってる3人のクソガキどもが持つてるデータだ」

そう言いながら、垣根は地面に倒れこみながらこの状況を見守っている絹旗・滝壺・奈津美の方を指差す。

それにつられて御坂も視線を動かすと、3人のうち1人に面識があつた。

「あのピンクのジャージの人どこかで……思い出した！ 妹達の時、施設の破壊を邪魔してきた3人組の1人！」

御坂が面識があつたのは滝壺理后、以前御坂が妹達の関連施設を破壊してまわっているとき現れた、壁越しだらうと相手の位置を特定できる厄介な能力の持ち主、と御坂は記憶している。

「（なんである時の人間がここに！？……気になるけど、今はこの垣根とかいう男の方が優先ね。確か能力は『ダークマター』……だっけ？ よく分からないけど、レールガンくらって無傷なところを見るとそのダークマターってのはかなり面倒くさい代物のようね）」

あの明俊が地面に組み伏せられているところから見ても、御坂には未元物質が反物質と同等、あるいはそれ以上の代物であることは容易に想像がついた。

「（悔しいけど、私じゃ足止めになるかどうか微妙ね……でも、ヤツが狙ってる3人の中には小さな子供も含まれてる。何であんな

小さな女の子が狙われてるのか知らないけど、相手の方が強そうだからといってここで引くのは性に合わないのよね！」

とその時、御坂は明俊がゆっくりとだが立ち上がるのを垣根の後ろにとらえた。

「（そうよね、明俊がこんな簡単に戦闘不能になるはずない。妹達るとき、自分をかえりみず一方通行に挑んでいったあのバカと同じような人間なもの。2対1なら……！）」

再び御坂が、今度は先ほどより出力を上げてレールガンを発射しようとして電撃を溜め始めたそのとき、垣根の背後、奈津美たちが激突した校舎の屋上にある人物を見た。

「ぐっ、くっ………」

左肩から走る痛みにつめき声を発しながら、明俊は何とか立ち上がった。

明俊に背を向けて御坂の方を見ていた垣根だったが、気配で気付いたのか、御坂から視線を逸らすことなく話しかける。

「命拾いしたな、第二位」

「ど、どうして、トドメを刺さない？ こう言っちゃ御坂に失礼だろうけど、お前の実力ならレベルガンなんて小さな石ころを投げられたようなもんだろ？ 御坂を無視して俺にもう1度攻撃することが出来たはず、どうしてそれをしない？」

明俊の当然の疑問に、垣根はあっさりと答える。

「俺のためだ」

「はあ？ 何を言ってるんだ？」

「確かにテメエの言うとおり、俺にとっちゃレベルガンなんて『ちよっと痛てえな』程度のもんでしかない。でも重要なのはそこじゃねえ。重要なのは『レベル5を同時に2人相手にして勝つ』、これが今俺が求めてるもんだ」

明俊は一瞬、垣根が何を意図してそんなことを狙っているのかわからなかった。

だが、垣根が重要だと言った『レベル5を2人倒す』ということが何を意味しているのか考えて垣根の意図に気付いた。

「……なるほどな、それがお前の目論見か。俺たちを、アンタのレベルアップの材料にするつもりだな？ そこまでしてアレイスターとの直接交渉権が欲しいのか。俺には分かんねえけど」

この明俊の一言には流石の垣根も驚いたらしく、チラッと明俊を

睨みつける（それでも御坂から視線を逸らさないのは流石暗部の人間か、と明俊は思った。）

「テメエ、どうしてそのことを知ってる？ 俺は今までテメエとなんざ関わったことはねえし、そのことを他人に漏らしたこともほとんどない。知ってるのは俺と同じ組織の人間の、ほんの一握りだけのはず。テメエ……まさか、暗部の人間か？」

「ん？ ああ、違う違う。俺が暗部なんて所属したらたちまちその話は暗部全体に伝播するだろうよ。俺はれっきとした表の人間だし、アンタのその計画を邪魔するつもりも今のところない」

「じゃあ何で俺のことを知ってる？」

「話しても理解されないだろうし、話す気も無い。今重要なのは、アンタが用があるっていうあの3人をアンタから守れるかどうかってことだ」

「それに関してはテメエらの負けだな。超電磁砲ごとき仲間になれたところで俺の優位は揺るがねえ。テメエの反物質もすでに解析済みだ」

余裕の表情を見せる垣根に対し、明俊も先ほどまでの苦痛の表情の中に若干の笑みを浮かべる。

「そうかい。悪いな、こっちは準備運動に手間取ってた。それが終わって本腰入れられるようになるまでもうちよっと待ってくれると助かるんだが…な！」

明俊はベルトから拳銃を引き抜くと垣根の翼にむけて引き金を引

いた。

バン！という轟音と共に拳銃から発射された弾丸は一切の干渉を受けることなく、まっすぐ純白の翼を貫通した。

たったそれだけの事実だが、垣根の意識を御坂から逸らすには十分だった。

「ッ！？ 馬鹿な！ そんな弾丸一発ごときが、俺の未元物質を破つただと！？」

「生憎、こいつはただの鉛の塊じゃねえんだよ。俺も詳しくは知らねえけど、今装填されてる弾丸の表面にはA I M拡散力場に干渉する極秘技術が使用されてるとか何とか。そのおかげで能力の妨害を受けにくいんだよ。半信半疑だったけど、これで実証されたって訳だ」

精神的に落ち着いて演算に余裕が戻った明俊は、その背に白銀の翼を宿すと垣根に再び挑戦状をたたき付ける。

「先に襲ってきたのがそつちってことは、襲われても文句は言いませんって認識で良いんだよな？」

「ハッ、ガキにありがちな理論だな」

「暗部の世界なんてそんなもんなんだろう？ これくらいの理論で十分だ」

先手必勝、明俊は垣根に攻撃される前に引き金を連続して引いた。

衆人環視の中、身体の胴体部分（特に心臓近く）をうかつに狙うと、万が一垣根に当たらなかつた時に不要なパニックを引き起こしかねないと考えた明俊は脚を狙った。

垣根は地を蹴り、翼を使って上空へと回避する。

明俊は垣根を追いかける前にチラツと銃の側面部分を見た。

そこには小形のモニターがついていて、残弾数が表示されるようになっていた。

「（あと……3発か。貴重な弾だとは思ってたけど、予想以上に少ないな）」

本来の弾倉^{マガジン}はもつと多くの銃弾を収めることができるし、今明俊が装填している弾倉も大きさは普通のものと同じ。

しかし、弾丸自体が特殊な技術で作られていることもあり、その保存に関しても特殊な構造を要する。

具体的には、弾丸表面にAEM拡散力場に干渉する仕掛けが施されているため、万が一表面に傷などがついてしまうと本来の役割を果たさなくなってしまう恐れが生じるため、弾をしまっておく弾倉もそれ相応の処置を施しておかなければならないのだ。

そのため、弾一つにあたる部分のスペースが普通の弾倉よりも大きくなり、結果として最大装填数も少なくなる、というわけである。

「（闇雲に撃ちまくるわけにはいかない。何とか動きを止めてその瞬間に撃ち込む！）」

明俊が飛び立とうとしたその時、爆音とともにオレンジ色の閃光が上空の垣根の横っ腹に突き刺さった。

まともにそれをくらった垣根は、閃光の勢いに押されて大理石の校舎に突っ込んだ。

「普通の鳥を撃ち抜くならいざ知らず、そんなデカイ図体で上空に止まってたら絶好的のよ？」

声のした方を明俊が振り向くと、御坂美琴が風で乱れた前髪を手で直しながら近付いてきていた。

「御坂！」

「あんた達二人で勝手に盛り上がってる所悪いんだけど、私の存在忘れないでよね」

「そういうつもりじゃなかったんだけど……それより、さっきよりレールガンの威力上げたのか？ 1発目のときは体が少し動いた程度だったけど、今度はまともに吹っ飛んだぞ」

「最初はかなり手加減して撃ったわ。じゃなきゃ、地面に押さえつけられてたアンタが危なかったし。2発目は本気とまではいかなかったけど、そこそこの威力で撃たせてもらったわ。万が一にも全力で撃って相手を殺してもしたら最悪だし。……でも、その心配は杞憂だったみたいね」

そう言って御坂が指差す方向を明俊が見ると、壁に穴が開き教室が外から見えるようになった校舎の、まさに見えている教室の中に

無傷の垣根帝督の姿があった。

「全力じゃないとはいえ、あの威力のレールガン受けて無傷だなんてまるであのバカみたいなしっこさね。なんだかやる気が無くなってくるわ……」

「弱気な発言だなんて御坂らしくないじゃないか。まだ全力を出していないのなら諦めるのは早いってもんだぜ？ ……来るぞ！」

明俊が言うのが早いか、垣根は教室から飛び出し殺意の塊である純白の翼を振るう。

「2対1だろうと変わりはねえ！！ テメエら雑魚なんざレベル5にいることもおこがましいってことを身をもって教えてやるよお！！」

「そうかそうか。なら雑魚は雑魚らしく、3対1で挑ませてもらうか！！」

その言葉が垣根の耳に届いた直後、バリッ！！という音とともに垣根の背中に巨大な氷の槍がぶち当たった。

槍はそのままバキバキと音を立てながら垣根を押し込み、ズシヤアッ！と地面に突き刺さった。

しかし、というか流石、というか、垣根は地面に槍ごとめり込むことなく直前に脱出していた。

「あらら、圧倒的な圧力で不意打ちすれば勝てるかな、なんて考えてたけど……やっぱり甘かったか」

また別の声がして垣根が上を見上げると、地面に刺さっている槍の頂上部分にそびえ立つ一人の少女がいた。

「めんどくせえな次から次へと……こっちはさっさと第二位と第四位をぶっ殺してえってのによ！」

「さつきもお兄ちゃんが言ってなかったかしら？」3対1で挑ませてもらっ』って。私がその3人目よ」

「……お兄ちゃん、だと？ おいおい、今日の俺ってひよっとしてかなりツイてるんじゃないのか？」

垣根の顔は喜びと殺意の混じった、形容することが難しい（と明俊以下3人は思った）顔をする。

「第七位も登場か！ 良いぜ良いぜ！！ 超電磁砲以下の雑魚だろ」とレベル5であることに変わりはない！！ 俺の経験値稼ぎに協力してもらっぜー！！」

その言葉に第七位、工藤梓は「死亡フラグ満載のセリフありがとう」と呟き、スカートのポケットから明俊と同じ拳銃を取り出すと垣根に向けて引き金を引いた。

垣根は咄嗟に、発射された弾丸が明俊が撃つたものと同じだと判断し、暗部で鍛えた反射神経でこれを回避、翼から複数の羽を分離させてこちらも梓にむけて発射した。

発射された羽のうちのいくつかは梓が立っているすぐ下の氷を貫通し、そこより上の部分が地面に落下する。

「梓!！」

明俊がそう叫んだときにはすでに、梓が立っていた部分は地面に落ち無残に砕け散っていた。

しかし、本来ならばそこにいるはずの梓の姿がない。

「梓さんは!？」

御坂は辺りを見渡すがどこにも梓の姿はなかった。

「ハハ………すげえなおい」

御坂の耳に、明俊の意味不明な言葉が聞こえてきた。

「ちょっとアンタ!! 相手の凄さに今ごろ感心してる場合!？」

「いやいや、そうじゃねえよ御坂。あれを見てみるって」

そう言っつて明俊が上を指差すので御坂もつられて上に顔を向け、その光景に思わず息をのんだ。

そこには、透き通るような青色の翼を背に宿し、翼を通った光であたり一面に幻想的な光の模様を作り出している梓の姿があった。

「………明俊、あれは一体？」

目の前の神秘的な光景にしばし言葉を失っていた御坂が明俊に尋ねる。

「……さあな、俺も説明出来ねえ。でも一つだけ確かなことは、梓もただのレベル5じゃないってことだ」

「何なのよ、あんた達二人は……」

ため息混じりに呟いた御坂の言葉を聞いた明俊は、自らに宿った白銀の翼、そして梓に宿った青色の翼のことを考え、「俺が聞きてえくらいだよ」と漏らした。

「な、何ですか、あれ……」

絹旗最愛は目の前の光景に思わずそう言葉を漏らした。

「あれが、超レベル5の真骨頂ってやつですか……」

「きぬはたっ、なつみ」

絹旗、奈津美の服をクイクイツと引つ張りながら滝壺が2人に呼びかける。

「どうかしたんですか？滝壺さん」

「あの2人……銀色の翼を生やした人と青色の翼を生やした人についてなんだけど」

「工藤明俊と工藤梓ですね。あの2人が超どうかしたんですか？」

「うん。あの2人のAIM拡散力場、ちょっとおかしい」

「おかしい？どういうこと？」

滝壺の言葉に食いついてきたのは奈津美だった。

「わたしもこんなのは初めてだから上手くは言えないんだけど、お互いのAIM拡散力場が影響しあってるって言えば良いのかな……？ごめん、よく分からない」

「……そう、そういうこと」

「奈津美、何か知ってるんですか？」

絹旗の言葉に奈津美は返事をせずしばらくのあいだ考えにふけっていたが、やがて首をゆっくりと横に振った。

「何でもないわ。それより、あなたたちには本来の仕事があるでしょう？それを済ませに行くわよ」

「超そうでした……でも、あれを放っておいて大丈夫でしょうか？」

「暗部のあなた達が優先すべきは任務の完了よ。それにあんなハイレベルの戦い、私たちにどうこう出来るものじゃないわ。体晶をフルに使った滝壺さんなら何とか介入できるかもしれないけど、そんなことをしても事態の解決にはつながらない。滝壺さんを失うデメリットの方が遥かに大きいわ」

「そうですね。では、彼らの戦いは避けて何とか施設までたどり着きましょう」

「待つて。確かに彼らの戦いは無視して先を急ぐにこしたことはないけど、もし明俊たちがやられてしまつてはマズイことになる。ここは施設の場所を聞くと共に、明俊たちが確実に勝てるようにしましょ」

「どうするの？」

「忘れてないかしら、『常盤台中学にはもう一人、レベル5がいる』つてことを。それも、ある意味どのレベル5よりも厄介な能力の持ち主であるレベル5をね」

奈津美はそう言つと、常盤台中学の校舎の中へと消えていった。

第47話 4人のレベル5（後書き）

……さて、梓もアップを始めたようです（汗

もちろん想定通りなのですが、この小説をエンディングまで書ききれるのかどうか自分が不安になってきました……もちろん書きませんが。

さて、4人のレベル5がバトってるわけですが、奈津美が更なる勢力を交えようと動き出します。

その『5人目』についてですが、今のところどんなキャラなのか、名前と能力以外の詳しい情報がないので僕の妄想全開で書かせていただきます。

第48話 心理掌握

大理石でできた常盤台中学の校舎の中を、見かけ小学1年生くらいの少女が歩いていった。

それだけの説明だと奇妙な光景にしかならないが、今の常盤台中学は臨時の避難場所になっており、少女以外にも数多くの一般人が開放された教室や廊下で怪我の治療や情報収集を行っている。

そんな彼らだが、今は治療や情報収集もそこに外の光景に目を奪われていた。

彼ら一般人の視線を奪っているもの、それは窓の外に見える、科
学の街学園都市においてもそうそう見られることのない神秘的な光
景であった。

一人の少女が背に青色の翼を宿して、その翼を通過した太陽光が
地面や壁、窓を通り越して教室の中にも幻想的な風景を作り出して
いる。

夜の学園都市を空や高台から眺めた時の人工的な美しさなどは
明らかに異なる、オカルトチックだが『神が天から舞い降りた』よ
うな光景に目を奪われないはずがなかった。

「……………」

さて、先ほど説明した少女はその光景を時折チラッと眺めるもの
の立ち止まることはなく、校舎の奥へと進んでいく。

少し進むと、常盤台中学の生徒たちが集まってこれまた外の光景を眺めていた。

余談であるが、一般人の数多くが集まっていた入り口近くには常盤台の生徒はほとんどいなかった。

本来ならば率先して治療の手伝いなどをすべきなのだろうが、保健委員など一部を除いてほとんどの生徒が一般人から離れるように奥のほうでかたまっている。

決して常盤台の生徒たちに一般常識が欠けている、というわけではなく、『外で突然暴走した能力者が暴れているらしい』『その外から多くの人が出てきた』という情報を組み合わせれば、『校内でも暴れる人が出るのではないか?』という考えに至ってしまうのは仕方の無いことであった。

少女はその常盤台の生徒のうちの一人に話しかけた。

「ごめんなさい。ちょっと良いかしら?」

声をかけられた生徒はビクツと大きく反応して、話し掛けてきた少女から一歩離れるようにしながら返事を返す。

「は、はい、何でしょう?」

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。私は別にあなたを襲ったりはしないわ。第一、今の私じゃまともに能力も使えないし」

その少女の言葉にひとまず安心する女子生徒。

「それより、あなた……いえ、常盤台の人なら誰でも良いわ、一つ聞きたいことがあるの」

「？ 何でしょう？」

「本名は知らないんだけど……この常盤台には超電磁砲こと御坂美琴の他にもう一人、心理掌握メンタルアウトっていうレベル5がいるわよね？その人に会わせて欲しいんだけど」

その少女の言葉に、話しかけられた女子生徒はもちろん近くにいた他の生徒たちも反応を見せた。

「……あなたのような子供が、心理掌握様にどのような用ですか？」

その言葉を聞いた少女は内心、チツと舌打ちをした。

「（様付け……しまった。確か心理掌握は常盤台の最大派閥に君臨する言わば女王様。この人の感じからすると派閥の人間だったか。いきなり面倒くさいカードを引いたわね）」

少女は超電磁砲に陶醉するテレポーターのことを思い出す。

超電磁砲は派閥を作ったりはしていないらしいが、それでも彼女を敬愛している常盤台の生徒は多い。

その超電磁砲より派閥がある分、心理掌握の配下の人間は厄介である。

「（心理掌握を慕っている人間はかなり多いはず。その全員が例え

ば白井さんみたいに、心理掌握のためなら何でもするような人間だったら、私のような外部の子供と心理掌握を簡単に会わせてくれるはずがない)」

少女が周囲の様子を確認すると、先ほどの会話を聞いていたのだろう、他の生徒達も集まってきていた。

しかも、その大半の生徒が口々に「心理掌握様に会いたいですって……?」「このような子供が何故心理掌握様に?」といった言葉を口にしている。

「(面倒な……よりによって『信者』の巢に飛び込んでしまったみたいね。どうする? アイテムの名前を出したところで表の世界の彼女らには効き目は無いし、素直に『外の戦いを止めるために心理掌握に協力して欲しい』なんて言っても、本人以前に彼女らが許すはずが無い)」

「奈津美!」

少女 宮野奈津美がどうするか考えあぐねていると、後ろから絹旗最愛と滝壺理后が走って追いついてきた。

「一人で超勝手にスタスタ行かないで下さいよ……って、何ですか? この野次馬は?」

「どうやらここでは、心理掌握の名前を出すだけでこんな風に有名な人の気分を味わえるらしいわよ?」

奈津美が絹旗をチラッと見てジョークを言うと、絹旗は「ハハハ……」と苦笑い。

「どっちかって言うと逮捕された容疑者みたいな感じですけど……」
「嬉しくないわね」

「でも、どうしようか？ このままじゃ会わせてもらえそうにないよ？」

「超説得しかないでしょう。力を背景に無理やり面会を申し出ても多勢に無勢です。ましてここは常盤台、生徒全員がレベル3以上の能力者ですからね。私一人ならまだしも、滝壺さんや奈津美をかばいながら切り抜けるのは不可能です」

「そうね。まったく、時間が惜しいって時に……」

「あら、わたくしならここにいますわよ？」

その声に、奈津美たちの近くに集まっていた野次馬たちが一斉に振り向いた。

そこには、身長が他の生徒たちより一回り小さく、人ごみの中にいたら埋もれてしまいそうな感じの生徒がいた。

しかし普通の学生とは違うところがあり、それは背後に『側近』という言葉がふさわしく数人の生徒を引き連れているところであった。

「どっちらあれが……」

「ええ。超噂の心理掌握で間違いないでしょう」

「むぎのとはまた違った感じのレベル5の雰囲気を感じるね」

奈津美たちの周りに集まっていた生徒達が二つに割れ、あいだに出来た道を心理掌握と思われる女子生徒がいかに女王様といった感じで歩く。

そして、奈津美たちの前で立ち止まると3人の顔をそれぞれジッと見つめた。

「ふむ……」

心理掌握は少し考えて、側近の生徒一人に声をかけた。

「今、どこか空いている教室はあったかしら？」

「いえ、多数の避難者がいるため一般教室はどこも空いておりません」

「仕方ないわね……どうやら時間も少ないみたいですし、能力を使いましょう」

心理掌握がそう言った直後、3人の頭の中に声が響いた。

心理掌握『聞こえてるかしら？』

奈津美『感度良好ってところかしら？』

絹旗『これが念話ってやつなんですわ……危うく変な声上げて周

りから超変な目で見られるところでした』

心理掌握『その話し方も十分変だと思っけれど？』

絹旗『なっ！？ これは超アイデンティティーです！！』

心理掌握『じゃあ変なのはあなたのアイデンティティーそのもの
ってことね。それより、私に用があるんでしょ？』

絹旗『うう……』

奈津美『あら？わざわざ言わせる気？ どうせ私たちの頭の中覗
いたんでしょ？』

心理掌握『お願いってものは例え相手がそれに気付いても自分の
口から申し出るものよ？ ま、良いわ。確かにあなたの言うとおり、
あなた達3人の頭の中を少し拝見させてもらった。今外で何が起き
ているのかも分かったし、お願いの内容も分かったわ』

絹旗『協力してもらえますか？』

心理掌握『当たり前じゃない。第三位だろうと何だろうと、常盤
台というわたくし達の聖域で傍若無人な振る舞いは許さないわ』

心理掌握は側近の一人を手招きして隣に呼んだ。

「この小さな女の子、宮野奈津美さんって言うらしいんだけど、彼
女を連れて常盤台大学にある電磁気研究室に行ってきたよーだい。
その研究員にこの子の持っているUSBメモリーと携帯端末のメ

ールに添付されているデータを見せて、装置つてやつを作ってきて。詳しいことはこの子が全部知っているらしいから、あなたは案内するだけで良いわ」

「かしこまりました。では宮野様、参りましょう」

側近の生徒は心理掌握の言葉に頷くと、奈津美の前に立って先導するように歩き出した。

奈津美もその後をついて歩き出す。

「……ああ、奈津美さん？」

「？」

突然、心理掌握が奈津美を引き止めた。

「あなた……とても不思議で魅力的な存在ね。是非今度あなたとはゆっくりお話してみたいわ」

「やめておいた方が良いわよ？ 私にからむとロクなことがないわ。私の頭の中覗いたときに分かってるでしょう？」

「だからこそ、よ。それにあなただけじゃないわ。外で第三位と戦っている明俊君と梓さんにも興味があるわ」

その心理掌握の言葉に、奈津美は眉をひそめた。

「あなた……何を考えているの？ 私たちのこと知って興味を持つ

なんて、まるで……」

「ストップ。その先は後でにしましょ。今はみんななすべきことがあるんだし」

心理掌握は手をヒラヒラと振って奈津美の言葉を遮ると、グラウンドへ向かって歩き出した。

垣根は第七位、工藤梓の乱入により3対1の戦いを強いられた。た。

本来ならばその程度の不確定要素が加わろうとも、垣根の優位に変わりは無い。

元々、御坂美琴の放つレールガンや梓の操る零度以下の世界など垣根の前では無いも同然なのだから。

さらに明俊の反物質を解析できたとなれば、垣根の勝利は目前……のはずだった。

しかし今、垣根帝督はあろうことが最も恐れるに足りないはずの工藤梓の攻撃に戸惑っていた。

「(何だこの第七位の攻撃!? 未元物質に干渉してきやがる!!)

「なんと、解析するまでもないはずの梓の攻撃がガキツ!と音を立てて垣根の純白の翼に突き刺さり、ゴリゴリ!と食い込んでくるのだ。

「(この青い翼……てっきり氷が何かで具現してるのかと思ってたが全然違えぞ!?)」

「もちろん、相手が格下だからと言って手を抜いているわけではない。

垣根は勝負事に関しては一切の妥協を許さない人間だからだ。

「この梓の攻撃も、ただの氷だろうと思いつつもしっかりと解析にかけているのだが……」

「(こんなの、氷どころか兄の反物質より意味分かんねえ! まるで『この世の法則にまったく当てはまらない』!)

梓の翼から振るわれる1撃1撃から、今まで垣根が体験したことのないのは言うまでも無く、知識としてすら知らないようなまったく未知の構造をした力を感じる垣根。

「(全部が全部意味不明って訳でもねえ……もしそうなら今頃俺はこの翼で殺されてるに違いない。だが、解決策が見つからねえぞ!?)」

梓の攻撃が100%解析できないわけではなく、ある部分は解析できるのだが一部にまったく未知の構造を組み込んだ攻撃になっているようで、垣根に出来るのは解析できている部分を使って何とか攻撃を防ぐことだけであった。

「（とりあえず防ぐことは出来るんだ、こうなりゃ順番を変えて先に残りの二人を片付ける！！）」

このままでは埒が明かないと判断した垣根は、ターゲットを梓から地上でこの様子を見ていた明俊・御坂に移した。

「……一体、どうなってんのよこれ」

「俺にも分からない。何で梓に垣根に対抗するだけの力があるんだ……っ？」

妹を馬鹿にするわけではないが、梓に垣根の攻撃を受け止め反撃に転じるだけの力があるとは明俊も微塵も思っていなかった。

「でも、垣根のヤツもまったくなす術がないって訳じゃなさそうだが。現実に梓の攻撃を垣根も受け止めている」

「そうね。アンタも垣根のデータクマター？だっけ？アレ解析してるんでしょ？」

「ああ。今それに全演算を傾けてる。大体90%つてところだ。後
少しだけ待ってくれ。そうしたら俺と梓で総攻撃をかけ……」

「ちよーつと遅すぎだぜ第二位!!」

「ツ!?!」

視線を御坂から上空に戻すと、今まで梓にばかり気を取られていたと思っていた垣根が急降下してきていた。

「計画変更だ!! まずはテメエらからあの世に送ってやるぜえ!!」

「明俊っ!!」

「解析終了まで後10秒! ……くそっ、間に合わないか!?!」

二人の目の前に、死を表す純白の翼が視界のすべてを覆うほどに展開され、そこから無数の殺人羽がまるで矢のように放たれ……

「ヒーローは、遅れてやってくるってのが相場でしょ?」

明俊にとって聞いたことのない女性の声が響き渡った。

「ぐ、ぐあああああああ!?!」

直後、垣根が突如頭を押さえてもがき始めた。

「な、何だ！？ 御坂が何かしたのか！？」

「いいえ、これは私じゃないわ。私なんかよりよっぽどえげつない能力よ。垣根は今、脳内を直接ぐちゃぐちゃにかき乱されている感じでしょうね」

御坂が悶える垣根を、嫌なものを見るかのような目で見つめる。

「脳内を……？ ま、まさか？」

「そう、そのまさかよん」

いつの間にか、明俊の隣に御坂とは別にもう一人、常盤台の制服に身を包んだ人間が立っていた。

その少女は平均的な女子中学生よりも身長が低く、雑踏に入ったらそのまま流されてしまいそんな印象を明俊は持った。

「あなたが第二位の工藤明俊ね。はじめまして、私が学園都市第六位の超能力者 心理掌握よ」

第48話 心理掌握（後書き）

さて、今回の話はタイトル通り心理掌握さんの登場でした。

このわずか5000字程度の第48話の中にもいくつか含みを持たせてあります。

その辺は今後の展開で順次こなすつもりですので、「期待はせずに」お待ちください。

第49話 一難去って・・・(前書き)

そろそろ終盤です。

第49話 一難去って・・・

「あなたが第二位の工藤明俊ね。はじめまして、私が学園都市第六位の超能力者　　心理掌握よ」

明俊、そして御坂の前に現れた心理掌握はそう言うニコリと微笑んだ。

「あなたが・・・心理掌握」

明俊は、心理掌握と頭を押さえてのたうちまわっている垣根を交互に見て、驚きの表情を隠さずに言葉を漏らす。

「これが、精神系能力の最高峰の実力……」

「ええ。ホント、何度見てもえげつない能力よ。対人戦ならほとんど無敵って言うても良いでしょうね。なにしろ、目に見えない攻撃なんだし」

「あら、そんなに謙遜なさらなくても結構ですよ御坂さん。あなたの方が序列は上なのですし」

「そつちこそ。序列つてのは『能力研究の生み出す利益』で決まっているのであって戦闘力じゃないわ。もし序列が戦闘力なんかで決まるとしたらアンタは間違いなく2位か3位にはなれるわよ」

「そうだな。俺だって何でか知らないけど第二位だけどなあ……今の見たら心理掌握には勝てない気がするよ。俺の序列って間違ってるんじゃないかなあ？」

その明俊の言葉に、御坂と心理掌握はそれぞれ違った意味で驚いた表情を見せた。

御坂は、

「アンタねえ……一方通行と互角に戦っておいてその言葉は私に喧嘩売ってるわけ？」

と電気をバチバチと散らしながら明俊に食って掛かった。

「い、いや、そういう訳じゃないけど……ん？どうしたんですか心理掌握さん？ そんなに俺の顔をジツと見つめたりして……」

一方、心理掌握は口をわずかに開けて、視線で明俊の顔に穴でもあけようかと言わんばかりに見つめてきていた。

「……あなた、気付いてないの？」

「え？ 何がですか？」

「……いいえ、気付いていないのなら、それはそれで構わないわ。むしろ、そっちの方があなたにとっては都合が良いでしょうし」

「はあ……」

「（真実を知ったときの恐怖、そして自分達に付き纏う抗えない流れにこの兄妹がどう対抗するか……今は何も言わずに黙っているのも一つの手か。それにしても……）」

心理掌握は地面に倒れ、ピクリとも動かなくなった垣根と、攻撃を止めて宙に佇んでいる梓とを交互に見る。

翼を宿し宙に佇んでいる梓は、目は虚ろで表情というものは無い。

「（この第三位は依頼を受けてここにやって来た。そして、依頼をした人間達が外で騒ぎを引き起こした犯人であることも記憶を覗いて分かった。それは良い。問題は双子の妹の方。脳内を見る限り今の彼女に意識は無い。何かの力に突き動かされているだけ。気になるのはその力……私たちの理論では説明の出来ない意味不明な構成を持っている）」

心理掌握は再度明俊の脳内から情報を引き出してみるが、梓の力に関する情報や記憶は無かった。

「（兄も知らない……この双子は自分達の秘めている可能性に微塵も気付いていない。どうしたものか……）」

とその時、地面にひれ伏し動かなかった垣根がモゾツと動いた。

「ヤツが動いた！？ 心理掌握、アンタ能力を解除したの！？」

御坂がギョツとして心理掌握に詰め寄るが、心理掌握は首を横に振った。

「そんなことする訳ないでしょう？ どうやら彼は、私の精神攻撃に対抗するバリアのようなものを脳内に構築しているみたい。まったく、未元物質ってのは万能すぎるわね」

「悠長なことやってないで何とかしなさいよ！」

「残念だけど、恐らく私の精神パターンは既に第三位に読まれてしまっている。彼が完全に立ち直るのも時間の問題ね。あなたが今レールガンを撃ち込んですべてを終わらせるっていうのはどうかしら？ 今ならまだ当てられるはずよ？」

「こんなに避難してきた人たちがいる前でそんなこと出来る訳ないでしょう!？」

「そうね。じゃあ…… 3人で協力してどうにかしましょう」

「協力？」

明俊の疑問の声に心理掌握は「ええ」と答えた。

「まずは御坂さん、第三位を電撃で気絶させていただけるかしら？」

「え？ う、うん、分かった」

心理掌握に言われたとおり、御坂はわずかに動きを見せていた垣根の意識を電撃で刈り取った。

「や、やったわよ？」

「じょーできよ。脳波を見てるけど気絶状態にあるみたいね。さて、次は明俊君と私の出番ね」

「はい……といっても、俺は何を？」

「明俊君。未元物質の解析は終わってるよね？」

「はい。未元物質の粒子を解析して、構成を既存の物理学に適用しなおして反物質に対応させました」

「さつすが第二位。じゃあ、反物質を使って第三位が脳内に作り出した未元物質バリアを解除してもらえるかな？」

「それ自体は可能だと思いますけど、それを実行するには俺と垣根とのあいだに電氣的接続が必要です。微弱な生体電流を流せれば垣根の脳内に干渉できると思いますけど……御坂、頼めるか？」

「任せなさい。じゃあ、私がケーブルの役割をすれば良いわけね」

「頼む」

御坂は垣根と明俊の額に手を当てて微弱な電流を流す。

「今電流を流してるわ。この男、いきなり起き上がって襲ってきたりしないでしょうね？」

「大丈夫よ御坂さん。私が第三位の脳波をちゃんとモニターしてるから。じゃあ明俊君、御坂さんもビビッてるみたいだしちゃっちゃんと済ませましょ」

「あ、はい、そうですね」

「別にビビッてなんかいいわよ!」

「おい御坂、キレるのは良いけど電流の調整ミスって俺感電させんなよ?」

「ア・ン・タ・も！ それ気にすんなら余計なこと言わないの！ っ
たく……始めるわよ」

「はいはい……これが垣根の脳内を電氣的に表したもんで、と。お、
あったあった。脳の中で一部未元物質に守られたところがあるな。
んじゃ、反物質を電氣的情報に変換してこのバリアにぶつければ…
…」

「どう明俊君、大丈夫そう？」

「ええ。こんなの初めてですけど……よし！ 終わった！」

明俊は顔を伝う汗をぬぐいながら地面に座り込んだ。

「ごくろーさま。後は私が最後の仕上げをするだけね」

「仕上げって……まさか心理掌握、アンタまさかこの男の精神を破
壊するつもりじゃないでしょうね？」

「あらあら、御坂さんってばいつも考えてることが過激よね」

「アンタだったらやりかねないから言ってるんでしょうが……」

「まあ、それもそうかしらね？ でも大丈夫よ。新人さんの明俊君
の前でそんな残酷なことはしないわ」

「……聞いた？ アンタがいなかったら、心理掌握は精神破壊する
つもりだったわよ」

「……ああ。御坂といい心理掌握といい、常盤台のお嬢様は考えることが一般人には分からねえ」

「ちよつと!! 私もその変なカテゴリーの中に入れてないでよ!」

「ちよつと二人とも? 私をスルーしないでくれる? だいじよーぶよ、こいつに暗示をかけるだけだから」

「暗示……ですか?」

明俊が疑問の声を上げると、心理掌握はニコツと笑って垣根の額に手を当てた。

「そう、暗示。彼が目覚めたら、何故ここにいたのかも、任務のことも忘れてさっさと引き返すようにっていう暗示よ。こうすれば、第三位がレールガンで撃ち抜かれることもなく、精神破壊なんて惨劇も見ずに済むって寸法よ。それより問題なのは、あなたの妹の梓ちゃんだと思っただけど……」

そう言っただけで心理掌握が指差す方向を見た明俊たちの視界に入ってきたのは、先ほどまで宿していた翼を失い地面に落ちた梓の姿であった。

「梓っ!!」

明俊は梓に駆け寄り、抱き起こしてひざに頭をのせて首筋に手を当てる。

「脈はあるみたいだ……こっちも気絶か?」

「脳波を見てみたけどどうやら気絶してるみたいね。あ、誤解なきよーに言っておくけど、妹ちゃんの気絶は私のせいじゃないわよ？ 多分『力』の使いすぎじゃないかしら」

「力……垣根が解析できなかった梓の力って一体……？」

「でも、気絶だけで良かったわね。もし力の使いすぎで脳にダメージが出てたら大変なことに……」

「……もつと緊急でやばそうな『大変なこと』ってのが進行形で起きているみたいよ。二人とも、あれを見なさい！！」

若干震え気味の御坂の声を聞いた明俊と心理掌握が、御坂の指差す上空に目を向け、そして驚愕した。

「なんなんだよ……今日は厄日か？」

「学園都市に住む人間にとっては、一部を除いて厄日なのは間違いないよーね」

彼らの視線の先、学園都市のビル群の上空に、RPGゲームの敵として出てくる『スライム』のような、ブヨブヨという表現の正しい気色の悪い物体が浮かんでいた。

その大きさは飛行機や飛行船というレベルではなく、あまりの大きさにその物体の下には巨大な影ができ夜のような暗さになる。

そして、明俊と御坂にはその物体に見覚えがあった……

「うわああああ!!」

「オラオラア!! 外の騒ぎを起こした割にビビりすぎなんじゃねーか!!? ちったあ抵抗ってやつを見せてみるよお!!」

壁という壁、天井という天井をその圧倒的な破壊力を誇る原子崩し（メルトダウン）で粉碎しながら、麦野沈利は研究所を突き進む。

麦野と同じくこの研究所の攻略を担当しているフレンド「セイヴエルン」は、アイテムに依頼のメールを送ってきた研究員を救助するため麦野とは別行動である。

フレンドに救出を任せるのは、彼女の普段の仕事における落ち度、スキの多さを考えるといささか不安ではあったが、研究所の人間の様子を見る限り問題無さそうである。

「まったく、雑魚以下の超雑魚をチクチクいじってもストレス解消にはならないねえ!! さっさと親玉出てこいよお!!」

叫びながら、通路の突き当たりにある部屋のドアを粉々に破壊しズカズカと中に入る。

そのには、高級そうな革張りのイスに腰掛けた一人の男がいて、侵入してきた麦野をジッと見つめていた。

「アンタが親玉ってことで良いのかにやーん？」

「親玉、か。確かに私はこの責任者であるから、君から見れば親玉ということになるだろうな」

「オツケー。じゃ、サクツと殺すけど遺言とかある？　こんな愉快な状況作り出したことに免じてそれくらいは聞いてあげるわよ？」

その麦野の言葉に、自ら責任者と名乗った男は「クツクツクツ」と低い声で笑った。

「遺言、か。遺言を残すのはどちらかという君たち能力者の方だと思っがね」

「あ？」

「君たちは我々の計画の最終段階をまだ目撃していない。それを見てから、どちらが遺言を残すのか考え直すんだな」

「ハッ！　何を言い出すのかと思えば、負け犬の遠吠えみたいなセリフかよ！　じゃ、遠慮なく殺させてもらうよ？　仮にアンタたちがどんな最終兵器持ってるのか知んねーけどさあ、私の力の前には無力ってことを教える前に死んじやうのは残念ねえ？」

微塵も残念そうな顔をせずに、手を前にかざしてビームを発射しようとしたその時、ポケットに入っている携帯端末からピーピーという着信音が流れてきた。

「まったく、誰だ邪魔するのは……フレンダ？」

端末の画面には、共に研究所を侵略中のフレンダ「セイヴェルン」の文字が。

「なにフレンダ？ まさか、『やらかしちゃったテヘッ』とか言うんじゃないでしょうね？」

『そ、そんなんじゃないって！ ちゃんと桜川っていう研究員は保護した……ってそれどころじゃないんだってば！』

「ハッキリ言いなさい」

『言葉にできたら苦労しないって訳よ！ とにかく、外を見て！』

「外おー？」

いつも失敗をやらかすとはいえ、暗部に所属しているフレンダがうるたえ自分に電話してくるということはそれなりの何かがあるのか？ などと考えながら麦野は窓の外に視線をむけ、目を大きくした。

「……何なの、あれ」

「ククク、ついに始まったか」

浮かんでいる奇妙な物体を見て喜びの声をあげている男の胸倉を掴んだ麦野は、テーブルに男を押し付けもう片方の手を男の顔の前にかざす。

「言え。あれは何？」

「その前に質問だ。君は、『レベルアップ事件』というのを知っているかな？」

質問を質問で返されたことに麦野はイラだったが、情報が欲しいのでとりあえず答える。

「ああ。これでも暗部の人間だからね、情報は一般人よりは多い。確か、木山とかいう科学者が引き起こした事件だったよな？」

「そうだ。そしてその時、木山春生の作り出したネットワークが暴走して生まれた一つの怪物が超電磁砲と互角に渡り合った。その怪物は幻想猛獣（AIMバースト）と呼ばれている」

「それも知ってる。何が言いたい？」

「もう少しヒントをあげよう。あの時ネットワーク構築に使われた学生数は1万人程度だった。1万人のAIM拡散力場から生まれた怪物ですら、その驚異の再生能力で超電磁砲と互角だったのだよ。さて問題だ。今回、アレの構築のために使われている学生は何人かな？」

「……まさか」

麦野は男の言わんとしていることを理解した、そしてそれが何を意味しているのかも。

「そうだ。今回、アレの構築に使われている人の数は外で暴走している無能力者たちの人数と一致する。無能力者の数は概算で約110万4000人だ。……分かったかな？ 単純に、アレの強さは超電磁砲の戦ったものの110倍はあるということだよ。対して能力者は約73万6000人、それも騒ぎで怪我などをしている人数を考えれば戦力という意味ではさらに落ちる」

「デメエ……」

「君はおるか、この学園都市の能力者全員を使ってもアレには勝てないのだからな。学園都市の根底が揺らぐのは間違いないだろう？ クツクツクツ……」

学園都市の能力者にとって、悪夢のような時間が始まる

第50話 翻弄されるレベル5（前書き）

遅くなってしまうましたが、節目（？）の第50話です。

第50話 翻弄されるレベル5

「ねえ明俊、あれってまさか……」

御坂は、右手をギュッと握り締めてビル群の上に現れた物体を睨みつける。

「ああ、間違いない、幻想猛獣（AIMバースト）だ」

明俊も、ひざに乗せていた梓の頭をそつと地面に置くと立ち上がる。

幻想猛獣。

以前、木山春生がレベルアップを使って作り出したネットワークが暴走して誕生した怪物。

1万人分のAIM拡散力場を使って生み出されたそれは、複数の能力を行使して御坂美琴・工藤梓を終始圧倒。

初春飾利が木山から預かったワクチンソフトを使うまで、まともなダメージを与えられなかったことを二人は思い出す。

「なんであれが……」

「分からない。でも見るよ御坂、以前御坂と梓が戦ったやつよりもずっと巨大だ。あんなのに攻撃されたらひとたまりもない」

「そうね。もしここや、他の避難所をあんなのに攻撃されたら必ず

死者が出てしまう……そうなる前に止める！」

「ああ！ 心理掌握さん、梓を頼みます」

「任せてちょうだい。私の能力じゃ、あんなのには敵いつこなさそうだし。パニックにならないように『頑張る』から、あなた達も頑張ってね」

「ええ！ 行くぞ御坂！！」

「いつてらっしやーい」

駆け出す明俊と御坂を心理掌握は手を振って見送ると、振り返り避難してきた人々に目を向ける。

彼らは明俊たちと垣根との戦いで既に怯えを見せていたが、上空に突如現れた気味の悪い物体にその怯えは増幅されているようであった。

このままではパニックは避けられない状態であった。

「私の能力でここの人間全員の精神に干渉してパニックを抑制するしかないわね。まったく……面倒くさいことこの上ないわね。まいつか、後で奈津美さんとたっぷりお茶でもしながらお話を伺うということで我慢しましょう」

心理掌握は左手を右肩に置いてグリグリと肩を動かし、肩の疲れを取る。

その何気ない動作の裏で、既に常盤台にいる人間に対して能力を

使っていたとは誰も気付かなかった。

麦野は研究所を飛び出しながら、端末でフレンダに電話をかけた……と言っても、男と話しているときからつながりっぱなしだったので、携帯を耳に当てなおしたただけだが。

「フレンダ！ アンタは下部組織の連中をここに呼んだら私と合流！」

『え？ええ！？ 合流って……麦野まさか！？』

「あの怪物を叩きのめすに決まってるだろーが！ 研究所の制圧は下っ端に任せるってことだよ！」

『で、でも！ あんなのに勝てる訳！？ 超電磁砲の戦ったやつのは100倍以上は強いんでしょ！？』

「そんな下らないことも言ってたけどよお、序列は戦闘力の強弱じゃねえ。あんなもの、私の原子崩しでギッタギタにしてやんよお！ フレンダ！ テメエもありったけのミサイルの保管場所思い出しとけよ！ 久々のストレス解消にありったけのミサイルぶち込んでやんな！」

『私はむしろ行きたくない……って冗談冗談！ よーし、久々に暴れてやるうって訳よ！』

「良い心意気じゃねえか！ 私は一足先に行ってるからな！」

麦野は乱暴に通話を切ると大通りに出た。

そこは片側3車線の幹線道路で、麦野は中央分離帯の近くに立つと原子崩しで周囲の地面をなぎ払った。

原子崩しで破壊された地面からコンクリートがめくれ上がり飛散し、周囲にいた暴走能力者を吹き飛ばした。

「（これで邪魔する雑魚どもは黙らせた！ パーティの始まりってなあー！）」

麦野は狂喜に満ちた表情をすると、両手をAIMバーストにむかって突き出しゴバツ！と電子線を発射した。

発射された電子線は空を裂き、真っ直ぐにAIMバーストにむかって突き進む。

金属すら紙のように貫く電子線の前に、無事でいられるものなどほとんどいない。

AIMバーストも例外などではなく、一撃で葬れる……少なくとも原子崩しの攻撃力を知るものはそう思うだろうし、麦野自身もそう思っていた。

ところが……

「なっ……」

葬れる、そう確信していた麦野は、攻撃を食らっても浮遊を続けるAIMバーストを見て思わず絶句した。

確かに攻撃は命中したし、電子線はAIMバーストを貫通した。

ところが、貫通して開いた穴が即座に塞がってしまったのだ。

「（これが超電磁砲が攻撃してもビクともしなかったっていう原因の再生能力……厄介な）」

麦野は対策を頭の中で考える。

「（超電磁砲はどうやってあのバケモノを倒したんだっけか？ ……確か資料じゃ、ヤツを構築しているネットワークを打ち消すプログラムを使ったとかあったな。コイツにも同じ方法が効くか……？）」

麦野は携帯を取り出すとフレンダに電話をかけた。

『なに麦野？ まさか、もう片付いちゃった？』

「いや。例の厄介な再生能力が発動しやがった。フレンダ、アンタ今どこにいる？ まだ研究所？」

『うん。今下の連中にここを任せたとこだから、すぐにそっちに

……』

「待った。その前にやってほしいことがある」

『？ 何でも言っただけいい訳よ！』

「そのこのコンピューターに、コイツを構築しているネットワークか何かをぶっ壊すプログラムみたいなもんが無いか調べてくれない？」

『それならお安い御用な訳よ！ 今ちようどコンピューターの近くにいるからちよつと待ってて欲しい訳よ！』

すぐに、カタカタとフレンドがキーボードをいじる音が聞こえてきた。

麦野はフレンドからの返事が返ってくるまでの間に何度か電子線を発射してみるが、やはり結果は同じだった。

「（チツ！ 本当に忌々しい能力だな！超電磁砲は苦戦したつても納得だ……っ！？）」

大人しくフレンドからの返事を待とうと攻撃を止めた麦野に対し、AIMバーストから光弾が放たれた。

麦野はとっさに電子バリアを張って光弾を防いだが、発せられた高熱に汗が噴き出した。

「（なんてエネルギー弾なの！？ 自慢じゃねーけど、こちらレベル5以外の大抵の人間には耐えらんねーぞ！）」

『む、麦野！調べ終わったよ！ 調べ終わったけど……』

「じゃあさっさと技術班の連中にアンチプログラムを作らせて……」

『ま、待つて欲しい訳よ！ 調べ終わつたとは言つたけど、プログラムがあつたとは言つてない訳よ！』

「……まさか、無い、とか言わないわよね？」

『正確にはあつた、と言うべきかな？ 調べたところ、私たちが研究所に踏み入つたところにプログラムが消されてるって訳よ。技術班に復元させてるけど、すぐには作れないって訳ね』

「出来る限り急がせなさい！ 今回の相手は……殺しがいがあるわよ！……」

『（あの麦野が焦ってる！？ AIMバーストつてのは相当ヤバイって訳ね！）わ、分かった！ 麦野、死んじゃダメだからね！』

「ハッ！ 私は死にはしないけど、一般人に被害が出たらうちらアイテムの名折れだからね！ フレンド、絹旗たちにも連絡を入れときなさい！」

必要なことを言い終わると麦野は電話を切り、ポケットからカードを取り出した。

麦野はそれを空中に放り投げると、カードにむかって電子線を放つた。

カードに当たった電子線は複数に分散し、一度に何個もの電子線がAIMバーストに直撃する。

「（拡散支援半導体を使った複数照射！ 一つ一つの威力は落ちるけど、一度に複数の箇所を攻撃すればどうか……！？）」

シリコンバーン
拡散支援半導体とは、性質上広域への攻撃を不得手とする原子崩しの弱点を補うための麦野の補助具である。

三角形のパネルが組み合わさったカード状のもので、電子線を当てるとパネルによって光線が拡散するという代物である。

麦野は、複数の箇所を攻撃すれば再生が追いつかなくなるかと思っただが……

麦野の策を嘲笑うかのごとく、AIMバーストに開いたいくつもの穴は瞬時に塞がってしまった。

それを見た麦野は、

「く……くっそがあああああ……！」

激昂した。

自らの、圧倒的な破壊力で幾多もの障害をことごとく粉碎してきた原子崩しがこうも効かないとなれば当然の反応であった。

さらに麦野には、レベル5の第五位としての、またアイテムのリーダーとしてのプライドがある。

「ふざけんなよバケモノがア……！ こんな気色悪いもんに私が止められてたまるか……！どこまでも追いかけてギッタギタにしてやるか

ら覚悟しろ!!」

叫びながら、麦野は極大の電子線を放った。

しかし、それすらAIMバーストに傷を負わせることは出来なかった………

上条当麻は姫神秋沙と共に、自らの住処である学生寮へとたどり着いた。

「やっとたどり着いたか……姫神、大丈夫か？」

「うん。上条君こそ。大丈夫？」

「ああ。どうやらおかしくなっちまった連中の攻撃にも、俺の右手はちゃんと機能してくれてるみたいだしな」

「それにしても。みんな。どうしちゃったんだろうっね？」

「それは俺にも分からない。とにかく、今はインデックスが無事かどうか確かめるのが先だ」

上条と姫神はエレベーターを降りると、角に隠れて通路の様子を伺う。

「よし、誰もいないみたいだな」

「それにしても上条君。まるでバイオハザードみたいだね」

「姫神あのゲーム知ってたのか……確かに、似てるっちゃ似てるな」

上条は姫神の言葉に答えながら、自らの部屋のドアを開けると中に駆け込んだ。

「インデックスー!!」

「とうま?」

まだ帰ってくる時間ではないのに聞こえてきた部屋の持ち主の声に、インデックスは不思議そうな顔をしながら二人の前に姿を現した。

「どうしたのとうま?それにあいさも。学校は?」

「インデックス……無事だったか」

「無事?もしかして、何かまた問題がおこってるの?」

「……ああ。俺がここに来たのは、インデックスの無事を確認しに来たのと、インデックスに聞きたいことがあるからなんだ」

「聞きたいこと？」

インデックスがキョトンとした顔をすると、上条はインデックスを連れて窓の近くへと移動した。

「外が見えるか？外を歩いてる連中なんだが、実は俺たちを見かけると突然能力を使って襲い掛かってくるんだ」

「……？能力者のことは良く分からないけど、それってみんなおかしくなつちやつたってこと？」

「俺がインデックスに聞きたいのは、その原因が魔術かどうかってことなんだ。こんなに広い範囲に影響を及ぼすって言ったら、まず魔術が思い浮かんだんだ」

魔術サイドの存在も知っている上条が、規模の大きさから考えてまず魔術の存在を疑ったのは至極当然のことであった。

が、インデックスは上条の言葉に即座に首を横に振った。

「それはないんだよ。もしその原因が魔術なら、私が気付かないはずがないんだよ」

「じゃあインデックスは、魔術の流れは特に感知してないんだな？」

「うん。だから、多分科学側の問題だと思っただよ」

「そうか。でも困ったな……魔術サイドが原因ならインデックスが一発で根源を特定できるんだけど、科学サイドじゃ原因になりそうなものが研究所の数だけあるし……」

「上条君！」

上条がどうしようかと考え出したその時、玄関から姫神の声が聞こえてきた。

「どうした姫神!？」

外の連中に襲われたのかと思った上条が急いで玄関に向かうと、
姫神が通路の手すりのむこうを指差していた。

「あれ。見て！」

「な、何だ、ありゃあ……」

上条と姫神の前に現れたもの、それはブヨブヨという表現が正しい
そんな半透明の浮遊物体 AIMバーストだった。

「どうしたのあいさ……ってうわぁ!？」

上条から遅れること数秒、インデックスも駆けつけAIMバースト
トを目の当たりにして思わず声をあげた。

「とうま、あれなに!？」

「それが分かったら苦労しねーよ！でも、もしかしたら今回の騒
ぎと何か関係があるのかも……」

その時、AIMバーストから光線が地面に向かって放たれた。

それを見た上条は、次の瞬間走り出した。

「とうま!? どこ行くの!?!」

「アレのところに決まってるんだろ! アレが何なのかは知らねーけど、もし今の光が地上にいた人に向かって撃たれたものだったら止めるしかないだろ!」

「でもとうま、対処法は!?!」

「そんなもんねーよ! けどな、ここでジッとしてちゃどうしようもねーだろ!?!」

上条当麻は、慌てて後をついてくるインデックスと姫神秋沙を引きつれAIMバーストのもとへとむかった。

工藤明俊と御坂美琴も、AIMバーストを討つべく大通りへとやってきました。

余談ではあるが、この大通りの延長線上に麦野沈利がいるのであるが、明俊たちがそれを知る由も無い。

「ここなら派手に暴れても大丈夫そうね！」

「ああ。でも気をつけたいのは、さっきAIMバーストから放たれた一筋の閃光……もしあんなの食らったらひとたまりもないぞ」

「あら明俊、反物質なんて物騒なもの持つてる割には随分弱腰じゃない？そんなんじゃない、起きたとき梓さんに笑われるわよ！」

「あ！？ おい御坂！！」

慎重な明俊に対し、御坂は徐々に力を抑えることなく戦える相手ということもあってか、いきなり対人戦の時よりもはるかに強力な威力の電撃をAIMバーストに浴びせた。

そのあまりの威力に、周囲の信号機やビル内の照明が影響を受けて消えてしまった。

「（うおっ！？ 御坂のやつ、しょっぱなからなんて手加減無しかよ！ だけど相手はあのAIMバーストだ、再生能力に打ち勝てるか！？）」

電撃の抵抗熱により、AIMバーストが真っ赤に燃えたようになる。

しかし、御坂が電撃を浴びせるのを止めて少しすると、何事も無かったかのようにAIMバーストは動き始めた。

「ちっ！」

「やっぱり……あの再生能力は健全か。だとしたら、どうにかして回復ループを止めないと傷一つ負わせられないってことが……!」

「ちょっと待ちなさいよ。アンタの反物質なら、アイツの再生を一切無視して消し去ることが出来るんじゃないの?」

「確実性の低そうなものから試そう。御坂だって、まだレールガンを試してないだろ?」

「私のレールガンがアンタより確実性が低いってのが個人的には納得できないんだけど……良いわ」

御坂は少し不機嫌そうな顔をしながらポケットからコインを取り出すと、右手に構えて電気を溜める。

「いつけええええええ!!」

叫び声と共に、御坂の右手から明俊がこれまで見たことのないほどの輝きをともなったレールガンが発射された。

音速の3倍、いや、それ以上の速さで発射されたコインはあっという間にAIMバーストに届いた……のだが。

「どうだ、御坂!?!」

「……ダメ! アイツから超高熱が発せられてるみたい! 摩擦熱も相まって、コインがヤツに食い込む前に溶けてる!」

「素の状態じゃレールガンでもダメか……くそっ!!」

明俊は全力でレールガンを撃つて少し息切れ状態の御坂を下がらせると、自らの身体の周囲に反物質を溜める。

「良いぜ……なら、超レアな反物質のフルコースをご堪能あれってなあー!!」

明俊も叫ぶと、両手を前に突き出し反物質を発射した。

空気と干渉して青白い電気を発しながら、反物質は真っ直ぐにAIMバーストに直撃した。

「私のレールガンがダメでも、流石に反物質なら……!!」

「……っ!? いや、こいつは……!!」

勝利を確信した御坂とは対称的に明俊は険しい顔つきになって、撃ち出している反物質の量を多くする。

「くそっ!! なんてヤツだ!!」

「どうしたの!?!」

「反物質が……核まで届かねえ!!」

「どういうこと!?! 反物質に触れたものは、あの垣根のダークマターみたいな一部の例外を除いて消滅させることができるんじゃないの!?!」

「言つたろ、『届かない』って! 反物質はヤツの表面を構成してるものは確かに消滅させてる! けど、撃ち込んでる反物質以上の

量の何かをぶつけて、それ以上の侵入を抑えてるんだ!!」

「何かって!?!」

「多すぎて分かんねえんだよ! 酸素やら窒素やら、とにかく色々な物質をぶつけて相打ちにしてやがる……くそっ!!」

このままでは埒が明かないと判断した明俊は、仕方なく攻撃を中止した。

「アイツ、受けてる攻撃を分析して即座に対抗策を講じてるのかもしれない。以前木山先生が作り出したAIMバーストみたいに、今回のヤツも何かしらのネットワークで構築されているのならそれも可能だろう」

「じゃあ、今回もそれを破壊すれば……」

「ああ、多分いける。だけど、今回はそうとも限らないかもしれないし、もしそうだとしても誰がどうやってネットワークを構築してるのか分からないことには手の打ち様が……」

「ええい、面倒くさい!!」

一向に進行しない展開に業を煮やした御坂は、突如駆け出した。

「あ、おい御坂!?!」

「こうなったら、見えない解決策より徹底抗戦よ!二人で同時に攻撃を仕掛ける!! 私が上からレールガン撃つから、アンタはレールガンが当たったら反物質をすかさず撃ち込んで!」

「それより体力の温存をだな……って聞いてねえ！！　　ったく、第一どうやって上からレールガン……を！？」

明俊が見たもの、それはビルの壁を垂直に駆け上る御坂の姿だった。

「なるほど、磁力を使って壁を登り上からレールガンってことか……それにしても、重力でスカートがめくれて短パン丸見えなんだが」

明俊が色んな意味でついていけないしていると、御坂はビルの最上階近くの側面に磁力で止まり、右手をAIMバーストにむかって突き出していた。

「もうあそこまで行ったのかよ！？　　どんだけ殺る気なんだよ！！」

「明俊ー！！　　行くわよー！！」

御坂の掛け声の後、ズガン！！　　という炸裂音と共に閃光がAIMバーストに突き刺さった。

明俊も、容赦なく反物質を撃ち込む。

オレンジ色の閃光と青白い閃光が交わり、その幻想的な光景とは裏腹に爆風が吹き荒れた。

レールガンが放つ衝撃波と、反物質と常物質とのエネルギー波による爆風で、あたりの街灯がミシミシと音を立てた。

「どつだー！？」

爆風吹き荒れる中、明俊が手で顔を隠しながら叫ぶ。

レールガン単体でも耐えられるものなど数えるほどしか無い上に反物質まで食らったとなれば、それこそ一方通行などの極端な例外を除いて地球上のほぼすべてのものが跡形も無く消え去る。

それでも明俊は、これでもダメなのではないかという思いを捨て切れなかった。

そして、事実……………

「やっぱり、ダメなのかよ……………!!」

第二位と第四位の攻撃を受けてもなお、AIMバーストはその姿を保ったままだった。

そして、今まで明俊たちには攻撃を仕掛けてこなかったAIMバーストがついに動き出した。

AIMバーストは、明俊と同じく呆然としている御坂のいるビル下部に光線を撃ち込んだ。

直後、ビルが根元から崩壊を始める。

「御坂!!」

明俊が叫ぶも、ビルはアメリカで良く見られる解体ショーのごとく、あっという間に崩れ去ってしまった。

崩壊したビルから煙が立ちこもり、明俊は御坂の姿を見失う。

「くそっ！ 御坂は無事なのか！？」

風で土煙が少し晴れ、中に人影の姿が見えた……その時。

「なっ！？」

AIMバーストから再び光線が発射され、明俊が一瞬だけ確認できた人影のあつた部分を光がおおつた。

「御坂あ！！！」

危険を承知で、明俊は攻撃があつた場所に駆け寄る。

「御坂！ いるなら返事しろ！！！」

そして明俊は見た。

地面に横たわる人のような物体を。

しかし、見たのはそれだけではなかった。

もう一つ、地面に横たわっている物体のすぐ近く、一人の人間がAIMバーストの方に腕を伸ばして立っていた。

「ハ、ハハ、さすがは『ヒーロー』だ。こんな風に颯爽と現れるなんて、御坂が惚れる訳だ」

明俊がヒーローと呼んだその人物は、明俊に気付くと何かを言った。

雑音でその声は明俊に届くことはなかったが、口の動きから明俊はその人物が何と言ったのか推測できた。

「『遅れてすまねえな』か。別に登場を待っていた訳ではないんですけどね……上条さん」

危うく現実になりそうだった『御坂美琴の死』を幻想に変えてぶち壊した人物　上条当麻が、そこに立っていた。

第50話 翻弄されるレベル5（後書き）

かつちよいー！！惚れちゃいそうだぜ、上条当麻！！……ということ、やはり御坂のピンチを救うのは上条さんしかいませんでした。

さて、長かった学園都市内乱編もそろそろ最終盤です。

次話では、随分前にチラツとだけ出てきたあの人も登場予定です。

後、まったく関係ありませんがここで宣伝を。

すでにお気づきの方もいると思いますが、密かにもう一つ小説を書き始めました。

僕のページからたどって頂ければすぐに分かるかと思えます。

タイトルは「とある少女と紋章術師」というもので、『とある』の二次創作では定番の『フラグ建築型構成』ではなく、最初からヒロインが決定しているという異色の構成です。

もちろん、主人公とヒロインの出会い過程やどのように両者が接近していくのかは書きますが、ヒロインが最初から決まっているという構成に不満がある方もいらっしゃるかもしれません。

それでもおk！という異色な方（！？）はどうぞご覧下さい。

もちろん、「不満はあるけど、それでも見てあげるんだからね！」というツンデレな方もどうぞw

更新は一応交互に行いたい……というのが本音ですが、多分こちらが優先となりそうですので、むこうはあまり期待せずに更新をお待ち下さい。

第51話 打つ手無し

「くっ！ レールガンと反物質の同時攻撃でも倒せないの！？」

御坂美琴はビルの上部側面に磁力で張り付いたまま悔しかった。

明俊はともかく、自らはこれ以上の攻撃手段を持ち合わせていない御坂にとってこの状況は絶望的だった。

「でも、それでも、諦めるわけには……っ！？」

それでも何とかやる気を奮い立たせようとした御坂を嘲笑うかのように、AIMバーストから光線が放たれた。

光線は御坂が張り付いているビルの下部に直撃し、ビルは大きな音を立てて崩れ始めた。

「なんて奴……！！」

御坂は磁力を維持して、落下する壁と一緒に下へ。

そして、地面に激突する少し前に磁力を解除しなんとか事なきを得た。

「この圧倒的な力の差……やっぱり明俊の言うように、どこかにコイツを作ってるネットワークってのがありそうだけど……」

そこで御坂の思考は中断を余儀なくされた。

A I Mバーストから御坂にむかって、先ほどの光線が再び放たれたからであった。

御坂は磁力を最大限に使って、倒壊したビルの瓦礫を操り自らとA I Mバーストとの間に即席の壁を作り出した。

しかし、ビルを貫通するほどの光線がその程度の壁で防げるはずもなく、壁は数瞬のうちに跡形も無く消え去った。

「まずっ……!?!」

「伏せる御坂!!」

突如聞こえてきた声に、御坂はほとんど反射的に伏せた。

伏せると叫んだ人物だろうか、一人の男が伏せた御坂を飛び越えるとその右手を光線にぶつけた。

本来ならその右手ごと男を消し去る光線なのだが、その男の右手に触れた光線は瞬時に消滅してしまった。

「何とか間に合ったか……御坂、大丈夫か？」

男の問いかけに、何より、その男の声に、御坂はハツとして顔を上げた。

そう、御坂にはその男が誰だか分かる。

自らの電撃を右手一つですべて防ぎ切り御坂にライバル心を植えつけた男。

明俊と共に学園都市最強の一方通行に挑み、その一方通行に引導を渡した男。

そして何より、つい先日「御坂美琴と彼女の周りの世界を守る」と（御坂に聞かれているとも知らず）大見得を切って約束した男。

「アンタ……どうして？」

「いや、このバケモノが地上を攻撃してるのが見えたからな、つい突っ走っちまった。でもま、来て良かった。危うく約束を反故にするところだった」

「約束？」

「いや、こつちの話だ。ん？ あれは、確か明俊……だったよな？」

上条の視線の先に御坂も視線を向けると、明俊がこちらにむかって走ってくるのが見えた。

「遅れてすまねえな！」

上条は一言明俊にむかって叫ぶと、改めて御坂の方を振り向いた。

「立てるか？御坂」

「あ、アンタに心配されなくてもこれくらい平気よ！」

御坂はわずかに顔を赤らめながら立ち上がると、その照れを隠すかのように明俊の方に顔をむけた。

「御坂！大丈夫だったか？」

駆け寄ってきた明俊も心配すると、御坂は少し気に食わないといった顔をする。

「アンタたち、二人揃って私のこと甘く見てない？私がそんなに簡単にやられるわけないでしょう？」

「いや、上条さんに助けられてたじゃん……」

「な・ん・か・言った!？」

「い、いや、何にも……」

素直じゃない御坂に「もっと素直になればいいのに……」と心の中で苦笑いする明俊。

とそこに、「とうまー!」という声が聞こえてきた。

「い、インデックス!? お前、危険だから隠れてろって言っただけ……?」

「勝手に飛び出していくとうまに言われたくないんだよ！ それよ、今度はどんな女の子を助けたの!？」

インデックスが牙をむく獣のようにグルツと見渡すと、御坂美琴が視線に入った。

「短髪!」

「短髪じゃない！『御坂美琴』って名前があるって言ってるでしょーが！」

「とうま！また短髪が絡んでるの！？」

「人の話を聞けって言うてるでしょーが！！それに私を犯人みたいに言うな！！」

出会っていきなり火花を散らす二人に、明俊が割って入った。

「まあまあ二人とも。今はそんなことを言っている時じゃないだろ？」

「あきとし！病院で会って以来だよな？」

「ようインデックス、久しぶり……ってそうだ！インデックスに聞きたいことがあったんだ」

明俊はインデックスを上条や御坂、姫神（明俊はこの時初めて姫神の存在に気付いた）から離れたところに連れ出した。

「インデックス。いきなりだけど、外でレベル0の人間が能力を使って暴走してるのは知ってるか？」

「え？う、うん。とうまから聞いたんだよ」

「それじゃあ、その原因は魔術か？」

「それもとうまに聞かれたんだよ。とうまにも同じ風に答えただけど、

これは魔術が原因じゃないんだよ」

「そうか……」

有益な情報が手に入らなかった明俊が落胆の表情を見せると、インデックスは思い出したかのように叫んだ。

「そういえばあきとし！ あきとしはどうして魔術のことを知ってるの！？前に病院で私に言ったよね、『また今度、どこかで会う機会があったら会おうぜ。10万3000冊の魔術を秘めた魔術師さん』って！ 一字一句違わずちゃんと覚えてるんだよ！」

「うえ！？ そ、そういえばそんな事も言ったような言っていないよな……ってその話は後だ！今はアレを何とかしないと！」

「はぐらかされたかも！」

「後で機会があったらちゃんと説明するって！さ、上条さんたちの所に戻るっ！」

明俊は半ば強引に会話を終了させると、インデックスから逃げようように上条たちの所へと駆け戻った。

当然、上条は怪訝そうな顔で明俊を見る。

「明俊、インデックスを連れ出して何してたんだ？」

「え、えーつとですね、普段から上条さんに変なことされてないかジャッジメントとして調査を……」

「何ですって！？ アンタ、こんな小さな子に手出してるわけ！？」

明俊の言葉に、御坂は光の速さで食いついた。

「いいっ！？ 何でいきなりこんな話になってるんでせうか！？」

「それ。本当？上条君」

「ひ、姫神さんまで何でそんな一見無表情に見える顔の裏に怒りを隠してるんでしょうか！？」

「（姫神さん、怒ってるのか。気付かねえ……）じ、冗談ですよ。ちよつと女性陣がどんな反応をするのか見てみたかっただけです」

「……」 上条。 無然の表情。

「……」 姫神。 明俊には分からないが安堵。

「あ・ん・た・は・ねえ！！」

「まあまあ。それに、素直にならない御坂にも非はあると思っぜ？」

「っ！！」

明俊にからかわれっぱなしの御坂が、顔を赤くして明俊を睨みつける。

それを見て場違いにもハハ、と笑う明俊だったが、そんな彼を現実にも連れ戻すがごとく携帯が鳴った。

「誰からだ？ ……奈津美？」

電話の相手、それは何故だか絹旗最愛や滝壺理后と共に常盤台中学に来ていた宮野奈津美からであった。

「もしもし？ そっちは大丈夫……」

『明俊！！ 今どこにいるの！？』

「な、なんだいきなり？」

『いいから！ 今どこにいるのか言いなさい！！』

奈津美の命令口調に明俊は危機を感じ取った。

「が、学園都市中央部の幹線道路だ。今AIMバーストと交戦中だ」

『遅かった……！！明俊、あなた一人で戦っているの！？』

「いや、御坂も一緒だ。今は上条さんやインデックス、それに姫神さんも一緒だけだな」

『……なにその豪勢なメンツは。梓は！？』

「梓なら常盤台中学にいる。何故だかは知らないけど、力が暴走して今は気絶してるけど」

『力が暴走！？……色々とマズイことになってるわね。でも今はAIMバーストよ！ 明俊、少しでもダメージを与えられた？』

「いや、ダメだ。再生能力が厄介すぎる。レールガンと反物質でも攻略できないとなると、やっぱりコイツを構成しているネットワークとやらを破壊するしかないのか？」

『そうよ。実は私はそのネットワークを破壊するための装置を常盤台の研究所で開発させているんだけど……問題が発生したの』

「問題だと？」

『本当はどうしてこの騒ぎが起こったか、というところから説明しなきゃいけないんだけど、今は端折らせてもらうわ。その問題ってというのは、今の状態じゃその装置が上手く機能しないのよ』

「何だと？」

『この装置が機能すれば、本来なら暴走してる無能力者たちが暴走を止め、AIMバーストも消えるはずなの。でもAIMバーストから、装置から出る周波数の電磁波を打ち消すような電磁波が発せられてるみたいなのよ』

「……待てよ、それってかなりバイ状況なんじゃないのか？」

『ええ。AIMバーストを倒さない限り暴走した無能力者たちは止められない。けど、そのAIMバースト自身から装置を使えなくなる電磁波が出て……以下、無限ループよ』

「くそっ!! どうすりゃいい!? 反物質でも倒せないんじゃ、勝ち目が無いぞ!」

第一位である一方通行はまだ動けず、第二位の工藤明俊では倒せない、この現実が意味することはつまり『勝機が無い』ということである。

「おい、待てよ明俊」

そう思った明俊に、上条当麻の力強い声が響いた。

「か、上条さん……」

「あの一方通行に単身挑んでいった男のセリフにしては弱気すぎるんじゃないか？まだお前は能力を使えなくなるまで全力で戦ったわけじゃないだろ？」

「上条さん…… そう、そうでしたね！」

「ああ。2、3回攻撃が効かなかったからって諦めるようじゃ、お前が命をかけて守った琴美に笑われちまうぜ？」

「そうね。ついでに私にも笑われるわね」

「そうだな。梓にも笑われちまう……って、梓！？」

予想外の声に明俊が思わず振り向くと、そこには常盤台中学で謎の力を持って垣根と互角に渡り合い、兄の明俊にさえ疑念とわずかな恐怖を覚えさせた工藤梓の姿があった。

「なによお兄ちゃん、まるで私がここにいちゃいけないみたいな感じね」

「いや、だつてお前……大丈夫なのか？」

「そうよ梓さん。あなたは気絶していたんだから、無理に動く危険いわ」

明俊と御坂は梓の身を案じている風なことを口にする。

それもちろんだが、二人にはここでまた梓の未知なる力が暴走することへの懸念があった。

梓の持っている力の正体は何なのかは二人には分からないが、解析不能の力が万が一暴走したら二人で止められるかは分からない。

上条当麻がいるので万が一など起こりえないとは明俊も思っているのだが、できれば上条には梓のことは知られたくないとも思っている。

もし上条が梓と絡むようなことがあれば、上条はいつか明俊たちの素性に気付いてしまつかもしれないからだ。

上条当麻という人間は、それが自分に関係ない人のことでさえ、一度関わったら最後まで突き進む人間であることは明俊も嫌と言うほど知っている。

「（当事者である俺たちでさえどうしてこの世界にいるのか分からないのに、関係ない上条さんを巻き込んだらどうなるか……これは俺たちの問題だ、彼を巻き込む訳にはいかない）」

「そうだったのか！？ 梓、御坂の言うとおり無理に動かないほうが良いぞ？ っていうか、何があったんだ？」

「あ、心配してくれるんですか上条さん？　じゃあお礼に、今度デ
ー１回ですね」

「何を！？」　明俊

「はあ！？　あ、あ、梓さん！？」　御坂

「とーうーまー！！？（ガブツ！）　インデックス

「……何という。積極性」　姫神

「うぎゃあああ！　痛いですよインデックスさあん！！？」

「どろしてとろまはこつも女の子とばかりイベントが起きるのかな
！？」

「俺に聞くなよ！！」

「ま、冗談なんですけどね」

「……」　明俊

「そ、そう（良かった……って何で安心してんの私！？）」　御坂

「こらインデックス！　冗談だってんだから降りろよ！」

梓の冗談に振り回されたインデックスは、渋々上条の頭から離れ
る。

梓はクスクス笑いながら両手を合わせて舌をペロツと出す。

「でもまあ、心配してもらってありがとうございますっていう気持ちは本当です。ちょっと『能力』の使いすぎで疲れちゃったようなもんでしたから、とりあえずは大丈夫です。それよりお兄ちゃん、アレはどうするの?」

梓がAIMバーストを指差すと、明俊は「ああ……」と覇気の無い声を出す。

「今のところ手は無いつてのが正直なところだ。出来ることと言えば、梓も来たことだし、三人で猛攻を仕掛けることくらいだ」

「とりあえず、梓さんにも現状を目で見てもらおうかしら」

御坂は顔を険しくすると、おもむろにコインを取りだしレールガンを放った。

轟音とともにオレンジ色の閃光がAIMバーストに突き刺さるが、もはや当然というべきか、ダメージを与えるには至らない。

「そして、攻撃されると……」

今度は、御坂のレールガンを受けたAIMバーストから光線が放たれる。

「俺に任せろ!」

飛んできた光線に対し、上条が右手を突き出しそれを打ち消した。

「……つまり、攻撃しても効かない上に反撃される、と。お兄ちゃん
の反物質もダメ？」

「残念ながら。反物質の性質を逆利用されて、窒素や酸素を圧倒的
な物量で押し付けて相殺されちゃう」

「まるでこっちの攻撃を分析して対処してるみたいね。ところでお
兄ちゃん、携帯開きっぱなしだけど」

「ん？ げっ！ 奈津美とつながりっぱなしだ！」

明俊は慌てて携帯を耳に当てる。

「悪い奈津美！ すっかり忘れてた！！」

『後で超高級店でお茶っていつので許してあげるわ。御坂さん辺り
に良いお店聞いといてね』

「はい」

『よろしい。梓はとりあえず大丈夫みたいね。じゃあ、改めてAI
Mバーストについて対策を練りましょ』

「対策と言っても、俺・梓・御坂で死力を尽くして攻撃しまくるし
か思いつかないんだけど」

『それはあくまで最終手段。まずはあらゆる手を尽くしてみましょ』

「ねえ、お兄ちゃん」

携帯を耳に当てながら難しい顔をしていた明俊に、梓が声をかけた。

「ん？どうした梓」

「一つだけ、方法を思いついたんだけど……」

「何だ。何でも言ってくれ」

明俊に促された梓は、上条の右手を掴んで持ち上げた。

「うおっ」

「『これ』なら、もしかしたらアレを消せるんじゃない？」

「そうか、幻想殺し（イマジンプレイカー）か！… どうして今までこんな単純なことに気付かなかったんだ！！」

「え？ ええっ？」

突如話の主役に躍り出た上条は戸惑う。

「簡単ですよ上条さん。上条さんの右手でアレに触れば万事解決じゃないですか！！」

言われれば当然の事実の上条が「……あー、なるほど」と、気付かなかつたことに苦笑いしながら呟く……が、

「でもさ、アレに触るためにはアイツに近付かなきゃいけないよな？ どうやって、あんなビル最上階みたいな高さまで行くんだ？」

「そうですねえ……レールガンみたいに、御坂に射出してもらえば良いんじゃないですか？」

「俺死ぬだろー!!」

「冗談ですよ。大丈夫です、ちゃんとそこも考えてありますから」

明俊はいわゆるどや顔でそう言うと、背中から白銀の翼を生やし羽ばたかせる。

「これで飛んで行きましょう」

「え?……ええっ!？」

「なっ……」

突然明俊の背中から現れた翼を見て大声をあげる上条と、言葉を失ったインデックス。

「俺が上条さんを抱えてアレのところまで飛んでいきますから、上条さんは右手でアレに触れるだけでokです。あ、間違っても翼には触れないで下さいね、途端に地面に落下ですから」

そこまで言うと、「失礼しますよ」と上条を後ろから抱きしめるように抱える。

「どうだ御坂、羨ましいだろ？」

明俊がからかうように御坂に顔をむけると、御坂はまた顔を赤く

する。

「べ、別に羨ましくなんかいわよ！　（そ、そりゃあ少しはそこ代われって思ったりもしたけど……）」

「……最後の方、気持ちが悪く口から漏れてるぞ。この作戦が無事終わったらチャレンジしてみるんだな！」

明俊は最後まで御坂をからかうと、白銀の翼を大きく動かし上空へと飛び立つ。

「すげえ……本当に飛べるんだな」

「レベル5ですから、これくらいはこなさないと。でもさっきも言いましたけど、右手で翼に触らないで下さいよ？」

明俊と上条は上昇を続け、まっすぐにAIMバーストへむかう。

近くで改めて見ると、その異様な姿は明俊に嫌悪感を抱かせる。

「うへー、こんな気持ち悪い物体だったのかよ……さ、上条さん、さっさと片付けましょう！！」

「よし……」

明俊の言葉に上条は力強く頷くと、右手をAIMバーストにむかって突き出した。

「良いぜ明俊！！　そのまま突っ込め！！」

「了解です!!」

今一度翼を大きく動かし、スピードを増して一気にAIMバーストに襲い掛かる上条と明俊。……だが、

「(………何だ? 近づくにつれて周囲の空気が揺らいでいる?)」

明俊は異変の原因を考える。

そして、自らの皮膚にある感覚器官が感じ取っているある信号に気付いたとき、明俊は驚愕した。

「……マズイ!!」

明俊は慌てて急旋回してAIMバーストから離れる。

「おい、どうした明俊!?!」

上条の疑問の叫びに、明俊は焦りを隠さずに叫ぶ。

「今アイツに近付くと、俺も上条さんも一瞬で消し炭にされちまいます!!」

「っ!?!」

明俊は上条と共に地上へ降り立つと、「梓!!」と一声叫んだ。

その叫びとほぼ同時に、梓が両手を広げて特大の氷の壁を作り出す。

直後、ゴウツ！という轟音と共に、辺り一面に熱風が吹き荒れる。

熱風は容赦なく氷の壁を溶かし、それに応じて梓が蒸発した水を能力で冷やして再度氷にする。

周囲のビルのガラスは、強風と熱で粉々に砕け散った。

「ねえ明俊、まさかこれって……！！！」

御坂が地上に着地し息を整えていた明俊に叫ぶと、明俊もうなづいて叫び返す。

「そうだ！！ 前回戦ったAIMバーストとまったく同じ攻撃だ！
！ あの野郎、俺の反物質じゃ温度変化までは防げないことも想定済みだったってことかよ……！！」

「どつしよつお兄ちゃん！！ これじゃあ身動き取れない……！！」

「耐えろ梓！！ 今こっちで案を考える……！！」

明俊は携帯を取り出すと奈津美に電話をかける。

「奈津美か！？ 実は今……」

『街の監視カメラの映像でもそつちを捕らえてるわ……！！』

「どつする！？ 何か案があれば頼む……！！」

『すぐには思いつかないわ！ 今のところ幻想殺ししか有効な手段

は思いつかないし、でも肝心の上条さんが近づけないんじゃない……」

「くそっ！！」

明俊は電話を切ると、熱風を放ち続けるAIMバーストを睨みつける。

「（どうする！？ 前は俺が熱風の届かないところから攻撃できたから倒せたが、今回は俺も熱風の射程距離内にいるし、それ以前に核まで反物質が届かない。氷壁の外に出たら消し炭だし……八方ふさがりかよ！！」

「ああああああっ！！」

「梓！！！」

全力で氷の壁を作り出している梓の叫びに、明俊は駆け寄り梓の手を握る。

「（俺にはこれしか出来ないのか！？ 手をこまねいてただ状況が過ぎるのを待つだけなのかよ！！ 神も天使も存在せず、天に見放されて死を待つのが俺たちがこの世界に来た意味なのかよ！！）」

それでも、どんなに心の中で神や天使を呪っても、状況は変わらない。

明俊はギョツと目を瞑り、握っている梓の手をさらに強く握った。

「（ごめんな琴美、今回ばかりは相手が悪かったみたいだ……帰れそうにない）」

だが、物語はここでは終わらなかった。

突如、吹き荒れていた熱風が弱まったのだ。

そのことを肌と音で感知した明俊は、目を開けて正面を見た。

「……何だ、あれは」

明俊の視線の先、氷壁とA I Mバーストのちょうど中間付近のところに、熱によるゆらつきとは明らかに違う、ノイズが走っているという形容が正しいちらつきが見えた。

それは人の形を成しており、徐々に鮮明になりつつある。

上条に寄り添ってその光景を見ていたインデックスが、一言言葉を漏らした。

そしてそれを聞いた明俊は、

「……ハ、ハハハ。こいつはスゲエ。そうか、『毒を以つて毒を制する』って言葉はこういうことを言うんだな。AIM拡散力場から生まれたバケモノに対抗できるのは、AIM拡散力場から生まれた天使様って訳か」

その人（？）はゆっくりと振り返り、明俊たち、とりわけ上条とインデックスにむけて微笑んだ。

「本当に助かりました……風斬さん」

天が、明俊達に救世主として天使だった。

風斬氷華を使わした瞬間

第51話 打つ手無し（後書き）

ついに風斬氷華も登場です。

僕にあの優しい微笑みをたたえた巨乳天使様を上手く書けるかどうか………

ちなみに、風斬の出番は今回限りではない予定なので、今後の話でも出てくる………かな？（汗）

第52話 〈学園都市内乱編最終章〉（前書き）

長かった……書いている自分でも長かったと思うオリジナルストーリー、学園都市内乱編もついに最終章を迎えました。

最初の第31話「打ち止めともう一人」から数えるだけでなんと22話。よくこんなに書けた俺……（超自己満）

では、どうぞ！

第52話 〈学園都市内乱編最終章〉

「ひょうか!!」

インデックスの歓喜の声に、現れた風斬は笑顔で応えた。

風斬は右手を頭上に真っ直ぐ伸ばし、風を右手一つで受け止めるようにしている。

たったそれだけの行為なのに、先ほどまであれだけAIM拡散力場から発せられていた熱風が、勢いは髪をなびかせる程度に弱まり、温度も生温かい程度に低くなった。

「（これが、風斬氷華の力……でも、まさか風斬さんが助けに来てくれるなんてな）」

「風斬!!」

上条とインデックスが、熱風が弱まったことで氷壁を解除した梓のわきを走りぬけ風斬に近付いた。

「ひょうか……また、会えたね」

「うん。……こんな形で、だけどね」

「いや、風斬が俺たちを助けてくれたんだろ？ありがとな」

上条たちと話している間も、右手を挙げ続けて風を弱める風斬。

「（ホントスゲーな、話しながらでもあれだけでA I Mバーストの攻撃を抑えつけるなんて）」

「ねえ明俊、出来るなら私に状況を説明してほしいんだけど……」

明俊が風斬の圧倒的な強さに思わず感動していると、いまいち状況を飲み込めていない御坂が明俊達に近付きながら質問する。

「俺にも詳しくは分からないんだけど……今上条さんたちと話してる眼鏡の人　風斬さんって言うんだけど、彼女の力でA I Mバーストの攻撃を防いでいるんだろっな」

「へえー……ってちよつと待って！！ 私たちレベル5が3人いてまともに防げなかったものを、あの風斬っていう人は一人で防いだのよね！？彼女一体何者なのよ！？」

御坂の、当然と言えば当然だが鋭い質問に、明俊と梓は答えに窮した。

能力名である『カウンターストップ正体不明』と答えても、彼女の後の姿である『人工天使』と答えても御坂にとっては意味不明だからである。

明俊と梓は顔を見合わせ、同時に上条の方をチラッと見た。

「（俺たちが答えても後が面倒だし、ここは……）」

「（上条さんに押し付けよう！！）」

まるでテレパシーでもしているかのように、二人揃って同じ結論に至った明俊と梓であった。

「いやあー、それがさ、俺たちも詳しいことは知らねえんだ。だからさ……」

「詳しいことは、彼女の知り合いである上条さんに聞いてね御坂さん！」

「えっ!?!」

突如説明責任を押し付けられた上条当麻であった。

「とにかく今はあれを倒そう！ 風斬さんもいることだし今がチャンスだ!！」

勢い勇んで明俊が反物質で攻撃しようとするが、風斬がいさめる様に声をかけた。

「待ってください。今攻撃しても今までと結果は変わりません。私が今しているのは、あくまでもアレの攻撃を抑えてるだけですから」

「じゃあどうすれば……?」

「簡単です。アレの表面を構成している物質 言葉では皆さんには表現できない物なんですけど、それを私の力で剥ぎ取れば万事解決です」

「そうか、そうすればお兄ちゃんの反物質が核まで届くようになるもんね」

「ええ。でも念には念を入れて、核まで攻撃が届く方は全員攻撃し

たほつが良いと思います。アレが何をしでかすか分からないので、何かされる前に倒しちゃいましょう」

「分かりました。御坂！！ レールガンをぶちこむチャンスだぞ！
！」

「聞いてたわよ。さっさと片付けましょ」

「じゃ、いきますね」

御坂の言葉に風斬がうなづくと、挙げていた右手はそのままに、そこに左手を添えた。

そして、ほんの一瞬だけ両目をつぶるとすぐに開いた。

その一瞬の行為のあいだに、明俊達の視線の先では劇的な変化が起こっていた。

今まで麦野沈利の電子線、御坂美琴のレールガン、そして工藤明俊の反物質のすべてをことごとく受けきってきたAIMバーストの側面に、ポツカリとくぼみができいたのである。

「うーん……これくらいでどうでしょうか？ むこうからもこちらに干渉してきているので、これ以上穴を開けるとなると風を抑えることが難しくなっちゃうんです」

事も無げに言う風斬であったが、その場にいた風斬以外の人間は全員言葉を失っていた。

「……………？ 皆さん、どうかしたんですか？」

「え！？ い、いえ、まさか、風斬さんの力がこれほどだとは思ってなかったの……」

「ほ、ホント、すごい……お兄ちゃん、私たちも負けてられないわよ……！」

「そうだな！！ 見たところ、核はちょうど3つあるみたいだ。3人で分散して一気に破壊しよう！！俺はここから狙うから、梓と御坂は左右に分かれて攻撃してくれ……！」

明俊の言葉に梓と御坂は力強くうなづくと、それぞれ散らばって配置につく。

「ごめんなさい上条さん。今日は上条さんの出番は無さそうです」

「いやいや、俺の右手の出番が無いのならそれに越したことはねーよ。レベル5の力、ここからじっくり見させてくれよ」

「了解です……といっても、ほとんど風斬さんのおかげなんですけどね」

「ううん、私一人じゃアレの干渉を受けて倒せない。みんなの力が必要なんです。でも、私がつっかけてアレを倒せるのなら……私の力でも『友達』を助けられるのなら、私は精一杯の力を出し切ります」

「ひょうか……」

「さ、最後の大事な、さっさと片付けちゃいましょう……！」

「ええ!!」

うなづいて、明俊は右手をA I Mバーストの方に突き出す。

くぼみの中から見える核は、三角柱の形をしていて不気味な光を放っていた。

先ほどから一切攻撃する素振りを見せてこないのは、風斬が何らかの力で干渉しているからだろうか、と明俊はぼんやりとそんなことを考えながら、その身に反物質を溜め始めた。

空気中の窒素などの常物質と反物質が反応して、パチパチと青白い電気が生じる。

「とうま、あきとしが輝いてるんだよ……」

「とても。きれい」

「ここまで溜めるの実は結構体力使っんですよ？ 反物質の濃度が高くなると無意識制御の枠を超えて反物質が反応するんで、無理やり押さえつけてるんです。気を抜くと反応が一気に進んで、俺もろともこの辺が吹っ飛びます」

「……マジかよ」

「文字通り、跡形もなくなるんじゃないですかね？ 制御できなくなったらと思うとゾッとします……うつ!？」

笑顔で恐ろしいことを言っていた明俊だったが、突如左手で頭を

押さえてひざまずいてしまった。

「お、おい、どうした!？」

上条が明俊に駆け寄り、右手で反物質に触れて消し去った。

「う、くっ……反物質、消しちゃったんですね……」

「当たり前だ！ 能力が暴走しちまったら大変なことになるって言ったのはお前じゃねーか！ それより、どうしたんだ!？」

「あ、頭が急に痛くなって……」

「頭が……？ まさか、本当に能力の暴走か？」

「いえ、ちゃんとコントロール下にありましたからそれは無いかと……見れば分かりますけど、実は今日頭を打って一時気絶してたんです。もしかしたらそのせいかも……」

「とうま、あきとしの体が熱いんだよ!！」

明俊の額に手を当てたインデックスが叫ぶ。

「っ!! その時のダメージが今になって出てきたってことか!！」

「どうしたの!？」

「お兄ちゃん!？」

異変に気付いた御坂と梓が駆けつけてきた。

「詳しくは医者に見てもらわねーと分からないけど、今日頭を打ったんだって？ その時のダメージが今になって出たらしいんだ」

「お、俺は大丈夫、です。それより、AIMバーストをどうにかしないと……」

地面に横たえようとする上条を押しつけ、明俊は立ち上がるうとする。

「お、おい！動くな明俊！！」

「で、でも、アレをどうにかしないと……」

「無理してお前が動くことないだろう！！ 御坂や梓もいるんだ、二人に任せてお前はジツとしてる！！」

「そうよお兄ちゃん、上条さんの言つとおりだわ！！」

上条の説得に梓も同調する……が、風斬の口から新たな事実が語られた。

「……そうもいかないみたいです」

「何だって？ どういうことだ風斬？」

「アレの核が3つあることは私も感知しています。そして厄介なことには、核を3つ同時に破壊しないとアレは倒せないと思います」

「でも、御坂のレールガンの破壊力なら2つくらいは同時に壊せる

んじゃないのか？ 残り1つを梓が壊せば……」

「無理ね」

上条の意見をあっさり否定したのは、あるところが核破壊担当の御坂だった。

「アレの核が大きすぎるわ。私のレールガンでも、1つ目は破壊できても2つ目までは壊せないわ」

「そんな……どうにかならないのかよ！！」

「今回ばかりは、アンタお得意の根性論でどうにかなる相手じゃないわ。アンタが近づけないんじゃないその右手もただの手だし。風斬さん……だっけ？ 何か手は無いのかしら？」

一縷の望みを持って御坂は風斬に尋ねるが、風斬は首を横に振った。

「本来なら、明俊さんに代わって私が手を下すのが妥当なのですが……私もアレから干渉を受けていて、これ以上力を出せないんです。私自身がまだ不完全っていうのもありますけど」

「う、く……や、やっぱり、俺がやりますよ」

今まで黙って上条や御坂たちのやり取りを聞いていた明俊だったが、多少体力を取り戻したのか、今度こそ上条を押しつけ立ち上がった。

「ここで俺が立てば何の問題も無いんです。やりましょう」

「あきとし、無理は良くないんだよ」

泣きそうな顔で心配するインデックスに、明俊はやや力の抜けた、それでも柔らかな笑みを浮かべた。

「ありがとうインデックス。でも俺はさっき上条さんに言われたんだ、『そんな弱気じゃ、命を懸けて守った琴美に笑われる』ってな。その通りなんだ、ここで俺が何も出来なかつたら琴美に会わせる顔がない。そんな恥ずかしいことだけはしたくないんだ」

「お兄ちゃん……」

「自己満足だつて言われるかもしれないけど、これが俺の素直な気持ちなんだ。……さ、時間が惜しい、さっさと片付けよう」

それ以上何も言わず、黙って反物質を展開し始めた明俊を見て、御坂と梓も顔を見合わせてうなづくとそれぞれ核が攻撃できる位置まで移動する。

「ごめんなさい明俊さん。私が役に立たないばかりに無理させてしまつて……」

耳元で謝る風斬に、明俊は「いいえ」と首を横に振った。

「良いんですよ。それより、どのタイミングで攻撃すれば良いんですか？」

「あ、いつでも大丈夫ですよ。くぼみはさっきからずっと維持してありますから。……それと一つだけ、別件なんですけど、後であな

たと妹さんと私、3人でお話できませんか？」

「え？ ええ、別に良いですけど。じゃあ、攻撃始めますね」

明俊は携帯電話を取り出すと、梓と御坂に同時に電話をかけた。

「二人とも聞こえるか？ 俺の合図で同時に攻撃を仕掛ける。これが最後の攻撃だ、準備は良いか？」

『当然でしょ？ さつきからレールガンぶっ飛ばしたくてウズウズしてたくらいよ』

『こつちも大丈夫よお兄ちゃん。けりをつけましょ！』

「よし！ 3つ数えたら攻撃するぞ！ 1・・・」

明俊のカウントダウンと共に、その場の緊張が一気に高まる。

「2・・・」

夏の日差しに照らされ、さらに頭痛と発熱に苦しむ明俊の顔から汗が滴り落ちる。

直立不動のように見えるが、後ろから明俊を見ている上条たちには、明俊の体が左右に揺れているのがはっきりと分かった。

それに気付いた風斬が、明俊の肩に手を置いて照準を合わせやすくする。

1と2のあいだよりわずかに間を伸ばして、明俊の口が動いた。

「……3!!」

もはや叫びを通り越して怒号にも似た明俊の叫びと同時に、扇状に散らばった3人のレベル5から攻撃が放たれた。

御坂の放つレールガンのオレンジ色の輝きが、梓の絶対零度に近しい水色の攻撃が、そして明俊のこの世のすべてを消し去る反物質が、AIMバーストの核をそれぞれ撃ち抜いた。

3つの核を同時に破壊されたAIMバーストは、この世のものは思えない奇声を発して霧散して消えた。

「や、やった……!!」

AIMバーストが跡形も無く消え去ったのを、風斬に支えられながら見守っていた明俊は、フツと力が抜けるように気絶してしまっ

「うっ……」

目を覚ました明俊の視線に飛び込んできたのは、真っ白な天井だった。

「（……：白の天井に、俺が今横たわっているものの感触、そして消毒液の匂い……：そうか、ここは病院か）」

顔を動かしてその推測が当たっているかどうか確かめようとした明俊であったが、その前に、にゅっと視界に入ってきた顔に障害されてしまう。

「あら、目を覚ましたのね」

視界に入ってきたその顔が、明俊の顔をジッと見つめながらそう言った。

ほんの一瞬看護士かと思った明俊であったが、その大人の顔つきの中にほんのわずかに幼さを残した顔には見覚えがあった。

「…奈津美か」

「ご名答。どうやら大丈夫みたいね」

「どうやらそうみたいだ……：な？ うん？」

「どっしたの？」

やはりどこか異変があるのだろうか、そう思った奈津美が再び明俊の顔を覗き込んだ。

がするのだが……いったん情報を整理しよう。そちらにいらっしやる白衣の人が奈津美を研究所から逃がしてくれた人、で良いんだな？」

「そう。桜川研究員よ」

「初めまして、工藤明俊君」

「はあ、初めまして。それで……なんでアイテムもここに？」

「僕から説明するよ」

そう言つと、桜川は明俊のベッドの近くのイスに腰掛けた。

「僕は今日、僕を研究所から救い出すようアイテムの方々に連絡を入れたんだ」

「？ じゃあ、桜川さんは研究所に捕まっていたということですか？ 研究員なのにな？」

「まあね。貴重な研究対象であつた奈津美君を逃がしたのだから当然だろう」

「ああ、そういうことですか。それじゃあ、今日常盤台中学に奈津美と一緒に絹旗や滝壺さんがいたのは？」

「僕はその件に関しては詳しくは知らないんだけど、冥土帰しに送つたメールが関係しているのかな、奈津美君？」

「ええ」

語り手が再び奈津美に戻る。

「実はね明俊、今回の無能力者暴走事件を引き起こした連中の正体は、私が最後にいた研究所の連中だったのよ」

「何だと!？」

「微生物応用研究所で爆発があったでしょ?あれも彼らが引き起こした事件だったの。無能力者暴走は、そのせいで学園都市中に拡散したウイルス。正確にはウイルスの構造や作用を模した小さなデバイスだけど、それが原因で引き起こされたものだったの」

「そうだったのか……」

「そして、私を逃がした罪で軟禁されていた桜川研究員は、事態解決のために2箇所にもメールを送ったの。一つはアイテムの上層部、もう1箇所は冥土帰しのところにね」

「冥土帰しに……?」

「僕と先生は以前から交流があつてね。それに、こういうとき頼れるのは彼のようなごく限られた人間だけだからね、押し付けがましいとは承知でメールを送信させてもらったのさ」

「桜川研究員は、冥土帰しなら事態解決のための装置を開発してくれると信じてメールを送ったつてことね。ところが、冥土帰しには患者がいる。患者を放置して病院を離れることは自分には出来ない。そういうわけで、代わりに私が常盤台にある施設に依頼して装置を作ってもらつてことになつたわけ」

「それで奈津美が常盤台に……でも、その奈津美と一緒に絹旗や滝壺さんがいた理由は？」

「ああ、その説明だったわね。冥土帰しの所に護衛として二人が来たのだけど、私が常盤台に行くことになったから二人についてきてもらったのよ」

「それで垣根に襲われた、と。ようやく理解できた」

「どうやら、第三位様は連中に依頼されて絹旗たちを襲ったつてことわしいわよ？ ……さーて、用も済んだし、私たちはこれで引き上げてことでもいいのにかーん？」

今まで黙って話を聞いていた麦野が、依頼主である桜川に尋ねる。

「ああ、依頼ご苦労様。リーダーさんの口座にお金は振り込んであるから」

「りょーかい。じゃ帰りましょ」

病室のドアを開け、麦野を先頭に絹旗、フレンダという順番に病室を後にするアイテム。

最後、滝壺理后が病室を出ようとしたとき、滝壺はジッと明俊を見つめた。

その視線に気付いた明俊は「何か？」と滝壺にたずねようとしたが、その前に滝壺はドアを閉めて出て行った。

「じゃあ、僕もこれで失礼させてもらおうかな。先生に、メールを送って勝手に助けを求め迷惑をかけたことを謝らないといけないからね」

桜川も、「じゃあ奈津美君、また今度」と言いながら病室を後にした。

こうして、病室には明俊と奈津美だけになった。

「そういえば奈津美、一つ聞いても良いか？」

「何？」

「変なことを聞くことになるのかもしれないけどさ、どうして奈津美が常盤台に出向いたんだ？」

「変な質問ね。冥土帰しにそう頼まれたからよ」

「だとしてもさ、普段の奈津美なら『私が行っても、ましてこんな姿の私が行ったら絹旗たちの足手まといになりかねない。行くのは戦いのプロである二人に任せの方が良いわ』って言いそうだからさ」

「私ってそんなに薄情な人間だったかしらね？なんて嫌味はともかく、確かに普段の私ならそういう風に言ったかもしれない。私のせいであの二人がいつもものように動けなくなったら嫌だもの。でもそうね……自分でよくは分からないのだけど、罪滅ぼし……だったのかもしれないわ」

「罪滅ぼし？」

奈津美は「ええ」と言いながら、先ほどまで桜川が座っていたイスに腰掛けた。

「今回の事件を引き起こしたデバイス……ああ、あのAIMバーストを生み出したのももちろんデバイスなんだけど、あのデバイスには私の能力の研究データが使われていたの」

「……そうか、それで罪滅ぼしっていうことか。自分の能力が元になって今回の事件を引き起こしてしまった。だから、たとえ戦いのプロである二人の足手まといになるとしても、自分が動かすにはいられなかった」

「そういうことね。その点に関しては、あなたにも謝らないといけないし」

「俺に？」

「今回の事件がなければ、ひいては私にこんな忌まわしい能力が備わってなければ、あなたはこんな風に頭や肩に怪我を負うこともなかったんだもの」

「……なんだ、そんなことか」

「あなたにとつてはそんなことかもしれないわ。でも、今回の事件のせいで傷ついた人もたくさんいる。この病室を一步出ればすぐに分かるわ。それに、被害だって少なくない。あちこちで建物が破壊されている。私からすれば、とても『そんなこと』で済ませられることじゃないのよ」

「……確かにそうかもしれない。でもな」

そこで言葉を切ると明俊は上半身を起し、近くに座っていた奈津美を抱き寄せた。

「あっ……………」

「それは、奈津美が悪いわけじゃないと俺は思う。きっかけは奈津美でも、引き金を引いたのはお前じゃない。ここで奈津美を悪く言う奴がいるとすればソイツは、『人が包丁で殺された。包丁がこの世にあるのが悪い』って言ってるのと同じだ」

「……………」

「有名な例えだけど、その通りだろ？大丈夫、奈津美がそんなに悩み苦しむことじゃないんだよ。もしそれでも、仮に奈津美を悪く言う奴がいたり、奈津美を利用しようとするやつがいれば、俺が奈津美を守る。だから、そんな悲しそうな顔を見せんじゃねーよ」

「……………あなたって、優しくて、ずるいわ」

「あん？ 優しいってのは分かるけど、ずるってのは何だよ？」

「明俊は知らなくても良いことよ。……………そうだ、ねえ明俊」

「ん？」

「……………琴美さんとは、どこまでいったの？」

「ブツ！？ は、はあ！？」

「良いから答えなさい。キスくらいはしたわよね？」

「そそ、そんなこと答えられるわけないだろ!？」

「あら、その反応じゃしたのね？」

「ぐっ……」

「別に隠すことないでしょう？」

「恥ずかしいんだよ!! それより、どうしてそんなことを聞くんだよ!？」

「……私も、ずるい女になろうっただけの話よ。それで？キスの先は？」

「ない!! 断じてない!!」

「……その反応じゃ、どうやら先には進んでないのは確かなようね」

「あ・た・り・ま・え・だ!! 俺はまだ中学生だぞ!？ 琴美にいたっては、外見は中学二年だけど中身は小学生以下なんだからな!？……ってあれ、奈津美さん？ 顔が近いですよ？」

「自分から私を抱き寄せておいてその発言はないわね」

「じゃあ、何で俺の顔を両手ではさむようにしてるんだ!？」

「そんなの、決まってるじゃない?」

そう言うと、奈津美は着ていたブラウスの、しまっていた1番上のボタンをゆっくりと外す。

「なっ、何をしてる奈津美!?!」

「見て分らないの? ボタンを外したに決まってるじゃない」

「いやいや、何でそんなことをする必要が!?!?」

「……あなたも、薄々気付いてるんじゃない?」

奈津美は再び明俊の顔をはさむようにすると、自らの顔をゆっくりと明俊の顔に近づけ……

バタン！！

病院にあるまじき轟音と共に、病室のドアがものすごいスピードで開いた。

明俊が思わず顔をそちらにむけると、梓と琴美の姿があった。

「あらあら、とんだ邪魔が入っちゃったわね？」

奈津美がそう残念そうに呟くが、明俊の耳には入らなかった。

なぜなら、部屋に入ってきた琴美からすさまじい負のオーラが出ているのを感じたからである。

「あ・き・と・し・さん！！」

「は、はい！？ 何でしょうか琴美さま！？」

「今、この女と何をしようとしていたのですか！？とミサカは銃を構えながら詰問します！！」

「い、いや、俺にも何がなんだか……」

「あくまで隠し通すつもりなら、実力行使しかありません！！」

「えええっ！？ お、おい、奈津美、お前が元凶だろ！？」

「……プ、ククク……！！！」

突如、奈津美が声を押し殺しながら笑い始めた。

「奈津美？」

「クク……いやあ、久々に本気でテンパってる明俊なんて見たわ。大丈夫よ琴美さん、今のはすべて演技だから」

「え、演技だとお！？」

「そうよ？ 病室の外に琴美さんや梓がいるのは分かってたの。これでもAIM拡散力場に関係する能力の使い手、AIM拡散力場に対する嗅覚のようなものも鋭くなってね。どうせ二人が聞き耳でも立てているんだろうと思って、一芝居打ったって訳」

「……その割には、結構本気ではなかったですか？とミサカはあなたを睨みながら質問します」

「そうね……」

そう言いながらニヤツとした奈津美は、琴美の耳元でささやいた。

「あなたの邪魔がなかったら、『最後まで』いけてたでしょうね？」

「なっ！？」

「なーんてね。じゃ、私は冥土帰しの所に行くから、後は3人でこゆっくりー」

そう言つと、奈津美は琴美のわきを通り抜け、琴美の後ろに立っていた梓にウィンクしながら病室を後にした。

その後、明俊の病室では琴美が「ミサカも本気を出さなければならぬ時が来たようです！」と叫びながら服を脱ぎ始めて明俊を困惑させたり、梓はそれをニコニコしながら眺めていたり（この時の梓は不気味だった by 明俊後日談）と一悶着あったのだが、とにかくこれにて非常に長かった9月2日もようやく終わりを告げ、学園都市での騒乱も一応の決着を見た。

しかし、同時に謎を残した日でもあった。

翼を現出させることが出来るほどの明俊は、果たしてただのレベル5なのであるのか？

何より、あの未元物質をまったく寄せ付けなかった工藤梓の謎の力とは？

翌日より、物語はさらに加速してゆくことになる

第52話 〈学園都市内乱編最終章〉（後書き）

やったー、22話に渡るオリスト完結ー！

……なのですが、実は説明不足な点もあるのでこんなところで補足を入れます。

まず、「何故インデックスは暴走しなかったのか？」という疑問を持たれた方もいらっしゃるかと思います（え？いない？）

この理由は単純で、「インデックスは能力開発を受けていないからです。……これくらいなら本文中に入れるよ！って感じですが、入れられる流れがありませんでした（汗

もう一つ、「じゃあ姫神は？」という疑問ですが（誰？とか言わないように。僕は実は隠れ姫神ファンですから）、姫神はケルト十字で力を抑えています。

そのため、AIM拡散力場が実質0状態であり、暴走対象にならないというわけです。

補足は以上です。

本当はもっと面白い展開にしたかったのですが、毎度の言い訳、文才の無さによりこんなgdgdな感じになっちゃいました。

最後は奈津美をもっとR18な感じで書いても良かったのですが（要望があれば考えますw）、無難に落としました。

さて、最後に緊急告知です。

次話からは原作8巻に該当する部分を書く……予定だったので、急遽変更してここで梓オリジナルをやります。

理由は……ここでやった方が書いている僕的にもストーリー的にも負担が少ないからです。

なので、その点ご容赦いただいて次章もお楽しみに。

第53話 謎の一室（前書き）

さて、宣言どおりここからは梓オリジナルです。

本編に関わってくるのは梓がメインとなり、明俊はメインではありません。

第53話 謎の一室

9月3日。

工藤梓が自らの所属する2年1組の教室に入ると、すでに登校していたクラスメートたち（特に女子）が顔を輝かせて梓のもとにやってくる。

「あ、梓ちゃんだ！！」

「待ってたよー！！」

「え？な、なにになに！？」

学園都市の最上位に位置する『レベル5』の人間は、御坂美琴が良い例であるが、何かと世間の注目の的になりやすくもちろん梓も例外ではない。

しかし、生徒からある意味異常な程尊敬・敬愛の対象になっている御坂とは違って、梓はその容姿と優しい性格から羨望の眼差しで見られこそすれ、教室に入るや否や黄色い声で出迎えられることなど今までなかった。（とは言っても、梓が柵川中学に通ってからまだ数回しか登校していないが）

それなのに、いきなり教室に入ったらクラスメートが駆けつけてきた光景は梓にとっては不気味以外の何物でもなかった。

「なにになに、じゃないよ！！ 昨日、学園都市の空に現れた化け物倒したの梓と明俊君なんだって！？」

「あー、それね。うん、まあ、そうなの……かな？後、常盤台の御坂さんも一緒だったけど」

「『あー、それね』ってなにサラリと言ってくれちゃってんのよ！あの御坂美琴様も一緒だったってことは、レベル5三人による壮絶なバトルシーン！？」

「あーくそー！俺も見に行けばよかったー！」

「なーに言っちゃってんのよ！あんたなんか、ビビって常盤台中学の隅っこの方で縮こまって下級生の女の子に心配されてたくせに」

「びび、ビビってなんかねーよ！あれはなあ、世間で言ってるの武者震い……」

「今の時代、武者震いなんて言っちゃってくれる人間の大半はビビってるのよ」

「ぐっ……」

「（慰めた下級生の女の子って佐天さんのことかしら……？）ま、まあまあ。壮絶なバトルとか言ってたけど、そんなドラマチックな戦いはしてなかったよ？どっちかって言うと、泥臭い地味な戦いだっただよな……」

「それでも、1度でいいからレベル5のガチな戦いが見てみたいよねー」

「ちょっと、変なフラグ建てないでよ……」

後で「フラグ回収しますた」なんて展開にならないことを切に願う梓であった。

「あれ？そういえばもう一人のヒーロー、明俊君は？」

「あれ、いねーな。いつも兄妹揃って登校してくるのに」

「ああ、うん。昨日のアレで疲れちゃったのかな、ちょっと熱があったて今日は休みなの」

「そうなの……」

明俊の休みを聞いて残念がるのは女子生徒たち。

まだ学校に来たのは数回だというのに、兄の女子生徒たちに対する人気の高さを実感した梓であった。

「（さすが、佐天さんに速攻でフラグを建てたお兄ちゃんだけあって、クラスの女子たちにもその『魔の手』を伸ばしてたって訳ね……）」

「それだけ、あの化け物が強敵だったってことだろ？レベル5が三人で倒したってことは、裏を返せばそれだけ強かったってことじゃねーか？」

「うん。実際、アイツはかなり強かった。正直、みんなとはもう会えない事態に陥ってたかもしれない」

男子生徒の言葉に梓は心から同意した。

レベル5三人で、と言ったが、その実態は風斬氷華抜きには語れないほどだったからである。

「（昨日の出来事はレベルの強弱なんて関係ないくらい厄介だった。お兄ちゃんも、クラスみんなには熱があるなんて言ったけど、本当は病院に入院中だなんて言えないし）」

先ほどの梓の言葉は実は嘘であった。

いや、嘘というのはいささか語弊があり、発熱があるのは本当であるが不登校の真の理由ではない。

梓は昨日の、冥土帰しとのやり取りを思い出した

「入院……ですか？」

9月2日夕方、明俊は乱れたベッドを整えながら冥土帰しの言葉に答えた。

ちなみに何故ベッドが乱れているのかというと、決してとてここに書けないような大人の時間を過ごしていたからではない。

まあ危うくその大人の時間に突入してしまうところだった時に冥土帰しが部屋に入ってきたので、まさに紙一重だったのだが。

「ああ」

「彼に何か異常があるのですか？ とミサカはしぶしぶ着なおした服のボタンをしめながら尋ねます」

ボタンをしめ直した、と言いながら、冥土帰しが部屋を出たら即再び服を脱げるようにボタンに手をかける琴美。

「（琴美……よほどお兄ちゃんと奈津美がきわどく絡んでたのが気に入らなかつたのね。でも、私がいることも少しは気にして欲しいんだけど……）」

恐らく叶いそうにない願いだが、それでも切に願わずにはいられない梓であった。

「詳しくはまだ検査してないからハッキリとは言えないが特にこれといった異常はなかつた。まあ、頭へのダメージということで、念の為なんだね？」

「どのくらいの入院になりそうですか？」

「入院中の精密検査に異常が見つからなかったり、入院中に何も異変が起こらなければほんの2・3日で構わない」

「そうですね……分かりました」

「大丈夫です、ミサカが数日とはいえ毎日見舞いにくるので安心して下さい、とミサカは今から濃密な数日間にw k t kを隠し切れません」

「いつ!？」

「私は琴美のその『濃密』の意味についてw k t kね。でも琴美、一つ残念なお知らせがあるんだけど」

「梓お姉さま、その残念なお知らせとはなんででしょうか？ とミサカは若干嫌な予感にビクビクしながらも問います」

「実は……奈津美もしばらくのあいだこの病院に入院するのよ」

「……………」

その梓の言葉に琴美は少しの間沈黙し、そして……

「冥土帰り、提案があります」

「ん？どうしたんだい急に」

「ミサカを数日間、この病院……いえ、この病室に寝泊りさせてもらえませんか？ とミサカは鬼気迫る顔付きでお願いします」

「何を!？」

この琴美の提案に奇声を発したのは明俊である。

「このまま、彼をあの女狐に取られるわけにはいきません！！そのためには、ミサカが24時間彼と共にいなければならぬのです！！」

「い、いや、琴美、その提案自体は大変嬉しいんだけどさ……流石に付きっ切りはちょっと……」

「何か不満でもあるのですか？ とミサカはあなたに詰め寄ります。……まさか、あの女狐と夜を共にしたいと？」

「何でいきなり話がそうなるんだ！？ 第一、さっきのは奈津美が冗談だって言ってたじゃないか！」

「いえ、騙されてはなりません明俊さん！ あの女狐はあなたが入院している数日のあいだに、必ず先ほどのような行動を起こすはず！！ それだけは何としても止めてみせます！！」

「まず奈津美のことを女狐なんて呼ぶことを止めような！？ あいつはそんなふしだらな女じゃないから安心しろって！！」

「（いや、そればかりは必ずしもそうとは言いきれないかも……奈津美もお兄ちゃんのこと　だし。ま、さっきのは琴美の目の前ってことからかいの意味も若干はあつたんだろうけど）」

冷静な梓とは対称的なのは明俊と琴美。

先ほどから、服を脱ごうとする琴美とそれを阻止せんとする明俊のあいだで攻防が発生していた。

止めようかどうか迷っていた梓であったが、寮が無事かどうか確認しなければならぬことを思い出した。

「（そうか、もしあそこが被害を受けてたら今日私が寝る場所がなかった……まあ、別にホテルでも良いっっちゃ良いけど、やっぱり住み慣れた場所じゃないと落ち着かないし、あの騒ぎがあつた後じゃまともに営業してるホテルがあるかどうかも怪しいし）」

梓はそう考えると、いまだ戦いを繰り広げている二人を放置して冥土帰りに声をかけた。

「あの……私、帰りますね。お兄ちゃんと奈津美のことよろしくお願ひします」

「ん？ ああ、そのことに関しては心配しなくていい。どちらも別段大きな異常があるわけじゃないからね。むしろ、僕としては今の状況の方が気になるところなんだね？」

「……お兄ちゃんも琴美も奈津美も馬鹿じゃないですから、その辺は自重してくれるんじゃないですか？ 後は、成り行きに任せるってことで……」

疲れたようにため息交じりにそう言った梓は、二人を冥土返しに任せてその場を後にした。

「（冥土返しにはああ言ったけど、今頃3人で早くも修羅場と化していたりして……）」

考えられないことではないことだけに、心配の尽きない梓はクラスマートの前で思い出したため息（？）をついた。

「？ どうしたの梓ちゃん、ため息なんかついちゃって……」

「え？ ああ、うん、ちょっと今後のこと考えちゃったら疲れちゃって……」

「今後？ ああ、今日のこと？確かにねー、少ない人手で後片付けは大変だよな」

「そうそう……って、え？」

「えって……梓ちゃん、そのことのため息ついたんじゃないの？」

「う、うん、そのことのため息ついたんだよ。ゴメン、私もお兄ちゃんほどじゃないけど疲れてるのかも……」

「大丈夫？ 昨日おかしくなっちゃったみんなは大事を取って今日明日はお休みだから、私たちだけで後片付けだからねー。梓ちゃんは無理しなくても良いよ？」

「ううん、そこまでじゃないから私も頑張るよ。さっさと終わらせてみんなでゆっくりしよう！」

「そうだな！ 明日まで後片付けの日程だから、頑張って早く終わらせたら残りの時間は遊び放題だぜ！」

その男子生徒の言葉にテンションの上がる1組一同であったが、たまたま1組の前の廊下を通りかかった先生が教室の中に顔を出した。

「おーいお前らー、盛り上がってるところ悪いが、早く終わったら自習だからなー」

「「えー!!!?」」

テンションダダ下がりの2年1組メンバーであった。

かくして、柵川中学大後片付け大会は始まった。

校内は暴走した無能力者たちの攻撃で破壊された窓ガラスや、足のとれた机や椅子でまるでゴミ捨て場のような有様となってしまうていた。

学校側は、暴走してしまった生徒たちは念のため2日間休校とし、大きな怪我などを負っていないレベル1以上の生徒全員で片づける

ことを決定した。

病院を離れた後常盤台を訪れた梓は、白井や初春などと共にジャッジメントとして後処理などに携わっていたため、家にかかっていた今日の日程の連絡を受けることができなかつたため今日の予定を知らなかつた。

それで先ほど、クラスメートの「後片付け」の発言に思わず声が出てしまった。

「（まあ、こんな状態じゃ授業なんて出来ないことは容易に想像できたはずんだけどね……）」

梓は、ほうきで床に散らばっているガラスの破片を掃除しながらそんなことをぼんやりと考えていた。

「（うーん……やっぱり疲れてるのかなあ？　どうも頭が重いような気がするし、頭の回転も鈍ってる……）」

朝から梓は、どことなく頭が重いような感覚を覚えていた。

まるで、全力疾走した後に休む間もなく数学の授業を受けているような感じだと、梓自身もよく分からないたどえしか出来ないような言いよつゝの無い感覚にさいなまれていた。

とその時、梓は一つの異変に気付いた。

「（……あれ？）」

我ながら、こんな頭の鈍っている状態でよくこんなことに気付い

たなと感心しながら、梓は壁に取り付けられている扉をジッと見つめた。

何の変哲もない、学校によくあるスライド式の扉であった……が、問題はそこではなかった。

「（そもそも、こんなところにドアなんてあったっけ？）」

一瞬、自分がまだ数えるほどしか学校に来ていないのだからただの勘違いなのか、と梓は考えた。

しかし、これでもレベル5、記憶力にはある程度の自信のある梓にはどうにも勘違いには思えなかった。

「（……いや、こんなところにドアなんてなかった。確かここは、ただの真っ白な壁だったはず）」

梓は筭を壁に立てかけると、ドアの取っ手に手をかけた。

「（今までただの壁だったところに突如現れたドア……？ そんなオカルトなことあり得るのかしら？）」

学園都市だから、の一言で片づけることもできたであろうが、梓はこのドアの奥から何かを感じ取っていた。

「（何かしら、この感覚……何かが私をこの中に呼んでいるようなこの感じは……？）」

「あーずっささんー！」

「ひっ!？」

いきなり自分の名前を呼ばれてビクツとなった梓は、取っ手にかけていた手をひっこめながら声のした方を振り向いた。

「おはようございます! 梓さん!」

「さ、佐天さん……」

梓に声をかけてきた人物は佐天涙子であった。

「昨日はお疲れ様でした! ……じゃなくて、どうかしたんですか? 『壁』なんかジツと見つめたりして……」

「……え? あ、ううん、ちょっとボーっとしてただけ」

「大丈夫ですか? ひよっとして、昨日の戦いや後処理の疲れがまだ……?」

「うーん、ちょっとはね。でも大丈夫、熱出しちゃったお兄ちゃんほどじゃないわ」

「そうそう! 明俊さん、大丈夫なんですか? なんか病院に入院したって……」

「うん。昨日少し頭を打っちゃってね。でも、病院の先生が言うには異常は無いつてことだから、数日で退院できるって」

「良かったー! 明俊さんに何かあったらどうしようかと思っちゃいましたよ……あ、私先生に呼ばれてるんで、また後で!」

「うん！じゃあねー！」

未だ散らばっているガラスのかけらを器用にひよいひよい避けながら廊下を進む佐天を笑顔で見送った梓は、佐天が角を曲がって姿が見えなくなると険しい顔つきになる。

「（……さつき、佐天さんはこのドアを見つめていた私のことは気にしながらも、肝心のドアには気付いていなかった……つまり、ここに元からドアなんてなかった。かつ、このドアは私にしか見えていない……？）」

情報が増え、不気味さを増したドアの取っ手に再び手をかける梓。

「（……もしそうなら、この中に入って調査できるのは私しかいない。この奥から感じる何か……それが何なのかは分からないけど、突然現れたドアなんて放置できる代物じゃない。ここは私が行かない……）」

普段なら兄である明俊と一緒になんだろうな、と梓はふと考えて、首を横に振る。

「（ここにいないお兄ちゃんのことを考えてもどうしようもない。仮にお兄ちゃんがいたとしても、私にしか見えてないのならそれはいないのと同じこと。勇気を出さない梓、何が起ころうとも、この学校を守るのは現状私しかないんだから）」

自らにそう言い聞かせると、梓は深く息を吸って……ドアを開け、中に飛び込んだ。

「（何なのここ……柵川中学の地下？）」

ドアの奥は明かり一つない暗黒の世界であった。

梓は携帯を取り出して光源を確保すると奥へと進みだした。

壁には装飾品も紋様もなく、ただただ壁が続いているだけであった。

少し進むと、手すりのない階段が現れた。

「（階段……本当に柵川中学の地下なのかしら？）」

地下ということで、戦時中の防空壕的なものを想像した梓であったが、イマイチしっくりとこなかった。

「（いや、作りからして防空壕のようには見えない。それに、ここに入るドアは近代的なスライド式のものだったし、何より私にしか見えてなかったというのが気になる）」

梓は階段の途中で立ち止まると、ポケットから拳銃を取り出した。

「（何がおこるか分からない、一応準備はしておこう。マガジンは……赤か）」

通常なら殺傷能力のない青のマガジンをセットするのだが、梓は、もしこれが人の手でなされた現象ならその相手は少なくとも普通以上の実力の持ち主だと予想した。

「（私にしかここに入るドアが見えなかったということは、もしかしたら私だけを誘い出す思惑があるのかもしれない。ならば、赤にしておくのが無難よね）」

左手に携帯を持ち右手に拳銃を構えた梓は、再び階段を下り始めた。

すると、一つのドアが梓の視界に飛び込んできた。

「（またドア……でも、私を引き込むような感覚はさっきより強くなってる。ここで引き返すわけにはいかない）」

意を決すると、梓はドアを開き中に飛び込んだ。

すると……

「よく来たね」

「誰!？」

そこには暗いだった広い空間が広がっているだけであった。

だが、そこに入った途端に梓に語りかける声が聞こえてきたのだ。梓は拳銃を構えながら携帯の明かりを周囲に照らし声の主を確認しようとするが、誰もいない。

「ああ、そうやって私の姿を見ようとしても無駄だ。私は君からは見ることができない」

「何ですって……？ あなたは誰なの！？」

「私か？ 私こそ、君をこの空間に招き入れた張本人だよ」

「そうね。そうだろうとはうすうす気づいてはいるわ。私が聞いているのは、あなたがどんな力の持ち主かってことよ」

「ふむ……私自身にさして力はない。私の役目は、君にあるものを授けることだ」

「私に……授ける？」

「そう……私が君に授けたいと思っているのは、『力』だ」

「力……ですって？」

「そうだ。ああ、勘違いしないで欲しいのは、私が君に授ける力というのは君が持っている学園都市特有の『能力』のことではない。それとは『似て非なる』ものだ」

「学園都市の能力とは似て非なる力……？ 待って、それって……」

姿の见えない声の言う「能力とは似て非なる力」というものに梓
は一つだけ心当たりがあった。

「そう、君もよく知っているだろう？ 『魔術』というものを……」

ここに、工藤梓の物語が始まる……

第53話 謎の一室（後書き）

さて、いきなり半急展開の様相を呈しています。

感想にもいただいたのですが、ここ最近シリアスな展開が多くギャグが少なくなってますね……

この梓オリジナルもほとんどがシリアスで構成される予定なので、ギャグはまだ先になりそうですね。

あるいはいつそ、シリアスな梓の裏で琴美・奈津美とR18的なハプニングを繰り広げる明俊を書くのも一つの手か……？

第54話 Jealousy(前書き)

遅くなつてしまい申し訳ありません。

第54話 Jealousy

「そう、君もよく知っているだろう？ 『魔術』というものを……」
暗くてただっ広い謎の空間。

突如話しかけてきた謎の声の主のその言葉に、梓は思わず耳を疑った。

今、この学園都市で聞こえてはいけない単語が聞こえなかったか？

「……あなたが誰かなんて知らない。でも、今『魔術』とか言わなかった？」

そこで言葉を切った梓は、謎の声を聞き漏らすまいと息を殺す。

拳銃を握る右手に思わず力が入った。

謎の声はそんな梓の反応を楽しんでいるのかなんなのか、梓の言葉にしばらく答えなかった。

業を煮やした梓が声を張り上げようとしたとき、ようやく返事が返ってきた。

「うむ。確かに私は『魔術』と言った。決して君の聞き間違いではない」

声を上げようとしていた矢先の返答に出端を挫かれた梓であったが、何とか頭の中で状況を整理することを試みる。

「（やはり聞き間違いなんかじゃなかった……… いったいどういうこと？ この学園都市に魔術が存在して、あまつさえそれを私に授けるですって？ 疲労で私の頭がおかしくなっただって方が1万倍信憑性があるわね）」

そう思った梓の心境を見透かしているのか、謎の声は小さく笑って梓に話しかける。

「君が勘違いだと思うのは無理もないことだ。しかし本当なのだ。これからその証拠を見せよう」

その言葉と同時に、空間が光に満たされ梓は手で顔を覆った。

「目が慣れたら正面を見てみるといい」

その言葉の言うとおりに梓が少しして手をどけ正面を見てみると、そこには見たこともない装束が施されたテーブルが一つあった。

そのテーブルの両サイドにはどういった理屈なのか、青白い炎が1つずつ宙に浮かんでいて、より一層摩訶不思議な様相を呈していた。

「何なの、これ………ん？ テーブルの上に何かある」

意味不明なテーブルの装束や炎に気を取られていた梓であったが、ようやくテーブルがその本来の機能を果たしていることに気付いた。

いつでも能力を発動できるように意識しながらテーブルに近づくと、そこには水色の石が一つ置いてあった。

「これ……綺麗な石。あれ？ この形どこで……」

梓が注目したのはその石の形だった。

三日月に近い形だが、両端のうち片側は少し大きくなって小さな穴が一つ開いており、ひもが通されていた。

「これ……勾玉？」

梓が結論にたどりつくと、梓が答えを出すあいだ沈黙を守っていた謎の声が再び聞こえてきた。

「その通り。それは勾玉だ」

「勾玉……古代日本で使われていた装飾品よね？」

「そうだ。古くは縄文時代から存在していて、祭祀にも使われていたとかいないとか」

「胎児の形を模したからこの形をしているっていう説もあるって話だったわね……詳しくは知らないけど。でも、なんでこんなものがここに？」

「さっきも言っただろう？ 私は君に『魔術』を授けると」

そういえばそんな話だったな、と梓は思い出しながら言葉を紡ぐ。

「まさか、この勾玉に魔力が備わっていて、私が念じれば魔術が使えるようになる、とでも言いたいのかしら？」

状況から判断されうる最も正解に近い意見を出した梓に対し、謎の声はくつくつと笑った。

「正解だ……と言いたいところだが残念ながらそうではない。第一、その勾玉には魔力は備わっていない」

「じゃあ、どうしてこの石を私に渡すことが私に魔術を授けることになるのかしら？」

「その石には魔力は備わっていない。しかし、魔力を形を変えて実体化させることが出来るというのがその石の役割だ」

「へえ……じゃあ、その肝心の魔力つてのは結局どこに存在するのよ？ まさか、私から、なんて言うんじゃないでしょうね？」

「そのまさかだ」

「……冗談も休み休みにして欲しいわね」

ありえない、梓に限らず誰でもそう思う展開に梓は鼻で笑った。

「自分が何を言っているのかわかっているの？ 1万歩譲って、あなたが魔術師で、魔術でこの状況を作り出し私を幽閉したのだとしても、私を魔術師にさせることなんて不可能だわ。知らないのなら教えといてあげるけど、この学園都市に住んでる学生は全員能力開発つていうのを受けてる。その能力開発を受けた人間は魔術を扱うことができない……」

「そのことならちゃんと承知済みだ。その上で言っている」

「なんですって……?」

「もう一度言う。私はすべてを把握した上で君にこのようなことを言っているのだ」

その言葉に梓は返す言葉を無くした。

「……そう。なら、聞かせてもらえるかしら?私をこんなところに連れ込んだ理由を。もっと言えば、どうして私に魔術を授けようとしているのかを」

姿の見えない相手が自らをおもちゃにふざけているわけではない、そう思った梓は素直に相手の話を聞くことに決めた。

「うむ。その前に、君にどの程度の力が備わっているのか、それを確認してもらおう」

謎の声がそう言うと、テーブルに置かれた勾玉から青の光が発せられ、プロジェクターのように空間に長方形の枠を作り出した。

「何をしようっていうの?」

「今からここに映し出すのは、つい昨日の君の戦いの映像だ。垣根帝督とかいう男と戦っていたときのものだな」

「昨日の……? あら、盗撮は犯罪よ?」

「手厳しいな。だが、これは私が陰から覗いて得たものではない。説明するとまた長くなるので、今はとりあえず見てもらうことにし

「よう」

映像が映し出され、梓の意識もそちらに向いた。

ちょうど、垣根の背中に梓の放った氷の槍が当たってその勢いで垣根を地面に押さえつけているところであった。

「このシーンは覚えているだろうか？」

「ええ。でもこの後、無事だった垣根に氷を攻撃されて、槍の上に乗っていた私は地面に落ちて気を……」

「フフフ……そう、君の記憶はそこで途切れている。しかし、君はこの時点では気を失ってなどいなかったのだ」

「ちょっと待って。何を言っているのか知らないけど、私は確かに気を失っていたはず。その証拠に、私は常盤台の校庭で目をさまし、心理掌握にお兄ちゃんたちがA I Mバーストと戦っているのを聞いたわ」

「『この時点では』という私の言葉を忘れている。君が気を失った事実は確かだが、それは垣根帝督に攻撃されて地面に落ちたからではない。ま、この後の光景を見ればわかる」

謎の声がそう言うとして一時停止していた映像が再び動き始めた。

垣根に攻撃され、梓が立っていた先端部分が地面に落ちた。

その後のことを覚えていない梓は息をのんで注目した。

そして目撃する。背に幻想的なほどに美しい、透き通るような青色の翼を宿した自らの姿を。

「……………」

完全に言葉を失った梓を尻目に、謎の声は「美しい……………」と感嘆の声を漏らした。

そのうち、映像の中の梓は垣根に対して翼による攻撃を開始した。

本来なら未元物質の前にほとんどの攻撃は軽く防がれてしまう（レベル5第二位の明俊の攻撃すら防いでいたことを梓は鮮明に覚えている）のだが、映像の中の梓の攻撃は垣根を圧倒していた。

見る見るうちに垣根の顔には焦りが浮かび、1撃1撃は完全に垣根を押し切っていた。

一方、垣根に手痛い攻撃を連続して与えている梓の顔には表情がない。

まるで催眠術にかかり、誰かに操られているみたいだ、梓はそう思った。

「……………これが、私？」

「そう、これが君の真の実力だ。君はこの学園都市が定めた序列、レベル5第七位などという地位におさまるような人間ではないのだよ」

「そんな……………」

梓は膝の力が抜け、ペタンと床に座り込んでしまった。

「この後君は確かに気を失ってしまふ。その原因はこの力に、君の脳の処理が追いつかなかつたから……という科学的な説明も出来なくもないが、要は力が暴走しすぎたのだ。まあ、君の兄の未元物質の解析が間に合ったおかげで何事もなく垣根を退けることが出来たわけだが」

「……力の、暴走？ さっきの攻撃は、能力の暴走なの？」

「違う。君の今言った『能力』というのが『学生が学園都市から与えられる』ものを指しているのならな」

「……じゃあ、さっきの青い翼は……？」

「あれこそが君に備わっている魔力そのものなのだよ。あの青い翼は、いわば魔力の結晶のようなものだ。だからこそ、あの垣根の持つ未元物質に対抗することが出来たのだ」

「……………」

一言も発することの出来ない梓ではあるが、謎の声の言っていることが理解できていないわけではない。

「（魔術は学園都市には存在しないもの。いくら垣根が未元物質で防ごうとしても、既存の物理法則にまったく当てはまらない魔術攻撃なら確かに攻撃は通るだろう）」

しかしそれは同時に、梓に魔力が宿っていることを認めることに

もなる。

「さて、これで分かってくれたかな？君が魔力を持っているということ。」

「……どうして？」

「ん？」

「どうして、私に魔力なんてものが宿っているの？」

そう言った梓の声は震えていた。

「……怖いのか？」

「『怖いのか？』ですって？ 怖いに決まってるじゃない！！自分にそんな力が、それもあの垣根を押しつけることが出来るような力があるなんて分かったら誰だって怖がるに決まってる！！」

未だ床に座り込んだままの梓であったが、未知の力に対する恐怖がそうさせるのか、普段では出さないような大声を出して叫んだ。

「ただでさえ、私には学園都市で七番目に強い力が与えられているのよ！！？その上また強大な力だなんて……！！」

梓の叫びを黙って聞いていた謎の声の主は、そこで梓の叫びが途切れると諭すように語りかけた。

「いつか人を傷つけてしまう、そう言いたいのだろうか？ そう、その気持ちこそ私が君に魔術を授けようと思った理由でもあるのだ」

「……どういうこと？」

「君は力の怖さを知っている、ということだ。今まで君は、AIMバーストにこそ全力で能力を使いはしたが、人に対しては力を抑えている」

「当たり前でしょう？ レベル5が自重せずに能力を使ったら、人なんてあっという間に殺せてしまうのだから」

「その当たり前のことに気付いている人間はそう多くはないぞ？ いや、多くないというのは語弊があるかもしれんが、それを実際に能力を使っているときにチラとでも考えている人間はそうはいまい。君もジャッジメントとして、特にレベルアップイベントのときに強く感じたはずだ。一時的に能力を使いたくなり、結果興奮を抑えきれなくなり人を傷つけてしまう、そんな光景を見てきたらどう？」

「……それは一部の人間だけよ」

「そう言えるのは、君の周囲の人間が、たまたま力の恐怖を知っている人間で構成されているだけの話だ。世間一般に言えることではない」

「……………」

謎の声の言葉に何も言えなくなる梓。

「……………」しかし、だ。その君もまた例外ではない。私には分かっている。君が、兄である工藤明俊に少なからず嫉妬心を抱いているのを」

「……!？」

その言葉に梓は目を見開いた。

「君の心の中にはこの学園都市に来て以来、兄に対する嫉妬心が芽生え始めた。学園都市に来るまでは微塵も存在しなかったものだ。自分でも分かっているのだろうか？」

「……」

梓は口を真一文字にキュツと結んだまま何も答えなかったが、やがて、ふうつとため息をついて口を開いた。

「……ええ、あなたの言うとおり、私は学園都市に来てからお兄ちゃんに少なからず嫉妬心を抱いてきたわ」

「原因は、自分より圧倒的に強力な兄の能力だな？」

「学園都市に来るまでは、何をするにもお兄ちゃんと一緒だった。同じ家、同じ学校、同じ学年。二卵性で遺伝子的にはただの兄妹と同じなんだけど、私とお兄ちゃんは一心同体な生活を送ってきた。でも、学園都市に来て能力を得た瞬間から私とお兄ちゃんの間には『順位』という大きくて分厚い壁ができた」

梓の顔には自虐的な笑みさえ浮かんでいた。

「気にしないつもりだったんだけど、やっぱり気になって仕方がなかった。お兄ちゃんはレベル5にふさわしい特異で強大な力を持っている。それに比べて私はどう？ 冷氣系能力者の最高峰って称号はついてるけど、ただそれだけ。御坂さんも発電系能力者最高峰だ

けど、彼女には必殺のレールガンがある。けど私にはそんな切り札的なものは何一つない。そう考えたとき、我ながらオカルト的だとは思ったけど神を恨んだわ。『どうして、いつも一緒だった私とお兄ちゃんとのあいだにこんなに大きな壁を作ったのか』ってね」

「そして君の心の中には、力に対する渴望が生まれた。1度得た能力は変わることはなく、2つ以上の能力を得ることもできない。自らの能力の伸びしろなんてほとんどないと分かっていたいながら」

「お兄ちゃんとの差を埋めるには、私が強くなるしかない。無理だと分かっただけでも、そういう考えは頭を離れなかつたわ。奈津美の『他人の能力をコピーする能力』ってのを聞いたときは、正直羨ましかつたなあ……」

「……やはり、魔術を授ける相手は君以外ないようだ。まあ、元々魔力を持っている人間がこの学園都市には数えるほどしかおらず、その中でも君以外は誰一人適任ではないのだが」

「今の私の話を聞いていたでしょうし、あなたも重々分かっているでしょう？ 私はこんなくだらない理由で力を欲しちゃうような人間なの。そんな人間に魔術を授けてどうするつもり？」

「魔術というのは本来、力のない人間が力ある人間に対抗するために誕生したものだ。その趣旨でいえば、私が君に魔術を授けることはなんらおかしいことではない。……それに、君には『力の意味』をきちんと理解してもらいたいのだ」

「……『力の意味』？」

「そうだ。これは君のこれからの未来、運命を導く大切なものなの

だ。『力の意味』、それは……」

ズズズッ！！

まさに話の腰を折るように、突如地響きのようなものが響き渡った。

「何！？」

「くっ、やはり……！！」

「やはり？ 何か知っているの！？」

「実はな、この勾玉がなぜこの学園都市にあるのか、という話とも直結するのだが……」

揺れが治まり、しゃがみこんでいた梓が立ち上がると謎の音がいくらか苛立ちを増した声で話を続けた。

「この勾玉はな、これ以外にもいくつか学園都市に存在するのだが……それらすべてが、ある役割を果たしている」

「その、ある役割ってというのは？」

「……魔物の封印だ」

「魔物……ですって？　また随分とRPGゲームチックになってきたわね」

「その昔、日本に訪れた魔術師がこの地に巢食っていたある魔物をこの勾玉を用いて封印したのだ」

「……まさか、この揺れはその魔物の封印が解けたから起きたって言うんじゃないでしょうね？」

「本日2回目だな、そのまさかだ」

「……何なのよ、今日は」

梓の長い1日は、まだ始まったばかりである……

第54話 Jealousy(後書き)

梓の言うとおり、RPGゲーム的な様相を呈してきました。

なお、今回のようにやたら更新が遅いときは、十中八九「とある少女と紋章術師」をどこかで更新しているはずですので、あちらの方もよろしくお願いいたします。

第55話 Uroboros (前書き)

今回は短めです。リアルで執筆している時間がなかなか確保できないのがここ最近更新が遅れ気味な原因です。申し訳ありません。

第55話 Uroboros

「この勾玉はな、これ以外にもいくつか学園都市に存在するのだが……それらすべてが、ある役割を果たしている」

「その、ある役割ってというのは？」

「……魔物の封印だ」

「魔物……ですって？ また随分とRPGゲームチックになってきたわね」

「その昔、日本に訪れた魔術師がこの地に巢食っていたある魔物をこの勾玉を用いて封印したのだ」

「……まさか、この揺れはその魔物の封印が解けたから起きたって言うんじゃないでしょうね？」

「本日2回目だな、そのまさかだ」

「……何なのよ、今日は」

あまりにも色んなことが起きすぎている9月3日、すでに工藤梓の頭はパンク寸前であった。

突如柵川中学に現れた、梓にしか存在を感知できない部屋。

そこで告げられた、自らに宿る能力とは別の力。

そして、魔物。

「やはり……昨日の騒ぎが原因か」

「昨日の……？ どういうこと？」

「うむ。この学園都市にはこれと同じような勾玉が他にもあることはいったな？ そして、それが魔物を封印していたことも」

「ええ。問題は、どうしてその封印が解けちゃったのかってことなんだけど」

「原因は……これだ」

謎の音がそう言うと、再び勾玉から青い光が発せられて映像が映し出された。

そこには、昨日梓たちと激戦を繰り広げたAIMバーストと風斬氷華の姿が映し出されていた。

「AIMバーストと風斬さん……？」

「そつだ。この両者が似たような性質を持っている……というのはどういうことか分かるかな？」

「AIMバーストと風斬さんの似た性質……？」

梓はAIMバーストと風斬の生い立ちを比較する。

「（奈津美の話だと、昨日戦ったAIMバーストは奈津美のAIM

拡散力場に関する性質を応用して作られたもので、風斬さんは学園都市の学生のAIM拡散力場の集合体……そう言われれば、確かに似ている)」

さらに、風斬氷華に関することを梓は思い出す。

「（9月30日、風斬さんがヒューズ「カザキリ」として目覚めたとき、前方のヴェントは『界』に与えられた術的圧迫でダメージを受けた……なるほど、そういうことね）」

「分かったかな？」

「ええ。昨日、AIMバーストと風斬さんが同時に出現したことで学園都市全体に術的圧力が加わった。それによって、その魔物を封印している魔術結界もダメージを受けてしまった……そういうことでしょ？」

「その通りだ。今の話とは関係ないが、君が昨日気絶してしまったのも大部分は脳の処理が追いつかなかったからだろうが、一部にはその術的圧迫が影響していると思われる」

「この勾玉はもう壊れてしまっているの？」

「いや、勾玉同士で構築されていた魔術結界は破壊されてしまったが勾玉自体が使い物にならなくなってしまったわけではない。ちゃんと魔力を具現化する機構は残っている」

「そう……じゃあ、その魔物をどうにかしてもう1回封印しないといけないってことね。ところで、その魔物ってというのは？」

「……ウロボロス、こう呼ぶのがふさわしいだろう」

「ウロボロス……自らの尾を噛んで環の形になったヘビや竜を表したものよね？ 大概はヘビで捉えることが多いけど、ヘビは脱皮して大きくなる。また、長期間飢餓状態にあっても生きながらえるさまから『不老不死』の象徴とされる。そのヘビが自らの尾を食べることから、始まりも終わりも無い完全なものの象徴的意味がある」

「詳しいじゃないか」

「この手の名前は小説やゲームにちよくちよく出てくるから、お兄ちゃんと調べたことがあるのよ」

「なるほどな。他にも、循環性や永続性、無限性など……まあ、多くの文化や宗教で用いられるため持つ意味は多い。そして、なぜコイツが倒されず封印という形で隠されていたのかも、ウロボロスという言葉の意味そのままの性質を持っているからだ」

「言葉の意味そのままの性質……」

それが何を意味するか分からない梓ではなかった。

「まさか、不死身だっというの!？」

「その通り。奴にいくら攻撃を仕掛けようとダメージを負うことはない。そればかりか、攻撃を受けるたびに攻撃の威力が増すという」

「封印っていうのも納得ね……どうでもいいことだけど、そのウロボスを封印した魔術師ってのはさぞ強力な魔術師だったんでしょうね。そんな化け物を封印できるくらいなんだから……」

「それはそうだろうな。何を隠そう、ウロボロスを封印したのはあのアレイスターだからだ」

「ふーん、確かに彼なら出来そうね……って、アレイスターですって!?」

事もなげに納得しかけた梓であったが、出てきた魔術師の名前に驚かすにはいられなかった。

「あ、アレイスターって、あの『アレイスター』クロウリー』のとよね!?!」

「何を言っているのだ梓よ。他に誰がいる?」

「いや、誰もいないでしょうけど……っていうことは、逆説的に考えれば、あのアレイスターですら倒すこと叶わなかったってことでしょ!?!」

「そういう認識で間違いないだろう。ウロボロスが封印されたのはまさにアレイスターがこの学園都市にやってきた時だ。ここに学園都市を創ろうとしたときに障害になったのだが、当時の彼は満身創痍の体で日本に逃げてきた身、とてもウロボロスと対峙できるほどの力はなかった。だから封印という選択肢を選んだのだ」

「じゃあ、彼の力が健在ならウロボロスも倒せるかもしれない?」

「健在のころのアレイスターに不可能など無きに等しかっただろう。恐らくウロボロスも例外ではない。まあ、仮定の話をしても仕方がない、この話はここで打ち切ることにしよう」

「そうね。で、どうすればいいの？　このままだと学園都市が危ないんでしょ？」

梓の質問に謎の声は「ああ」、とやや暗めに返事をした。

「でも、よく考えたらこの街は昔と違って能力者であふれているよ？　満身創痍のアレイスター一人で封印した昔とは違って戦力も十分にある。封印なんてややこしいことしないで、能力者の総攻撃を食らったらいくら不死身でも倒せるんじゃない……」

「いや、魔術界には過去に数例ウロボロスとの対峙した記録があるのだが、そのすべてにおいてダメージを与えること叶っていない。君の言うとおり、学園都市の学生の総攻撃ならダメージを与えられるかもしれないが、それは試してみないと分からないことだ。そのような不確実なことに、勝手に学園都市の学生の命を懸ける権利は君にはないだろう？」

「っ、確かにそうね……ジャッジメントとしても、一般人を危険に巻き込むような発言はしちゃいけないわね。じゃあ、私にできることを教えてちょうだい」

「うむ。君にはいったん学園都市に帰ってもらい、他に眠る勾玉をすべて回収してもらおう。その続きの説明は君が勾玉をすべて集め終わったらするとしてよ」

「分かった。じゃあ、さっそくだけ私を学園都市に戻してもらえら？」

梓がそう言うや否や、目の前にフツと扉が出現した。

「その扉の向こうは柵川中学の屋上につながっている。さて、急かすようです。申し訳ないが、封印の力が徐々に弱まっている。急ごう」

その言葉に梓は頷くと、ドアノブを回して扉を開ける。

差し込んできた太陽の光に思わず目を細めながら、梓は元の世界へと戻っていった。

窓のないビル、というものが学園都市には存在する。

普通の人が聞いたなら「どうやってそんなところに入るのだろうか」と訝しむかもしれないが、学園都市ではそんな心配をする者は誰もいない。

テレポーターという、三次元的制約を無視して点と点を移動できる能力者がいれば入ることが出来るからだ。

もっとも、その肝心のテレポーターが学園都市には数えるほどしかないのだが。

そんなこんなで、結局世間一般ではその存在すら記憶から忘れられがちな窓のないビルだが、中に住まう人物は何を隠そう学園都市の最高権力者である。

その人物の名前はアレイスター「クロウリー」。

かつて魔術界にその名を轟かせた大魔術師である。

彼が活躍したのは70年程度だが、その70年で数千年を超える魔術界の歴史は塗り替えられたとも言われている。

しかし、あるうことか彼は魔術を捨てて突如科学の世界に走ってしまう。

そのために魔術師討伐組織に追われて致命傷を負ってしまったのだが、冥土帰しに助けられて日本に渡り現在に至っている。

さて、そのアレイスターの目の前にはスクリーンのような枠が浮かび上がっていて、そこには柵川中学の屋上から校内へと戻っていく工藤梓の姿が映し出されていた。

「（ふむ……ウロボロス、か。随分と昔に封印したこともあってすっかり忘れていた。昔の満身創痍だった私が行使しうる強力な封印魔術を施したつもりだったのだが……やはり、AIMバーストとヒューズ「カザキリの片鱗を見せた風斬氷華の生み出した負荷には耐えられなかったか）」

そんなことを考えているアレイスターではあるが、その表情に焦りといったものはない。

「アレイスター」

とそこへ現れたのは、背の高い金髪の男。

「土御門か。どうだった？ 1日休暇の感想は？」

感情のこもっていないアレイスターの言葉に、土御門と呼ばれた男は「ふん」と鼻で笑った。

「何が1日休暇だ。お前が『死にたくなかったら9月2日は学園都市の外にいたほうがいい』というからその通りを試してみたら、その1日の間に面白いことになっていたそうじゃないか」

「直接見ていたかったか？ 楽しいショーとは引き換えに命を失っていただろうが」

「レベル0の人間にのみ作用し、能力を無理やり引き出させて暴走状態にさせるデバイス……俺が昨日ここにいたら、確かに暴走して肉塊になっていただろう。俺も学園都市に入るためにレベル0の能力を手に入れたからな。っと、それより……」

土御門はアレイスターが逆さまになっているピーカーに1歩近づいた。

「気になっていることが一つある。今日学園都市に入ってから気付いたんだが、普段とは違う魔力の力を感じている。これは何だ？」

「やはり気付いていたか。その正体は、この学園都市に封印されていたウロボロスの放つものだ」

「なにっ！？ ウロボロスだと！？ なぜそんな化け物がこの学園都市にいる！！」

「昨日の騒動で封印の一部が損なわれてしまったのだよ。正体を現すのも時間の問題だろうな」

「アレイスター、お前、ウロボロスがどんな存在か知らないわけではないだろう。よくそんなに平然としていられるな。……それとも、これも貴様のプランとやらの一部なのか？」

「どうかな？ 私が平然としているのは、そのウロボロスを葬ってくれる人物がこの学園都市にいるからだ」

「幻想殺しか」

「さあな。興味があるなら調べてみたらどうだ？」

そう言って会話を曖昧に終わらせたアレイスターは、フツと小さく笑った。

「（科学の力を身につけながら、その身に魔力を宿す異世界の少女。なぜ自分たち双子がこの世界に迷い込んだのかも知らず、己に備わる力の強大さに恐れを抱きながらも兄へと嫉妬から魔術に手を伸ばしかけている。さて、この双子が今後のプランにどう影響してくるのか、それともしてこないのか、この辺でそろそろ見極めさせてもらおう）」

梓を映し出していた画面の横に、ウロボロスによって引き起こされた地響きが地震として感知されたことを知らせる新たな画面が表示

示されるのを見ながら、アレイスターは再びフツと小さく笑った。

第55話 Urboros（後書き）

時間がなく、書くのでさえ遅れがちになっている最近、無性に明俊や梓たちを絵に描いてみたいと思うようになってしまった。みんなです。

自分は理系で絵の才能なんて皆無なんです……（絵なんて中学校でやった美術の授業が最後です。しかも成績が5段階評価で3つてw）

小説が完結するまでには1度は絵にしてみたいという100%可能な妄想を繰り返しながら、執筆頑張りたいと思います。

万が一にもいないとは思いますが、もし「明俊たちを描いてみたい！」あるいは「もう描いてしまった！」という超絶稀有な方がいらっしやいましたらご一報下さい。

挿話 琴美の誘惑（前書き）

以前要望がありました、明俊×奈津美ではありませんが、ついに書いてしまった……

エロ注意ですので、抵抗の無い方は速やかにブラウザの戻るを押してください。（ストーリーには、前半部を除いてほとんど関係してきません。抵抗の無い方は、前半部の明俊と冥土帰しの会話だけ読んで戻るを押すのが最適です）

挿話 琴美の誘惑

さて、梓が謎の空間から柵川中学へと帰還し、新たな勾玉の眠る場所へと移動を開始したそのころ。

工藤明俊は第七学区総合医療センターの一室で冥土帰しの検査を受けていた。

「ふむ……」

冥土帰しは様々な書類を交互にながめながら、時折明俊の方をチラッと見る、そんな動作を繰り返していた。

「あの……先生？」

自分にどこか悪いところでもあるのだろうか、そんな不安に駆られた明俊は沈黙を破って冥土帰しに声をかけた。

「ん？ ああ、申し訳ない。なにぶん、昨日の騒ぎで僕も一睡もできてなくてね？ 診断ミスを犯さないよう慎重に確認していたところだ」

「そ、そうですね。すみません、僕の分負担を増やしてしまった……」

「いや、君が誤ることじゃない。……さて、君の診断結果だが」

そこでいったん言葉を切ると、冥土帰しはジッと明俊を見つめる。

「は、はい」

明俊も真剣な顔つきで冥土帰しを見つめなおす。

「……検査の結果、君の体に現在のところ大きな以上はない。安心していい」

「そうですか……良かったー」

冥土帰しの言葉に安堵の笑みがこぼれる明俊。

「もし何か異常があったら、梓や琴美たちに心配かけますからね。ホント、何もなくて良かったです」

「うむ。僕としても、患者である君に特段の異常がなかったことはとても喜ばしいことなんだね？ ……だが、一つ忠告がある」

「忠告……ですか？」

「ああ。この忠告に関しては僕だけでなく奈津美君からも同じ意見が出ている。よく心に留めてほしい」

「奈津美からも……そんな忠告ですか？」

「うむ。能力の使用についてだが、当面のあいだは使用を極力控えてほしい。さらに、一定期間が経った後でも、長時間にわたって過度に能力を使用することはできるだけ控えてほしい」

「能力の使用を……控える？」

「そうだ。今回君がAIMバーストと戦っている最中に突如高熱を出した件についてだが、あれは君が事前に頭を打っていてその影響が戦闘中に出た、というのは確かに一理あるがそれがすべてではない」

「どういふことですか？」

「君の反物質を操る、という能力はとてつもなく強力だ。奈津美君から報告は受けているが、第三位である未元物質データマターと互角に渡り合ったそうじゃないか」

「ええ、まあ。ただ単に未元物質を解析して、既存の物理法則に則るように再構成しただけですけど」

「並の能力者にできることじゃない。しかし、君の第二位たる力を存分に発揮するには、脳内ですさまじい量の演算をこなさなければならぬ。そのあまりにも膨大な演算のせいで、君の脳に少なからず負荷がかかっているのだ」

「そうですか……」

思わぬ忠告に表情を少し硬くする明俊。

「奈津美君の報告によると、君は反物質の翼を生やして第三位と戦ったらしいね？ 恐らく、翼を生やすという行為は君の能力使用の中でも一番多くの演算を使うものだろう。翼さえ生やさなければ問題は無いと思うが、念のためだ。何か起きて、妹さんや幼馴染、そして想い人を悲しませたくはないだろう？」

「……そうですね。分かりました」

「うむ。とりあえず君に言いたいことはそれだけだ。病室に戻って
くれて構わない」

少しして、明俊の病室。

明俊はベッドの背もたれの部分を少し起こして、ベッドに寝ながら
窓の外を見ていた。

病院の外では、アンチスキルの車両がせわしなく道路を行ったり
来たりしていた。

「（昨日の騒ぎで色々その後処理が大変なんだろうな……）」

信号機などところどころ壊れていて、アンチスキルが手旗信号
で交通整理を行っているところもあった。

「（こりゃ想像以上に酷いな……多分、学校も後始末で1日が終わ
るんだろうな。……こういうときに限って面倒くさいことが起こる
んだよな。梓がそれに巻き込まれなきゃ良いけど）」

明俊がそう思っているときにはすでに、かなり面倒な部類の厄介こ

とに梓が巻き込まれていることを当然ながら彼は知らない。

コンコンッ

明俊の病室に、ドアをノックする音が響いた。

「……………？ 琴美か奈津美だろうけど……………」はい、どうぞー」

明俊の返事を受けて病室のドアがゆっくりと開かれ、ヒョイっと顔がのぞいた。

「お邪魔してもよろしいでしょうか？ とミサカは恐る恐る確認を取ります」

「おお、やっぱり琴美だったか。ああ、俺一人で暇を持て余していたところだ。琴美が来てくれるのはむしろ大歓迎だな」

「では、失礼します、とミサカは礼儀正しく入室します」

常盤台の制服を身にまとった琴美は、なぜかドアを閉じる前に通路を見渡してからサッとドアを閉じた。

「……………？ 何尾行を気にしてる敵組織の人間みたいなことやってんだ？」

「い、いえ、せっかくあなたと二人っきりになれるチャンスなので、すから、誰にも邪魔されたくないと思ったのです、とミサカは秘め

たる乙女心を吐露します」

「いや、誰も勝手に人の病室に入ってきたきはしないだろ……見知らぬ人がいきなり入ってきたらレベル5の俺でもビクリするわ。まあそれはともかく、琴美が会いに来てくれたのは嬉しい限りだよ。なかなか二人つきりになれる機会がなかったからな」

「あなたがデートに誘ってくれば良いだけの話なのでは？ とミサカは遠まわしに催促します」

「それはそうなんだけどさ……琴美と出会ってからこっち、あまり暇がなかったからさ。今度大覇星祭っていう学園都市全体でやる体育祭みたいなもんがあるんだけど、そんなときにナイトパレードやら花火打ち上げやら、デートにもってこいのイベントがあるんだ。その……どうかな？」

面と向かってデートの申し込みなど今までのことのない明俊の語尾は徐々にしぼんでいったが、琴美の耳にはしっかりと届いていた。

「……………」

届いてはいたのだが、なかなか返事を返さない琴美。

「……………（えっ、俺何かミスった？）」

返ってこない返答に不安の色を隠せない明俊。

30秒か1分か、明俊には永遠とも思えるような沈黙が病室を支配した後、突如琴美が動いた。

入口近くに立っていた琴美はまっすぐに明俊のベッドの近くまで来ると、靴を脱いでベッドに上ってきた。

「お、おい、琴美!？」

突然の意味不明な行動に明俊が驚きの声を上げるが、それを聞いているのかいないのか、琴美は明俊の顔にズイッと迫った。

「こ、琴美、その……顔が近いんだけど……」

「あなたのデートの誘いを、ミサカが断るとでも思っているのですか？」

「え？ そ、それって、okってことだよな？」

「当然です、とミサカは断言します」

「そうだよな……じゃあ、さっきの沈黙は一体？」

「……考えたのです、色々」

「考えた？ 何を？」

「確かにデートの誘いは嬉しかったですし、断るつもりなど毛頭ありません。ですが、大覇星祭まであなたがミサカのことを見続けてくれるという保証はありません」

「は？ それって、大覇星祭までのあいだに、俺が琴美以外の誰かを好きになるっていうことか？ 大丈夫だって、そんなことないか

ら

「ミサカもそう信じています。しかし、ミサカはまだ完全にあなたのものになつたわけではありません」

「……？ お互いにお互いのことを好きになつた、それだけじゃダメってことか？」

「ダメ、というわけではありません。ですが、完全でもありません、とミサカは補足します」

そう言うと、琴美は明俊の顔を両手で包むように触ると、明俊の唇に自らの唇を重ねた。

「んっ、んん……」

まだ数えるほどしか琴美をキスをしたことのない明俊であったが、今日の琴美はどことなくいつもと違うということに気付いた。

キスの最中に目を開けるなんて無粋だと思いつつも目を開けてみると、目をつむっている琴美の顔はわずかに赤みがさしていた。

漏れてくる吐息もどことなく普段より大きく、何より艶めかしい。

「（琴美のやつ、どこか変だな……とにかく、引き離さないことには……）」

そう考えた明俊は、上体を起こすためにベッドについていた両手を動かそうとした……その時、異変に気付いた。

「（！？）両手が動かない！？）」

両手はまるでベッドに縫い付けられてしまったかのようにピクリとも動かなかった。

それだけではない、なんと両足も動かせなくなっていたのだ。

「んっ！？ ぷはっ！」

何とか首だけ動かして琴美のキスから解放された明俊だったが、それでも両手・両足は動かせないままだった。

「どうかしたのですか？ とミサカはあなたに尋ねます」

「どうしたもこうしたも、手と足が急に動かなくなっ……！」

「ああ、それならミサカのせいです」

「なん……だと！？」

「人間が体を動かすには、脳から指令が出て各筋肉に微弱な電気信号としてそれが伝達されることが必要です。ですが、ミサカの電気系能力者の力を使えば、その微弱な電気信号の流れを阻害して体を動かせなくすることも可能なのです、とミサカはネタバレします」

「ど、どうしてこんなことを……！」

琴美の行動に合点のいつていない明俊は琴美に更なる説明を求めようとしますが、それは次の琴美の行動によって阻害されてしまう。

「んんっ!？」

琴美は明俊の顔から手を放すと、今度は明俊の顔を自らの胸にギョツと抱きかかえるようにしたのだ。

嫌でも、明俊の顔に琴美の柔らかな感触が伝わってくる。

琴美の心臓の音もハッキリと聞こえ、どうやらそれは早鐘を打っているようだ。

「ミサカが完全にあなたのものになるには、まだしていないことがあります」

琴美は明俊を自らの胸に抱きかかえたまま、明俊の耳元でそっと囁いた。

「それは……ミサカ自身を、あなたに捧げることです」

「っ!?!？」

そこまで言うと琴美は、ようやく明俊を解放した……かと思うと、今度は明俊の着ているパジャマのような病院服のボタンを一つずつ外し始めた。

「こ、琴美!？ それ以上は……」

何とか琴美を止めようとする明俊ではあるが、両手・両足を動かさないのではどうしようもない。

なすすべなく、明俊の服がはだけて胸部があらわになる。

琴美はあらわになつた明俊の、筋肉質でありながらどこか子供っぽさを残している中学生らしい胸板に手をはわせると、顔を近づけて舌でチロチロと舐めはじめた。

「や、やめ……！ うくっ!?」

与えられる初めての刺激に何とか抵抗を見せようとする明俊だが、琴美の舌の動きにあわせて体がピクン、と反応してしまう。

「ん……うふ、ん……」

反応を見せる明俊の様子を上目使いで見っていた琴美は、舌をはわせ続けながらサマーセーターを脱ぎ始めた。

脱いだサマーセーターをベッドの近くに置いてあつた椅子の上に置くと、ブラウスのボタンを外し始める。

「ん、こと……っ!?」

必死に止めようとする明俊だが、抵抗むなく琴美のブラウスのボタンはすべて外され、奥から水色の下着がのぞいた。

大きくなく、どちらかという慎ましいという表現が正しい琴美の胸を覆う水色の下着は、明俊を黙らせるには十分な破壊力を持っていた。

明俊が抵抗することを放棄したことを確認した琴美は、ギョツと明俊に抱きついた。

明俊の胸板に琴美の胸が押し付けられ、ギョムっと形を変えた胸がその感触を明俊に伝える。

とその時、明俊は自分の手足がいつの間にか動かせるようになってることに気付いた。

「（琴美のやつ、能力使用に意識が行っていない……）」

「……ミサカを、あなたのものにして下さい」

「っ……！」

その言葉に、明俊は弾かれるように動いた。

動かせるようになった両手を琴美の両肩に乗せると、グイッと体を反転させて琴美をベッドに押し倒した。

「……ここまでされて、そんなこと言われて、もう我慢できないからな？」

明俊の最終確認とも取れる言葉に、琴美は迷わずコクツとうなづいた。

それを見た明俊は、左手を琴美の頭の下に差し入れると、琴美の唇を奪うと同時に右手を水色の下着に触れさせた。

「んっ！ あ、はあ、んんっ………」

明俊の指が動くたびに、琴美の口から艶めかしい声が漏れて明俊の興奮を増幅させる。

もうここまで来ると、本人たちの意思で止めることは不可能である。

明俊はいったん右手の動きを止めると、琴美の体の下に差し入れて下着のホックに手をかけた。

当然今まで触ったこともないために、もたつかず外せるか不安だった明俊だが、2・3度いじるとホックが外れたのが分かりその心配は杞憂に終わった。

右手を琴美の体の下から抜くと、ホックの外れた下着をスルツと琴美の体から外した。

あらわになつた乳房を見て、思わず明俊の目が細まった。

窓から差し込む太陽光を受けて光り輝く琴美の格好は、とても扇情的だった。

明俊は、琴美の右胸の先端を口に含みながら右手で改めて左胸に触れる。

「あつ！ んあ、んんん！！」

何とか声を殺そうとする琴美だが、両胸に与えられる刺激はそんな琴美の抵抗をあつさりと打ち砕く。

明俊の舌が琴美の先端の膨らみを転がすたびに、右手が胸の形を変形させるたびに、琴美は胸を明俊の顔に押し付けるように背を曲げ、首筋をピクン、ピクンと震えさせる。

「（そろそろ……いいか？）」

そして、明俊の左手が琴美のなだらかな腹部を滑り、常盤台の制服のスカートの中へと伸びていった

挿話 琴美の誘惑（後書き）

ガイドラインを何度も読み返し、R15の範囲で書けるだけ書いてみました。

が、もし規定に反している等の意見が多数寄せられた場合には即刻削除します。

この先は……ノーコメント（ry

さて、今回の話とはまったく関係ありませんが、いつのまにか心理掌握の姿や詳細が公式になってるじゃないですか！

俺が心理掌握書く前に出てくれよ！ 外見に関してはさして書かなかったけど、口調とか今更どうしろって言うんだよ公式くうううううううん！？

……まあ、単行本でしか超電磁砲読んでない俺にも非はあるわけですが。

どうすっかなあ……

第56話 Index・Librorum・Prohibitorum(前書き)

魔術絡みのお話で(しかも学園都市内)、今話のサブタイのお人が登場しないわけにはいかないでしょう。

工藤梓は屋上から通じる階段を下りると、自らの教室である2年1組にやってきた。

中をのぞくと、箒や塵取りでふぎける男子を女子が注意しながら掃除を進めるといふ、なんとも中学校にありがちな光景が繰り広げられていた。

「あ、梓ちゃん！」

入口の近くを箒で掃除していた女子生徒の一人が梓に気付いて声をかけてきた。

「もう理科室前廊下の掃除終わったの？　はやーい！」

「あ、ううん、実はお願いがあつて戻つて来たんだけど……」

「お願い？」

「うん。実はね、ちょっとジャツジメントの集合がかつちやつて……私の代わりに誰か一人、理科室前の掃除をお願いできないかなつて」

その言葉に反応したのは、あろうことが今までふざけていた男子たちであった。

「よし梓、その仕事、ぜひ俺にやらせてくれ！」

「はあ？ さつきまで箒で遊んでたお前に任せるわけにはいかねえな！ 梓様、どうか一つここは私めのお任せを……」

「てめえだって塵取りで野球とか意味分かんねえことやってたじゃねえか！！ おとなしくゴミでも拾ってる！」

「塵取りの方が箒より打ちやすいから塵取りで打ってただけ……っ
てお前が言っな！」

「あーもう！ 男子どもうるさい！ 普段真面目に掃除なんかしないアンタたちが我先に掃除を任せられようなんて、梓ちゃんに気に入られたいってという目的が見え見えよ！」

「そーよそーよ！ それにね、アンタたちが梓ちゃんに気に入られようとするならまずは明俊君を説得することね！」

男子たちの魂胆を速攻で見破った女子たちの前に、男子たちのもくろみは脆くも崩れ去ったのであった。

「……というわけで、こんな使えない男子じゃなくて私が行くわ。梓ちゃんは安心してジャツジメントのお仕事してきてね」

「あ、う、うん。ありがとう」

最初に梓に気付いた女子生徒が、「大変だけど、頑張れレベル5！」と梓に応援メッセージを残しながら廊下を駆けていくのを梓は見守ると、もう1度教室に顔をのぞかせて「行ってきます」とクラスメートたちに声をかけて自らも教室を後にした。

「さて、と……」

柵川中学の校門を出た梓は、ポケットにしまっていた水色の勾玉を取り出した。

太陽の光を受けた勾玉は先ほど見た時より一層綺麗に見え、梓は思わず見とれる。

「澄んだ綺麗な色……でも、これを使って魔術を行使できる……」

『そうだ』

「うわっ！！」

突如脳内に響き渡った声に、梓は思わず大声をあげる。

『何だ梓よ、ひとりごとか？ 現代の若者は悩みが多いと聞くがまさか、路上でいきなり奇声を発するほどだったとは……』

「あなたのせいでしょうか！ まったく、あの空間以外でも私と会話できるのならそう言ってよ……」

『ふむ、その点については私の説明不足だったようだ。ああ、付け加えておくと、私と会話するときは声に出す必要はないぞ。心の中で話しかけてくれればそれでいい』

「（……？　こんな感じかしら？）」

『感度良好だ』

「（確かにこれなら、私がブツブツ独り言をしゃべることで周りから変な視線で見られることはなさそうね。だけど、悩み多き年頃の乙女の心の声が筒抜けになるのは良い感じがしないわね……）」

『もし私に聞かれたくないことを考えるときは、一言私に告げてくれ。君の意識から離れていよう。特に、自らを自らで慰めるときなど……』

「（昼間つから下ネタ！？　第一、そんなことしないわよ！）」

『そうなのかな？　我慢はしなくてよいのだぞ？』

「（我慢なんてしなくても、元からしないわよそんなこと……　私が男の子だっていうんならそのからかいもまだ分かるけど）」

『この年頃の男子はあらゆる意味で恐ろしいからな……（中二病的な意味でも）。まあそれはさておき、今後についてだが』

「（そうそう、他にも何個か同じような勾玉があるんでしょ？　その場所、教えてよ）」

『うむ。梓よ、地図のようなものを持っているか？』

「（地図？　携帯端末の電子マップでも大丈夫かしら？　これならGPSと連動してるから、私の動きにあわせて画面も動くし）」

『構わない』

「（オツケー……これで良いかしら？）」

梓の携帯に学園都市の地図が表示されると、携帯とは別の手に握られていた勾玉がほのかに温かくなり、淡い光を発し始めた。

「（え？ なに？）」

『勾玉の光をその端末の画面に当てるように、端末の上にかざしてみてくれ』

梓が声の言うとおりにすると、勾玉全体から発せられていた光が一つの束となって放出され、画面上のある一点を指し示した。

「（光が……まさか、この光の指し示している場所が勾玉のある場所？）」

『そうだ。そこに行けば、先ほどと同じように君にしか認知できない扉がある』

「（なるほどね。じゃあ、さっそく行きましょつか）」

梓は心の中でそう言いつつ、夏の日差しの中を歩きだした。

「（……やっぱり、何かがおかしいんだよ）」

この日、インデックスは上条当麻のエアコンの効いた部屋におり、ベッドの上でフィンクスを抱きながらずっと思案顔を続けていた。

「（朝から感じる魔術的圧迫感……それも、時間が経つごとにその力は強くなっている）」

時折ベッドを離れて窓際に立ち外の景色を眺めたりするのだが、その原因が窓の外にいてもないので結局ベッドの上に逆戻り、その繰り返しであった。

「（どうしよう……とうまに言った方が良いのかな？）」

未だに携帯電話は上手く扱えないが、上条の学校の場所なら記憶している。

学校に行つて、上条に自らの感じていることを伝えれば彼は事態把握のために動いてくれるだろう。

「（でも、とうまは今日は忙しいとも言ってたんだよ……）」

朝食時、「今日は昨日の後始末……しかも、おかしくなつちまつた連中は休みだから動けるのは俺や姫神たちごく一部……はあ、不幸だなんて言っちゃいけないんだろうけど、不幸だ」と嘆いていた上条のことをインデックスは思い出す。

「(ただでさえ忙しいとうまに、こんなことを言いに行っちゃとうまがますます疲れちゃうんだよ……)」

上条のことを思いやって、伝えることを断念することも考えるインデックスではあるが、本来魔術とは無縁の世界である学園都市で、しかも10万3000冊もの魔道書の知識を備えたインデックスでさえ詳細が掴めない得体のしれない魔力を放置することもまたインデックスにはできなかった。

「(……やっぱり、とうまに言いに行こう。とうまの優しさに甘えるのは良くないことかもしれないけど、魔術を行使できない私にはどうすることもできないんだよ)」

そう決断し、スフィックスをそっとベッドの上に置く。

「ごめんねスフィックス、お留守番よろしくね？」

そのインデックスの言葉を猫であるスフィックスは当然理解しようもないわけだが、インデックスの出掛ける雰囲気を感じたのかスフィックスは「じゃあ」と一鳴きしてベッドの上で丸くなった。

「えーっと、万が一出掛ける時は鍵をかけなさいってとうまが言ってたんだよ。鍵、鍵……」

インデックスは、本棚の中に隠してあるスペアキーを取り出そうとする。

「これなんだよ！ 1度しか隠し場所教えてもらってないけど、完全記憶する私はちゃんと覚えてたんだよ！」

本を数冊取り出し、奥に隠してあった鍵に手を伸ばしたその時、インデックスの背筋にゾクツとした感触が走った。

「っ！？ 強力な魔力！？ しかも、すぐ近くなんだよ！！」

鍵を引っ掴んだインデックスは、本棚の扉を閉めることも忘れて窓際へと走った。

「（窓の外……すぐそこに、魔術師がいる！！）」

窓のロックを解除し、勢いよく窓を開け放つとベランダへと飛び出した。

以前自らがひっかかっていた手すり越しに下をのぞく。

しかし、そこにはステイルのような魔術師らしき人物はいない。

いるのは、携帯を見ながら路上を歩いているセーラー服に身を包んだ一人の女子生徒一人だけだ。

「（そんな……ありえないんだよ！！ あの人から魔力を感じるなんて！！）」

セーラー服を着ているということは学校に通っている生徒である、ということはインデックスでも知っている。

問題なのは、「学園都市にいる生徒から魔力を感じる」ということである。

「（この都市に住んでいる生徒は能力開発っていうのを受けているはず……能力開発を受けた人間は魔術を扱うことはできないはずなのに……！！）」

しかし、インデックスが感じている魔力は紛れもなく、たった今外を歩いている女子生徒から発せられているものだ。

魔術を行使できない代わりにインデックスは、魔力の探知・種類の特定に優れている。

勘違いなどではない。

「（私を誘い出すための罫かもしれない。もしそうだったら強制詠唱^{セリ}だけで凌げるかどうか分からないけど……とにかく、あの人から話を聞かないと！！）」

そう決断したインデックスは、息を深く吸い込むと、静寂漂う中大声で叫んだ。

梓はアパートやマンションが立ち並ぶ住宅街へとやってきていた。

「（この辺に、次の勾玉が置かれている空間に通じている扉があるのよね）」

『そうだ。……だが、その前にどうやらお客人のようだ』

「（え？）」

声の言っていることの意味が分からない梓の耳に、頭の上の方から大声が聞こえてきた。

「そのあなた！！ ちょっと待つんだよ！！」

静かだった住宅街に響き渡った大声に梓が思わずビクツと体を震わせた。

「（な、なに！？ って、今の声どこかで聞き覚えがあるような……）」

梓がいつでも能力を発動できるよう警戒しながら顔を上に向けてと、マンションの一室のベランダに人影があった。

「ま、まさか……インデックス、さん！！？」

「あれ？ あなた、昨日変なブヨブヨした生き物を短髪やあきと一緒に倒した人？」

「え？ええ、そうだけど……私に何か用かしら？」

「あなたに聞きたいことがあるんだよ！ ちょっとお話したいかも！」

「（客人ってインデックスのことだったのね……どうする？）」

『本来ならお断り申し上げたいところだが、相手が禁書目録ではないのだから？』
……仕方ない、君と禁書目録は敵対関係にはないのだろうか？』

「（敵対も何も、私はインデックスに昨日初めて会ったし、それ以前にも彼女のことを悪く思ってたし）」

『では、いつそ包み隠さずすべて話してしまうのも手かな。とにかく、判断は君に任せる。だが、長居はできないぞ』

「（任せられても……とにかく、彼女をスルっていうわけにはいかないから、どこかで話すしかないわね）……分かったわ。近くにファミレスがあるの。飲み物や軽い食べ物くらいならごちそうするわ」

「すぐ行くから、そこで待ってるんだよ！！」

インデックスの顔が引っ込み、直後ボタン！と窓の閉まる音が聞こえてきた。

「（はあ……私自身がよく状況を理解できてないのに、よりによって最初に気付かれるのが魔術界の中でも最重要人物と言えるインデックスとはね）」

『良いではないか。禁書目録はいわば歩く魔道図書館、もしかしたらウロボロスに関する知識を持ち合わせているかもしれんぞ？』

「（そっか、そうよね）」

『では私はしばらく引っ込んでいることにしよう。禁書目録は魔術

的察知力に関してはかなり秀でていて、私のことも感知されかねないからな』

「（？ あなたの存在をインデックスに感知されてはいけないの？）」

『そういう訳ではない。君の説明の負担を和らげるためだ。姿かたちの見えない私のことを説明するのは大変だろう？』

「（そういえば、あなたって何者なの？ そもそも人？）」

『人、ではない。 そうだな……概念、とでも言っておこうか』

「（人ではない、概念（キリッ）……今時中二でもそんなこと言わないわよ？）」

『いずれ分かる時が来る。さて、禁書目録のお出ましのようだ、私は君が禁書目録と別れたら再び現れるでしょう。万が一、君と禁書目録との会話中に事態が急変することがあつたら知らせる』

「（ん、分かった）」

「お待たせなんだよ！ ……ところで、あなたのお名前は？短髪やあきとしの知り合いみたいだったけど……」

「そっか、インデックス……さんはお兄ちゃんとは病院で会ってたんだっけ」

「お兄……ちゃん？」

インデックスの顔がしばし思案顔になるが、やがて驚きへと変わった。

「じゃあ、あなたはもしかしてあきとしの妹なの!？」

「そうよ。私の名前は工藤梓、よろしくね。ちなみに、私とお兄ちゃんは双子なの」

「ふええ……と、とにかく、ここで立ち話は暑いから、早く『ふあみすれ』に行くんだよ!」

「『ファミレス』、ね。確かにここにいたら汗だくになっちゃうわね。すぐそこだから早く行きましようか」

こうして、梓とインデックスという今までなかった組み合わせの二人は一路ファミスレ……もとい、ファミレスを目指して歩き出した。

次話は梓とインデックスさんのガールズトーク(えっ)回です。

大学の期末試験が近いので、しばらくの間余計に更新が遅れそうですがご容赦ください。

夏休みになれば執筆速度も上昇……できればいいなあ。

関係ないですが、最近、梓をどのくらい「お兄ちゃんっ子」にするか考えがぶれてます。

兄を支える凛々しいキャラで行くか、兄を溺愛してそれこそ抱きついてスリスリしちゃうようなキャラ路線で行くか……

梓編の真っ最中に肝心なところでブレが生じてしまいました……はあ。

第57話 Unbroken Imagination

第七学区内のあるファミレス。

平日の昼間ということもあって客はほとんどいない。

そんな中、セーラー服を着た女子中学生と白の修道服を着た少女が向かい合って座っていた。

「やっぱりファミレスの中は涼しくて良いわね。あ、今日の費用は私もちだから、よっぽど高いものじゃなければ何頼んでも良いわよ」

「と、とうまと違ってあずさが神々しく見えるんだよ……！ じゃあ、これとこれとこれとこれ！」

「……一人で四つ頼むなんて、さすがインデックスさんね。じゃあ私は……これと、後コーヒーお願いします」

「は、はい、かしこまりました」

インデックスの注文の多さに驚きを覚えた店員は、わずかに顔をひきつらせながら戻っていた。

「それにしても、本当にあずさはとうまと違って心が広いんだよ！」

「（上条さんと違って、レベル5だから奨学金が多いだけなんだけどね……）ま、まあ、上条さんももうちょっとお金に余裕があったら、インデックス……さんにたくさん食べさせてあげられると思うんだけど」

「そうかなあ…… あ、さん付けが呼びにくかったら『インデックス』で良いんだよ」

「（お兄ちゃんや奈津美と話すときはいつも呼び捨てだったから……）そ、そう？ じゃあ呼び捨てで呼ばせてもらうね、インデックス」

「それより、さっさと本題に入りたいかも」

「（来たか……）そういえば、何か私に話があるってことだったね。……って言っても、出会ったばかりの私に答えられることなんてそんなになさそうだけど……」

「単刀直入に聞くよ。あずさ、魔術って言葉、知ってるよね？」

「……魔術？ なにそれ、よくアニメや漫画に出てくるようなもののこと？」

素直に話してインデックスに協力を仰ぐことも考えた梓であったが、もしインデックスに話せば魔術を手に入れることを強く拒まれるかもしれない。

まだ魔術を手に入れるかどうか自分の気持ちの整理もつかないうちには、できるだけそういった一方的な意見を聞くのは避けたい、というのが梓の心情であった。

……のだが、

「はぐらかしてもダメかも！ あずさから強力な魔力をすでに感じ

てるんだよ!」

「っ…………(やっぱり、もう感知されてたか…………)」

インデックスは自ら魔術を行使できない分、魔力の感知にはかなり鋭い感覚を有している。

「まず確認するけど、あずさは能力者なんだよね?」

「え、ええ。お兄ちゃんと同じレベル5よ」

「レベル5…………詳しくは知らないけど、確か学園都市で1番上のランクなんだよね?」

「そうね。今のところ9人しかないわ」

「確か、短髪もそのレベル5だってとうまが言ってたんだよ。とうまの周りってすごい人しかいないのかも」

「(まあ、この後第三次世界大戦に關与するくらいだし…………)」

「ってそれは今は関係ないんだよ! 問題なのは、能力者であるあずさから魔力を感じることもんだよ。この学園都市で能力を手に入れた人は、魔術を行使すると負荷がかかってしまう。だから、基本的には能力者は魔力を手に入れることはできないし、万が一手に入れたとしてもそこまで強い魔力を放つことはないんだよ」

「……………」

インデックスにここまでばれてしまっている以上本来は話さざる

を得ない梓だが、中々踏ん切りがつかない。

「話してもらおうまで、テコでもここを動かさないかも」

しかし、インデックスの折れない姿勢に梓の口から重いため息がもれた。

「……分かったわ。私の知っている限りのことをすべて話す。それでいい？」

「良いんだよ。じゃあまず最初の質問、あずさは魔術師なの？魔法名は？」

「魔術師……いいえ、私は魔術師ではないの」

「……え？ 魔術師じゃない？」

「ええ」

「ちょ、ちょっと待つんだよ。じゃあ、魔術を使うこともできない？」

「ええ。あ、でも、魔力を具現化したことならあるわ。といっても、その時の記憶が私にはないんだけど……」

「魔力を具現化？」

「うん。つい昨日のこと、ある能力者と戦っていた時らしいんだけど、私の背中から透き通るような青色の翼が突如出現したの。それまで私の一切の攻撃はその能力者に見切られて通じなかったんだけ

ど、その翼を使った攻撃は見切られることなく通用したってことらしいわ」

「その青色の翼が、魔力が具現化したものってこと？」

「そうらしいわ。能力を使った攻撃は相手に解析されて効かなかつただけで、魔力攻撃っていうのは能力者にとっては未知の領域だから効いたってところね。その翼なただけで、魔力の結晶って表現が正しいのかしらね。でも、私自身どうやってその翼を具現化したのか全然覚えてないし、今翼を出してみろって言われても出来ないの」

「な、なんだか想像してたよりずっとすごいことになってきたんだよ。じゃあ、あずさはどこかの宗教に属してるってわけでもないの？」

「人生のすべてを日本で過ごしてきたからね。特にどこの宗教を信仰してるってことはないわ」

「……………」

すべての事態が想像の斜め上を行ってしまっているこの状況にインデックスは言葉を失う。

「残念ながら、これ以上私から話せることはないわ。分かっているのは、私に強力な魔力が宿っているってだけのこと。10万3000冊もの魔道書の知識を持っているインデックスに分らないんじゃない、この世界に私の力の謎を解ける人は誰もいないんじゃない？」

「おまたせいたしました」

「ちょうど良いタイミングで来たわね。あ、そのケーキとコーヒー以外は全部こちらのシスターさんをお願いします」

「かしこまりました」

店員は、二人で食べるには多すぎる量の注文を若干顔をひきつらせながらも綺麗にテーブルの上に置くと、伝票を残して帰っていった。

「さて、と……今度は私がインデックスにいくつか質問する番ね」

梓はコーヒーにミルクを入れてスプーンでかき混ぜながらそう切り出した。

「ひょっとしてインデックスならもう気付いてるかもしれないけど、今朝から何か違和感を感じていない？」

その言葉に、ステーキを大きめに切り分けてがぶりつこうとしていたインデックスの手がピクツと止まった。

「……あずさも、感じてるの？」

「その様子じゃ感じているみたいね。私も、今朝から頭が重いつて言うかなんて言うか……どことなく威圧感のようなものを感じてるの」

「私もそんな感じなんだよ。ひょっとして、このことについてあずさは何か知っているの？」

「ええ、まあ。ねえインデックス、『ウロボロス』について聞いた
いんだけど……」

梓の口からウロボロスという単語が飛び出した途端、インデック
スの手からナイフとフォークがすべり落ちた。

「あずさ……今、ウロボロスって……？」

「ええ、確かにそう言ったわ。恐らく、私やインデックスが感じて
いる魔術的圧迫感はウロボロスが原因だと思う」

インデックスは若干震える手で水の入ったコップを持つと、一気
に半分くらい飲んでから梓をキツと見つめる。

「あずさ、ウロボロスがどんな存在かは知ってるのかな？」

「合っているかどうかは別として、一応知ってる。私知ってるウ
ロボロスの設定は、不死身でしかも攻撃するたびにむこうの攻撃の
威力が増すっていうもの」

梓が謎の声の言ったとおりのウロボロスをインデックスに話すと、
彼女も頷いた。

「その通りなんだよ。ウロボロスは不死身の生き物。しかも、どう
いう理屈かは謎だけど攻撃を受けることに相手の攻撃の威力が増す
厄介な存在なんだよ」

「インデックスの知識通りってことは、間違いなんかじゃないって
わけね。じゃあいきなり核心を突かせてもらうけど、インデックス
の10万3000冊分の知識の中に、ウロボロスを攻略する方法は

「？」

一縷の望みをかけて梓の口から発せられた質問。

梓はインデックスの口から希望の言葉が出ること期待したが、
現実はその上手くはいかなかった。

「無いんだよ」

キツパリと、逆に清々しさすら感じられるほどにキツパリとイン
デックスは梓のわずかな希望を打ち砕いた。

「ウロボロス自体魔術界の中でもかなり珍しくて忌避されてる存在。
それこそ文献に残されず、人々の記憶から抹消されることを望まれ
てるくらいに。だから、まともな文献がまず残ってないんだよ」

「……………」

「それに、わずかに残されてる文献にはどれも、超強力な魔力を用
いて封印されている、という文言しかない。ちなみに、ウロボロス
を封印するために魔術師が一人生け贄として捧げられたという記録
もあるんだよ」

「生け贄……………」

魔術を行使するために必要な魔力は、元をたどると術者の生命力
に由来する。

その生命力のすべてを糧に発動する魔術をもってしても、倒すこ
と叶わず封印に留まるというのは、梓に事態の深刻さを改めて認識

させるのに十分な話だった。

「じゃあ、どうすれば……」

「今の話をそのままなぞるのなら、魔術師を一人用意して封印魔術を行使するしかないんだよ。でも、今から封印魔術を行使できる魔術師を探して日本に呼び寄せるのは時間がかかりすぎるかも……」

「（アレイスターは……ウロボロスの気配が未だ消えてないことを考えると静観に徹してるようね。アレイスター、少しはプラン以外のことにも首突っ込みなさいよ）」

「……って、私はものすごい大事なことを忘れてたかも！」

インデックスは店内に響き渡らんばかりの大声で突如叫んだ。

「わわっ!?! ど、どうしたのインデックス!?!」

インデックスは、その小さな体を梓の方にずっと近づけると満面の笑みで言った。

「とうまだよ! とうまの右手なら、ウロボロスもあっという間に消し去れるんだよ!」

「あ……あーっ!」

インデックスのその言葉を聞いた梓も、思わず大声で叫んでしまった。

二度目の叫び声に、少ないながらも客が梓たちの方を迷惑そうに

見る。

梓とインデックスお互いに口元に人差し指を当てて「しーっ！」とやると、改めて顔を近づける。

「そうか、幻想殺し（イメージブレイカー）…… 私もすっかり忘れてた」

「いつもとうまと一緒に過ごしているのにこんな簡単なことにも気付けないなんて、一生の不覚なんだよ。とにかく、これでウロボロスの問題は解決したも同然かも！」

「……………」

「どっしたの、あずさ？」

「いや……魔術師一人がその身を生け贄にしても封印しかできないような化け物が、いくら幻想殺しが異能に有効だからといって、そう簡単に倒せるかしら……………」

「でも、現状ではとうまの右手が1番ウロボロスをどうにかできる可能性が高いんだよ。迷ってる時間は無いかも」

「そうね……………」

「善は急げなんだよ！ 私はとうまの学校に行つて、とうまに事情を話してくるんだよ。あずさも一緒に来る？」

「いや、私はもうちょっとやることがあるの。上条さんはインデックスに任せても大丈夫かしら？」

「大丈夫なんだよ……って、よく考えたら私とうまの学校に行けないんだよ」

「え、どうして？」

「完全記憶能力を持っている私でも、なぜか学園都市の地理はさっぱり覚えられないんだよ。どうしてなんだろう……」

「（そういえばそんな話もあったような……学園都市ってつくづく謎の多いところよね）ねえインデックス、携帯持ってる？」

「けいたい？　とうまが持ってる、折りたためて開くとテレビが登場する機械のこと？」

「そ、そう。あれはテレビじゃなくて、本来は持ち運べる電話なんだけどね」

「まあ何だつて良いんだよ。とにかく、私はそのけいたいっていうのは持ってないんだよ」

「そっか。じゃあ、今から私の携帯電話の番号を書いた紙を渡すから、それを上条さんに渡してくれる？　そして渡したら、私の携帯に電話をして下さいって伝えてくれるかしら？」

「この紙をとうまに渡して、そこに書かれてる番号に電話するようには言えはいんだね、分かったんだよ。それであずさ、とうまの学校までの道のりなんだけど……」

「ああ、そうだったわね。ちょっと待ってて」

梓はカバンの中からメモ帳を取り出して自らの携帯電話の番号を記すとインデックスに渡す。

そして、テーブルに備え付けられているボタンを押して店員を呼び出した。

「はい、ご注文を……」

「あ、ごめんなさい、注文じゃないんです。この学園都市の地図ってこのお店に置いてありますか？」

「地図ですか？ 少々お待ちください」

店員はレジのあるカウンターのところに行くと、棚から1冊の本を持って戻ってきた。

「はい、お持ちいたしました」

「ありがとうございます」

梓は店員から地図を受け取ると、テーブル上の食器などをわきよけて地図を広げた。

「えーっと、確かここは第七学区だったわね」

ジャッジメントの仕事柄、地図を開くことも少なくない梓。

学園都市全体の載っている厚い地図から第七学区を見つけるのにさして時間はかからなかった。

「学園都市、ことに学生の多い第七学区にはたくさんファミレスがあるからなあ……えっと、ここが柵川中学で、私がインデックスに声をかけられたのがここだから……私たちが今いるファミレスはここね」

「あずさ、あずさも『けいたい』持つてるんでしょ？　とうまが、そのけいたいは地図も見れるようなことを言ってたけど、どうしてけいたいで見ないの？」

「携帯の画面つて、ここ最近のは比較的大きめに作られてるけど、それでも地図を過不足なく映すにはやっぱり小さいの。その点、紙に書かれた地図なら周辺の地理を一目で知ることができて便利なの。それにインデックスも、機械で地図を見せられるより紙の方が抵抗が少ないでしょ？」

「確かにそうかも。気遣ってくれてありがとうなんだよ」

「道を分かりやすく教えるのも私たちジャッジメントの仕事だしね。……っと、あつた、上条さんの通ってる高校。じゃあインデックス、ここが今私たちのいるファミレスで、ここが上条さんの高校よ。ここまでの道順、インデックスの完全記憶能力なら……」

「ふふん、もう覚えてんだよ。道の途中にある銀行やガソリンスタンドも一緒に覚えたから、迷うことはないんだよ！」

「（道順じゃなくて、周辺の地理ごと全部覚えちゃったんだよね……？　恐るべし、完全記憶）オツケー。じゃあ、ちやちやつと食べて行動開始しますか」

梓がそう言うや否や、インデックスは恐るべきスピードで食事を再開した。

「（は、速い……！ 知識としては知ってたけど、実際に見るとホントインデックスってよく食べるわね）」

もはや感動すら覚える食いつぷりに梓は見とれていた……のだが、ふとインデックスの箸の動きが止まった。

「……？ どうしたの、インデックス？」

あのインデックスが箸を止めるなんてただ事ではない、とそこまでは大げさに梓も思わなかったが、何事かと梓は声をかける。

「ん、うん。ちょっと、あずさに会うほんの少し前のことを思い出してたんだよ」

「私に会う少し前？ 何かあったの？」

「魔術的圧迫感……あずさと話してからウロボロスが原因だった分かったんだけど、それをずっと朝から感じてたのはあずさにも話したよね？」

「ええ」

「そのことで、とうまに相談しようと思ったの。でもね、今日とうまは昨日の事件のせいで忙しいって言ってたのをその時に思い出したんだよ」

「そうね……今日はほとんどの学校で特別時間割を組んで後片付け

に追われてるからね。通常営業してるのは、全員が能力者で無事だった常盤台とか一部の学校だけだしね」

「それで今また、私はとうまを頼ろうとしてる。こんなにとうまに頼りつきりで良いのかなってふと思ったんだよ」

「インデックス……？」

「ひよつとして、私はダメな人間なかもって思ったの。とうまの部屋に住まわせてもらって、毎日食事まで作ってもらって、居候の立場なのにベッド独り占めしちゃって……それで、いざ困ったことが起きたらすぐとうまに頼っちゃう。ねえあずさ、私ってダメな人間かな？」

梓は答えに窮した。

まさか、インデックスがこんなことを言い出してくるとは夢にも思ってたからだ。

「……………」

二人の間を沈黙が支配する。

インデックスは梓を射抜くような眼差しで見つめる。

「（出会ったばかりの私にそんなこと答えられない、と言って逃げることもできる。けど、インデックスの視線はその答えを求めてないし、私もそんな答えを出したくない。じゃあ、どう答えるのが正しい……？）」

梓もインデックスを見つめ返す。

そんな状態が30秒ほど続いたその時、梓が小さくため息をついた。

「……そうね、インデックスはダメ人間かもしれないわね」

「っ……」

梓の言葉に唇をキュツと噛みしめるインデックス。が、梓の言葉はそれで終わらなかった。

「そう考えること自体、インデックスがダメな証拠よ」

「……え？」

「そうやって、自分をさげすんじゃダメなこと。よく考えてインデックス。どうして上条さんはインデックスと一緒に住んでいると思う？」

「え、そ、それは……私が頭の中に10万3000冊の魔道書の知識を持ってて、それが悪い魔術師の手に渡らないように……」

「それは答えになってないわ。もしそれだけなら、上条さんはあなたに施されていた『首輪』を破壊した後、あなたを説得してイギリスに帰させたはず。手元に引き留めるなんてことはしないと思う。上条さんがあなたと一緒に過ごしている理由、そんなのは単純、それを上条さんが望んだからに他ならない」

「で、でも、私は食事だけでとうまを困らせるし、私と一緒にいる

と不幸ばかり……」

「なら、今からでもイギリスに帰るのね。でも、インデックスにそんなことが出来るのかしら？ ……上条さんのことが大好きだって、首輪を破壊された後に病院でそう言ったんでしょ？」

「……っ！！」

「確かに上条さんはインデックスに出会ってから、魔術側のドタバタにも巻き込まれるようになって今まで以上に不幸になったのかもしれない。でも、上条さんはそんな現実を踏み倒してインデックスのそばに居続けてくれている。インデックスは、上条さんのそばにいられるという幻想に、もうちょっと甘えてもいいんじゃないかな？」

「甘えても、いい……？」

「そう、上条さんが恐らく唯一絶対にぶち壊せない幻想にね。……でも、それでも、あなたが自らをダメな人間だと思うのなら、変わればいいんじゃないかな？」

「変わる……？」

「例えばさつき食事の話が出たけど、これからは食べる量を減らして上条さんの食費に貢献してみようと思ったり、自らが食事を作ってみたり。後、上条さんが学校に行っているあいだはあなたは一人なんだから、洗濯物を洗って干したり、食器洗いや部屋の片づけをしたり。もちろん、これらをすべて完璧にこなそうとすると相当の努力が必要だし、ぶっちゃけすぐには出来ないでしょうね。でも、インデックスが本当に上条さんのことが好きで、上条さんのことを

想って変わりたいと思うのなら、少しずつでも良いからやってみたらどうかしら?」

「とうまのため……」

「私もできることは手伝うわよ? 例えば、食事の作り方とかならある程度教えられるし」

「あずさ……」

「だから、インデックスは必要以上に自らを不必要な存在だと思うことはしないでいいと思うよ? 後はそうねえ……毎日、ベッドで寝るとき誰かさんの分スペース空けてあるんでしょ?」

「なっ!?!」

「そこまでするのなら、一歩踏み出して上条さんに『とうま、あのね……一緒に、寝よう?』とか言ってみたりすれば良いのに。あるいは逆に、インデックスが上条さんの寝てる風呂場に突撃するとか……」

「わ、私はシスターなんだよ! そんなことできないんだよ!」

「律儀に誰かさんの分空けてる人が言ってもねー」

「真摯に相談に乗ってくれたと思ったら、最後にからかわれたんだよ!」

「だって事実じゃない……っと、結構時間経っちゃった。インデックス、私はそろそろ行くけど、ちゃんと上条さんの学校の場所覚え

てるよね?」

「あずさに心配されるまでもなく、ちゃんど覚えてるんだよ!」

「そこまでムキにならなくても……じゃあ私が支払っておくから、上条さんによろしくね!」

そう言っつて梓が席を立ち、駆け足でレジの方へ向かおうとしたとき、インデックスが「あずさ!」と呼び止めた。

「その……今日は、相談と、食事のお金、ありがとう」

「ああ、気にしなくても大丈夫。これでも安いくらいだし」

『禁書目録からは何か有用な話は聞けたか?』

ファミレスの外。

近くにインデックスの姿がないことを確認した梓が心の中で呼びかけると、すぐさま謎の声が返ってきた。

「(いいえ、特には。でも今、インデックスが上条……幻想殺しを

呼びに行っている)」

『幻想殺し……か』

「（ええ。さ、私たちは残りの勾玉を手に入れましょ）」

『あ、ああ。すぐ近くに一つある』

梓は端末を取り出すと、勾玉をかざして場所を確認すると歩き出した。

「（ダメな人間、か。私は、お兄ちゃんにとってどんな存在なのか……）」

第57話 Unbroken Imagination (後書き)

後半のインデックスと上条さんの話は、主の妄想チックな要素を若干(?)含んでいます。

第58話 fear

インデックスと別れてから約5分後。

梓は廃ビルの入り口の前に立っていた。

「（勾玉の光が指し示した場所はここのようにだけ……例の扉なんてものはどこにも見当たらないわよ?）」

『扉はビルの中だ。入ればわかるはずだ』

「ん。正面のドアは封鎖されているけど、ガラスが壊されてるから簡単に入れるわね。……スキルアウトたちのたまり場になってなきや良いけど)」

梓は警戒心を高めながら廃ビルの中へと入っていく。

入るとすぐに開けたホールが梓の目に飛び込んでくる。

そのホールのちようど真ん中に、100%不自然な形でドアがポツンと存在していた。

「（これ、よね?）」

『そうだ。この扉も梓にしか見えてはいない』

「（こんな不自然なところにある扉が誰にでも見えるなら、とつくに壊されてる……っていうか、それ以前にビル建設時に壊されてるわよね。とにかく、入りましようか）」

梓は扉の前に立つと、周囲に誰もいないか確認してから扉のノブを回して中へと入っていった。

第七学区総合医療センター。

その屋上に二人の人間の姿があった。

一人は病院服を身にまとい頭に包帯を巻いた少年で、もう一人はセーラー服に身を包んだ少女である。

二人の手にはそれぞれ、紙コップに飲み物を注ぐタイプの自販機で買ったコーヒーがあった。

「まったく……」

少女はそのため息交じりに言うと、紙コップのブラックコーヒーを一口飲んだ。

「まさか、あなたが病院でいきなり女の子とやり始めるような節操のない男だとは思わなかったわ」

少女が呆れた顔つきで少年の方を見ながらそう言うと、少年は「

「おいおい」と少女を制した。

「ちょっと待ってくれ奈津美。俺は琴美と事に及んじやないって」「どうかしら？　あなたが琴美さんのスカートに手を突っ込んでいるタイミングで私が病室を訪れていなかったら、間違いなく『シテ』いたでしょう？」

奈津美が問い詰めるような口調で少年にそう言つと、少年は「……」と沈黙してしまつた。

「別にそういう行為自体を否定しているわけじゃないわ。明俊だつて、いくら理性的な人間だつて言つても仮面を剥いたらただの中学2年生ですもの、そういう欲求があることは重々分かつてる。でもね、いくらなんでも病室でし始めることはないでしょう？　病室を訪れたのが私以外の人間だつたらどうするつもりだつたの？」

「反論の余地もない……でも、琴美が『鍵を閉めたはずなのになぜあの女は入つてこれたのしょう』とも言つてたぞ？」

「あの病室は電子ロック式だから、琴美さんの能力をもつてすればキー無しに鍵をかけられるでしょうね。でもね、私はこれでも今まで学園都市の暗部に身を置いていた人間。普通じゃ手に入らないような特殊な端末を持ち合わせているの」

奈津美はそう言つとスカートのポケットから黒の端末を取り出した。

「これには、電子ロックに侵入してIC認識を誤魔化したり、パスワードを突破できるアプリが入つてるの。機密レベルの高い場所に

使われてる電子ロックならともかく、病院程度のロックなら解除なんて余裕なのよ?」

「ああ、それで入ってこれたって訳ね……」

「ま、ロックをすぐに解除できない状況でも、病室の中から女の人の喘ぎ声が聞こえてきたら普通はドアを叩いて中の人に呼び掛けるでしょうね」

「……聞こえてた?」

「ええ、バッチリ」

「マジか……」

「そりゃ聞こえるわよ、防音の部屋じゃあるまいし。琴美さんから迫ってきたって話だったけど、あなたは体が動かせるようになった時に突っぱねることも出来たはず。冷静さを欠いて女性と事に及ぼうなんて危険極まりないわ。少しは反省しなさい?」

「思いつき反省してるよ。ホント、ゴメン」

「……分ければ良いのよ。(まったく、そんなに欲求不満なら私の体でゴニョゴニョ……)」

「ん? 何か言っただか奈津美?」

「い、いいえ、なんでもない」

奈津美は顔をわずかに赤くしながらまた一口コーヒーを飲む。

明俊もそれにつられるかのように一口コーヒを飲むと、奈津美をジッと見つめて口を開いた。

「そう言えば奈津美、一つ聞きたいことがあるんだけどさ、何で柵川中学の制服着てんだ？」

「何？ この制服スカートが長すぎて風でめくれてもパンツ見にくいなあって？」

「違うわー!!」

「どうだか……ってウソウソ。そんなに怒った顔で見なくても良いでしょう？」

「お前の冗談がタイミングといい中身といい冗談に受け止められねえんだよ……」

「ごめんなさいって。私が柵川中学の制服を着ている理由は簡単よ。私が柵川中学に入るからに決まってるじゃない」

「ああ、そりゃそうか……ってはあ!!??」

「何よその驚きよう。まるで、知り合いの女の子が自分の学校に転校してくることを知った男子みたいな声出して」

「その通りだよ！ 奈津美が柵川中学に入るだと!？」

「ええ。冥土帰しと桜川さんに手を回してもらってね。もう決定事項だから」

「な……いや、中学に入ることには百歩譲ろうっていうか、入らないとかえって不自然だもんな。それはいい。なんで柵川中学なんだ？ 奈津美の特異な能力ならそれ相応のところがあるだろ？」

明俊のその質問を聞いた奈津美は、屋上の手すりに背中から寄りかかると天を仰いだ。

屋上に吹く風が奈津美の髪をなびかせる。

「確かにあなたの言うとおり、私の能力を考えれば柵川中学は不自然な入学先かもしれない。でも、私の能力はレベル付けできない特殊な能力。レベル3以上って言う制限のある常盤台には入れないわそれに……」

「それに？」

「私の能力を解析したがっている連中は数多くいる。霧ヶ丘女学院……まあそこは高校だけど、あそこみたいなイレギュラーな能力を専門にする学校に行けば、いつか私を欲している連中の目についでしまう。そうなれば、また昨日のような事件が起きかねない。だから、柵川中学を選んだの」

「確かに、柵川中学は学生の大半が無能力者やレベル1・2を占める、いわゆる普通の学校だ。でも、今柵川中学には俺と梓が在籍してる。レベル5が二人もいる柵川中学は以前と違ってそれなりに目立つ学校になっちまってる。それでも柵川中学を選ぶのか？」

「私もそれは考えたわ。でもね……」

そこで奈津美は言葉を切ると、手すりから背中を離し両手を後ろに組んで明俊の顔を覗き込んだ。

「守ってくれるんでしょ？」

「え？」

「あなた昨日言ったじゃない、『奈津美を利用する人間がいれば俺が守ってやる』って」

「あ、ああ」

明俊が思い出したように頷くと、奈津美は「あら」と少し不満げな顔。

「まさか、忘れてた？」

「い、いや、まさか、そんな訳ないだろ？」

慌てたような顔をする明俊に奈津美はジトツと疑いの視線を向けるが、やがて「ふうっ」とため息をついて、

「まあ良いわ。あなたなら、私に限らず誰にでも同じことを言いそうだし。忘れてたとしても仕方ないわね」

「うっ、厳しいお言葉……」

「とにかく、私はあなたのその言葉、信じるわ。だから、もし何か起こったらよろしくね？ 第二位の完全消去さん？」
アフンリユータテリ

奈津美はそう言って微笑むと、明俊の頬に顔を近付けて軽くキスをした。

「!?!」

「期待してるわ」

奈津美はフフッと笑うと、軽やかに屋上を後にしていった。

「……………」

一人残された明俊は、かすかに奈津美の温かさが残る頬に手を当てながら立ちすくむ。

「……………最近の女の子って、ああやって大胆にお願いするのが主流なのか……………」

どこまで行っても明俊は明俊だった。

「何が大胆なのですか？ とミサカは後ろにこっそりと忍び寄り質問します」

「うわっ!?!」

ぼんやりと突っ立っていた明俊の背後に、いつのまにか琴美が忍び寄っていた。

「もしかして、見てたのか!?!」

「見てた？ あの女とここで何かしていたのですか？ とミサカは

詰問します」

頬にキスされたシーンを琴美に見られたと思った明俊であったが、琴美はどうやら見ていなかったらしく墓穴を掘ることになってしまった。

「い、いや!? 何も! ただ、琴美との病室でのやり取りをきつく注意されただけだ!」

「……怪しいですね」

「ホントだって! ……って、どうして俺がここで奈津美と一緒にいたことを知ってるんだ? 俺がここで何をしていたのかは知らないのに」

「ここへ通じる階段の途中であの女に会ったんですよ、とミサカはあの女の不敵な笑みを思い出しながら報告します」

「そ、そうなのか……奈津美は、琴美には何か言ったのか?」

「いえ、何も。それより、あの女さえいなければミサカたちの濃密な時間は邪魔されずに済んだのに、とミサカは愚痴を漏らします」

「濃密な時間って……ま、まあ、奈津美にも注意されたけど、病室であんなこと始めるなんてあの時の俺はどうかしてたな」

「そうですか? ミサカとしてはあのままあの女を無視してフィニッシュまでいってもらっても良かったのですが……」

「無視とか無理に決まってるだろ」

「なんなら、今ここで始めても良いのですが。ミサカは壁に手を付けるので、明俊さんは後ろから……」

「ストップ！ そんなことできるか！ 病室で無理ならここでも無理だろ常識的に考えて！」

「……今回は諦めましょう、とミサカは大人の対応を見せます」

「は、はあ、ありがとうございます琴美様。まあ、奈津美にも言われたけど、冷静さを欠いた俺が悪かったんだけどな。ろくに責任も持てないのに手を出すなんてダメな男のすること、もっと大人になつてからな」

「あなたがそう決めたのならミサカはこれ以上何も言いません、とミサカは残念がりながらも物分りの良さを見せてこの場は引き下がります。……いつまでもここにいても暑いだけです、中に戻りましょう、とミサカは提案します」

「あ、ああ。そうするか」

明俊は紙コップの中に残っていたコーヒーを一気に飲み干すと、琴美に続いて階段の方へと歩き出した。

と、その時、

「痛っ……」

突然、頭に走ったチクリとした痛みで明俊は思わず声を出した。

「……？ 頭を押さえていますか、大丈夫ですか？」

「……梓？」

「え？」

「この頭痛……梓に何かあったのか？」

「状況がよく飲み込めないのですが……頭痛と梓お姉さま、何か関係があるのですか？」

琴美が明俊を覗き込むようにして尋ねると、明俊は頭を押さえていた手を離しながら「実は……」と言った。

「俺にもよくは分からないんだけど、昔から、梓の身に何か起こったりした時にチクツと感じに頭痛がするんだ」

「双子にはそういったことが起こる、というのはたまに耳にすることですが……確か、明俊さんと梓お姉さまは二卵性双生児ですよね？ とミサカは確認を取ります」

「ああ。実は俺もそれが気になってたんだ。双子にはそういったテレパシー的なことが起こるって話だけど、あれは現実に起こるとしても一卵性双生児だけのはずなんだ。二卵性双生児ってのは遺伝子的には普通の兄妹と変わらないからな」

「分かりませんね……梓お姉さまも、明俊さんに何か起きたら頭痛のようなものを感じるのでしょうか？」

「いや、聞いたことねえな」

「以前にも同じようなことがあったのですが、その時梓お姉さまにはどのようなことが起きたのですか？」

「ああ。あれは俺たちが小学5年生の時のことだったかな、梓が人通りの少ない道を歩いていた時、二人組の男に絡まれたことがあったんだ」

「ロリコンに捕まったわけですか……」

「その時、俺と奈津美は家で学校の宿題をやってたんだっただな。それでさっきの頭痛が来たんだ。しかもただの頭痛じゃなくて、なぜか梓の『お兄ちゃん』って声が聞こえたような気もしたんだ」

「それで助けに行った、というわけですか」

「頭痛が起こった直後に、ロリコンどもの隙を突いた梓から携帯に連絡が入ってな。連中はその場から逃げて梓は事なきを得たんだ」

「なるほど…… ってちょっと待ってください。その話が本当なら、今梓お姉さまの身に何か起きているのではないですか!？」

琴美は慌てるが、明俊はあくまで冷静だった。

「それはねえよ。あいつは今学校だろうし、もし何か起きているとしてもあいつはレベル5だ。まず負けないだろうし、仮にあいつが負けちまうような強力な相手と戦うなら、あの時みたいに連絡してくるだろうし」

「……そうですね。少し心配しすぎました、とミサカは冷静さを取り戻します」

琴美はそう言ったが、内心そうではないような気がした。

「梓お姉さまはお兄さん思いですから、病院にいる明俊さんに連絡を取ってくることは無いような気がします、とミサカは心の中で明俊さんに指摘してみます」

「そう、梓なら大丈夫さ。だからそんな難しそうな顔すんなって。さて、いつまでも屋上においても暑いだけだし、中に戻ろうぜ？」

明俊はそう言うと、いまだ思案顔を続ける琴美の肩に手を回すと階段の方へと歩き出した。

廃ビルのホール、何もない空間から突如一人の少女が姿を現した。

首には二つの勾玉がぶら下がっている、そう、工藤梓である。

「（これで二つ……全部で何個あるの？）」

『残りは二つ、合計四つだ』

「（あと二つ……早くしないとウロボロスが本格的に目覚めちゃう。さっさと済ませるとしますか）」

次なる勾玉を手に入れるべく廃ビルを後にしようとする梓であった。

……が、ふとその歩みを止める。

顔は動かさずに目だけを左右に動かし、周囲の様子を確認する。

『ふむ……』

「（誰かいる、わね）」

「よお嬢ちゃん、ちょっと良いか？」

後ろからかけられた声に、梓は振り返る。

そこには3人の男が立っていた。

それだけでなく、梓は3人以外にも複数人の気配を周囲に感じていた。

「（スキルアウト……やっぱり、ここは彼らの根城になっていたの

ね」

「お嬢ちゃん、見たところ中学生だな？ 今日学校じゃないのかい？」

「え、ええ。でも、昨日の騒ぎで学校はめちゃくちやで授業も無いし、暇だから抜け出しちゃおっかなあー、てね」

「なるほどな。んじゃ、どうしてこんな廃ビルなんかに来たんだ？ ここは女の子が来るような場所じゃないと思うが？」

「え、えーつとお…… 学校抜け出てきたのは良かったんだけど、特にすることもなかったの。で、外暑いでしょ？ ここなら誰にも邪魔されずに涼めるかなあーって」

「じゃあ俺たちは、お嬢ちゃんの休息の時間を邪魔しちまったわけだ」

「あ、お気になさらずー。今すぐ出ていくんで」

そう言って、何事もなかったかのようにその場を後にしようとする梓。

しかし、振り返って廃ビルから出ようとした梓の視線に入ってきたのは、入り口を塞いでいる男たちの姿であった。

「（しまった、先回りされて塞がれた！？）」

「おおっと、ちょっと帰るにはまだ早いんじゃないか？」

「そうそう。どうせならゆっくりしていけて」

そう言いながら近づいてくるスキルアウトたちを見て梓は小さく舌打ちをする。

『まだ中学生の君を狙うとは……こつこつのを世間ではロリコン？
と言っただったか？』

「（そうね。ま、中学2年じゃロリではなさそうだけど）」

『どっつするっ。』

「（決まってるでしょ？ こんな連中、私の能力で軽くあしらって……）」

いくら相手が複数人いるとはいえ、そんなものはレベル5の前ではハンデにすらならない。

梓は一瞬でかたを付けるべく能力を発動しようとする。

しかしその時、不意に梓の頭の中に言葉が木霊した。

『……怖いのか？』

『怖いのか、ですって？ 怖いに決まってるじゃない！！自分にそんな力が、それもあの垣根を押しつけることが出来るような力があるなんて分かったら誰だって怖がるに決まってる！！』

『ただでさえ、私には学園都市で七番目に強い力が与えられているのよ！！？その上また強大な力だなんて……！！』

「（……っ！！）」

それは、梓が謎の声に自らの力について説明を受けているときの1シーンであった。

「（力を、恐れている……？　今まで能力を使うことに恐怖を抱いたことなんて……！！）」

普段通りに能力を使おうとする梓だが、その度に、自らが氷の槍で目の前の男たちを串刺しにしてしまったり、その強力な冷却能力で彼らの生命活動を一瞬にして停止させてしまう光景が脳内に浮かび上がり演算に集中できない。

「（くっ、こんなことって……！！）」

そうこうしているうちに男たちはすぐ近くまで近づいてきていて、そして一人の男の手が梓の体に触れようとしていた。

「（……！！）」

思わずキュッと目をつぶってしまった梓にはレベル5の面影などなく、ただのか弱い女の子と成り下がっていた。

しかし、いつこうに男の手が梓の体に触れる気配がない。

「……………?」

恐る恐る目を開けた梓の視界に飛び込んできたのは、いつの間にか地面に倒れている男たちの姿であった。

「……………? いったい、何が?」

「その犯人は私です」

「っ!? 誰!?!」

突如聞こえてきた声に梓が振り返ると、そこには眼鏡をかけ髪を一房頭の横で束ねた少女がいた。

「昨日お目にかかりましたよね? 工藤梓さん」

そう、それは昨日、絶体絶命のピンチだった梓たちの前に現れその圧倒的な力でAIMバーストの攻撃をいとも簡単に防いだ……

「か、風斬さん!!」

風斬氷華であった

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

第58話 f e a r (後書き)

というわけで、挿話のその後の展開を書きました。

結構きわどく書いた挿話でしたが、結局明俊と琴美のあいだには何事もありませんでしたw

第59話 Near and distant . But . . . (前書き)

せつかくの夏休みで、執筆が超順調に進むかと思ったら、まさかの
運転免許取得のために教習所へ通う日々……

まあ、授業は大学入試を思えば難しくありませんし、運転も苦手では
ないので、事故を起こさない程度にサクッと終わらせて執筆頑張り
たいです。大学生の夏休みが長いのが幸いですね……w

第59話 Near and distant . But . . .

「か、風斬さん!!」

梓の危機を救ったのは意外な人物、風斬氷華であった。

梓が改めて周囲を見渡すと、スキルアウトの男たちは誰一人として意識を保っているものはいなかった。

「……殺しちゃった訳じゃ、ありませんよね？」

梓が恐る恐る尋ねると、風斬は苦笑いをする。

「まさか。気絶してるだけです。手っ取り早く、全員の意識を少しの間刈り取らせてもらいました」

「なるほど……ごめんなさい、お手数おかけして」

梓が頭を下げると、風斬は首を横に振った。

「良いんですよ。それより……どうして、能力を使わなかったんですか？ あなたの能力なら、冬眠を応用して彼らの身体機能を低下させてその隙に逃げることも可能だったんじゃない？」

風斬が不思議そうな顔を見ると、梓はピクツと震えると顔を伏せてしまった。

「……………」

「……梓、さん？　どうかしたんですか？」

「え？　あ、いや、その……」

「……外に出ましようか。彼らの意識を奪ったのは一時的な間だけです。ここで長話はいずれ彼らに邪魔されてしまいます。それに……私も梓さんに話があるんです」

「……話？」

「ええ。本当は明俊さんと梓さんが一緒にいるときに、と思ったんですけど、中々二人だけになっているタイミングが無さそうだと思います。明俊さんが入院してしまったのが予想外でした。彼には琴美さんや奈津美さんのどちらかが常についてますから。なので、先に梓さんと思ひまして」

「ハハハ……お兄ちゃんには他にも佐天さんがいますからね、中々お兄ちゃんが一人っていうのは難しいですね。……じゃあ、外に出ましようか」

そう言うと、梓は風斬と共に廃ビルを後にした。

廃ビルを後にした二人がやってきたのは、一般人が利用するには少々高く、常盤台のお嬢様が利用するには少々安っぽい、そんな中間に位置するようなカフェであった。

「良いんですか風斬さん。私もつと高いお店とか知ってますよ？」

今日は平日、しかも高い店に頻繁に出入りするようなセレブな学生は昨日の騒ぎの後でも通常授業で学校に行っているはずですから、お高い店の方が人が少なくてゆっくり話せると思いますけど……」

「確かにそうでしょうけど、ああいうお店ってセレブな学生以外にも、階級の高い大人の人も来るじゃないですか。そういう人たちの中に、話を聞かれちゃマズイ人がいたら困るじゃないですか」

「……風斬さんのお話って、そんなにヤバイ話なんですか？」

「うーん……危険度100%って訳じゃないですけど、まあ、念のためってやつです。それに、梓さんの悩める乙女の相談を大人の人たちに聞かれるわけにはいかないじゃないですか」

「……勘違いしてる風斬さんのために一応言っておきますけど、悩める乙女の相談なんて、そんなロマンチックな話じゃ……」

「分かっています。さつき梓さんが能力の使用をためらったのは、自分の力に思うところがあつたからですよね？」

「……ばれてましたか。でも、どうして分かつたんですか？」

「私がAIM拡散力場によって存在しているのは知ってますよね？」

「ええ……って、また疑問が生まれましたね。何で『風斬さんがA

「IM拡散力場によって存在していることを私が知っている」ということを知っているんですか？」

「まあそれも含めてなんですけど……私はAIM拡散力場が人の形を成したものです。そのせいで、能力者の思考がなんとなく読み取れてしまうんです」

「私の思考が読み取れる……？」

「完全について訳じゃありません。恐怖心を例えにすると、蜘蛛が出てきて怖かった程度の小さな恐怖心は感知できません。ですが、目の前に殺人を犯した指名手配犯が現れた、といったような大きな恐怖心を心に抱いた場合、それがAIM拡散力場に変化となって現れるんです。恐怖心以外でも同じで、心の振れ幅が大きくなるとそれがAIM拡散力場に変化となって現れるんですよ」

「はあ……言われれば納得、ですね」

梓はそう言っただけで、今日2杯目となるコーヒーを口に含んだ。

「じゃあ、風斬さんには私の心の中が筒抜けってことですね」

「今日の梓さんは、ある時間を境に心の乱れが大きくなったようですが……あなたが力について思ったことを、詳しく話してくれませんか？」

風斬がそう尋ねると、梓は手にしていたカップをテーブルに置き、首を横に振った。

「風斬さんも私に話があったんですよね？　なら、そっちを先に話

しちゃって下さい。お兄ちゃんにも話すつもりがあるってことは私だけじゃなくてお兄ちゃんにも関係があるってこと。重要度の高いお話を後に回して、万が一話せなくなっちゃったら困りますから」

「そうですか……分かりました。ではまずは私から話しますね。私が梓さんと明俊さんにお話したいのは、お二人の間にある特殊な現象が発生しているということですよ」

「……は？ 私とお兄ちゃんとの間に……特殊な現象？」

風斬の言葉の意味がさっぱり理解できない梓は、まるで数学の授業で少しも分からない問題の解答を先生に求められた生徒のような顔つきをする。

「まったく心当たりが無いんですが……まさか、私とお兄ちゃんの間だけ重力が強いか！？」

「いえいえ、そういうことじゃないんです。第一、この現象は目に見えないものですし」

「目に見えない？ よくそんな現象が感知できましたね」

「そこで先ほどの会話に戻るわけなんです。私はAIM拡散力場の変調を自分の身をもって感知することができます」

「話が見えてきたような見えてきてないような……風斬さんが言いたいのは、私とお兄ちゃんの間にはAIM拡散力場に関する特殊な現象が起きてるってことですよね？」

「そうです。具体的に言うと、お二人は互いのAIM拡散力場に影

響を及ぼしあい、結果としてお二人の間のAIM拡散力場が強くなっているのです」

「AIM拡散力場が、強くなる？ うーんと、その、AIM拡散力場が強くなったことで私たちに何か影響とかって出てるんでしょうか？」

「お二人に影響が出ているかどうかは分かりませんが、少なくとも私は影響を受けています」

「風斬さんが……？ 何か、悪い事態でも……？」

「悪いことではないと思いますが……お二人の近くにいますと、AIM拡散力場が強固になって私という存在が維持しやすいんです」

「つまり、風斬さんが私やお兄ちゃんの近くにいますと、その姿をより鮮明に維持できるってことですか？」

「そういうことです。私が昨日みんなの前に存在を明確にしたまま現れることができたのは、お二人がいたからというのもあるんです」

梓は昨日のことを思い出す。

「（風斬さんが現れたとき、私はAIMバーストの攻撃を防いでいて、お兄ちゃん私の手を握っていた……ラノベチックな展開だけど、お兄ちゃんが私の手を握っていてAIM拡散力場が強まった、ってことなの……？）」

突拍子の無い展開に思考が追いつかない梓。

「（ここ最近、私たちを取り巻く環境の変化についていけてない…
奈津美の特異な能力、お兄ちゃんの『有翼』化、魔術、そしてA
IM拡散力場…何なのよ、もう!）」

イラつきを抑えきれなくなった梓は、カップに入っていたコーヒ
ーをグイッと飲み干して、少し乱暴にカップを置いた。

「あ、梓さん…?」

「あ、ご、ごめんなさい風斬さん、驚かすつもりはなかったの。た
だ、最近私の理解の範疇を超えた出来事ばかり起きて頭がついてい
けてないんです」

「それは、昨日の事件とかですか?」

「まあ、それもあるんですけど……」

どう話したら良いものか、どこまで話して良いものか梓は思考を
巡らす。

「（風斬さんは、私が力について悩んでいることを知っている。恐ら
く、魔術のこととなくともことなかだろっけど気付いているはず。なら、
ここで話してしまった方が……いや、風斬さんにいらぬ心配をかけ
るのは悪い。これはあくまで私の問題……）」

「そっやって、自分の問題だったのの中にしまっってしまったのは、いつ
まで経ってもお兄さんの前に本物の笑顔で現れることができません
よっ。」

「っ!？」

顔を伏せて考えていた梓の心をまさに見透かした風斬の言葉に、梓はハッと顔を上げた。

「今の梓さんの心はかなり揺れています。梓さんの考えていることが手に取るように分かってしまう程に、ね」

「……………」

「話して、くれませんか？」

風斬は責める風ではなく、あくまで梓の方から話し始めるように優しく語りかける。

それだけで、今の梓の口を開かせるには十分であった。

「……………力って、何なんでしょうね」

「力、ですか？」

「そう、力です。風斬さんは、私がレベル5の第七位だってことは知ってますよね？」

「はい」

「当然、お兄ちゃんの序列も？」

「はい。レベル5の第二位、アフンリリユートテテリート完全消去ですよね？」

「そうです。双子なのに能力も違ければ順位も遠い。私はそのことで、この学園都市に来てからずっとお兄ちゃんにコンプレックスを抱いてきました」

「でも、お二人は一卵性双生児ではないのですよね？ 遺伝的には普通の兄妹と同じなのですから、能力や順位に違いがあるのが普通なのは……」

「だったら、そもそも同じレベル5という括りにいたくなかった。お兄ちゃんがレベル5で、私がレベル3や4ならここまで考えることも無かった。でも、お兄ちゃんと同じレベル5という地位にいなからお兄ちゃんに近づけない。中途半端にお兄ちゃんと同じ土俵にいるのが辛いんです」

「……明俊さんが、近くて遠い存在になってしまった？」

「私とお兄ちゃんは生まれた時から同じ時間を過ごしてきました。それこそ、お兄ちゃんの影のように。でも、学園都市に来て私達に突然授けられた力が、私とお兄ちゃんとの間に分厚くて大きな壁を作った……」

「そんな折、梓さんに新たな力を入れる機会が巡ってきた。私にその力が何なのかはよく分かりませんが……」

「その力に関しては風斬さんにも詳しくは説明できません。まあ、能力とは別種の何かだと思ってください。いずれ風斬さんも遭遇する力だと思いますから。それはともかく、私の中に迷いが生まれましました。この力を手に入れればお兄ちゃんに近づけることができる。でも……」

「…………でも？」

「お兄ちゃんに追いつくために手に入れる力は、人を傷つけることが出来る力。私が今持っている能力ですらレベル5という破格の威力を有しているのに、さらにまた力を欲している。ジャツジメントという、みんなを悪から守る立場の人間にありながら自分のために力を手に入れようとしている自分ってどうなのかなって思って…………」

「……………」

「ごめんなさい、こんなこと愚痴っても風斬さんに迷惑かけるだけです。やっぱり、自分のことは自分で落とし前をつけないと…………」

「…………梓さんは知っていると違いますけど」

梓の言葉を途中で遮る形で話を始めた風斬。

「私も、力を持っています。それも、皆さんが持っているような能力とは似ても似つかないような力を」

「風斬さん……………」

「だから、同情心なんかじゃなくて、梓さんの気持ちって私にも分かるんです。梓さんのその、力を恐れる気持ちが」

「……………」

梓は、自分の考えていることが風斬に読み取られてしまう可能性も忘れて、風斬に秘められた力のことを思い出す。

「でも、力は備わってしまった以上はどうしようもない。だから、私はこの力と一緒に進んでいくことをもう否定しません。……『友達』もいますし」

「（友達……インデックスや上条さんは風斬さんにできた友達で、彼女の理解者……）」

「梓さんが考えるべきは、力とどう向き合い、どうやって力を行使するか……じゃないかと私は思います」

「力と向き合い、どう行使するか……」

「力を手に入れること自体は悪いことではないと思います。問題なのは、その力を何のために使うのか……」

「何のため……」

「もっとも、演説ぶってる私もその『何のため』っていう明確な答えはまだ出せてないんですけどね。だからこれは、私と梓さんの宿題ですね」

「……」

「この宿題の答えは一つには決まらないでしょうね。でも、その答えを見つけてるのは梓さんの方が早いかもしれませんよ？」

風斬の口ぶりは、まるで梓の宿題の答えをすでに知っているかのようであった。

第59話 Near and distant . But . . . (後書き)

サブタイトルの英語は日本語訳するまでもないですね。But . . . を除いた前半部は本文中のある部分の英語訳です。But . . . も、本文を読んでいただければ後に何が続くかは予想していただけだと思います。

第60話 prelude (前書き)

遅くなりまして申し訳ありません。

第60話 prelude

第七学区にある公園。

夕方や休日ともなれば子供たちやカップルなどで賑わう場所であるが、平日の昼間では人気ひと気は無い。

そんな公園のほぼ中央部、噴水のすぐ脇に一人の少女が突如『現れた』。

人が突如現れること自体はこの学園都市ではそう珍しいことではない。

空間移動テレポートという、瞬間移動ではないが実質瞬間移動しているように見える能力があるためである。

しかし、今現れた彼女の能力は空間移動ではない。

「これで三つ目、後一つよね」

少女は首からぶら下げた勾玉を手のひらにのせながらそう呟いた。

そう、ウロボロスを止めるために奔走しているレベル5 工藤梓である。

梓は風斬と別れた後、勾玉が公園を指し示したことをつけてこりにやってきたのである。

「それにしても……」

顔をしかめ頭に手を当てる梓。

「頭の違和感がさっきよりひどくなってきた……ねえ」

『呼んだか？』

「うん。これって、ウロボロスのせいよね？」

『そうだ。ウロボロスの復活が近づいている証拠だ。急がねばならん』

「まったく……今更だけど、この世界はもう少しおとなしくするってことを知らないのかしらね」

いかんともしがたいメタ発言をしながら、梓は携帯を取り出す。

地図のアプリを起動し、首から下がっている勾玉を携帯の画面に掲げる。

「さ、最後の一つはどこに……って、あれ？」

勾玉を掲げたが光を発しないことに疑問の声をあげる梓。

「ちょ、ちょっと、最後の一個は？」

『落ち着け。地図の縮尺を変えてみるんだ』

「縮尺を変えるって、今ちょうど第七学区全体が映るような縮尺だし……」

嫌な予感が頭をよぎりながらも、声に言われた通り縮尺を変更する梓。

すると、第十学区のある場所が画面に映った瞬間、勾玉がその場所を照らし始めた。

『ふむ……』

「ここって……墓地じゃない!? 不吉な場所に最後の一個があるとはね。しかも、時間が惜しいって時に学区を移動しないとイケないなんて……」

『愚痴を言っても仕方がない。そこにはすぐ行けるのか?』

「幸い、ここのおすぐ近くにバス乗り場があるから第十学区へはすぐ行けるけど……昨日の騒ぎがあった直後だから、まともなダイヤで運行してるかどうか」

携帯を再び弄りだす梓。

ジャッジメント専用のデータベースに接続し、学園都市中の公共交通機関の詳細な運行状況ならびに、運休中ならその理由をチェックする。

「んーと。ゲツ、バス動いてない。昨日の騒ぎで車庫が破壊されてバスの大半が破壊ですって。あ、でもモノレールは動いてるわね。これも昨日の騒ぎで運行本数減らされてるけど、ちょうどタイミンクの良いやつが第七学区駅に来そう」

『では急ぐとしよう』

梓は携帯をポケットにしまうと、走って公園を後にした。

ウロボロス復活の前触れがすぐそこまで迫っていることを、知る由もなく

第七学区総合医療センターの一室。

そこには、セーラー服を着た少女と白衣を着た医師がいた。

「ふむ……」

白衣の医師　冥土帰しは、印刷機から出てきた一枚の紙を見つめてそう声を発した。

「……………」

そんな冥土帰しの様子を固唾を飲んで見守るのは、長い髪を一部耳の脇から身体の前へ流している少女　宮野奈津美である。

「……だいぶ、良くなってきているね」

冥土帰しのその一言に、奈津美の表情が和らぐ。

「本当ですか、先生？」

「ああ。血液検査の結果もほぼ正常だし、体内の残留体晶濃度も正常の範囲に近づいている。本来ならもっと長期間安静にしなければいけないところだが、これなら日常生活にも復帰できるだろう」

「ありがとうございます、先生」

奈津美が頭を下げると、冥土帰しは「いや」と首を横に振る。

「君の回復が予想より早いのは僕のせいじゃない。君の身体自体の自然治癒力が良いのもあるが、最大の要因は桜川君だ」

「え？ でも、彼は昨日この病院に来たばかりですよ？」

「彼が昨日私にある薬を渡してくれた」

そう言っつて冥土帰しは白衣のポケットから錠剤を取り出す。

「それ、昨日先生が私に『飲むように』って渡してくれた……」

「これこそ、桜川君が私に渡してくれた薬なんだね？ 僕はいわば仲介役というわけなんだね？」

「私の体調の治りが速いのは、その薬のおかげ……？」

「まさかたった一晩でこんなにも効き目が表れるとは驚いたよ。そろそろ医者も廃業の時代かな？ まあそれはさておくとして、この薬は残念ながら体晶に蝕まれている人間全員に効果があるわけではないらしい。彼の話だと、この薬は君専用とのことだ」

「私専用、ですか？」

「ああ。君の身長や体重はもちろん、血液中のホルモンを含めたあらゆる物質の量、体晶服用時の身体に現れるそれらの数値の変化などをくまなく考慮して作られた、君専用の対体晶障害用の薬だと言っていたよ」

「そんな薬を、桜川さんが……」

「だから、僕は何もしていない。強いて言うなら、君にホテル代わりにベッドを提供したことくらいかな？」

「そんなこと……先生には感謝してます」

「そうかい？ なら、桜川君にはもっと感謝しておくんだね？ さて、君の退院についてだが、桜川君の薬もあることだし今日でも構わないんだね？」

「え、今日ですか？」

「うむ。あのレベル5さんも一緒に連れて行って調べてくれて構わない。彼にも特段の異常は見当たらなかったしね。能力をむやみに行使しないようには言っているし、僕から彼に出来ることは何もなかったらね」

「そうですね、分かりました。じゃあ、そのことを明俊に伝えませぬ」

奈津美は立ち上がり、もう一度冥土帰しに頭を下げると部屋を後にした。

「奈津美君」

奈津美が明俊の病室に向かおうとロビーを通り過ぎようとしたその時、ソファに腰かけていた一人の男が奈津美に声をかけた。

「ああ、桜川さん」

その男は先ほど奈津美と冥土帰しの会話にも名前が挙がっていた桜川であった。

「今、大丈夫かな？」

「時間があるか、ということですか？ ええ、急ぎの用はありませんよ」

「そうか。だが……ここでは少々話しづらいな。最上階にある展望フロアに行こうか。自動販売機ので恐縮だがコーヒーの一杯でも奢らせてもらおうよ」

「ありがとうございます。でも実は、さっきコーヒー飲んだばかり

なんです」

「おや、それは残念。……工藤君と一緒に飲んでいたのかな？」

「さあ？ どうでしょうね？」

桜川の言葉に奈津美はそう答えると、エレベーターのボタンを押した。

エレベーターは奈津美たちのいる階に止まっていて、扉はすぐ開いた。

奈津美は「開」のボタンを押して桜川が乗るのを待ちながら、最上階のボタンも押す。

「昨日の騒ぎの時に足を少し痛めてしまった。歩くのが遅くなってすまないね」

「いえ、良いんです。それより……」

奈津美は桜川がエレベーターに乗ったのを確認すると今度は「閉」のボタンを押し扉を閉める。

今、エレベーターの中には奈津美と桜川しかいない。

「わざわざ人の少ない屋上に行く……例の件についてですか？」

奈津美がジッと桜川を見据えると、桜川はフツと笑みを浮かべた。

「気付かれたか。まあ、『ここでは話しづらい』なんて露骨すぎて

誰でも気付くだろっけどね」

「……今日このタイミング、ということは、計画が予定通り進行しているということですか？」

「ああ。すべて滞りなく、というやつだ」

「展望フロアです」というアナウンスと同時にエレベーターの扉が開き、二人は降りた。

奈津美はそのまま休憩スペースのソファに腰を下ろし、桜川は紙コップに飲み物を入れるタイプの自販機でコーヒーを買う。

十秒程度で自販機のふたが開き、あたりにコーヒーの香りが広がる。

「梓君が柵川中学を抜け出したらしいという情報が入ったものでね。現在彼女の行動を見もらっている」

「梓……」

そう呟いて窓の外の景色を見やる奈津美。

桜川は一口コーヒーを飲むと、コップを置いて奈津美の背中を見つめる。

「……梓君が不安かな？」

「不安じゃない、といえば嘘になります。でも、私にはどうすることもできませんから。梓が決めることです。……もっとも、梓がど

う選択するかってこと自体決められたことなのかもしれないけどね」

「……本当に良いのかな？　すべてをあの二人に話せばあつという間に終わらせられるはずだ。二人はレベル5だし、知り合いには超イルガン電磁砲もいる」

「今はダメなのは桜川さんだって知ってるじゃないですか。今アクションを起こすのは、不安定なものを揺り動かすことに等しいって、私と桜川さんが研究所にいた時に言ってたことですよ？」

「しかし、君の気持ちを考えると……」

「大丈夫です。明俊たちを騙すことになるのは心苦しいですが、その時が来るまではジツとしていきましょう。私の覚悟は出来ています」

「くどいようだが確認しておく。ここまで来たら、今アクションを起こすかその時が来るまで待つかの二択だ。君が言う『原作』の通りにこの世界が動いているのなら、物語はここから加速していくことになる。今というタイミングを逃せば、次は第三次世界大戦の後まで機会はない。なにより『預言者の遺言』がある。一歩間違えば行動を起こす前に死ぬことになる。それでも良いんだな？」

「ええ。その時が来るまで、私と桜川さんの秘密です。アレイスタ
ーには筒抜けでしょうが、彼はプランを計画通りに進めることを優先するでしょう。私たちまで含めてプランを動かそうというのなら別ですが、恐らくそこまでの余裕は無い。私たち『パラレルチルドレン』のことは成り行きに任せるはず。気にしなくても大丈夫かと」

そこまで言うと、奈津美はキツと口を結んで桜川を見る。

「……分かった。ではこのことは当初の予定通り、私と奈津美君だけの秘密とする」

「はい。そうそう、私と明俊は今日で退院出来るってさっき冥土帰し」

「ほう。おめでと」

「先生が私のために薬を作ってくれていたんですよね？そのおかげですよ」

「別に褒められるようなことではない。当然のことをしたまてだよ。それよりその退院の話、明俊君には？」

「いえ、まだですけど」

「なら伝えに行くの良い。私からの話はとりあえず以上だから」

そう言って桜川は立ち上がるが、奈津美は何やら微妙な顔つきのまま立ち上がるうとしない。

「？ どうかしたのかい？」

「……いえ、今明俊の病室に行くときまたリア充っぷりを見せてくれそう」

「リア充っぷり？ ああ、明俊君と恋仲の妹達のシスターズの個体もこの病院にいるんだったね。『また』というのは？」

「……さつき明俊の病室の前を通りかかったとき、中から声が聞こえてきたんです。まさか、病院で大人の階段を越えようとするとは思いませんでしたよ」

「大人の階段……？　ハハハ、そういうことか。明俊君もレベル5だ何だといつてもやはり男子中学生だったということか。そりゃ、片想いの男の子の部屋に行ったら女の子といちゃついていたというのはツライものがあるな」

「幼なじみだと悠長に構えてたのが失敗でした。それに明俊、鈍感だからなあ……」

「大変だな。一人で行きづらいのなら一緒について行こうか？」

「いえ、一人で大丈夫です。では」

奈津美はニッコリと微笑むと、エレベーターのボタンを押して下へと降りて行った。

「……今の笑みは怖いな。明俊君もタダでは幸せになれそうにないな」

「タイミングの良いやつに乗れて助かったわ。次の列車が20分後
つてどういうことよ……」

梓は安堵の表情で空いている座席に腰かけた。

モノレールの車両庫や線路部分も少なからず昨日の被害を受けて
おり、本数を削減しての運行となっていた。

『えー、本日は学園都市モノレール線をご利用くださいましてあり
がとうございます。通常ですと乗務員は乗車せず無人での運転を行
っておりますが、昨日の事件により運行に変更などが生じる可能性
があるため本日は乗務員が乗車しております。何かございましたら
最後尾にいます乗務員までお申し付けください』

「（ふーん。まあ乗客も少ないし、車掌さんも大した仕事はなさそ
うだけど）」

そういえば一人でゆっくり腰を下ろすのは今日これが初めてだな
と思った梓はフッと息を吐くと目をつぶる。

『寝るぞ?』

「（あなたが起こしてくれれば良いでしょ?それくらいしてよ。第
十学区駅が近づいてきたら起こしてくれれば良いから）」

『……実際に動いているのは私ではないからな。まあ仕方あるまい』

「（ありがとう）」

梓は呼吸を整えると頭の中の雑念を消し去って脳を休めようとする。

しかし、今日の学園都市は梓の休息を許さない。

ガクン、とモノレールが急停車した。

『駅でもないのに止まったようだが……』

「（はあ？ 何なのもよう……）」

気怠そうに目を開けた梓は先頭から様子を見る。

そして

「な、何？ あれ？」

モノレールの線路部分、左右のレールにからみついている黒い物体が梓の視界に入ってきた。

「へ、蛇？ 左右のレールに絡みつくななんてどんな大きさよ……まさか、これがウロボロス！？」

『いや、コイツはウロボロスではない。ウロボロスが出現する前、ウロボロス小さくしたものが出現するという記録が残っている。恐らくコイツがそれだろう』

「（ウロボロス小さいバージョンってことね。ってちょっと待って。じゃあコイツにも攻撃が通らないってこと！？」）」

『安心してくれていい。コイツには普通に攻撃が通ることが知られている。ただ、向こうからも攻撃してくるから当然だが気をつける』

「（良かったー。攻撃が効くなら怖くないわ。さっさと片付けるとしますか！）」

梓はポケットからジャツジメントの腕章を取り出すと乗務員室のガラスを叩いた。

「運転手さん、ジャツジメントです！ 急いでそこから離れて下さい！！」

「すまない！ 私は車掌と連携して乗客を後ろに避難させる！」

運転手はドアを開けると乗務員室から出て後方車両へと走っていた。

運転手が開けていったドアから乗務員室へと入った梓は、氷塊を作り出すと前面部のガラス越しにミニウロボロスへとむかって投げつけた。

氷塊はガラスを突き破るとまっすぐにミニウロボロスへむかう。

しかし、ミニウロボロスから赤い光が一瞬放たれたかと思うと炎の壁が立ち塞がった。

炎の壁に突っ込んだ氷塊はあえなく溶かされてしまう。

「防ぐだけの知能はあるみたいね。ここじゃ狭くてこれ以上の攻撃ができないし……ならー！」

梓は割れた前面部から飛び出すとレールの片方の上に乗った。

『おい正気か?』

「狭い運転席よりマシよ!」

梓はそう叫ぶと再び氷塊を作り出してミニウロボロスを攻撃する。

またしても炎の壁が展開されてその攻撃は防がれてしまう……が。

「今度は前だけじゃないわ!」

自らの正面にだけ壁を展開していたウロボロスの後方から氷塊が迫り、ウロボロスを押しつぶした。

「これでダメージが通れ……ば!??」

追撃しようとしていた梓にむかって、まるで弾力性のあるものに弾かれるかのごとく氷塊が跳ね返ってきた。

「そんなことも出来るの!??」

梓は慌てて氷壁を作り出すが、突然のことで厚みが十分ではなかった。

勢いを殺しきれなかったことにより、梓に衝撃が走る。

『落ちるぞ!?!』

衝撃で後ろにわずかに後退した梓の片足がレールから外れた。

「ままずっ！！？」

体勢を整えようとするが時すでに遅し

「ききゃあああっ！！！？」

梓ははるか下、コンクリートの地面へとむかって落下していった。

第60話 prelude (後書き)

さて、あからさまな伏線あり梓のピンチありな60話となりました。

そろそろ梓編も中盤→終盤です。梓のチートっぷりがどのくらい書けるか……

第61話 Miraculous azure wing(前書き)

英語的に正しいのかは分かりませんが、サブタイツクに訳すと「奇跡を起こせし空色の翼」です。azureには空色、淡青色という名詞・形容詞としての意味があり、さらには 希望を象徴するともあります。

第61話 Miraculous azure wing

「きゃあああつー!!?」

頭上から響いてきた悲鳴に、道を歩いていた歩行者は顔を上に向けた。

しかし、頭を上に向けながらも疑問に思う、「いったいどこから人が落ちてくるのか」と。

悲鳴が聞こえてきた場所にはモノレールの線路があるばかりで、人の悲鳴が聞こえてくる定番の場所であるマンションやビルはない。

ならば頭上にあるモノレールの線路か列車からしか悲鳴が聞こえるはずがないわけのだが、普通ならばそんな場所から悲鳴が聞こえてくることはまずない。

しかしここは学園都市、通常では起こらないことが普通に起こってしまう場所なのである。

「お、女の子だ!! 空から女の子が落ちてきたぞ!!」

青色の石を胸からぶら下げた少女が空から落ちてくる某アニメのようなセリフが響き渡り、周囲にいた人たちに緊張が走る。

ほんの一瞬のこと、誰も少女を助けるためにアクションを起こせる者などいなかった。

その場にいたすべての人間が、少女は無残にもコンクリートの地

面に打ち付けられる、そう信じて疑わなかった。

しかしこの後、彼らは奇跡の光景を目の当たりにすることになる。

「な、なんだ……？」

突如、少女の落下スピードが遅くなった。

少女が何かの能力で落ちるスピードを遅くしたのか、観衆がそう思った直後、今度は少女が水色の光に包まれた。

少女を包んでいる光は背中から出て、包み込むように身体全体に展開されていた。

「なんだあれは……翼か？」

光の噴射点は背中に二か所あり、その形は鳥類の翼に似ていた。

光が少女を包むのをやめ、徐々に左右に広がることで聴衆の予想は確信となった。

左右に展開された翼は、翼を通過した太陽光を辺りに拡散させて幻想的な光景を生み出しながらゆっくりと羽ばたいた。

翼を宿した少女が天から降りてくるさまは、さながら天使のようだ、見ていた者たちは学園都市の住人らしからぬメルヘンチックな感想を抱いた。

しかし直後、その光景は激変する。

少女の頭上、モノレールの2つのレール部分にまたがって巨大な蛇のようなものから、少女の光とは対照的な赤い光が発せられたからだ。

赤い光によって巨大ヘビの存在に初めて気付いた観衆だが、常識では到底理解し得ないことの立て続けな発生に声すら出なくなっていた。

彼らの口から再び声が発せられたのはその直後のこと、巨大ヘビから赤い光が発せられるのが止まったかと思うと紅蓮の炎が少女目にかけて吹き降ろされたからだ。

「な、なんだアイツは!？」

「あの女の子が炎に包まれたぞ!!！」

地上の観衆たちは降り注ぐ火の粉から逃れながらもその光景から目を離せない。

幻想的な光景を作り出していた水色の光は炎によって完全に遮断され、少女の姿を地上から確認することは不可能となった。

「あの女の子はどうなったの!？」

「分からねえ!! ただ、まだ落ちてきてはいない!!！」

「それにあのでかいヘビ……ありゃなんだ!？」

「昨日といい今日といい、いったいどうなってやがる!？」

しかしどれだけ騒ごうと、この状況をどうにかできる者は一人もおらずただ少女が燃やされる光景を見守るのみであった。

彼らの脳裏に、黒焦げた少女の骸むくぶくが落ちてくる光景が浮かんだ。

ところが、その無残な光景が現実のものになることはなかった。

赤く逆巻く炎の中から一瞬青の光が放たれたかと思うと、炎を押し破って青白く輝く塊が上空に飛び上がった。

そして、巨大ヘビよりも、モノレールの線路よりもさらに高い場所ですゆるやかに静止した。

炎を吐いていた巨大ヘビも攻撃をやめ、自らより高い場所にたたずむそれに視線をむける。

「お、おい!! ありゃさっきまで焼かれてた女の子だぜ!？」

「あの攻撃を受けても傷一つ負ってなさそうだが……ひょっとして、高位能力者だったのか？」

「青く光る翼を出して飛びながら炎を防ぐ能力……? そんな能力聞いたことないぞ? 新しく誕生したレベル5か?」

「一つだけ言えるのは、あの子はただ者じゃないってことだ。そし

て、あの子ならあの不気味なヘビ野郎を倒せるかもしれないってことだ。俺たちは見守るしかない」

その場に居合わせたすべての者の視線が、上空の行く末を見届け
るべく天空に注がれた。

「何なの、これ……」

梓の口から驚嘆の言葉がもれた。

『驚いたか？　これが工藤梓　そなたの持つもう一つの力だ』

声のその言葉に、梓は自らの背に生えている水色の翼に視線をむける。

透き通るような水色で、空と見間違えるほどに綺麗である。

意識してみるとその意思通りに動かすことができ、1回羽ばたかせるだけで身体を更なる高みへ昇らせることもできた。

「でも、どうやって……？　私は『翼を出そう』なんて念じてない

「！」

『落下という梓の危機によって全身に魔力が迸り、それが翼となって具現化したのだ。昨日、垣根帝督の攻撃を受けそうになった時と同じようにな。だがどうやら、今では自分の意志で動かせるようだな』

「……………」

『ボーっとしている暇はなさそうだ。下を見る！』

「えっ？」

思考の追いついていない梓の脳にピシヤリと声が響き、梓は視線を下にむけた。

見ると、小ウロボロスからみたび炎が吐かれ梓にむかってきていた。

「！？ しつこいやっ！！」

梓は翼を使ってこれを避けると、氷の槍を作り出し小ウロボロスに投げつけようとする……………が。

「な、能力が使えない!？」

いくら梓が演算を施し氷の槍を現出させようとしても、かざした手の中に槍はおろか氷の粒すら作ることが出来なかった。

「ど、どうなってるの!？ ……まさか、アイツには能力使用を抑

制する力が備わっているってこと!？」

そうこうしているうちに、またしても梓にむかって炎が吐かれた。

「くっ！ どうすれば……！」

『翼だ。能力が使えない以上、梓に残された攻撃手段はその翼しかない!』

「……えーい、ままよー!」

『……ずいぶん古臭い言葉を使うんだな』

今まで翼を使ったことのない梓は、当然これが初めての实战での使用となる。

半分やけになりながら、梓は翼を自らの正面にまわして炎を防ぐ壁とさせた。

すると、炎は翼に触れた瞬間消え去り、炎に隠れていた小ウロボロスの姿が梓の視界に入った。

「消えた!? ……チャンスー!」

梓は2、3度翼を羽ばたかせると、スピードをつけて一気に小ウロボロスに接近する。

そして、そのスピードのまま翼を前に突き出して小ウロボロスにぶつけた。

すると、不思議な現象が発生した。

小ウロボロスと翼が触れた瞬間、双方のあいだに歪みが生じ梓は後方に吹き飛ばされた。

「きゃあっ!!?」

慌てて翼を制御し体勢を整える梓。

「こ、今度は何なの!?!」

『……小ウロボロスを倒したのだ。あれを見る』

そう言われて梓が小ウロボロスに視線を向けると、まるで時が止まっているかのようにピクリとも動かなくなった小ウロボロスの姿があった。

そして、体が一瞬光ったかと思うとなんと破裂して消えた。

「た、倒した……?」

『ああ。良くやった』

イマイチ倒したという実感の湧かない梓は、下降してモノレールの線路の上に立った。

先ほどまで小ウロボロスがまきついていたそこには、何も残ってはいなかった。

「ホントに倒せたみたいね。……でも、奇妙な最期だったわね」

『あやつは本体と違って倒せることは攻撃前にも言ったと思うが、消え方も記録と同じだ。あの分身は、ああやって破裂して消えることが知られていた』

「なんか、変なのね」

梓がそう呟いた直後、ワアツと歓声が響き渡った。

「っ!？」

驚いた梓が視線を地上にむけると、梓と小ウロボロスの戦いを見ていた観衆たちが、ある者は拍手をし、またある者は翼を生やしたままの梓を携帯のカメラに撮っていた。

「かつこいいぞー!!」

「よくやった!!」

「あ、はあ、どうも」

よく分からないうちに倒した梓にとっては、素直に喜んで良いのが微妙に感じられた。

「(まあ、悪い気はしないけど)」

『喜ぶのはまだ早いぞ？ 本体を封印しなければ元も子もない』

「(分かってるわよ……って、うわっ!!!?)」

周囲を揺れが襲い、梓は慌てて飛び立った。

『分身が現れたことから考えても、本体の力が高まってきたことは間違いない。ヤツの復活は近いぞ!!』

「(さつさと4つめの勾玉を取らないとマズイって訳ね! モノレールもすぐには動かないだろうし、せつかくだから飛んでいくとしますか!!)」

梓は高度を高くとると、墓地に向かって進路を取った。

昼休み。

上条当麻は新鮮な空気を吸うため、食事を早々に済ませて外に出ていた。

「午前中はずっと校内の掃除だったからなー。上条さんは疲れましたよ……」

ぶつくさと独り言をつぶやきながら、両腕を上にはグッと伸ばして

リラックスをする上条。

「んー！ はあ………ん？」

ベンチにでも腰かけようとしていた上条であったが、校門の外に人影を認めてそれに視線をむけた。

「……おかしい。やっぱり俺は疲れが溜まってるのか、インデックスが走ってくるのが見えるぞ？」

目をこすってみるが、走ってくる人影は消えない。

「とうまー！ー！ー！」

「……おまけに幻聴まで聞こえてきやがった。上条さんは本格的にヤバいのかもしれな………」

「とうまー！ー！」

「うおっ！ー！？」

気付いたら目の前に立っていたインデックスの存在に思わず声をあげてしまった上条。

「イ、インデックス！？ ……これは夢じゃないんだよな？」

「？ よく分からないけど、これは夢じゃないんだよ。とうま、大丈夫？ 私が遠くから呼びかけても少しも反応してくれなかったけど」

「い、いや、なんというか…… いるはずのないインデックスが見えたから、ひよっとして俺疲れてんのかなぁーなんて思ってた」

「む、私はちゃんここにいるんだよ」

「それはもう大丈夫だ。ところで、なんでインデックスがここにいるんだ？」

「そんなの、緊急事態だからに決まってるんだよ!!」

「……つまり、また俺の右手の出番ってことが。不幸だ…… 何が起こったって言うんだ？」

「う、うん。それがねとうま、今回は結構厄介で……」

「かみちゃん!!」

インデックスが説明に入ろうとしたその時、インデックスがやってきたのとは反対方向から上条を呼ぶ声が飛んできた。

「土御門!?!」

「かみちゃん、ちょうど良いところにいた!」

「お前、昨日の騒ぎの時はどこにいたんだ? それに、今日まで今までどこに……」

「昨日はちょっと学園都市の外に旅行と洒落込んでいた。今日は調べ物をな……っと、それどころじゃない。かみちゃん、緊急事態だ」

「お前もかよ……」

「お前もって……?」

土御門が視線を巡らすと、学園都市には似つかわしくない修道服を着た少女が視線に飛び込んできた。

「禁書目録か。なるほどな、やはり魔術師にはヤツの存在が感知できるとはな」

「魔術師には感知して……まさか、魔術師が攻めてきたのか!？」

「いや、今回の敵は魔術師じゃない。だが、並の魔術師よりは圧倒的に厄介な敵だ」

「並の魔術師より厄介だけど、魔術師じゃない敵? 何だそりゃ」

「ウロボロス、なんだよ」

「? ウロボロス? RPGゲームなんかでよく聞く名前だな」

「禁書目録の言うとおり、今回の敵はウロボロスだ。どうやらウロボロスは、今までこの学園都市に封印されていたらしい。仕組みはよく分からないが、封印が昨日の一件で壊れてしまったということさ」

「土御門。そのウロボロスが並の魔術師より厄介だっという根拠は?」

「ヤツには一切の攻撃が通用しない」

「はあ！？ ついにチートの登場かよ！？」

「魔術界の文献や資料に、今までに1度でもウロボロスが倒されたという記録は無い。そのすべてが封印されて今日に至っているってのが現状だ。だが、今回は違う」

「私たちにはこれがあるんだよ！！」

そうインデックスは言いながら、上条の右手を握りしめた。

「幻想殺しか…… でも、そんなチート野郎にも幻想殺しは効くのか？」

上条の疑問に土御門は首を横に振った。

「効く、という確証はない。ただ、今の俺たちにはかみやんのその右手しか頼るものがない。封印するにはイギリスから魔術師を日本に呼び寄せる必要があるが、そこまで悠長にしていられない。さっき俺たち魔術師にはヤツの存在を感知できると言ったが、少し前から感じる圧迫感が急に大きくなった。もう一刻の猶予もない」

「そうか。じゃあ出てきたところを一気に叩くしかなさそうだな。そのウロボロスってのがどの辺に現れるかは分からないのか？」

「残念だけど、そこまでは分からないんだよ。……あっ」

インデックスは手に持っていた紙を上条に渡した。

「これ、あずさがとうまに渡してって。私がとうまに会ってウロボ

ロスのことを伝えたら、そこに電話して欲しいっていうのがあずさからの伝言なんだよ」

「あずさ？ 明俊の妹の梓か？」

「そうなんだよ」

「……待て。その梓っていうのは、工藤梓のことか？」

土御門は顔を険しくすると、声を潜めてそう聞いた。

「ああ。なんだ、土御門もあの双子のこと知ってたのか？」

「とうま、あの二人はレベル5っていう学園都市でもとても強い人たちなんでしょ？ それを私ならいざしらず、学園都市の人が知らないはずないんだよ」

「あ、そうだよな。でも土御門、梓の名前が出てから顔険しいぞ？ 梓との間に何かあったのか？」

「……少し気になることがあってな。まあそれは今はいい。それで禁書目録、どうして工藤梓はかみやんに電話をしろと？」

「あずさも、私とは別にウロボロスのことを調べていたみたいなんだよ。でも、それ以上詳しいことは分からないんだよ」

「そうか…… とりあえず、電話してみるか」

そう言って上条がポケットから携帯を取り出したその直後、土御門が上条の携帯を持っている手を掴んだ。

「待てかみやん。工藤梓はレベル5だが、学園都市の人間だぞ？その彼女がどうしてウロボロスのことを知っている？ 少し怪しくはないか？」

「ちょ、ちょっと待つんだよ。確かにあずさがウロボロスのことを知っているのはおかしいとは思うけど、怪しくはないんだよ。あずさは私に、10万3000冊の魔道書の中にウロボロスを倒す方法は無いのかって聞いてきたし……」

「ならなおさら怪しい。なぜ、禁書目録の素性まで知っている？ 彼女は現時点では信用に足る存在ではないぞ」

土御門とインデックスのやり取りを黙って聞いていた上条であったが、やがて紙を見ながら番号を打ち始めた。

「おいかみやん、今の話聞いてなかったのか？」

「聞いてたさ。確かに梓は、今の話の流れじゃただのレベル5じゃないかもしれない。でも、さっき土御門も言ってたけど時間が無いんだろ？ 今は彼女を疑って無駄な時間を使う訳にはいかないんじゃないか？ だったら、今は彼女を味方だと信じて動くしかないだろ？」

「……もし味方じゃなかったら？」

その言葉に、上条は打つ手を止めて土御門を見つめた。

「その時はその時だ。俺の右手で何とかする。だから、今は梓を信じよう」

上条の言葉に、土御門が折れる形で頷いた。

「まったく、かみやんらしい答えぜよ。だが、この一件が片付いたら俺は彼女を調べる。禁書目録のことも、ウロボロスのことも知っていて野放しにするほど俺は楽道家じゃない」

「分かった」

上条は紙に書かれている番号を打ち終わると、通話ボタンを押した。

呼び出し音が鳴る最中、上条たちを小刻みな揺れが襲った。

復活の 때가、すぐ目の前まで迫ってきていた。

第61話 Miraculous azure wing(後書き)

つっちーの初めての本格的な登場ですね。いきなり梓を怪しんでます。

今まで散々引つ張ってきましたが、次回でようやく親玉登場となりそうです。チートぶり、見せてやんよ！

さてここで、本編とは何の関係もない話をば。

今現在僕は「とある双子の第二人生」と「とある少女と紋章術師」の2つを書いています。実は書いてみたい話のネタはもう2つあります。

つまり、2つ書き終わってももう2つは書けるってことです。

明俊「コイツ(筆者)の頭の中どうなってるんだ……?」

梓「筆者いわく、『小説を読んだりやゲーム(RPGやギャルゲー)をやるうちにどんどん構想が湧いてくる』らしいわよ」

奈津美「残りの2つを書き始めるころには原作が終わってるんじゃないの?」

明俊「かまちーに限ってそれは無い……と思うぞ」

第62話 mission start

工藤明俊は一人病室で携帯をいじっていた。

先ほどまで恋仲である御坂琴美と一緒にいたのだが、琴美は検査のため別室に行ってしまったため今は一人暇を持って余している状態である。

「うーん……」

明俊はうなつた。

「（暇すぎる！ 病院は暇な場所だろうと思つてはいたけど、誰も来ないと暇つてレベルじゃねーぞ！あまりに暇すぎるから都市伝説のサイトまで見ちまつたぞ！？ こりゃ後で佐天とオカルト会談するしかないな……）」

そのオカルトサイトまで一通り見終わってしまった明俊は携帯を閉じると、仕方がないので昼寝を敢行しようと思つて目を閉じる。

しかし、大して眠くもないのに目を閉じると視覚が無くなり他の感覚が鋭くなるというもの。

ベッドからほのかに香る琴美のにおいに、明俊の鼓動が大きくなる。

「（さっきまでの琴美のこと思い出して寝れねー…… あの時奈津美が来なかつたら……）」

その先のことを思わず想像してしまい、慌てて首を横に振る明俊。

「（それ考えたら余計寝れなくなるぞ俺！！でも奈津美さえ来なければ……いやだから！！何を考えているんだ俺は！！）」

自分はレベル5の第二位だ、と関係ないことを自分に暗示させて無理やり落ち着こうとする明俊。

しかし、そんな明俊の昼寝への努力をぶち壊すように病室のドアをノックする音が。

「なすことすべて上手くいかないとはこういうこと……なのか？はーい、どうぞー」

明俊が昼寝を諦め返事をすると思病室のドアが開き、セーラー服の少女が入ってきた。

「あら、てつきり琴美さんと熱い抱擁でも交わしているのかと思ってたんだけど……」

「奈津美か……琴美なら、検査でついさっき出て行ったぜ？」

「あらそうなの。彼女も大変ね。急成長の弊害であるホルモンバランス崩れの調節のために、ほぼ毎日検査を受けなきゃいけないんですよっ。」

「ああ。こればかりは仕方ないさ。それでも、あいつは御坂琴美として、御坂美琴のクローンではなく一人の人間として生きていくって決めた。そして俺はそんなあいつを全力で守るって誓った」

「……羨ましいわね、彼女が」

「ん？ 何か言ったか奈津美？」

小さく呟いた奈津美の言葉を聞き取れなかった明俊がそう聞き直すすと、奈津美はゆるゆると首を横に振った。

「いいえ。あなたにも、この世界でやるべきことができたってことなんでしょ？ それも、レベル5の力を存分に発揮するに足ることが」

「そうだな。……って、『あなたにも』ってことは、奈津美にもこの世界でなすべきことが見つかったのか？」

「ええ、まあ。でも、あなたみたいに綺麗なものじゃないわ」

「へえー。どんなことだ？」

明俊が聞き出そうとすると、奈津美はクスツと笑った。

「あら、あなたのなすべきことを私が言ったのだから、今度はあなたが私のなすべきことを言うてごらんなさい？」

「マジかよ…… 一体何なんだ？ 能力に関するることか？ 自分の能力を、何かに役立てたいとか？」

「まあ、当たってると言えば当たってるわね。でも完全な正解ではないわ」

「ニアピンってやつか。……気になるけど、まあ良いか。奈津美に

もこの世界でやることができた。それだけで俺は十分だ。もしそのなすべきことを実行する時が来たら遠慮なく言ってくれよな？俺も奈津美がなすべきことを為せるようにサポートするからさ」

「……そうね、楽しみにしてるわ。まあもつとも？その肝心の時に彼女とイチャついてサポートできませんでした、なんてことにはならないようにね？」

「そんなことあるわけねーだろ？」

「どうかしら？二人だけになった途端に、病室ですらイチャつくような人だもの、信用できないわね？」

「お前、まだそれ引つ張るのかよ……しつこいやつは嫌われるぞ？」

「はいはい、覚えておくわ。それより、私がこの病室に来た本来の目的を果たしても良いかしら？」

「ん？そう言えば、何しに来たんだ？」

明俊が尋ねると、奈津美は横になっている明俊に近づいて上から見下ろすように立つとニッコリと微笑んだ。

「それはもちろん、奪いに来たのよ、あなたのどうて……」

「言わせねーよ！？何しに来たんだよお前！？」

「冗談よ。……あながち冗談でもなかったんだけど（ボソッ）」

「今何か不吉なこと言つたる!？」

「言つてないわ。私がここに来た目的だけど、あなたに伝えることがあるの」

「伝えること? ……今のことじゃなくて?」

「それは冗談つて言つたでしょ? あなたもしつこいと嫌われるわよ?」

「奈津美のせいだろ……それで? 伝えることつて?」

「私とあなたただけど、共に今日で退院できるそうよ。冥土帰しがそう言つてた」

「え!?! マジか!?!」

「マジよ。あなたにも私にも、特段の異常は発見されなかつたって冥土帰しが」

「そりゃ助かるぜ。せつかくこの世界に来て学校にも入つたのに、早々に入院じゃつまらないからな」

明俊がそう言つて晴れ晴れとした表情を浮かべるのを見た奈津美は一瞬顔を赤くしたが、すぐにそれを隠すようにふうつとため息を吐いて椅子に腰かけた。

「盛り上がつてるところ悪いけど忠告しておくわよ? 冥土帰しからも言われたでしょうけど、しばらくの間は能力の使用は厳禁。ジャッジメントの活動も屋外活動は慎んでもらうわ」

「分かってるよ。能力は使わないし、ジャッジメントの活動も支部で大人しく書類を書いたりまとめたりしてるさ」

「……本当に分かってるのかしら？ 言った私が、『これって忠告守られないフラグ？』なんて思っちゃったわよ」

「大丈夫だって。原作通りなら、俺たちが関わりそうな次の大きな事件はレムナントの件だけど、あれは白井が主人公の話だ。俺たちが出る幕じゃない」

「でも、この世界が完全に原作通りじゃないことは分かってるでしょっ？」

「梓もいるし、御坂もいる。昨日のA I Mバーストみたいなのがまた襲ってくるっていうんなら話は別だけど、あんなのがポンポン出てくるとも考えにくい。他人に面倒事を押し付けるのは嫌だけど、俺が出て行かなくても大丈夫なメンツは揃ってる。だろ？」

「……そうね。ごめんなさい、私の考えすぎだったみたい」

奈津美はそう謝って席を立ち、窓際に立って外を見る。

「（そうは言ってもね明俊。大事なものが危機にさらされた時あなたは黙っていられない。十分時間が経ってからならまた能力も使えるようになるけど、この世界はそれを待ってくれないわ）」

小さな揺れが、ベッド横の花瓶をカタカタと言わせる。

「なんか、今日は小さな揺れがちよくちよく起こるな」

明俊のその言葉に、奈津美は振り向くことなく「ええ、そうね」と返した。

「（げんに、梓はもうこの世界の波にのまれようとしている。あなたも例外じゃないのよ？明俊……）」

墓地。

若者が大半を占める学園都市ではそれほど大きくはないが、それでも無いわけではない代物である。

平日の昼間とあって人っ子一人いないその墓地に、突如一人の少女が姿を現した。

傍から見たら幽霊かと勘違いしそうな光景であるが、少女にはちやんと足がついている。

首から4つの勾玉をぶら下げたその少女　　工藤梓は、周囲を見渡すとはあっとため息を漏らした。

「これで4つ目……全部集めたわね」

『ああ。後はやつが現われ次第、封印魔術を発動させれば一件落着
だ』

「私、封印魔術なんて知らないわよ？ それ以前に、初歩的な魔術
すら使ったことないんだから。翼は出せるようになったけど」

『その点は気にしないでいい。君はただ、その4つの勾玉に魔力を
注入させるだけだ。後はこちらで封印魔術を発動させるだけだ』

「へえ。そういえば、あなたって結局何者なの？ 姿は見えないけ
ど魔術は使えるんでしょ？」

『そうだな……日本語が崩壊するのを承知で適切な言葉を並べるな
らば、封印術の機構そのもの、だな』

「確かに日本語が崩壊してるわね。機構そのものって……？」

『分かりやすく言うと、その勾玉の中に人格は混入されていると思
えばいい。私の役割は、万が一封印が解かれてしまった時に魔術師
を導き、再びウロボロスを封印させることだ』

「はあー、それなら納得ね。……っと、電話だ。上条さんかな？」

梓の携帯には電話番号が表示されており、電話帳に登録してある
人物からの電話ではなかった。

「はい、もしもしー！」

『よお梓。久しぶり……じゃなくて、昨日ぶりだったな。インデックスから事情は聞いてる。ウロボロスとかいうのが復活しようとしてるんだろ?』

「ええ。それで、上条さんの右手に宿る幻想殺しを使えないかと思っただけです……」

『それは全然構わねえけどさ。いったいそのウロボロスはどこに現れるんだ?』

「それは私にもちょっと……なので、ウロボロスが出現して、それが私の近くだったら足止めしておくんでこっちに来てくれませんか?」

『分かった。俺たちの近くに現れたら速攻で消しちまって構わねえな?』

「ええ。それでお願いします。……って、うわわっ!!?」

突如、これまでの揺れとは比べ物にならない大きな揺れが学園都市を襲った。

『な、何だ!?!』

「ウロボロスの復活の時が来たんです!! もうじき姿を現すはずですよ!!」

梓は周囲360度をすべて見渡すが、どこにもウロボロスは見えない。

「（この近くじゃない!? もし私からも上条さんから遠い場所だったりしたら……!!）」

しかし、そんな梓の不安は電話のむこうから聞こえてきたインデックスの声で解消された。

『とうま、あれ!!』

『出てきやがった!! 梓、ヤツの出現場所は昨日例のバケモノと戦った幹線道路の近くだ!!』

「昨日の……片側三車線のあの道路!? マズイわ上条さん!! あの道路は今日から復旧工事で、たくさん工事関係者が動員されるってジャッジメントのデータベースに!!」

『な、何だと!?!』

「よりによってそんなところに……!! 上条さん、すぐに向かって下さい!! 私も飛んで行きますから!!」

『は? お、おい! 飛んでって……』

上条の言葉を最後まで聞く前に通話を切った梓は、背に翼を宿すと上空高く飛び上がった。

そして、上条が伝えてきた幹線道路の方を見やる。

「……いた!! なんて大きなの!?!」

梓が驚愕するのも無理はなかった。

ウロボロスの大きさは、高層ビルを何個も横倒しにした時よりもさらに長く、太さも幹線道路の横幅ほぼ一杯という馬鹿げた大きさだったからだ。

「さっきの分身が可愛く見えるレベルね…… とにかく、私も出来る限りのことをしないと!!」

突然こんなにも巨大な物体が姿を現したとなれば、工事関係者に怪我人が出ているかもしれない。

そしてなにより、もしかしたら幻想殺しが有効打にならないかもしれない。

そんな一抹の不安を消しきれない梓は、全速力で飛行を開始した。

上条とインデックス、それに土御門は、ウロボロスの現れた幹線道路に向かって走っていた。

しかしそんな彼らの前に、突如ウロボロスを小さくしたようなも

のが出現した。

「な、なんだあ!?!」

上条は思わず足を止める。

「こいつは……かみやん! こいつはただの雑魚だ!! 右手を突き出して突っ込め!」

「大丈夫なのかよ!?!」

「この小ウロボロスには通常の魔術攻撃も効くことが知られている!?! 恐らく幻想殺しなら一瞬で倒せるはずだ!」

「……分かった!! うおおおおお!!」

気色悪いヘビに突っ込んでいくのは嫌だったが、そんな悠長なこととは言っていられない。

上条は突き出した右手で小ウロボロスに触れた。

直後、幻想殺しが異能の力を無効化したときの音がし、小ウロボロスは跡形もなく消え去った。

「効いた!」

「これなら、本体もいけるかもしれないんだよ!」

「ああ! このまま突っ走る!」

再び3人は走り出した。

幹線道路が近づくと、道路の方から逃げてくる工事関係者とおぼしき男たちとすれ違う。

「土御門！！ アンチスキルとかは来ないのか！？ 避難を誘導しないと危険だぞ！？」

「分からん！！ だが恐らくダメだ！！ 昨日の騒ぎで信号機がやられた箇所がかなりたくさんある。アンチスキルは手信号のために学園都市中に分散配置されたはずだ！ まともな装備を揃えて到着するころにはヤツが消えるか、俺たちが消されるか、どのみちかたが付いてるだろうぜ！！」

「くそっ！！ なら、俺の右手で、やつが消える方のかたをつける！！」

ウロボロスがすぐ目の前にせまった。

上条はさらに加速すると、右手を突き出し走る。

そして……………

「良いぜウロボロス！ テメエが好き勝手暴れよっつてんなら……そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

通称「そげぶ」と共に、上条の右手がウロボロスの巨大な体の側

面に触れた。

上条の手に、異能の力を打ち消した時の感触が響く。

しかし

「おかしい…… ヤツの内側から、異能の力が湧き出てきてる!？」

ウロボロスの身体が消えることはなかった。

それどころか、右手に向かって力の奔流がぶち当たってきたのだ。

「くっそ…… 土御門、どういうことか分かるか!？」

「これは、まさか……」

「おい土御門! 分かったのなら説明してくれ!！」

「地脈の流れが、ウロボロスに集まっている!! コイツは、地球から魔術的エネルギーを吸い上げているんだ!!」

「何だと!？」

「だから、かみやんの右手が触れて出来た穴を埋めるべくエネルギーを吸い上げて再生の養分になっているんだ!!」

「じゃあ、どうしろって……!！」

上条がそう叫いた直後、右手とウロボロスの身体とのあいだで爆発が起こり、上条は吹き飛ばされた。

「ぐあっ！！」

「とうま！！？」

すぐさまインデックスが上条に駆け寄る。

「大丈夫、とうま！？」

「あ、ああ、大丈夫だ…… 右手もほら、ちゃんと体とくっついてる」

上条はそう言って右手をひらひらとさせた。

しかしその時、上条は見た。

上条の右手が触れていた箇所が輝きだし、攻撃態勢に入ったのを。

「伏せるインデックス！！」

上条はインデックスにむかってそう叫び、右手を突き出そうとする。

しかし、動かそうとしたとき右肩に激痛が走り、思うように動かせなかった。

その一瞬の隙に、集まっていた光が弾丸となって上条たちの方へ

と放たれていた。

弾丸は上条の右手が拳がるのより一瞬早く、上条たちを粉々にする
ことはなかった。

上条たちの前に一人のセーラー服を着た少女が空から降りてきて着地すると、青い壁のようなものを自らとウロボロスのあいだに展開した。

光弾はその青色に当たると、まるで幻想殺しに触れたかのように消滅した。

少女は光弾が完全に消えたのを確認すると、壁 のように展開していた翼をゆっくりと数回羽ばたかせながら振り向いた。

「ふうー。何とか間に合いました！ ジャッジメント177支部所属工藤梓、現在よりウロボロス封印作戦を開始します！！」

第62話 mission start (後書き)

まあ皆さん分かっていたとは思いますが、幻想殺しは効きません。

この梓編では上条さんはかませだろうというのは見え見えでしたし。

ところで皆さん、なんと禁書が映画化するらしいですね!!

書いている最中にそれを知り、めっちゃテンション上がりました!!

あまりにテンションが上がってしまって、この1話をほぼ1晩で書いちゃいましたw

詳細はまだ出てませんが、今からすごく楽しみです!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3569n/>

とある双子の第二人生（セカンドライフ）

2011年10月3日17時33分発行